仙台市文化財調査報告書第98集

富沢

仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴なう
富沢遺跡第15次発掘調査報告書

1987年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第98集

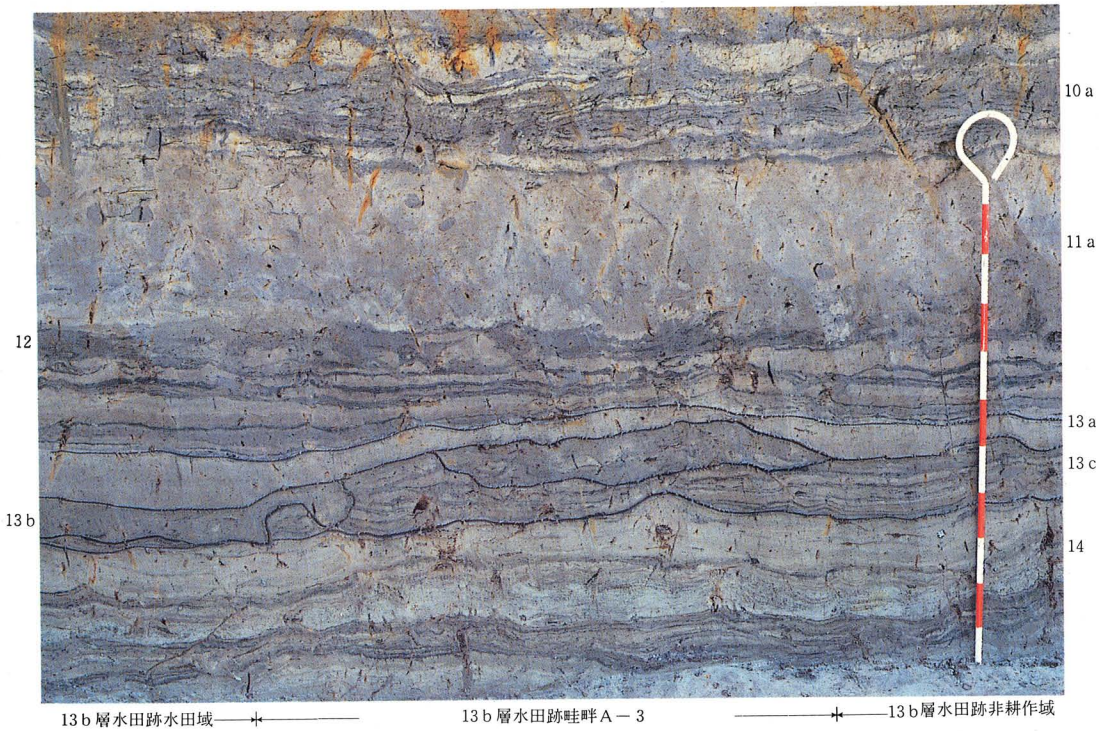
富沢

仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴なう
富沢遺跡第15次発掘調査報告書

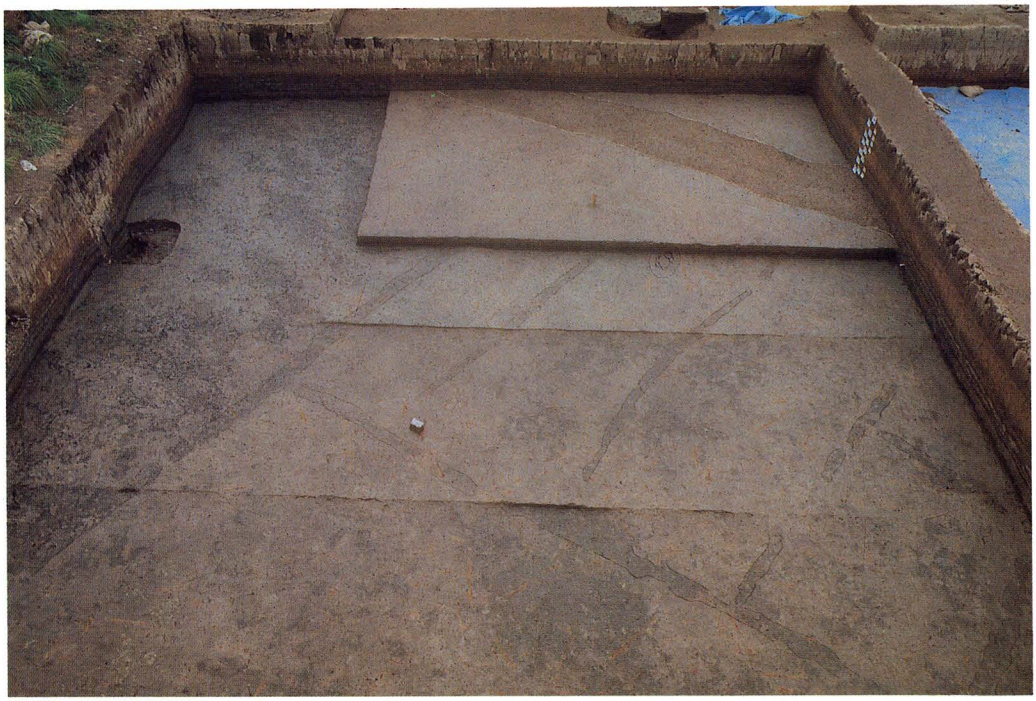
１９８７年３月

仙台市教育委員会

Ⅴ区基本層序（南壁１～14層）



Ⅳ区基本層序（ⅣE 区南壁10 a ～14層）



ⅣB区13ｂ層水田跡確認状況（西方より、南東部は11ａ層水田跡畦畔１）

ⅣB区13ｂ層水田跡検出状況（北方より）

ⅤA区７a層水田跡検出作業風景（西方より）

ⅤA区７a層水田跡検出状況（北方より）

Ⅴ区11ａ層水田跡出土弥生土器

Ⅴ区９ａ層水田跡出土弥生土器

序　　文

本市富沢地区は肥沃な田園村落として、豊かな穀倉地帯の一画をなしてきたところであります。近年、土地区画整理が行なわれ、仙台市高速鉄道の開業を間近にひかえ、富沢遺跡及びその周辺では宅地造成等が急速に進んでおります。富沢遺跡の発見の契機は昭和57年において、このような開発に伴う事前調査での水田跡の検出によるものでありました。その後、豊かな田園地帯の景観が変貌の一途を辿る中で、年毎に行なわれてきた富沢遺跡の調査は埋もれた先人たちの生活の様子をあますところなく語り続けております。

富沢遺跡の調査も今回で15次をむかえ、本書においてはこれまでの水田跡の概要を示し、広くその理解を得るとともに縄文時代から近世にかけて連綿と続く、ここ富沢における先人たちの足跡とその労苦を忍んでいただければ幸いと存じます。

仙台市には、こうした文化財、とくに埋蔵文化財の包蔵地は約400ケ所以上にわたっておりますが、これを愛護し、保存・継承していくことは、われわれに課せられた責務と考えます。したがって、本書が多くの方々に積極的に活用され、文化財全般にわたる保護・啓発に資することを切に希望してやみません。

最後に、発掘調査や本報告書の刊行にあたり多大の御指導・御協力をいただきました多くの方々に対し、心から感謝を申し上げます。

昭和62年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　　黎

例　　言

1．本書は、仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴なう富沢遺跡第15次発掘調査報告書であり、すでに公表された現地説明会資料、略報等に優先するものである。

2．報告書の作成及び編集は斎野裕彦が行なった。

3．本文の執筆は斎野・小野寺和幸・金森安孝・渡部弘美・吉岡恭平・松本清一・及川　格・高橋　泰・鈴木善弘が担当し、関連科学については地形・地質を豊島正幸氏（東北大学）、プラント・オパール分析を藤原宏志氏（宮崎大学）、灰像分析を松谷暁子氏（東京大学）、樹種同定を高橋利彦氏（パリノ・サーヴェイ株式会社）、植物遺体の同定を星川清親氏（東北大学）・庄司駒男氏（東北大学）、土壌分析・火山灰の同定を庄子貞雄氏（東北大学）・山田一郎氏（東北大学）、花粉分析を守田益宗氏（東北大学）、石器の使用痕分析を山田しょう氏（東北大学）、昆虫遺体の同定を梅津一史氏（東北大学）に依頼した。第9章を除く執筆分担は下記のとおりである。

斎野裕彦　第1章第2節、第2章第2節、第3章、第4章第1節・第2節2・3・第3節、第7章第1節・第3節・第4節1－(3)・(4)、2、3－(2)②vi)・(2)③・(2)④、4－(1)・(2)、5－(1)～(3)・(6)、7～16、17－(1)・(3)、20、第8章、第10章第2～5節　第11章

小野寺和幸　第5章第2・3節、第7章第3節

金森安孝　第1章第1節、第4章第2節1、第7章第2節

渡部弘美　第4章第2節1、第7章第2節

吉岡恭平　第7章第4節5－(5)、6、17－(2)・18・19、第10章第6節

松本清一　第5章第2・3節

及川　格　第6章、第7章第4節1－(1)・(2)・(5)、3－(1)・(2)①・(2)②ⅰ)～ⅴ)、第10章第1節

高橋　泰　第5章第1節

鈴木善弘　第5章第1節、第7章第4節4－(3)・5－(4)

4．作図、写真撮影には下記のとおり分担した。

遺構図面整理・トレース　斎野、西條、塙　正浩、佐藤育弘、佐々木明彦

土器復原・実測・トレース　西條、白井昌子、大宮裕二、村上　篤、菅原順子

石器実測・トレース　斎野、及川、寺田仁子

木製品・杭実測・トレース　阿部祐二、斎野、木幡真喜子、熊谷みゆき

遺構写真　斎野、小野寺、金森、渡部、吉岡、松本、及川、高橋、鈴木

遺物写真　鈴木、斎野

図版組　菅原、斎野、塙　恭子

5．発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々に指導・助言・協力を賜った。(順不同・敬称略)

藤原宏志、松谷暁子、高橋利彦、星川清親、庄司駒男、庄子貞雄、山田一郎、守田益宗、豊島正幸、山田しょう、梅津一史、工楽善通、佐原　真、松井　章、佐川正敏、力武卓司、浜石哲也、田中清美、高谷好一、古川久雄、乙益重隆、松井一明、都出比呂志、西谷　正、須藤　隆、会田容弘、藤沢　敦、横山裕平、次山　淳、佐藤信行

6．石器の材質の鑑定は、仙台市科学館佐々木隆氏にお願いした。

7．陶器・磁器の産地については佐藤　洋の教示によった。

凡　　例

1．本報告書中の土色については「新版標準土色帳」(小山・竹原：1973) を使用した。

2．本文中の基本層位については層数が多いためローマ数字で示さず、アラビア数字で示した。

3．遺構図版中の水系レベルは海抜高を示す。

4．水田跡の調査においては、畦畔及び擬似畦畔のプランの検出を「確認」とし、水田跡を覆う土壌を除去することを「検出」とし、使い分けた。

5．陶器・磁器類の破片実測図は、石器実測図と同様の図示方法を統一した。すなわち、断面を境に右側は内面、左側は外面を示している。

6．擦面及び敲打痕のある石器の実測図は下記のように図示し、擦面の方向の不明なものは任意の方向に破線によって示した。

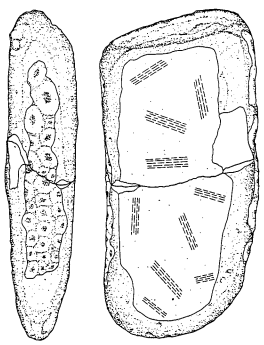
7．本書の第10図に使用した地形図は、国土地理院発行の２万５千分の１「仙台南西部」、「仙台南東部」である。

8．石器の名称については縄文時代と弥生時代での用語の統一は行なわなかった。

9．水田の面積については㈱プラス製の帰零補正式プラニメーターを用い、３回の計測の平均値を示した。

10．図・表・写真は第９章を除き通し番号とした。

11．第220図、第223～228図は報告書を再トレースしたものである。



敲打痕　　方向の不明な擦面

本 文 目 次

序文
例言
凡例
第１章　調査に至る経過と調査要項
第１節　調査に至る経過……1
第２節　調査要項……2
第２章　遺跡の立地と環境
第１節　富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷……豊島　正幸……4
第２節　富沢遺跡とその周辺の歴史的環境……9
第３章　これまでの水田跡調査と座標軸の設定
第１節　遺跡名の改称とこれまでの水田跡調査……20
第２節　富沢遺跡における座標軸の設定……28
第４章　調査の方法と調査概要
第１節　調査区の設定……32
第２節　基本層序……36
第３節　調査経過と調査概要……60
第５章　普及活動……67
第１節　一般市民を対象とする活動……68
第２節　学校教育関係を対象とする活動……70
第３節　まとめと今後の展望……74
第６章　造形保存　― 富沢遺跡の理解と保存のために ―……77
第７章　検出された遺構と遺物
第１節　遺構の種別と遺物の分類……91
第２節　II区の調査……94

第３節　Ⅲ区の調査 ……119
第４節　Ⅳ～Ⅶ区の調査 ……144

第８章　富沢遺跡第15次調査に関する検討会
第１節　検討会の趣旨と概要……343
第２節　検討会の内容 ……344
第３節　検討会をふりかえって……370

第９章　分析・同定……373
藤原　宏志　富沢遺跡におけるプラント・オパール分析 ……375
松谷　暁子　富沢遺跡出土葉茎状炭化物の識別 ……383
高橋　利彦　富沢遺跡出土材同定 ……397
星川清親・庄司駒男　仙台市富沢遺跡より発掘された植物遺体の種の鑑定報告 ……413
山田一郎・庄司貞雄　富沢遺跡の土壌 ……431
山田一郎・庄司貞雄　富沢遺跡の下部火山灰と第15次調査32a 層の土壌 ……437
守田　益宗　富沢遺跡の花粉分析的研究 ……439
山田しょう　弥生時代の石器の使用痕分析 ……461
梅津　一史　富沢遺跡出土の昆虫遺体 ……469
日本アイソトープ　富沢遺跡第15次調査における ^{14}C 年代測定結果 ……473
仙台市道路部　富沢遺跡第15次調査におけるボーリング調査結果 ……474

第10章　考　　察
第１節　VE 区32a 層出土石器遺物……475
第２節　富沢遺跡において検出された水田跡 ……488
第３節　弥生時代・古墳時代の水田跡……502
第４節　富沢遺跡における遺物の出土状況……507
第５節　弥生時代の石器について……510
第６節　中世の遺構 ……520

第11章　まとめと今後の課題 ……523

挿図目次

第1図　富沢遺跡位置図 ……1
第2図　調査区位置図 ……2
第3図　空中写真判読による流路跡の分布 ……5
第4図　地下鉄路線に沿う
　地質断面図（X～Y）……5
第5図　鍋田付近の地質判断図 ……5
第6図　泉崎浦付近の微地形 ……7
第7図　泉崎浦周辺の地質断面図(a～o) ……7
第8図　泉崎浦周辺の地質断面図(i～s) ……7
第9図　泥炭地の分布の変遷と水田跡 ……8
第10図　富沢遺跡と周辺の
　遺跡分布図……11・12
第11図　富沢遺跡平面図A ……25・26
第12図　富沢遺跡平面図B……29・30
第13図　座標軸・国土基本図における
　富沢遺跡位置図……31
第14図　調査区設定図……33・34
第15図　グリッドの名称……35
第16図　調査区の分割区と名称……35
第17図　II区セクション図……37・38
第18図　II区基本層序模式図……39
第19図　III区基本層序模式図……40
第20図　III区セクション図……41・42
第21図　IV～VII区基本層序模式図……46
第22図　IV～VII区セクション図(1)……47・48
第23図　IV～VII区セクション図(2)……49・50
第24図　IV～VII区セクション図(3)……51・52
第25図　IV～VII区セクション図(4)……53・54
第26図　IV～VII区セクション図(5)……55・56
第27図　IV～VII区セクション図(6)……57・58
第28図　IV～VII区セクション図(7)……59
第29図　関連科学土壌サンプル
　採取地点図……65・66
第30図　第15次調査IV～VII区基本層位と
　関連科学土壌サンプル採取Noとの
　対応……65・66
第31図　現地説明会ポスター……75
第32図　留消遺物採取地点図……77
第33図　留消遺物カード記載例……86
第34図　留消遺物カード……88
第35図　畦畔・擬似畦畔模式図……91
第36図　II区22層上面遺物出土状況……94
第37図　II区21層上面検出遺構平面図……95
第38図　II区21層SK 1平面図
　・セクション図……96
第39図　II区21層SX 1平面図……97
第40図　II区16～20層SD 1・平面図
　・セクション図……98
第41図　II区13a層平面図 ……99・100
第42図　II区8b層平面図 ……101・102
第43図　II区13a層水田跡畦下層
　木片群出土状況 ……103
第44図　II区8b層水田跡水口断面 ……104
第45図　II区8b層溝群セクション図……105
第46図　II区8b層SK 1・セクション ……105
第47図　II区6a層平面図 ……107・108
第48図　II区6a層木杭……109
第49図　II区6a層SD 1出土木製品 ……109
第50図　II区6a層SD 1出土木片群 ……109
第51図　II区3層・4a層・4c層
　平面図……111・112
第52図　II区4a層SK 1セクション図 ……113
第53図　II区出土遺物実測図(1) ……114
第54図　II区出土遺物実測図(2) ……115
第55図　II区出土遺物実測図(3) ……116
第56図　II区出土遺物実測図(4) ……117
第57図　II区杭実測図 ……118
第58図　III区6層上面SD 1～4平面図
　・セクション図 ……119
第59図　III区4層上面SR 1平面図 ……121

第60図　III区3a 層・2b 層上面平面図 ……122
第61図　III区 SB 1 平面図
　エレベーション図 ……123
第62図　III区3a 層・2b 層上面 SD 5～10
　エレベーション図 ……124
第63図　III区3a 層・2b 上面遺構平面図
　・セクション図
　・エレベーション図(1) ……126
第64図　III区3a 層・2b 上面遺構平面図
　・セクション図
　・エレベーション図(2) ……127
第65図　III区 SR 1 ・土壙出土遺物実測図 …128
第66図　III区層上面墓壙群平面図
　・エレベーション図 ……130
第67図　III区 1 号墓・ 2 号墓平面図
　・セクション図 ……131
第68図　III区 1 号墓・ 2 号出土遺物実測図
　・拓影 ……133
第69図　III区 3 号墓・ 8 号出土遺物実測図
　・拓影 ……134
第70図　III区 9 号墓・10号出土遺物実測図
　・拓影 ……135
第71図　III区10号墓・11号墓・墓壙確認面
　出土遺物実測図・拓影 ……136
第72図　III区 3 号墓・ 6 号墓棺桶実測図 ……138
第73図　III区 7 号墓・ 8 号墓棺桶実測図 ……139
第74図　III区出土遺物実測図(1) ……141
第75図　III区出土遺物実測図(2) ……142
第76図　III区出土遺物実測図(3) ……143
第77図　IV区32a 層上面 SR1 平面図 ……145
第78図　IV区32a 層上面 SR1 セクション図 …146
第79図　IV区32a 層出土遺物実測図 ……147
第80図　V区35層上面平面図 ……148
第81図　V区32a 層平面図 ……148
第82図　VE 区32a 層平面図 ……149
第83図　VE 区32a 層出土遺物分布図 ……150
第84図　VE 区32a 層出土遺物 1 ……151
第85図　VE 区32a 層出土遺物 2 ……152
第86図　VE 区32a 層出土遺物 3 ……153
第87図　VE 区32a 層出土遺物 4 ……154
第88図　VE 区32a 層出土遺物 5 ……155
第89図　VE 区32a 層出土遺物 6 ……156
第90図　VE 区32a 層出土遺物 7 ……157
第91図　VE 区32a 層出土遺物 8 ……158
第92図　VE 区32a 層出土遺物 9 ……159
第93図　VE 区32a 層出土遺物10 ……160
第94図　VE 区32a 層出土遺物11 ……161
第95図　VE 区32a 層出土遺物12(接合資料)　162
第96図　VE 区32a 層出土遺物13 ……163
第97図　VE 区32a 層出土遺物14 ……164
第98図　VE 区32a 層出土遺物15 ……165
第99図　VE 区32a 層出土遺物実測図 ……166
第100図　VII区32a 層遺物出土分布図 ……167
第101図　VII区32a 層出土遺物 ……167
第102図　IV区16層上面検出杭位置図 ……169
第103図　IV区16層上面検出杭
　セクション図 ……169
第104図　IV区16層上面検出杭実測図 ……169
第105図　V区16a 層・16b 層平面分布図 ……170
第106図　IV区13b 層水田跡平面図
　エレベーション図……173・174
第107図　IV区13b 層水田跡水田面積高
　側点値分布図 ……175
第108図　IV区13層出土遺物実測図 ……176
第109図　IV区13b 層水田跡平面図 ……177
第110図　IV区12層水田跡平面図……179・180
第111図　IV区12層出土遺物実測図(1)……181・182
第112図　IV区12層出土遺物実測図(2) ……183
第113図　IV区12層出土遺物実測図(3) ……184
第114図　IV区12層水田跡平面図 ……186
第115図　IV区11a 層水田跡平面図……189・190
第116図　IV区12層上面 SX1 平面図
　エレベーション図 ……191
第117図　IV区11a 層出土実測図(1) ……192
第118図　IV区11a 層出土実測図(2)……193・194
第119図　V区11a 層水田跡平面図……197・198

第120図　Ⅴ区11a層上面杭列1平面図
・セクション図 ……200
第121図　Ⅴ区杭列1・杭列2
・Ⅶ区杭列3杭実測図……201・202
第122図　Ⅴ区11a層水田跡杭列1
杭実測図(1) ……203
第123図　Ⅴ区11a層水田跡杭列1
杭実測図(2) ……204
第124図　Ⅴ区11a層水田跡杭列1
杭実測図(3) ……205
第125図　Ⅴ区11a層水田跡杭列1
杭実測図(4) ……206
第126図　Ⅴ区11a層水田跡杭列1
杭実測図(5) ……207
第127図　Ⅴ区11a層上面杭列2
平面図・セクション図 ……208
第128図　Ⅴ区11a層水田跡杭列実測図(1) ……209
第129図　Ⅴ区11a層出土遺物実測図……211・212
第130図　Ⅴ区11a層上面SD1平面図
・セクション図 ……213
第131図　Ⅵ区11a層水田跡平面図 ……214
第132図　Ⅶ区11a層水田跡平面図 ……215
第133図　Ⅶ区10b層水田跡平面図 ……217
第134図　Ⅶ区10b層出土遺物実測図 ……217
第135図　Ⅳ区10a層上面SD2平面図 ……219
第136図　Ⅳ区10a層上面SD2セクション図
・底面検出杭セクション図 ……220
第137図　Ⅵ区10a層上面SD2底面
検出実測図 ……221
第138図　Ⅵ区10a層上面SD2出土
遺物実測図 ……221
第139図　Ⅳ区10a層上面SX2平面図
・エレベーション図
・セクション図 ……223
第140図　Ⅳ区9a層出土遺物拓影 ……223
第141図　Ⅴ区9a層水田跡平面図
・セクション図……225・226
第142図　Ⅴ区9a層出土遺物実測図 ……227・228
第143図　ⅤE区9a層水田跡平面図 ……229
第144図　Ⅶ区10a層上面SX3平面図 ……231
第145図　Ⅳ区8層出土遺物実測図・拓影 ……232
第146図　Ⅳ区8層遺物出土分布図 ……233
第147図　Ⅴ区8層遺物出土分布図 ……234
第148図　Ⅴ区8層出土遺物実測図 ……235
第149図　Ⅶ区8層上面杭列3平面図
・セクション図 ……236
第150図　Ⅶ区8層上面杭列3実測図(1) ……237
第151図　Ⅶ区8層上面杭列3実測図(2) ……238
第152図　Ⅳ区7c層遺物出土分布図 ……240
第153図　Ⅳ区7c層出土遺物実測図・拓影 ……241
第154図　Ⅳ区7b層遺物出土分布図 ……243
第155図　Ⅳ区7b層出土遺物実測図 ……244
第156図　Ⅴ区7b層出土遺物分布図 ……244
第157図　Ⅴ区7b層出土遺物実測図・拓影 ……246
第158図　Ⅴ区7a層水田跡平面図 ……249・250
第159図　Ⅴ区7a層水田跡水田面
標高測点分布図……251・252
第160図　Ⅴ区7a層水田跡
エレベーション図 ……253
第161図　Ⅴ区7a層水田跡水田部分平面図 ……254
第162図　Ⅴ区7a層水田跡平面図 ……255・256
第163図　Ⅴ区7a層水田跡SD3(水路)
遺物出土状況平面図 ……258
第164図　Ⅴ区7a層出土遺物実測図 ……258
第165図　Ⅴ区7a層水田跡・水田面積 ……259
第166図　Ⅴ区7a層水田跡区割図 ……260
第167図　Ⅴ区7a層中酸化鉄分布範囲
平面図 ……262
第168図　Ⅳ区6層上面SD4平面図 ……264
第169図　Ⅳ区6層上面SD4セクション図 ……265
第170図　Ⅳ区6層上面SD5平面図 ……266
第171図　Ⅳ区6層上面SD5セクション図 ……267
第172図　Ⅳ区6層上面SD4・SD5
出土遺物実測図 ……268
第173図　Ⅳ区6層出土遺物実測図 ……268
第174図　Ⅴ区6層水田跡平面図……271・272

第175図　Ⅴ区6層上面SD6平面図
・エレベーション図 ……273
第176図　Ⅳ区5a層水田跡平面図 ……275・276
第177図　Ⅳ区5a層出土遺物実測図 ……277
第178図　Ⅳ区5a層出土遺物接合分布図 ……278
第179図　Ⅴ区5a層水田跡平面図 ……279・280
第180図　Ⅴ区5a層出土遺物実測図 ……282
第181図　Ⅴ区5a層出土遺物接合分布図(1) ……283
第182図　Ⅴ区5a層出土遺物接合分布図(2) ……284
第183図　Ⅳ区4b層出土遺物実測図(1) ……286
第184図　Ⅳ区4b層出土遺物実測図(2) ……287
第185図　Ⅴ区4b層水田跡平面図 ……289・290
第186図　Ⅴ区4b層出土遺物実測図(1) ……291
第187図　Ⅴ区4b層出土遺物実測図(2) ……292
第188図　Ⅴ区4b層出土遺物実測図(3) ……293
第189図　Ⅴ区4b層出土遺物接合分布図(1) ……294
第190図　Ⅴ区4b層出土遺物接合分布図(2) ……295
第191図　Ⅴ区4b層出土遺物接合分布図(3) ……296
第192図　Ⅴ区4b層出土遺物接合分布図(4) ……297
第193図　Ⅴ区4層上面SD7平面図
・エレベーション図 ……299
第194図　Ⅳ区3b層上面平面図 ……301・302
第195図　Ⅳ区3b・3a層セクション図
・エレベーション図 ……304
第196図　Ⅳ区3b・3a層遺構出土遺物
実測図・拓影 ……305
第197図　Ⅳ区SK5出土遺物実測図 ……306
第198図　Ⅳ区3b層土壙平面図
・セクション図(1) ……308
第199図　Ⅳ区3b土壙平面図
・セクション図(2) ……309
第200図　Ⅳ区3b・3a層土壙平面図
・セクション図(3) ……310
第201図　Ⅳ区1～3層出土遺物実測図(1) ……311
第202図　Ⅳ区1～3層出土遺物実測図(2) ……312
第203図　Ⅳ区1～3層出土遺物実測図(3) ……313
第204図　Ⅴ区3b上面SD25及び基本層1～3層
出土遺物実測図 ……314
第205図　Ⅴ区3b層水田跡平面図 ……315・316
第206図　Ⅴ区3b層上面SD24・SD25平面図　317
第207図　Ⅴ区3b層上面SD24・SD25
エレベーション図
・セクション図 ……318
第208図　Ⅳ区3a上面SD26・SD27
エレベーション図
・セクション図 ……320
第209図　Ⅳ区3a層上面平面図 ……321・322
第210図　Ⅳ区A－Á セクション図 ……321・322
第211図　Ⅳ区3a層SD26出土遺物実測図(1) …323
第212図　Ⅳ区3a層SD26出土遺物実測図(2) …324
第213図　Ⅳ区2b層出土遺物実測図・拓影 ……325
第214図　Ⅳ区2b層上面平面図 ……326
第215図　Ⅵ区検出杭・検出地点位置図
・実測図 ……327
第216図　Ⅵ区検出杭セクション図 ……328
第217図　ＶＥ区32a層出土石鏃長幅相関図 …485
第218図　ＶＥ区32a層における2つの
方法による石器遺物の
最大長別検出数対比図 ……486
第219図　ＶＥ区32a層出土片面調整石器の
細部調整深度と剝離面打面及び
原面打面をもつ剝片(洗浄フルイか
けによって捕集)の長さ対比図……486
第220図　第17次調査桝形囲式期以前の
水田跡 ……488
第221図　富沢遺跡北東部基本層序
対応関係柱状図(案) ……489
第222図　富沢遺跡北東部11a層
水田跡平面図 ……490
第223図　第13次調査11a－10層水田跡 ……493
第224図　第19次調査7b層水田跡平面図
・出土遺物実測図 ……496
第225図　第18次調査3a層・7層
水田跡平面図 ……497
第226図　第2次調査3層・4層
水田跡平面図 ……498

第227図　第８次調査３層・5A 層水田跡平面図
・8B 上面平面図……499
第228図　第３次調査４層・５層
水田跡平面図 ……500
第229図　11a 層・9a 層・7b 層
出土弥生土器 ……508
第230図　富沢遺跡第15次調査出土の
弥生時代の石器……511・512
第231図　12層・11a 層出土石器
長幅相関図 ……514
第232図　12層・11a 出土石器重量図 ……514
第233図　IV区・Ｖ区3b 層
上面平面図……521・522
第234図　IV区・Ｖ区5a 層
水田跡平面図……521・522

挿表目次

第１表　遺跡地名表……10
第２表　富沢遺跡調査次数表……21・22
第３表　留消遺物採取地点表……77
第４表　使用樹脂・器材一覧表……83
第５表　III区基本層位出土遺物数量表……92
第６表　III区遺構出土遺物数量表……92
第７表　III区墓壙群出土遺物数量表……92
第８表　IV区基本層位（１～６層）
出土遺物数量表……92
第９表　IV区基本層位（7b～32a 層）
出土遺物数量表……93
第10表　IV区遺構出土遺物数量表……93
第11表　Ｖ区基本層位（１～６層）
出土遺物数量表　93
第12表　Ｖ区基本層位（7a～11a）
出土遺物数量表……93
第13表　13b 層水田跡畦畔計測表 ……329
第14表　12層水田跡畦畔計測表 ……329
第15表　11a 層水田跡畦畔計測表 ……329
第16表　10b 層水田跡畦畔計測表 ……329
第17表　9a 層水田跡畦畔計測表……329
第18表　13b 層水田跡水田計測表 ……330
第19表　11a 水田跡（VI区）水田計測表 ……330
第20表　7a 層水田跡水田計測表……330
第21表　６層水田跡水田計画表 ……331
第22表　5a 層水田跡水田計画表……331
第23表　4b 層水田跡水田計画表……331
第24表　3b 層水田跡水田計画表……331
第25表　縄文土器観察表 ……332
第26表　弥生土器観察表 ……332
第27表　土師器（非ロクロ）観察表 ……333
第28表　土師器（ロクロ）観察表 ……333
第29表　須恵器観察表 ……334
第30表　赤焼土器観察表 ……334
第31表　陶器・磁気観察表(1) ……335
第32表　陶器・磁気観察表(2) ……336
第33表　観察表 ……337
第34表　VE 区32s 層
出土遺物観察表１（石鏃）……338
第35表　VE 区32a 層出土遺物
観察表２（斧形石器、掻器）……338
第36表　VE 区32a 層出土遺物
観察表３（ノッチ）……339
第37表　VE 区32a 層出土遺物
観察表４（削器）……339
第38表　VE 区32a 層出土遺物
観察表５（細部調整剝片）……340
第39表　VE 区32a 層出土遺物
観察表６（磨石）……341
第40表　VE 区32a 層出土遺物
観察表７（剝片）……341
第41表　13層～3a 層出土石器観察表……342
第42表　VE 区32a 層出土石器遺物組成表 …486
第43表　VE 区32a 層洗浄フルイかけ作業捕集微

細遺物点数別集計表……487
第44表　VE区32a層洗浄フルイかけ作業捕集剝片の第一長、第二長相関分布表…487
第45表　VE区32a層洗浄フルイかけ作業捕集剝片の長幅示数(長/幅)、厚幅示数(厚/幅)相関分布表 ……487

写真図版目次

写真1　現地説明会…一般……76
写真2　事後体験(追体験)…鹿野小学校……76
写真3　訪問学習…向山小学校……76
写真4　体験学習(事前調査)…鹿野小学校……76
写真5　体験学習(発掘体験)…鹿野小学校……76
写真6　体験学習(発掘のすべて)…児童・生徒・教育関係者……76
写真7　体験学習(遺物接合)…児童・生徒・教育関係者……76
写真8　水の吹付け……89
写真9　塗膜の形成……89
写真10　塗膜の強化ⅰ)1回目塗布 ……89
写真11　塗膜の強化ⅱ)布による打ち ……90
写真12　塗膜の強化ⅲ)第2回目塗布 ……90
写真13　剝ぎ取り作業……90
写真14　検討会(1) ……371
写真15　検討会(2) ……371
写真16　検討会(3) ……371
写真17　II区22層全景 ……527
写真18　II区22層上面木間・中世陶器出土状況 ……527
写真19　II区22層上面木製品出土状況 ……527
写真20　II区22層開元通宝出土状況 ……528
写真21　II区21層SK4セクション……528
写真22　II区21層SK4全景……528
写真23　II区21層SX4全景……529
写真24　II区21層馬歯出土状況 ……529
写真25　II区16～20層SD16セクション ……529
写真26　II区16～20層SD16全景 ……530
写真27　II区13a層水田跡全景 ……530
写真28　II区13a層水田跡全景 ……530
写真29　II区13a層水田跡畦畔下木片出土状況 ……531
写真30　II区13a層SD12全景 ……531
写真31　II区13a層SD12セクション ……531
写真32　II区8b層水田跡検出プラン……532
写真33　II区8b層水田跡……532
写真34　II区8b層水田跡水口……532
写真35　II区8b層水田跡水口セクション……533
写真36　II区8b層水田跡皇栄通宝出土状況 ……533
写真37　II区22・23層検出遺構(8b層同面)……533
写真38　II区22層SK3全景(8b層同面) ……534
写真39　II区22層SK3セクション……534
写真40　II区6a層水田跡全景……534
写真41　II区6a層水田跡全景……535
写真42　II区6a層水田跡足跡……535
写真43　II区6a層水田跡検出足跡……535
写真44　II区6a層上面検出木杭セクション ……536
写真45　II区6a層SD14全景……536
写真46　II区6a層SD14流木出土状況 ……536
写真47　II区6a層SD14流木加工痕 ……537
写真48　II区6a層SD14杭出土状況 ……537
写真49　II区6a層SD14木製品出土状況 ……537
写真50　II区6a層SD14木片群出土状況 ……538
写真51　II区6a層SD14木杭出土状況(同上拡大) ……538
写真52　II区6a層SD14木片群出土状況 ……538
写真53　II区4c層水田跡全景……539
写真54　II区4c層水田跡水口……539
写真55　II区4a層全景……539
写真56　II区4a層SK1セクション ……540

写真57　II区4a層SK1全景 ……540
写真58　II区3層水田跡確認プラン ……540
写真59　II区3層水田跡 ……541
写真60　II区3層水田跡 ……541
写真61　II区3層水田跡寛永通宝
　出土状況 ……541
写真62　II区C－38グリッドセクション ……542
写真63　II区C－41グリッドセクション ……542
写真64　II区調査区西壁セクション ……542
写真65　III区SD7・8全景 ……543
写真66　III区SD10・11全景 ……543
写真67　III区SD11セクション ……543
写真68　III区SD10セクション ……543
写真69　III区SD8セクション……543
写真70　III区SD7セクション……543
写真71　III区SR1全景……544
写真72　III区SR1セクション……544
写真73　III区4層上面全景 ……544
写真74　III区4層上面写真 ……545
写真75　III区SK1全景……545
写真76　III区SK1礫出土状況……545
写真77　III区SK1上段セクション……545
写真78　III区SK1下段セクション……545
写真79　III区SE2全景……546
写真80　III区SE2セクション……546
写真81　III区SE2曲物出土状況……546
写真82　III区墓壙群全景 ……547
写真83　III区1号墓遺物出土状況 ……547
写真84　III区1号墓セクション ……548
写真85　III区1号墓掘り方全景 ……548
写真86　III区2号墓セクション ……548
写真87　III区2号墓掘り方全景 ……549
写真88　III区3号墓掘り方遺物出土状況 ……549
写真89　III区SK8全景……549
写真90　III区墓壙群掘り方全景 ……550
写真91　III区深掘区南壁セクション ……550
写真92　VE区完掘状況 ……551
写真93　VII B区完掘状況 ……551
写真94　V区深掘区砂礫層上面全景 ……551
写真95　V区深掘区砂礫層上面
　部分写真(1) ……551
写真96　V区深掘区砂礫層上面
　部分写真(2) ……551
写真97　IV区深掘区SR1全景……552
写真98　IV区深掘区SR1
　セクションA－Á ……552
写真99　IV区深掘区SR1
　セクションB－B́ ……552
写真100　IV区深掘区作業風景 ……553
写真101　IV区深掘区32a層上面
　遺物出土状況 ……553
写真102　V区深掘区32a層礫出土状況 ……553
写真103　V区深掘区32a層上面SR2全景 ……553
写真104　VE区32a層遺物出土状況 ……554
写真105　VII B区32a層中遺物出土状況 ……554
写真106　VII区31層中火山灰検出状況 ……554
写真107　VI区31層中火山灰検出状況 ……554
写真108　IV C区16層上面深掘杭5
　検出状況 ……555
写真109　V区16a・16b層平面プラン……555
写真110　IV B区13b層水田跡確認プラン ……555
写真111　IV B区13b層水田跡確認プラン
　・11層水田跡大畦1 ……556
写真112　IV B区13b層水田跡全景 ……556
写真113　IV C区13b層水田跡全景 ……556
写真114　IV C区13b層水田跡全景 ……557
写真115　IV C区13b層水田跡木製品
　出土状況 ……557
写真116　IV D・E区13b層
　水田跡確認プラン ……557
写真117　IV B・C間ベルト13b層水田跡全景　557
写真118　IV D・E区13b層水田跡全景 ……557
写真119　IV D・E区13b層水田跡部分写真 …558
写真120　IV D・E区13b層水田跡水田土壌 …558
写真121　IV C区南壁13b層水田跡
　水田域非耕作域セクション(1) ……558

写真122　Ⅳ D・E 区13b 層水田跡
水田域非耕作域セクション(2) ……558
写真123　Ⅳ B 区13b 層畦畔断面 ……558
写真124　Ⅵ区12層水田跡全景 ……559
写真125　Ⅵ区南壁セクション ……559
写真126　Ⅳ A 区11a 層水田跡大畦 1 ……560
写真127　Ⅳ C 区11a 層水田跡全景 ……560
写真128　Ⅳ B 区11a 層水田跡全景 ……560
写真129　Ⅳ b 区11a 層水田跡大畦 1 ……561
写真130　Ⅳ E 区11a 層水田跡大畦 2
遺物出土状況(1) ……561
写真131　Ⅳ E 区11a 層水田跡大畦 2
遺物出土状況(2) ……561
写真132　Ⅳ E 区12層上面 SX1 全景 ……562
写真133　Ⅳ E 区 SX1P1 プラン ……562
写真134　Ⅳ E 区 SX1P2 プラン ……562
写真135　Ⅳ E 区 SX1P3 プラン ……562
写真136　Ⅳ E 区 SX1P1 完掘 ……562
写真137　Ⅳ E 区 SX1P2 完掘状況 ……562
写真138　Ⅳ E 区 SX1P3 完掘状況 ……562
写真139　Ⅳ E 区 SX1P1 石膏型取り ……562
写真140　Ⅳ E 区 SX1P4 完掘状況 ……562
写真141　Ⅳ E 区 SX1P5 完掘状況 ……562
写真142　Ⅴ A 区11a 層水田跡プラン
確認作業風景 ……563
写真143　Ⅴ A 区11a 層水田跡全景(1) ……563
写真144　Ⅴ A 区11a 層水田跡全景(2) ……563
写真145　Ⅴ A 区11a 層水田跡全景(3) ……564
写真146　Ⅴ A 区11a 層水田跡
A トレンチセクション(1) ……564
写真147　Ⅴ A 区11a 層水田跡
A トレンチセクション(2) ……564
写真148　Ⅴ A 区11a 層水田跡
A トレンチセクション(3) ……564
写真149　Ⅴ A 区11a 層水田跡
A トレンチ完掘状況 ……564
写真150　Ⅴ A 区11a 層水田跡杭列 1
杭 6 セクション ……565
写真151　Ⅴ A 区11a 層水田跡杭列 1
杭29セクション ……565
写真152　Ⅴ A 区11a 層水田跡杭列 1
セクション ……565
写真153　Ⅴ A 区11a 層水田跡杭 2
杭31・32セクション ……565
写真154　Ⅴ A 区11a 層水田跡杭列 2
杭34・35樹木片検出状況 ……565
写真155　Ⅴ A 区11a 層水田跡杭列 2 杭
33・34・35・樹木片検出状況 ……565
写真156　Ⅴ A 区11a 層水田跡杭列 2
杭36セクション ……565
写真157　Ⅴ A 区11a 層水田跡杭列 2
杭37セクション ……565
写真158　Ⅴ A 区11a 層水田跡杭列 2
杭39セクション ……565
写真159　Ⅴ A 区11a 層水田跡杭列 2
杭38セクション ……565
写真160　Ⅴ A 区11a 層水田跡弥生土器
(第129図 1)出土状況(A 地点) ……566
写真161　Ⅴ A 区11a 層水田跡弥生土器
(第129図 3)出土状況 ……566
写真162　Ⅴ区11a 層水田跡弥生土器
(第129図 1)出土状況(C 地点) ……566
写真163　Ⅴ区11a 層水田跡弥生土器
(第129図 1)出土状況(B 地点) ……566
写真164　Ⅴ区11a 層上面 SD1 全景 ……566
写真165　Ⅴ区11a 層上面 SD1 セクション(1) …566
写真166　Ⅴ区11a 層上面 SD1 セクション(2) …566
写真167　Ⅵ区11a 層水田跡全景 ……567
写真168　Ⅵ区11a 層水田跡大畦セクション …567
写真169　Ⅶ A 区11a 層水田跡全景 ……568
写真170　Ⅶ B 区11a 層水田跡確認プラン ……568
写真171　Ⅶ B 区11a 層水田跡全景 ……568
写真172　Ⅶ B 区11a 層水田跡部分写真 ……569
写真173　Ⅶ B 区10b 層水田跡確認プラン ……569
写真174　Ⅶ B 区10b 層水田跡全景 ……569
写真175　Ⅳ A 区10a 層上面 SD10 全景 ……569

写真176　Ⅶ区10b 層遺物出土状況 ……569
写真177　Ⅳ A 区10a 層上面 SD2A－Á
　セクション ……570
写真178　Ⅳ A 区10a 層上面 SD2B－B́
　セクション ……570
写真179　Ⅳ A 区 SD2 底面検出杭41
　セクション ……570
写真180　Ⅳ A 区 SD2 底面検出杭42
　セクション ……570
写真181　Ⅳ C 区10a 層上面 SX2 全景……570
写真182　Ⅳ C 区10a 層上面 SX2 セクション…571
写真183　Ⅴ区9a 層水田跡擬似畦畔
　確認状況 ……571
写真184　Ⅴ区9a 層水田跡擬似畦畔
　セクション ……571
写真185　Ⅴ区9a 層水田跡弥生土器(第142図１)
　破片出土状況 ……571
写真186　Ⅴ E 区9a 層水田跡全景……572
写真187　Ⅶ区10a 層上面 SX3 遺物出土状況 8 層
　上面検出杭列 3 検出状況 ……572
写真188　Ⅶ区 8 層上面杭列 3 杭43・44
　セクション ……572
写真189　Ⅶ区 8 層上面杭列 3 杭52・53
　セクション ……572
写真190　Ⅶ区 8 層上面杭列 3 杭49・50・51
　セクション ……572
写真191　Ⅶ区 8 層上面杭列 3 杭47・48・49
　セクション ……572
写真192　Ⅶ区 8 層上面杭列 3 杭44
　セクション ……573
写真193　Ⅶ区 8 層上面杭列 3 杭43
　セクション ……573
写真194　Ⅴ区 8 層中遺物出土状況
　(第148図１) ……573
写真195　Ⅳ A 区 8 層中遺物出土状況
　(第145図１) ……573
写真196　Ⅳ B 区7c 層中遺物出土状況
　(第153図１)……573
写真197　Ⅴ区7a 層水田跡検出作業風景……573
写真198　Ⅴ A 区7a 層水田跡プラン
　確認作業風景 ……574
写真199　Ⅴ A 区7a 層水田跡全景 ……574
写真200　Ⅴ A 区7a 層水田跡部分写真 ……574
写真201　Ⅴ A 区7a 層水田跡足跡プラン ……575
写真202　Ⅴ A 区7a 層水田跡水田⑫
　足跡完掘状況 ……575
写真203　Ⅴ A 区7a 層水田跡足跡プラン ……575
写真204　Ⅴ A 区7a 層水田跡水田⑮
　足跡プラン P11・12 ……575
写真205　Ⅴ A 区7a 層水田跡水田⑮
　足跡セクション P11 ……575
写真206　Ⅴ A 区7a 層水田跡足跡プラン P14　575
写真207　Ⅴ A 区7a 層水田跡足跡
　セクション P14 ……575
写真208　Ⅴ A 区7a 層水田跡水田⑰
　足跡セクション P15 ……575
写真209　Ⅴ A 区7a 層水田跡足跡プラン P16　575
写真210　Ⅴ A 区7a 層水田跡足跡
　セクション P16 ……575
写真211　Ⅴ A 区7a 層水田跡足跡
　セクション P17 ……575
写真212　Ⅴ A 区7a 層水田跡水田⑱
　足跡プラン P18・19 ……576
写真213　Ⅴ A 区7a 層水田跡水田⑱
　足跡セクション P19 ……576
写真214　Ⅴ A 区7a 層水田跡足跡プラン P20　576
写真215　Ⅴ A 区7a 層水田跡足跡
　セクション P20 ……576
写真216　Ⅴ A 区7a 層水田跡
　足跡完掘状況 P21 ……576
写真217　Ⅴ A 区7a 層水田跡
　牛の足跡 P21(石膏型取) ……576
写真218　Ⅴ A 区7a 層水田跡水田⑫
　足跡完掘状況 P22 ……576
写真219　Ⅴ A 区7a 層水田跡
　牛の足跡 P22(石膏型取) ……576

写真220　Ⅴ A 区7a 層水田跡⑮
足跡完掘状況 P23 ……576
写真221　Ⅴ A 区7a 層水田跡水田⑪
足跡完掘状況 P24 ……576
写真222　Ⅴ A 区7a 層水田跡水田⑫
足跡完掘状況 P26 ……576
写真223　Ⅴ区7a 層水田跡水路底面遺物
出土状況(第164図１)……576
写真224　Ⅴ区7a 層水田跡全景 ……576
写真225　Ⅴ区7a 層水田跡 SD3 全景 ……577
写真226　Ⅴ区7a 層水田跡 SD3 セクション …577
写真227　Ⅴ区7a 層中酸化鉄検出状況 ……577
写真228　Ⅳ A 区６層上面 SD4 全景 ……578
写真229　Ⅳ A 区 SD4 遺物出土状況(1) ……578
写真230　Ⅳ A 区 SD4 遺物出土状況(2) ……578
写真231　Ⅳ A 区６層上面 SD4B－B′
セクション ……578
写真232　Ⅳ A 区６層上面 SD4A－A′
セクション ……578
写真233　Ⅳ A 区６層上面 SD5 全景 ……579
写真234　Ⅳ A 区６層上面 SD5A－A′
セクション ……579
写真235　Ⅳ A 区６層上面 SD5B－B′
セクション ……579
写真236　Ⅳ A 区６層上面 SD5C－C′
セクション ……579
写真237　Ⅴ A 区６層水田跡全景 ……580
写真238　Ⅴ C・D 区６層水田跡全景 ……580
写真239　Ⅴ区 C－18 クリッド６層上面
足跡プラン ……580
写真240　Ⅴ区６層上面 SD6 全景……581
写真241　Ⅴ区６層上面 SD6
セクション B－B′ ……581
写真242　Ⅴ区６層上面 SD6
セクション A－A′ ……581
写真243　Ⅳ E 区5a 層水田跡畦畔１……581
写真244　Ⅳ E 区5a 層水田跡畦畔１
セクション ……581
写真245　Ⅳ C 区5a 層水田跡畦畔１……582
写真246　Ⅴ A 区5a 層水田跡全景 ……582
写真247　Ⅴ C 区5a 層水田跡全景……582
写真248　Ⅴ B 区5a 層水田跡全景 ……583
写真249　Ⅴ A 区5a 層水田跡
足跡確認プラン ……583
写真250　Ⅴ A 区5a 層水田跡
足跡完掘状況 ……583
写真251　Ⅴ A 区5a 層水田跡
足跡セクション ……583
写真252　Ⅴ A 区5a 層水田跡
足跡セクション ……583
写真253　Ⅴ A 区4b 層水田跡調査風景 ……583
写真254　Ⅴ A 区4b 層水田跡全景 ……584
写真255　Ⅴ B 区4b 層水田跡全景 ……584
写真256　Ⅴ B 区4b 層水田跡全景 ……584
写真257　Ⅳ A 区3b 層上面 SK1 全景 ……585
写真258　Ⅳ A 区3b 層上面 SK1 セクション …585
写真259　Ⅳ区3b 層上面 SK3 全景 ……585
写真260　Ⅳ A 区3b 層上面 SK3 セクション …585
写真261　Ⅳ A 区3b 層上面 SK4 全景 ……585
写真262　Ⅳ A 区3b 層上面 SK4 セクション …585
写真263　Ⅳ区3b 層上面 SK5 全景 ……585
写真264　Ⅳ A 区3b 層上面 SK5 セクション …585
写真265　Ⅳ A 区3b 層上面 SK6 全景 ……586
写真266　Ⅳ A 区3b 層上面 SK6 セクション …586
写真267　Ⅳ A 区3b 層上面 SK7 セクション …586
写真268　Ⅳ A 区3b 層上面 SK8 全景 ……586
写真269　Ⅳ A 区3b 層上面 SK8 セクション …586
写真270　Ⅳ A 区3b 層上面 SK9 セクション …586
写真271　Ⅳ A・B 区間ベルト3b 層
上面 SK11 全景 ……586
写真272　Ⅳ A 区3b 層上面 SK12 全景 ……586
写真273　Ⅳ A・B 区間ベルト SK11
セクション ……587
写真274　Ⅳ C 区3b 層上面 SD23 ……587
写真275　Ⅳ C 区3b 層上面 SD23 セクション…587
写真276　Ⅳ A 区3b 層上面 SK9・SD8・9 全景587

写真277　IV A 区3b 層上面 SD9 セクション …587
写真278　IV C 区3b 層上面 SD10 全景……587
写真279　IV C 区3b 層上面 SD10 セクション…587
写真280　IV D 区3b 層上面全景 ……588
写真281　IV B 区3b 層上面 SD14
セクション A－A′ ……588
写真282　IV D 区3b 層上面 SD16・17
セクション ……588
写真283　IV C 区3b 層上面 SD9 全景 ……588
写真284　IV C 区3b 層上面 SD5 セクション …588
写真285　IV B 区3b 層上面 SD15
セクション A－A′ ……588
写真286　IV B 区3b 層上面 SD15
セクション A－A′ ……588
写真287　IV E 区3b 層上面全景……589
写真288　IV E 区3b 層上面 SD18 セクション…589
写真289　IV E 区3b 層上面 SD19 セクション…589
写真290　IV E 区3b 層上面 SD21 セクション…589
写真291　IV E 区3b 層上面 SD14 セクション…589
写真292　IV E 区3b 層上面 SD20 全景……590
写真293　IV E 区3b 層上面 SD20 セクション…590
写真294　IV A 区3b 層上面全景 ……591
写真295　IV E 区3b 層上面全景……591
写真296　IV E 区中央ベルトセクション ……591
写真297　V A 区3b 層水田跡全景 ……592
写真298　V B 区3b 層上面 SD24・25 全景……592
写真299　V B 区3b 層 SD24 セクション
（南壁） ……592
写真300　V B 区3b 層 SD24 セクション……592
写真301　IV B 区3a 層上面 SK10 全景……593
写真302　IV B 区3a 層上面 SK10 セクション…593
写真303　IV A 区3a 層上面 SD27 全景……593
写真304　IV A 区3a 層上面 SD27 セクション…593
写真305　IV A 区3a 層上面全景 ……593
写真306　IV A 区3a 層上面 SD26 セクション…594
写真307　IV A 区 SD26 木製品出土状況(1) ……594
写真308　IV A 区 SD26 木製品出土状況(2) ……594
写真309　IV C 区3a 層上面 SD12・13 全景……594
写真310　IV A 区3a 層上面 SD3 全景 ……595
写真311　IV E 区3a 層上面 SD17 セクション…595
写真312　IV E 区 SD11 セクション ……595
写真313　IV E 区 SD3 セクション ……595
写真314　IV E 区 SD12 セクション ……595
写真315　IV C 区 SD2 セクション ……595
写真316　IV C 区礫をのせる畦畔検出状況 ……596
写真317　IV E 区礫をのせる畦畔検出状況 ……596
写真318　IV B 区礫をのせる畦畔
セクション(1) ……596
写真319　IV E 区礫をのせる畦畔
セクション(2) ……596
写真320　IV C 区南壁セクション(D－23) ……597
写真321　IV C 区南壁セクション
(D－27・28) ……597
写真322　IV A・B 区間ベルトセクション
(B・C－29) ……597
写真323　IV D・E 区南壁セクション(1)
(C－26) ……598
写真324　IV D・E 区南壁セクション(2)
(C－25) ……598
写真325　IV D・E 区南壁セクション(3)
(C－25) ……598
写真326　IV D・E 区南壁セクション(4)
(C－24) ……598
写真327　V D 区南壁セクション ……599
写真328　V A 区南壁セクション(D－13) ……599
写真329　V A 区南壁セクション(D－13) ……599
写真330　V C・D 区深掘区南壁セクション
(D－20) ……600
写真331　VI区中央南壁セクション
(C－3・4) ……600
写真332　VI区南壁はぎとりセクション
(C－3) ……600
写真333　VI区西壁セクション(B－3) ……600
写真334　VII A 区南壁セクション ……601
写真335　VII B 区東壁セクション
(8～13層) ……601

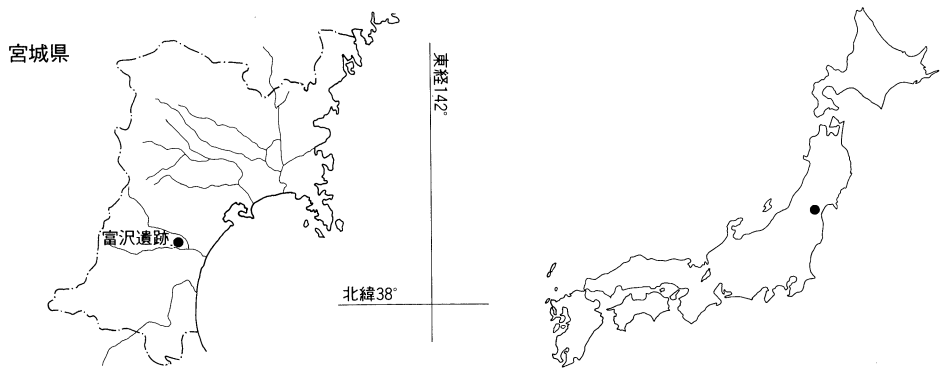
写真336　ⅦＢ区31層中検出の
火山灰セクション ……601
写真337　ＶＥ区32a層出土縄文土器・石器 …602
写真338　ＶＥ区32a層出土石器(1) ……603
写真339　ＶＥ区32a層出土石器(2) ……604
写真340　ＶＥ区32a層出土石器(3) ……605
写真341　ＶＥ区32a層出土石器(4) ……606
写真342　ＶＥ区32a層出土石器(5) ……607
写真343　32a層出土石器(1～12：ＶＥ区、13～
14：Ⅶ区、15：Ⅳ区)(6)……608
写真344　ＶＥ区32a層出土石器(7)
(接合資料) ……609
写真345　Ⅳ・Ｖ区11a層出土弥生土器 ……610
写真346　Ⅳ・Ｖ区10a層・9a層・8層
・7c層出土弥生土器 ……611
写真347　Ｖ区7b層弥生土器 ……612
写真348　Ⅳ区13層・12層出土石器 ……613
写真349　Ⅳ区12層・11a層出土石器 ……614
写真350　Ⅳ区11a層出土石器 ……615
写真351　Ⅳ・Ｖ区11a層・10b層・10a層
9a層出土石器 ……616
写真352　Ⅳ・Ｖ区8層・7c層・6層・3b層
出土石器 ……617
写真353　土師器(1) ……618
写真354　土師器(2) ……619
写真355　土師器・須恵器 ……620
写真356　赤焼土器・鉄製品・古銭 ……621
写真357　Ⅱ区出土陶器 ……622
写真358　Ⅱ区出土陶器・磁器・木簡
・杭・古銭 ……623
写真359　Ⅲ～Ｖ区出土陶器・磁器 ……624
写真360　Ｖ・Ⅵ区出土陶器・磁器
・Ⅲ区棺桶 ……625
写真361　Ⅲ区墓壙群出土遺物(1) ……626
写真362　Ⅲ区墓壙群出土遺物(2) ……627
写真363　木製品・杭(1) ……628
写真364　杭 ……629
写真365　木製品・杭(2) ……630

第１章　調査に至る経過と調査要項

第１節　調査に至る経過

仙台市の交通体系は、政令指定都市への移行を前に大きく変貌しようとしている。拡大する都市交通圏の基幹として、昭和56年度より着手した高速鉄道（地下鉄）の建設工事も昭和62年度中に終了し、同年度中には開業しようとしてる。一方、この工事に並行し、市南部の交通混雑の解消の主要幹線として、また、交通局の地下鉄・バス運行計画の一つである、国鉄長町駅と地下鉄長町南駅を結ぶ「バス＆ライド方式」の幹線道路として、都市計画街路「長町折立線」の建設工事が昭和41年３月には計画決定、昭和54年10月には事業認可されている。

これに伴う発掘調査については、建設工事の担当課である仙台市建設局道路部建設課街路係と仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係（現在文化財課調査係）が埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて昭和59年１月に打ち合わせを行ない、昭和57・58年の二ケ年を調査期間とし、昭和59年より工事を着手するという案が街路係から提示されたが、文化財調査係としては昭和59年度までは他の調査事業が既に予定されており、調査を行なうことができなかったため、昭和60年１月29日に昭和60年度から１年間の期間で発掘調査を行なうことで協議が成立した。調査は昭和60年３月に試掘調査を行い昭和60年４月から本調査を行うことになった。調査対象区域は仙台市長町５丁目、長町南１丁目、長町南３丁目地内の建設予定地であり、富沢遺跡の北東端部及び東側の隣接地にあたる。この隣接地における調査については工事を再優先し、工程に支障のない限りにおいて調査を行なうといった条件が建設課から提示され、やむなくその条件下で調査が行なわれた。また側道部分やその他の工事に関わる調査に際しても同様の条件下での調査を行なわざるを得ない状況であった。このため攪乱部分を除いた対象面積に対する調査面積の場合は52％であった。



第１図　富沢遺跡位置図

第２節　調査要項

１．遺 跡 名　　富沢遺跡

２．調査区所在地　　宮城県仙台市長町５丁目、長町南１丁目、長町南３丁目

３．調査期間　　昭和60年度発掘調査　昭和60年４月10日～昭和61年３月３日

昭和61年度発掘調査　昭和61年４月５日～昭和61年８月１日

昭和61年度室内整理　昭和61年４月５日～昭和62年３月27日

４．調査対象面積　　16461m²

５．調査面積　　5581m²

Ⅰ区　　（対象面積 4740m²）

Ⅱ区　　1047m²（対象面積 2055m²）

Ⅲ区　　491m²（対象面積 1433m²・攪乱部分 266m²）

Ⅳ区　　1735m²（対象面積 2400m²）

Ⅴ区　　1981m²（対象面積 4395m²・攪乱部分 714m²）

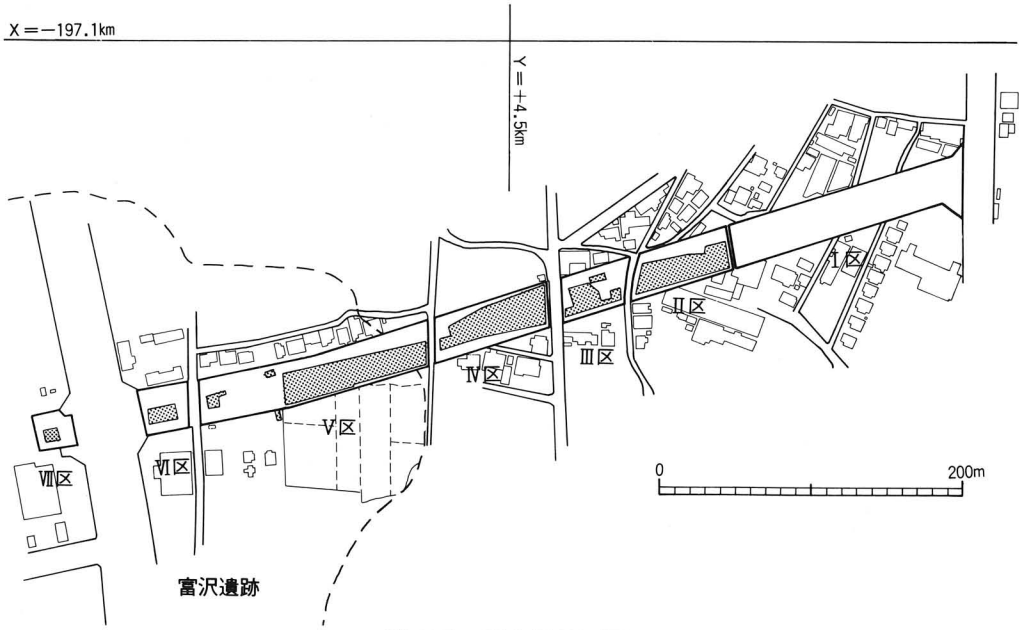
Ⅵ区　　255m²（対象面積 977m²）

Ⅶ区　　72m²（対象面積 461m²）

６．調査主体　　仙台市教育委員会

７．調査担当　　仙台市教育委員会文化財課調査係

文化財課　課 長　　早 坂 春 一



第２図　調査区位置図

調査係長　佐藤　隆

調査員　小野寺和幸　金森　安孝　吉岡　恭平
渡部　弘美　斎野　裕彦　及川　格
松本　清一　高橋　泰　鈴木　善弘
高橋　勝也

8．発掘調査参加者

青山　諒子　赤川　千広　浅見　しげ　浅見　礼子　安達八千代　安倍あき子　阿部いしよ
阿部　孝一　阿部すえ子　阿部すみえ　阿部清太郎　阿部　高子　阿部　武志　阿部　則子
阿部　正子　阿部　雅己　阿部ミノル　阿部美代寿　阿部八重子　阿部　幸夫　阿部　祐子
阿部　祐二　阿部よね子　壱岐　豊子　石田　育子　板橋さくみ　板橋スエノ　板橋　孝子
板橋みつよ　伊藤　敦子　伊藤清之助　伊藤　律子　猪股　徹　故入間川富市　岩渕　信博
岩間かつ江　岩見　和泰　遠藤いな子　遠藤　金蔵　大内　芳郎　大里美恵子　太田　一郎
太田しげの　太田　勉　大槻　明美　大槻　光子　大友いくよ　大友　勇　大友かおる
大友　利蔵　大友フミ子　大沼　清　大沼みさほ　大久　節子　大宮　裕二　大山のり子
小川　良子　小田やす子　小沼ちえ子　小野　久子　小野みや子　小野　儀彦　小野寺　力
小野寺　雄　加賀美要子　柏倉セツ子　鹿野としみ　上村　安子　菊地みよし　木村　勝彦
窪田　俊一　熊谷みゆき　郡山　和子　郡山　和彦　小嶋登喜子　小竹　恵子　木幡真喜子
小林　国子　小林　聡　小林　斉美　小林　充　小林　裕　小山つるよ　昆野　賢一
今野　淑子　斉藤　慶子　斉藤　信次　斉藤とき子　斉藤　紀子　斉藤　雅子　佐々木恵子
佐々木慎一　佐竹　昭　佐藤きぬ子　佐藤　三郎　佐藤　茂己　佐藤　静子　佐藤　忠勝
佐藤　正志　佐藤ちよし　佐藤とし子　佐藤　朋弘　佐藤まさ子　佐藤　みよ　佐藤　育弘
佐藤よし江　佐藤　隆司　佐野たみえ　佐野　弘　下山由加里　庄子　和子　諏江　敏
須賀　栄子　菅井かつの　菅井　君子　菅井　妙子　菅井　民子　菅井　忠吉　菅井ちよの
菅井美枝子　菅井よね子　菅原　有智　菅原　澄枝　菅原まさよ　菅原　幸和　鈴木　勝彦
鈴木きぬ子　鈴木つや子　鈴木よしゑ　須藤　一　高橋　健　高橋　孝次　高橋千年世
高橋とみ子　高橋富紀子　高橋みち子　高谷けい子　武田　節子　武田　萬　竹森　永源
竹森　光子　丹野　正作　千田タイ子　土田美喜子　寺田　仁子　豊村　幸宏　中沢　正吉
中富　洋　中村せつ子　沼田　絹子　沼田ツヤ子　根深はつえ　塙　正浩　早川　裕子
早坂　綾子　早坂みつえ　半澤　俊昭　半田　洋子　藤原　ミサ　朴澤せつ子　洞口　秋子
本郷　孝治　本堂　富子　前田　裕志　松浦　二郎　松坂　浩　松本　幸子　三浦　勝子
三浦きよの　三浦　武　三浦とよ子　三浦フミ江　三浦　芳子　宮崎　進　宮本　昌俊
村井二郎松　村上　篤　最上　浪子　森　節子　森　剛男　森　ナツヨ　矢口　久子
山沢　豊正　山田きよゑ　山田　昌弘　山田やす子　横山　典章　吉野たま子　米倉　節子
渡辺　幸子　渡辺　節子　渡辺　久子　渡辺　麗子

9．室内整理参加者

西篠　裕子　寺田　仁子　塙　正浩　塙　恭子　阿部　裕二　白井　昌子　大宮　裕二
村上　篤　菅原　順子　佐藤　育弘　佐々木明彦　木幡真喜子　熊谷みゆき

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷

東北大学理学部地理学教室　豊　島　正　幸

１．遺跡周辺の地形概観

仙台市東南部の海岸平野（仙台平野）のうち、広瀬川と名取川にはさまれた部分は郡山低地と呼ばれている。西側には地質構造線（長町 — 利府線）が存在し、丘陵・段丘地域と海岸平野を明瞭に分けている。富沢遺跡は郡山低地西部の低湿地帯に位置する。

第３図には、米軍撮影の空中写真（縮尺４万分の１）の判読に基づいて、流路跡の分布状態を示した。鍋田付近を中心とする一帯には笊川、金洗沢および二ツ沢等の支流の流路跡は見られるものの、広瀬川や名取川に関係する流路跡はほとんど見られない。このことから、鍋田付近は両河川の影響が直接には及びにくい所であることが推定される。

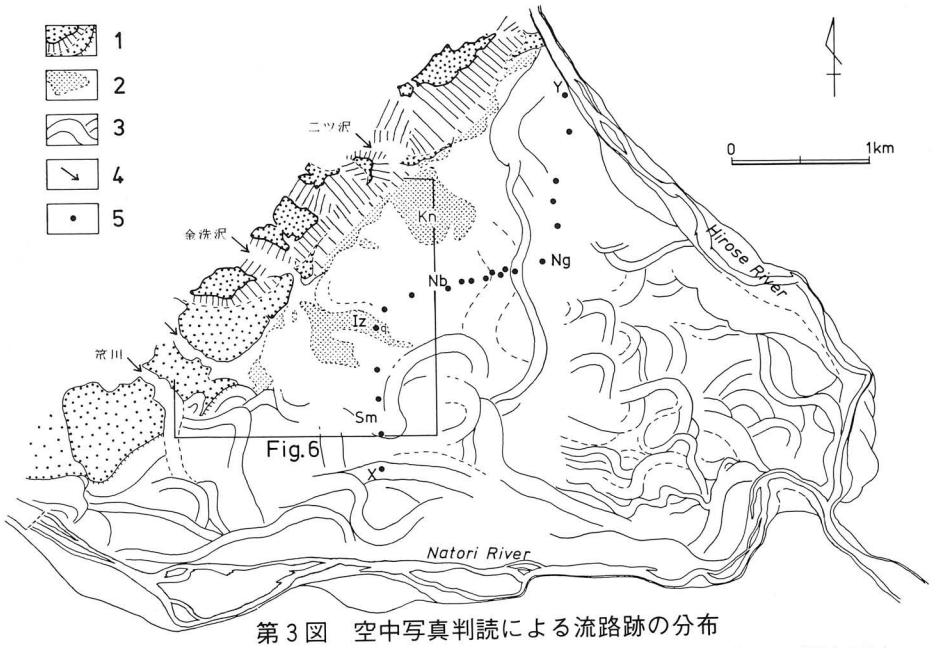
なお、郡山低地一帯は、後氷期の海面上昇に伴う海域拡大の極大期においてさえ陸成層の堆積が継続していたところである（松本（1981）の沖積層断面図参照）註)。

２．低湿地帯の地質断面

ボーリング調査による既存の地質柱状図（地下鉄路線に沿う20地点、第３図中の黒丸）や発掘現場における地層観察に基づいて地質断面図を作成すると、第４図および第５図のようになる。

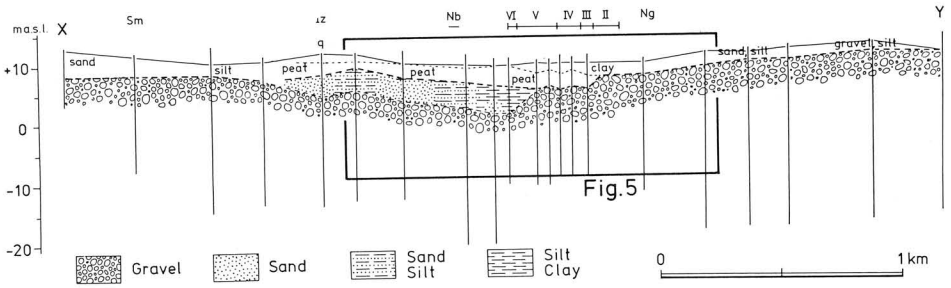
遺物包含層の基盤である礫層を鍋田やII区で観察すると、最大径15cm 前後の円礫層である。これは主として名取川や広瀬川の河道内で堆積した流路堆積物と考えられる。礫層の上面高度は鍋田付近で最も低く、名取川および広瀬川の両方向に向かって高くなる（第４図)。このことは、名取川および広瀬川が、それぞれ鍋田付近から南および北へ流路を移動させつつ河床を上昇させてきたことを示す。両河川が鍋田の東方で合流することから、同礫層上面の断面形は東西方向にも凹形をなすことが推定される。礫層上面によって示される鍋状の凹所の出現は、低湿地成立における基礎的要因となったと考えられる。下ノ内浦および隣接する山口の各遺跡で、礫層の上位の層から押型文土器が出土するので、下ノ内浦から鍋田の間の礫層は、縄文時代早期にはすでに堆積していたと考えられる。

この礫層上面がつくる凹所を埋める形で堆積しているのは、砂・シルト・粘土である（第４図)。西方の丘陵地帯に露出する酸性凝灰岩起源の礫を含むことや位置関係から、これは主として金洗沢や二ツ沢の支流によって供給された堆積物であると判断される。(なお、名取川や広瀬川の氾濫堆積物に由来する細粒物質も混入していることは十分に予想される。) この支流起源

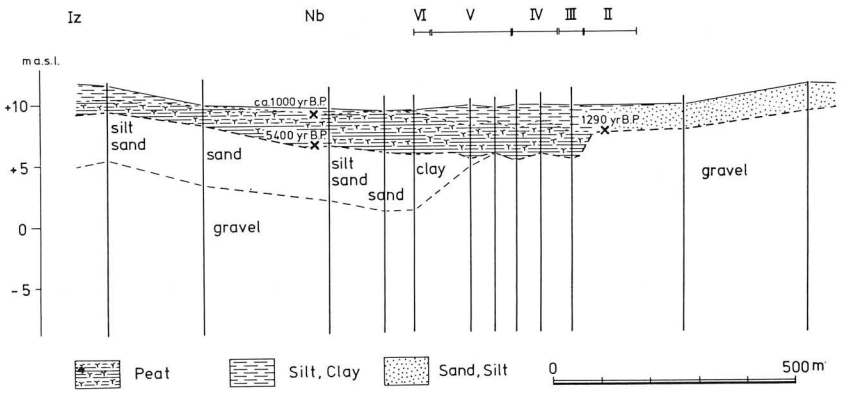


第３図　空中写真判読による流路跡の分布

１．段丘面と崖(新旧の段丘を含む)　２．微高地　３．流路跡　４．支流の位置　５．ボーリング調査の地点
Ｎｂ：鍋田　　Ｎｇ：長町駅　　Ｓｍ：下ノ内浦　　Ｉｚ：泉崎浦　　Ｋｎ：鹿野



第４図　地下鉄路線に沿う地質断面図(Ｘ～Ｙ)



第５図　鍋田付近の地質断面図

の堆積物は部分的に植物遺体（湿性植物と思われる）を含むことから、その一部は低湿地的土地条件下で堆積したと考えられる。ただし、本格的な泥炭集積の開始時期は、次に述べるように約5400年前以降である。

鍋田付近を中心に泥炭層（最大層厚3.5m）が存在する。泥炭層最下部の ^{14}C 年代は、5400^{+150}_{-140} yr B.P.（TH-1215）である（第5図）。この層準にはガラス質火山灰が薄くはさまれる。泥炭層から出土する土器型式に基づけば、泥炭集積は少なくとも弥生時代（崎山囲式・十三塚式土器の時代、一部、天王山式土器の時代）まで継続していたと判断される。この間、鍋田付近には氾濫時の浮遊物質（主にシルト・粘土）が繰り返しもたらされたものの、全体として堆積物の供給は微弱であった。このことが鍋田付近における泥炭集積を可能にした。

泥炭層は名取川に向かって泥炭集積の程度が弱くなり、シルト～砂質の堆積物へと移行する（第4図）。下ノ内浦付近のシルト～砂質堆積物は、名取川や支流の笊川の溢流に伴う氾濫堆積物に由来すると考えられる。

鍋田より広瀬川に近い発掘区（II～VI）では、泥炭層の上位に広瀬川の氾濫堆積物が認められる（第4図・第5図）。同堆積物の層相は広瀬川に向かって変化し、シルト・粘土層から砂・シルト層へ、さらに礫混りの堆積物へと粗粒化する。同層基底部の木片の ^{14}C 年代は、1290±110yr B.P.（660±110年 A.D.）（TH-1174）である（第5図）。

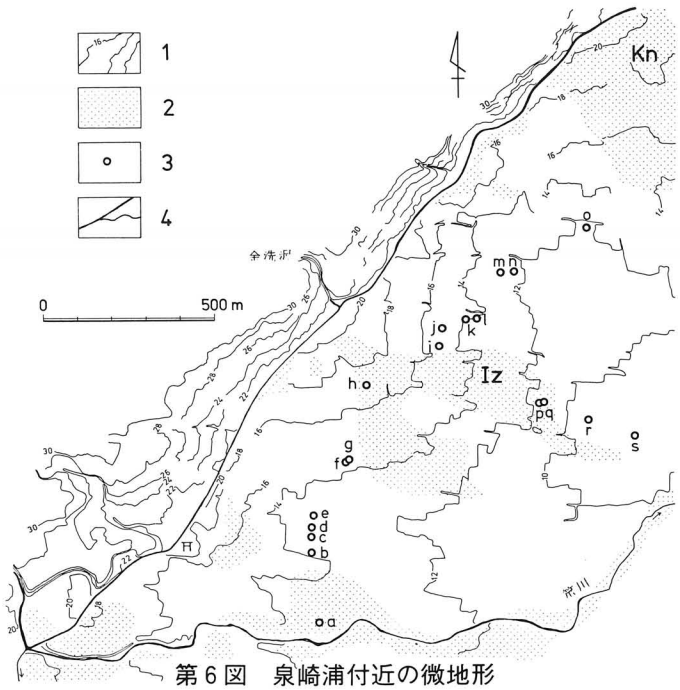
3．泉崎浦付近の微高地

泉崎浦や鹿野付近に微高地が存在する（第3図）。この微高地を詳細に検討するために、縮尺2500分の1の都市計画図（昭和46年測量）から等高線をぬきだしたのが第6図である。

等高線の配列状態から、泉崎浦付近の微高地は金洗沢の谷口を扇頂とする扇状地に由来することがわかった。微高地の平面形が扇形を示さないのは、この扇状地が現成のものではなく、谷口から東方および南方の部分が小規模ながら開析（侵食）されているためである。すなわち、泉崎浦の微高地は、扇状地のうち侵食からまぬがれた部分である。鹿野付近の微高地もこれと同様の成因をもつと考えられる。なお、笊川に沿う微高地は自然堤防と判断される。

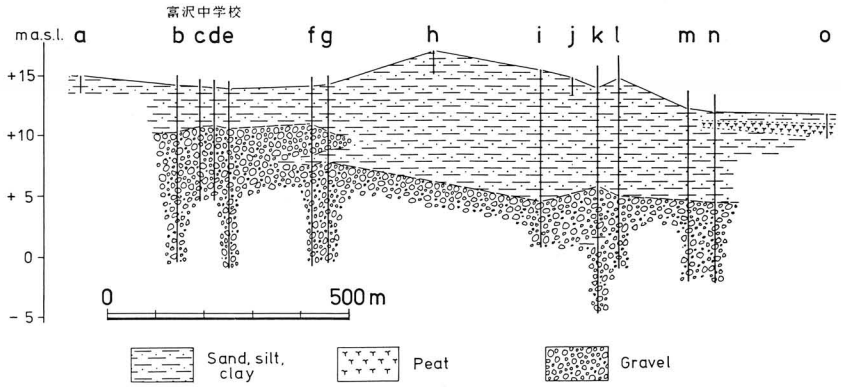
泉崎浦付近の地質断面を第7図および第8図に示す。微高地（h地点）を含む扇状地の構成物質は粘土混じりの砂～シルト層である。厚さは最大約10mに及ぶ。なお、笊川に近い富沢中学校（b～e地点）付近では、笊川の流路堆積物と考えられる礫層がくさび状に堆積している（第7図）。

第8図は扇状地の縦断方向の地質断面であり、地下鉄路線に沿う地質断面（第4図）とはq地点で交差する。r地点に傾斜変換点があらわれており、この付近が扇状地の末端にあたる。q～r地点付近の泥炭層は金洗沢からの堆積物供給が微弱であった時に形成されたと考えられる。これは鍋田付近の泥炭層（第4図と第5図）に連続する。第7図のn～o地点にもこれと高

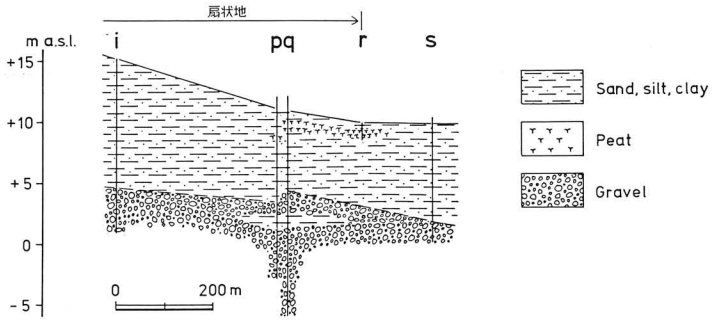


第６図　泉崎浦付近の微地形

１．等高線（昭和46年測量の１：2,500仙塩広域都市計画図に基づく）　２．微高地　３．ボーリング調査の地点　４．河川および水路（木流堀）
Ｉｚ：泉崎浦　　Ｋｎ：鹿野　　ｑ　地点付近を地下鉄路線が南北に通る



第７図　泉崎浦周辺の地質断面図（ａ～ｏ）



第８図　泉崎浦周辺の地質断面図（ｉ～ｓ）

度的に連続する泥炭層が存在する。これらの地質断面図から、鍋田を中心に分布する泥炭層は、支流起源の扇状地堆積物と指交関係にあると判断される。

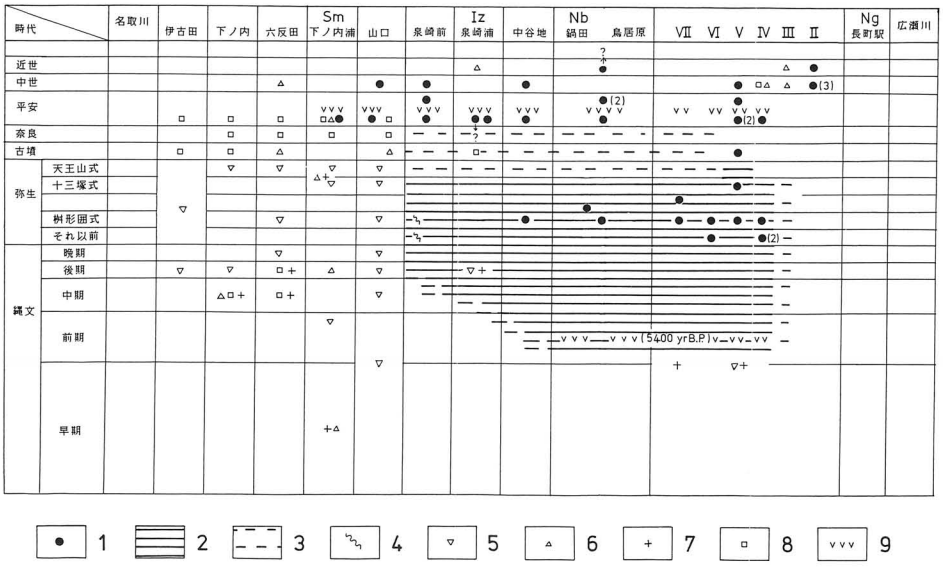
4．土地条件の変遷

縄文時代以降の土地条件の変遷は、下ノ内浦～鍋田～II区に至る約2 kmの範囲内において差異が認められた。

名取川および広瀬川の直接的影響を受けにくい位置にある鍋田付近では、約5400年前から弥生時代にかけて金洗沢や二ツ沢等の支流からの堆積物（主に砂・シルト）供給が微弱になり、泥炭地が形成された。弥生時代の水田は泥炭地の範囲内に限られている（第9図）。古墳時代ごろから広瀬川の氾濫堆積物が供給されるようになり、鍋田～III区における泥炭集積作用は徐々に終了していった。泉崎浦付近では、支流起源の堆積物供給が泥炭集積作用の終了に関与した。

下ノ内浦のように名取川に近いところでは、縄文時代早期から絶えず名取川や笊川の氾濫水の影響を受け続けてきた。このため顕著な泥炭集積はみられない。

以上のように、低湿地である郡山低地では、河川（支流を含む）による堆積物供給の強弱や、それの及んだ範囲が、各時代の土地条件を左右している。



第9図　泥炭地の分布の変遷と水田跡

1．水田跡（黒丸の右に付した（2）は2層準に水田跡が検出されたことを示す）　2．泥炭地　3．泥炭集積の時代が不明な部分
4．水路跡　5．土器　6．住居跡以外の遺構と土器　7．石器　8．住居跡と土器　9．テフラ（約1,000年前と約5,400年前の2層準に存在する）

註）　1．松本秀明　1981「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」地理学評論　vol. 52　p. 72-85

第２章　富沢遺跡とその周辺の歴史的環境

富沢遺跡では、これまでの調査の結果弥生時代以降主に生産域として水田耕作が行なわれてきていることが明らかとなっている。またそれより前の時代については、弥生時代の水田跡のより下層から縄文時代の遺物が出土することが今回の第15次調査を含めて数地点で確認されている。

富沢遺跡の歴史的環境については、当遺跡の立地する郡山低地西半部及び周囲をも含めた理解が必要とされ、地形・環境と人間の行動との相関において土地と人間の紐帯を共時的・通時的に把握していく視点が不可欠とされる。当遺跡でのこれまでの調査結果からは弥生時代以降と縄文時代以前では人間の当遺跡における土地利用は異なることが予想される。そこで弥生時代以降における当遺跡の理解は、郡山低地西半部での体系的な土地利用の観点から、生産域・居住域・墓域等の有機的関連の中で行なわれるべきであり、他の遺跡についても同様のことがいえる。また郡山低地東半部や西方の段丘縁辺部においても土地利用の体系を把握していくべきである。次に縄文時代以前の当遺跡については、郡山低地における地形・環境の変化と各遺跡の時期的な立地条件の把握とともに、西方の段丘・丘陵地帯をも含めて居住・生業等についての遺跡間の連関の中で理解すべきである。

ここでは、周辺の遺跡について縄文時代以前においては郡山低地と、西方の段丘・丘陵地帯の遺跡を対象とし、弥生時代以降は体系的な土地利用において当遺跡と密接な関連をもつと考えられる遺跡を中心にして概観してみたい。

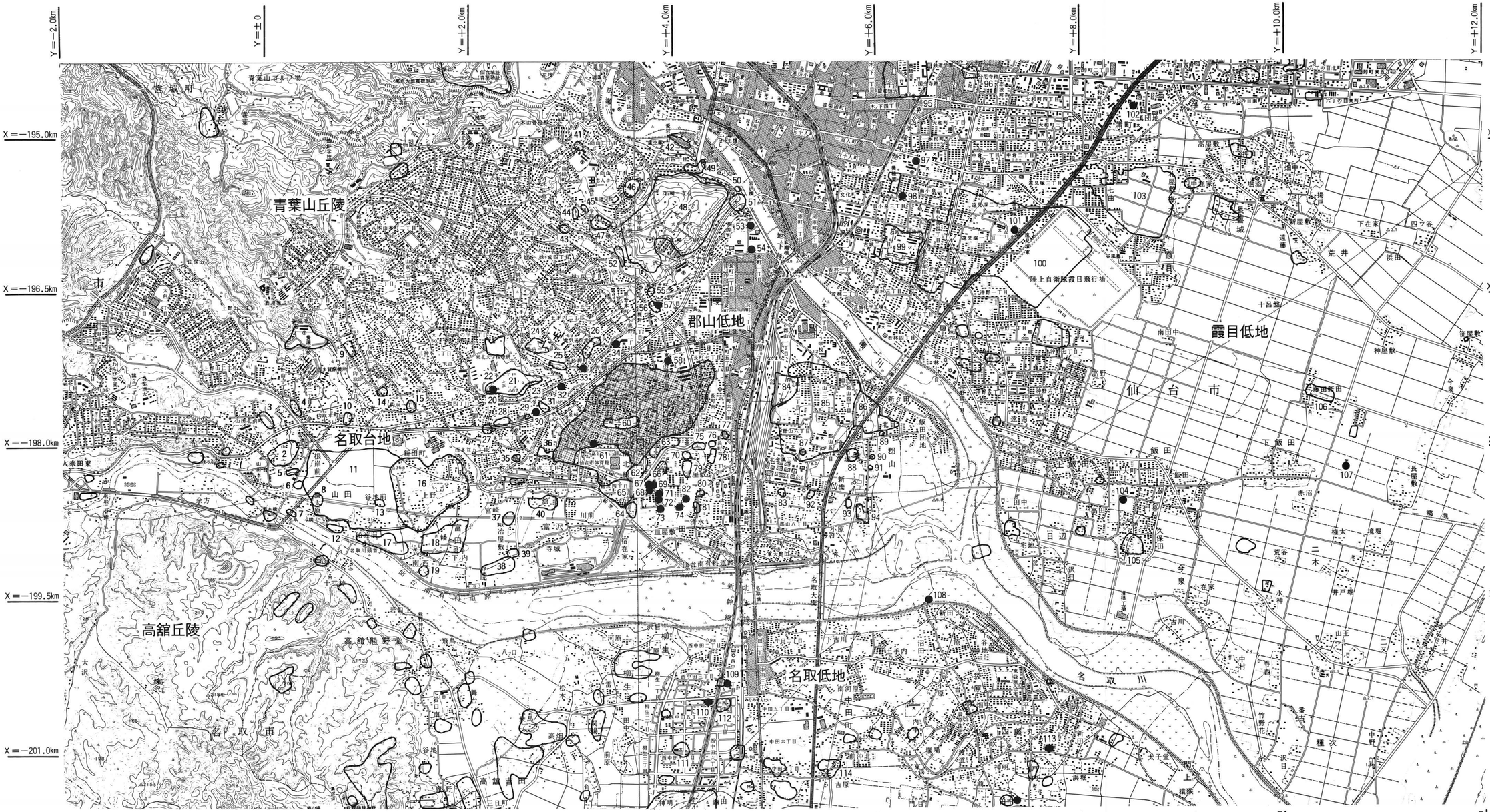
旧石器時代：富沢遺跡では下層の砂礫層の形成の過程や、河川による侵食作用・堆積作用による地形変化については不明な点が多いが現在のところ旧石器時代の遺構・遺物の存在は確認されていない。旧石器時代の自然環境は「氷河時代」の名称に示されるように動植物相は縄文時代以降とはかなり異なるものであり、その間の気候変化・地形変化はこれまでの調査研究により序々に明らかとなりつつある。しかし旧石器時代は人類史の中にあって、そのほとんどの時間を占めているにもかかわらず、当時の自然環境を知るデータは少ない。特に沖積平野においては河道の変化による地形変化を伴いながらの海水準の変動や河川堆積物の供給により当時の地形は完全に埋没あるいは消滅している。

富沢遺跡周辺における旧石器時代の遺跡は当遺跡西方の名取台地において山田上ノ台遺跡[1)2)](2)北前遺跡[3)](3)が、西北方３ kmの青葉山丘陵に青葉山Ｂ遺跡[4)]がある。３遺跡からは、これまでの調査により前期旧石器時代及び後期旧石器時代の石器が出土している。

旧石器時代の自然環境については、気候変化に伴う海水準変動を考慮しなければならないが、後期旧石器時代においては、ヴィルム氷期の最寒冷期には海水準が現在よりも約140m[5)]あるい

第1表　遺跡地名表

No	遺跡名	立地	年代	No	遺跡名	立地	年代
1	富沢遺跡	後背湿地	縄文～近世	58	金岡八幡古墳	後背湿地	古墳
2	山田上ノ台遺跡	段丘	旧石器(前・後)縄文(早・中・後)平安・近世	59	教塚古墳	後背湿地	古墳
3	北前遺跡	段丘	旧石器(前・後)縄文(早・中)古墳・平安	60	泉崎浦遺跡	自然堤防、後背湿地	縄文・古墳・平安・近世
4	上野山遺跡	段丘	縄文	61	山口遺跡	自然堤防、後背湿地	縄文(早～晩)弥生・古墳・奈良・平安・中世
5	汚田通A遺跡	段丘	縄文・平安	62	下ノ内浦遺跡	自然堤防	奈良・平安
6	汚田通B遺跡	段丘	平安	63	袋東遺跡	自然堤防	古墳・平安
7	清田原西遺跡	段丘	縄文・平安	64	伊古田遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
8	竹の内前遺跡	段丘	奈良・平安	65	下ノ内遺跡	自然堤防	縄文(中・後)弥生・平安
9	紙漉山遺跡	段丘	縄文	66	六反田遺跡	自然堤防	縄文(中・後・晩)弥生・古墳・奈良・平安
10	町遺跡	段丘	縄文・古墳・平安	67	五反田石棺墓	自然堤防	古墳
11	山田条里遺跡	段丘	奈良～平安	68	五反田木棺墓	自然堤防	古墳
12	清田原東遺跡	段丘	縄文・平安	69	五反田古墳	自然堤防	古墳
13	谷地前遺跡	段丘	平安	70	元袋Ⅱ遺跡	自然堤防	奈良・平安
14	後田遺跡	段丘	奈良・平安	71	大野田1号墳	自然堤防	古墳
15	八幡西遺跡	段丘	平安	72	大野田2号墳	自然堤防	古墳
16	上野遺跡	段丘	縄文(中)・奈良・平安	73	春日社古墳	自然堤防	古墳
17	般渡前遺跡	段丘	縄文・弥生・奈良・平安	74	鳥居塚古墳	自然堤防	古墳
18	南ノ東遺跡	自然堤防、後背湿地	弥生・奈良・平安(中期)	75	元袋Ⅲ遺跡	自然堤防	奈良・平安
19	富田南西遺跡	自然堤防	奈良・平安	76	長町南遺跡	自然堤防	奈良・平安
20	富沢窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良・平安	77	長町六丁目遺跡	自然堤防	奈良・平安
21	三神峯遺跡	段丘	縄文(早・前)	78	新田遺跡	自然堤防	奈良・平安
22	三神峯古墳群	段丘	古墳	79	大野田遺跡	自然堤防、後背湿地	縄文(後期)弥生
23	金山窯跡	丘陵斜面	古墳	80	北屋敷遺跡	自然堤防、後背湿地	奈良・平安
24	土手内遺跡	丘陵	縄文・奈良・平安	81	長町清水遺跡	自然堤防	古墳？
25	土手内窯跡	丘陵斜面	古墳末～奈良	82	王の壇古墳	自然堤防	古墳
26	砂押屋敷遺跡	段丘	奈良・平安	83	的場遺跡	自然堤防	奈良・平安
27	西台窯跡	段丘	奈良・平安？	84	西台畑遺跡	自然堤防	弥生・古墳
28	原遺跡	段丘	弥生・古墳・平安	85	郡山遺跡	自然堤防、後背湿地	古墳・奈良
29	原東遺跡	段丘	古墳・奈良・平安	86	北目城跡	自然堤防	室町・江戸
30	裏町古墳	段丘	古墳	87	諏訪社古碑群		録倉(後期)
31	裏町東遺跡	段丘	平安	88	矢来遺跡	自然堤防、後背湿地	古墳・奈良・平安
32	金洗沢古墳	段丘	古墳	89	宅地古碑群		鎌倉(後期)
33	砂押古墳	段丘	古墳	90	北目古碑群		鎌倉(後期)
34	二塚古墳	後背湿地	古墳	91	穴田東古碑群		鎌倉(後期)
35	富沢上ノ台遺跡	段丘	縄文・平安	92	籠ノ瀬遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
36	富沢清水遺跡	自然堤防	奈良・平安	93	欠ノ上Ⅰ遺跡	自然堤防、後背湿地	古墳・奈良・平安
37	鍛治屋敷A遺跡	後背湿地	縄文・奈良・平安	94	欠ノ上Ⅱ遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
38	六本松遺跡	自然堤防、後背湿地	奈良・平安	95	陸奥国分寺跡	自然堤防	奈良
39	鍛治屋敷B遺跡	自然堤防、後背湿地	縄文・奈良・平安	96	陸奥国分寺尼寺跡	自然堤防	奈良
40	富沢館跡	自然堤防、後背湿地	室町	97	法領塚古墳	自然堤防	古墳(後期)
41	向山高裏遺跡	丘陵	縄文(中期)	98	猫塚古墳	自然堤防	古墳
42	愛宕山横穴群	丘陵斜面	古墳末～奈良	99	若林城跡	自然堤防	中世・江戸
43	青山二丁目遺跡	丘陵	奈良～平安	100	南小泉遺跡	自然堤防、後背湿地	弥生・古墳・奈良・平安・中世
44	二ツ沢遺跡	丘陵	縄文	101	遠見塚古墳	自然堤防	古墳(中期)
45	八木山緑町遺跡	丘陵	縄文・奈良・平安	102	曽利松明神古墳	沖積平野	古墳
46	萩ヶ丘遺跡	丘陵	縄文・奈良・平安	103	仙台東郊条理跡	後背湿地	奈良
47	萩ヶ丘B遺跡	丘陵	縄文	104	梅塚古墳	沖積平野	古墳
48	茂ヶ崎城跡	丘陵頂部及び斜面	南北朝～室町	105	今泉遺跡	自然堤防	弥生・古墳・平安～近世
49	大年寺横穴群	丘陵斜面	古墳末～奈良	106	藤田新田遺跡	浜堤	弥生
50	宗禅寺横穴群	丘陵斜面	古墳・奈良	107	下飯田薬師堂古墳	自然堤防	古墳(後期)
51	根岸遺跡	丘陵斜面	縄文	108	仙台大塚山古墳	自然堤防	古墳
52	二ツ沢横穴群	丘陵	古墳	109	伊豆野権現古墳	自然堤防	古墳
53	兜塚古墳	自然堤防	古墳	110	安久諏訪古墳	自然堤防	古墳
54	小兜塚古墳	自然堤防	古墳	111	栗遺跡	自然堤防	古墳
55	鹿野屋敷遺跡	段丘	古墳？奈良・平安	112	安久東遺跡	自然堤防	弥生～中世
56	鹿野一丁目遺跡	段丘	縄文・弥生？奈良・平安	113	城丸古墳	自然堤防	古墳
57	一塚古墳	後背湿地	古墳	114	後河原遺跡	自然堤防、後背湿地	弥生・平安・中世



第10図　富沢遺跡と周辺の遺跡分布図

は約80m[6]低下していたものと考えられており、少なくともこれらの遺跡は100数十mの海抜高をもっていた時期があったことになる。また汀線からの距離は現在よりも遠かったものと考えられる。現在の調査技術からしては、旧石器時代の生活面を海底下において検出することは不可能であり、沖積平野下においても困難である。しかし、少なくとも沖積平野のより下層に存在する可能性のある沖積世[7]の旧石器時代の生活面を念頭に入れた遺跡の理解をなすべきであろう。

縄文時代：約1万年前以降、気候の湿暖化により旧石器時代の動植物相は変化し、人類の環境は大きく変貌した。特に縄文時代早期末～前期前半の時期は「ヒプシサーマル」いわゆる温暖期にあたり、海水準の上昇が世界各地で確認されている[8]。海水準の上昇は各地河川堆積物の供給量との相関関係において海水域の拡大・縮小という変化を生みだした。当遺跡周辺では海水準の上昇にもかかわらず海水域の最も拡大した時期は約7900年前とされ、約5000年前以降海水準変動は安定期に入ったとされている[9]。これは名取川の供給する堆積物の量が極めて大きなものであったためであり、また海水域の拡大が当遺跡に及ばなかったことも海成層の有無により明らかにされている。当遺跡周辺においては以上のことをふまえ、縄文時代の地形環境については名取川・広瀬川及びその間を西方の丘陵から低地に流入する笊川の河川堆積物あるいは金洗沢・二ツ沢を起源とする堆積物の供給域・供給量との関係において理解すべきである。それは段丘上に立地する遺跡に比べ、低地の立地条件が極めて複雑であることを前提としなければならず、細かな地点毎の自然環境の変遷の復原の必要性を認識させる。

さて縄文時代の遺跡は、当遺跡及び周辺では郡山低地に面する丘陵・段丘上と、低地においても検出されており、時期毎に見ていくことにする。

早期：当遺跡周辺では南に隣接する下ノ内浦遺跡(62)で早期前葉の竪穴遺構2基といわゆる陥し穴遺構を含む7基の土壙が検出されており、遺物としては押型文土器（日計式）、局部磨製の黒耀石製の石鏃を含む石器が出土している[10]。また下ノ内浦遺跡の西に隣接し当遺跡とも隣接する山口遺跡(61)からは早期末葉～前期初頭の遺物が出土し、2ケ所の落ち込みが検出された[11]。西方の段丘上では北前遺跡で早期末葉・梨木畑式併行期の集落跡（竪穴住居8棟・土壙10基）が検出されている[3]。

前期：当遺跡周辺では下ノ内浦遺跡から前期後葉、大木5b式土器が出土している[2]。

西方の丘陵及び段丘上では、当遺跡の西方約1.5km、標高65～70mの青葉山段丘面に立地する三神峯遺跡(21)があり、前期前葉、大木1～2a式期の集落跡が検出されているほか、大木1～7式の土器が出土している[13][14][15]。また北前遺跡では大木6式期の土壙群が検出されている[3]。

中期：当遺跡周辺では笊川右岸に立地する六反田遺跡(66)で中期中葉、大木8b式期の竪式住居跡が1棟検出されているほか、大木8a式・大木8b式の土器も出土している[6]。中期末葉、大木

10式期では下ノ内遺跡(65)で竪穴式住居跡が3棟、埋設土器2基、土壙30基が検出されており[7]、六反田遺跡でも埋設土器が1基検出されている[6]。また山口遺跡では遺構は検出されていないが大木8a～大木10式の土器が出土している[8]。

西方の丘陵及び段丘上では山田上ノ台遺跡で中期前葉、大木7a・7b式の土器が出土、また大木10式期の集落跡(竪穴住居38棟・土壙300基余)が検出されている[1]。また北前遺跡では中期後葉、大木9式期の竪穴住居跡2棟が検出されている[3]。山田上ノ台・北前両遺跡の一段下位の段丘に立地する上野遺跡(16)では中期中葉、大木8b式期の竪穴住居跡・土壙等が検出されているほか、大木7a、8a～10式の土器が出土している[19]。

後期：当遺跡周辺の後期初頭においては、六反田遺跡で竪穴住居跡が検出されている[16]ほか、山口遺跡[18]・下ノ内遺跡[17][20]で遺物が出土している。また富沢遺跡のほぼ中央部に位置する泉崎浦遺跡(60)では土壙1基が検出されている[21]。後期前葉、南境式期では下ノ内浦遺跡で配石遺構9基・土壙約120基・埋設土器5基が検出されている[10]ほか、山口遺跡で遺物が出土している[18]。後期中葉、宝ケ峰式期では伊古田遺跡で遺物包含層が確認され、土器・石器とともに土偶9点が出土している[22]ほか、六反田遺跡[16]・山口遺跡[18]でも遺物が出土している。後期後葉、金剛寺式期では六反田遺跡[16]・山口遺跡[17]から遺物が出土している。また当遺跡の東方1kmに位置する西台畑遺跡(84)からは後期初葉の土器が出土している[23]。

西方の丘陵及び段丘では山田上ノ台遺跡で後期初頭の遺物が出土している。

晩期：当遺跡周辺では六反田遺跡・山口遺跡において共に河川の埋土中から晩期の遺物が出土していることが確認されている。

西方の丘陵及び段丘上では現在のところ遺構・遺物が検出されていない。

以上のように当地域では縄文時代早期前葉の時期に下ノ内浦遺跡で人間の行動がなされていたわけであり、当遺跡周辺ではその後中期前葉までは、山口遺跡で遺物の出土が確認されているにすぎない。ところが中期中葉以降、当遺跡南方に位置し笊川の両岸に展開する六反田遺跡・下ノ内遺跡・伊古田遺跡・山口遺跡・下ノ内浦遺跡では後期後葉に至るまで連続的な遺構・遺物検出されており、集落の存在を認識できる時期もあり、今後の調査により中期中葉～末葉以降の居住域としての性格が明らかにされることが予測される。また晩期についても近傍に集落の存在が予想される。これに対し、西方の丘陵及び段丘上では早期末葉から中期末葉まで竪穴住居跡や土壙等が連続的に検出されてはいるが、後期以降の検出遺構は現在のところ極めて少なく今後の調査に期待されるところが大きい。当地域の縄文時代については、丘陵及び段丘上の遺跡と低地における遺跡との連関・時期的な遺跡分布を考えなくてはならないが、低地・特に当遺跡とその周辺においては複雑な地形・環境の相異・変化による土地利用が行なわれたものとする視点が必要とされる。中でも六反田遺跡をはじめとする笊川の両岸の地帯には中期中

葉以降、比較的標高が高く水はけの良い、いわゆる自然堤防が形成されていたことを示し、その後安定した居住域としての地形的条件を保持していたことが考えられる。ところが早期における遺構・遺物の検出された下ノ内浦遺跡や山口遺跡の当時の環境については不明確であり、今後の大きな課題とされている。

弥生時代：当遺跡を生産域とした場合、周辺の自然堤防・微高地には居住域・墓域あるいは生産域の一部の存在を予想させるが富沢遺跡に隣接・近接する遺跡での弥生時代の遺構・遺物の検出例は少なく以下の通りである。

下ノ内浦遺跡：十三塚式期あるいは天王山式期の墓壙１基が検出され、石包丁２点と磨製石斧１点が副葬されており、朱の痕跡も確認されている。また他の竪穴遺構１基・土壙２基・溝跡１条も検出されているほか、十三塚式土器と天王山式土器の混在する包含層がそれらの遺構を覆っている。[24]

下ノ内遺跡：天王山式の甕が１点出土した土壙が１基検出されている[17]。

六反田遺跡：桝形囲式と天王山式の２層の遺物包含層が間層を挟んで確認されている[25]。

山口遺跡：十三塚式土器と天王山式土器の混在する包含層が確認されているほか、桝形囲式の土器破片が１点出土している[11]。

大野田遺跡(79)：石包丁１点が表面採集されている[26]。

以上のようにこれらは全て当遺跡南方の自然堤防上に立地している遺跡である。弥生時代の遺構は下ノ内浦遺跡で検出されているだけであり、他の遺跡では桝形囲式・十三塚式・天王山式の遺物が出土しているが、各時期の遺構の在り方はほとんど不明である。また当遺跡に隣接・近接する微高地・自然堤防には西方の金洗沢を起源とした小規模な扇状地性の微高地、ここの東半部には泉崎浦遺跡が立地するが弥生時代の遺構・遺物は検出されていない。また北方には二ツ沢を起源とした小規模な扇状地があり、東方には南北方向の自然堤防と考えられる微高地がある。当遺跡周辺の体系的な土地利用を考えるには、南方の遺跡だけでなく西方・北方・東方にある微高地あるいは自然堤防とも視野に入れた調査・研究が不可欠であろう。

また郡山低地東半部・当遺跡西方の段丘縁辺部・名取川以北の霞目低地にある弥生時代の遺跡について若干触れてみたい。

郡山低地東半部

西台畑遺跡：昭和32年、粘土の採掘作業に伴い桝形囲式期の遺物が出土している。出土遺物は、器形の知れる土器15個、土器破片約40点、石器２点、剝片３点である。また合口土器２点が出土している[23][27]。

郡山遺跡(85)：昭和59年の第44次調査で桝形囲式期の遺物が出土している[28]。

諏訪遺跡：弥生土器が出土している[26]。

当遺跡西方の段丘縁辺部

船渡前遺跡(17)：昭和51年の調査により大泉式期の土壙１期が検出されているほか、多量の遺物が出土しており、その中には石包丁１点が含まれている[29]。

南ノ東遺跡(18)：弥生土器が出土している[26]。

霞目低地

南小泉遺跡(100)：昭和11年に弥生土器の破片が採集されていたが、昭和14年春から16年春にかけての仙台飛行場の拡張工事の際に大量の土器・石器が出土した。弥生時代の遺物は、桝形囲式の弥生土器と、石器などが出土している。石器には棒状石斧・太形磨製石斧・扇平片刃石斧・石鑿・有角石斧・四頭石斧・石包丁などがある。また、合口土器が15組確認されていることから墓域の存在が考えられている[13]。その後南小泉遺跡の発掘調査は昭和52年の調査を第１次調査として昭和61年までに数多く行なわれてきている。弥生時代の遺構の検出はほとんどなされていないが、遺物は土器・石器などが出土している。弥生土器は桝形囲式の他にも、青木畑式併行期と考えられるものや[30]、十三塚式・天王山式なども出土しており[31]、弥生時代を通じての人間の居住が予測される。

藤田新田遺跡(106)：発掘調査は行なわれていないが、大正年間に桝形囲式の弥生土器や、石包丁・片刃石斧が出土したことが報じられている[13]。

今泉城遺跡（105)：昭和54年と昭和56年に２回の調査が行なわれている[32][33]。弥生時代の遺構は検出されていないが桝形囲式の弥生土器と、弥生時代の石器が出土している。中でも昭和56年の調査では石包丁５点と太型蛤刃石斧１点が出土している。

古墳時代：古墳時代の遺跡は、当遺跡南方の自然堤防に立地する遺跡と、当遺跡内にある遺跡・当遺跡北方あるいは西北方の丘陵縁辺部に立地する遺跡の３地域に分けることができる。

当遺跡南方：笊川左岸の六反田遺跡・下ノ内遺跡[20][17][34]・伊古田遺跡[35]からは塩釜式期・南小泉式期・栗囲式期の竪穴住居跡などの遺構が検出されており居住域と想定される。また下ノ内遺跡からは畑跡と推定されている南小泉式期以前の小溝状遺構群が検出されている[20]。これらの遺跡の東側には調査により検出された大野田１号墳(71)・大野田２号墳[36](72)の他に春日社古墳(73)・王の壇古墳(82)・鳥居塚古墳(74)が確認されており、埴輪の出土から古墳と想定される長町清水遺跡(81)もある。また六反田遺跡では五反田古墳・五反田木棺墓・五反田石棺墓が調査により検出されており[16]、今後この地域では新たなる古墳の発見される可能性がある。

遺跡内：遺跡中央部の泉崎浦遺跡から古墳時代の竪穴住居１棟が検出されている[37]。また遺跡南西部には教塚古墳[38](59)があったが調査により消滅した。

遺跡北方～北西方：この地域での集落跡の調査例はないが、遺物散布地として原遺跡(29)・鹿野屋敷遺跡(55)がある。古墳は当遺跡北側に金岡八幡古墳(58)があるが、他の古墳は西多賀か

ら根岸にかけての丘陵縁辺部に立地している。西南方から北東方にかけて裏町古墳[39](30)・金洗沢古墳(32)・砂押古墳[40](33)・二塚古墳[13](34)・一塚古墳[13](57)・兜塚古墳[13)41](53)・小兜塚古墳(54)が確認されている。また三神峯遺跡に隣接して2基の三神峯古墳群(22)がある。横穴墓は当遺跡北方の丘陵に二ツ沢横穴群(52)・愛宕山横穴群(42)・宗禅寺横穴群[42](50)がある。また三神峯遺跡の南に隣接して埴輪窯の富沢窯跡[43](20)・須恵器窯の金山窯跡[44](23)があり、近接して東方に土手内窯跡(25)・南方に西台窯跡(27)がある。古墳時代においては、古墳の築造・横穴墓の造営・埴輪窯・須恵器窯の操業という土地利用が行なわれることから弥生時代に較べ土地利用の体系の範囲が拡大する。当遺跡周辺の古墳時代各時期の生産域・居住域・墓域の関係は不明な部分が多く今後の課題とそれるが、古墳の築造に見られる経済的な基盤は生産域としての水田耕作に負う所が大きかったものと考えられ、当遺跡の南方と西方から北方にかけて見られる古墳との関係を居住域を通して究明していく必要がある。

郡山遺跡：郡山低地東半部には郡山遺跡がありこれまでの調査により、7世紀後半から8世紀初頭にかけての官衙跡であることが明らかとなっている[45~51]。この官衙跡の存在は立地・成立基盤など、7世紀における当遺跡周辺を考える上で重要な位置を占めるものと考えられる。

奈良時代：奈良時代の遺跡は、当遺跡南方の自然堤防上に立地する遺跡と当遺跡北方あるいは、西北方の丘陵縁辺部に立地する遺跡の2地域に分けることができる。

当遺跡南方　：　笊川両岸の下ノ内遺跡[17)34)]・伊古田遺跡・下ノ内浦遺跡[10)]・六反田遺跡[6)25)52)]・山口遺跡[11)]から竪穴住居跡が、山口遺跡[11)]からは小溝状遺構群が検出されており、これらの遺跡の東側の笊川右岸でも元袋III遺跡(75)・長町六丁目遺跡(77)などの奈良時代の遺跡が知られている。

当遺跡北方～北西方：奈良時代の遺跡は富沢清水遺跡(36)・砂押屋敷遺跡(26)などが知られているが、調査例がなく、遺構の検出はなされていない。

当遺跡周辺の奈良時代の遺跡は、遺跡数や検出された遺構の数から見れば古墳時代に較べ増加している傾向はうかがえるが、調査例も少ないことから慎重を要するであろう。

平安時代：平安時代の遺跡は奈良時代以降連続するのもが多く、奈良時代の遺跡の分布状況とさほど変わらない。調査においても南方の自然堤防上に立地する下ノ内遺跡[17)20)34)]・伊古田遺跡[22)35)]・下ノ内浦遺跡[10)24)]・六反田遺跡[16)53)]・山口遺跡[11)18)]から竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出されている。特に山口遺跡では水田跡も検出され[11)]、居住域と水田域が同時に確認された調査例としては仙台市唯一のものである。また六反田遺跡の一部[52)]と下ノ内浦遺跡[24)]では平安時代と考えられる水田跡が検出されている。

中世以降：中世以降の遺跡数は極めて少なく、当遺跡西南方の富沢館跡(40)、北方の茂ケ崎城跡(48)、郡山低地東半部の北目城遺跡(86)が知られているほか、泉崎浦遺跡[37)]・北前遺跡[3)]・山

田上ノ台遺跡[1]では調査により近世の墓壙群が検出されている。

以上、当遺跡周辺の歴史的環境を時代を追って概観したわけであるが、現在のところ発掘調査の結果から見ると、南方の笊川流域では下ノ内浦遺跡の縄文時代早期前半の遺構・遺物の検出が最も古く、その後断続的な遺構・遺物の検出はあるが縄文時代中期中葉以降平安時代まで連続的な遺構・遺物の検出がなされている。しかし中世以降の遺構・遺物の検出例は極めて少ない状況といえる。富沢遺跡に隣接あるいは近接するこの笊川流域の遺跡は泉崎浦遺跡を含めて沖積平野における過去の人類に関する貴重なデータを提供しているといえる。

富沢遺跡第15次調査は、昭和57年から始まった水田跡調査の成果とともにこのような周辺の遺跡の状況をふまえて行なわれたわけであり、当遺跡の構造の把握とともに周辺の遺跡との関係の究明を念頭に置いたものであった。

註)

1．渡部弘美・主浜光朗・柳沢みどり　1981 『山田上ノ台遺跡発掘調査概報』 仙台市文化財調査報告書第30集
2．及川　格　1985 『山田上ノ台遺跡』 仙台市文化財調査報告書第77集
3．佐藤　洋・斎野裕彦　1982 『北前遺跡』 仙台市文化財調査報告書第36集
4．東北大学埋蔵文化財調査委員会　1986 『東北大学埋蔵文化財調査年報２』
5．井関弘太郎　1975 「沖積層基底礫層について」『地学雑誌』 第84巻第５号
6．大嶋和雄　1982 「最終氷期の最低位海水準について」『第四紀研究』 第21巻第３号
7．井関弘太郎　1983 『沖積平野』
8．前田保夫　1980 『縄文の海と森』
9．松本秀明　1981 「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』 第52巻第２号
10．吉岡恭平　1985 「下ノ内浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV』 仙台市文化財調査報告書第82集
11．田中則和・主浜光朗他　1984 『山口遺跡II』 仙台市文化財調査報告書第61集
12．斎野裕彦　1986 「富沢水田遺跡鳥居原地区33層の火山灰について」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅴ』 仙台市文化財調査報告書第89集
13．伊東信雄　1950 「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史３』
14．白鳥良一　1974 「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古歴史論集』
15．岩渕康治・佐藤則之　1980 『三神峯遺跡発掘調査報告書』「仙台市文化財調査報告書第25集
16．田中則和　1981 『六反田遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財報告書第34集
17．篠原信彦　1983 「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報』 仙台市文化財報告書第69集
18．佐藤　洋　1981 『山口遺跡発掘遺跡調査報告書』 仙台市文化財報告書第33集
19．金森安孝・工藤哲司・千葉　仁　1986 『上野遺跡』 仙台市文化財調査報告書第28集
20．篠原信彦　1982 「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ』 仙台市文化財調査報告書第40集
21．渋谷孝雄　1980 「泉崎浦遺跡試掘調査報告」『年報』 仙台市文化財調査報告書第23集
22．高橋勝也　1985 「伊古田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV』 仙台市文化財調査報告書第82集
23．伊藤玄三　1958 「仙台市西台畑遺跡出土の弥生土器」『考古学雑誌』第44巻第１号
24．成瀬　茂・吉岡恭平　1984 「下ノ内浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III』 仙台市文化財調査報告書第69集
25．篠原信彦　1986 「六反田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅴ』 仙台市文化財調査報告書第89集
26．仙台市教育委員会　1983 『仙台市文化財分布地図』 仙台市文化財調査報告書第51集
27．伊藤玄三　1961 「東北日本における弥生時代の墓制」『文化』第25巻３号
28．木村浩二他　1985 『郡山遺跡Ⅴ』 仙台市文化財調査報告書第74集

29. 宮城県教育委員会　1977 『清水原西・船渡前遺跡』 宮城県文化財調査報告書49集
30. 結城慎一・佐藤　洋　1984 『南小泉遺跡』 仙台市文化財調査報告書第68集
31. 伊東信雄　1957 「古代史」『宮城県史』 第1巻
32. 篠原信彦他　1980 『今泉城跡』 仙台市文化財調査報告書第24集
33. 佐藤　洋　1983 『今泉城跡』 仙台市文化財調査報告書第58集
34. 渡辺忠彦　1984 「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III』 仙台市文化財調査報告書第69集
35. 高橋勝也　1984 「伊古田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III』 仙台市文化財調査報告書第69集
36. 長島栄一　1982 「大野田古墳群」『年報3』 仙台市文化財調査報告書第41集
37. 吉岡恭平　1983 「泉崎浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II』 仙台市文化財調査報告書第56集
38. 渡辺　誠　1986 「〔3〕教塚古墳」『仙台平野の遺跡群V』 仙台市文化財報告書第87集
39. 伊東信雄他　1974 『裏町古墳発掘調査報告書』 仙台市文化財報告書第7集
40. 佐藤　隆　1983 「砂押古墳」『仙台平野の遺跡群II』 仙台市文化財調査報告書第47集
41. 千葉宗久・阿部博志　1978 「(2)兜塚古墳」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）』 宮城県文化財調査報告書第53集
42. 伊東信雄・岩渕康治・田中則和他　1976 『宗禅寺横穴発掘調査書』 仙台市文化財調査報告書第9集
43. 渡辺泰伸他　1974 『富沢窯跡』 古窯跡研究会
44. 斎藤秀寿　1981 「仙台市金山窯跡出土の古式須恵器」『陸奥国官窯跡群IV』
45. 木村浩二　1980 「郡山遺跡発掘調査概報」『年報1』 仙台市文化財調査報告書第23集
46. 木村浩二他　1981 『郡山遺跡I』 仙台市文化財調査報告書第29集
47. 木村浩二他　1982 『郡山遺跡II』 仙台市文化財調査報告書第38集
48. 青沼一民・木村浩二　1982 『郡山遺跡』 仙台市文化財調査報告書第42集
49. 木村浩二他　1983 『郡山遺跡III』 仙台市文化財調査報告書第46集
50. 木村浩二他　1984 『郡山遺跡IV』 仙台市文化財調査報告書第64集
51. 木村浩二他　1986 『郡山遺跡VI』 仙台市文化財調査報告書第86集
52. 田中則和　1984 『六反田遺跡II』 仙台市文化財報告書第72集
53. 荒井　格　1982 「六反田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I』 仙台市文化財報告書第40集

第３章　これまでの水田跡調査と座標軸の設定

第１節　遺跡名の改称とこれまでの水田跡調査

１．遺跡名改称への経過

仙台市における水田跡の最初の検出は富沢遺跡の南に隣接する山口遺跡での昭和57年５月の平安時代の水田跡であった[1]。しかし、これに先立つ６年前、昭和51年に山口遺跡の南東方に近接する六反田遺跡において既に平安時代以降とされる「アゼ状遺構」が検出されている[2]。当時は水田跡とは認識され得なかったが、この遺構の検出は山口遺跡における平安時代の水田跡の検出に結びついたわけである。しかも山口遺跡ではプラント・オパール分析結果に基づく調査であった点でその後の水田跡調査の方向性を示すものであった。

昭和57年当時、山口遺跡の北方には周知の遺跡は数少なかったが、仙台市高速鉄道建設に伴い総延長１ km にわたり、仙台市鳥居原・鍋田・中谷地・泉崎浦・泉崎・泉崎前の各地区において試掘調査が行なわれていた。山口遺跡での水田跡調査の方法はプラント・オパール分析をはじめとして花粉分析・火山灰の同定など関連科学との連携による調査であり、それはこの試掘調査においても行なわれており、調査の結果泉崎浦遺跡の立地する微高地部分を除き試掘対象区域のほぼ全域にわたり水田跡の存在が確認され、全域の本調査へ移行した。昭和58年６月３日の「富沢水田遺跡」の登録の際には、この仙台市高速鉄道建設に伴う試掘調査及び一部行なわれた本調査の結果を基本とし、地形・標高などを考慮して遺跡の線引きが行なわれた。その後昭和61年まで「富沢水田遺跡」としての調査が行なわれた結果、遺跡範囲内において旧水田下に弥生時代以降の水田跡が重層して存在していることが明らかにされた。また弥生時代の水田跡のより下層から縄文時代の遺物が出土することが数地点で確認されたことや遺跡隣接地において中世の居住域と考えられる遺構群の存在が確認されたことから、昭和62年３月20日付で「富沢水田遺跡」を改め「富沢遺跡」と遺跡名の改称がなされ、昭和62年３月21日関係機関への通知が行なわれた。

２．調査次数について

昭和62年３月31日までに富沢遺跡の調査とされるものは、昭和57年度に遺跡範囲内において行なわれた調査と「富沢水田遺跡」として行なわれた調査であり、仙台市高速鉄道建設に伴う試掘調査の後、28回行なわれている。これらの調査は以前の遺跡名や「富沢水田遺跡」にあっては字名に基づいた地区名によってそれぞれ報告がなされてきた。ところが遺跡内には字名が少なく、同一字名がいくつかの調査において使用されており、各調査地点を明確に示せない状況があることや、今後の調査の増加も予想されることから、それぞれに調査次数を与え、調査

第２表　富沢遺跡調査次数表

調査次数	調査区地番	調査名	調査期間	面積	位置	調査内容	文献
1	仙台市泉崎１丁目 仙台市長町南３丁目	仙台市高速鉄道建設に伴なう試掘調査	S57.４月～９月			約50㎡の試掘区を27ケ所設定して調査・平安時代以前の水田跡・平安時代水田跡・中世水田跡	仙台市文化財調査報告書第56集仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ
2	仙台市長町南３丁目	中谷地遺跡発掘調査	S57.８.25～S57.12.23	1852㎡	965＋20・C４②･⑦	平安時代水田跡・中世水田跡	仙台市文化財調査報告書第56集仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ
3	仙台市泉崎１丁目	泉崎前遺跡発掘調査	S57.９.１～S57.12.11	600㎡	965＋20・C４㉒	平安時代以前の水田跡・２時期の平安時代水田跡	仙台市文化財調査報告書第56集仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ
4	仙台市泉崎１丁目	泉崎浦遺跡発掘調査	S57.９.13～S58.２.16	1200㎡	965＋20・C４⑫･⑰	平安時代以前の水田跡・平安時代の水田跡	仙台市文化財調査報告書第56集仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ
5	仙台市長町南３丁目	鳥居原遺跡発掘調査	S57.10.５～12.25 S58.２.３～２.12	1300㎡	965＋40・B１⑯･⑰	平安時代以前の水田跡(第７次調査により弥生時代桝形囲式期の水田跡と判明)・平安時代の水田跡	仙台市文化財調査報告書第56集仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ
6	仙台市富沢字泉崎東２－１	泉崎浦遺跡発掘調査	S57.10.４～S57.10.13	180㎡	965＋20・C４⑥	平安時代水田跡	仙台市文化財調査報告書第57集 年報４
7	仙台市長町南３丁目	富沢水田遺跡鳥居原中谷地地区	S58.４.13～S59.１.９	2400㎡	965＋20・B４⑳･㉔･㉕ 965＋40・B１⑯･㉑	弥生時代桝形囲式期水田跡・平安時代水田跡・平安時代以降の水田跡	仙台市文化財調査報告書第69集仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ
8	仙台市長町南４丁目20	富沢水田遺跡泉崎前地区	S58.４.18～S58.11.14	1300㎡	965＋20・C４㉒･㉓	縄文時代後期の遺物･弥生時代寺下囲式期の水路跡･弥生時代桝形囲式期の水路跡･平安時代水田跡･中世水田跡	仙台市文化財調査報告書第67集 富沢水田遺跡
9	仙台市鹿野３丁目26～ 長町南４丁目２地内	富沢水田遺跡中谷地地区	S58.７.26～S58.８.５	46㎡	965＋20・B４㉒	平安時代以前の水田跡・平安時代以降の水田跡	仙台市文化財調査報告書第66集 年報５
10	仙台市富沢字清水39－４	富沢水田遺跡	S58.８.８～８.９		980＋20・A３⑥		
11	仙台市富沢字下ノ内浦32	富沢水田遺跡下ノ内浦地区	S58.11.４～S58.11.17	21㎡	980＋20・A４⑦	平安時代水田跡	仙台市文化財調査報告書第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ
12	仙台市長町字宮田17－４	富沢水田遺跡鳥居原地区	S58.11.22～S58.12.16	92㎡	965＋40・B１⑱	弥生時代桝形囲式期水田跡・平安時代水田跡・平安時代以降の水田跡	仙台市文化財調査報告書第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ
13	仙台市長町南３丁目	富沢水田遺跡鳥居原地区	S58.12.６～12.27～ S59.３.５～６.28	750㎡	965＋40･B１⑰･⑱･㉒･㉓	弥生時代桝形囲式期水田跡・弥生時代桝形囲式期以降、平安時代以前の水田跡・２時期の平安時代水田跡	仙台市文化財調査報告書第82集仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ
14	仙台市長町南３丁目３	富沢水田遺跡鳥居原、中谷地地区	S59.５.24～S59.６.20	54㎡	965＋20・C４⑤	中世以前の水田跡・中世水田跡・中世以降の水田跡	仙台市文化財調査報告書第75集 仙台平野の遺跡群Ⅳ
15	仙台市長町５丁目、７丁目 長町南１丁目	富沢水田遺跡	S60.４.10～S61.７.31	5581㎡	965＋40･B１⑮･⑰･⑱･⑲･⑳ 965＋40・B２⑪･⑫	縄文時代早期末葉～前期初頭の遺物・弥生時代桝形囲式期以前の２時期の水田跡・弥生時代桝形囲式期水田跡・弥生時代桝形囲式期以降弥生時代十三塚式期以前の水田跡・弥生時代十三塚式期水田跡・古墳時代南小泉式期水田跡・３時期の平安時代水田跡・３時期の中世水田跡・近世水田跡・近世末～明治初期の水田跡	仙台市文化財調査報告書第98集 富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書
16	仙台市長町南３丁目	富沢水田遺跡鳥居原地区	S60.４.10～S60.７.９	67㎡	965＋40・B１⑰		仙台市文化財調査報告書第89集仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅴ
17	仙台市長町南３丁目	富沢水田遺跡鳥居原地区	S60.４.10～S60.８.９	597㎡	965＋40・B１㉑	弥生時代桝形囲式期以前の水田跡・弥生時代桝形囲式期水田跡	仙台市文化財調査報告書第89集仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅴ
18	仙台市鹿野３丁目26～ 長町南４丁目２地内	富沢水田遺跡中谷地地区	S60.４.15～S60.４.30	33.5㎡	965＋20・B４㉒･㉓	平安時代以前の水田跡・平安時代水田跡	仙台市文化財調査報告書第94集 年報７
19	仙台市泉崎１丁目２－２他	富沢水田遺跡泉崎浦地区	S60.５.９～S60.５.31	52㎡	965＋20・C４⑥	弥生時代桝形囲式期水田跡・平安時代水田跡・平安時代以降の水田跡	仙台市文化財調査報告書第87集 仙台平野の遺跡群Ⅴ
20	仙台市鹿野３丁目214－４	富沢水田遺跡鹿野地区	S60.６.３～S60.６.22	26㎡	965＋20・B３⑳	平安時代水田跡	仙台市文化財調査報告書第87集 仙台平野の遺跡群Ⅴ
21	仙台市泉崎１丁目21－10他	富沢水田遺跡泉崎浦地区	S60.８.26～S60.９.12	221㎡	965＋20・C３⑳		仙台市文化財調査報告書第94集 年報７
22	仙台市富沢１丁目13	富沢水田遺跡富沢１丁目地区	S60.９.17～S60.10.11	63㎡	965＋20・C３㉒	平安時代水田跡	仙台市文化財調査報告書第94集 年報７
23	仙台市長町南３丁目	富沢水田遺跡鳥居原地区	S60.11.５～S60.11.６	—	965＋40・B１㉓		
24	仙台市富沢２丁目４	富沢水田遺跡富沢中学校地区	S61.４.12～調査継続中	約6000㎡	980＋20･A２④･⑤･⑨･⑩		
25	仙台市長町７丁目23	富沢遺跡中谷地地区	S61.５.８～S61.５.21	18㎡	965＋20・B４㉔		仙台市文化財調査報告書第97集 仙台平野の遺跡群Ⅵ
26	仙台市長町７丁目12	富沢遺跡鳥居原地区	S61.６.６～S61.８.30	230㎡	965＋40・B１⑭	縄文時代の遺物・平安時代水田跡	仙台市文化財調査報告書第104集 富沢遺跡第26次発掘調査報告書
27	仙台市鹿野３丁目226	富沢遺跡鹿野地区	S61.７.28～S61.９.１	88㎡	965＋20・B４㉓		仙台市文化財調査報告書第107集 年報８
28	仙台市長町南３丁目１	富沢水田遺跡総合支所予定地	S61.９～調査継続中	約2700㎡	965＋40・B１⑰･㉒		
29	仙台市長町南３丁目３－172	富沢遺跡鳥居原地区	S61.11.10～S62.１.19	95㎡	965＋40・B１㉒	弥生時代桝形囲式期以降十三塚式期以前の水田跡・弥生時代十三塚式期の水田跡	仙台市文化財調査報告書第107集 年報８

区は平面直角座標系Xに位置づけることにした。そこで富沢遺跡のこれまでの調査については第2表のように調査次数を各調査に与えた。次数の順序は仙台市高速鉄道建設に伴う試掘調査を第1次調査とし、以下調査開始の年月日順を基本とした。

3．これまでの水田跡調査

昭和57年度：第1次調査から第6次調査まで行なわれた。第1次調査では水田跡の存在・水田域の把握ということにおいて、その調査結果は富沢水田遺跡の登録に際して貴重なデータとなった。この第1次調査では平安時代以前の水田跡・平安時代・中世の水田跡の存在が明らかにされたが、各試掘区の面積が小さかったため水田の形態などについてはその後の調査に委ねられた。第2次調査以降、各調査区毎の水田跡の存否や水田の構造の把握が行なわれた。

昭和58年度：第7次調査から第13次調査まで行なわれた。第7次調査では、第1次調査・第5次調査で検出されていた平安時代以前の水田跡が弥生時代桝形囲式期のものであることが判明し、その水田形態は幅約2 mの大畦と幅30～40cmの小畦により区画されており、水田1枚の面積が6～26m²であることも明らかにされた。東北地方では青森県垂柳遺跡に次いで2例目の弥生時代水田跡の検出となった。また第8次調査では弥生時代寺下囲式期と桝形囲式期の2時期にわたる水路跡が検出された。寺下囲式期の水路跡からは石包丁が1点出土しており、この時期の水田跡の存在の可能性を示した。桝形囲式期の水路跡は護岸施設と考えられる遺構を伴うもので、水路内から木製農具が出土しており、東北地方での弥生時代木製農具の最初の発見となった。またこの調査では寺下囲式期水路跡の検出面下約70cmの層から縄文時代後期中葉・宝ケ峰式期の遺物が出土している。

昭和59年度：第13次調査の継続調査と第14次調査が行なわれた。第13次調査では平安時代2時期、弥生時代2時期（桝形囲式期とそれ以降）の4時期の水田跡が検出され、弥生時代において連続的な水田耕作が行なわれていたことが明らかにされた。

昭和60年度：昭和60年には第15次調査が4月から行なわれるわけであるが、この時点までの調査は主に遺跡北東部で多く行なわれ、弥生時代桝形囲式期の水田跡が広範囲にわたっていること、それ以降の弥生時代の水田域が存在していること、平安時代の水田跡がほとんどの調査において検出され、山口遺跡をも含め真北方向を基準とする水田形態を呈することが明らかとなっていた。昭和60年度には第15次調査から第23次調査までおこなわれ、第15次調査では遺跡北東端部とその隣接地を調査対象地区として約5600m²の調査が行なわれた。その結果、水田跡は弥生時代5時期・古墳時代1時期・平安時代3時期・中世3時期・近世1時期・近世末～明治初期1時期にわたり検出され、弥生時代以降連続的な水田耕作が行なわれていたことが明らかとなった。また中世の居住域と考えられる遺構群や、水田跡のより下層から縄文時代早期末葉～前期初頭の遺物が出土した。第20・21・23次調査地区はそれまで未調査であった地点であ

り、水田跡の検出と地点毎の層位の把握が行なわれた。尚、第23次調査については工事により破壊がなされた地点での断面層序の記録が取られたもので、正式な発掘調査とは考えていない。

昭和61年度：第15次調査の継続調査と、第24次調査から第29次調査まで行なわれた。第24次調査と第28次調査は継続中である。

以上のように富沢遺跡の調査は昭和57年以降5年間行なわれてきており、年毎に遺跡の構造も明らかになりつつある。富沢遺跡における「富沢水田遺跡」の遺跡登録、富沢遺跡への遺跡名の改称はこうした調査による遺跡の構造把握に対応するものである。

4．仙台市における他遺跡で検出された水田跡

山口遺跡の平安時代水田跡の検出以降、富沢遺跡以外の遺跡においても5遺跡で水田跡が検出されている。

六反田遺跡：前述のように昭和51年の調査で平安時代以降とされるアゼ状遺構が検出されている。その後昭和58年の調査では、平安時代以前と平安時代の2時期の水田跡が検出されており、平安時代以前の水田跡は酸化鉄斑を多量に含む床土を伴うことから乾田と考えられている[3]。

山口遺跡：前述のように昭和57年の調査で平安時代の水田跡が検出された。この水田跡は10世紀前半とされる灰白色火山灰を水田面・畦畔の上にのせており、真北方向を基準とする大畦とそれにほぼ直交する小畦により東西に細長い区画がなされている。水田1枚の面積は57.5m²のものが確認されているが、大多数のものは南北5～6 m、東西26～29m、面積130～174m²を占めるものと推定されている。水田域の南縁には東西方向の溝跡が11条検出されており、さらに溝跡を挟んで南側の微高地からは竪穴住居跡6軒などが検出されている。平安時代における居住域と生産域の関係が把握されたといえる。また中世の水田跡も検出されている[1]。その後昭和59年に行なわれた調査では平安時代以前と中世の2時期の水田跡が検出されている[4]。

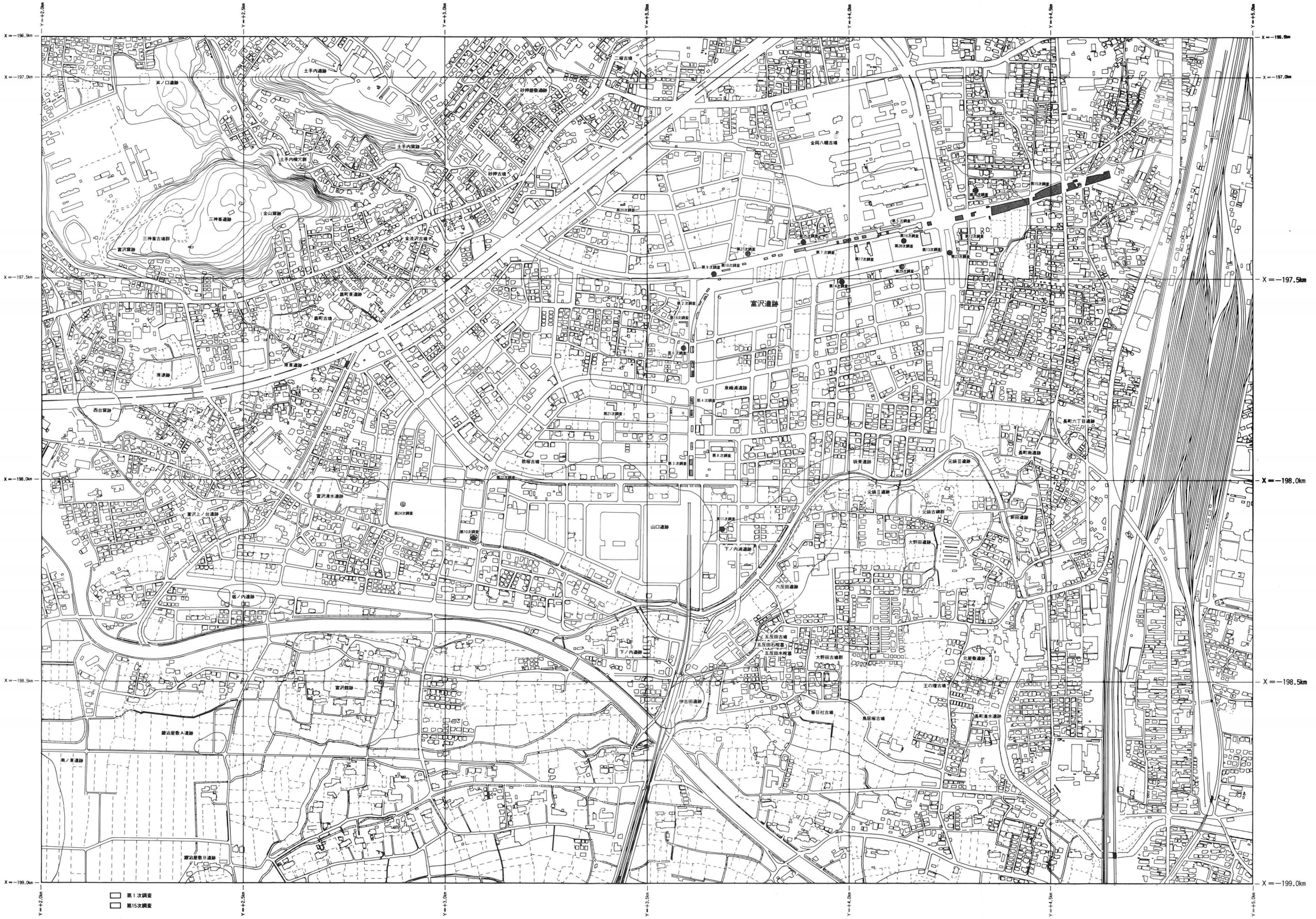
下ノ内浦遺跡：下ノ内浦遺跡は当遺跡の南に隣接している。昭和58年度の調査において平安時代の水田跡が検出されている[5]。

後河原遺跡：後河原遺跡は当遺跡の南東4 km、名取川右岸に所在する（第10図114）。昭和58年に調査が行なわれ、平安時代以前と中世の2時期の水田跡が検出されている[6]。

欠ノ上Ⅰ遺跡：欠ノ上Ⅰ遺跡は当遺跡の東南東2.5km、郡山低地東半部に所在する（第10図93）。昭和59年に調査が行なわれ、平安時代から中世にかけての水田跡と中世から近世にかけての水田跡が検出されている[7]。

5．小溝状遺構群

水田跡の調査については以上のような状況であるが、農耕という点において仙台市内では畑跡と推定される小溝状遺構群という遺構が検出されている。小溝状遺構群は昭和51年の六反田遺跡の調査において名称づけられた遺構で、「一般の小溝と異なり、少ない所で4～5本、多い



1/10000

0　1 km

第11図　富沢遺跡平面図A

ところでは15～16本、同じ方向で走るのが特徴」とされている[2]。このような遺構は既に昭和50年の安久東遺跡の調査で検出されていたが[8]、六反田遺跡では形態的には小溝状遺構の底面には凹凸があること、小溝状遺構群は断面において「うね状」を呈すること、まとまりと方向性をもつことなどから、その性格について畑跡ないし作物栽培に関係する遺構と考えられた。またこの調査で検出された小溝状遺構群の年代は5世紀後半以降平安時代以前とされている[2]。その後小溝状遺構群の検出は当遺跡南方に隣接・近接する山口遺跡[1]・下ノ内遺跡[5]・下ノ内浦遺跡[9][10][11]・六反田遺跡[3]・伊古田遺跡[12]や、名取川右岸に位置する後河原遺跡[6]・中田畑中遺跡[13]、左岸に位置する南小泉遺跡[14][15]で行なわれた。中でも昭和56年に行なわれた下ノ内遺跡の調査では古墳時代南小泉式期以前の小溝状遺構群が検出されており現段階での上限となっている[9]。また昭和57年には南小泉遺跡第7次調査において平安時代以前とされる小溝状遺構群が4群検出され、うち3群に小溝状遺構が2条1組となっていることが明らかにされた[15]。昭和58年には山口遺跡と六反田遺跡で奈良時代の小溝状遺構が、後河原遺跡で平安時代の小溝状遺構群が検出され、昭和59年には中田畑中遺跡で平安時代の小溝状遺構群が検出されている。中田畑中遺跡では、それまで検出された小溝状遺構群の共通点として「1．立地が微高地上である。2．溝方向が真北方向、あるいは直交方向であるものが多い。3．堆積土中に、検出面下の基本層位をブロック状に含んでいる。」ことが認められるが、その性格については畑跡の可能性もあることを指摘するにとどめている[13]。

以上のように小溝状遺構群については、その性格は畑跡が考えられるが推定の域を出ないこと、年代的には古墳時代南小泉式期以前のものを上限とし、奈良時代・平安時代のものが検出されていることが知られた。しかし小溝状遺構群を畑跡と想定するのであれば、検出時における遺跡の残存状況、小溝状遺構として検出される状況を種々考える必要があろう。当初六反田遺跡において示された「畑の凹状部分あるいは天地返し部分の可能性」[2]はいまだ未解決であるのが現状である。富沢遺跡では第24次調査において小溝状遺構群が検出されており[16]、今後畑跡と水田跡との関連において生産域を理解していく必要があろう。

註）

1．田中則和・主浜光朗他　1984『山口遺跡II』仙台市文化財調査報告書第61集
2．田中則和　1981『六反田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第34集
3．田中則和　1984『六反田遺跡II』仙台市文化財調査報告書第72集
4．田中則和　1985「山口遺跡」『仙台平野の遺跡群IV』仙台市文化財調査報告書第75集
5．成瀬　茂・吉岡恭平　1984「下ノ内浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III』仙台市文化財調査報告書第69集
6．佐藤甲二・青沼一民　1984『後河原遺跡』仙台市文化財調査報告書第71集
7．佐藤甲二　1985『欠ノ上I遺跡』仙台市文化財調査報告書第79集
8．岩渕康治・田中則和　1976『安久東遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第10集
9．篠原信彦　1982「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I』仙台市文化財調査報告書第40集
10．篠原信彦　1983「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II』仙台市文化財調査報告書第56集
11．渡辺忠彦　1984「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III』仙台市文化財調査報告書第69集
12．金森安孝・渡辺　誠　1985「伊古田遺跡」『年報6』仙台市文化財調査報告書第83集
13．佐藤甲二　1985『中田畑中遺跡 — 第2次発掘調査報告書 — 』仙台市文化財調査報告書第78集
14．結城慎一・工藤哲司他　1978『南小泉遺跡範囲確認調査報告書』仙台市文化財調査報告書第13集
15．工藤哲司　1983『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第52集
16．仙台市教育委員会　1986『富沢遺跡(富沢中学校地区)現地説明会資料』

第2節　富沢遺跡における座標軸の設定

富沢遺跡における調査は昭和57年度以降5年間行なわれ、昭和61年度までに調査次数も29を数えるに至っている。当遺跡は面積約820,000m² と広大であり、今後も調査の継続が予想されることから、調査区及び遺構をより正確に地図上に位置付けて遺跡の理解を図る必要がある。そこで「平面直角座標系Ⅹ」[1] を使用し当遺跡の調査区の位置づけを行なうこととした。

平面直角座標系Ⅹ　B＝ 40°0′00″000

L＝140°0′00″000

1．富沢遺跡の範囲と座標との関係

仙台市では昭和60年に国土基本図を作成している[2]。この国土基本図は平面直角座標系Ⅹを使用しており、東西2 km、南北1.5kmの範囲毎に Scale　1:2500 で作成してあり、市域は108枚の図面によりカバーされている。それぞれの国土基本図はその中に500mメッシュのラインが入っており、それらは座標系の中での500mを単位とする数値で示してある。また国土基本図と同様の単位・スケールで昭和46年には宮城県が、仙塩広域都市計画図[3]を作成している。そして昭和58年作成の仙台市遺跡分布地域図は国土基本図を縮尺して Scale 1：5000 として各遺跡の範囲を示しており、これらを利用し、今後の調査を考え富沢遺跡を含む以下の2つの図面を作成した。

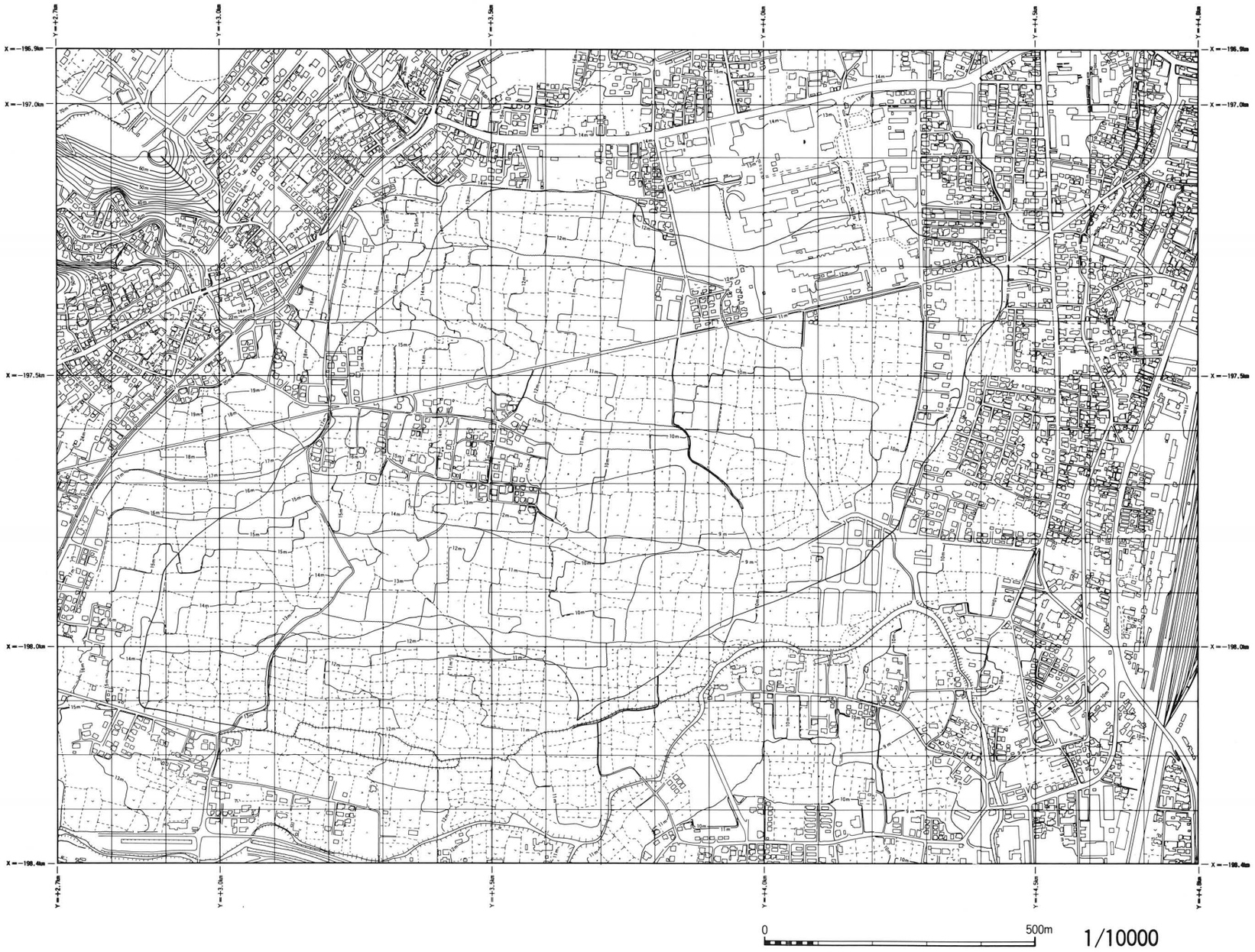
富沢遺跡平面図Ａ（第11図）：Ⅹ軸＝－196.9kmから－199.0km、Ｙ軸＝＋2.0kmから＋5.0km東西3 km、南北2.6kmの範囲を Scale 1：2500、1＝5000、1 ： 10000で500mメッシュを入れたもの。この平面図Ａは昭和60年作成の国土基本図を用いており、周辺の遺跡をも含むもので現況での遺跡範囲・調査区・他遺跡との位置関係を把握するために作成した。

富沢遺跡平面図Ｂ（第12図）：Ⅹ軸＝－196.5kmから－198.4km、Ｙ軸＝＋2.7kmから＋4.8kmの東西2.1km、南北1.5kmの範囲を Scale 1：2500、1＝10,000で100mメッシュを入れたもの。この平面図Ｂは昭和46年作成の仙塩広域都市計画図を用いており、その当時の等高線が1 mコンタで入っている。これは富沢遺跡を中心としており各調査区の位置関係、旧地形を参考として各遺構群を把握するために作成した。

2．区名の設定と調査区の位置付け

遺跡範囲が広大なため、これまでは字名により調査区名をつけてきたが、今後は平面直角座標系Ⅹを使用して100mメッシュを組み、より細かな単位での調査区の位置付けを以下のように行なう。

平面直角座標系Ⅹにおける富沢遺跡の位置・仙台市の国土基本図及び仙台市文化財分布図との関係・富沢遺跡平面Ａ、Ｂの範囲は第13図1に示す通りである。調査区の把握は国土基本図

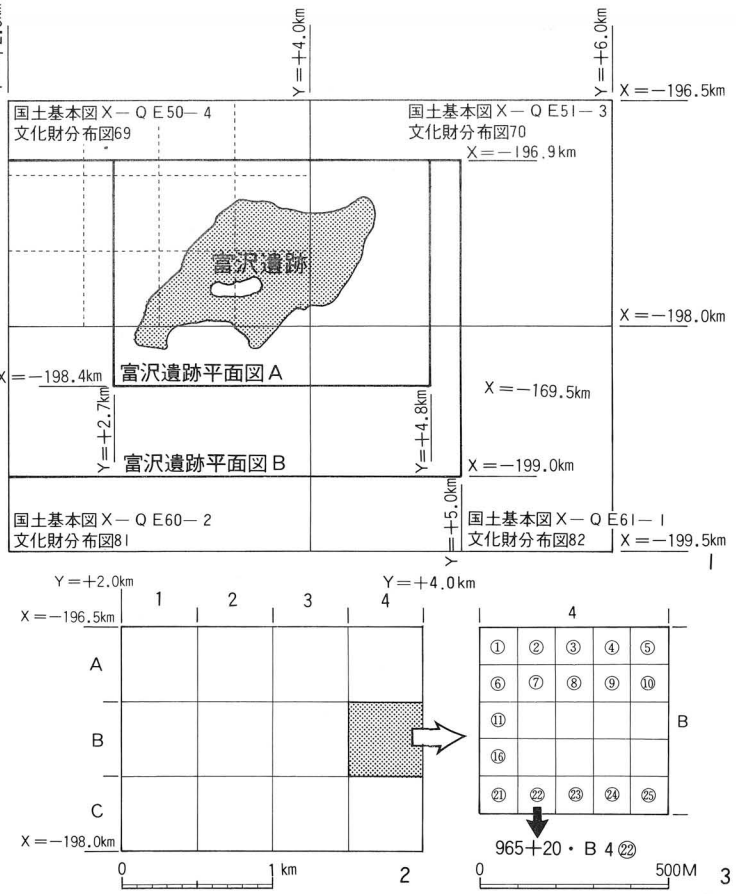


第12図　富沢遺跡平面図Ｂ

の１枚毎を基本として行ない、それぞれの基本図の名称は北西コーナーの座標においてＸ軸については百桁の数値と少数点を省き、Ｙ軸は少数点を除き、６文字により標記する。次に国土基本図の中の500m メッシュにより東西・南北500m に分けられたものに第13図２のようにＸ軸については北から南へＡ・Ｂ・Ｃ、Ｙ軸については西から東へ１・２・３・４とし、区名をつける。さらに100m メッシュで区切られたところには第13図３のように①から㉕までの番号をつける。調査区が㉒の中にある場合には965＋20・B4 ㉒と標記する。

３．今後の調査

富沢遺跡の遺跡範囲は遺跡が知られる以前に富沢土地区画整理組合によって区画整理が行なわれた地域と70～80％重なる。この時土地区画整理組合ではScale １：500 の道路台帳平面図を作成している。この平面図は平面直角座標系Ｘを基準としており、東西400m、南北300m の範囲を１枚として23枚の平面図により区画整理地内の道路を示したものである。また、各平面図には基準点網図に基づく基準点が記入されており網図の台帳も作成されている。調査区はこの道路台帳平面図に各基準点をもとに位置付けし、これまでの他の調査区、他遺跡との関係は富沢遺跡平面図Ａ及びＢに位置付けをして把握する。



第13図　座標軸・国土基本図における富沢遺跡位置図

尚、この道路台帳平面図の基準点については当遺跡が軟弱な地盤に立地していることから誤差が生じていることもあり、基準点の正確な位置の確認あるいは新たな基準点を道路台帳平面図に記入することを今後行なわなければならない。また道路台帳平面の枠外の調査区については何らかの方法で座標系の中に位置付ける作業が必要とされる。

注）　１．測量法（昭和24年法律第188号）第11条第２号　　２．仙台市　1985　国土基本図
　　３．宮城県　1971　仙塩広域都市計画図

第４章　調査の方法と調査概要

第１節　調査区の設定

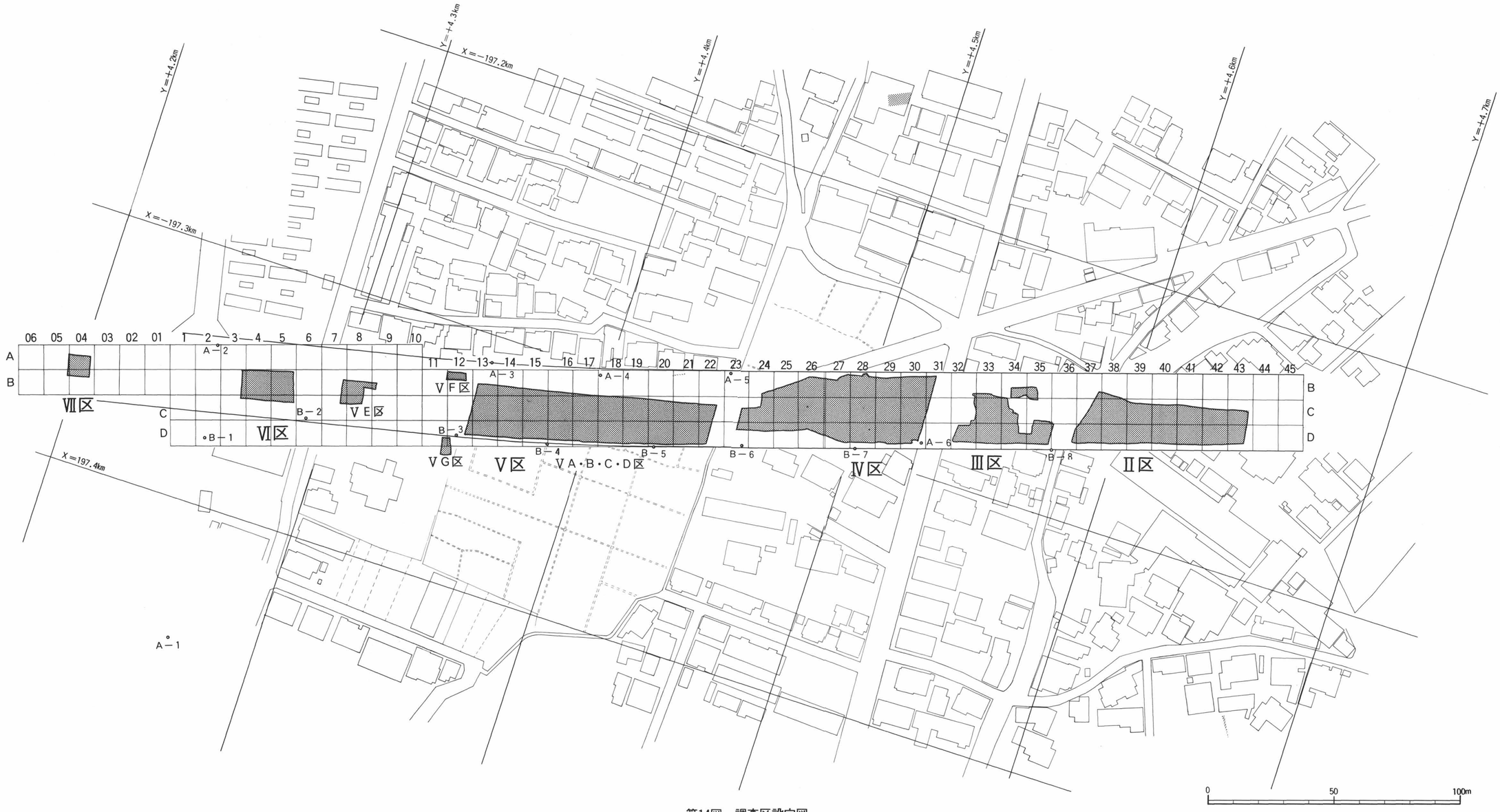
１．調査区の設定

富沢遺跡第15次調査の対象地区は、仙台市長町５丁目・長町６丁目・長町南３丁目地内における仙台市都市計画道路長町折立線建設予定地であり、南北幅30m、東西長約600mの面積約18,000m²の範囲である。ここには南北方向の生活道路がいくつか通っており、それをもとにⅠ～Ⅶ区の調査区を設定した。この中で昭和60年３月の試掘調査の結果、Ⅰ区には遺構の存在が確認されなかったため、昭和60年４月からⅡ区～Ⅶ区の調査が行なわれた。

Ⅱ～Ⅶ区の調査区とグリットの関係は第14図に示した。第15次調査の対象地区のほとんどは道路台帳平面図の作成範囲外であるため、調査区の平面直角座標系Ｘへの位置づけは、仙台市道路部作成の三・四・五五長町折立線平面図（Scale 1：500、平面直角座標系Ｘを使用）を使用して以下のように行なった。三・四・五五長町折立線平面図にはＡ－１から６、Ｂ－１から８までの基準点が設けられている。そこでこれら基準点の座標・標高の測量をハセベ設計との委託契約によって行なった。基準点の座標・標高は下記の通りである。

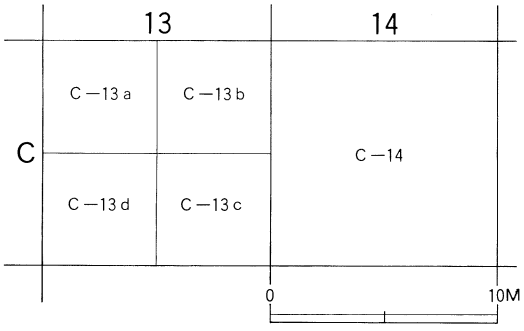
Ａ－１	Ｘ＝－197453.234M	Ｙ＝＋4266.168M	標高＝10.596M
2	Ｘ＝－197337.671M	Ｙ＝＋4249.549M	標高＝10.666M
3	Ｘ＝－197310.836M	Ｙ＝＋4354.765M	標高＝10.897M
4	Ｘ＝－197302.131M	Ｙ＝＋4397.188M	標高＝10.874M
5	Ｘ＝－197285.246M	Ｙ＝＋4446.230M	標高＝11.062M
6	Ｘ＝－197287.742M	Ｙ＝＋4526.182M	標高＝11.191M
Ｂ－１	Ｘ＝－197373.778M	Ｙ＝＋4255.850M	標高＝10.898M
2	Ｘ＝－197354.217M	Ｙ＝＋4291.548M	標高＝10.564M
3	Ｘ＝－197342.196M	Ｙ＝＋4350.196M	標高＝10.853M
4	Ｘ＝－197333.870M	Ｙ＝＋4385.485M	標高＝10.262M
5	Ｘ＝－197321.851M	Ｙ＝＋4426.194M	標高＝10.374M
6	Ｘ＝－197310.405M	Ｙ＝＋4459.450M	標高＝11.262M
7	Ｘ＝－197297.800M	Ｙ＝＋4501.772M	標高＝11.395M
8	Ｘ＝－197274.193M	Ｙ＝＋4576.251M	標高＝11.084M

グリッドの基準点はＢ－８とし、Ｂ－８とＢ－７とを結んだ線の延長を基準線とした。東西方向は基準線の北側へ10m毎に等間隔で４本平行させ、南北方向については基準点から10m毎


Y=+4.2km
Y=+4.3km
Y=+4.4km
Y=+4.5km
Y=+4.6km
Y=+4.7km
X=−197.3km
X=−197.2km
X=197.4km
06 05 04 03 02 01 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45
A
B
C
D
A−1
A−2
A−3
A−4
A−5
A−6
B−1
B−2
B−3
B−4
B−5
B−6
B−7
B−8
Ⅶ区
Ⅵ区
Ⅴ区
Ⅳ区
Ⅲ区
Ⅱ区
ⅤF区
ⅤE区
ⅤG区
ⅤA・B・C・D区
0
50
100m

第14図　調査区設定図

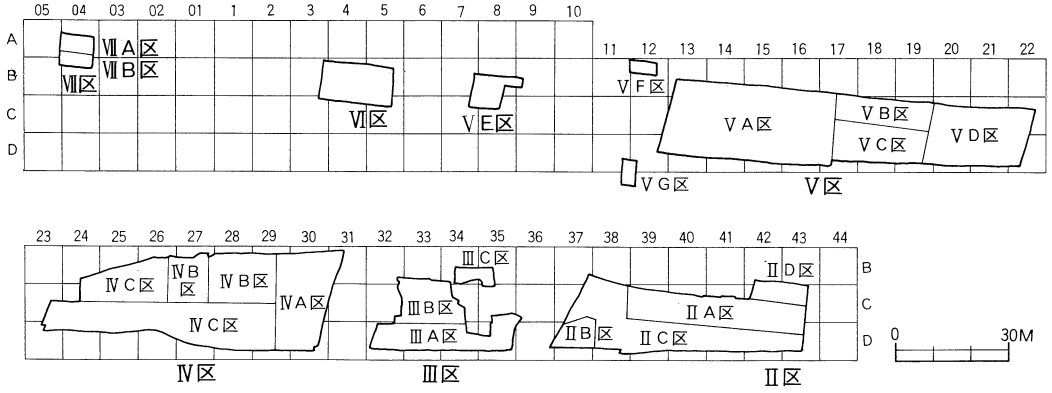
に等間隔で基準線と直交させ、調査対象地区を範囲として東西510m、南北30mの10mメッシュのグリッドを組んだ。グリッドの名称は各ライン間を東西方向では西から06～01・1～45、南北方向では北から南へA・B・C・Dとし、各グリッドは南北・東西ライン間の記号・数値により示した。またこれらの各グリッドにはさらに5m四方の小グリッドを設け第15図のように北西のグリッドから時計まわりにa・b・c・dとした。尚、B－8とB－7を結んだ基準線の方向はN－72°－Eである。



第15図　グリッドの名称

2．各区の分割区と名称

第15次調査ではVI区を除いてII・III・V・VII区の調査は第16図のように分割して行なわれた。これは調査が市街地で行なわれていることから排土を円滑に行なうことなど調査の都合上取られた方法であった。このため各調査区の写真は分割区毎に撮影されることになった。また、第4章以下の本文においては特に分割区の名称を用いない限り各調査全体を示すものである。しかし、V区においてはVE区、VF区、VG区はそれぞれ独立して記述し、V区とした場合にはVA～VD区全域を示すものとする。



第16図　調査区の分割区と名称

第2節　基　本　層　序

1．II区の層序

基本的な層は大別して23層確認している。基盤となる砂礫層が東から西に向かい深くなっており、層数も西側で多くなる。38ライン上に通る溝および攪乱のため東西の層の対比が困難な部分があり単独層となるものがある。上部層は砂質シルト・シルトで構成され下部では粘土及び粘土質シルトとなっている。他の区に較べ砂層の入る部分が多い。

1　層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。客土？

2 a層：10Y4/1 灰色粘土質シルト。旧水田耕作土。

2 b層：10YR5/6 黄褐色砂質シルト。酸化鉄集積層。

3　層：7.5Y6/1 灰色シルト。酸化鉄をしもふり状にマンガン粒を全体に含む。

4 a層：7.5Y5/1 灰色シルト。酸化鉄・炭化物を含む。

4 b層：7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト。4a 層に較べて若干明るい。

4 c層：2.5Y6/2 灰黄色シルト。酸化鉄・マンガン粒を全体に含む。

4 d層：10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト。酸化鉄・マンガン粒・凝灰岩粒を含む。

4 e層：2.5Y5/2 暗灰黄褐色シルト。酸化鉄・マンガン粒・凝灰岩粒を含む。

5　層：7.5Y6/2 灰オリーブ色粗砂。部分的に砂質シルトを狭む。

6 a層：2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト。層全体に酸化鉄を含む。炭化物を少量含む。

6 b層：7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト。酸化鉄・炭化物を含む。

6 c層：10YR6/2 にぶい黄橙色砂質シルト。砂粒・マンガン粒を含む。

6 d層：5 YR4/4 にぶい赤褐色砂質シルト。酸化で全体的に赤い。

6 e層：5 Y7/1 灰白色砂質シルト。酸化鉄粒を含む。

7　層：5 GY5/1 暗オリーブ灰色砂質シルト。砂をブロック状に含む。炭化物を少量含む。

8 a層：5 Y4/2 灰オリーブ色粘土。植物遺体を少量含む。

8 b層：2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト。酸化鉄・炭化物を含む。

9　層：5 Y2/2 オリーブ黒色粘土。植物遺体を含む。

10　層：7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土。酸化鉄・植物遺体を含む。

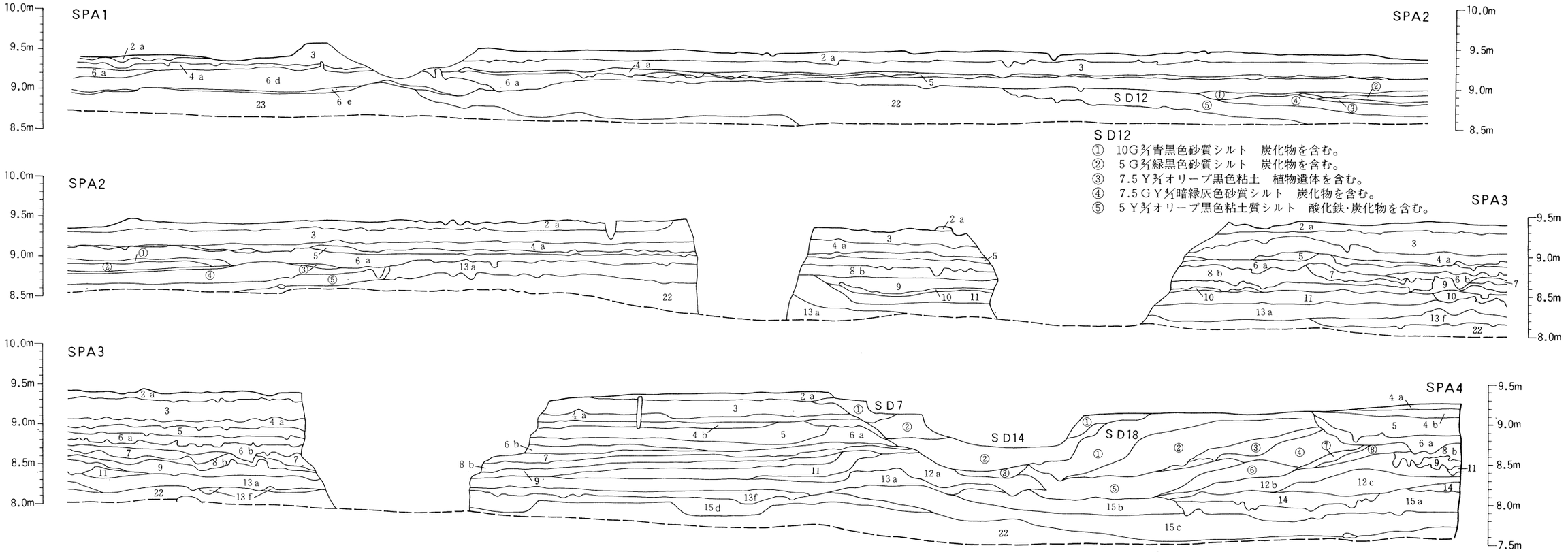
11　層：2.5Y4/3 オリーブ褐色微砂。植物遺体を含む。

12 a層：2.5GY4/1 暗オリーブ灰色砂質シルト。酸化鉄・植物遺体を含む。

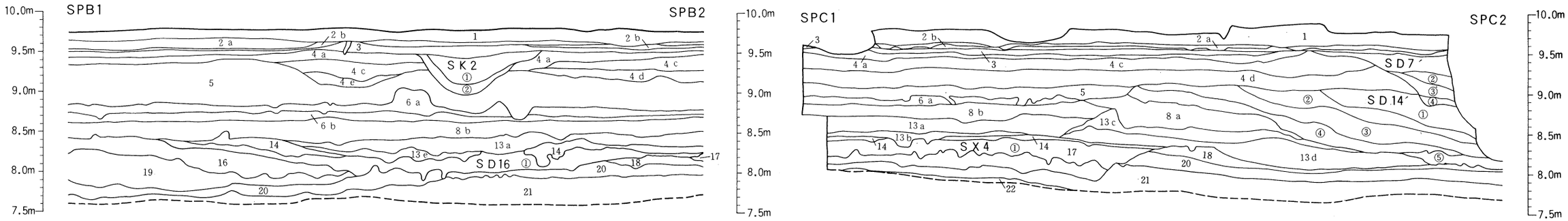
12 b層：5 Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト。細砂を含む。

12 c層：7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト。炭化物・植物遺体を含む。

13 a層：7.5Y4/1 灰色粘土質シルト。酸化鉄・炭化物を少量含む。



SD12
① 10G5/1青黒色砂質シルト　炭化物を含む。
② 5G5/1緑黒色砂質シルト　炭化物を含む。
③ 7.5Y5/1オリーブ黒色粘土　植物遺体を含む。
④ 7.5GY4/1暗緑灰色砂質シルト　炭化物を含む。
⑤ 5Y5/1オリーブ黒色粘土質シルト　酸化鉄・炭化物を含む。



SD7
① 7.5Y5/1灰色シルト　マンガン粒・酸化鉄を含む。
② 10YR5/2灰黄褐色シルト　酸化鉄を全体に少量含む。

SD14
① 5Y5/2灰オリーブ色シルト　酸化鉄を全体に含む。
② 7.5GY5/1緑灰色粘土質シルト　炭化物・粗砂を含む。
③ 5Y5/3暗オリーブ砂質シルト　粗砂・炭化物含む。

SD18
① 5GY5/1暗オリーブ灰色粘土質シルト　木片・酸化鉄を含む。
② 5Y5/1灰色砂質シルト　下部はやや粘土質。
③ 2.5Y5/3暗灰黄色粘土質シルト　酸化鉄を含む。
④ 2.5GY5/1暗オリーブ灰色粘土質シルト　炭化物を含む。
⑤ 7.5Y3/2オリーブ黒色粘土質シルト　木片・粗砂を含む。
⑥ 2.5Y5/3黄褐色細砂　酸化鉄・植物遺体を含む。
⑦ 10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト　酸化鉄・炭化物を含む。
⑧ 7.5Y4/1灰色粘土質シルト　炭化物・植物遺体を含む。

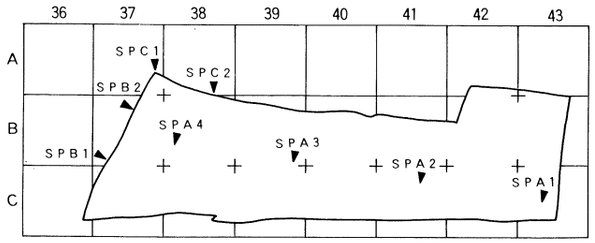
SK2
① 2.5Y5/3暗灰黄色シルト　酸化鉄・炭化物を含む。
② 2.5Y5/3暗灰黄色砂質シルト　酸化鉄を含む。

SD16
① 2.5GY5/1オリーブ灰色砂質シルト　下部に細砂有り。

SX4
① 7.5Y5/1灰色シルト　酸化鉄・炭化物・植物遺体含む。

SD7
① 10YR5/4にぶい黄褐色シルト　酸化鉄・小礫を含む。
② 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト　酸化鉄・炭化物を含む。
③ 2.5Y5/4黄褐色砂　酸化鉄・木片を含む。
④ 5Y5/4オリーブ黄色砂質シルト　酸化鉄を含む。

SD14
① 2.5Y5/3暗灰黄色シルト。
② 2.5Y5/4にぶい黄色シルト　植物遺体を少量含む。
③ 2.5Y5/3黄褐色シルト　酸化鉄を含む。
④ 2.5Y5/4にぶい黄色砂　木片を含む。
⑤ 2.5Y5/6オリーブ褐色砂質シルト　上面に足跡有り。



第17図　Ⅱ区セクション図

13b層：5 Y4/1 灰色砂質シルト。酸化鉄・炭化物を含む。

13c層：2.5Y3/1 黒褐色粘土。植物遺体を含む。

13d層：5 Y4/2 灰オリーブ色シルト。植物遺体を含む。

13e層：2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト。酸化鉄・植物遺体を含む。

13f層：10YR4/1 灰色砂質シルト。酸化鉄を斑に含む。粗砂を若干含む。

14　層：10Y4/1 灰色細砂。粘土質シルト・炭化物をスジ状に含む。

15a層：10YR3/1 黒褐色粘土。炭化物・植物遺体を含む。

15b層：7.5YR3/1 黒褐色粘土。植物遺体・砂を含む。

15c層：10YR3/1 黒褐色粘土。植物遺体・炭化物を含む。

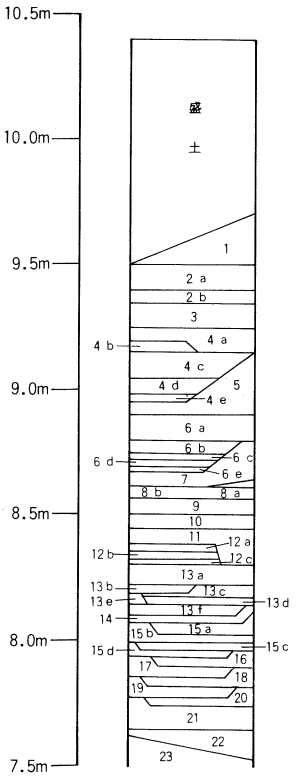
15d層：5 Y3/1 オリーブ黒色粘土。酸化鉄・植物遺体を含む。

16　層：10Y3/1 オリーブ黒色シルト。植物遺体・炭化物を含む。

17　層：2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト。

18　層：5 GY2/1 オリーブ黒色粘土。細砂・灰白色シルトを若干含む。

19　層：10Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト。砂をブロック状に含む。



第18図　Ⅱ区基本層序模式図

20　層：7.5Y2/2 オリーブ黒色粘土。植物遺体・炭化物を含む。

21　層：7.5Y3/1 黒色粘土質シルト。凝灰岩粒・炭化物を含む。

22　層：2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂。

23　層：10YR5/6 黄褐色細砂。

2．Ⅲ区の層序

Ⅲ区の基本的な層序は1a～7層のシルト～粘土質シルト層、8a～12f層の粘土～粘土質シルト層に大別される。大別層の形成要因については、8a層より下の各層は主に泥炭の形成と河川による粘土・シルトの供給により形成された層であり、7層より上の各層は主に河川による粘土・シルトの供給により形成された層である。

1a層：10YR 4/2 灰黄褐色シルト。旧水田耕作土。

1b層：2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト。旧水田耕作土。

1c層：2.5Y 4/1 黄灰色シルト。層中酸化鉄・マンガン斑を含む。

1d層：2.5Y 7/3 浅黄色シルト。層中酸化鉄・マンガン斑を含む。

1e層：2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト。層中に酸化鉄・マンガン斑を含む。

2a層：2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト。層中に酸化鉄を含む。

2 b層：2.5Y 4/1 黄灰色シルト。層中に酸化鉄・マンガン斑を含む。

3 a層：2.5Y 7/3 浅黄色シルト。層中に酸化鉄・マンガン斑を含む。

3 b層：2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト。層中に酸化鉄・マンガン斑を含む。また黒褐色粘土をブロック状に含む。

4　層：2.5Y 5/1 黄灰色粘土質シルト。黄灰色土、泥炭が互層に入っている。

5　層：2.5Y 6/1 黄灰色粘土質シルト。層中に酸化鉄・マンガン斑・炭化物を含む。

6　層：2.5Y 5/1 黄灰色粘土質シルト。層中に酸化鉄・マンガン斑を含む。

7　層：2.5GY 8/1 灰白色粘土質シルト。層中に酸化鉄を含む。泥炭と互層になる。

8 a層：5 Y 5/1 灰色粘土。層中に酸化鉄・炭化物を含む。

8 b層：7.5Y 5/1 灰色粘土。層中に酸化鉄・マンガン斑・炭化物を含む。

8 c層：10GY 7/1 明緑灰色粘土。層中に酸化鉄・マンガン斑・炭化物を含む。

8 d層：10Y 5/1 灰色粘土。層中に酸化鉄・炭化物を含む。

9 a層：7.5GY 7/1 明緑灰色粘土質シルト。層中に酸化鉄・炭化物を含む。

9 b層：7.5GY 7/1 明緑灰色粘土質シルト。層中に酸化鉄・炭化物を含む。泥炭と互層。

9 c層：7.5GY 7/1 明緑灰色粘土質シルト。層中に酸化鉄・炭化物を含む。

9 d層：7.5GY 6/1 緑灰色砂質シルト。層中に酸化鉄・炭化物をやや含む。

9 e層：7.5GY 7/1 明緑灰色粘土質シルト。層中に酸化鉄・炭化物を含む。泥炭と互層。

10　層：2.5Y 6/4 にぶい黄色砂。部分的に酸化の度合いが強い。

11 a層：2.5Y 6/4 にぶい黄色砂質シルト。若干の炭化物を互層に含む。

11 b層：5 G 7/1 明緑灰色シルト。炭化物が細かく互層。

12 a層：2.5GY 5/1 オリーブ灰色粘土質シルト。泥炭と互層。

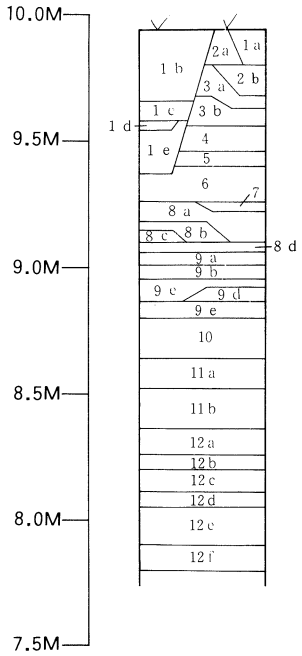
12 b層：10YR 1.7/1 黒色粘土。植物遺体の分解があまり進んでいない泥炭層である。

12 c層：7.5Y 7/2 灰白色粘土。植物遺体をかなり含んでおり、泥炭と互層になる。

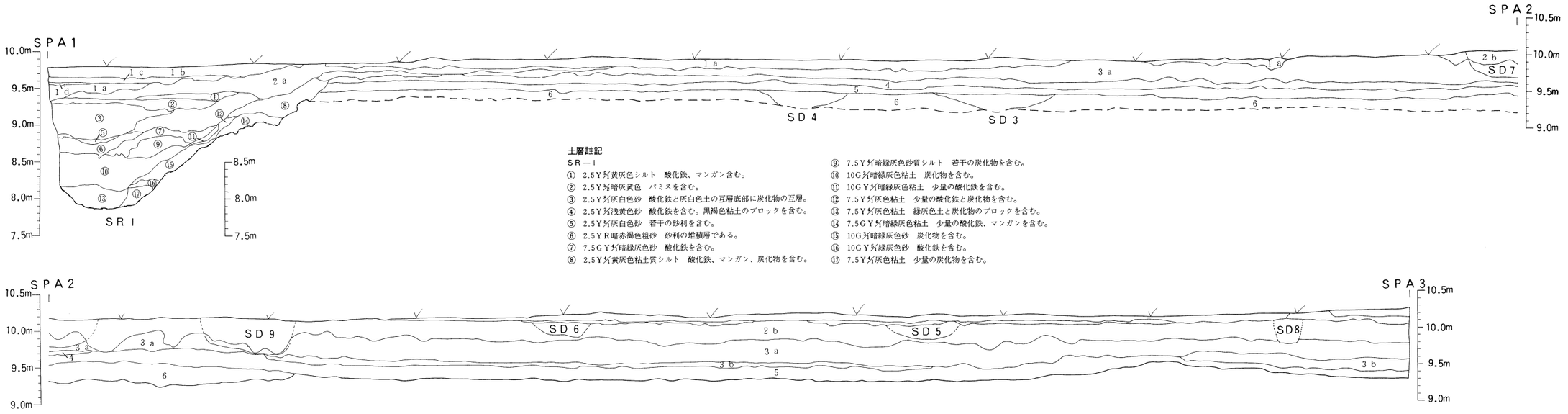
12 d層：10YR 1.7/1 黒色粘土。植物遺体の分解があまり進んでいない泥炭層である。

12 e層：2.5GY 6/1 オリーブ灰色粘土。泥炭と互層になる。

12 f層：2.5GY 7/1 明オリーブ灰色粘土。泥炭と互層になる。



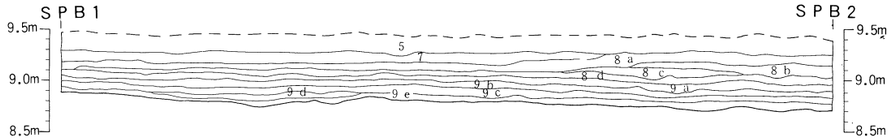
第19図　Ⅲ区基本層序模式図

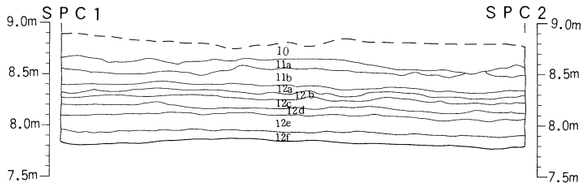


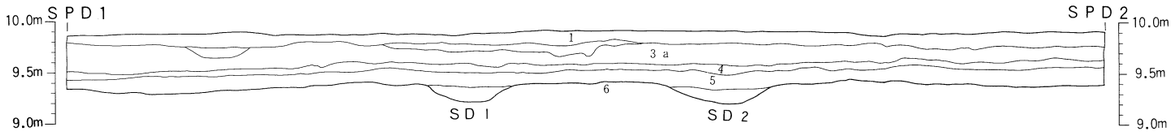
土層註記

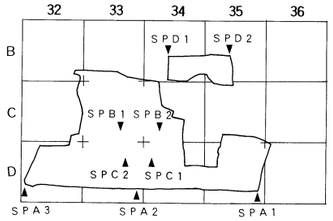
SR－I

① 2.5Y⅔黄灰色シルト　酸化鉄、マンガン含む。
② 2.5Y⅔暗灰黄色　パミスを含む。
③ 2.5Y⅔灰白色砂　酸化鉄と灰白色土の互層底部に炭化物の互層。
④ 2.5Y⅔浅黄色砂　酸化鉄を含む。黒褐色粘土のブロックを含む。
⑤ 2.5Y⅔灰白色砂　若干の砂利を含む。
⑥ 2.5YR暗赤褐色粗砂　砂利の堆積層である。
⑦ 7.5GY⅔暗緑灰色砂　酸化鉄を含む。
⑧ 2.5Y⅔黄灰色粘土質シルト　酸化鉄、マンガン、炭化物を含む。
⑨ 7.5Y⅔暗緑灰色砂質シルト　若干の炭化物を含む。
⑩ 10GY⅔暗緑灰色粘土　炭化物を含む。
⑪ 10GY⅔暗緑灰色粘土　少量の酸化鉄を含む。
⑫ 7.5Y⅔灰色粘土　少量の酸化鉄と炭化物を含む。
⑬ 7.5Y⅔灰色粘土　緑灰色土と炭化物のブロックを含む。
⑭ 7.5GY⅔暗緑灰色粘土　少量の酸化鉄、マンガンを含む。
⑮ 10G⅔暗緑灰色砂　炭化物を含む。
⑯ 10GY⅔緑灰色砂　酸化鉄を含む。
⑰ 7.5Y⅔灰色粘土　少量の炭化物を含む。









第20図　Ⅲ区セクション図

3．Ⅳ～Ⅶ区の層序

Ⅳ～Ⅶ区の基本的な層序は１・2a・2b層のシルト質粘土層、3a～7a層の粘土層、7b～31層の泥炭質粘土層、32a～33層の粘土～砂質粘土層、34層の砂層、35層の砂礫層に大別される。これらの大別層の形成要因については、砂礫層は主に広瀬川・名取川による砂礫の供給の結果形成された層であり、32a～34層の粘土～砂質粘土層及び砂層は二ツ沢あるいは金洗沢起源の流路堆積物と考えられる。また7b～31層の泥炭質粘土層は、主に泥炭の形成と河川による粘土の供給が交互に繰り返し行なわれた結果形成された層である。この泥炭質粘土層の細分は次のように行なっている。泥炭質粘土層には、分解が進み本来の層相を呈さない層が存在する。これを泥炭質粘土層Ａとする。また泥炭と粘土の細かな層が互層になっているものを泥炭質粘土層Ｂとし、主に泥炭の単層を泥炭質粘土層Ｃ、主に河川供給物より成る粘土の単層を泥炭質粘土層Ｄとする。また3a～7a層の粘土層は河川による粘土の供給により形成された層である。各層の層相は以下の通りである。

１　層：10YR 5/1褐灰色シルト層粘土。層中に酸化鉄斑が認められ砂粒を含む。旧水田耕作土。

２ａ層：５Ｙ5/1灰色シルト質粘土。この層の最上部には酸化鉄の集積層が認められる。層中に酸化鉄マンガン斑が認められ、砂粒と小礫（径2～3mm）を含む。旧水田耕作土。

２ｂ層：2.5Y 5/1黄灰色粘土。層中にはマンガン斑が少量・酸化鉄が多量に認められる。旧水田耕作土。

３ａ層：10YR 4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。この層はⅣ区のほぼ全域に分布し、Ⅴ区以西には分布しない。

３ｂ層：10YR 3/1黒褐色シルト質粘土。この層の最上部には酸化鉄の集積層が認められる。また層中にはわずかにマンガン斑が認められる。この層の分布はⅤ区以東であり、VE区以西には認められない。Ⅴ区では中世水田跡の水田土壌。

４ａ層：10YR 3/1黒褐色粘土。この層はⅦ区においてのみ分布する。

４ｂ層：10YR 6/1褐灰色シルト質粘土。層中に酸化鉄・マンガン斑がわずかに認められる。この層はⅣ～Ⅶ区の全域に分布する。Ⅴ区では平安時代水田跡の水田土壌。Ⅳ区ではこの層の上面に灰白色火山灰の認められるところがある。

５ａ層：2.5Y 5/1黄灰色粘土。層中に酸化鉄・マンガン斑がわずかに認められる。この層の上面には灰白色火山灰が認められる。この層はⅣ～Ⅶ区の全域に分布し、Ⅳ区・Ⅴ区では平安時代水田跡の水田土壌。

５ｂ層：10YR3/1黒褐色粘土。10YR6/2灰黄褐色粘土と黒色粘土と互層。植物遺体を少量含む。

６　層：10YR 6/1褐灰色粘土。粘性が極めて強い。層中に酸化鉄が多量に認められる。またマンガン斑も認められる。層中には砂粒を多量に含む。この層はⅣ区・Ⅴ区に分布する。

Ⅴ区では平安時代水田跡の水田土壌。

7 a層：10YR 4/1 褐灰色粘土。層中には暈管状鉄とわずかにマンガン斑が認められる。炭を含む。また浅黄色粘土をブロック状に部分的に含む。この層はⅤ区全域とⅣ区西半部に分布刷る。Ⅴ区では古墳時代水田跡の水田土壌。

7 b層：2.5Y 5/1 黄灰色粘土。泥炭質粘土層A。暈管状鉄が認められる。浅黄色粘土をブロック状に含む。この層はⅤ区東半部からⅣ区にかけて分布している。

7 c層：10YR 4/1 褐灰色粘土。泥炭質粘土層A。この層はⅤ区東半部では部分的な分布を示すがⅣ区では全域に分布している。

8　層：10YR 5/1 褐灰色粘土。泥炭質粘土層B。10YR 6/2 灰黄褐色粘土と黒色粘土と互層になる。暈管状鉄が認められる。部分的に層の中位に泥炭質粘土層Aが介在する。この場合、この層を8－1層とし、上位の層を8－1層、下位の層を8－3層とする。この層はⅣ～Ⅶ区の全域に分布する。

9 a層：10YR 6/2 灰黄褐色粘土。泥炭質粘土層A。酸化鉄がわずかに認められる。この層はⅥ区を除き他の調査区全域に認められる。弥生時代十三塚式期水田跡の水田土壌。

9 b層：10YR3/2 黒褐色粘土。泥炭質粘土層B。10YR6/2 灰黄褐色粘土と黒色粘土と互層になる。Ⅵ区にのみ分布。9a 層水田跡の非耕作域。

10 a層：10YR 3/1 黒褐色粘土。泥炭質粘土層B。10YR 7/2 にぶい黄橙色粘土と黒色粘土と互層になる。全体的に分解度は低いが部分的に高い所が見られる。層中に酸化鉄がわずかに認められる。この層はⅣ～Ⅶ区の全域に分布している。

10 b層：5 Y 3/1 オリーブ黒色粘土。泥炭質粘土層A。弥生時代桝形囲式期以降、十三塚式期以前の水田土壌。この層はⅦ区にのみ分布する。

11 a層：5 Y 5/1 灰色粘土。泥炭質粘土層A。分解度が高い。暈管状鉄が認められる。この層はⅣ～Ⅶ区の全域に分布している。弥生時代桝形囲式期水田跡の水田土壌。

11 b層：2.5Y 5/2 暗灰黄色粘土。泥炭質粘土層D。この層はⅣ区とⅥ区に分布する。

12　層：7.5YR 4/1 褐灰色シルト質粘土。泥炭質粘土層A。10YR 5/2 灰黄褐色粘土を少量含む。分解度が高い。この層はⅣ区とⅥ区に分布する。弥生時代桝形囲式期以前の水田跡の水田土壌。

13 a層：2.5Y 5/1 黄灰色シルト質粘土。泥炭質粘土層D。

13 b層：10YR 4/1 褐灰色粘土。泥炭質粘土層A。13 c 層をブロック状に含む。分解度はさほど高くない。弥生時代桝形囲式期以前の水田跡の水田土壌。

13 c層：2.5Y 3/1 黒褐色粘土。泥炭質粘土層B。2.5Y 4/1 黄灰色粘土と互層になる。

13　層：Ⅴ区以西には13 b 層が存在しないためⅤ～Ⅶ区では、13 a ・13 b を13層としている。

2.5Y 5/2 暗灰黄色粘土。泥炭質粘土層B。黒色粘土と互層になる。

14層～34の各層はⅣ～Ⅶ区の全域に分布する。

14a 層：2.5Y 6/1 黄灰色粘土。泥炭質粘土層B。黒色粘土と互層になる。

14b 層： 5 Y 6/2 灰オリーブ砂質粘土。泥炭質粘土層B。黒色粘土と互層になる。

15　層：10YR 3/1 黒褐色粘土。泥炭質粘土層B。10YR 6/2 灰黄褐色粘土と互層になる。

16a 層：10YR 4/1 褐灰色粘土。泥炭質粘土層A。細かな植物遺体を含む。分解度は高い。層中に16b 層中の灰白色粘土を径2～5cmでブロック状に含む。16b 層を起源とし、植物遺体の分解が進んだ結果形成された層と考えられる。断面では16b 層と交互に見られる。

16b 層：2.5Y 3/1 黒褐色粘土。泥炭質粘土層B。黒色粘土と 5 Y 7/2 灰白色粘土と互層になる。16a 層との境界は不明瞭であり、その付近では縞状の層がそのまま上方へやや移動している状況が認められるところもある。

17層：2.5Y 2/1 黒色粘土。泥炭質粘土層B。2.5Y 7/2 灰黄色粘土と部分的に互層になる。

18層：10Y 6/1 灰色粘土。泥炭質粘土層D。

19層：2.5Y 3/1 黒褐色粘土。泥炭質粘土層B。黒色粘土と10YR 6/2 灰黄褐色粘土と互層。

20層：2.5Y 6/2 灰黄色粘土。泥炭質粘土層B。黒色粘土と互層になる。

21層： 5 GY 7/1 明オリーブ灰色砂質粘層B。10YR 3/1 黒褐色粘土と互層になる。

22層：10YR 1.7/1 黒色粘土。泥炭質粘土層C。

23層：10YR 3/1 黒褐色粘土。泥炭質粘土層B。黒色粘土と10YR 5/2 灰黄褐色粘土と互層。

24層：2.5YR 5/2 暗灰黄色粘土。泥炭質粘土層D。

25層：10YR 1.7/1 黒色粘土。泥炭質粘土層C。

26層：10YR 4/1 褐灰色粘土。泥炭質粘土層B。黒色粘土と2.5Y 6/2 灰黄色粘土と互層。

27層：10YR 2/1 黒色粘土。泥炭質粘土層C。

28層：10YR 4/1 褐灰色粘土。泥炭質粘土層B。黒色粘土と 5 Y 7/2 灰白色粘土と互層。

29層：2.5Y 2/1 黒色粘土。泥炭質粘土層C。部分的に灰色粘土が縞状に入る。

30層：N 4/1 灰色粘土。泥炭質粘土層B。黒色粘土と 5 Y 7/2 灰白色粘土と互層になる。

31層：2.5Y 2/1 黒色粘土。泥炭質粘土層C。下部にいくに従い分解度がやや高い。この層中に水平に堆積した火山灰層が存在する。

32a 層：10YR 3/1 黒褐色粘土。径2～5cm の礫を少量含む。植物遺体を含む。

32b 層：10YR 5/1 褐灰色砂質粘土。径2～10cm の礫を少量含む。植物遺体をわずかに含む。

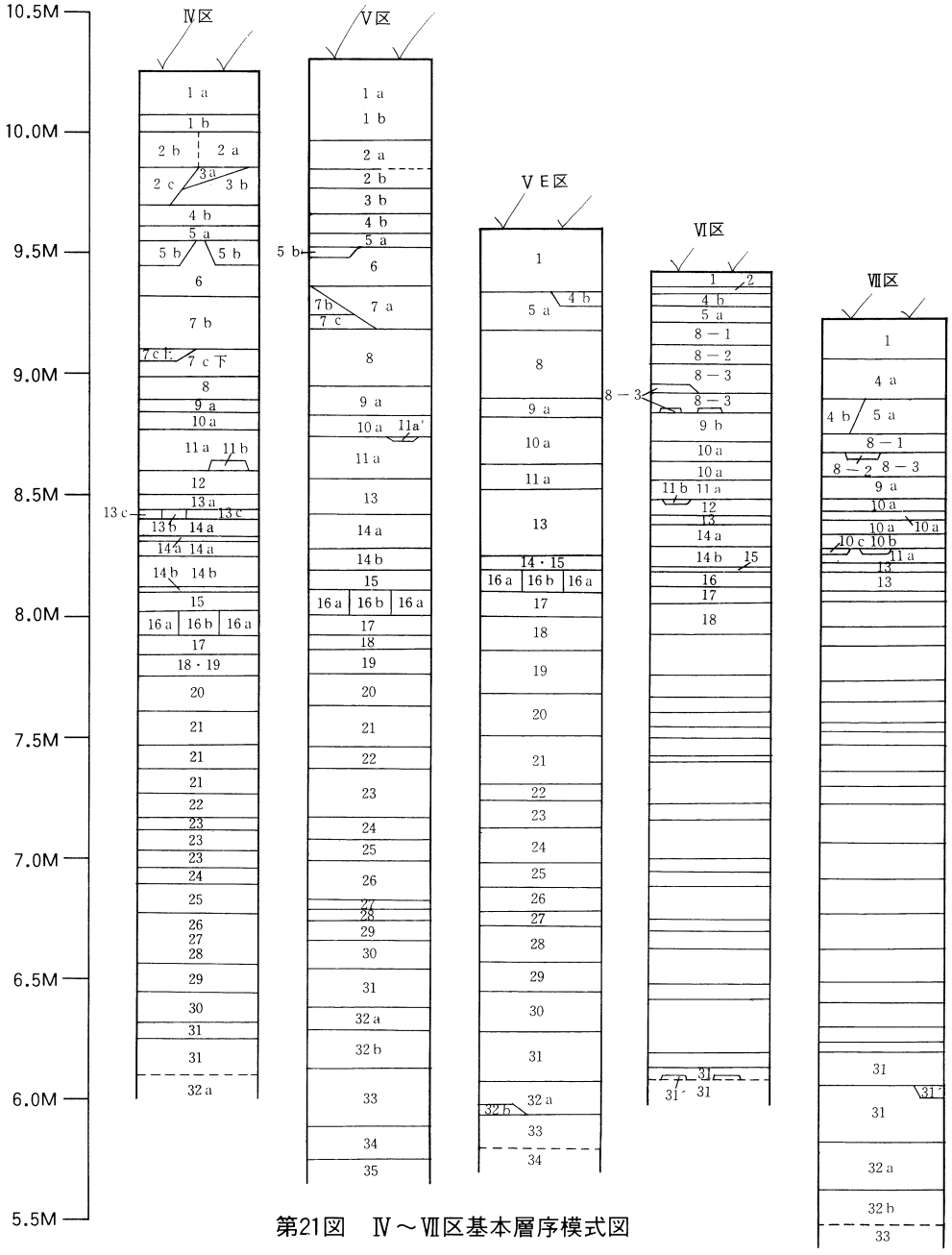
33層：2.5Y 3/1 黒褐色砂質粘土。径2～6cm の礫を少量含む。植物遺体をわずかに含む。

34層：2.5GY 6/1 オリーブ灰色砂。径2～4cm の礫を少量含む。灰色粘土をわずかに含む。灰色

粘土をわずかに含む。V区ではこの層は砂礫層の標高の高い部分には認められない。

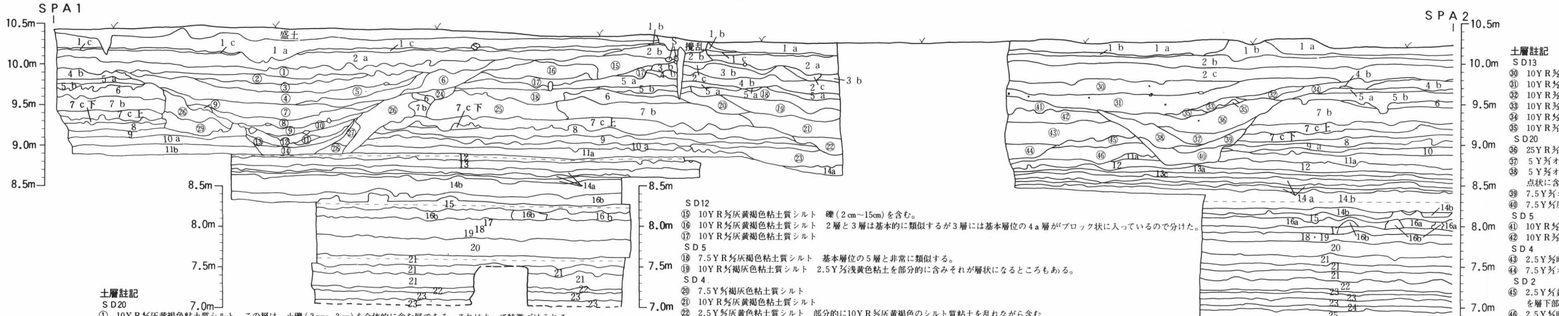
35　層：砂礫層。

尚、ＶＥ区・VI区・Ⅶ区の調査では砂礫層の上面が確認されていないが、34層上面が確認されている。ボーリング調査の結果ではＶＥ区以西では砂礫層の上面の標高が急に低くなっており、砂層の厚い堆積が認められることから、ＶＥ区の34層以下の層は基本的には34層の層相変化・層厚変化と理解している。



第21図　Ⅳ～Ⅶ区基本層序模式図

Ⅳ区南壁セクション図



土層註記

SD20
① 10YR5/6黄褐色粘土質シルト　この層は、小礫(3mm～3cm)を全体的に含む層である。これによって特徴づけられる。
② 2.5Y5/4黄灰色シルト質粘土　礫(1cm前後)をまばらに含む。
③ 10YR5/6黄褐色シルト質粘土　礫(3cm～10cm)を若干含む。層相は2a層に類似する。
④ 10YR5/6黄褐色シルト質粘土　この層の中央部には、時折10YR5/6黄褐色シルト質粘土が見られる。
⑤ 10YR5/6黄褐色シルト質粘土　層相は3a層と類似しているが3a層より若干グレーがかっている。
⑥ 2.5Y5/4黄灰色粘土質シルト
⑦ 10YR5/6黄褐色シルト質粘土　10YR5/6黄褐色のシルト質のブロック(1mm～3mmで不定形)を全体的にまばらに含んでおりこれによって特徴づけられる層である。ごくまれに直径3cmの礫を含む。
⑧ 2.5Y5/4黄灰色粘土　この層から未分解の植物遺体が認められるようになる。
⑨ 5Y5/8明褐色シルト質粘土　植物遺体を最も多く含む層である。
⑩ 10YR5/6明褐色シルト質粘土
⑪ 10YR5/6褐灰色シルト質粘土　8a層と8b層は10YR5/6黄褐色のシルトのブロックの多少によって分層される。8a層の方が多い。
⑫ 5BG5/1青灰色シルト質粘土　この層からグライ化が始まる。
⑬ 5G5/4緑灰色シルト質粘土　10a層と10b層を較べると10a層の方がやや明るく感じられるので分層した。
⑭ 10GY5/4緑灰色シルト質粘土

SD12
⑮ 10YR5/6黄褐色粘土質シルト　礫(2cm～15cm)を含む。
⑯ 10YR5/6黄褐色粘土質シルト　2層と3層は基本的に類似するが3層には基本層位の4a層がブロック状に入っているので分けた。
⑰ 10YR5/6黄褐色粘土質シルト

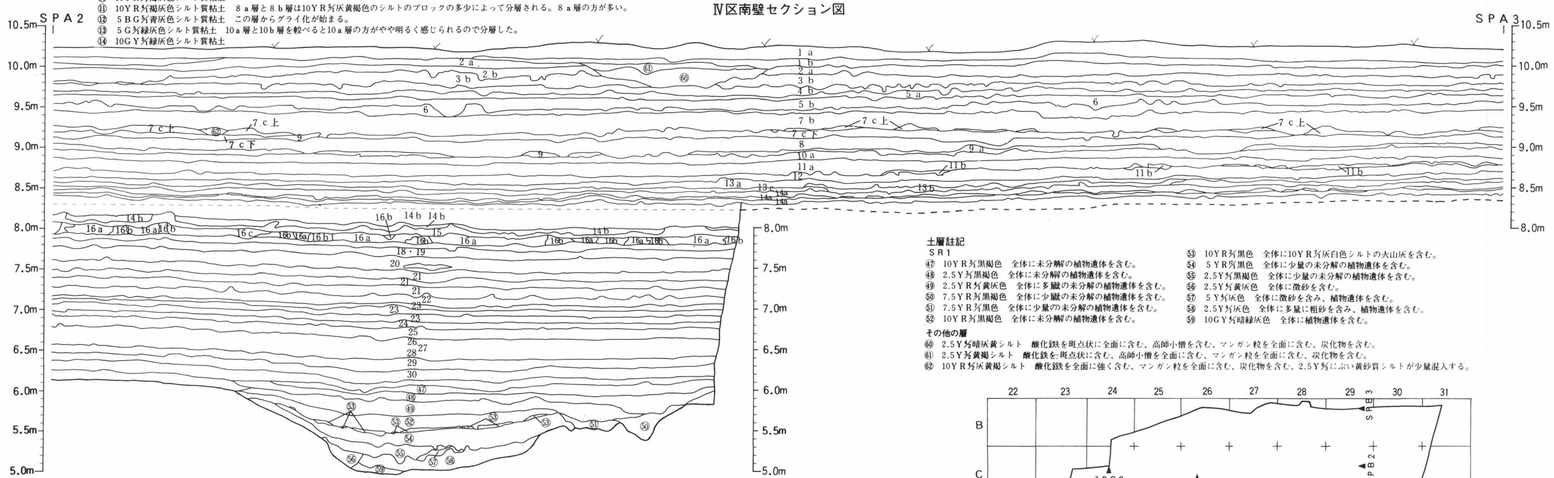
SD5
⑱ 7.5YR5/6黄褐色粘土質シルト　基本層位の5層と非常に類似する。
⑲ 10YR5/6褐灰色粘土質シルト　2.5Y3/3浅黄色粘土を部分的に含みそれが層状になるところもある。

SD4
⑳ 7.5YR5/6褐灰色粘土質シルト
㉑ 10YR5/6黄褐色粘土質シルト
㉒ 2.5Y5/6黄褐色粘土質シルト　部分的に10YR5/6黄褐色のシルト質粘土を乱れながら含む

SD2
㉓ 10YR5/6黒褐色粘土　植物遺体を多く含む、10YR4/6褐灰色粘土が乱れながら混合している層である。

その他の層
㉔ 10YR5/6黄褐色粘土質シルト
㉕ 10YR5/6にぶい黄橙色粘土質シルト　2.5Y5/4黄灰色粘土質シルトを非常に多く含みそれが部分的に横に走る所がある。
㉖ 10YR5/6黄褐色粘土質シルト　10YR5/6褐灰色粘土質シルト7.5YR5/6黄褐色粘土質シルトが斜に常状に走る。
㉗ 10BG5/1青灰色粘土質シルト　2.5GY5/1暗オリーブ灰色粘土質シルト、10YR5/6黄褐色粘土質シルトが混り合う層である。
㉘ 10G5/4緑灰色粘土質シルト　若干10YR5/6黄褐色粘土質シルトが見られそれによる汚れが認められる。
㉙ 10YR5/6褐灰色粘土質シルト　C層～F層までは、SD-2によって影響を受けた層ではないかと考えられる。

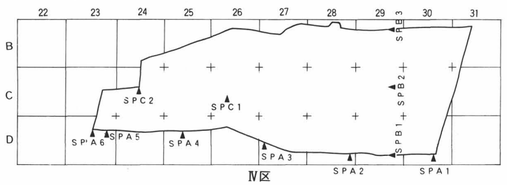
Ⅳ区南壁セクション図



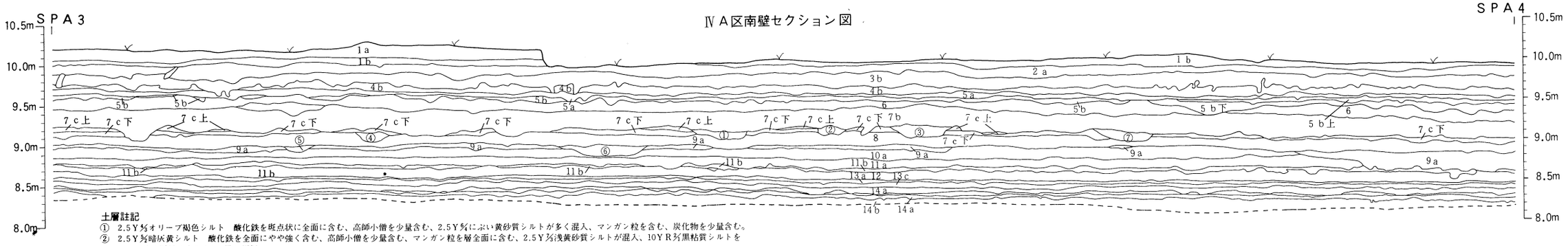
土層註記

SR1
㊼ 10YR3/1黒褐色　全体に未分解の植物遺体を含む。
㊽ 2.5Y3/2黒褐色　全体に未分解の植物遺体を含む。
㊾ 2.5YR4/4黄灰色　全体に多量の未分解の植物遺体を含む。
㊿ 7.5YR3/1黒褐色　全体に少量の未分解の植物遺体を含む。
(51) 7.5YR3/1黒色　全体に少量の未分解の植物遺体を含む。
(52) 10YR3/1黒褐色　全体に未分解の植物遺体を含む。
(53) 10YR3/1黒色　全体に10YR5/6黄灰白色シルトの火山灰を含む。
(54) 5YR3/1黒色　全体に少量の未分解の植物遺体を含む。
(55) 2.5YR3/1黒褐色　全体に少量の未分解の植物遺体を含む。
(56) 2.5Y4/4黄灰色　全体に微砂を含む。
(57) 5Y5/1灰色　全体に微砂を含み、植物遺体を含む。
(58) 2.5Y5/1灰色　全体に多量に粗砂を含み、植物遺体を含む。
(59) 10GY5/1緑灰色　全体に植物遺体を含む。

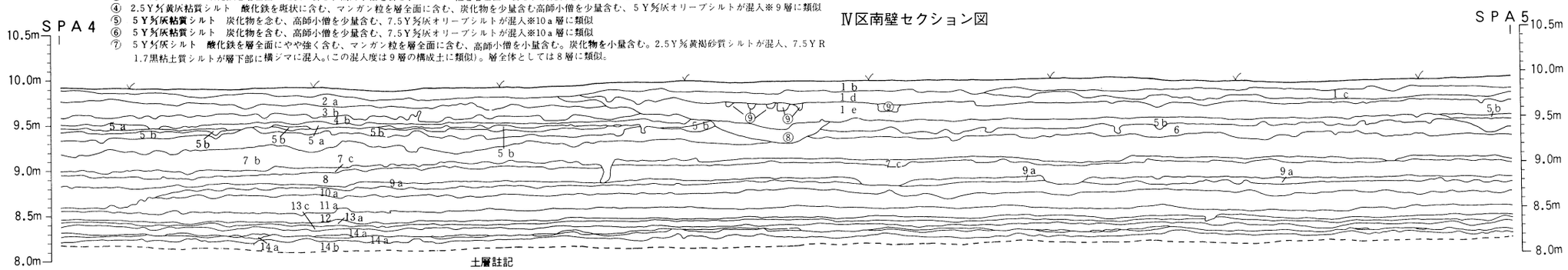
その他の層
(60) 2.5Y5/4暗灰黄シルト　酸化鉄を斑点状に全面に含む、高師小僧を含む、マンガン粒を全面に含む、炭化物を含む。
(61) 2.5Y5/3黄褐シルト　酸化鉄を斑点状に含む、高師小僧を全面に含む、マンガン粒を全面に含む、炭化物を含む。
(62) 10YR5/6黄褐シルト　酸化鉄を全面に強く含む、マンガン粒を全面に含む、炭化物を含む、2.5Y5/1にぶい黄砂質シルトが少量混入する。



第22図　Ⅳ～Ⅶ区セクション図（1）

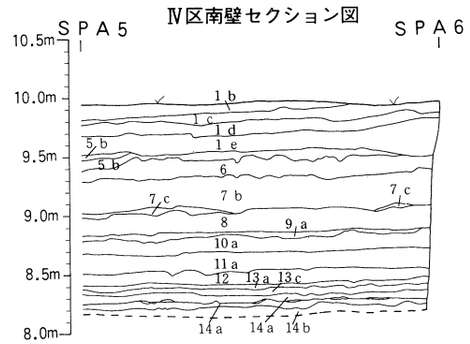


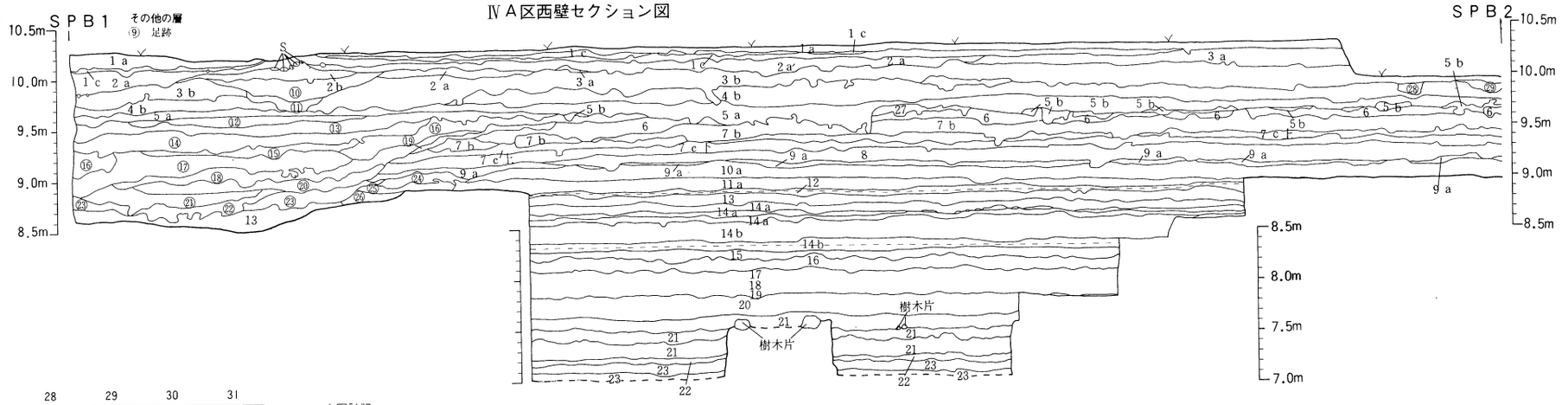
土層註記
① 2.5Y⅘オリーブ褐色シルト　酸化鉄を斑点状に全面に含む、高師小僧を少量含む、2.5Y⅘にぶい黄砂質シルトが多く混入、マンガン粒を含む、炭化物を少量含む。
② 2.5Y⅝暗灰黄シルト　酸化鉄を全面にやや強く含む、高師小僧を少量含む、マンガン粒を層全面に含む、2.5Y⅞浅黄砂質シルトが混入、10YR⅔黒粘質シルトを横ジマ状に互層に含む(※9層と類似)
③ 5Y⅘灰シルト　酸化鉄を層全面に斑状に含む、高師小僧を含む、マンガン粒を層全面に含む、炭化物を少量含む、2.5Y⅞浅黄砂シルトが混入、※8層に類似。
④ 2.5Y⅘黄灰粘質シルト　酸化鉄を斑状に含む、マンガン粒を層全面に含む、炭化物を少量含む高師小僧を少量含む、5Y⅝灰オリーブシルトが混入※9層に類似
⑤ 5Y⅘灰粘質シルト　炭化物を念む、高師小僧を少量含む、7.5Y⅝灰オリーブシルトが混入※10a層に類似
⑥ 5Y⅘灰粘質シルト　炭化物を含む、高師小僧を少量含む、7.5Y⅝灰オリーブシルトが混入※10a層に類似
⑦ 5Y⅘灰シルト　酸化鉄を層全面にやや強く含む、マンガン粒を層全面に含む、高師小僧を小量含む。炭化物を小量含む。2.5Y⅝黄褐砂質シルトが混入、7.5YR 1.7黒粘土質シルトが層下部に横ジマに混入。(この混入度は9層の構成土に類似)。層全体としては8層に類似。

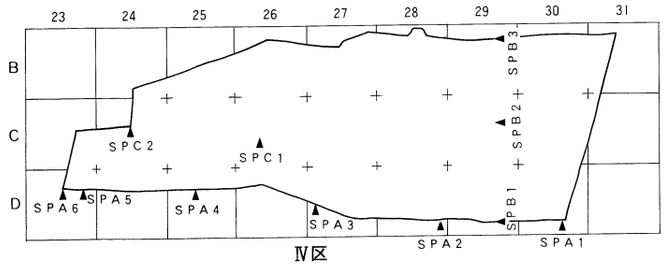


土層註記
SD17
⑧ 2.5Y⅘黄灰シルト　酸化鉄を層全面に斑状に含む。マンガン粒を層全面に薄く含む。

その他の層
⑨ 足跡







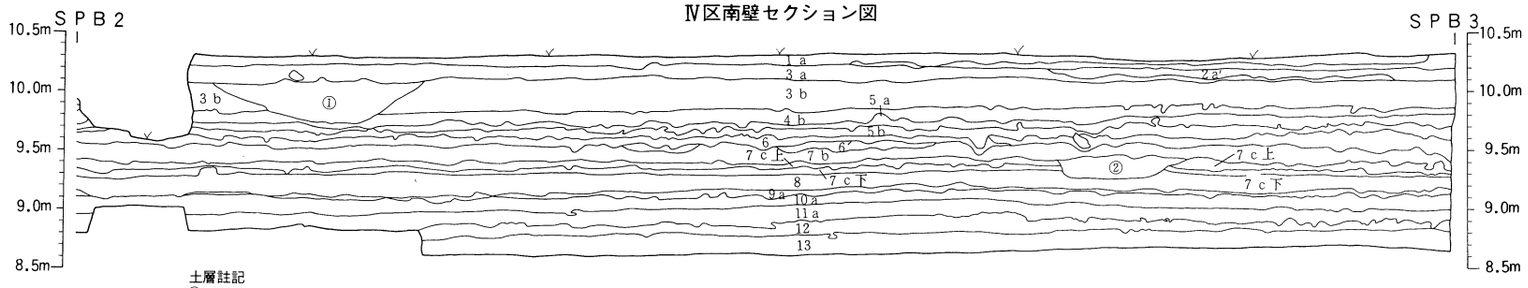
土層註記
SD12
⑩ 10YR⅝灰黄褐色粘土質シルト　礫(2cm～15cm)を含む
⑪ 10YR⅘灰黄褐色粘土質シルト　2層と3層は基本的に類似するが、3層には基本層位の4a層がブロック状に入っているので分けた。
SD5
⑫ 7.5YR⅘灰褐色シルト質粘土
⑬ 7.5YR⅘灰褐色粘土質シルト　基本層位の5層と非常に類似する。
⑭ 10YR⅘褐灰色粘土質シルト　2.5Y⅞浅黄色粘土を部分的に含みそれが層位になるところもある。
SD4
⑮ 7.5Y⅘褐灰色粘土質シルト
⑯ 10YR⅝灰黄褐色粘土質シルト
⑰ 2.5Y⅝灰黄色粘土質シルト　部分的に10YR⅝灰黄褐色のシルト質粘土を乱れながら含む。
⑱ 10YR⅝灰黄褐色シルト質粘土　この層の下部には、10YR⅞黒色を提する植物遺体の炭化集積層が見られる。全体として乱れた感じのする層である。
⑲ 7.5YR⅝灰褐色シルト質粘土　基本的には6a層と似ているが6a層と較べると若干暗い感じのする層である。
⑳ 7.5YR⅝褐灰色シルト質粘土　10YR⅞灰白色の粘土ブロックを霜ふり状に含む。
㉑ 7.5YR⅝褐灰色粘土　植物繊維を全体的にやや多く含む層である。
㉒ 7.5YR⅝褐灰色粘土　10YR⅝褐灰色、10YR⅝灰黄褐色の粘土ブロックを多く含む層で、これによって7a層とは分けることが出来る。

SD2
㉓ 10YR⅜黒褐色粘土　植物遺体を多く含む、10YR⅝褐灰色粘土が乱れながら混合している層である。
㉔ 基本層位の10b層を基本とするが層が全体的に乱れているので区分した。
㉕ 基本層位の11層
㉖ 基本層位の12層

その他の層
㉗ 10YR⅝灰黄褐色粘土質シルト　ピット等の遺構の堆積土か？
㉘ 10YR⅝灰黄褐色粘土質シルト　ピット等の遺構の堆積土か？
㉙ 10YR⅝灰黄褐色粘土質シルト　ピット等の遺構の堆積土か？

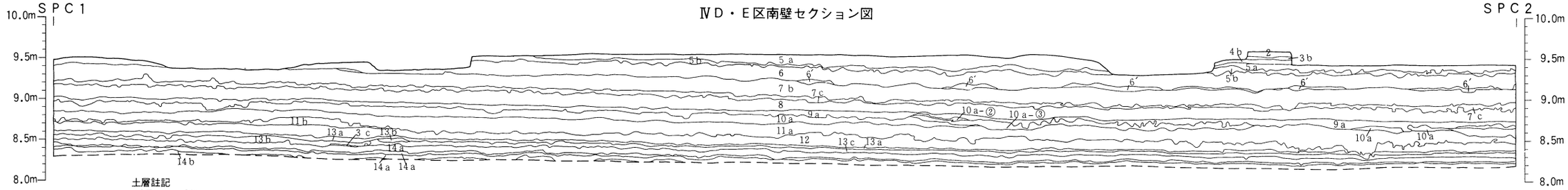
第23図　Ⅳ～Ⅶ区セクション図（2）

Ⅳ区南壁セクション図



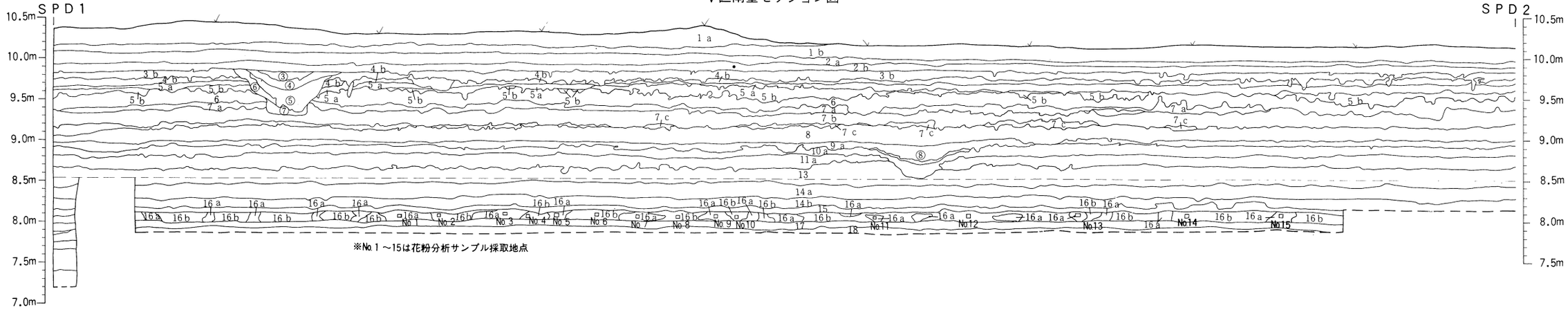
土層註記
① 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト　土壌の埋土の可能性あり。10YR5/2灰黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。
② 7.5YR5/2にぶい褐色粘土質シルト　基本層位の7層、8層をブロック状に含む。

Ⅳ D・E区南壁セクション図



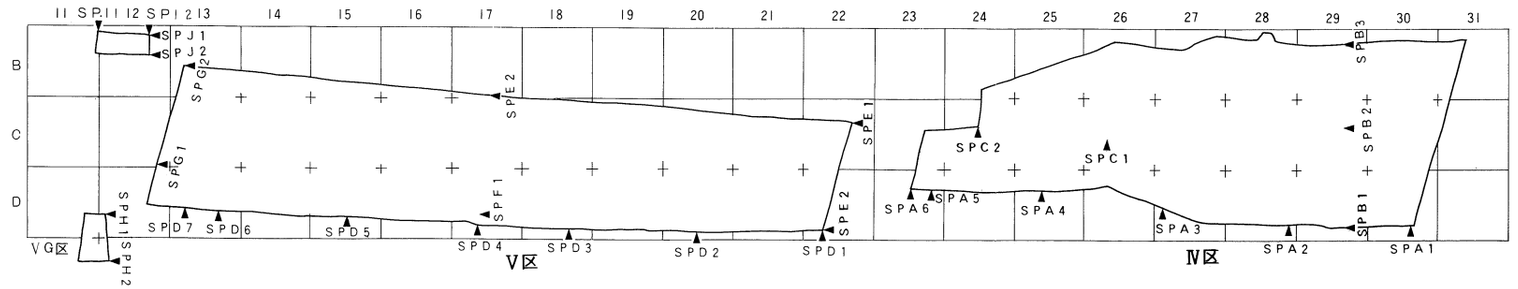
土層註記
6′層　2.5Y5/3灰黄灰色粘土　酸化鉄を含む。
10a—②層　5Y5/3灰白色粘土　黒色粘土・灰白粘土と互層になる。
10a—③層　2.5Y5/3灰黄灰色粘土　分解度が高い。炭化物を多く含む。

Ⅴ区南壁セクション図



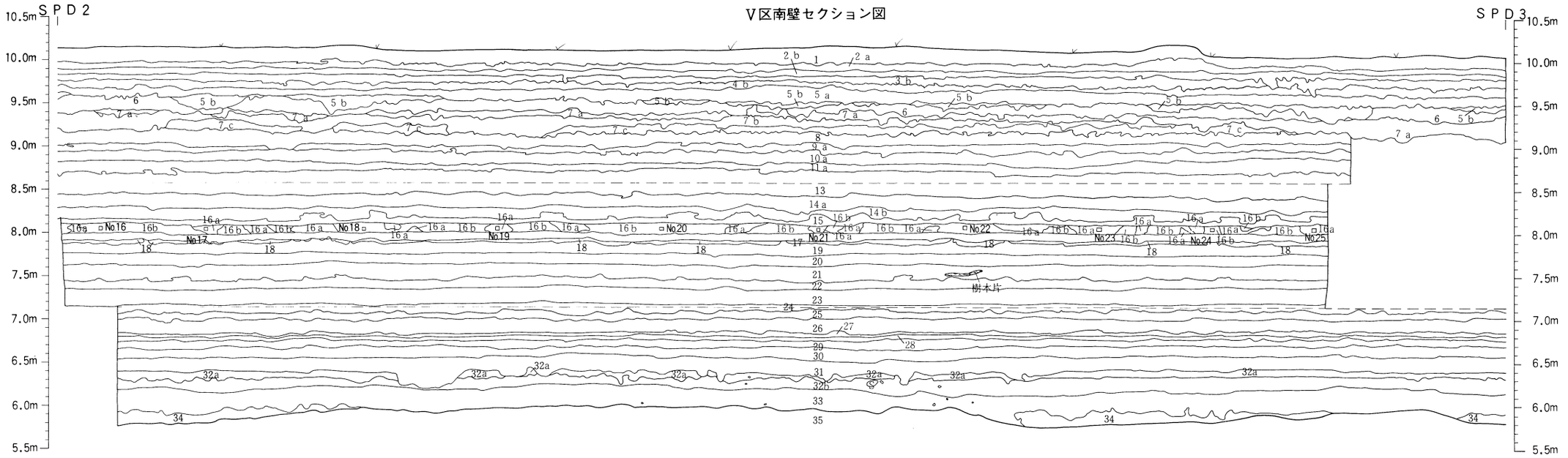
※No.1～15は花粉分析サンプル採取地点

土層註記
SD24
③ 10YR5/3シルト質粘土　砂粒を多く含む。
④ 10YR5/4灰黄褐色粘土
⑤ 10YR5/1褐灰色粘土
⑥ 2.5YR5/3灰黄灰色粘土
⑦ 10YR5/1褐灰色粘土　黒色及び黄褐色粘土をブロック状に含む。
SD1
⑧ 10YR5/1黒色粘土　植物遺体を多量に含む。

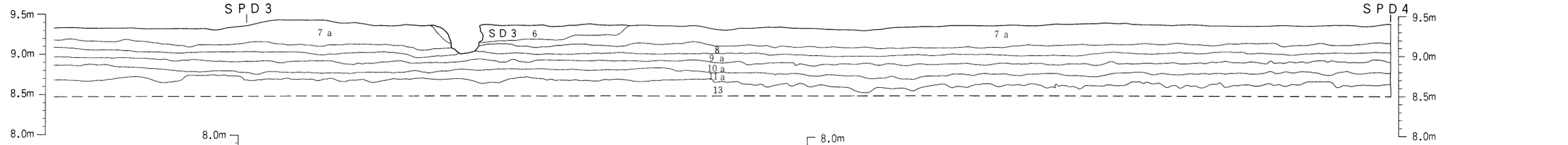


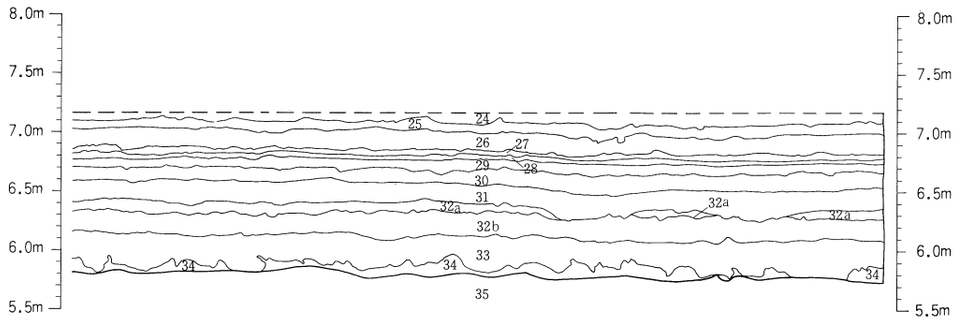
第24図　Ⅳ～Ⅶ区セクション図（3）

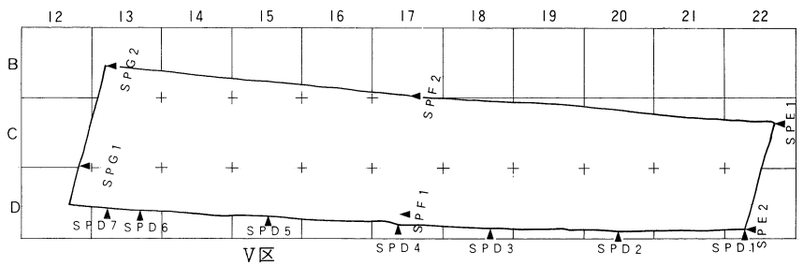
V区南壁セクション図



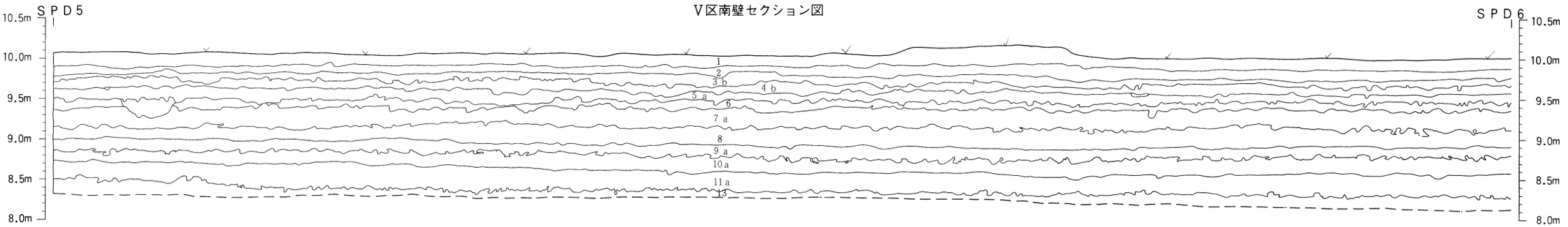
V区南壁セクション図



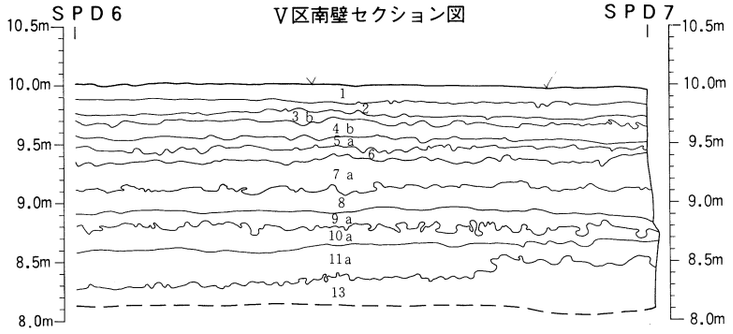


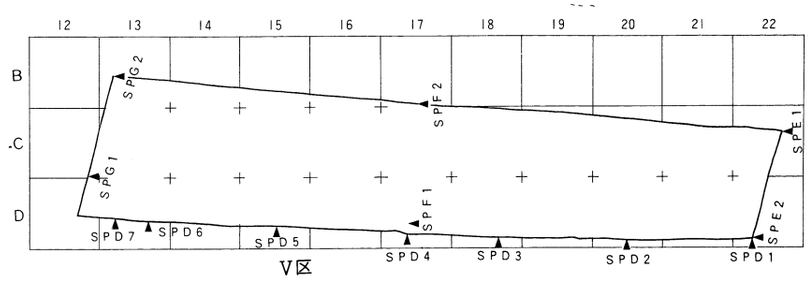


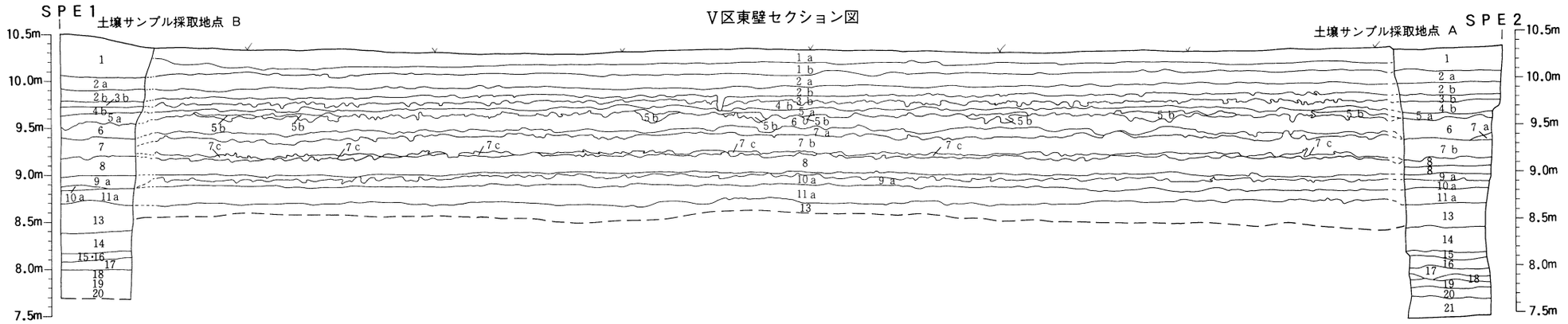
V区南壁セクション図

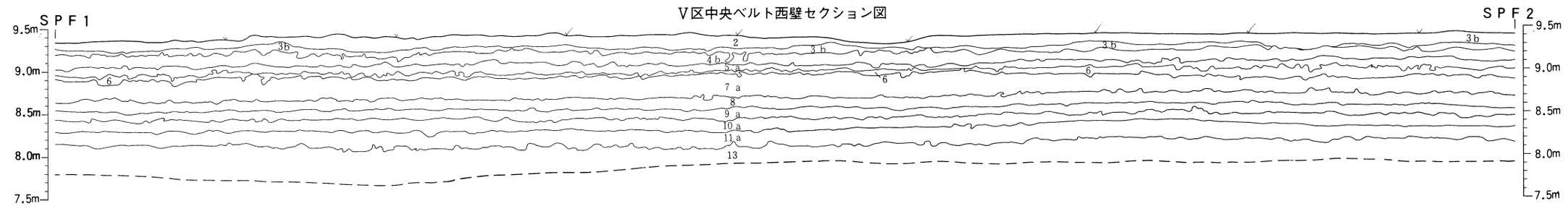


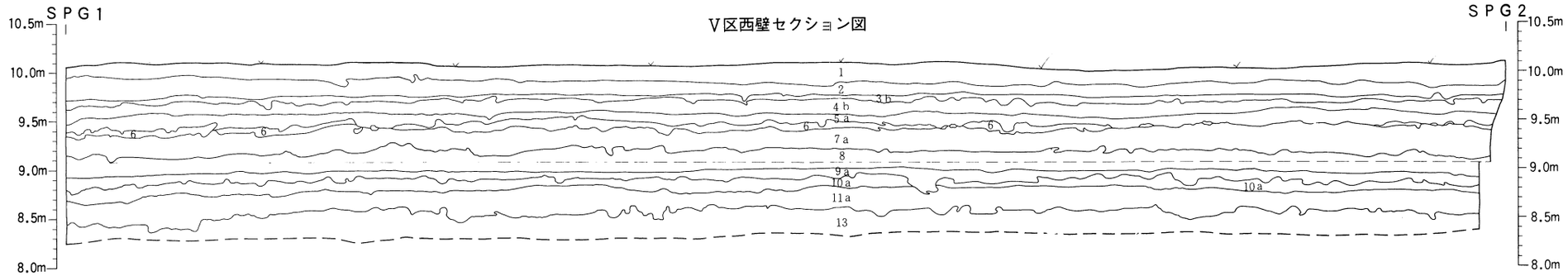
第25図　Ⅳ～Ⅶ区セクション図（4）



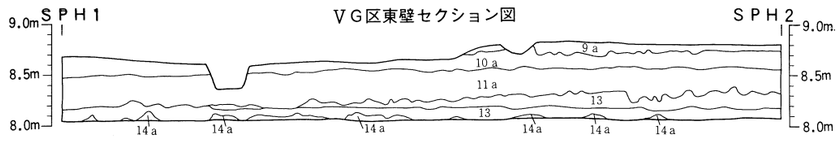




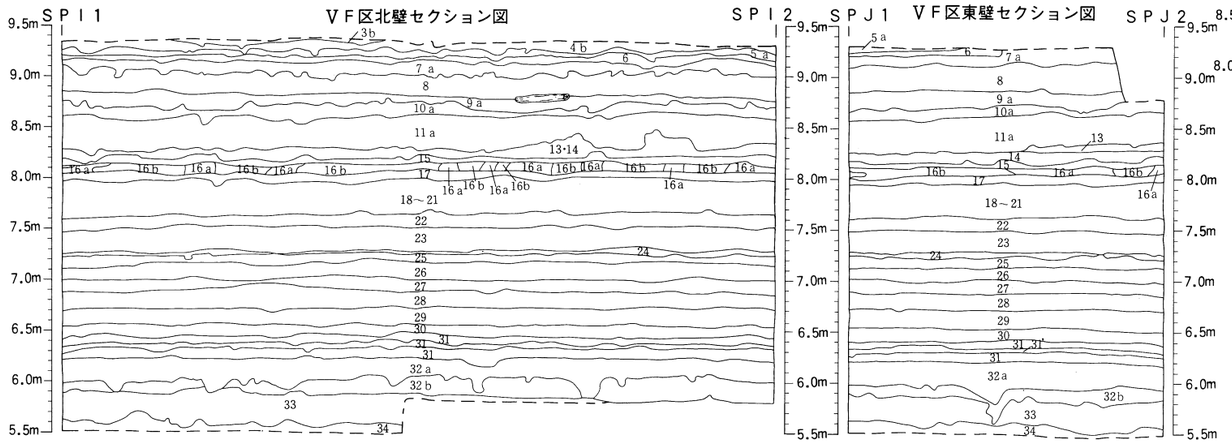




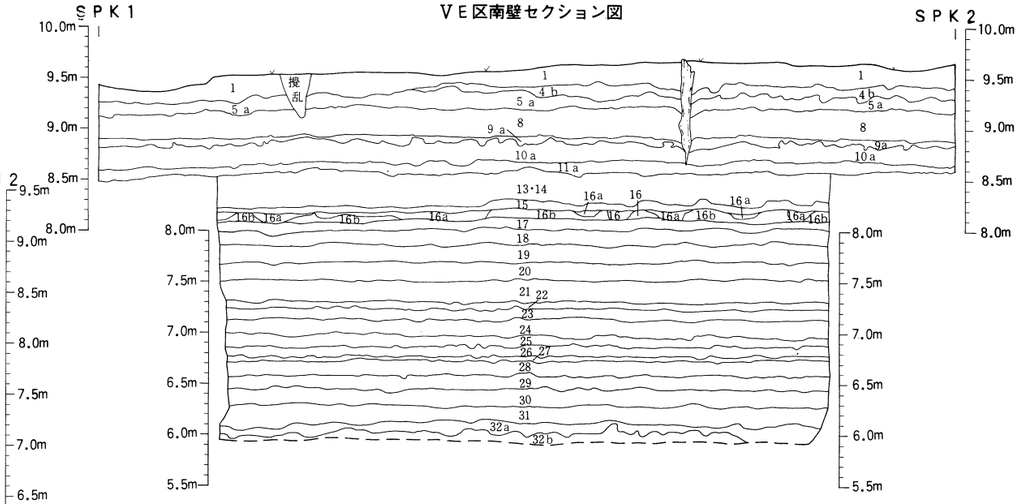
第26図　Ⅳ～Ⅶ区セクション図（5）



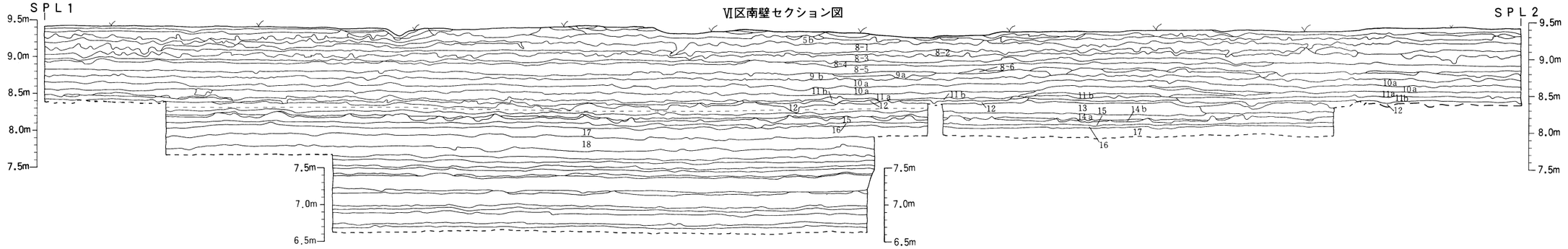
Ⅴ G区東壁セクション図



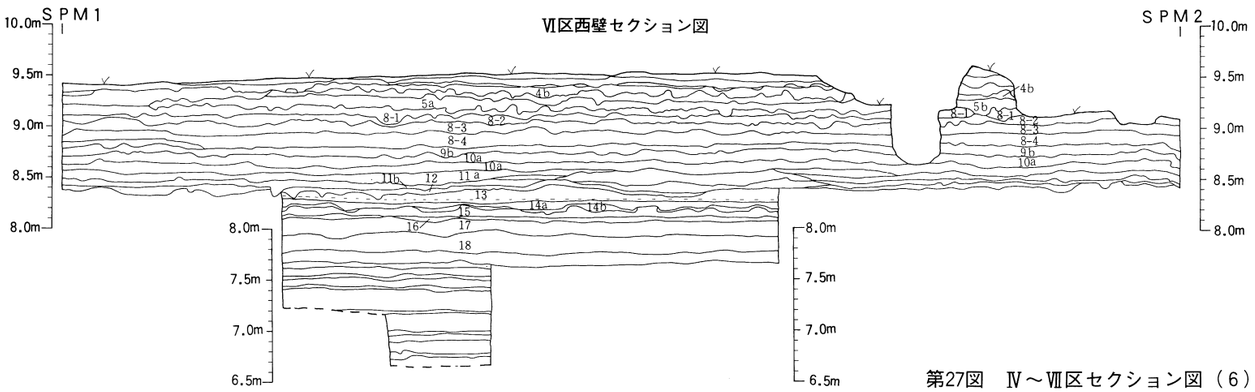
Ⅴ F区北壁セクション図　　Ⅴ F区東壁セクション図



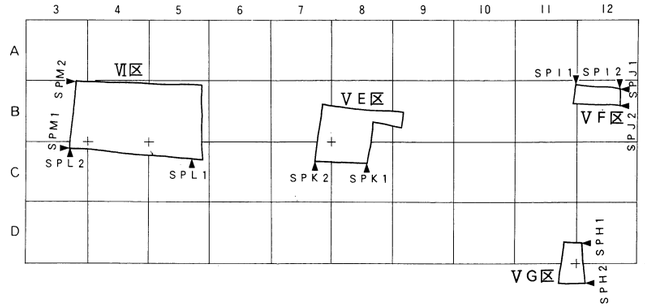
Ⅴ E区南壁セクション図



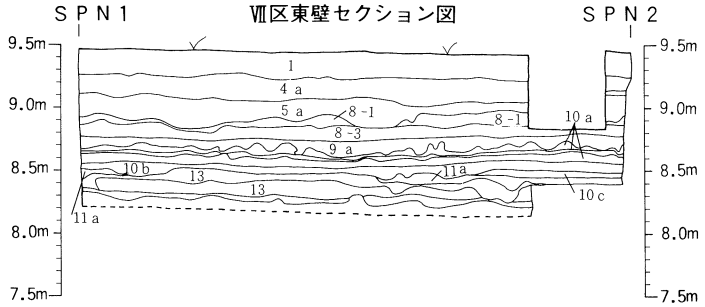
Ⅵ区南壁セクション図

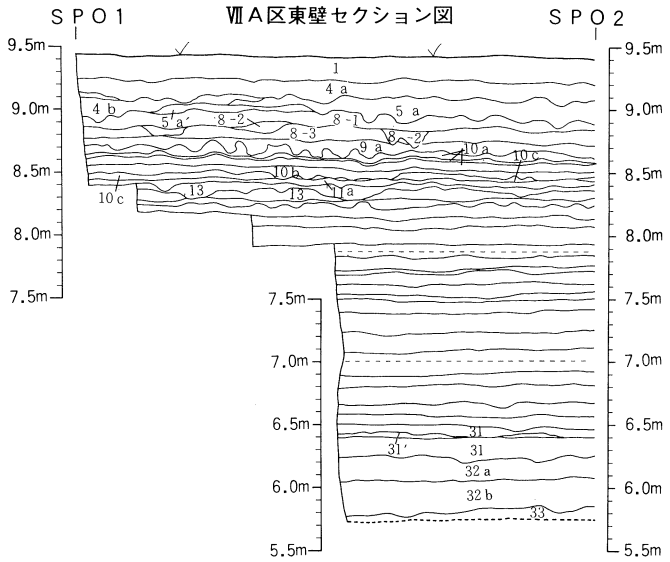


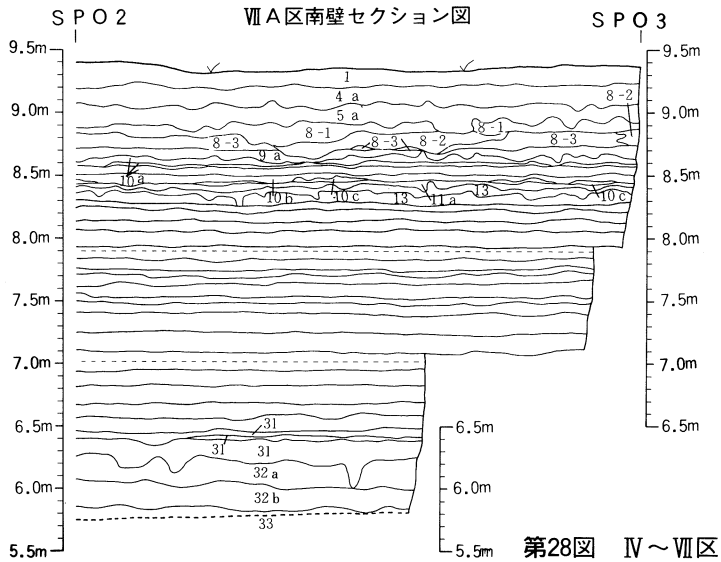
Ⅵ区西壁セクション図

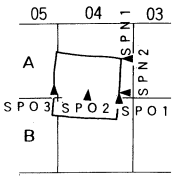


第27図　Ⅳ～Ⅶ区セクション図（６）









第28図　Ⅳ～Ⅶ区セクション図（７）

第３節　調査経過と調査概要

１．調査経過

富沢遺跡第15次調査の調査対象区域は仙台市都市計画道路長町折立線建設予定地部分の東西600m、南北30mの約18000m²であり、富沢遺跡の隣接地も含まれていたため、昭和60年３月に調査対象区域の東端部から西方へむけて試掘調査が行なわれ、II区以西に遺構の存在が確認されたためＩ区を調査対象から除外した。これによりII区以西の調査が昭和60年４月から行なわれた。

調査は昭和60年４月10日からII区・III区・Ｖ区が、４月18日からIVＡ区の調査が開始された。II区では４月中旬に近世の水田跡が検出されている。５月後半に至りII区では中世の4c層水田跡、III区・IV区では中世の遺構群・Ｖ区では3b層上面での中世の水田跡が検出された。またその後Ｖ区では4b層・5a層・６層の各層上面において平安時代の水田跡が連続して検出された。III区では６月上旬に調査区北西部において近世末～明治にかけての墓壙群が確認され、７月後半にかけてその検出が行なわれた。また７月後半にはＶ区において古墳時代の水田跡が検出されている。８月にはII区で砂層上面から中世の木簡が出土した。II区・III区の調査は８月中旬には終了しVI区の調査が開始された。８月後半にはＶ区で弥生時代桝形囲式期11a層水田跡が検出された。この水田跡は第７次調査においても検出されており、10月後半にはIV区・VI区でも検出されその広大な水田域が確認された。さらにIV区とVI区では、11a層水田跡の下層に12層水田跡が11月後半から12月上旬にかけて検出された。その後IV区では13b層の水田跡が12月後半に検出され、桝形囲式期以前に２時期の水田跡の存在が確認された。またＶ区東半部では弥生時代十三塚式期の9a層水田跡の検出、11a層水田跡の検出ののち、イネ花粉の検出された16層の調査が行なわれたが、遺構は検出されなかった。ＶＥ区では12月に入り31層中に灰白色の火山を確認したのち、32a層中から縄文時代早期末葉～前期初頭の時期の土器・石器が出土した。昭和61年に入り１月16日にＶＥ区の調査は終了した。Ｖ区西半部では16層より下層の調査が行なわれ１月末には砂礫層上面を確認し調査は終了した。また２月上旬にはＶＦ区・ＶＧ区の調査が行なわれた。IV区では１月・２月と13b層水田跡より下層の調査が行なわれ、２月後半には32a層上面で２条の河川跡と石器１点を検出した。IV区の調査は３月３日で一時打ち切られた。４月に入り、５日から整理作業とともにIV区での未調査部分Ｄ区・Ｅ区の継続調査が開始された。この調査では5a層水田跡がIV区に存在することが判明するとともに13b層水田跡の広がりが確認された。IV区の調査は５月14日に終了し、VII区の調査が５月22日から開始された。VII区では弥生時代の水田跡が２時期確認された。10b層水田跡はVII区においてのみの検出であった。また32a層からは石器が２点出土した。８月１日をもってVII区の調査が終了し、第15次調査は全て終了した。整理作業は昭和62年３月27日まで行なわれた。

2．調査概要

第15次調査では、基本層序の対応関係から、II区からVII区の調査区は大きくII区・III区・IV～VII区に分けられる。これは対象区域の東半部特にII区・III区は二ツ沢起源と考えられる堆積物の影響があることから複雑な堆積環境にあったためであり、これに対しIV区以西ではVII区まで安定した堆積・形成環境にあったことによる。

II区：II区では3・4c・6a・8b・13a層上面において水田跡が検出されている。この5時期にわたる水田跡は3層が近世末～明治初期、4c層が近世・6a・8b・13a層が中世のものである。また13a層のより下層の砂層上面からは中世の木簡が2点出土している。

III区：III区では水田跡は検出されておらず、2b層・3a層上面において中世の遺構群が検出されている。また北西部では近世末～明治初期の墓壙群が検出されている。

IV～VII区：IV～VII区では32a層の調査により、IV区・ＶＥ区・VII区で縄文時代早期末葉～前期初頭の遺物が出土した。16層の調査ではIV区において打ち込み杭1本を検出したが遺構は検出されていない。水田跡はIV区で検出された13b層水田跡を最古とし、弥生時代5時期・古墳時代1時期・平安時代3時期・中世1時期の10時期に及ぶ水田跡が連続的に検出されている。またIV区では中世の遺構群が検出されている。

以上のように第15次調査では、1．縄文時代早期末葉～前期初頭の時期の遺物が地点を異にして出土していること。2．弥生時代以降近世までの水田跡が検出されていること。3．平安時代以前の居住域と考えられる遺構は検出されていないこと。4．中世においてはIII・IV区において居住域と考えられる遺構が検出され、その東方のII区・西方のＶ区において水田跡が検出されていること。5．近世末～近代の墓壙群が検出されていることが確認されている。

3．関連科学との連携

地形・地質：東北大学地理学教室　豊島正幸氏

第15次調査区の立地条件を含め、富沢遺跡とその地形の変遷過程を明らかにすることを目的として依頼した。

プラント・オパール分析：　宮崎大学農学部　藤原宏志氏

調査対象区域は富沢遺跡の北東端部及びその隣接地であり、地形的には東方に自然堤防があり西方に後背湿地が広がるため東半部に居住域、西半部に水田域が想定されたため、その範囲を把握するため、昭和60年4月25日～27日にII区からＶ区にかけて東西方向約50m間隔でNo. 1からNo. 8まで8地点のテストピットを設け、層位毎のサンプル採取を斎野が行ない藤原宏志氏へ発送した。この分析結果は5月13日に届き、II・IV・Ｖ区において水田跡の存在する可能性が示された。またIII区においては水田跡が存在しないことが予測された。その後の調査によりIII区では水田跡が検出されなかったが、IV区において中世の居住域と考えられる遺構群が

検出されたこと、Ⅴ区では水田跡が検出されたことから、Ⅳ区を中心として水田域の範囲を各層位毎に把握するため再度のサンプル採取を藤原氏に依頼した。そのため７月15日～17日にかけて藤原氏によりサンプル採取が新たに設けたテストピットのＡ～Ｊの10地点で行なわれた。その結果Ⅳ区のより下層にも水田跡の存在が予測された。また、昭和61年１月16日には13b 層水田跡に関するサンプル採取を及川が行ない藤原氏へ発送した。

灰像分析：東京大学総合研究資料館　松谷暁子氏

灰像分析は当初調査対象区域の中で東方の自然堤防上から集落の検出を予測、居住跡に残された灰を分析することにより栽培植物を同定することを目的としていたが、集落は検出されなかった。しかし、Ⅴ区Ａ地点の土壌分析のサンプルを採取時に庄子貞雄氏に基本層序の中に何層か炭化物の層が薄く存在していることの指摘をうけたため、この炭化物の分析を依頼した。炭化物の層は８層から20層の間に認められたため、斎野がサンプルを採取し昭和60年12月１日松谷氏へ送付した。

樹種同定：パリノ・サーヴェイ株式会社　高橋利彦氏

第15次調査では、Ⅱ区からⅦ区にかけて、木製品、杭、多量の木片が出土している。特に杭は弥生時代桝形囲式期水田跡に伴う杭列がⅤＡ区で検出されており、この杭列の樹種の組成を知ることと同時期の水田跡から多量に出土する樹木片の樹種組成との関係を把握すること、また他時期の杭材の樹種を知ることが目的であり、杭材・木製品の実測・写真が終了した段階で高橋氏に依頼し、昭和61年９月２日、仙台において高橋氏がサンプルを83点を採取した。また12月には追加のサンプル10点を斎野が採取し高橋氏に追付した。

植物遺体の同定：東北大学農学部　星川清親氏・庄司駒男氏

第15次調査では、プラント・オパール分析のサンプル採取が行なわれた No. 1 から No. 8 の地点とＡ地点からＪ地点までの10地点、各区の壁面から基本層序の各層を$10^2 \times 10$cmの1000cmを単位として土壌サンプルを３点ずつ採取している。また溝などの埋積土についても土壌サンプルを採取している。昭和60年５月から昭和61年７月にかけて、これらのサンプルの中から、第１地点・第２地点・第３地点・第５地点、Ⅳ区SD26の埋積土・Ⅳ区SK6の埋積土・C地点・Ⅴ区基本層位・Ⅵ区基本層位土壌サンプルをそれぞれ各層毎に１点ずつウォーター・セパレーションを行なった。この作業は5mm・2mm・0.42mm のメッシュにより行なわれ、植物遺体・昆虫遺体・その他に分けられた。本来であれば我々が行なうことは十全ではないと考えるが、量的なデータを得るためやむなく行なった。ウォーター・セパレーションの結果得られた植物遺体からは、地点を異にするのが時代的には弥生時代以前の層から始まり近世に連続的に及ぶものであり、調査区及びその近傍の植生、あるいは水田跡に伴う植物の把握が計られることが予測されたため、星川氏と庄司氏に昭和61年９月に同定を依頼した。また発掘調査の時点にお

いて検出された遺物遺体も同時に同定を依頼した。

土壌分析・火山灰の同定：東北大学農学部　庄子貞雄氏・山田一郎氏

Ⅴ区・ⅤE区・Ⅵ区の調査が進み各区において基本層位と遺構の対応関係が把握された時点で、東北大学農学部庄子貞雄氏・山田一郎氏に土壌分析を依頼した。目的はⅤ区・Ⅵ区においては水田土壌の分析・ⅤE区については、32a層以下の層とそれより上位の層の間の土壌的な相違を分析により明確にすることであった。そこでサンプルの採取は昭和61年1月10日にⅤ区ではA地点で、ⅤE区は南壁の基本層序を行なった。また、31層中に含まれる灰白色の火山灰についても同定を依頼した。

花粉分析：東北大学生物学教室　守田益宗氏

花粉分析は調査が進みⅤA区の調査が終了し、基本層序と遺構の対応が把握された時点で守田氏に依頼した。目的はプラント・オパール分析結果と調査により検出された水田跡と花粉分析の対応関係を把握すると共に各時期の周辺の植生を把握することであった。そこで弥生時代から中世まで連続的に7時期の水田跡が検出されており、泥炭質の粘土層の堆積のみられるⅤ区において分析を行なうこととした。サンプルの採取は昭和60年9月25日にテストピットのA・B2地点において各層位毎に行ない水田跡との関係を把握するとともに、ⅤA区で行なわれたボーリング調査の中でオールコアサンプリングを行なったC－17地点の資料について10cm単位でサンプルを採取した。またこれに伴い80cmを単位として ^{14}C 年代測定資料を採取した。これらの分析結果は約1ケ月後に提示されたが、A・B両地点の分析結果は水田跡の検出された層位とイネ花粉の検出された層位がよく対応していた。しかし、イネのプラント・オパールの検出されていない16層からA・B両地点ともイネ花粉が検出され、水田跡の存在が予測された。しかしⅤB・C・D区の16層の調査では水田跡は検出されなかった。そこで16層についてサンプリング採取を昭和60年12月に行なった。16層は16a層と16b層に細分されており、VCD・E区南壁セクションにおいて長さ約56mにわたり16a層と16b層を交互に約80～300cm間隔で25点の資料を採取した。またこの時点にはⅤE区の調査で現地表下約4 mの32a層中から縄文時代早期末葉～前期初頭の遺物が出土しており、また31層中には灰白色の火山灰の存在が認められていたこと、31層より上位の層が泥炭質の粘土層であるのに対して32a層より下位の層が粘土であることから、30～33層までのサンプルを採取し花粉分析を依頼した。

石器の使用痕分析：東北大学文学部　山田しょう氏

弥生時代桝形囲式期以前の12層水田跡から出土した安山岩製の二次加工のある剝片1点と、弥生時代桝形囲式の11a層水田跡から出土した流紋岩製の微細剝離痕のある剝片1点と、弥生時代十三塚式期の9a層水田跡から出土した粘板岩製の剝片1点の計3点の使用痕の観察を須藤隆氏を通して山田しょう氏に依頼した。これらの石器は水田跡の土壌中から出土しているもの

で、どのような使用痕が認められるか、また流紋岩製の微細剥離痕のある剥片は1側縁に光沢面が認められるため、水田耕作といかなる関係があるのかについても使用痕の情報が必要と考えられた。依頼は実測、写真撮影が終了した段階で昭和62年3月13日に行なった。

昆虫遺体の同定：東北大学理学部生物学教室　梅津一史氏

ウォーター・セパレーションによって得られた昆虫遺体を東北大学理学部生物学教室の梅津一史氏に昭和61年12月依頼した。昆虫遺体からは当時の環境・気候といったものが想定できることを期待しての依頼であった。

ボーリング調査：仙台市道路部

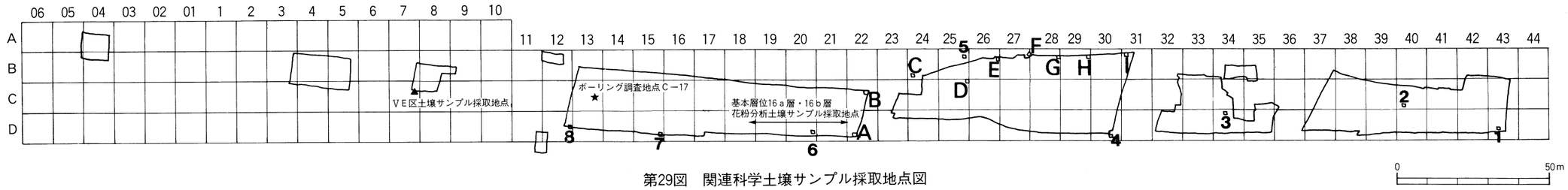
ＶＡ区の調査は8月末の時点でプラント・オパール分析で水田跡の存在が予想されていた最下層の11a層までの調査が終了したため、下層の砂礫層上面までの部分的な深掘りを行なう予定であったが、仙台市道路部側からの道路工法上の理由により深掘り中止の申し入れがあり協議した結果深掘りを中止し、ボーリング調査を行なうこととなった。ボーリング調査の目的はＶＡ区全域における砂礫層上面の地形の復原、その上位の砂層上面の地形の復原にあった。これは11a層水田跡の地形が砂礫層上面あるいは砂層上面の地形の影響を受けたものではないかとの疑問からの調査依頼であった。ボーリング調査は9月2日から始められ、オールコアサンプル5本を含む計26本の調査が行なわれた。

^{14}C 年代測定：日本アイソトープ

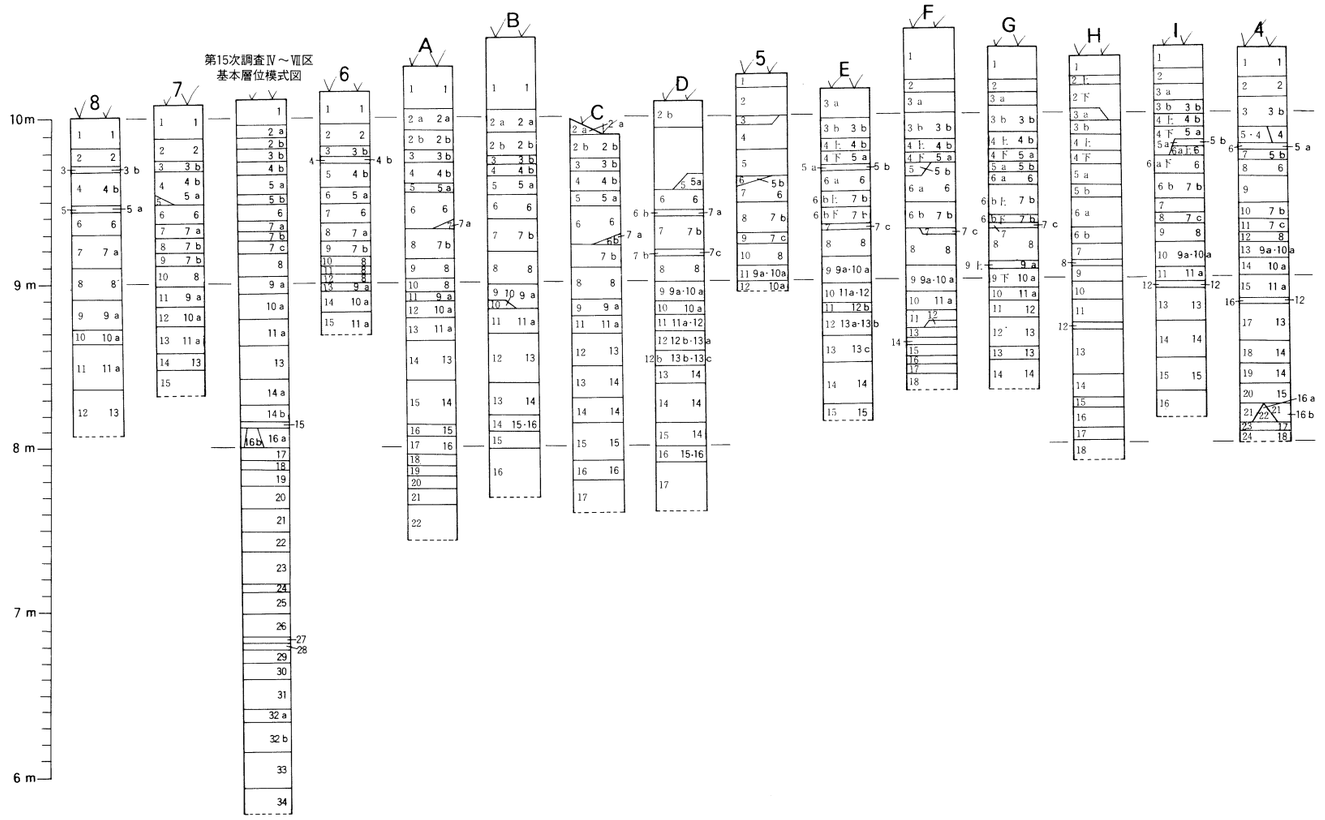
^{14}C年代測定は、年代を決定する遺物が出土していない弥生時代桝形囲式期以前の13b層水田跡と、それより下層でイネ花粉の検出された16層についてその上下の層とともにそれぞれの層の土壌を資料として測定を依頼した。また、前述のように花粉分析におけるＣ－17地点のオールコアについての測定も土壌を資料として行なった。さらに土壌分析で依頼した31層中の灰白色の火山灰の上下の層についても2地点から土壌を資料としてサンプルを採取し測定を依頼した。

検討会

昭和61年12月12日・13日の2日間にわたり、昆虫・使用痕を除き、分析、同定を依頼した方々と第15次調査の調査員との間で関連科学間での事実確認・関連科学と検出された遺構と遺物について検討が行なわれた。



第29図　関連科学土壌サンプル採取地点図



第30図　第15次調査Ⅳ～Ⅶ区基本層位と関連科学土壌サンプル採取Noとの対応図　（基本層位はゴチック体・土壌サンプル採取Noは明朝体）

第5章　普及活動

近年仙台都市圏では各種の開発行為が盛んに行なわれている。仙台都市圏の中核である仙台市は人口70万人を越え、従来開発が及ばなかった丘陵部や水田域までもがその姿を変えつつある。富沢遺跡の範囲内においても数多くの現状変更開発行為が為されているが、従来は記録保存のための緊急発掘調査が主体であり、積極的な文化財の普及活動はあまり行なわれてこなかった。そのため今回の調査においては社会教育・学校教育の場へ積極的にアプローチし、国民全体の共有財産である文化財を有効に活用する方向を試みた。開発行為にともなう記録保存だけに終わらせず、むしろ発掘調査を積極的に活用し、未来を担う子供たちへの歴史のロマンを託し先人の生活の証しを継承してもらい、現代に生きる市民のためには文化財が都市文化活性化の一助となることを目指したのである。

最近の考古学ブームを反映し埋蔵文化財への関心が高まっているが、地下に埋もれているという遺跡の性格から文化財としてイメージが薄く、一般市民への浸透は十分ではない。遺跡を文化財資源として活用することこそが埋蔵文化財への興味関心を呼び起こし、文化財保護の理解を得ることにつながるのではないだろうか。そこで今回の調査では関係各方面の理解協力を得て、従来の普及活動をより発展させる方向で調査とリアルタイムで広がりを持った活動を展開することになった。

富沢遺跡は市街化区域内に含まれ、昭和62年7月には仙台市高速鉄道南北線の富沢・長町南両駅の開業が予定され都市化が進んでいる。さらに富沢地区土地区画整理事業の終了により遺跡範囲内での宅地用地の供給が増大し、個人住宅の新改築等の小規模開発行為が活発化している。今回の調査においてはこのような状況を率直に受け止め幾つかの意欲的な試みを行った。普及活動は地味な仕事であり直ちに効果が現れるものではないが、今後の富沢遺跡のために欠くことはできない。

今回の調査における普及活動は、市民の文化財への深い理解と関心を得ることが目標とされた。

一般市民を対象とした普及活動としては、

1．現地説明会

2．現地見学会

3．記者発表

を行ない、また学校教育を対象とした活動では、

1．（遺跡周辺の地域の学校を対象とした）体験学習

2．（遺跡周辺地域外の学校を対象とした）訪問学習

3．（市内の学校教育関係者を対象とした）体験的学習

を行なったが、それぞれの活動については次のような内容であった。

第１節　一般市民を対象とする活動

１．現地説明会

調査が終盤を迎えた昭和60年12月７日（土）富沢遺跡第15次発掘調査の現地説明会を実施した。４月からの調査で多くの成果を挙げていたが、その内容は12月５日の記者発表で公表されており、放送各局のニュースや新聞各紙で一般に報道されていた。また遺跡周辺の住民を対象として各町内会の協力を得て現地説明会案内チラシ約3000枚を配布するとともに、遺跡周辺小学校や町内にポスターを掲示した。これは遺跡周辺住民への普及活動を重視しているためである。周辺市町村教育委員会はじめ関係各方面には、現地説明会の案内文書を発送した。案内文書やチラシは単なる開催日時のお知らせに終わらせず、それ自体が富沢遺跡への理解が進むような内容とした。これによって現地説明会へ参加できない人々も遺跡と調査成果の概略を知ることができたのである。

現地説明会当日は晴れたものの風が強く気温も低かったが、開始予定時刻の30分程前から参加者が集まり始め、開始時刻の午後１時には約200人に達した。参加者は考古学愛好者や学生が多かったが熟年層や主婦の姿も見られた。

主催者からの挨拶、今回調査の経過概略の説明に続いて、各調査区ごとに担当調査員による調査成果の説明に移った。当日調査が行なわれていた調査区は西側半分のIV・V・VI区のみで、既に調査が終了していたII・III区については資料のみによる説明となった。貴重な調査成果を前にした調査担当者は説明にも力が入り、参加者からも質問が相次いだ。

説明会は２時間の予定時間を大幅に超過して終了したが、その後も熱心な参加者からの質問が続き調査員が対応した。現地説明会資料は用意した300部では足りず、増刷し市民の要望に答えた。12月の寒波の中で数多くの参加者であったことや資料の増刷が必要だったことは、今回の調査成果が評価されたとともに普及活動が十分に機能した結果と考えられる。

２．現地見学会

今回の調査における新しい試みが現地見学会である。現地説明会が総括的に調査成果を公表するのに対して、現地見学会は遺跡周辺住民の調査への理解協力と富沢遺跡への理解を深めるための活動である。言わば小さな現地説明会というべきもので、原則として月１回調査の成果と進行状況を報告することを内容とした。

初めての試みであり施行錯誤の連続であったが、当初から一般市民が抵抗なく参加できるような親しみ易さを目標に置いた。調査員が調査の合間にPRポスターの掲示や準備を行なった。

華々しさこそないが、発掘調査のありのままの姿を知ってもらう恰好の機会ではないかと思われる。

調査の都合や天候のために中止したり調査区が文化層に達していなかったりと不慣れな点も多かったが、最も多い時で約40名の参加者を数えた。同時に電話による問合せや日常の見学希望者が増加した。発掘調査のありのままの姿を知るあるいは定点で調査の進行により現代から縄文時代までを見ることができる良い機会であり、結果として周辺住民の調査への理解はより深まったと考えられる。

3．記者発表

今回の調査に関する記者発表は、調査中盤の昭和60年７月30日と終盤を迎えた昭和60年12月５日の２回にわたり実施した。記者発表は仙台市市政記者クラブ加盟各社（計13社）を対象とし、富沢遺跡第15次発掘調査事務所において実施した。

記者発表にあたっては調査員による打合わせが何度も行なわれ調査成果と進行状況を検討し、実施日時と発表内容の決定が行なわれた。記者発表の目的は当該の成果を一般市民に知らせることにあるが、広義には富沢遺跡保護のための一手段であるとの認識に立ち、事前準備には十分な時間を掛けた。記者発表の案内文書は取材記者の多くが考古学の専門的知識を有しない点を考慮して作成するなどの綿密な計画が練られた。

２回の記者発表開始時刻は共に午後１時30分と設定した。主催者側の挨拶、調査概要の説明に続いて、調査区を前にして担当職員による調査内容・成果の説明を行なった。貴重な調査成果の中でも記者の関心を引きニュースの中心となったものは、７月の記者発表ではＶ区の古墳時代と考えられるいわゆる小区画水田跡、12月には８時期以上にわたって連続的に検出された水田跡で特にⅥ区で確認された弥生時代桝形囲式期以前の水田跡であった。

記者発表運営上の問題点としては、学術的要素の強いこの種の記者発表では止むを得ない面もあるが、調査員と取材記者の質疑が噛み合わなかったり、ごく少数ではあるが記事の内容に明らかに勘違いと思われる誤りが見られた。この点については主催者側の準備不足と率直に認識せねばならないであろう。より綿密な準備と慎重な進行が必要であるが、調査成果自体はニュースバリューが高く、また一般市民の反響は大きなものがあった。２日後に実施した現地説明会に多くの参加者があったことや記者発表終了時に継続して取材を行なう記者が現れたことは、記者発表の成功を裏付けるものである。

今日のような情報化社会では、情報の提供に留まらず“選択される情報”を積極的に演出することも必要である。特にマス・メディアは埋蔵文化財の存在を広く市民に知らせるためには効果的で即効性が期待できる手段である。貴重な調査成果を専門家の手にとどめず出来るだけ多くの人々へ還元するためには、手間を惜しまず調査と同等の労力を掛けねばならない。そ

のことが文化財保護のコンセンサスを得るために何等かの効果をもたらすであろう。

第2節　学校教育関係を対象とする活動

一般市民を対象とした活動のほかに対象を学校教育関係者に特定した活動を行い、特に教育現場との連係を重視した。今回の調査にともない社会科教育の一環として埋蔵文化財を活用するように働きかけた結果、学校現場と連係した体験学習と連続的な実践的歴史学習が実現した。また体験学習以外にも訪問学習や遺跡周辺の学校には調査の成果をわかりやすくまとめた写真パネルや教材の提供を行った。

1．富沢遺跡周辺の学校に対する活動

地域の学校に学ぶ児童生徒に対して郷土の生成や先人の努力工夫等に理解関心をもたせるために、体験的学習と机上の両面から実践した活動であり、今回は仙台市立鹿野小学校の第6学年4クラスを対象に、次のように実施した。期間は昭和60年7月～昭和60年12月までの計6ケ月間である。

⑴　体験的学習

体験を通じて歴史学習をより身近なものとするとともに、文化財愛護の精神を高める。

①　指導の内容

ⅰ)事前指導　ⅱ)体験　ⅲ)事後指導（追体験を含む）の3つを実施した。

ⅰ)事前指導

事前に体験的学習の意味と時代の背景を理解することによって学習をスムーズに進めるために実施した活動である。指導の内容は次の通りである。

a．歴史的な通史（1時限）

特に弥生・平安時代の歴史的位置や時代の内容を他の地域との比較によって学習する。

b．仙台の歴史（1時限）

仙台市内の主な遺跡をスライドやパネルVTRで学習する。

c．発掘調査の意味と文化財（1時限）

文化財は先人の生活の証しであり、現代に生きる私達は文化的資源としてこれを十分に活用し、後世に伝えなければならないということ、そして発掘調査はそのための一手段であることを学習する。

d．調査について

調査用具の名称や使用法及び調査の手順などを学習する。

e．学習に当たっての全体指導（1時限）

体験学習の当日にどの様に事前の学習を生かすかを学習する。

f．指導教諭（学校）の下見・事前体験（1時限）

当日の行程を立案し、その一部を実施し検討を加える。

ii)体　験

7月8日から各クラス1日合計4日間にわたり行った。体験学習には実質2時間を当てた。当日の体験学習の指導内容は以下の通りである。

a．体験現場での確認作業

現場の状況を説明し、学習の内容を確認する。諸注意・他。

b．学習内容

1クラス（40人）を6班として一班に1人指導員をつける。

①スコップで掘る。②草削りで削る。③手箕・一輪車での土の運搬。④移植べらの作業。

このような4つの作業をローテーションを組んで行った。特に箕での運搬は、その中に遺物が含まれていないかを手で探りながら土に触れるようにした。

このような活動を通じて、自分達が先人の生活した面に立ち、現代と古代の接点にいることを理解させた。最後にまとめとして自分の体験した地面を見つめ、土層の断面を見ることによって、自分が学習した遺跡とその時代的積み重ねを考え、先人の生活を想像させた。

iii)事後体験（追体験）

体験した学習を思いおこし、学習の定着化を図る活動である。感想文や調査の意味・盗掘等の防止を学習するとともに文化財全般について学習する。

また発掘体験学習から5ケ月後の12月5日にもう一度発掘現場に立たせて、その変化を追体験させた。この学習は調査現場を見学することによって、自らの頭の中で歴史の流れと調査の意味をフィードバックするものである。

(2)　教材の回覧

発掘体験の様子や成果を写真やパネル等にして、体験学習の追体験と地域の歴史教材として利用することを目的とした活動である。これは調査成果をもとに発見遺構と遺物の写真と解説文を作成し、教材性とわかりやすさを重視して各時代ごとにまとめたものを、鹿野小学校をはじめ遺跡周辺の学校に提供したものである。

①　追体験としての利用

調査の進行状況にあわせてパネルやスライドを作成し、体験学習を実施した学校に提供した。これによって児童生徒は自ら体験を基礎にして調査の成果と歴史の流れ、さらには地層の形成といった分野まで理解することができたのである。

②　地域の教材としての利用

社会科学習と文化財の普及啓蒙を目的に、体験学習を実施していない学校に対しても、地域

の生きた歴史教材のひとつとして調査成果のパネルやスライドを作成して提供した。

2．市内の学校教育関係に対する活動

富沢遺跡周辺の学校のみならず市内全域の学校教育関係者に調査成果を還元することを目的とした活動である。

⑴　訪問学習

市内の学校において、年間のカリキュラムの一部分として文化財の活用をはかる活動である。

調査員が学校を訪問し、市内の遺跡や出土遺跡に関するOHP、VTR、スライド、パネルあるいは実物によって、教科書では味わうことのできない「生きた」学習をする。この機会に児童生徒は教科書に記された日本全体の歴史と対比しながら、自分の住む地域の文化や生活を理解することができるのである。

今回は「弥生時代の米作り」― 仙台市富沢 ― という教材で静岡県登呂遺跡の米作りと結び付けながら、仙台市富沢地区でも同時代（弥生時代）に米作りが行なわれていたことを学習した。この学習によって身近に地域（仙台市）の農耕の開始が日本の歴史の流れの中でどのような位置にあったのかが理解できたのである。

⑵　体験的学習

市内の児童生徒および教諭を対象とした発掘体験学習である。自らの体を使った活動を通して身近な郷土の歴史を理解し、文化財を大切にする心を高めることを目的とした活動である。

①　実施内容

ⅰ)市内の遺跡・発掘調査の見学　ⅱ)野外調査　ⅲ)学習・室内作業の3つを実施した。

ⅰ)市内の遺跡・発掘調査の見学

市内の主たる遺跡や発掘調査が行なわれている遺跡を見学し、市内の文化財についての視野を広める。

ⅱ)野外調査（体験的学習）

スコップ、移植べら、草削りなどの道具を用いて、遺構の検出から完掘までの一通りの調査を体験し、歴史と文化財保護の大切さを体感する活動である。

ⅲ)学習・室内作業

郷土の歴史の学習と遺物の整理作業を体験する活動。

仙台の歴史や主な遺跡の時代背景を学習する。また今回は縄文土器（レプリカ）を実際に接合復元したり、実際に出土した土の付いたままの土器を水洗いする作業を通じて、発掘調査後どのような経過で調査成果がまとめられるかを理解する。

このような文化財を教材として効果的に利用することで、ひとつの普及活動の形を作ることができた。抽象的知識を体験学習等の擬似体験や視聴覚教材を通じて具体的知識として定着さ

せることは、学習面でも大切なことである。教科書と黒板の世界から抜け出し調査成果を生きた教材として活用するという試みは、児童生徒のみならず教師や父兄からも好評であった。半面社会教育と学校教育との境界が不明瞭になったり、準備段階での時間不足などの問題点があったことは反省せねばならない。

今後は問題点を改め、多くの人々の理解力の下に学校教育の中においてさらに広がりを持たせ、活動の定着をはかりたい。

体験学習指導案

1．本時のねらい

○発掘調査体験を通して、当時の人々の生活跡（遺構）や出土遺物に直接触れさせ、歴史で追体験させる。

○発掘調査体験を通して自分達が住む身近かな地域にも教科書と同様な歴史が連綿と続いていることに気づかせる。

○発掘調査体験を通して文化財愛護の精神を育て、高める。

2．**指導過程**（2時間扱い）

主な学習活動	指導上の留意点	備考
1．本時の学習課題をつかむ。	・学術的調査であることに留意させる。 ・本時に行なう遺構面の年代について知らせる。 ・鋭利な道具を使うので事故に気をつけさせる。	・写真パネル ・出土遺物
2．グループに分かれて、発掘調査を行なう。 ・遺構の確認作業（平安時代の畦の確認） ・遺構の掘りあげ（中世の遺跡）	・途中で確認作業と掘り込み作業を交代させる。 ・土の色に注意しながら掘らせる。 ・遺物が出土した際には、いつ頃のどんな物なのかを説明する。 ・集めた土の中にも遺物が入っていることもあるので注意させる。	・スコップ ・移植ベラ ・箕 ・一輪車 ・竹串
3．本時のまとめをする。	・本時の感想を3～4人の児童に話させる。 ・一人で勝手に遺跡を掘らないように話す。	

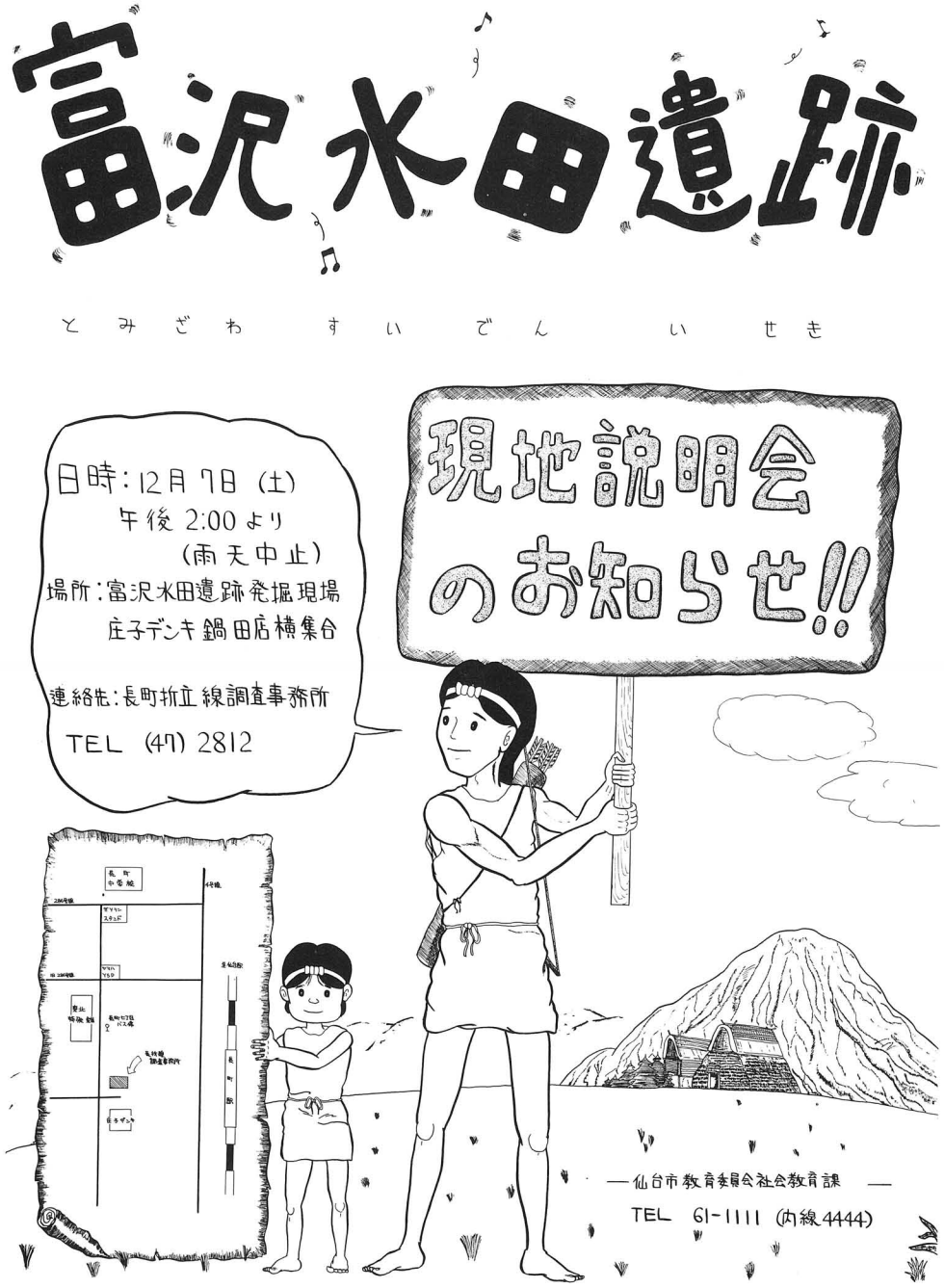
第3節　まとめと今後の展望

以上述べてきたように、今回の調査においては積極的な普及活動を行なった。現状の調査体制範囲内という制約はあったが、逆にその制約を活かし地域に密着したあるいは対象を絞った各種の活動を実施して来た。確かに成功した点も多いが今後の検討材料も少なくない。特に文化財にあまり関心を示さない人々へどのようにアプローチするかは、早急に解決しなければならない課題である。

発掘調査はその理由がいかなるものであれ、学術的水準を満たす成果を挙げなくてはならない。それが開発によるものであれば、将来の学術研究に耐える十分な精度を持つ必要がある。しかし時代の要請はあらゆる意味で調査部門が調査のみに専念することを許さなくなって来ている。調査員は象牙の塔に閉じ籠もることなく、調査者はその知識と調査成果を広く市民に還元し文化を活性化する責任がある。開発・遺跡の破壊という現状に対して、文化財保護に携わる者は広がりを持って社会に浸透していかなくてならない。そしてその結果が文化財保護への関心を高めることに繋がる。今回の調査にともなう普及活動はその第一歩である。

昭和60年度富沢遺跡（第15次調査）発掘調査にともなう普及活動の記録

日　時	行　事　名	対　象	内　容
5月24日	第1回現地見学会	地域住民	平安時代の水田跡　出土遺物他
6月20日	第2回現地見学会	地域住民	悪天候により中止　資料のみ配布
7月6日	体験学習（事前指導）	鹿野小6年	仙台の歴史～発掘調査（合計4時限）
7月8日	訪問学習	向山小6年	「仙台にも弥生時代があった」（弥生時代の米作り）
7月8～11日	体験学習（発掘体験）	鹿野小6年	発掘調査の疑似体験
7月25日	第3回現地見学会	地域住民	いわゆる小区画水田跡　他
7月29日	親子文化財めぐり	一般市民	市内の主な遺跡見学
7月30日	記者発表	報道関係者	いわゆる小区画水田跡 他
8月5日	体験学習（発掘のすべて）	児童生徒	
		教育関係者	発掘調査　整理作業の疑似体験
9月19日	第4回現地見学会	地域住民	悪天候により中止　資料のみ配布
10月18日	第5回現地見学会	地域住民	弥生時代の水田跡
12月5日	記者発表	報道関係者	調査成果の総括　弥生時代の水田跡
12月7日	事後体験（追体験）	鹿野小6年	体験学習のまとめ
〃	現地見学会	一般市民	調査成果の総括
調査期間	発掘調査成果　教材の回覧地域各学校調査成果の概略		



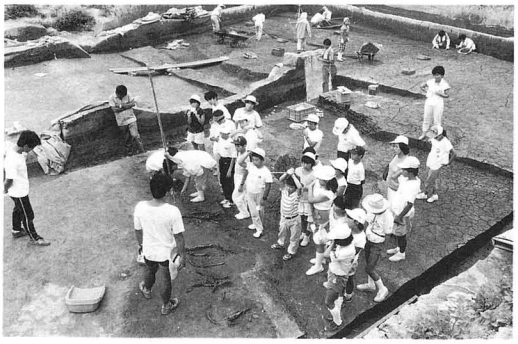
第31図　現地説明会ポスター　　絵：村上 篤

1

2

3

4



5

6

7

写真1.　現地見学会…一般
写真2.　事後体験（追体験）…鹿野小学校
写真3.　訪問学習…向山小学校
写真4.　体験学習（事前指導）…鹿野小学校
写真5.　体験学習（発掘体験）…鹿野小学校
写真6.　体験学習（発掘のすべて）…児童・生徒・教育関係者
写真7.　体験学習（遺物接合）…児童・生徒・教育関係者

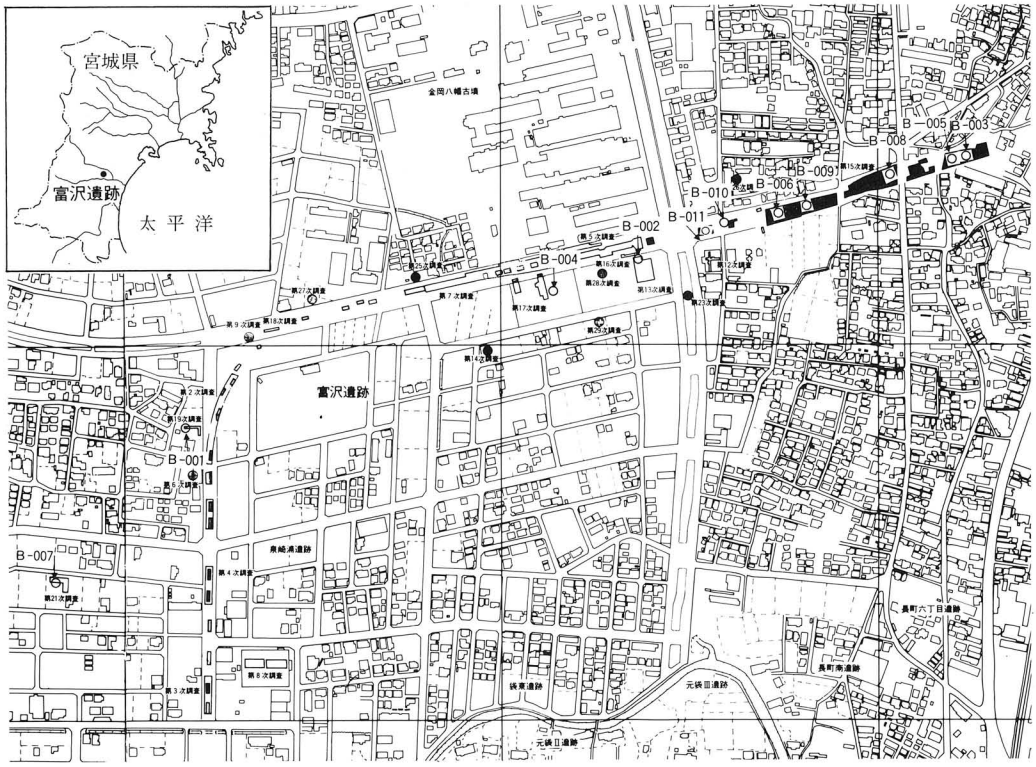
普　及　活　動

第６章　造形保存－富沢遺跡の理解と保存のために－

１　はじめに

富沢遺跡は宮城県仙台市の南部に位置する遺跡である。遺跡のほとんどは主に名取川と広瀬川とによって形成された沖野平野の後背湿地部に立地しており、昭和57年以来の調査の結果、弥生時代から近世に至るまでの水田遺構が良好に保存されていることが明らかとなっている。(注１)

富沢遺跡第15次調査（仙台市都市計画街路長町折立線建設に伴う発掘調査）の調査期間中には第15次調査区内で７カ所、第16次・第17次調査(注2)、第19次調査(注3)及び第21次調査(注4)の各調査区内で



第32図　留消遺物採取地点図

留消遺物No.	名　　称	大　き　さ
Ｂ－００１	第19次北壁層序断面接状剝離	縦150cm×横90cm
Ｂ－００２	第16次南壁層序断面接状剝離	縦170cm×横90cm
Ｂ－００３	第15次Ⅱ区中央部層序断面接状剝離	縦160cm×横90cm
Ｂ－００４	第17次東壁層序断面接状剝離	縦170cm×横90cm
Ｂ－００５	第15次Ⅱ区西壁層序断面接状剝離	縦120cm×横200cm
Ｂ－００６	第15次Ⅴ区北壁層序断面接状剝離	縦180cm×横90cm
Ｂ－００７	第21次南壁層序断面接状剝離	縦225cm×横90cm
Ｂ－００８	第15次Ⅳ区西壁層序断面接状剝離	縦180cm×横360cm
Ｂ－００９	第15次Ⅴ区7a層上面接状剝離（Ｂ－18グリット足跡）	90cm×90cm　2枚
Ｂ－０１０	第15次VE区西壁層序断面接状剝離	縦230cm×横180cm
Ｂ－０１１	第15次Ⅵ区西壁層序断面接状剝離	縦180cm×横360cm

第３表　留消遺物採取地点位置図

１カ所ずつの計11カ所で層序断面もしくは平面の剝ぎ取り転写作業が行なわれた。本章は、その作業の概要を報告するとともに造形保存の意味についても言及することによって、今後の仙台市における造形保存の展開のための基礎的資料とすることを目的とする。

2　造形保存の意味

一般的に、発掘調査において残される記録の大部分は、平面及び断面の実測図とその写真、そして調査担当者が現地で記した観察記録等によって占められている。これらは発掘調査においてはまさに必要不可欠な基本的記録である。しかし、ある課題を追及するための自主的な発掘調査であれ、行政的な発掘調査であれ、これらの記録だけでは充分とは言い難い場面が多く存在することも事実である。

実測図は本来、平面・断面の別を問わず、調査者が必要と認めた線を図化することによって作成される性質のものであり、したがって必要と判断されなかったその他の情報は、記録すべき対象とは認定されずに除外されることとなる。たとえば断面図は、層の堆積状況・層相・混入物・その上面および下面の乱れ等の観察によって分層が行なわれ、その界線を図化することによって作成される。そして土色や土質、遺物の混入の有無、その他の混入物等については、観察注記として記述されることが多い。断面図作成の目的が、それぞれの層の形成要因と生活面の存在の有無を把握するという点にあるとすればこれで充分なのであろうが、層序の対比を要求された場合、この断面図は有効なものとなり得るであろうか。層序対比作業は、調査面積が広大であったり、数地点を同時にあるいは調査時期を異にして調査する場合には、遺構・遺物の同時性の検証や先後関係空間的構造の把握等のために非常に重要な作業である。したがって断面図の作成にあたっては、この要求も考慮されていなければならない。しかし、同時に数地点の層序断面を実見できるような恵まれた状況にあることはあまり多くはなく、むしろ、たとえば調査終了後のように、主に実測図と観察注記に頼って層序の対比を行なわねばならない場合の方が多い。また沖積平野部における調査の際によく経験することであるが、地点が若干離れただけで層相が変化していたり、異なった層が部分的に介在していたり、あるいはよく似た層が繰り返し堆積している場合もあるため、層序の対比はなかなか容易ではない。これは、断面図を作成する際に、層序の対比も意識してでき得る限りの詳細な観察注記を作成したとしても、色調や土壌粒子等の微妙な変化、混入物の混入の度合いとその状態、及びその層のもつ質感等の層序の対比にとって重要な事柄すべてを表現することが不可能に近いことに起因するのであろう。

平面図の作成は、主に上端と下端を図化することによって、遺構の形態的特徴と各部分の正確な大きさを把握することを目的とするものである。したがって、上端から下端までの面の状態や遺構の底面のゆるやかな傾斜等は、平面図に表れないことになる。更に、深さのある遺構

も浅い遺構も、場合によっては全く同じ図面に仕上がる可能性もある。

また、発掘調査の現地を実見する機会が得られなかった第三者に対して、実測図を使って遺構や層序等の説明をすることは、その第三者が専門的知識を有し実測図を読みとることに熟練していたとしても、容易なことではない。もし、実測図を読む訓練を受けていない場合には困難さは更に増し、遺構や遺跡を理解することはほとんど不可能に近い。博物館や資料館で実測図をパネル化した展示をよく見かけることがあるが、このような意味から、それらのパネルが一般の見学者たちにとってどれほどの効果をあげているのか疑問である。

さて、このような実測図の不備を補なう記録方法として、写真撮影による記録化がある。写真には、撮影者が構図を決定し、基本的なカメラ操作を経た後シャッターをきればよいというように扱い方が至って簡便であるという特徴がある。また、撮影前に被写体に対して準備をほどこすための作業時間が必要であるが、実際の撮影に要する時間はごくわずかである。そしてフィルムの入れ忘れや紛失、カメラの誤操作や故障等という初歩的なミスさえなければ、ＤＰＥの機構に守られているため記録化に失敗することはほとんどない。ネガやスライドは、コンパクトであるため収納スペースもあまり必要とせず、保管方法も高温・湿気等について配慮すべき点があるだけでそれほどの注意を払う必要もない。以上のように写真には、取り扱いが簡便で、記録化のための時間もさほど要せず、失敗の危険性も少なく、保管についてもあまり問題にはならないという数多くの利点がある。更に、実測図では表現することが難しい被写体の微細な状況や、ある視点からの遺構や遺物の相対的な位置関係も把握でき、記録としてはかなり質の高いものである。このような数々の利点と記録の質の高さこそが、写真をして発掘調査の中でなくてはならぬ記録方法として大きな位置を占めさせてきた理由なのである。しかし、この写真にもやはりいくつかの欠点がみられる。たとえば撮影時の天候・時間・被写体の乾燥の度合い等によって色調が大きく左右されるため、同一の被写体を異なった条件下で撮影した場合にはまったく別の対象物のようになり、現地での印象との違和感を生じ易い。また、遠近法に支配されているため、正確な大きさや距離を知ることは不可能であるし、遠近法が適正に働いていない場合には、逆に被写体のもつ質感や量感を損なってしまうことにもなる。これらの欠点は、実測図の時にみてきた層序の対比に使用する場合には、大きなマイナス要因となるであろう。また、撮影者は写真を見る立場側からは第三者にすぎず、写真はその第三者の選択による限定された視点からのものであるため、多くの視点からの観察によって全体像をとらえたいという要求にはこたえられない。

以上のように、常日頃発掘調査の記録として残している実測図や写真には、多くの不備が認められる。しかし、現在、全国の発掘件数の大部分を占める記録保存を前提とした調査においては、その性格から記録の質や方法の問題に対して最も敏感でなければならないはずな

のであるが、期間や予算に追われ、基本的記録である実測図や写真を残すのに精一杯で、時にはそれさえ充分になし得ないこともあるのが実情である。このように厳しい状況下にあるのは事実であるが、先人がこれまで積極的にあるいは無意識的に残してきた文化財の１つとしての遺跡を次の世代に伝えるべき責務を担った者が、やむを得ず調査という破壊行為に及ばざるを得なくなった代償として残す記録としては充分とは言い難いのではないだろうか。また、ある課題を追及するための自主的な調査においては、調査の目的にそった数多くの情報収集がはかられるが、調査時点では問題視されなかった事象が、後に重要な問題点としてとりあげられ、残された記録中にはその情報が欠落している場合もある。このような問題に対応するためには、より質の高いより多くの情報を収集する努力を続けるか、そうでなければそれらの事象の存在状況を実物として何らかの方法で残すか、そのどちらかが必要である。実物をそのまま残すことができれば、調査時点には注意されずに見過ごされてきた情報をあらためて抽出し直すことや、発掘調査における事実を検証することも可能である。

造形保存という発想は、文化財保護思想を支える文化財の継承者としての意識と、これまで残されてきた実測図・写真を代表とする記録に対する適正な認識、そしてこれらから派生する“実物を何らかの方法で残せないか”という要求に出発点がある。

森山哲和氏は、造形保存を「ある媒体を通じて、視覚的、触覚的な三次元の空間構成をとり出すこと」と定義し、その３要素として「遺跡等における原位置的な状況の捕獲」の必要性、「搬出・搬入・保管・収納の簡便性」の要求、「恒久処理による長期保存および展示の可能性」の期待が存在することを明示している。(注５) また、造形保存を行使する対象を「留消遺物」と呼び次のように定義している。(注６)

> この留消遺物というものは、当初は視覚的、触覚的に存在し、やがて消滅していく物、つまり遺構・堆積断面・土壌等や、各文化層や生活面における未確認現象など、本来動かすことのできない不動産物をさす。とくに開発に伴う消滅、発掘行為による消滅、さらに調査遂行上やむなく消滅される。例えば多重層遺跡や複合遺跡などの上層部の遺跡遺構などがそれにあたる。
>
> 遺構等については本来ならば遺物をとりあげても、留保（埋没）されるべき存在であろうが、そうでない場合が多い。したがって消滅する時点で生ずる状態を“留消”と呼び、その存在事実の被対物を“留消遺物”と定義したい。

更に、森山氏は、今後の造形保存の方向性について「多くの試行錯誤をくり返しながらも造形保存の正しい、まさに能動的な活用をめざしてさらに努力が必要である。」とも述べている。(注７)

今回行なわれた一連の剝ぎ取り転写作業は、この森山氏の造形保存の考え方と方向付けに基礎をおくものである。

3．今回の造形保存の目的

すでに先に述べたように、富沢遺跡が遺跡として認定されたのは、第１次調査（仙台市高速鉄道建設に伴う発掘調査）が行なわれた昭和57年以来である。当時は、昭和48年から開始された富沢遺跡のほとんど全域を含む地域を対象とした、富沢長町土地区画整理事業が終了時期をむかえつつあり、また事業地内には高速鉄道の建設路線も含まれていたため、交通の利便性等から遺跡の範囲内においても各種の公共事業や民間による開発行為が数多く計画され、高速鉄道の建設をはじめとして、そのいくつかはすでに実行に移されている時期でもあった。すなわち、富沢遺跡は遺跡として認定された時点から、何らかの保存措置を講じない限り、急激な開発によって壊滅するおそれが予想されていたのである。現に今回の調査に至るまでのわずか３年の間に、当教育委員会だけでも14件の記録保存を前提とした発掘調査を実施している。このような状況下においては、早急に富沢遺跡の性格を究明し、その意味を正しく認識し、そしてその意義を広く社会に知らしめ保存の方向性を模索していく必要がある。またその努力を続ける一方で、やむを得ず記録保存を前提とした発掘調査を行わざるを得なくなった箇所からは、できるだけ多くの情報を収集しておかなければならない。

以上のような現状認識にたち、より多くの情報を得る手段の一つとして接状剝離の方法による剝ぎ取り転写作業を位置づけた。前述のように、沖積平野における層序の対比は実測図や写真等では困難な場合が多いが、接状剝離の方法を用いることによって層序断面を実物として残すことができれば、各地点間の層序の対比と理解はより確実なものとなろう。確実な層序の対比は、各層の分布域と層相変化の把握とをもたらす。また標高を表示することは、各時期の水田跡の高低差を知ることを可能とし、地形と水田跡との関係の理解のための情報ともなり得る。そして最終的には、調査成果を地点ごとの時代的変遷の把握だけで完結させず、遺跡の理解を点から面へと進めるための有効な資料となり得よう。特に水田遺構のように、調査面積が小さければ小さいほど、その調査地点だけでは全体像を把握し難いという性格をもつ遺跡においては、「点から面への理解」はとりわけ要求されることである。すなわち、確実な層序の対比は富沢遺跡全体の理解のために必要不可欠であり、接状剝離の方法による層序断面の実物保存は、そのための非常に有効な手段となり得ると考えられるのである。

また、既調査地点の近接箇所を調査する場合には、層序断面が残されていれば、前回の調査成果に基ずいた調査方法を採用することができ、これまでの成果をより有効に活用することが可能となろう。その一方では、調査を遂行する上でも調査期間の短縮化等に効果を発揮する事であろう。

更に、これらの留消遺物は展示の可能性も有しているので、遺跡の理解のための展示にも活用でき、ひいては富沢遺跡のための基礎的理解を形成することへとつながるものと期待される。

以上のような見通しをもち、これを目的として造形保存の処置を実施することは、森山氏のいう「能動的な活用」法の１例として位置づけられ得るものと考えられる。

４．剝ぎ取り転写の方法

前節で述べたように、接状剝離の方法によって得られる留消遺物は富沢遺跡を理解するための重要な情報として位置づけられている。したがってこの情報収集作業は継続的でなければならず、そのためには第一に作業の定着性が要求される。その要求に応えるには、長期的に見れば定着度が低いと思われる特殊構造等（たとえば特別誂えの方法など）を採用することはできるだけ避けるべきである。以上のような理由から、最も入手し易く大きさも一定の市販の規格であることを条件として、ベニヤ板１枚大（90cm×180cm）を基本単位として作業を進めることとした。ここでは、写真図版を用いながら層序断面の接状剝離の作業工程を述べ、作業を進める上で注意を要する点等についてもあわせて述べることとする。なお、ベニヤ板１枚大の面積の剝ぎ取り転写作業を行なう際に必要な樹脂、器材等については、第４表に示した。

(1) 対象範囲の平滑化

作業を施す壁面を決定し、鎌等を用いて転写対象範囲をできるだけ平滑にする。壁面は、ほとんどの場合、放置されるとクラックを生じてしまうが、クラックの存在は樹脂の入りこみを生じ、剝ぎ取った際に転写面にヒレ状の盛り上がりとなって現れることになる。また、窪みは転写面では逆に突出部となって現れるので、クラックや部分的な窪みはできる限り作らないように注意する必要がある。壁面に遺物や礫等が現れた場合には、可能ならば抜き取らずに一緒に捕獲した方がよい。

(2) 界線の線引き

本来ならば、壁面にはどのような細工をも施さない方が望ましい。たとえば、層と層との界線を引くことは層序の理解に対して先入観をさしはさむことにもなるし、またあまり強く引きすぎた場合にはクラックと同様にヒレ状の盛り上がりとなって現れるからである。しかし、界線はそれぞれの調査地点において各層をいかに理解し、その理解に基づいてどのように調査をすすめてきたかを示すものでもある。また層序の対比には、各調査地点毎の理解が示されていた方がより検討の材料とし易いので、あえて線引きを行なった。線引きはそれほど目立たないよう竹串の尖端を使用し、浅く細い線にした。

(3) 標高表示の準備

竹串を２ cm 程の長さに切り、標高を合わせ転写対象面の両端になる箇所に半分程埋めこみ、標高の表示とする。この竹串を一緒に剝ぎ取ることによって転写面に標高を入れたことになる。

(4) 水分をあまり含まない部分への水の吹付け（写真８）

富沢遺跡の土壌は泥炭質粘土が大部分を占め、常時湿った状態にあるのが普通である。した

第４表　使用樹脂・器材一覧表（90cm×180cm大）

作　業　工　程	使　　用　　樹　　脂	器　　材
①　対象範囲の平滑化		鎌
②　界線の線引き		竹串
③　標高表示の準備		竹串（２cm程に切ったもの）２、レベル、コンベックス
④　水の吹付け		霧吹き１
⑤　塗膜の形成	サンプレンWE106 100g、アセドン 300g	霧吹き１、紙コップ(小)１・(大)１、台秤、撹拌棒、防塵メガネ、有機マスク、ポリエチレン手袋
⑥　塗模の強化 ｉ）第１回目塗布 ii）布による裏打ち iii）第２回目塗布	トマックNR−51　２kg、シンタロン　400g アラルダイトHY837　400g トマックスNR−51　２kg、シンタロン　400g アラルダイトHY837　400g	ハケ１、紙コップ（大）２、台秤、撹拌棒、防塵メガネ、有機マスク、ポリエチレン手袋 ガーゼ(30cm×8m)、竹串(20〜30本)、カッター(大)、ハサミ、ポリエチレン手袋 ハケ１、紙コップ(大)２、台秤、撹拌棒、防塵メガネ、有機マスク、ポリエチレン手袋
⑦　不必要部分の除去		カッター(大)、油性マジック、錘、半貫板(２m)１
⑧　剝ぎ取り作業		移植ベラ
⑨　未反応土壌の除去		移植ベラ、ホース
⑩　パネル化	アラルダイトGY1252　１kg、マイクロバルーン適量 アラルダイトHY837　400g	ベニヤ板(90cm×180cm×9mm)１、角材(3cm×3cm×180cm)４釘、攪拌容器(バケツ等)、攪拌棒、ヘラ(板切れ)、土のう15、金ヅチ、防塵メガネ、有機マスク、ポリエチレン手袋
⑪　後処理	サンコールSK50　200g サンコールシンナー　１kg	霧吹き１、紙コップ(小)１・(大)１、台秤、撹拌棒、防塵メガネ、有機マスク、ポリエチレン手袋
⑫　標高の標示		水糸、１寸釘２、金ヅチ、油性マジック

がって親水性に富む合成樹脂が効果的であるが、時おり介在する砂層や上部の粘土質シルト層等は乾燥し易く、平滑作業等の準備の間にさえも乾燥する場合があるので、湿った部分と同一の条件にするため霧吹きで水を吹付ける。

⑸　塗膜の形成（写真９）

親水性のある合成樹脂サンプレンWE106をアセトンで１：３の割合で稀釈し、霧吹きで吹付ける。この時、サンプレンWEが眼に入ったりしないように防塵メガネを着用し、アセトンには吸入すると中毒をおこすおそれがあるので有機マスクを着用する必要がある。またポリエチレン手袋も着用する。どのような作業においても作業従事者の安全をはかることが必要である。また、それほど長い時間を要さない作業とはいえ、有機マスクを着用せずにアセトン臭の中で持続的に作業を行なうことは容易ではなく、細部に気を配ることができずに吹付けにムラが生じることも多い。やはりこのような作業においては、対象とじっくり取り組めるだけの時間が必要である。ハケで塗布することも可能であるが、作業の能率性とムラの生じにくさ等から霧吹きの方がより効果的である。

⑹　塗膜の強化（写真10、11、12）

サンプレンWEだけでは引張り強度にすぐれず、乾燥後の収縮率も大きいため、トマックを主体とした合成樹脂を塗り重ねて強度を増す必要がある。

①　トマックNR−51にシンタロン、アラルダイトHY837を５：１：１の割合で混合し、よく攪拌した後、サンプレンWEによる塗膜面の上にハケで塗り重ねる（第１回目の塗布）。計算の手間を省くため、トマック１缶（２kg）に対して、シンタロン、アラルダイトHY837の必要量を混合したトマック硬化剤もある。

②　強度をさらに増すため、第１回目のトマックの混合樹脂の上に寒冷紗もしくはガーゼを貼

り付ける。貼り付け作業は、樹脂の硬化があまり進んでいない生乾きの状態の時がよい。硬化が進みすぎていると樹脂にうまく貼り付かず、第2回目の樹脂の塗布の際に第1回目の樹脂と布との間に気泡を生じ、その部分の強度が失われ剝ぎ取る際に部分的に破れてしまうことがある。貼り付ける布はあらかじめ棒に巻きつけておくと便利である。

③ 布の貼り付けの終了後、もう一度トマックを主体とした合成樹脂を塗り重ね、サンドイッチ状にする。使用量は第1回目の時と同量である。その後しばらく放置し、硬化を待つ。

(7) 不必要部分の除去

塗膜が充分に硬化したら、上下左右の不必要部分をカッターで切り除去する。特に左右の不必要部分を除去する時は、垂直に除去できるように錘を用いてあらかじめトリミング線をマジックでマーキングしておく。この時、標高に合わせた竹串の位置がすぐにわかるように印をつけておけば、後に竹串が抜けたとしても容易に探すことができる。

(8) 剝ぎ取り作業（写真13）

剝ぎ取り作業は、2～3人で一気に力まかせに剝ぎ取るだけでよいが、断面上部の乾燥して堅くなっている部分や遺物・礫等が含まれている箇所は、移植ベラ等で助けおこしてやると脱落も少なくなる。また、塗膜の形成前に埋め込んだ竹串が脱落しないように注意する。

(9) 未反応土壌の除去

転写面には、実際には反応していない土壌が土塊となって付着している場合が多いので、転写面に傷をつけないように注意しながら移植ベラ等で土をほぐすようにして崩し、放水によって除去する。この作業を何度か繰り返し、反応していない土壌を完全に除去する。

(10) パネル化

トマックを主体とした合成樹脂は、放置しておくと時間を経るに従って硬化が徐々に進み、特に気温の低い時期には柔軟性がほとんど失われてしまう。そして時には、わずかな衝撃でさえも破損する場合もあるので、パネル化しておいた方が望ましい。また、展示などで使用する際には、パネル化してあれば展示のための特別な準備も必要とせず、展示計画の時点で必要なスペースをよむこともできるので合理的である。パネル化のための接着剤はアラルダイトGY1252を使用し、アラルダイトHY837を硬化剤として5：2の割合で混合する。増量剤としてマイクロバルーンを使用する。作業順序は、まずアダルダイトGY1252にペースト状になるくらいの量のマイクロバルーンを加え、よく攪拌し、次にアダルダイトHY837を混合する。混合の終了後、角材（太さ3 cm×3 cmを使用）とベニヤ合板（90cm×180cm×9 mmを使用）で作製したパネルの上に、ヘラもしくは薄い板切れを使って手早く引きのばす。パネル全面への塗布の終了後、転写資料の側縁とパネル側縁とが一致するようにして転写資料をおき、端がめくれないように注意しながら土のう、板材等で均等に荷重をかけ、しばらく放置する。

余分な接着剤やはみ出た接着剤はヘラ等で除去しておく。

⑾ **後処理**

転写された土壌は、ごく薄い層状をなしているためすぐに乾燥しやすい。乾燥すると全体的に白っぽくなり色調の濃淡が失われ、層位の区別が明瞭にはつきにくくなる。これは層序の対比の妨げともなるし、展示を考慮すれば現地での色調を保持することが必要となる。また、土壌によっては表面で遊離する土壌粒子もあるので、土壌粒子を固定することも必要である。後処理にはサンコール SK50 を使用し、稀釈剤としてサンコールシンナーを用いた。サンコール SK50、1 に対してサンコールシンナー 5 の割合で稀釈し、4 ～ 5 回に分けて霧吹きで吹付けを行なった。これよりも濃度が低い場合にはあまり効率的ではなく、高い濃度の場合はムラを生じやすいのでこの程度の濃度が最も適当であろう。当然のことであるが、この作業を行なう際にも防塵メガネ、有機マスク等を着用する。

⑿ **標高の表示**

以上の工程を終えた後、最後に標高の表示を行なう。標高は、現地で断面図を作成する時と同じ要領で水糸を張ることによって表示する。(3)の工程で埋め込んだ竹串を引き抜き、かわりに 1 寸釘を打ち込み、釘に水糸を張る。とりあえずパネルの側面にはマジックで標高値を書き入れておく。

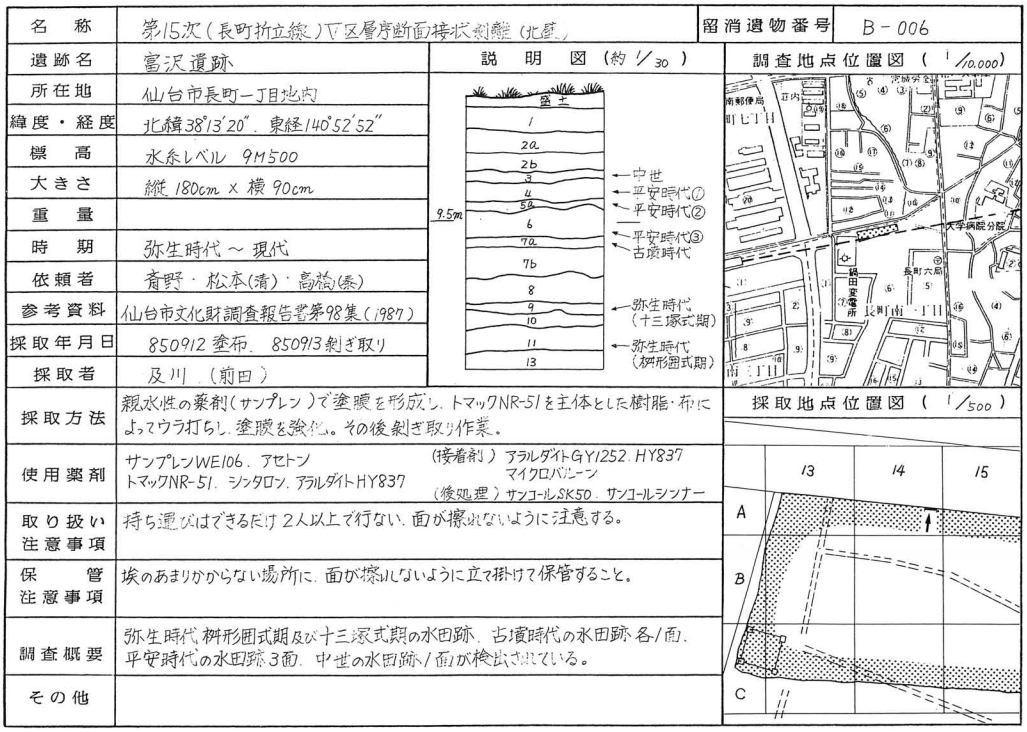
5．留消遺物台帳の作成

さて、以上の作業工程を経て得られた留消遺物には、森山氏の指摘[注8]のように“遺物”と呼称した限りにおいて、他の一般の土器、石器、木器等の遺物と同様に採取地点を正確に記録しておかなければならない。特に留消遺物には原位置再生の約束がなされていなければならないのでなおさらである。このような配慮の欠けた留消遺物は、出土地点や出土層位の不明な採集遺物と同様の位置付けしか与えられない。

これらの留消遺物については、遺物を取り上げる際に遺物台帳を作成するように、台帳を作成することとした。留消遺物カードの作成にあたっては森山（1981）を参考とし、それぞれの留消遺物について必要事項を記入して台帳とした。また、このカードをコピーし、パネル裏面に貼り付けることによって、一般の遺物に対して行なうネーミングに替わるものとする。いわば留消遺物について身元証明を付したことになる。第34図は今回作成した留消遺物カードであり、第33図は第15次調査Ⅴ区における記載例である。

6．おわりに

今回、富沢遺跡内において接状剝離の方法による造形保存を行なった。今回の造形保存は、富沢遺跡全体の理解のために活用することを主目的とした、能動的な役割をめざした保存である。今後、この作業を継続していくことによって富沢遺跡の理解の深化がはかられる



第33図　留消遺物カード記載例

ことになろう。しかし作業を継続していくにあたっていくつかの課題も残されている。たとえば、パネル化による収納場所の問題や作業に要する経費と時間の軽減、立体的捕獲のための接状剥離以外の簡便な方法の導入、そしてそれらの組み合わせによる三次元空間の構成等があげられる。

富沢遺跡の調査は昭和61年度中に29次を数えるに至っている。また62年度にもすでに数件の調査が予定されており、これらの調査はすべて開発行為に伴う、記録保存を前提とした調査である。今後は、先にあげたいくつかの問題の解決方法を模索しながらも、その一方でこのような状況下にあることを直視し、富沢遺跡の保存と理解のために更に努力を続けていかなければならない。

なお、当教育委員会では昭和61年度に仙台市台ノ原に所在する五本松窯跡において、平安時代の窯跡1基の切り取り保存を行っている。この作業もまた、今回富沢遺跡で行った造形保存の理念と軌を一にするものである。今後、仙台市においては、このような種々の方法によって遺跡における三次元の空間構成を実物として保存する努力がなされていくことであろう。

謝辞

本稿を草するにあたり多くの方々より御教示、御助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。

加藤　稔、森山哲和、安孫子昭二、宮崎　博、山中一郎、田中則和、山崎　丈、井口直司、森川昌和、入江文敏、上野　晃、高麗　正、岡村道雄、肥塚隆保、会田容弘

特に、森山哲和氏には、東久留米市下里本邑遺跡をはじめとする数々の遺跡における造形保存の展開例を現地で実見させていただいたほか、福井県大飯町浜彌遺跡においては接状剝離と離状剝離の作業も実見させていただき、その際に多くの御教示を得た。

注

注１）仙台市教育委員会　1983『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II』（仙台市文化財調査報告書第56集）仙台市教育委員会　1984『富沢水田遺跡　第一冊　病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書』（仙台市文化財調査報告書第67集）仙台市教育委員会　1984『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III』（仙台市文化財調査報告書第69集）斎野裕彦・及川　格　1986「＜速報２＞仙台市富沢水田遺跡の調査」（『考古学ジャーナル』No. 260 pp. 23～25）他

注２）吉岡恭平　1986「IV. 富沢水田遺跡（C－301）鳥居原地区」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報V』（仙台市文化財調査報告書第89集）pp. 17～33

注３）渡辺　誠　1986「〔１〕富沢水田遺跡」『仙台平野の遺跡群V』（仙台市文化財調査報告書第87集）pp. 5～13

注４）渡辺　誠　1986「富沢水田遺跡　泉崎浦地区」『年報７』（仙台市文化財調査報告書第94集）pp. 24～26

注５）森山（1982）p. 308　*ll.* 6～9

注６）森山（1982）p. 308　*ll.* 11～18

注７）森山（1982）p. 313　*ll.* 16～17

注８）森山（1982）p. 308　*l.* 31～p. 309　*l.* 6

参　考　文　献

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター　1980「層位・遺跡断面等の剝ぎ取り転写法」『埋蔵文化財ニュース』28

沢田正昭・秋山隆保　1981「遺跡・遺物の保存科学」奈良国立文化財研究所年報1981　pp. 62～63

森山哲和　1981「第VI章　保存科学 ― 遺跡の造形保存法 ―」『鈴木遺跡IV』（鈴木遺跡刊行会）pp. 350～359

1982「第XII章第四節　造形保存の方法と意味」『下里本邑遺跡』（下里本邑遺跡調査会）pp. 307～314

1984「〔付篇３〕小山田 No. 1　遺跡の保存整備」『小山田遺跡群VI』（小山田遺跡調査会）pp. 214～225

堀岡邦典・青木繁夫　1984「遺構断面層序の剝ぎ取り保存および貝層断面の保存法」『古文化財の自然科学的研究』pp. 13～23

永田信一　1984「調査記録のとり方」『考古学調査研究ハンドブックス　1　野外編』pp. 45～59

青木　豊　1985『博物館技術学 ― 博物館資料化への考古資料 ― 』

留消遺物カード

名称		留消遺物番号	
遺跡名		説明図（　／　）	調査地点位置図（　／　）
所在地			
緯度・経度			
標高			
大きさ			
重量			
時期			
依頼者			
参考資料			
採取年月日			
採取者			
採取方法			採取地点位置図（　／　）
使用薬剤			
取り扱い注意事項			
保管注意事項			
調査概要			
その他			

仙台市教育委員会

第34図　留消遺物カード

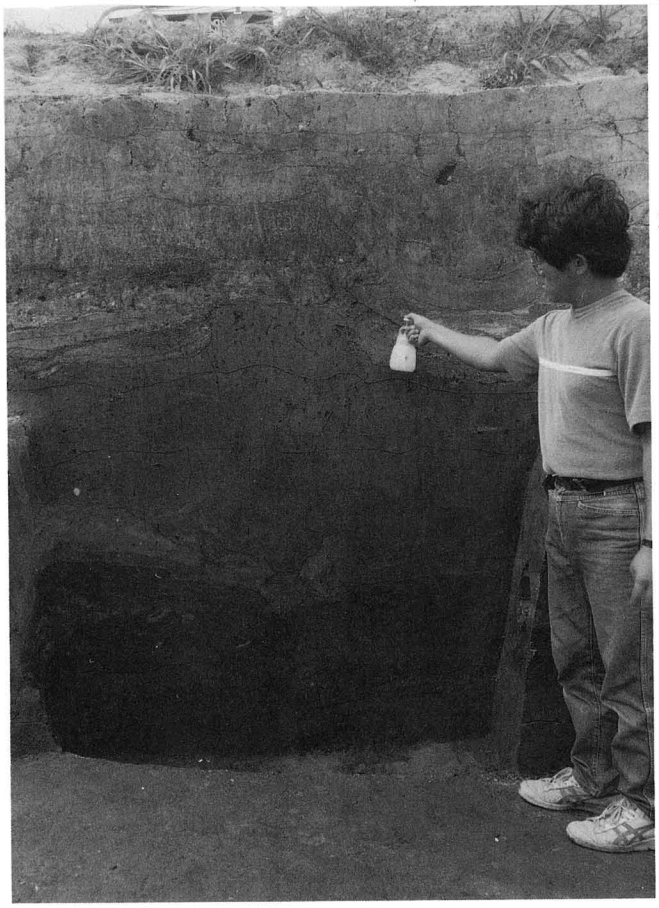


写真８　水の吹付け

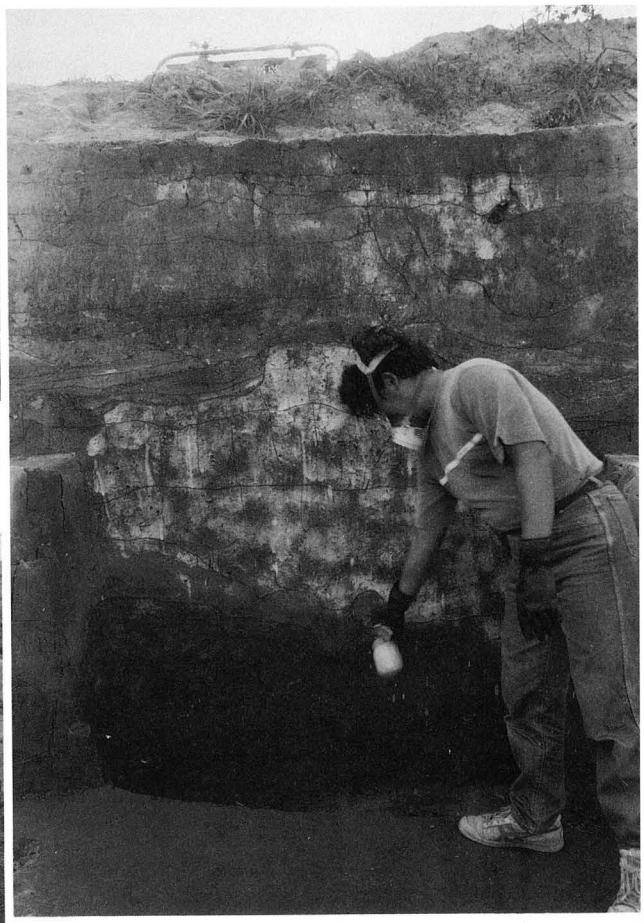


写真９　塗膜の形成

写真10　塗膜の強化　①第１回目塗布

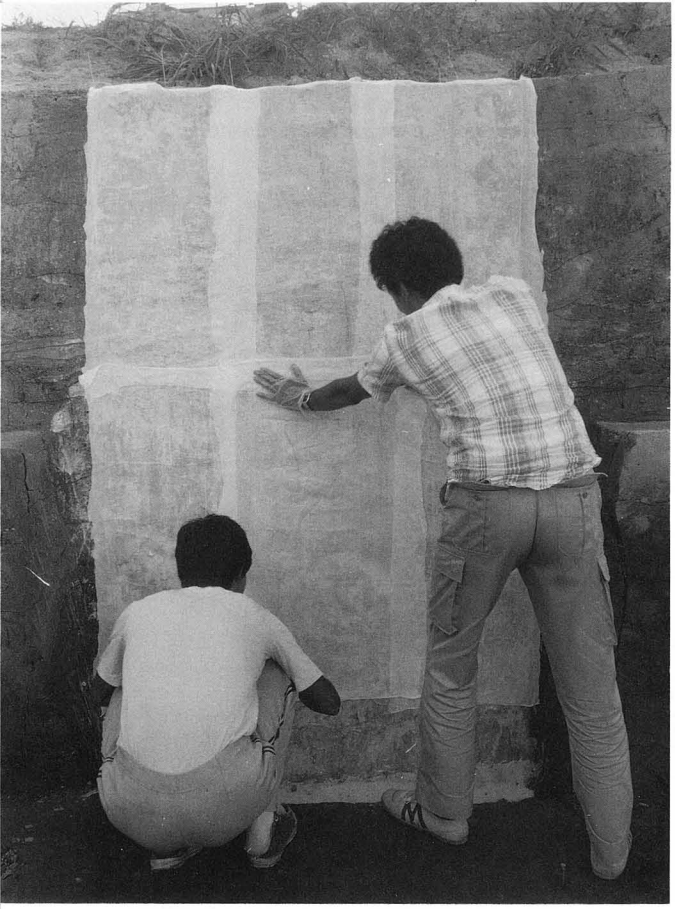


写真11　塗膜の強化　②布による裏打ち

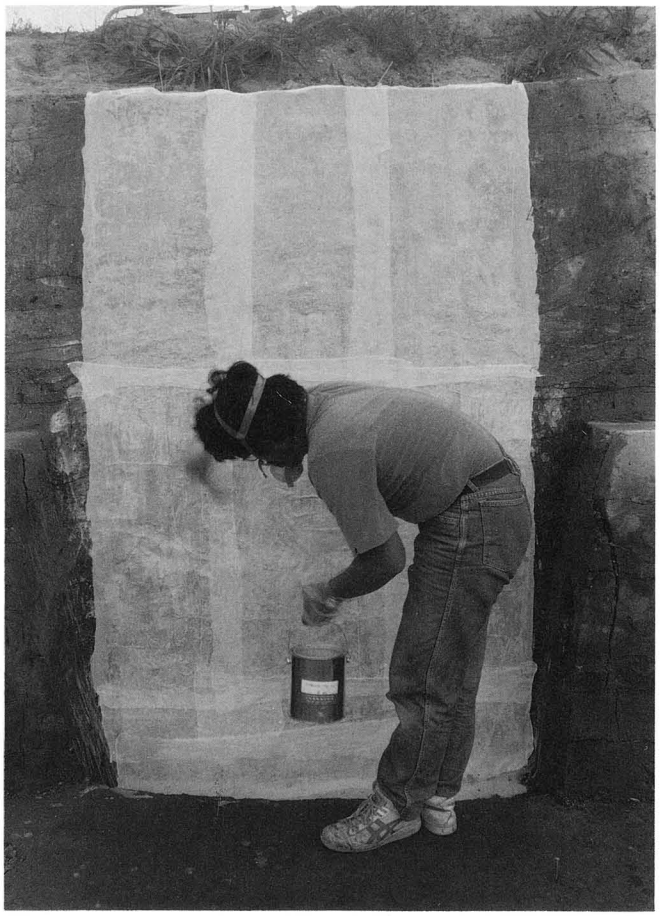


写真12　塗膜の強化　③第２回目塗布

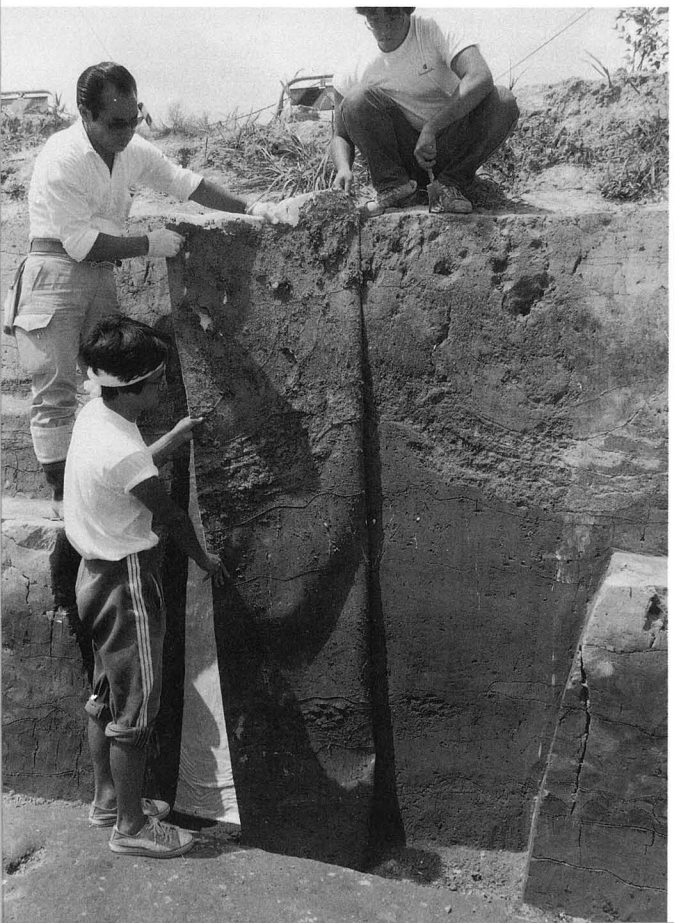


写真13　剝ぎ取り作業

第７章　検出された遺構と遺物

第１節　遺構の種別と遺物の分類

１．遺構の種別

仙台市教育委員会では各種の遺構についてSAからSSまでとSXの略号により表示しており、富沢遺跡第15次調査において使用される略号は以下の通りである。

ＳＢ：建物跡　　ＳＤ：溝　跡　　ＳＥ：井戸跡　　ＳＫ：土　壙　　ＳＰ：ピット

ＳＲ：河川跡　　ＳＸ：その他

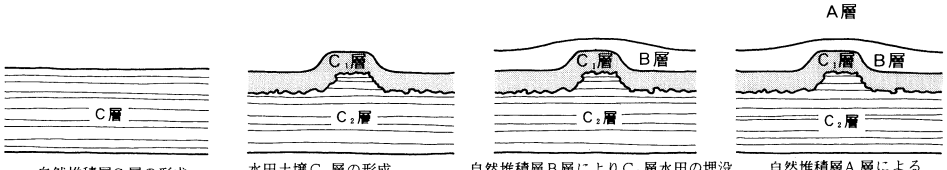
２．水田跡について

水田跡は立地・地形・水田域・水田土壌・用水・水田形態などによる水田の構造の把握によって一遺構として認識される。中でも水田形態は種々の構成要素により成立している。構成要素には畦畔・畦畔により区画された水田・杭列・杭・水路・堰・水口などの他、水田面と地形との関連性がある。これまでの富沢遺跡の調査では、水田の形態の判明したものは数少なく、水田跡の検出は主に畦畔及び畦畔により区画された水田の検出によりなされている。

遺構として水田跡を認識する示標は畦畔の検出と考えられるが、富沢遺跡では畦畔の他に畦畔ではない畦畔状の高まり ― 擬似畦畔 ― も認められる。水田跡の調査においては、この両者の判断を行うことが不可欠とされる。特に擬似畦畔は水田跡の検出された層位の上位あるいは下位において、畦畔の直上あるいは直下で確認される場合が多く、第35図はその模式図である。この模式図ではC_1層が水田土壌であり、C_1層上面において水田耕作が行なわれており他層は自然堆積層である。またC_1層はC層最上部が水田土壌化された層であり、C_2層は水田土壌化されなかったC層である。この場合B層上面の高まりを擬似畦畔A、C_2層上面の高まりを擬似畦畔Bとする。

擬似畦畔A：C_1層水田の畦畔直上に認められる自然堆積層B層上面の畦畔上の高まりをいう。これはB層がC_1層上面の起伏の影響を受けて堆積した結果形成されたものである。

擬似畦畔B：C_1層水田の畦畔直下に認められるC_2層上面の畦畔上の高まりをいう。これはC_1層水田の耕作の影響をさほど受けない畦畔直下においてC_2層上面が畦畔状に残存したものである。この擬似畦畔Bについては、C_1層上面において畦畔が検出されなくともC_2層上面での



自然堆積層C層の形成　　水田土壌C_1層の形成　C_2層上面の擬似畦畔Bの形成　　自然堆積層B層によりC_1層水田の埋没　B層上面の擬似畦畔Aの形成　　自然堆積層A層によるB層の埋没

第35図　畦畔・擬似畦畔模式図

擬似畦畔Bの検出によりC_1層水田の存在が想定される。

尚、擬似畦畔A・擬似畦畔Bは全ての畦畔に関して認められるものではない。

3．遺物の分類

仙台市では各種の遺物についてAからSまでとXの略号により表示しており、富沢遺跡第15次調査において使用される略号は以下の通りである。

A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器(非ロクロ)　D：土師器(ロクロ)

E：須恵器　G：平瓦　I：陶器　J：磁器　K：石器・石製品

L：木器　M：木簡　N：金属製品　O：自然遺物　P：土製品

T：赤焼土器　X：その他の遺物

4．出土遺物

富沢遺跡第15次調査においてII～VII区における遺物出土状況は以下の通りである。

第5表　III区基本層位出土遺物数量表　①復元口縁部～底部②復元口縁部～体部③復元体部～底部④口縁部破片⑤体部破片⑥底部破片⑦台部

	C-壺	C-甕	D一坏					D一甕			E一坏				E一甕		坏		DET	IJ	骨	鉄製品	古銭	木製品
	③	⑤	①	③	④	⑤	⑥	④	⑤	⑥	③	④	⑤	⑥	⑤	⑥	①	⑤						
1　層			1		1	3			13	1		1	2	1	2	1	1			19		1		1
2a層		1		3	3	8	3		33			1	8	3	5	1	1	2	2	20	4	1	1	
2b・3層								2	1															
3b層						2			5		1			1				1		3				
4　層	1								3															

第6表　III区遺構出土遺物数量表

SR1	1　層　：D坏体部2　D坏底部1　D甕復元(体部～底部)1　D甕体部2　E坏口縁部1　E坏体部1　I2　J1　礫1
	7層下か？：E甕口縁部1　E甕体部1
SE1	2　層　：I1
SK1	1　層　：D甕体部1　E甕体部1
	2　層　：D坏体部1　D甕底部1
	6　層　：D坏体部1　D甕体部2　E坏口縁部1
SK3	底　面　：礫1
SK5	1　層　：D坏体部1　骨片1
SK6	1　層　：D甕体部1
SD5	1　層　：D甕体部1

第7表　III区墓壙群出土遺物数量表

	古　銭	土器・陶器	金属製品	木製品	その他
1号墓	寛永通宝3		不明鉄製品1	ツチンボ1	ガラス鏡1、歯1、骨片
2号墓		火消し壺1			骨片、礫1
3号墓	寛永通宝1	陶器碗1(掘り方)	鉄鉋玉1		骨片、土師器破片1、礫1
4号墓	寛永通宝1	陶器破片1	不明鉄製品1		歯1、骨片、樹木片1
7号墓					骨片
8号墓	寛永通宝21				礫1
9号墓	寛永通宝11、仙台通宝3	陶器破片1、磁器破片1	箸1　吸口1	提灯の底板1、羅宇1	骨片、土師器破片2
10号墓	寛永通宝3	陶器碗1	不明鉄製品1	数珠玉1、不明木製品1	骨片
11号墓	寛永通宝6			数珠玉1	歯2、骨片
7号墓東側の土坑			雁首1、針状の鉄製品1		
墓坑関係遺物	寛永通宝2	火消壺、蓋1壺1			

第8表　IV区基本層位(1～6層)出土遺物数量表①復元口縁部～底部②復元口縁部～体部③復元体部～底部④口縁部破片⑤体部破片⑥底部破片⑦台部

	C一坏		C一甕		D一坏			D一甕			E一坏			E-甕	T一坏			DET	I・J	K	金属製品	礫	自然遺物
	④	⑤	④	⑤	④	⑤	⑥	④	⑤	⑥	④	⑤	⑥	⑤	④	⑤	⑥						
1　層					1		1		1					1				1	27	1		2	2
2　層						1		1	5	1		2				2	1	1	25		1	5	
3a・3b層					17	26	5		19	1	11	2	1	5	5	6	4	8	17			54	
4b層				1	11	27	8	2	36	2	18	14	4	1	2	1	1	3	2			19	2
5a層					11	22	3	6	37	1	10	7	2	3	2			3				34	1
6　層	2	8	1	3																1		6	

第９表　Ⅳ区基本層位（7b　～32ａ層）出土遺物数量表

７ｂ層	Ｃ壺１　Ｃ坏２　鉄鎌１
７ｃ層	Ｂ甕？２　Ｂ体部２　Ｋ１
８　層	Ｂ体部12　Ｋ２
10ａ層	Ｂ体部１
11ａ層	Ｂ壺１　Ｋ４
12　層	Ｋ６
32ａ層	Ｋ１

第10表　Ⅳ区遺構出土遺物数量表

ＳＲ１	埋　土　中：Ｄ甕体部１　礫３
ＳＫ３	埋　土　中：礫５
ＳＫ５	埋　土　中：礫59　古銭１　木椀１
ＳＫ６	埋　土　中：Ｄ坏底部１　礫13
ＳＫ11	埋　土　中：礫１
ＳＫ12	埋　土　中：Ｅ坏口縁部１
ＳＤ４	埋　土　中：Ｃ坏口縁部１　Ｃ坏体部６　Ｃ甕体部４　礫８
ＳＤ５	埋　土　中：Ｄ甕体部１　礫４
ＳＤ12	埋　土　中：Ｄ坏口縁部１　Ｅ坏体部１　Ｉ３
ＳＤ13	堆　積　土：Ｄ甕口縁部１　木片１　Ｉ３
	２　　層：Ｄ坏口縁部１　Ｅ坏口縁部１　Ｔ坏体部１
	６層埋土：Ｃ坏体部１
ＳＤ14	埋　土　中：Ｄ坏体部１　Ｅ坏口縁部１　Ｅ坏底部１　Ｉ３　礫25　自然遺物１
ＳＤ15	埋　土　中：Ｄ甕口縁部１　礫８
ＳＤ16	埋　１　層：Ｄ坏口縁部１　Ｄ甕体部２
ＳＤ20	埋　土　中：Ｉ１
ＳＤ23	４　　層：Ｄ坏体部１　Ｅ坏口縁部１　礫19
	埋　土　中：ＤＥＴ１
ＳＤ26	埋　土　中：Ｄ坏口縁部１　Ｄ甕底部１　Ｅ甕体部１　Ｉ24　礫102
	壁　　面：Ｄ坏口縁部１　Ｄ坏体部２　礫３
	３　　層：Ｄ甕体部１　Ｄ甕底部１　ＤＥＴ２　礫２
	４　　層：Ｄ坏口縁部３　Ｄ坏体部３　Ｄ坏底部２　ＤＥＴ１　石臼１　礫88
	５　　層：礫４
	６　　層：礫11
	11　　層：杭１
ＳＤ27	埋　土　中：Ｄ甕体部２　Ｅ甕体部１　Ｉ１　礫７　骨１　自然遺物８
	壁　　面：礫２

第11表　Ⅴ区基本層位（１～６層）出土遺物数量表

①復元口縁部～底部②復元口縁部～体部③復元体部～底部
④口縁部破片⑤体部破片⑥底部破片⑦台部

	Ｄ一坏			D-高台付坏		Ｄ一甕			Ｅ一坏			Ｅ一甕		Ｔ一坏		ＤＥＴ	ＩＪ	礫	鉄製品
	④	⑤	⑥	⑥	⑦	④	⑤	⑥	④	⑤	⑥	④	⑤	④	⑤				
１　層											1				1		8	1	
２　層	4	18	4			3	61	1	1	5	2	1	14		1	8	18	3	
３ｂ層	1						2								1	2	1		
４ｂ層	43	80	24	5	1		25	4	4	9	3		1	2	4	11	3		1
５ａ層	10	36	2		1	1	24		2	3			1					4	
６　層	1	1					2	1											

第12表　Ⅴ区基本層位（７ａ～11ａ層）出土遺物数量表

７ａ層	Ｃ坏復元口縁部～底部１　Ｃ壺or甕復元体部～底部１　Ｃ甕口縁部１　Ｃ甕体部１
７ｂ層	Ｂ壺２
８　層	Ｂ１　Ｋ２
９ａ層	Ｂ壺２　Ｋ２
11ａ層	Ｂ壺１　Ｂ体部２　Ｋ１

第２節　II区の調査

１．調査概要

II区は、前年度に実施した道路北側試掘調査の結果に基づき、盛り土直下、現代以前とみられる水田土壌の存在する地点から西側に調査区を設定した。

調査区の中央部は広南病院跡地にあたり、コンクリートの基礎による攪乱が点在したために、工事用道路の確保と合わせ、南北10m、東西45mの方形のトレンチとした。

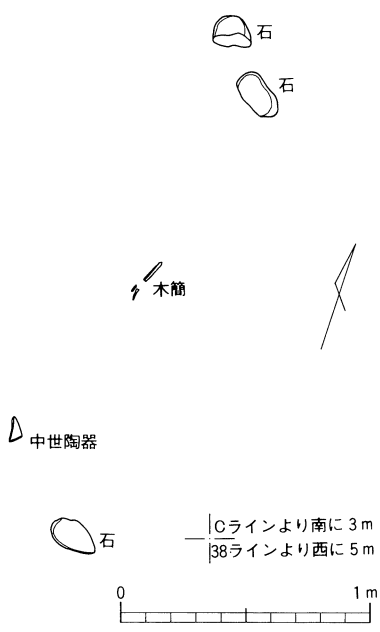
さらに、調査区中央西寄りには当時も機能しているとみられた下水管が確認されたために、５ｍ程度離して約100m²のトレンチを設定した。

東側（II A区）、西側（II B区）に分けて調査を開始したが、6a層上面で中世に属すると考えられる水田を検出し、畦畔が調査区外の南北に延びていくことが確認できたため、II A区、II B区を結合して拡張し、約1,000m²のトレンチとし調査を続けた。

２．22層の調査

①22層の分布・土性：層分布は調査区全面に広がるオリーブ褐色の粗砂層である。

②22層上面の標高・地形：標高はC－37グリッドで８ｍ、D－38グリッド付近で7.5mまで低くなり、39ラインで８ｍ、41ラインで8.7m、42ラインで９ｍと段差をもちながら東に徐々に高くなっていく。



第36図　II区22層上面遺物出土状況

③検出遺構と出土遺物：遺構の検出はみられなかったが、D－37グリッド、標高7.7mの22層上面、21層下層で木簡と中世陶器１点を出土した。またD－37グリッド、調査区南辺、標高7.7mの22層上面でも加工痕のある木簡１点が出土した。

第53図１（写真358－7）：長方形の針葉樹柾目材で、上端は山形に整形されているが、下端は欠損しており原型は不明である。残存長12.9cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmを測る。表裏両面共に風化が著しく、木目が浮き出ている。墨痕は、片面に５文字分確認できるが、他面には確認できない。上から５文字目の部分で欠損しており、墨痕は上部にいくにつれて次第に薄くなる。判読は、墨が木目に沿ってにじんでいるため困難である。また、検出地点の排土の中から発見された板材は、上端が欠損して接合はできないもののこの木簡の下端部分とみられる。

第53図２（写真358－8）：加工痕のある木簡で、上端は欠損しているが残存長14.6cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmを測る。針葉樹柾目材で下端は尖っている。墨痕は確認できない。

第53図３（写真357－2）：産地は東北と考えられる。器形は甕である。製作年代は鎌倉後半～南北朝期であろう。

３．21層の調査

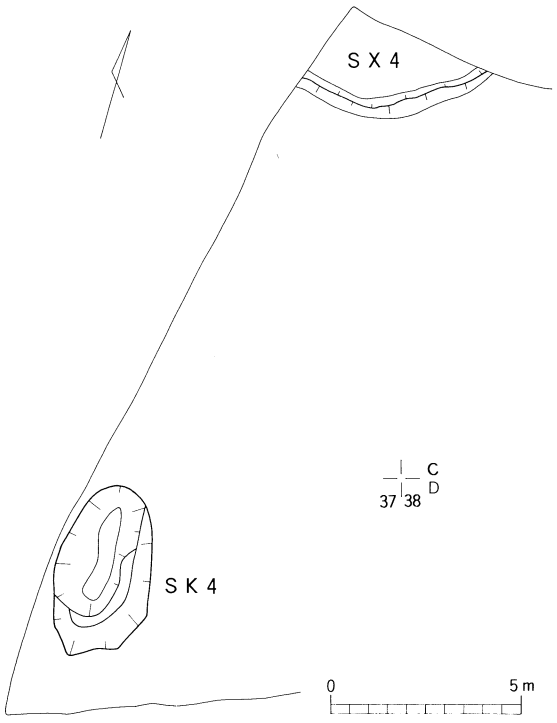
⑴　調査概要

①21層の分布・土性：層分布は調査区の西側、38ライン以西に広がり、層厚は５～30cm程である。オリーブ黒色粘土質シルトで、凝灰岩粒や炭化物を含む。

②21層上面の標高・地形：標高はＣ－37グリッドで8.2m、Ｃ－38グリッドで7.8m、Ｄ－37グリッドで7.7m、西側から東側、かつ北側から南側に傾斜する。

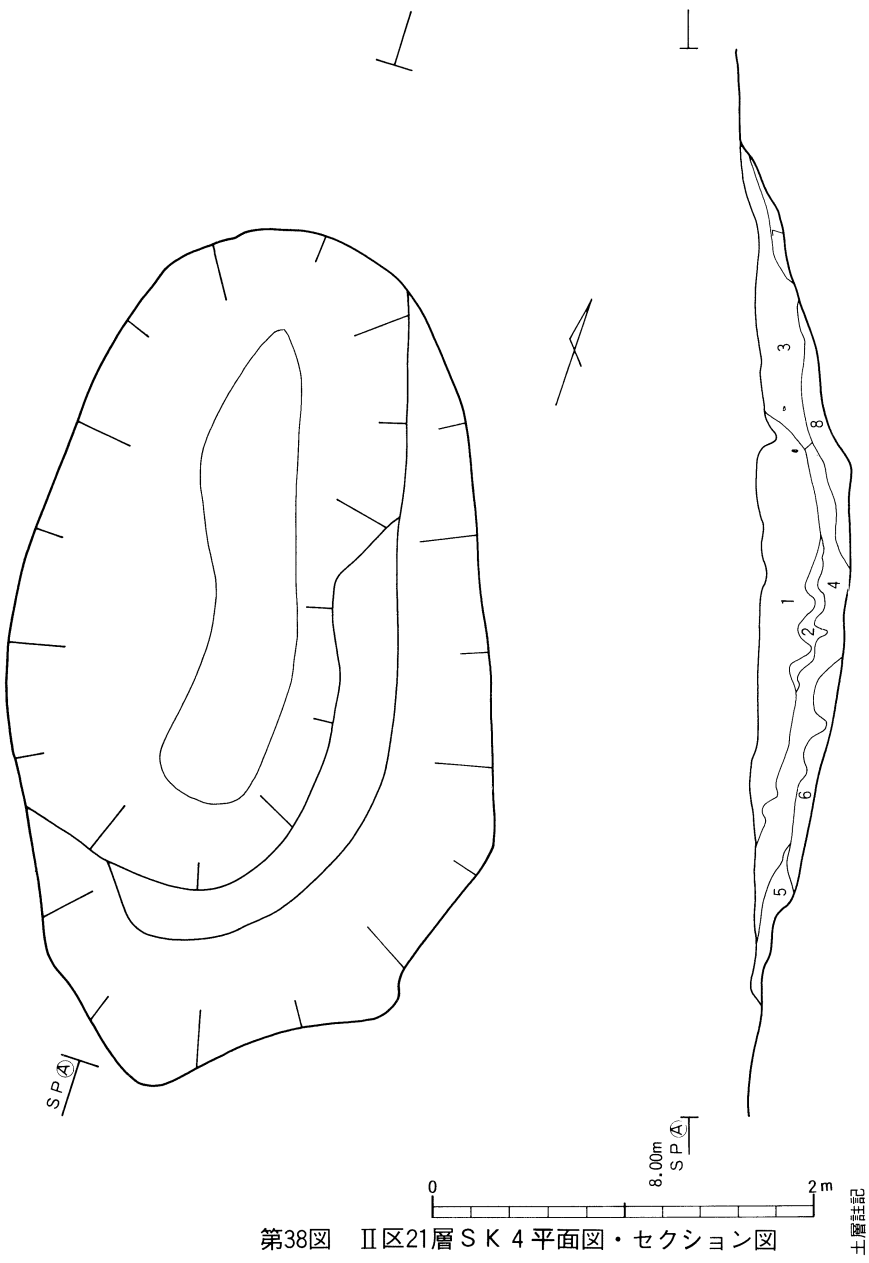
③検出遺構と出土遺物：調査区西端で土坑１基、性格不明遺構１基を検出し、土師器、須恵器、中世陶器、砥石、古銭、鉄製品、馬骨が出土している。

⑵　**ＳＫ４**：Ｄ－37グリッドに位置する。凝灰岩粒を多く含む21層上面、ＳＤ－１の下層、標高7.3～7.5mで検出された。形態は、上端平面形はやや崩れた長円形で、長軸4.7m、短軸2.6mを測る。断面形は舟底形を呈し、壁面は緩やかに立ちあがる。深さは35～50cm、堆積土は８層に分けられ、上層には火山灰を含み、下層は植物遺体、ブロック状の粗砂を含み、自然堆積により埋まったものと考えられる。堆積土１層から土師器破片１点、６層から馬骨とみられる骨片が出土している。



第37図　Ⅱ区21層上面検出遺構平面図

⑶　**ＳＸ４**：Ｂ～Ｃ－37～38グリッドに位置する。調査区北西角、標高8.1～8.3mでプランの一部を検出した。東西4.5m以上、南北3.3m以上で、調査区内では半円形を呈し、北側に緩やかに落ち込む。検出面の表面は上層の17層に乱されている。断面形は逆台形を呈し、深さは東側で深く30cm、西側で10cm程である。堆積土は灰色シルトで植物遺体を含み、土師器、須恵器、中世陶器、砥石、鉄製品を各１点ずつ出土している。プラン南側の底面、ないし外側、基本層位21層上面に木片が分布する状況がみられた。これらには加工痕は観測されず、かつ施



第38図　Ⅱ区21層ＳＫ４平面図・セクション図

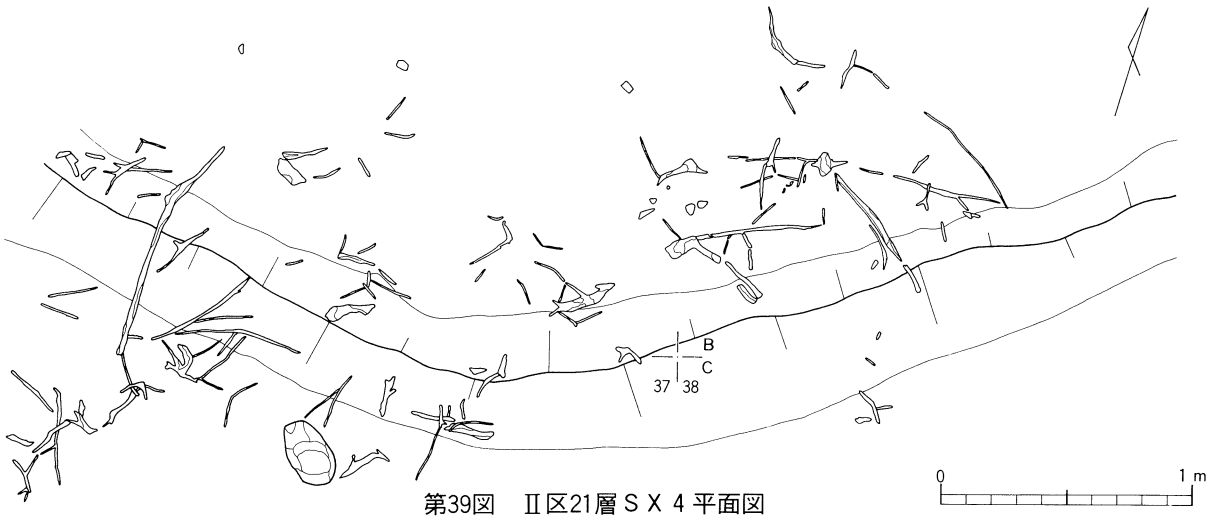
設した痕跡や規則性もみられなかったことから遺構の一部とは断定しがたい。

第56図１（写真357－3）：常滑産とみられる大甕の破片である。製作年代は鎌倉時代であろう。

４．16～20層の調査

⑴　調査概要

①16～20層の分布・土性：層分布は調査区の西側、38ライン以西に広がり、層厚は10～60cm 程



第39図　Ⅱ区21層ＳＸ４平面図

である。オリーブ黒色系の粘土ないし粘土質シルトである。

②16～20層上面の標高・地形：標高はＣ～Ｄ－37グリッドで8.2～8.4m、Ｃ－38グリッドで8.1m、西側から東側に傾斜する。

③検出遺構と出土遺物：調査区西端で溝跡を１条検出し、堆積土から土師器が出土している。

⑵　**ＳＤ16**：Ｃ～Ｄ－37グリッドに位置する。調査区内で長さ12.5m を検出し、方向は真北に対してＮ－5°－Ｅである。上端幅は1.8～2.5m、下端幅は1.2～1.7m を測る。深さは20～35cm、断面形は緩やかに立ち上がる舟底形を呈し、堆積土は砂質シルトで、火山灰を含み、底面には細砂が堆積しており、土師器片を出土している。

５．13a 層の調査

⑴　**調査概要**

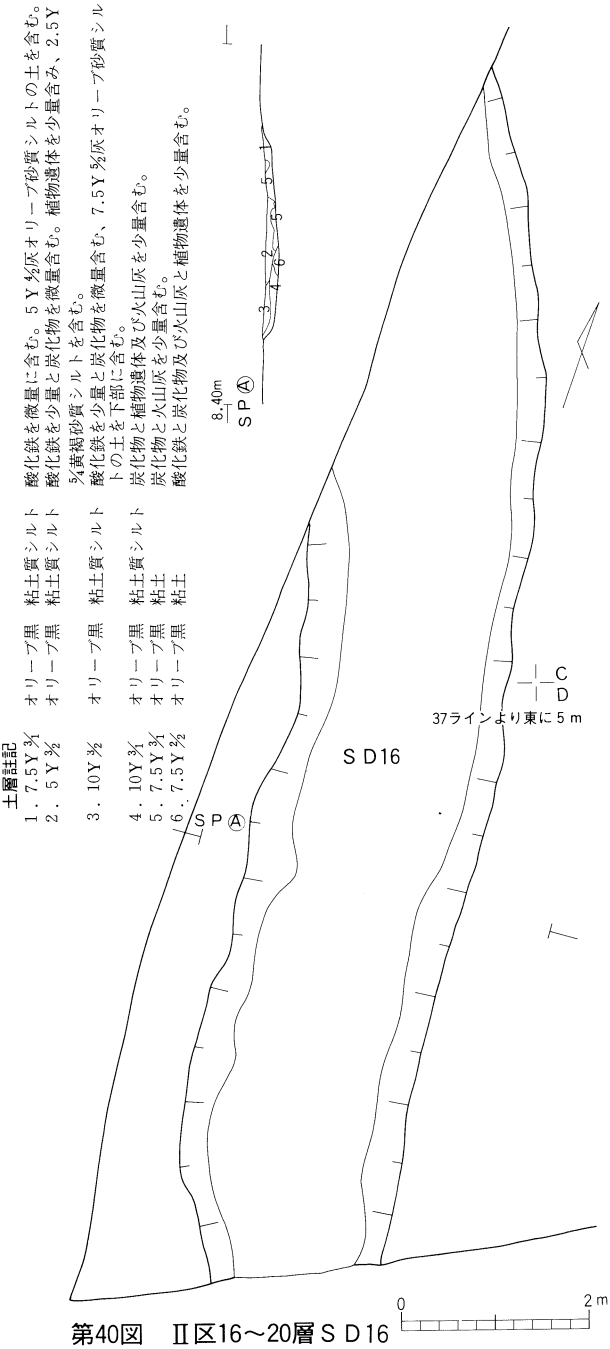
①13a 層の分布・土性：調査区の西端Ｃ－37グリッドからＤ－40グリッドにかけて分布するが、西側では一部を8a 層水田、東側でＳＤ12 溝跡に切られている。層厚はほぼ20cm を測り、灰色を呈する粘土質シルトである。

②13a 層の標高・地形：13a 層上面の標高は、最も高いところで9.0m（Ｄ－39～40グリッド）、最も低いところで8.4m（Ｄ－37グリッド）で、地形は東方へ高くなっており、40ライン付近で段差がみられる。調査区内では北側が高く、かつ中央部が低い。

③検出遺構と出土遺物：水田跡と溝跡を検出している。遺物としては、土師器、須恵器の細片と木片を出土している。

⑵　**13a 層水田跡**（第41図）

①検出状況：水田跡が検出できたのは39ラインとＳＤ12溝跡の間の部分である。水田面２枚を確認したが、一区画の大きさを知り得るものはない。



第40図　Ⅱ区16～20層ＳＤ16
平面図・セクション図

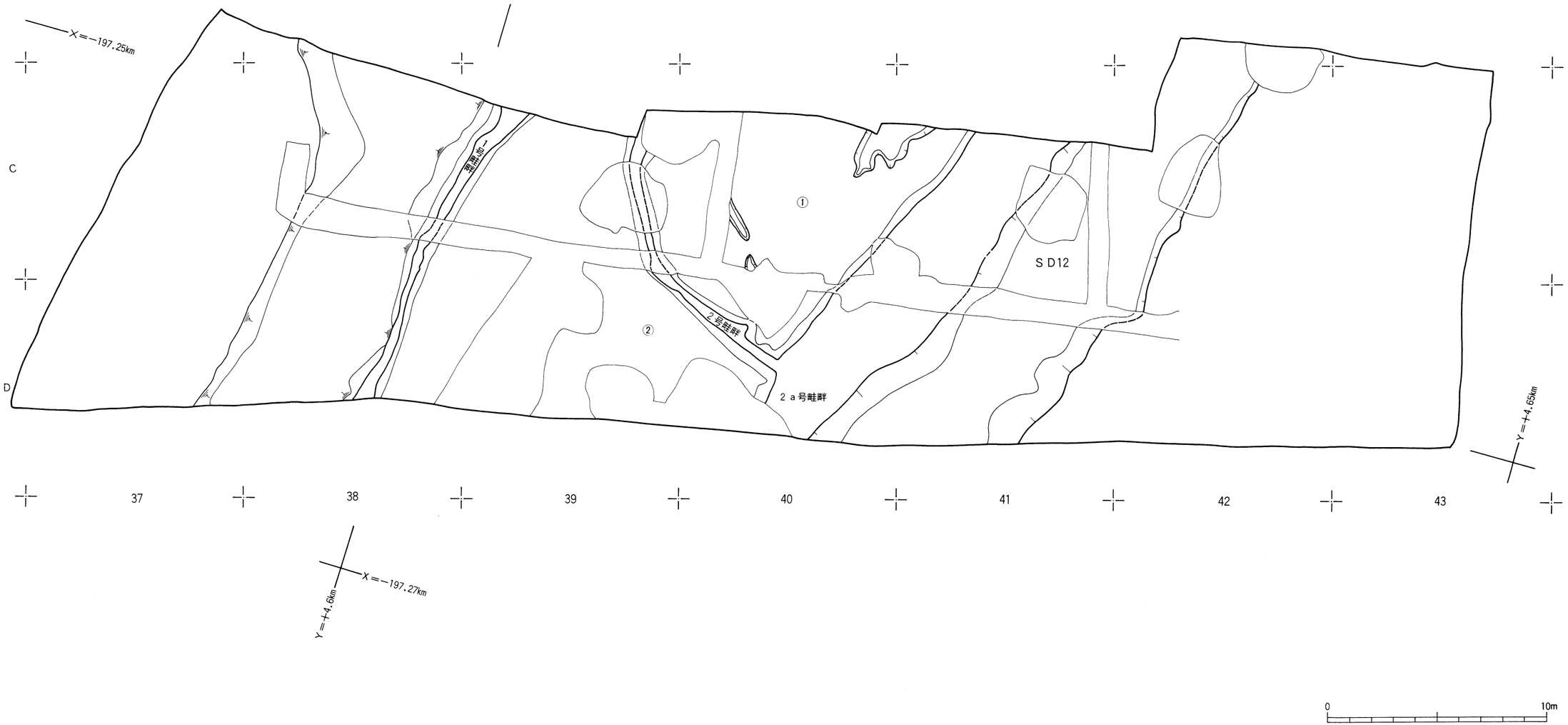
②水田の構成：ほぼ南北方向に走る１号畦畔、わずかではあるが南北方向の2a 号畦畔、孤を描いて2a号畦畔に接続する２号畦畔の３本の畦畔が検出された。上層の遺構に切られ、水田域の範囲、水田１枚の面積は不明である。水路は検出できなかったが、水田面には足跡が全面に検出された。

ⅰ）**１号畦畔**：Ｃ－39グリッドからＤ－38グリッドへ延びる畦畔で、方向はほぼＮ－11°－Ｅである。検出長は15m であるが、さらに調査区外南北に延びるものと思われる。上端幅は10～130cm、下端幅は50～210cm であるが、西側が上面からの攪乱に切られており、残存数値は不確かである。東側水田面との比高差は南側で４～19cm、北側で10～16cm、水田面の標高は8.3～8.2m とほぼ水平である。

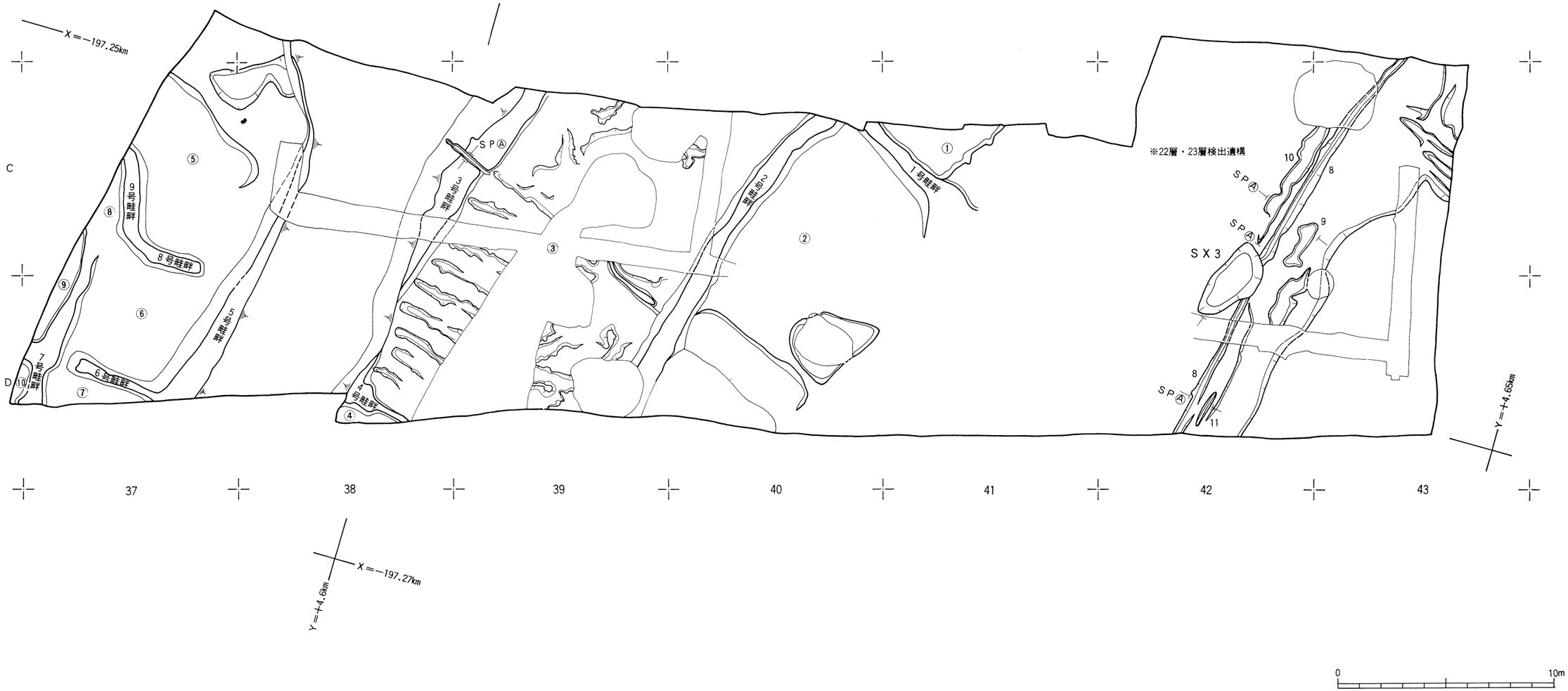
ⅱ）**２号畦畔**：Ｃ－39グリッドからＤ－40グリッドのＮ－24°－Ｅの2a 号畦畔へと、Ｎ－26°－Ｗから Ｅ－20°－Ｓへと孤を描く畦畔で、水田域を不整形に区画する。上端幅は20～70cm、下端幅は90～180cm で、2a 号畦畔との接合部付近で一個所大きく畦畔の幅が膨らみ、上端幅で100cm、下端幅で180cm 程になる。水田面との比高差は北側で３～15cm、南側で６～23cm である。標高9.4～9.3ｍ前後とほぼ平坦である。

③出土遺物：土師器、須恵器の細片と１号畦畔の下層で規則的に並ぶ加工痕のない木片を出土しただけである。

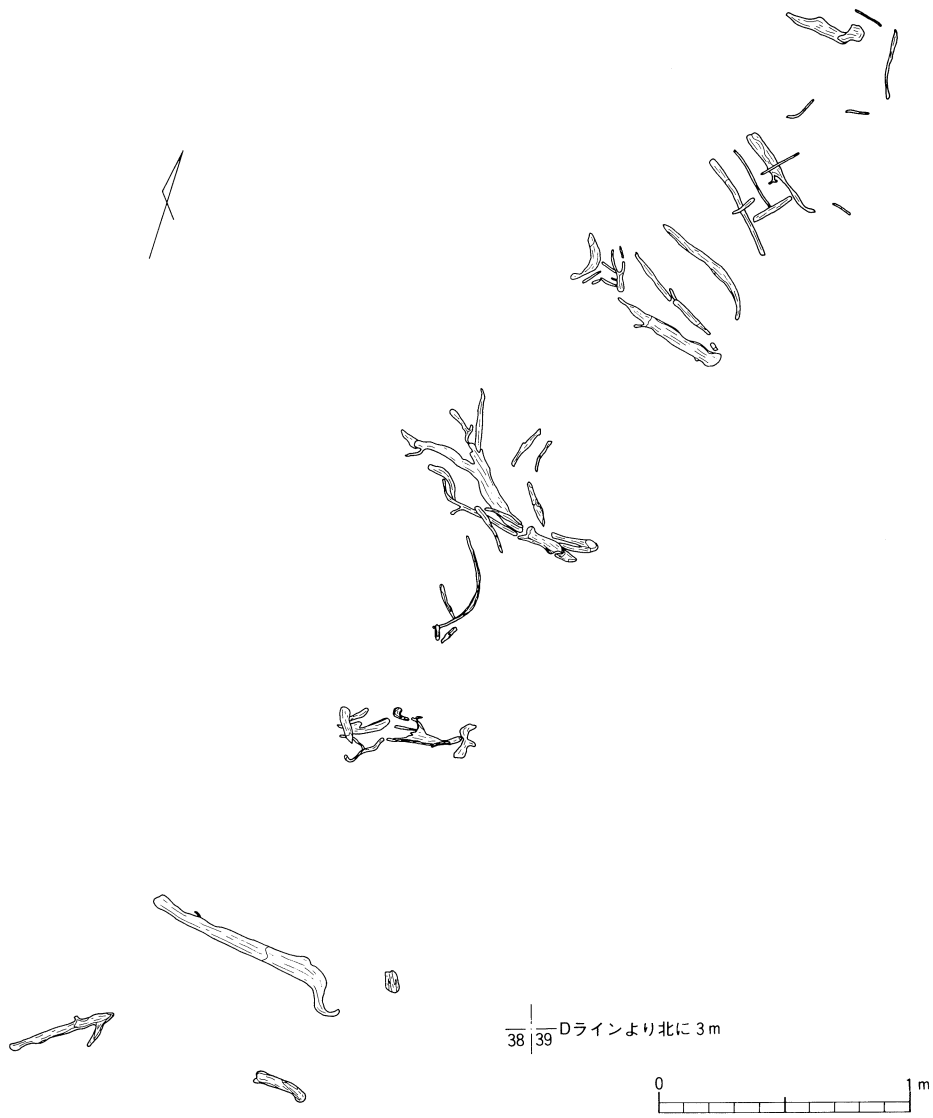
⑶　**ＳＤ12**：Ｃ～Ｄ－41グリッドに位置する。調査区内で長さ約23m 分を検出し、方向は真北に対してＮ－21°－Ｅである。上端幅は6.1～7.5m、下端幅は4.0～6.2m を測る。深さは20～30cm、断面形は緩やかに立ち上がる舟底形を呈し、堆積土は砂質シルトで、植物遺体を縞状に互



第41図　Ⅱ区13a層平面図



第42図　Ⅱ区８ｂ層平面図



第43図　Ⅱ区13a層水田跡3号畦畔下層木片群出土状況

層に含む。出土遺物はない。

6．8b層の調査

(1)　調査概要

①8b層の分布・土性：40・41ラインより西側地域に層の分布が認められ、層厚は15～20cmを計る。黄灰色系の粘土質シルト層である。

②8b層上面の標高・地形：C・D－40グリッドで8.72～8.75m、C・D－39グリッドで8.65～8.67m、C・D－37グリッドで8.37～8.47mを計る。地形は全体として北から南へ緩やかに傾斜をみるが、東西方向に関しては東から西へつよい傾斜がみられる。尚、40・41ライン

東側にはほぼ同じレベルで13a・22・23層が分布しており、同一面を形成していたと考えられる。

③検出遺構と出土遺物：40・41ライン西側域で水田跡を、東側域で溝及び土坑を検出している。遺物として土師器・須恵器・木片が出土している。

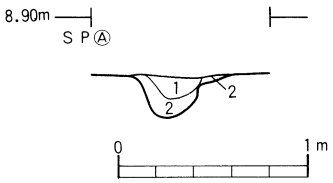
⑵ 8b層水田跡（第42図）

①検出状況：畦畔9条（畦畔1～9）と畦畔で区画された水田面10枚（水田1～10）を確認している。37・38ラインに上層から掘りこまれたＳＤ18溝跡が残存しており同面の状況が不明であるが、畦畔3の北側に水口（水路から取り入れ口と考えられる）が一条確認されており水路となる遺構が存在していたと考えられる。38ラインの東側と西側では水田面に標高差があり段が形成されている。畦畔1東側部分が耕作域の境界となっている。

②水田の構成：水田及び水路で構成されると考えられる。

ⅰ）**畦畔**：土盛り畦畔である。水路が想定される部分の両畦畔は他の畦畔に較べてやや規模が大きく上端幅1.4m以上を計るが、他の畦畔は部分的には相違があるが上端幅0.5～0.9m、下端幅0.85～1.4mを計る。畦畔8がやや曲線を示すが他は直線的に延び、南北方向に延びる2・3・5・7はほぼ同方向でＮ－9°～20°－Ｅを示す。尚、水田1・2・3・5には段及び畦畔状の低い高まりがみられ、削平をうけた畦畔の残存かと考えられるものがある。断面形はすべて偏平な台形を呈し、水田作土面との比高差は畦畔3・5で10～24cm、他では5～11cmである。

ⅱ）**区画**：不明瞭な部分があるが計10枚の水田面を確認した。水田5・8が不整形であるが平面形は方形を基調としている。南北方向が区画の主軸と考えられ、区画が理解されるものは水田6のみで他は不明である。38ライン（水路想定部分）を境として東と西での区画に違いがみられるが、上述した段及び低い高まりが畦畔とするならば一辺5ｍ及び10m前後を単位とした区画が全域に想定される。水田6の規模は南北軸5.1m・東西軸5ｍを計り、面積約26m²である。各水田面は全体として北から南へ緩やかな傾斜がみられ、東西方向ですべて西側へ傾斜している。尚、水田面で溝状の落ち込み・足跡・水口を確認している。



第44図　Ⅱ区８ｂ層水田跡水口断面

1．2.5Y⅘　黄褐　砂質シルト
酸化鉄を全体に含み、炭化物を少量含む、黒褐色土を縞状に含む。
2．5Y⅘　灰　砂質シルト
酸化鉄、炭化物及びマンガン粒を含む。

ⅲ）**水路と水口**：水路は確認されたものではないが、東西の水田面の標高及び傾斜の違い、水田3から西側へ延びる細長い水口の存在から想定されたものである。ＳＤ18溝跡に完全に切られており規模等は不明であるが、上層の溝跡同様に北から南へ流路をもつものと考えられる。水口は上述のものを含め3箇所で確認している。畦畔3の水口は取り入れ口としての性格が考えられるもので、長さ2.4m・上端幅30cm・下端幅20cmを計り、断面形Ｕ字状を呈する。底面はやや凹凸がみられ、比高差は西側が14cm程低くなっている。

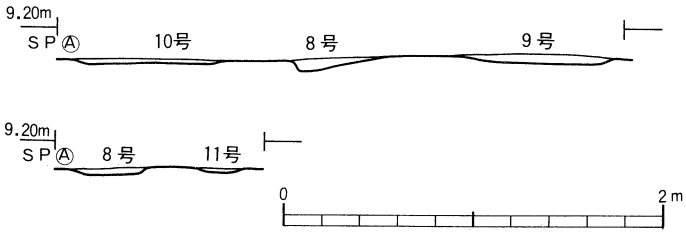
③水田に残された足跡：水田３の作土上面で径10～20cmを計る円形ないし長円形を呈する落ち込みを確認し、検出状況から足跡と判断した。遺存がわるく方向及び種類は同定できなかった。

④作土面確認の溝状の落ち込み：水田３のほぼ全域で確認し、不整形なものまで含めると計17条みられる。特に、畦畔３の西側部には畦畔に並列し長軸が直交するものが９条ある。大きさはほぼ同一で幅35～45cm、深さ２～３cmを計る。長さは最大のもので3.5mまで計れる。配列及び位置から耕作の痕跡とも考えられるが判然としない。

⑤出土遺物：図示資料は須恵器蓋１点、古銭（皇宋通宝）１点であるが、他に土師器・須恵器の小片が若干出土している。土器類を年代決定資料とすると6a層同様に年代に矛盾がみられるため、年代は同じ中世頃と考えたい。

⑥東側域の遺構：22及び23層で確認したもので、溝跡群と土坑１基がある。

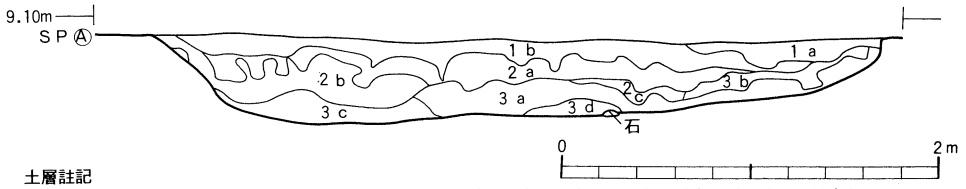
溝跡は途切れるものや段状になるものも含めて計10条ある。方向は二方向あり畦畔とほぼ同一となっており、調査区外へ延びる長いものもみられる。規模としては様々であるが、幅は上端幅40～60cm・下端幅20cm程を計るものが主体である。深さは２～８cmと浅く、埋土は砂質シルト・シルトの単層である。遺物は出土していない。



土層註記
8号溝跡　5Y5/2　灰オリーブ　砂質シルト
酸化鉄を全体に含み、炭化物を少量含む。
9号溝跡　5Y5/2　灰オリーブ　シルト
酸化鉄を全体に含み、炭化物を少量含む。
10号溝跡　5Y5/2　灰オリーブ　砂質シルト
酸化鉄を全体に含み、炭化物を少量含む。
11号溝跡　5Y5/2　灰オリーブ　シルト
酸化鉄を全体に含み、炭化物を少量含む。

第45図　Ⅱ区溝群セクション図

ＳＫ３：溝跡を切っている。平面形は不整の楕円形を呈し、長軸3.85m・短軸２m・深さ45cmを測る。埋土は大別して３層確認し暗オリーブ色系のシルト層である。遺物はなく、性格も不明である。



土層註記

1a	5Y3/2	オリーブ黒	シルト	木片及び酸化鉄を少量含み、同色の砂をまだら状に少量含む。
1b	2.5Y3/2	黒褐	シルト	酸化鉄を全体に多量に含み、１部筋状に含む。
2a	2.5GY3/1	暗オリーブ灰	シルト	酸化鉄を少量含む。
2b	5GY3/1	暗オリーブ灰	砂質シルト	酸化鉄と炭化物を少量含む。
2c	10Y3/2	オリーブ黒	粘土質シルト	１aと同色の砂を帯状に極少量含む。
3a	5GY3/1	暗オリーブ灰	シルト	酸化鉄を少量ブロック状に含み、及び１aと同色の砂をまだら状に少量含む。
3b	2.5GY3/1	暗オリーブ灰	シルト	酸化鉄を少量含み、１aと同色の砂をブロック状に少量含む。
3c	5GY3/1	暗オリーブ灰	粘土質シルト	酸化鉄と炭化物を極少量含む。
3d	7.5GY5/1	緑灰	砂質シルト	2.5Y5/4オリーブ褐の砂をブロック状に多量に含む。

第46図　Ⅱ区８ｂ層ＳＫ３セクション

7．6a層の調査

(1) 調査概要

①6a層の分布・土性：1号畦畔の西側地域に層分布が認められる。層厚は10cm前後で、灰色系の砂質シルト層である。

②6a層上面の標高・地形：C・D－42グリッドで9.10～9.15m、C・D－39グリッドで8.76～8.78m、C・D－37グリッドで8.85～8.92mを計る。地形は全体として北から南へ傾斜しているが、SD14溝跡を中心にみると東側・西側とも溝跡へゆるい傾斜をもちむかっている。3層と同様に東側と西側の面に段差が認められる。

③検出遺構と出土遺物：全域において水田跡を、38ラインで水田跡に伴う溝跡（水路）を検出している。遺物として土師器・須恵器・瓦・古銭・木製品・木片が出土している。

(2) 6a層水田跡（第47図）

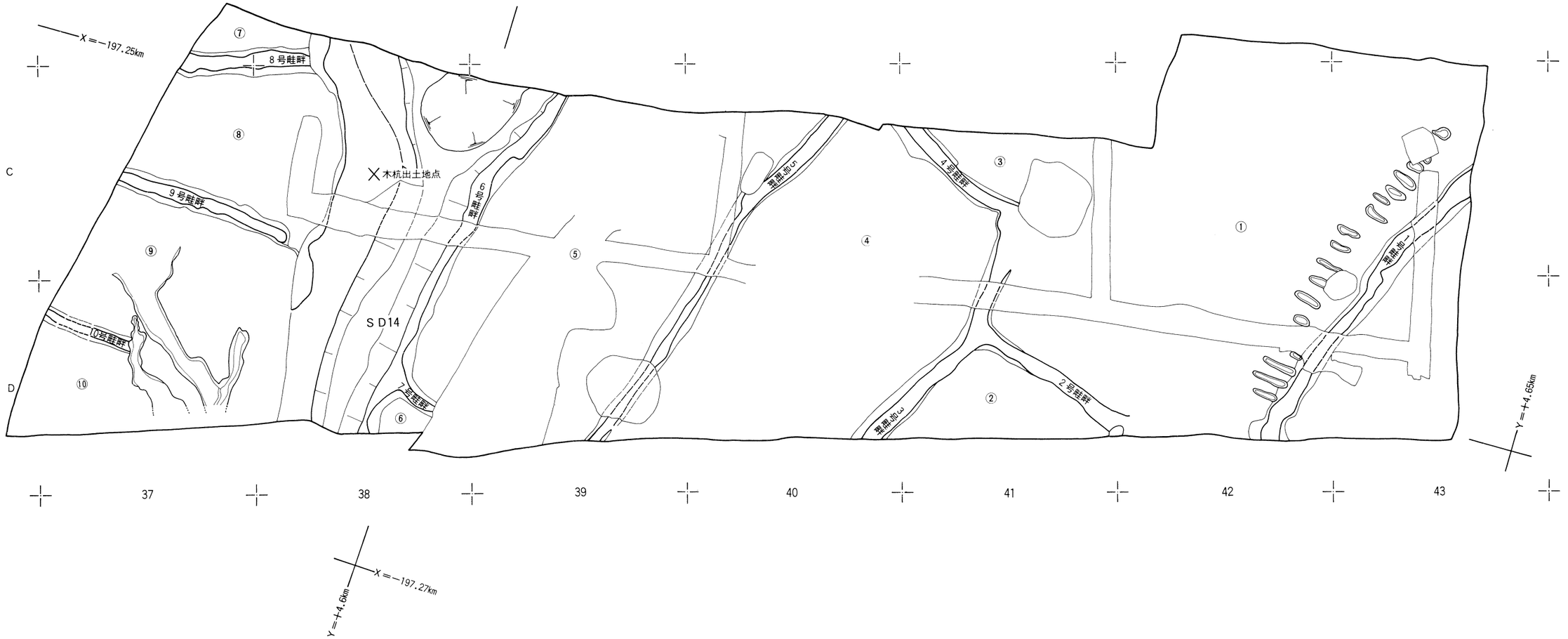
①検出状況：畦畔10条（畦畔1～10）と畦畔で区画された水田面10枚（水田1～10）を確認している。5層の砂が全域を覆っており、一部削平をうけた箇所もある。一区画の大きさは知り得ない。

②水田の構成：水田および溝（水路）で構成される。3層同様に溝を境として畦畔の作りに違いがみられる。

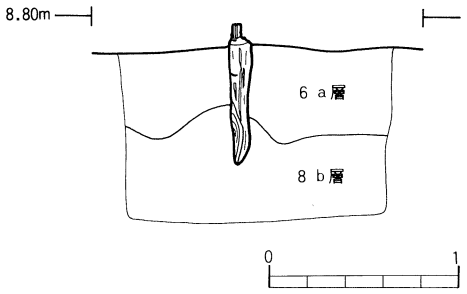
i）畦畔：土盛り畦畔である。規模に大きな違いはなく、上端幅約0.4～0.7m・下端幅約0.7～1.3mを計る。断面形は偏平な台形を呈する。方向は畦畔1・3・5・6でN－10°～30°－Eである。水田作土面との比高差は8～18cmである。

ii）区画：計10枚の水田面を確認している。平面形は長方形を基調としており、溝東側で縦長、西側では横長となっている。面積を知り得る区画はないが、水田8・9の南北軸長は8で7.2m・9で7.4mを計る。水田1・4・5の東西軸長は1で14.5m・4で10.7m・5で10.8mを計り、南北軸は20mを超える長さがあり200m²以上の面積を有することは推察される。各水田面の標高値は北と南・東と西で数cmの違いしか認められなくほぼ平坦であるが、全体的にみて北から南へ傾斜し、東西は溝方向へ傾斜している。なお、水田作土面で耕作の痕跡と考えられる溝状の落ち込み・無数の足跡・水口を確認している。遺物は少なく土師器片・瓦片・古銭が出土したのみである。

iii）水路と水口：水路はSD14溝跡である。東側肩に畦畔6が取り付き、西側に土手状の面がみられ畦畔8・9が取り付いている。堆積土は北壁で5層、C・D－38付近で3層確認している。北壁の4層は砂層で基本層の5層に同じと考えられる。断面形は各部分で違うが浅く広い皿状を呈する。規模は南端部で上端幅2.25m・下端幅0.75m・深さ0.4m、中央部で上端幅3.35m・下端幅0.7m・深さ0.8mを計る。北壁面では上端幅が10mと大きくなるが、SD7溝同様

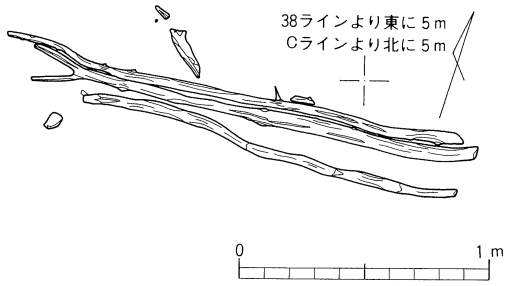


第47図　Ⅱ区６ａ層平面図



第48図　Ⅱ区６ａ層木杭

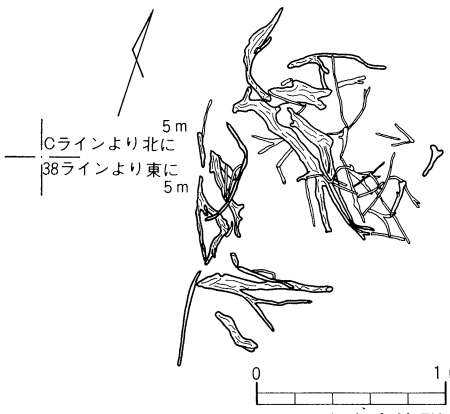
に北西側へ屈曲が原因と考えられる。底面標高は北壁付近で8.1m・南壁付近で8.5m と北側が低くなっているが、上層・下層の資料ではすべて南側が低くなっており、部分的に澱みとなっていたと考えられる。底面は凹凸があるがほぼ平坦である。堆積土５層上面で足跡を検出している。底面及び堆積土から流木や多数の木片・木製品が出土している。



第49図　Ⅱ区６ａ層ＳＤ14出土木製品

水口は畦畔９で１箇所確認している。畦畔がすべて部分的な確認であるため詳細は不明であるが、当水口は畦畔の東端部、土手状の面に接する所に設けられている。

③水田に残された足跡：畦畔上面及び作土上面で長軸15～20cm を計る長円形を呈する無数の落ち込みを確認し、検出状況から人間の足跡と判定された。基本層位の５層（砂層）が落ち込んでおり遺存状態は良好で、指先が確認されるものもあった。全体的にみて歩行の方法は理解されるが詳細は明らかではない。調査区西側、特に水田７～10で多量に確認されている。



第50図　Ⅱ区６ａ層ＳＤ14出土木片群

④作土面確認の溝状の落ち込み：畦畔１の西側部で確認したもので、畦畔付近のみに存在する。計17条あり畦畔とほぼ並列の配置がみられ、長軸方向に直交している。平面形は長楕円形及び楕円形を呈し、長軸60～135cm・短軸30～55cm・深さ３～７ cm を計る。埋土は6a 層に似るがやや砂質である。配置及び位置からみて耕作の痕跡と考えられるが積極的な確証はない。

⑤出土遺物：図示資料として、瓦（古瓦）１点、古銭（皇宋通宝）１点がある。木製品では杭・加工面のみられる棒状品がある。また、加工面がある流木や木片も出土している。

年代は出土遺物からみて平安時代頃と考えられたが、最下層面の年代と矛盾がおき、上層の4c 層の年代等も考え合わせて、中世頃と考えられる。

8．4c 層の調査

(1) 調査概要

①4c 層の分布・土性：C・D－37グリッドを中心に層分布が認められる。層厚は10～15cm 程で、灰黄色系のシルト質層である。上層（4a 層）からの影響と考えられるが層が部分的に途切れる箇所がみられる。

②4c 層上面の標高・地形：37・38ライン北壁部で9.50m、南壁部で9.40～9.44m を計る。地形は全体として北から南へゆるやかに傾斜している。

③検出遺構と出土遺物

(2) 4c 層水田跡（第52図）

①検出状況：II B 区のみで検出している。畦畔２条（畦畔１・２）と畦畔で区画された水田面３枚（水田１～３）を確認している。

②水田の構成：部分的な検出にとどまっており詳細は不明である。

ｉ）**畦畔**：土盛り畦畔である。両畦畔とも規模はほぼ同じで、上端幅20～50cm・下端幅62～68cm を計る。両畦畔とも直線的に延びるが、畦畔２が畦畔１に斜めにとりつき、接点部分が水口となっている。畦畔の方向は１でN－29°－W、２でN－82°－W を示す。断面形は偏平な台形を呈する。水田作土面との比高差は９～14cm を計る。

ii）**区画**：計３枚の水田面を確認しているが、調査区の制約もあり詳細は不明である。遺物は水田作土中から陶磁器が出土している。

③出土遺物：図示資料として摺鉢と椀がある。年代は江戸時代が考えられる。

9．4a 層の調査

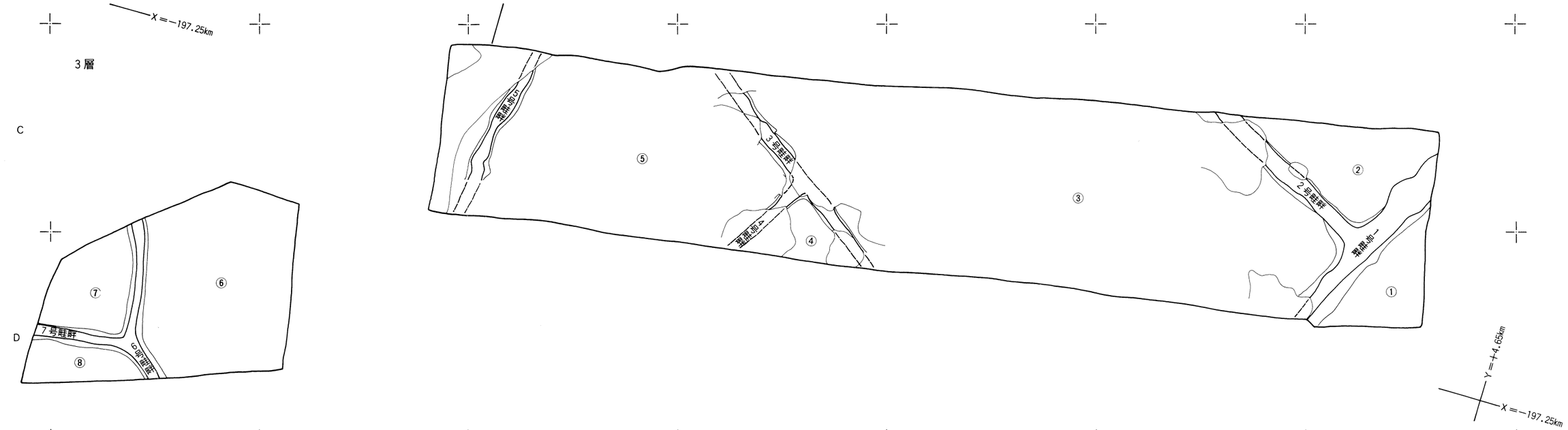
(1) 調査概要

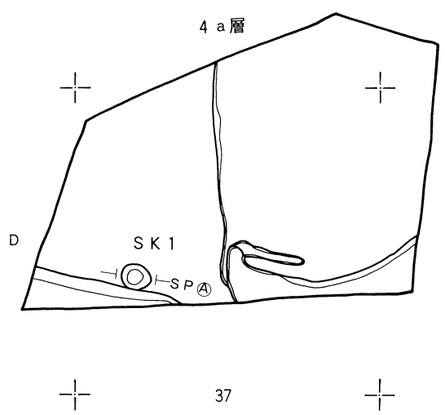
①4a 層の分布・土性：調査区全域に層分布が認められる。層厚は10～20cm 前後で、灰色系のシルト質層であるが、調査区東側に向かうにつれて砂質となっている。

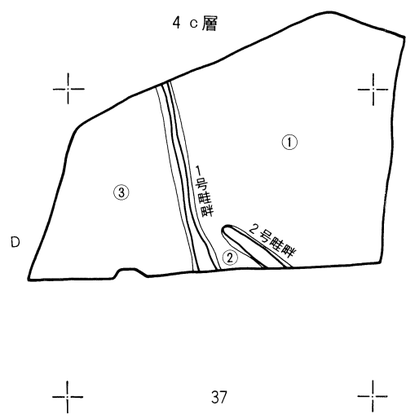
②4a 層上面の標高・地形：標高はC・D－37グリッド西壁で9.30～9.47m、38・39ライン付近で9.30～9.32m、43ライン付近で9.30～9.32m を計る。面としての微地形はII B 区のみの調査であるため詳細は不明であるが、II B 区では東西及び南北に延びる10cm 前後の落差をもつ段がみられ、東側では北方向へ、西側では南方向へゆるい傾斜がみられる。

③検出遺構と出土遺物：遺構として土坑を２基検出し、遺物として層中から陶磁器片が出土している。

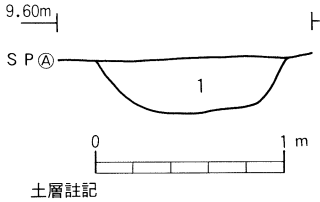
ＳＫ１：D－37グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、長軸100cm、短軸84cm を計る。深さは19cm を計り、断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦となっている。埋土は単層で砂質土である。遺物は出土していない。







第51図　Ⅱ区3層・4a層・4c層平面図



土層註記

1．10Y⅔　オリーブ灰　砂質シルト
酸化鉄とマンガン粒及び、炭化物を少量含み、7.5YR⅔明褐色のシルトをブロック状に随所に含む。

第52図　Ⅱ区４ａ層ＳＫ１セクション図

ＳＫ２：Ｃ－37グリッド西壁断面での確認である。土坑としての認定はできるが詳細は明らかではない。埋土は２層確認でき、暗灰黄色のシルト・砂質シルト土である。遺物は出土していない。

層中から出土した陶磁器類で図示しえたものは計５点ある。すべて破片であるが器種として椀・皿・小壺がある。年代は江戸時代初めから末ごろが考えられる。

10．３層の調査

(1)　調査概要

①３層の分布・土性：層分布はⅡＡ・ⅡＢ両調査区全面に広がる。層厚はⅡＡ区で５～25cm、ⅡＢ区で３～10cmを計る。この層は灰色を呈するシルト層であるがⅡＢ区ではⅡＡ区に較べやや砂質である。

②３層上面の標高・地形：標高はＣ－43グリッドで9.33～9.36m、Ｃ－39グリッドで9.11～9.15m、Ｄ－37グリッドで9.51～9.54mを計る。ⅡＡ区では東側から西側へゆるい傾斜があり、ⅡＡ区とⅡＢ区の面には段差がみられる。

③３層水田跡（第51図）

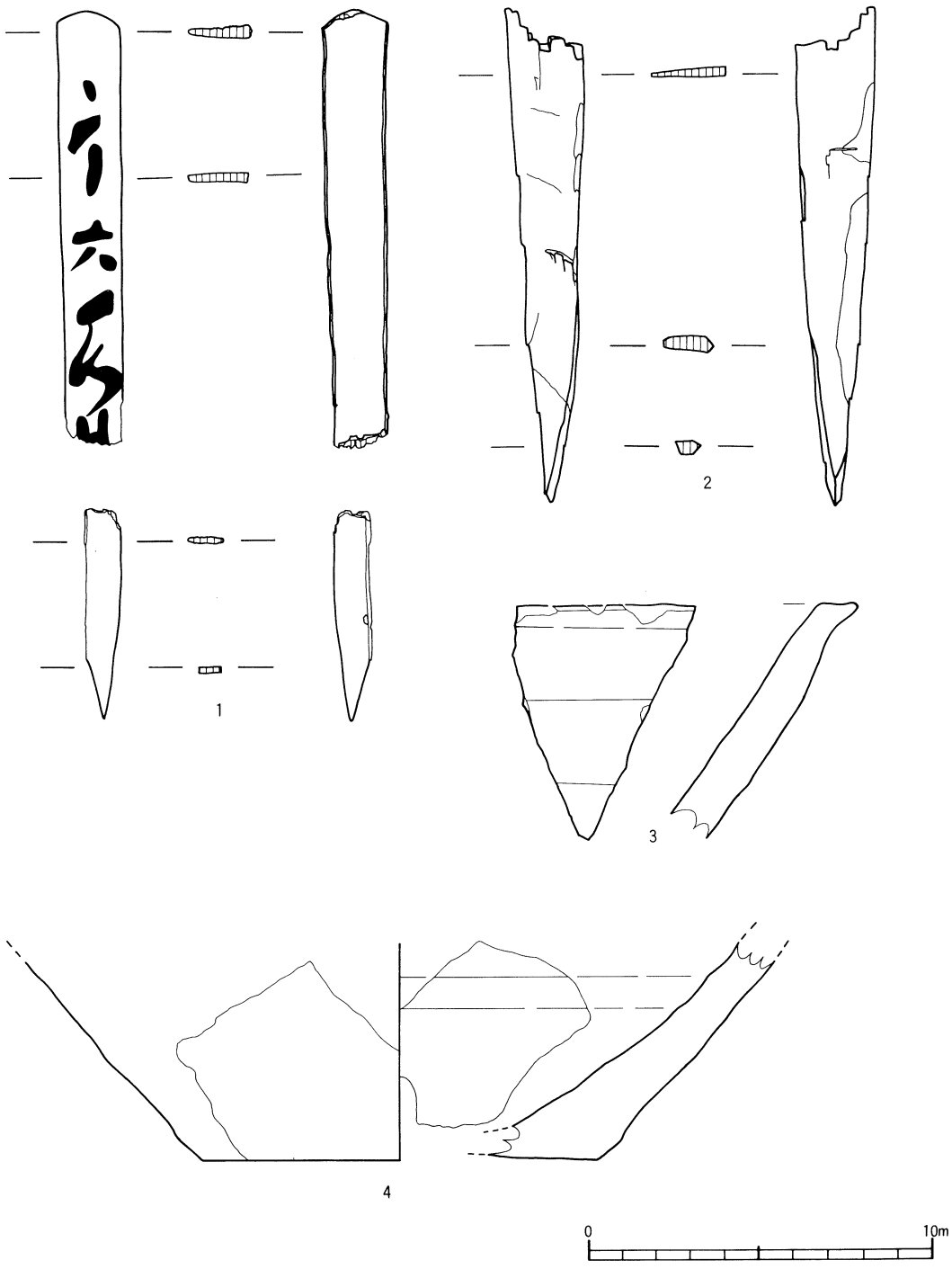
ｉ）**検出状況**：Ⅱ区全域で検出している。畦畔７条（畦畔１～７）と畦畔で区画された水田面８枚（水田１～８）を確認している。一区画の大きさを知り得るものはない。

ii）**水田の構成**：水田および溝（水路）で構成される。38・39ラインを境として畦畔の作りと方向に違いがみられる。

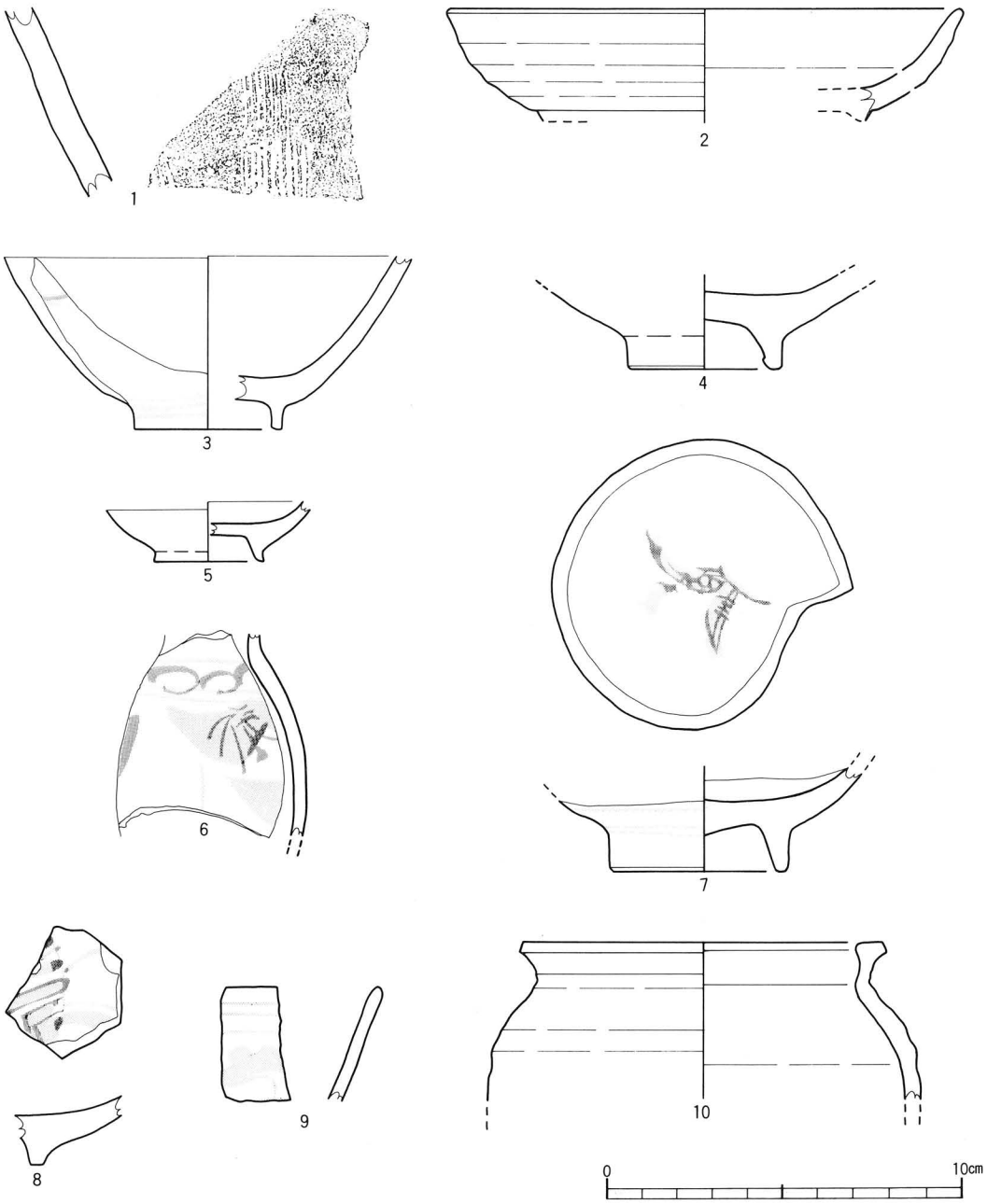
ａ．畦畔：土盛り畦畔である。大畦・小畦の違いは認められないが畦畔１は他に較べるとやや大きく、上端幅約1.1m・下端幅約1.5mを計り、倍の規模をもつ。畦畔１～５は直線的に延び畦畔６・７は曲線と対称的であるが、段差の存在など地形の制約が考えられる。畦畔の方向は１・５でＮ－8°～28°－Ｅを示す。断面形はすべて偏平な台形を呈する。水田作土面との比高差は11～20cmである。

ｂ．区画：計８枚の水田面を確認しているが、畦畔一辺の規模も知り得ず、面積等不明である。平面形は東側で方形を基調としているが西側に向かうにつれて不整形となる。これも畦畔と同様に地形及び溝の制約からくるものと考えられる。各水田はほぼ平坦であるが各面の標高値に差があり全体として傾斜は溝へ向かっている。水口は確認できなかった。遺物は水田作土・畦畔中から散在して出土している。

ｃ．水路：ＳＤ７溝跡である。上部に攪乱があり壁断面での確認である。断面の状況からみて、水路の流れは畦畔５の北西側で西から南へ屈曲していることが推察される。全体的な規模は不



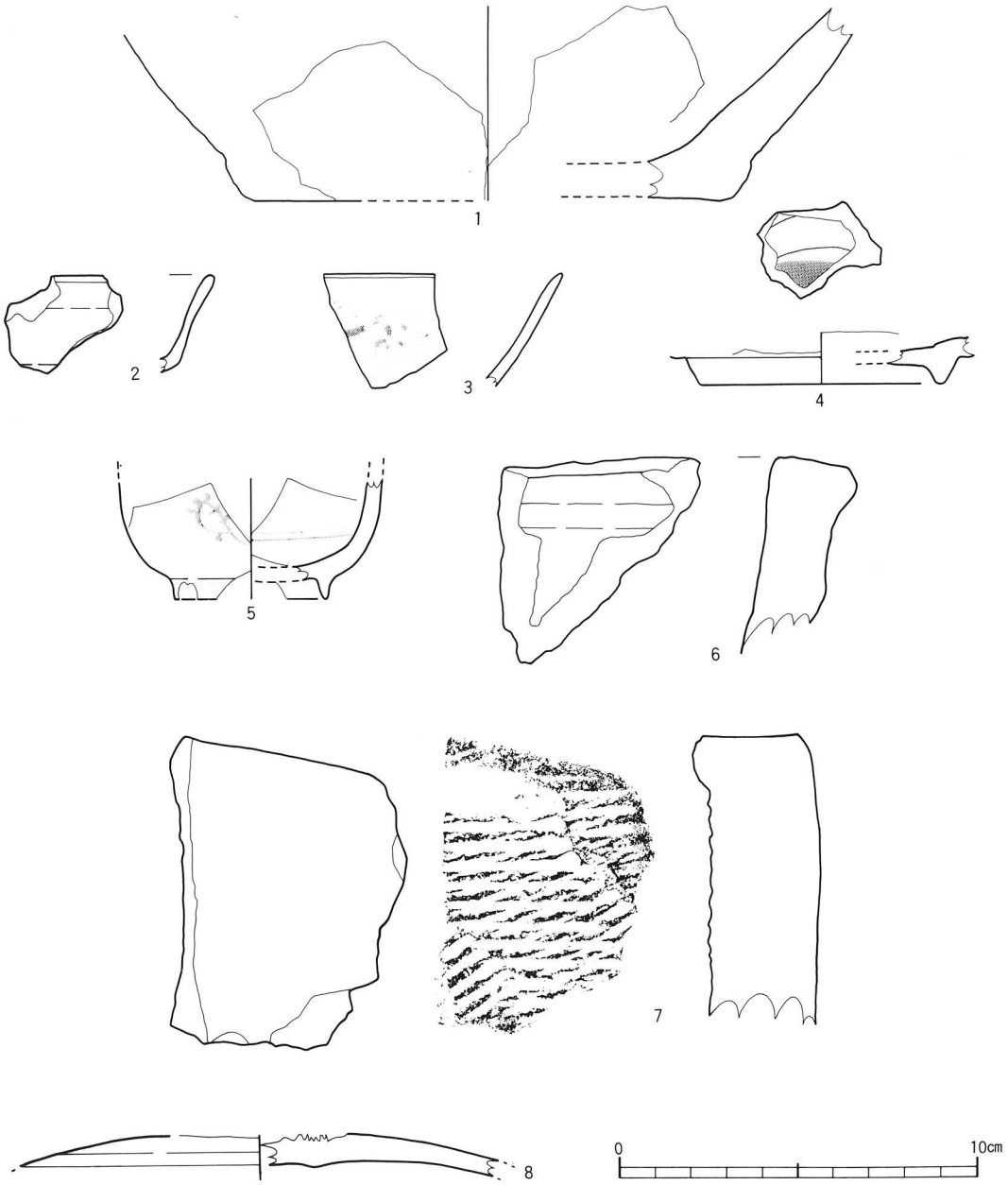
第53図　Ⅱ区出土遺物実測図（1）



第54図　Ⅱ区出土遺物実測図（2）

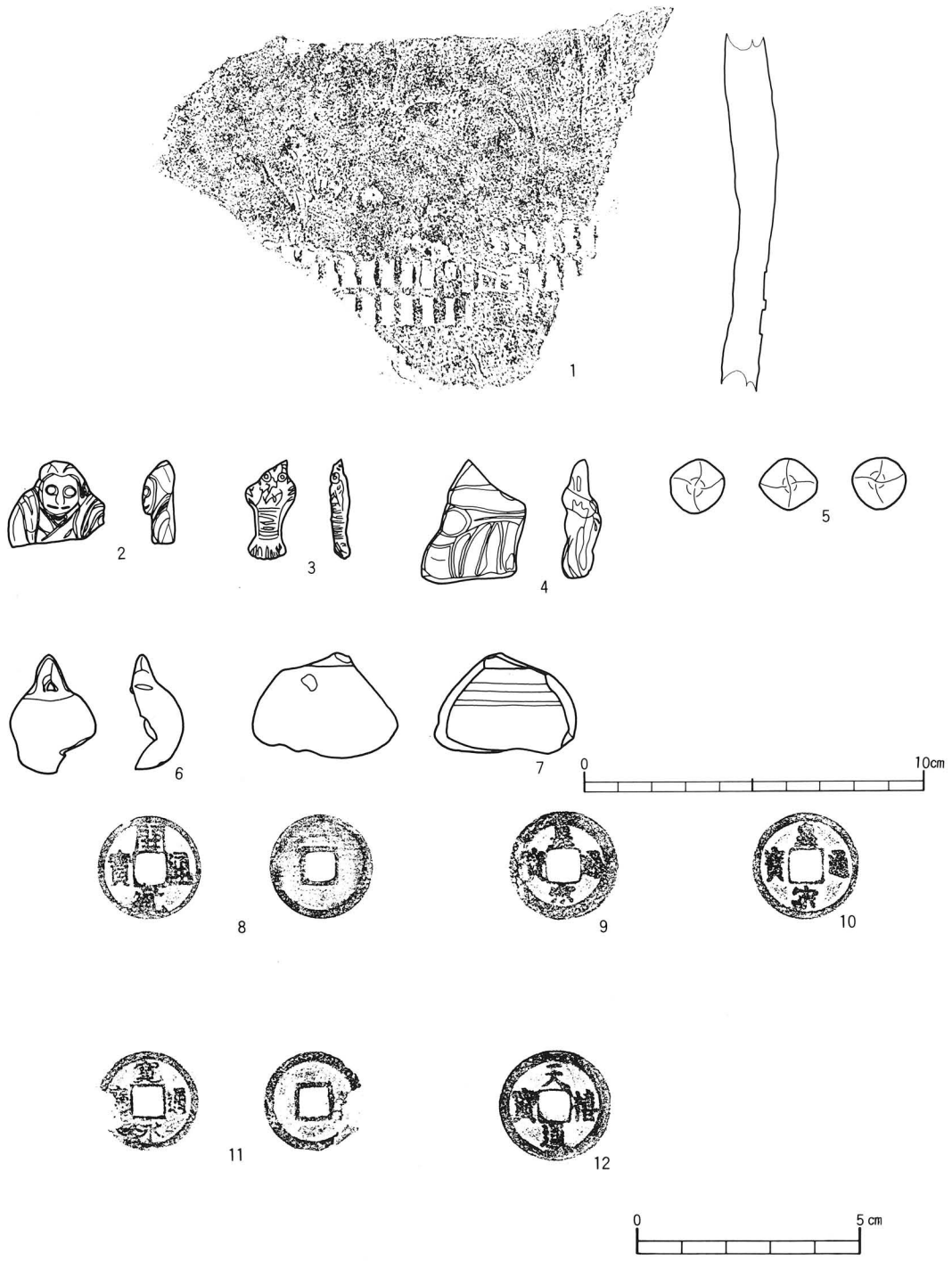
明であるが、深さは60cm を計る。断面形は逆台形を呈し、堆積土は北壁で 4 層、南壁で 2 層確認している。底面標高は両壁とも8.84m である。

iii）**出土遺物**：図示資料として陶磁器 8 点、瓦質土器 1 点、古銭（寛永通宝） 1 点、土製品 6 点がある。古銭を除きすべて小破片である。土製品の種類として人形・鈴・土玉・動物形土製

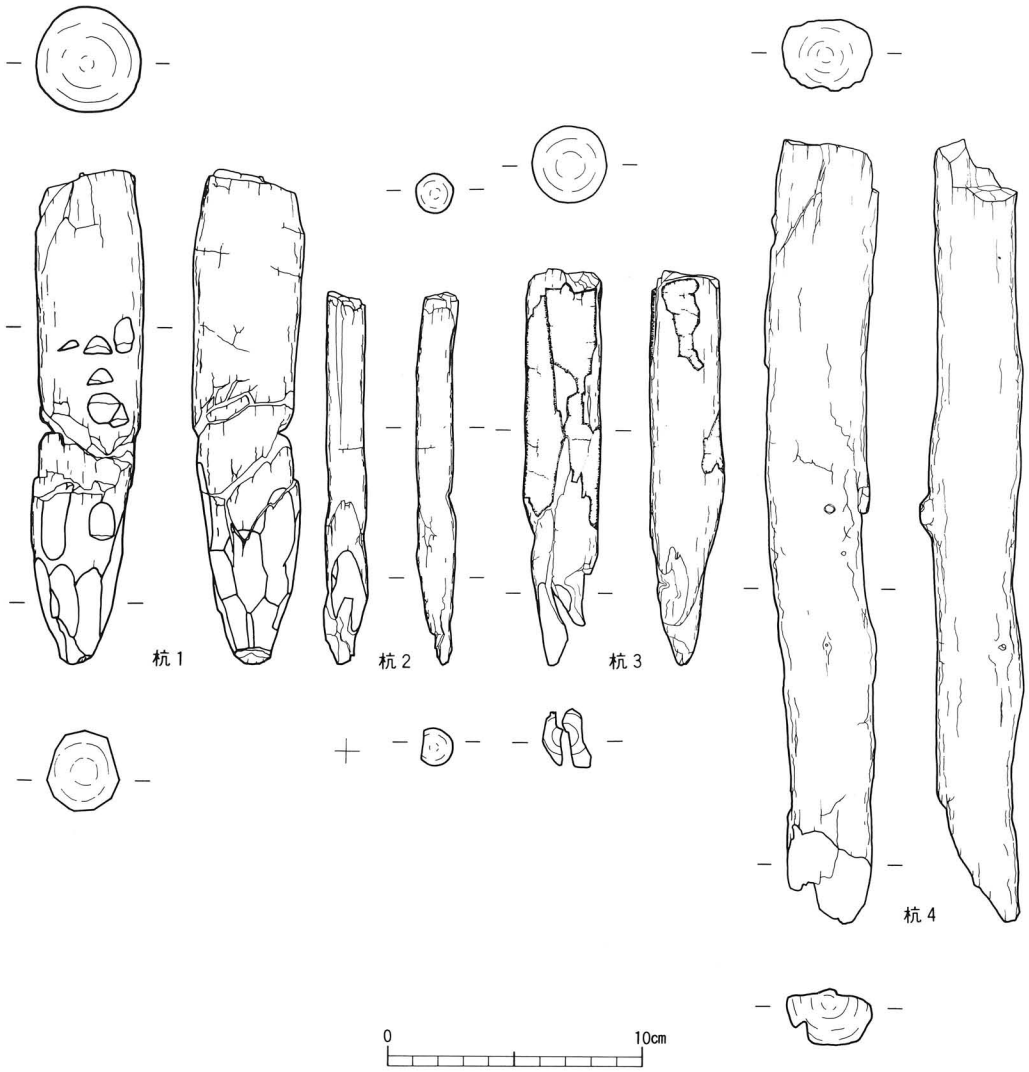


第55図　Ⅱ区出土遺物実測図（３）

品がある。陶磁器の器種としては椀・皿・摺鉢・徳利・熔烙がある。年代は江戸時代末から明治の初めごろが考えられる。



第56図　Ⅱ区出土遺物実測図（４）



第57図　Ⅱ区杭実測図

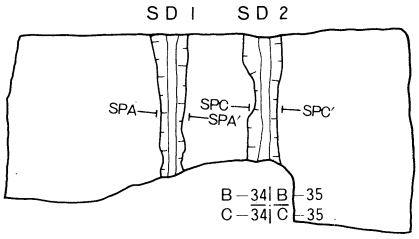
第３節　III区の調査

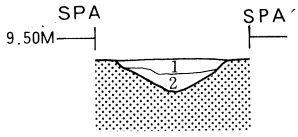
１．調査概要

III区では、６層上面において溝跡４条（SD １・２・３・４）、４層上面において河川跡１条（SR １）、3a 層・2b 層上面において掘立柱建物跡１棟（SB １）溝跡６条（SD ５～10）、土壙７基（SK １～７）井戸跡２基（SE １・２）ピット143基を検出している。また調査区北西部B・C－33グリッドでは墓壙群が検出されている。

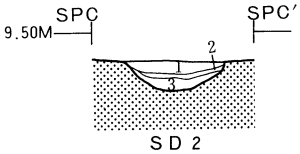
２．６層の調査

ＳＤ１：ＳＤ１はＢ－34グリッドに位置する。方向性はほぼ直線的であり、真北に対してはＮ－17°－Ｗの方向を示す。検出されたＳＤ１の長さは3.8m である。断面形は緩やかな弧状をなしており、上端幅は95～50cm、下端幅は20cm 程である。深さは約17cm、底面の標高は9.2cm である。底面はほぼ平坦である。埋土は２層認められ、その状況から自然堆積により埋まったものと考えられる。遺物は出土していない。

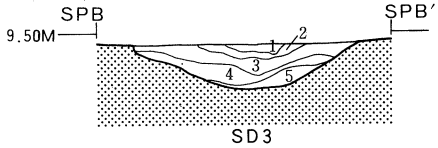




土層註記
1．10Y R 4/1 灰黄褐色粘土質シルト　帯状に浅黄色の土と炭化物を含み酸化鉄、マンガンを含む。
2．10Y R 4/1 褐灰色粘土質シルト　酸化鉄、マンガンを含む。

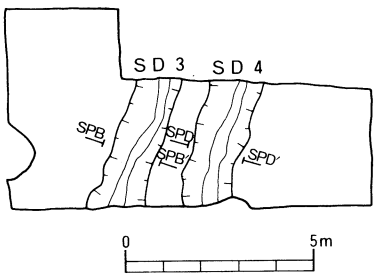


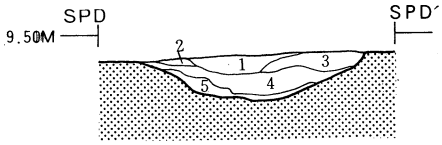
土層註記
1．10Y R 4/1 褐灰色粘土質シルト　酸化鉄、マンガンを含み、帯状に炭化物を含む。
2．2.5 Y 4/1 浅黄色粘土質シルト　全体に酸化鉄を含む。
3．10Y R 4/1 褐灰色粘土質シルト　全体に酸化鉄、マンガン、炭化物を含む。



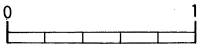
土層註記
1．10Y R 4/1 褐灰色粘土　まだら状に酸化鉄を含み全体に少量のマンガンを含む。
2．2.5 Y 4/1 浅黄色粘土　まだら状に酸化鉄を含み全体に少量のマンガンを含む。
3．10Y R 4/1 褐灰色シルト質粘土　まだら状に酸化鉄を含み全体に少量のマンガンを含み又、極少量の炭化物を含む。
4．10Y R 4/1 褐灰色粘土　帯状に浅黄の土を含みその下に帯状に炭化物を含む又、まだらに酸化鉄を含む。
5．10Y R 4/1 褐灰色粘土　まだら状に酸化鉄を含み全体に少量のマンガンと極少量の炭化物を含む。

C－34
C－35
D－34
D－35





土層註記
1．10Y R 4/1 褐灰色粘土　帯状に浅黄色の土を含み全体にまだら状に酸化鉄を含み少量のマンガンを含む。
2．10Y R 4/1 褐灰色粘土　まだら状に酸化鉄を含み全体に少量のマンガンを含む。
3．10Y R 4/1 褐灰色粘土　まだら状に酸化鉄を含み全体に少量のマンガンを含む。
4．10Y R 4/1 褐灰色粘土　帯状に浅黄色の土と炭化物を多量に含む層が交互に重っている。
5．10Y R 4/1 褐灰色粘土　まだら状に少量の酸化鉄を含み全体に少量のマンガンを含む。



第58図　Ⅲ区６層上面SD1～４平面図・セクション図

ＳＤ２：ＳＤ２はＢ－34・35グリッドに位置する。方向性はほぼ直線的であり、真北に対してはＮ－17°－Ｗの方向を示し、ＳＤ１とほぼ平行している。検出されたＳＤ２の長さは3.5mである。断面形は緩やかな弧状をなしており、上端幅は100～60cm、下端幅は25～20cmである。深さは20～24cmで、底面の標高は9.2mである。底面はほぼ平坦である。埋土は３層認められ、その状況から自然堆積により埋まったものと考えられる。遺物は出土していない。

ＳＤ３：ＳＤ３はＤ－34グリッドに位置する。方向性はほぼ直線的であり、真北に対してはＮ－4°－Ｅの方向を示す。検出されたＳＤ３の長さは4.1mである。断面形は緩やかな弧状をなしており、上端幅は150～110cm、下端幅は20～40cmである。深さは20～24cmで、底面の標高は9.2mである。底面はほぼ平坦である。埋土は５層認められ、その状況から自然堆積によって埋まったものと考えられる。遺物は出土していない。

ＳＤ４：ＳＤ４はＤ－34グリッドに位置する。方向性はほぼ直線であり、真北に対してはＮ－4°－Ｅの方向を示し、ＳＤ４とほぼ平行している。検出されたＳＤ４の長さは3.6mである。断面形は緩やかな弧状をなしており、上端幅は150～130cm、下端幅40～20cmである。深さは20～24cmで、底面の標高は9.2ｍである。底面はほぼ平坦である。埋土は５層認められ、その状況から自然堆積により埋まったものと考えられる。遺物は出土していない。

これら４条の溝跡については、ＳＤ１とＳＤ２、ＳＤ３とＳＤ４はほぼ平行しており、底面の標高も9.2ｍであることから、ＳＤ１とＳＤ３、ＳＤ２とＳＤ４はそれぞれ同一の溝跡であり、同時存在していたことが想定される。

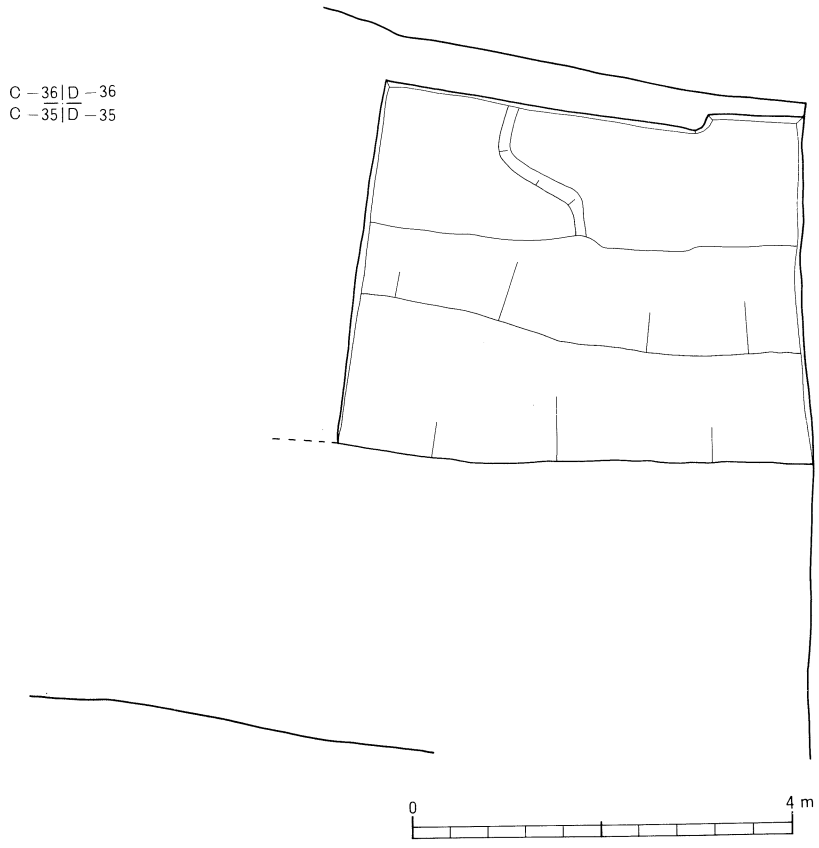
３．４層の調査

ＳＲ１：ＳＲ１はＤ－35・36グリッドに位置する。方向性はほぼ直線的であり、真北に対してはＮ－8°－Ｗの方向を示す。検出されたＳＲ１の長さは4.8mである。上端幅は2.5m以上、下端幅は1.5m以上である。底面には段差が認められ、深さは北側で60cm、南側で113cmで、南側の底面の標高は8.1～7.8mである。埋土は17層認められ、その状況から自然堆積により埋まったものと考えられる。（第20図）遺物７層より下位の層から須恵器破片２点、埋土１層より土師器破片６点、須恵器破片２点、陶器破片２点（第65図１・２）、磁器破片１点（第65図３）が出土している。

第65図１（写真359-2）：産地は唐津と考えられる。擂鉢の口縁部破片である。製作年代は16世紀末～17世紀初頭であろう。

第65図２（写真359-3）：産地は唐津と考えられる。器形は皿である。内面にトチンが認められる。製作年代は16世紀末～17世紀初頭であろう。

第65図３（写真359-4）：産地は肥前と考えられる。器形は皿である。体下半の約1/3が残存している。高台部分は無釉であり、内面は見込みの蛇ノ目釉である。製作年代は17世紀後半～18世



第59図　Ⅲ区４層上面ＳＲ１平面図

紀前半であろう。

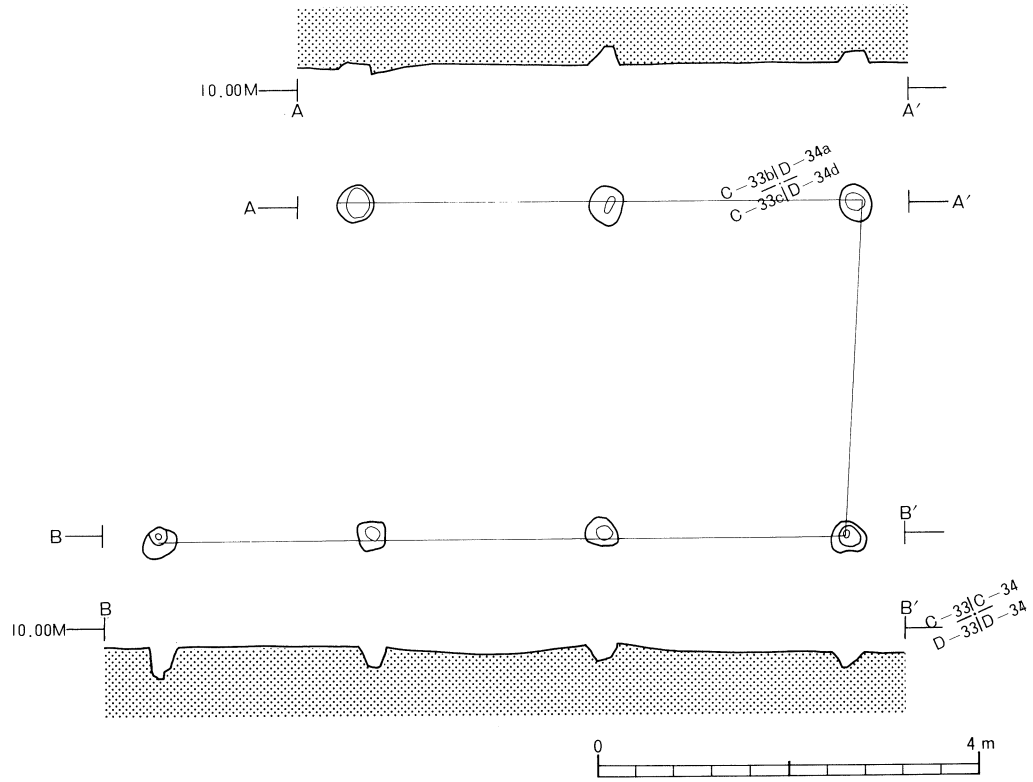
４．3a層・2b層の調査

ＳＢ１：ＳＢ１はＣ－33･34グリッドに位置する。桁行３間（総長約720cm－南）、梁行１間（総長約350cm－東）の東西棟建物で、軸方向はＮ－83.5°－Ｗである。柱穴は15～20cm不整方形・不整円形である。

ＳＤ５：ＳＤ５はＤ－32グリッドに位置する。2b層上面で検出された。ＳＫ10と重複関係があり、ＳＫ10がＳＤ５より新しい。方向性はほぼ直線的であり、真北に対してはＮ－4°－Ｗの方向を示す。検出されたＳＤ５の長さは6.9mである。断面形は緩やかな弧状をなしており、上端幅は80～55cm、下端幅は50～10cmである。深さは８～10cmで、底面の標高は9.80～9.83mである。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＤ６：ＳＤ６はＤ－33グリッドに位置する。2b層上面で検出された。ＳＫ１と重複関係があり、ＳＫ１がＳＤ６より新しい。方向性はほぼ直線的であり、真北に対してはＮ－8°－Ｗの方向を示す。検出されたＳＤ６の長さは4.9mである。断面形は緩やかな弧状をなしており、上端

第60図　Ⅲ区３ａ層・２ｂ層上面平面図



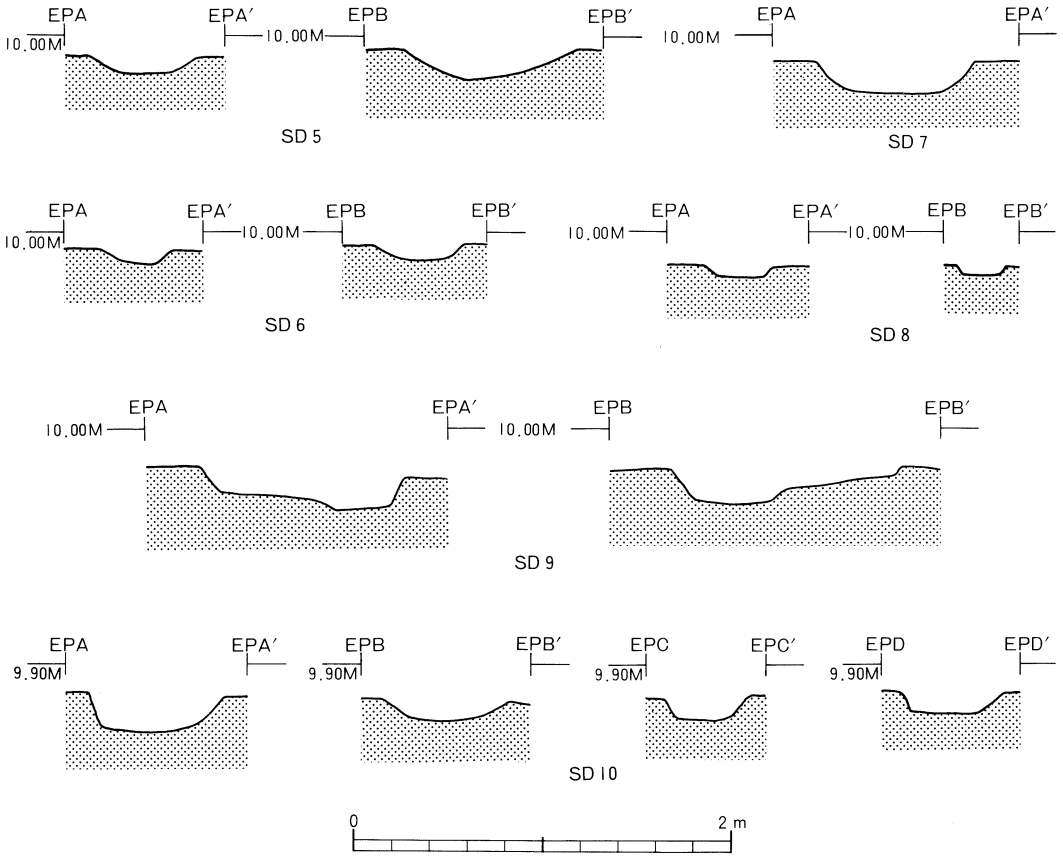
第61図　Ⅲ区SBⅠ平面図エレベーション図

幅は70～40cm、下端幅は35～15cm である。深さは 6 ～13cm で、底面の標高は9.83～9.85m である。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＤ７：ＳＤ７はＤ－33・34グリッドに位置する。2b 層上面で検出された。方向性はほぼ直線的であり、真北に対しては Ｎ－6°－Ｅ の方向を示す。検出されたＳＤ７の長さは3.4m である。断面形は緩やかな弧状をなしており、上端幅は115～68cm、下端幅は30～20cm である。深さは12～15cm で、底面の標高は9.68～9.70m である。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＤ８：ＳＤ８はＤ－32グリッドに位置する。2b 層上面で検出された。方向性はほぼ直線的であり、真北に対しては Ｎ－6°－Ｅ の方向を示す。検出されたＳＤ８の長さは7.6m である。断面形は緩やかな弧状をなしており、上端幅は50～28cm、下端幅は28～20cm である。深さは 2 ～ 8 cm で、底面の標高は9.77m である。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＤ９：ＳＤ９はＤ－33グリッドに位置する。2b 層上面で検出された。方向性はほぼ直線的であり、真北に対しては Ｎ－1°－Ｗ の方向を示す。検出されたＳＤ９の長さは4.2m である。断面形は緩やかな弧状をなしており、上端幅は115～95cm、下端幅は95～80cm である。深さは10～20cm で、底面の標高は9.57～9.62m である。底面は凹凸がみられる。遺物は出土していな



第62図　Ⅲ区3a層・2b層上面SD５～10エレベーション図

い。

ＳＤ10：ＳＤ10はＢ－34、Ｃ・Ｄ－33・34グリッドに位置する。3a層上面で検出された。方向性はほぼ直線的であり、真北に対しては Ｎ－2°－Ｅ の方向を示す。検出されたＳＤ10の長さは推定で19.9mである。断面形は緩やかな弧状をなしており、上端幅は75～40cm、下端幅は50～30cmである。深さは８～15cmで、底面の標高は9.56～9.63mである。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ１：ＳＫ１はＤ－33・34グリッドに位置する。3a層上面で検出された。形態は、上端平面形はほぼ円形で、長軸221cm、短軸202cmを測り、下端平面形は楕円形で、長軸70cm、短軸38cmを測る。深さは138cmである。断面形は椀状を呈し、中位に段をもつ。壁面の立ち上がりは、底面から中位までは斜めであるが、段より上はほぼ垂直である。底面は平坦である。埋土は16層認められ、その状況から自然堆積により埋まったものと考えられる。ＳＫ１は、井戸跡の可能性もある。出土遺物は、埋土７層上面から礫多数と、石製品１点（第65図４）、６層中から土

師器破片３点、須恵器破片１点、埋土２層中から土師器破片２点、埋土１層中から土師器破片１点、須恵器破片１点が出土している。

第65図４：ヒデ鉢。火床にススが付着している。石質は凝灰岩である。側縁に加工痕が認められる。長さ18.6cm、幅17.6cm、厚さ６cmを測る。

ＳＫ２：ＳＫ２はＤ－33dグリッドに位置する。2b層上面で検出された。上端平面形・下端平面形共に長方形で、上端は長軸82cm、短軸51cm、下端は長軸76cm、短軸44cmを測る。深さは15cmである。断面形は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ３：ＳＫ３はＤ－32cグリッドに位置する。2b層上面で検出された。上端平面形・下端平面形共にほぼ円形で、上端は長軸80cm、短軸77cm、下端は長軸73cm、短軸62cmを測る。深さは７cmである。断面形は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。遺物は底面から礫１点が出土している。

ＳＫ３：ＳＫ３はＤ－32bグリッドに位置する。2b層上面で検出された。ピットと重複関係があり、ピットがＳＫ３より新しい。上端平面形・下端平面形共に不整楕円形で、上端は長軸97cm、短軸は60cm、下端は長軸84cm、短軸50cmを測る。深さは10cmである。断面形は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

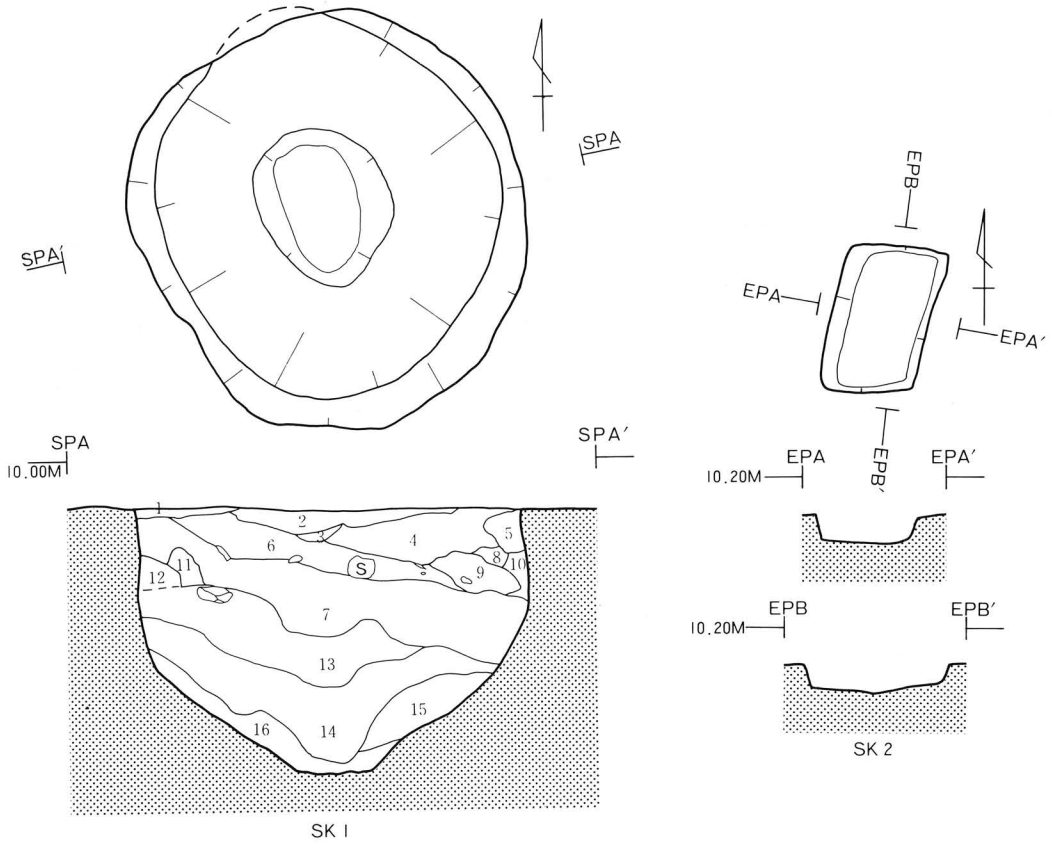
ＳＫ４：ＳＫ４はＤ－32bグリッドに位置する。2b層上面で検出された。ＳＥ１と重複関係があり、ＳＥ１がＳＫ４より新しい。上端平面形・下端平面形共に不整円形と考えられる。深さは53cmである。断面形は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。遺物は、土師器破片１点と骨片１点が出土している。

ＳＫ５：ＳＫ５はＤ－33aグリッドに位置している。2b層上面で検出された。ＳＤ６・ＳＥ１と重複関係があり、ＳＫ５がＳＤ６・ＳＥ１より新しい。上端平面形・下端平面形共に不整楕円形で、上端は長軸72cm、下端は長軸58cm、短軸55cmを測る。深さは12cmである。断面形は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。遺物は土師器破片１点を出土している。

ＳＫ６：ＳＫ６はＤ－32aグリッドに位置している。2b層上面で検出された。上端平面形・下端平面形共に不整楕円形で、上端は長軸75cm、短軸60cm、下端は長軸55cm、短軸45cmを測る。深さは６cmである。断面は弧状を呈しており、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

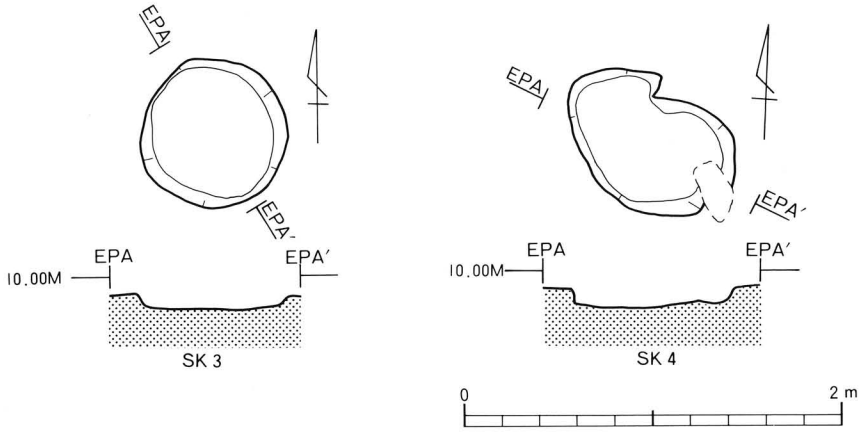
ＳＥ１：ＳＥ１はＤ－32b・cグリッドに位置している。2b層上面で検出された。上端平面形・下端平面形共に不整円形で、上端は長軸120cm、短軸100cm、下端は長軸65cm、短軸56cmを測る。深さは166cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが上部ではやや外傾する。底面はほぼ平坦である。遺物は陶器片１点と樹木片が出土している。

ＳＥ２：ＳＥ２はＤ－33グリッドに位置している。2b層上面で検出された。上端平面形・下端平面形共に円形で、上端は長軸96cm、短軸89cm、下端は長軸63cm、短軸60cmを測る。深さは

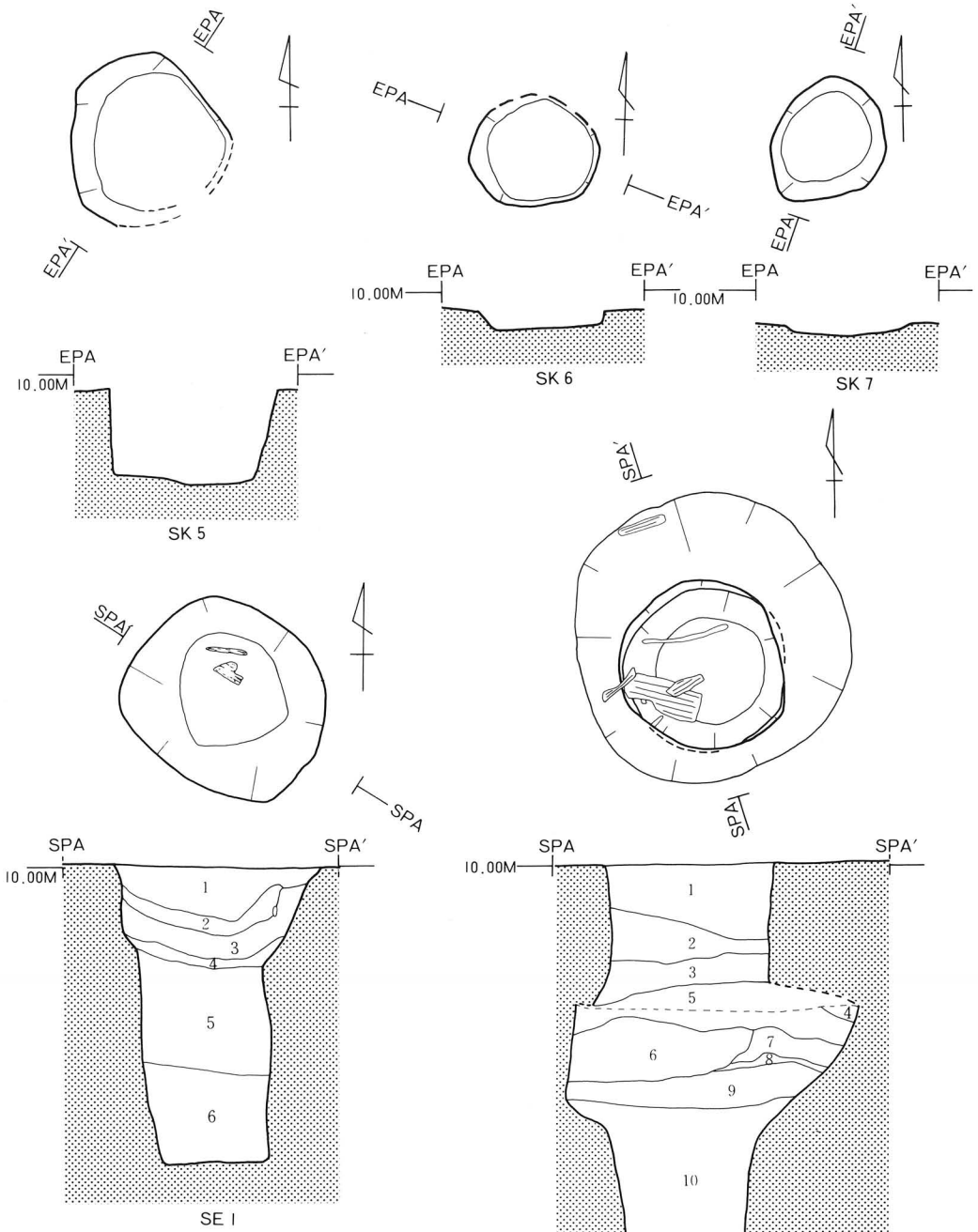


土層註記

1 2.5Y⅗暗灰黄シルト　炭化物少量、パミス含む、酸化鉄を層底部に帯状に含む、マンガン少量含む。
2 10YR⅗黒褐色シルト　炭化物少量、マンガン粒少量含む、パミス少量含む、酸化鉄含む。
3 10YR⅗黒褐色シルト　炭化物極少量含む、マンガン粒少量、酸化鉄少量含む。
4 10YR⅗暗褐色シルト　マンガン粒多量に含む、炭化物含む、酸化鉄少量含む。
5 10YR⅘褐色シルト　マンガン粒多量に含む、炭化物少量含む、酸化鉄ブロック状に多量に含む。
6 10YR⅗暗褐色シルト　炭化物、マンガン粒を少量含む、酸化鉄全面に含む。(石15cm 6 cm大)
7 10YR⅗黒褐色シルト　炭化物少量含む、マンガン粒少量含む、層底部に酸化鉄含む。(石10cm大)
8 10YR⅗黒褐色シルト　炭化物極少量、マンガン粒少量、酸化鉄まばらに含む。
9 10YR⅗黄褐色粘質シルト　炭化物極少量、マンガン粒多量に含む、酸化鉄をブロック状に含む。(石8 cm大)
10 10YR⅗灰黄褐色粘質シルト　炭化物少量、マンガン粒多量、酸化鉄まだら状に多量に含む。
11 10YR⅗黒褐色粘質シルト　炭化物少量、マンガン粒多量、酸化鉄少量含む。
12 10YR⅗暗褐色粘質シルト　炭化物極少量、マンガン粒多量、酸化鉄少量含む。
13 7.5Y⅘灰色粘土　炭化物少量含む。
14 7.5GY⅘暗緑灰色粘土　13層の土を大きなブロック状に含む。
15 7.5Y⅘灰色粘土　少量の炭化物を含む。
16 5GY⅘暗オリーブ灰色粘土　少量の炭化物と微砂を含む。



第63図　Ⅲ区３ａ層・２ｂ層上面遺構平面図・セクション図・エレベーション図（１）



土層註記

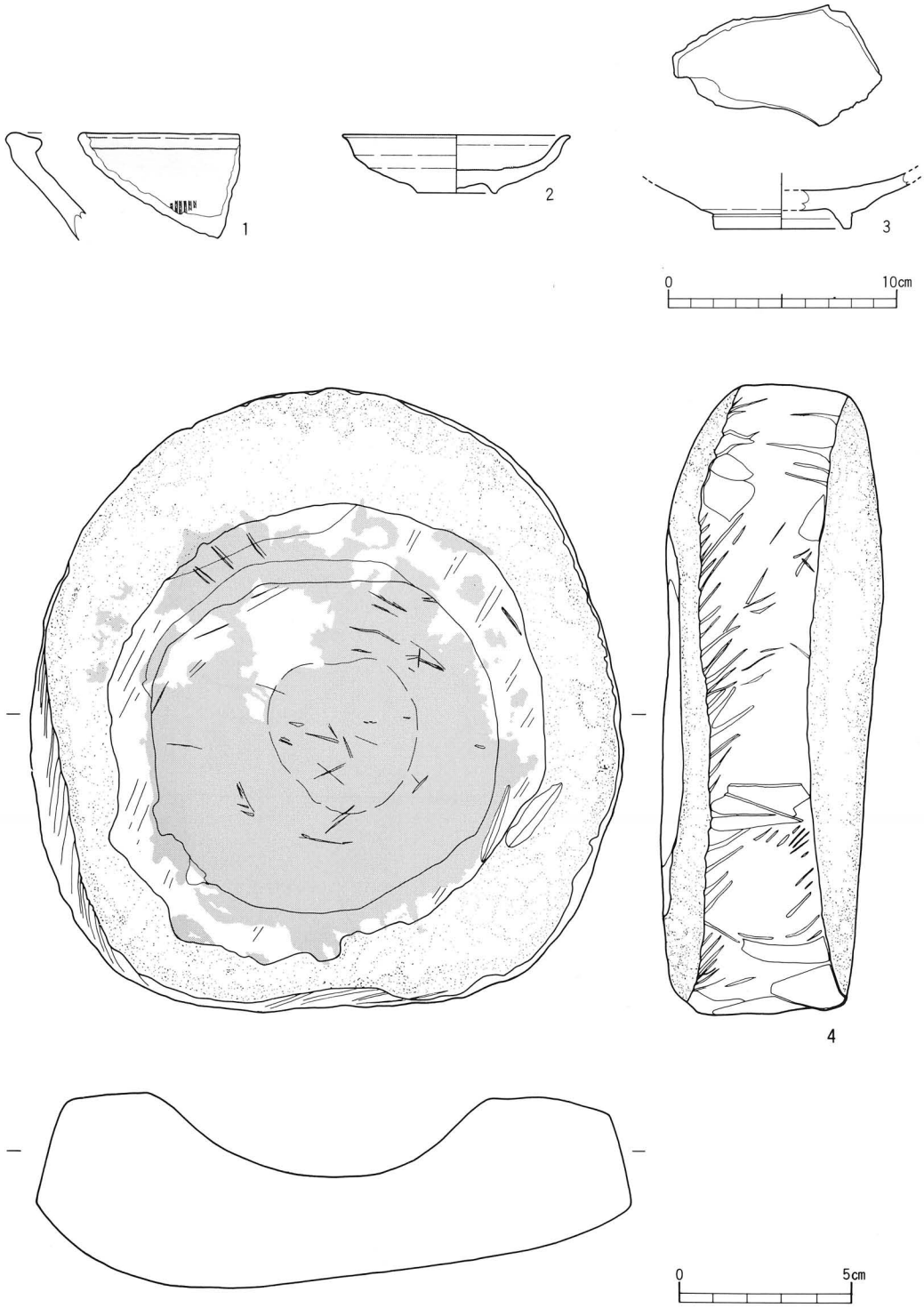
1　10YR⅔灰黄褐色シルト　黄色土をまだら状に多量に含む炭化物を少量含む。
2　2.5Y⅔にぶい黄色粘土質シルト　炭化物を少量含む。
3　2.5Y⅔黄灰色粘土質シルト　炭化物を少量含む、マンガン、酸化鉄を含む。
4　10YR⅔黒褐色粘土質シルト　炭化物を少量含む、マンガン、酸化鉄を含む。
5　7.5Y⅔灰色粘土　青灰色土のブロックを含む。
6　7.5Y⅔灰色粘土　パミスを含む。

0　2m

土層註記

1　10YR⅔灰黄褐色粘土質シルト　炭化物を含む、黄色土、灰白色土がまだら状に多量混入する。
2　10YR⅔黒褐色粘土質シルト　炭化物、マンガン粒を含む、黄色土、灰白色土をブロック状に少量含む。
3　2.5Y⅔黄灰色粘土質シルト　炭化物を含む、灰白色土をブロック状に少量含む。
4　10YR⅔黒褐色シルト　約2㎜程の灰白色の土をブロック状に含む。
5　7.5Y⅔灰色粘土　上部に帯状に。
6　10G⅔緑灰色サンドシルト　全体にまだら状に黒褐土と炭化物が混入している。
7　5G⅔暗緑灰色サンドシルト　全体にまだら状に浅黄色土をブロック状に含む。
8　5BG⅔暗青灰色粘質シルト　10cm前後の緑灰色土をブロック状に含む。
9　10GY⅔暗緑灰色粘土質シルト　10　10G⅔暗緑灰色砂

第64図　Ⅲ区３ａ層・２ｂ層上面遺構平面図・セクション図・エレベーション図（２）



第65図　Ⅲ区ＳＲ１・土壙出土遺物実測図

230cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、中位では壁面の崩壊が起こったらしく外方へ広がっている。遺物は樹木片が出土している。2b層・3a層上面検出の遺構群については、4層上面で検出されたＳＲ１の埋土１層中出土の陶器及び磁器により、その上限は中世末～近世初頭と考えられる。しかし、下限については出土遺物が少ないことから明確な時期を確定しがたい。

５．基壙群の調査

墓壙群は調査区北西部Ｂ・Ｃ－33グリッドで検出された。墓壙群は11基で構成されており、１号・２号墓に独立性が強く、３～11号墓にまとまりを認めることができる。その配置は直線的でほぼ真北方向を基準としている。各棺は掘り方の中に埋置されているが、１～３号墓のほかは隣接する墓壙との掘り方の重複関係は不明確である。しかし、７～10号墓については、８号墓より９号墓が新しく、掘り方底面の標高差、棺の位置から９号墓より10号墓が新しく、８号墓より７号墓が新しい。このことは墓壙群に少なくとも３期の時期差があることを示している。

また９号墓の東側ではＳＫ８が検出されている。

１号墓：１号墓は墓壙群の中では最も南に位置している。掘り方45×47cmの中に箱型の木棺が埋置されている。木棺は33×34cmほどの方形で、残存高23cmである。遺物は棺内底面からガラス鏡１点、ツチンボ１点、寛永通宝３点、不明鉄製品１点、骨片、歯１点が出土している。ツチンボは残存状況が悪く図化することができなかったが、長さ約43cmであった。

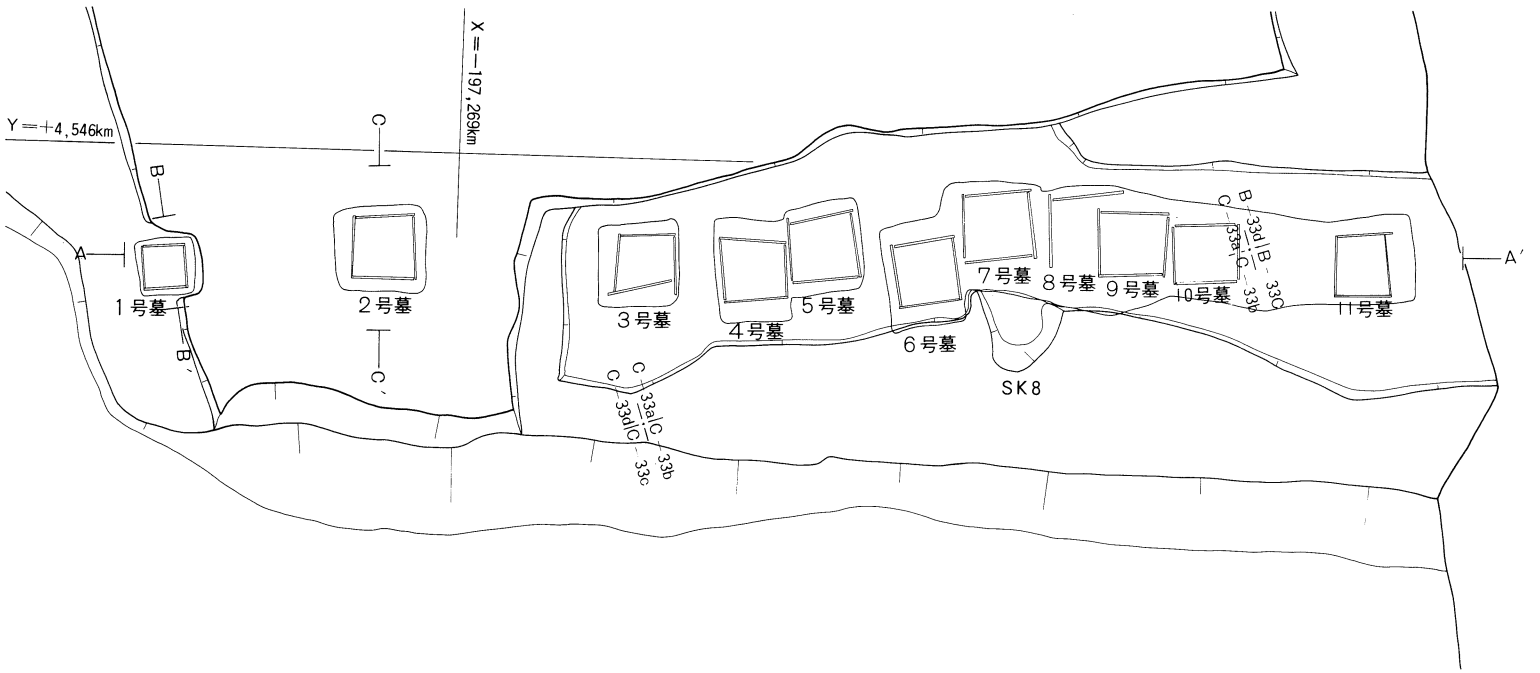
第68図１（写真362－１・２）：ガラス鏡。板ガラスを２枚合わせた鏡である。合わせ面に水銀が塗布されている。長さ49cm、幅4.9cm、幅7.5cm、厚さ２mmを測る。

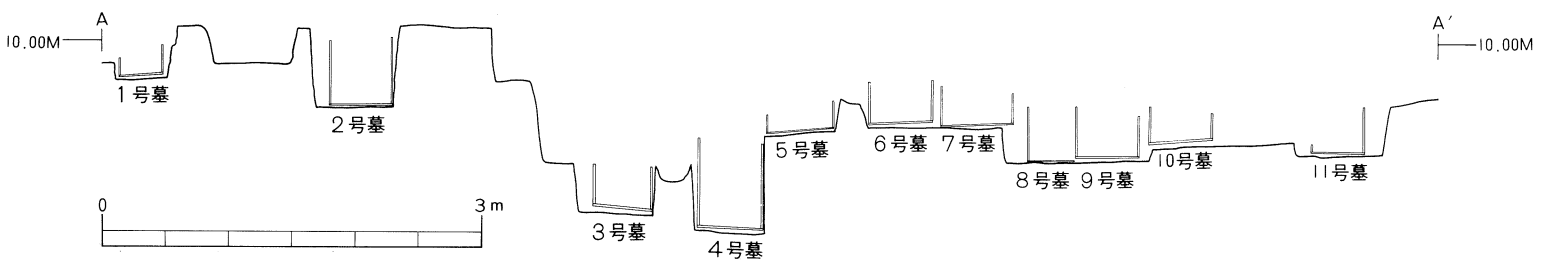
第68図２（写真361－５）：２枚出土した寛永通宝のうち１点ある。

２号墓：２号墓は墓壙群の中では１号墓と３号墓のほぼ中間に位置している。掘り方60×58cmの中に箱型の木棺が埋置されている。木棺は52×49cmほどの方形で残存高54cmである。遺物は埋土１層中より火消し壺１点、埋土中より骨片、礫１点が出土している。火消し壺は副葬品としてよりは、他の性格を帯びたものと考えられる。

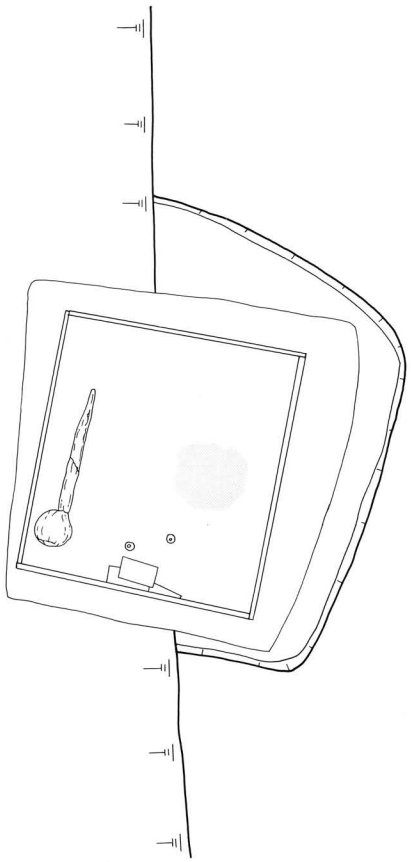
第68図３（写真361－３）：火消し壺。ほぼ完形である。内外面共に黒色を呈しており、蓋、壺共に製作にロクロを使用している。蓋の内面には回転糸切痕がみられ、切り離し後の調整は行なわれていない。壺の底部外面にはナデが施されている。蓋は外面の中央部にリング状のつまみがあり、壺の口縁部にかかる水平なかえりを有している。器高3.2cm、最大径16.6cm、底面の径は9.4cmである。壺は体部中位に最大径をもち、口縁部が短く外傾する。底部はやや上げ底気味である。器高18.15cm、口径12.0cm、底径11.2cm、体部の最大径は18.6cmを測る。器厚は６～17mmである。

３号墓：掘り方56×60cmの中に箱型の木棺が埋置されている。木棺は51×47cmほどの方形で東側側板の位置がやや移動している。遺物は掘り方から陶器１点、木棺の埋土中より骨片、鉄





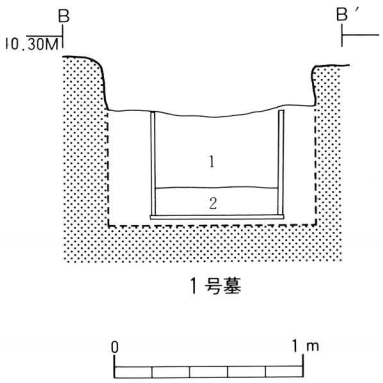
第66図　Ⅲ区　層上面墓坑群平面図・エレベーション図



1号基土層註記
1　10YR5/6黄褐色シルト　酸化鉄、マンガンを含む。
2　10YR3/1黒褐色粘土　若干の酸化鉄を含む。

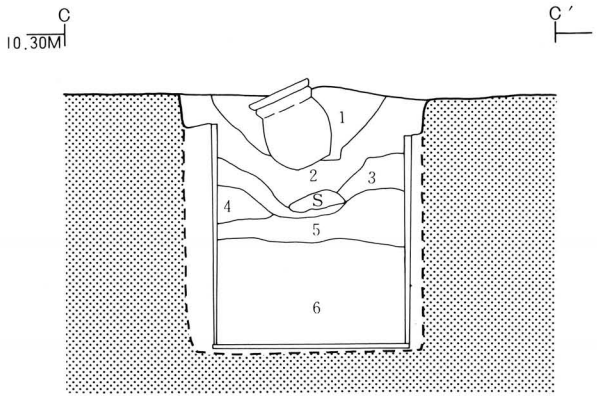
2号墓土層註記
1　10YR5/6にぶい黄褐色砂質シルト
2　2.5Y5/1黄灰色シルト　炭化物酸化鉄を含む。
3　2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト　酸化鉄マンガンを含む。
4　2.5Y5/1黄灰色シルト　酸化鉄多量のマンガンを含む。
5　2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト　酸化鉄、マンガンを含む。
6　2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト　酸化鉄、マンガンを含み、灰白色のブロックを含む。

0　50cm



1号墓

0　1m



2号墓

第67図　Ⅲ区1号墓・2号墓平面図・セクション図

砲玉１点、土師器破片１点、礫１点、木棺内底面から寛永通宝１点が出土している。

第69図１（写真361－４）陶器の碗である。産地は相馬と考えられる。完形である。高台部分は無釉であり、内外面に貫入がみられる。製作年代は幕末～明治であろう。

第69図２（写真361－６）鉄砲五である。真円ではなく、すでに使用されていたと判断される。径は11～12mm である。

４号墓：掘り方は東西82cm であり、南北は約58cm と推定される。木棺は50×53cm の不整方形である。遺物は埋土中より骨片、歯１点、陶器片１点、樹木片１点、鉄製品１点、古銭１点、礫１点が出土している。

５号墓：掘り方は東西70cm であり、南北は約60cm と推定される。木棺は52×53cm の不整方形である。遺物は出土していない。

６号墓：掘り方は東西82cm であり、南北は約58cm と推定される。木棺は49×50cm ほどの方形である。遺物は出土していない。

７号墓：掘り方は東西58cm であり、南北は約65cm と推定される。木棺は54×54cm の方形である。遺物は木棺埋土中より骨片が出土している。

８号墓：木棺の南と西の側板が残存している。遺物は木棺埋土中より寛永通宝21点が出土、第**69図３～13**（写真361－７～17）はそのうちの11点である。

９号墓：木棺は東西53cm、南北54cm の不整方形である。遺物は木棺埋土中より寛永通宝11枚、仙台通宝３枚、提灯の底板１点、簪１点、煙管の吸口１点、羅宇１点、骨片などが出土している。

第70図１（写真362－１）：提灯の底板である。素材は針葉樹の柾目材である。径は5.2cm、厚さ１mm を測る。中央部に蠟燭立ての針を通すための径３～６ mm の穴が穿たれている。

第70図２～４（写真362－２・３・４）：寛永通宝である。３点を図示した。

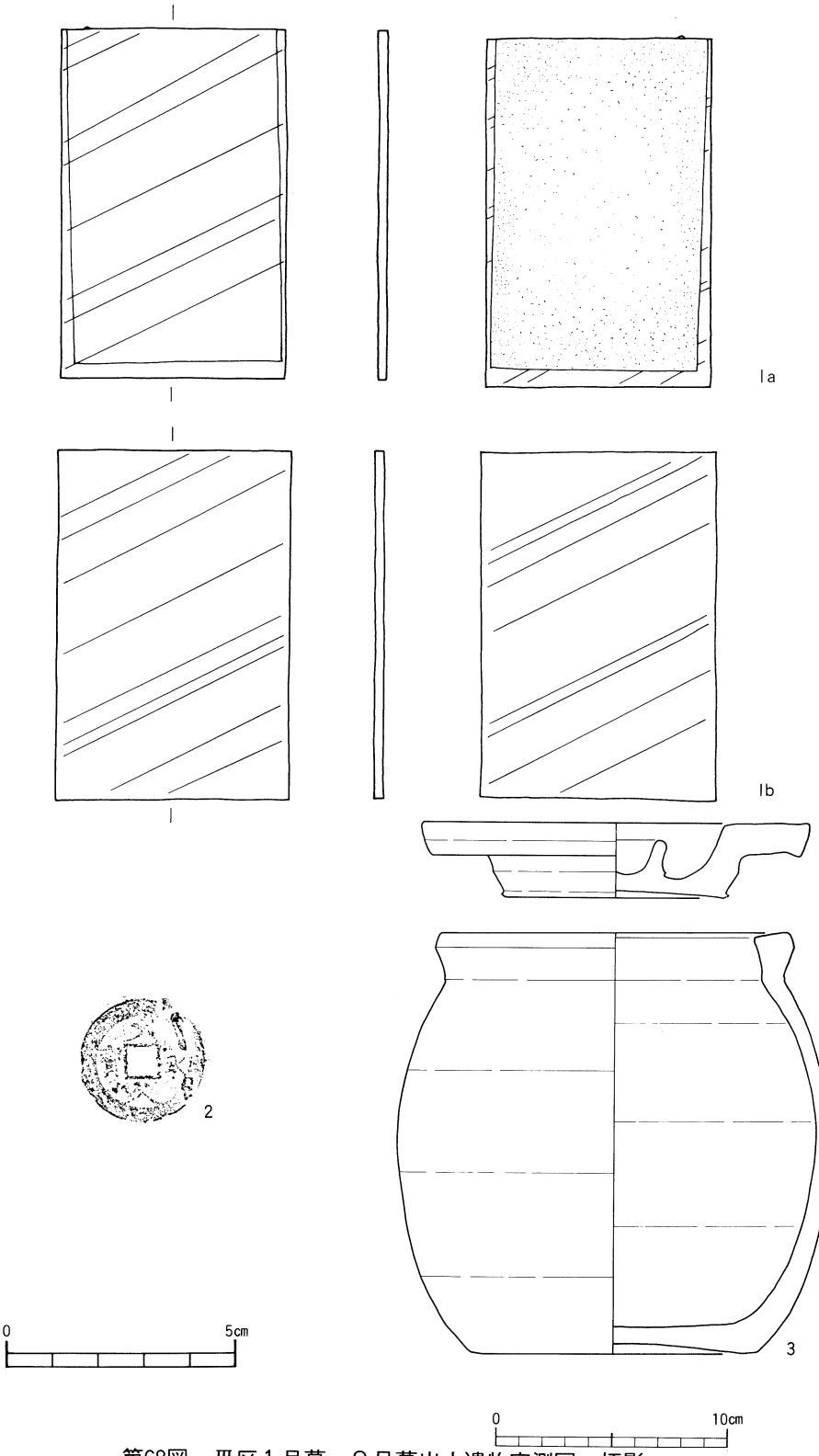
第70図５（写真362－６）：簪である。表面に文様が線刻されている。頭部は耳掻を兼用している。長さ14.4cm、幅７ mm、厚さ２ mm である。

第70図６（写真362－７）：煙管の吸口である。外面に金色の付着物が認められる。長さ5.3cm、径８ mm である。

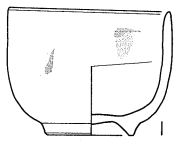
第70図７（写真362－８）：煙管の羅宇である。素材は竹である。一端が欠損しており残存長は10.4cm である。径は８ mm である。

なお仙台通宝は３枚（写真362－５）がくっついており、残存状況が悪いため図示さできなかった。

ＳＫ８：ＳＫ８は７号墓の東側に位置している。埋土中から煙管の雁首１点、針状の鉄製品１点が出土している。



第68図　Ⅲ区１号墓・２号墓出土遺物実測図・拓影



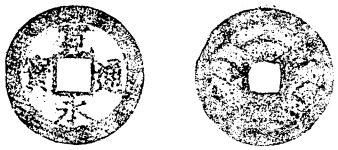
1

2

0 5 cm

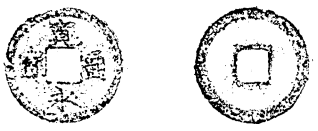
3

4

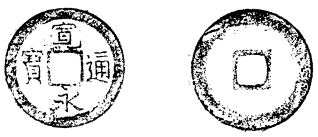


5

6



7



8

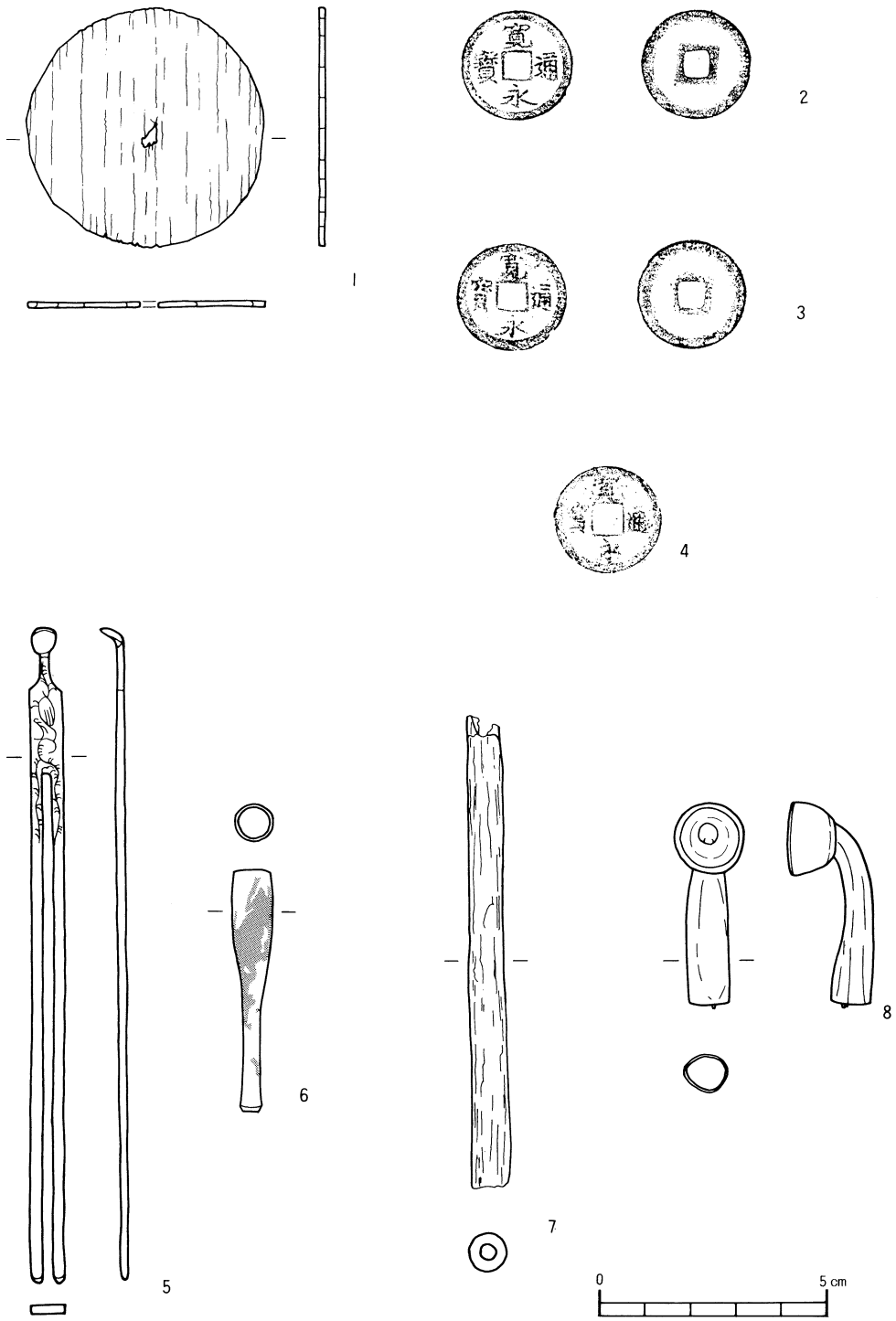
9

10 11

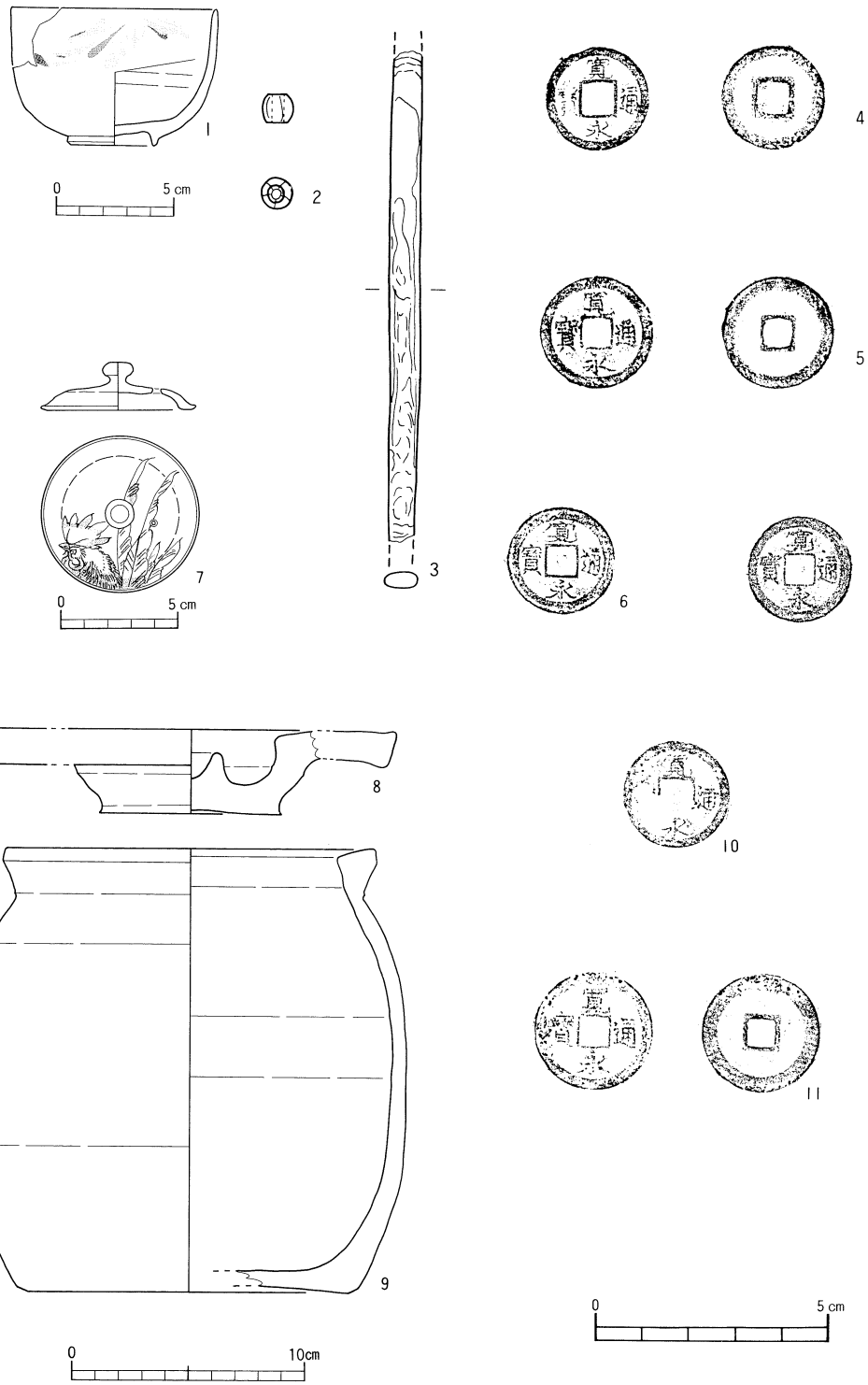
12 13

0 5 cm

第69図　Ⅲ区３号墓・８号墓出土遺物実測図・拓影



第70図　Ⅲ区９号墓・10号墓出土遺物実測図・拓影



第71図　Ⅲ区10号墓・11号墓・墓坑確認面出土遺物実測図・拓影

第70図８（写真362－９）：煙管の雁首である。長さ4.5cm、火皿の径は1.5mmである。

10号墓：木棺は東西45cm、南北47cmの方形である。木棺埋土中より寛永通宝３枚、陶器１点、数珠五１点、木製品１点、不明鉄製品１点、骨片などが出土している。

第71図１（写真362－10）：陶器の碗である。産地は相馬と考えられる。全体の4/5が残存している。外面には鉄釉による文様がみられる。高台部分は無釉である。内外面に貫入がみられる。製作年代は幕末以降であろう。

第71図２（写真362－12）：数珠玉である。径は6.5mmであり、数珠紐を通すための径２mmの穴が穿たれている。素材は木を用いており、赤褐色の塗料が塗布されている。

第71図３（写真362－11）：扁平な断面を有する棒状の不製品である。両端が欠損している。残存長10.5cm、幅７mm、厚さ３mmを測る。

第71図４（写真362－13）：寛永通宝である。３枚のうち１点を図示した。

11号墓：木棺は東西48cm、南北46cmの不整方形である。木棺埋土中より寛長通宝６点、数珠玉１点、歯２点、骨片などが出土している。

第71図５・６（写真362－14・15）：寛永通宝である。６点のうち２点を図示した。

墓壙確認面及び墓壙付近出土遺物

第71図７（写真362－18）：墓壙確認面より出土している。磁器の急須の蓋である。産地は不明である。完形である。外面に呉須により鶏が描かれている。また内面には「閑山製」の銘が呉須により記されている。製作年代は明治以降である。

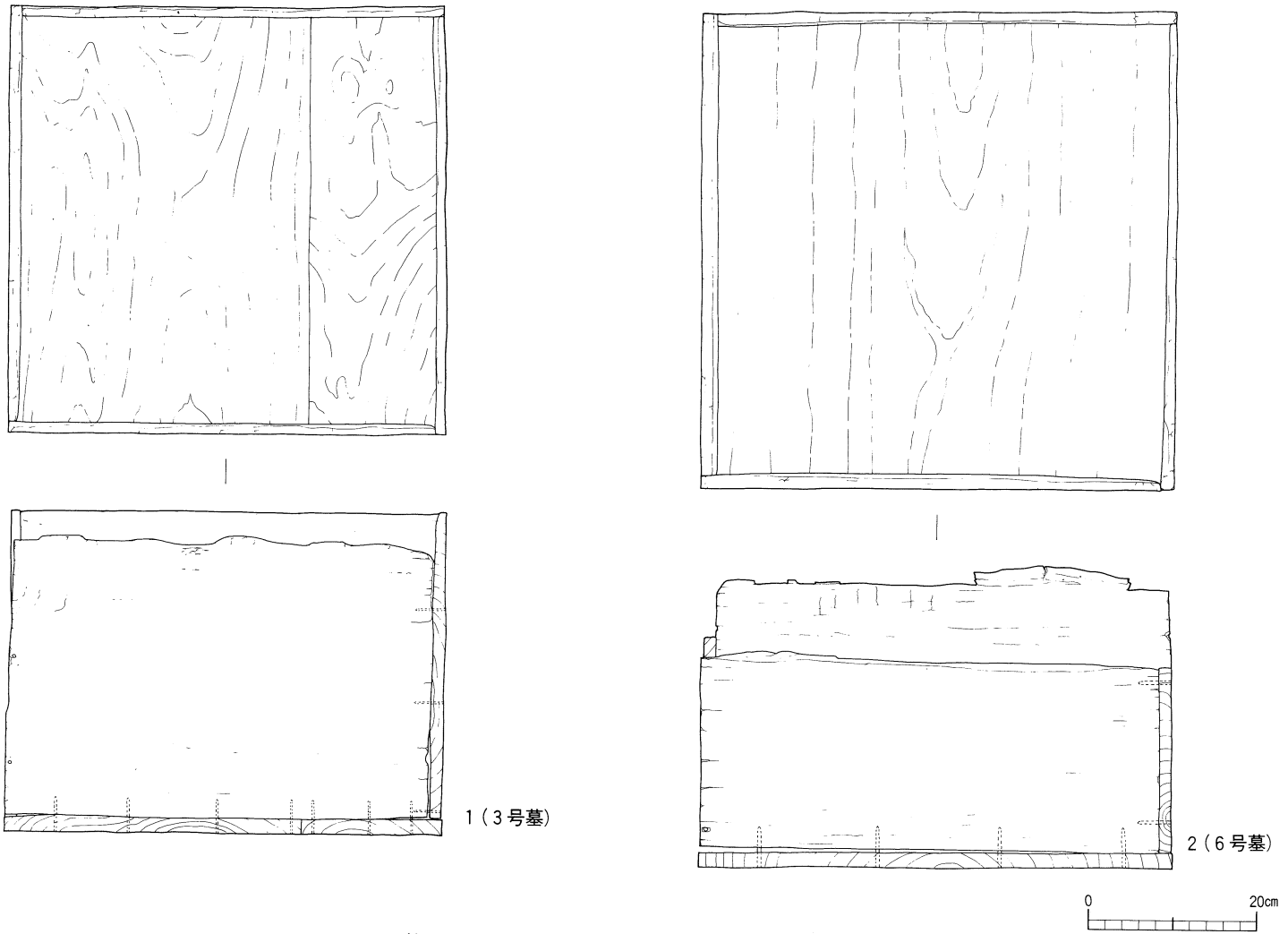
第71図８（写真362－16）：墓壙付近より出土している。火消し壺の蓋である。全体の約1/5が残存している。内外面とも黒色を呈しており、製作にはロクロを使用している。内面には回転糸切痕がみられ、切り離し後の調整は行なわれていない。外面の中央部にリング状のつまみがあり、水平なかえりを有している。器高3.6cm、径16cm以上、底面の径は7.8cmである。

第71図９（写真362－17）：墓壙付近より出土している。火消し壺の壺である。全体の約1/2が残存している。内外面とも黒色を呈しており、製作にはロクロを使用している。底部外面にはナデが施されている。体部中位に最大径をもち、口縁部が短く外傾する。底部はやや上げ底気味である。器高19.1cm、口径12.6cm、底径13.6cm、体部の最大径は18.7cmを測る。器厚は６～19mmである。

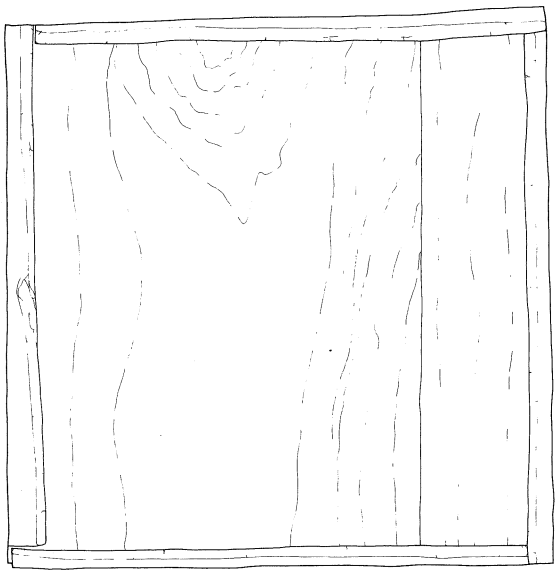
第71図10・11（写真362－19・20）：墓壙付近より出土している。２点とも寛永通宝である。

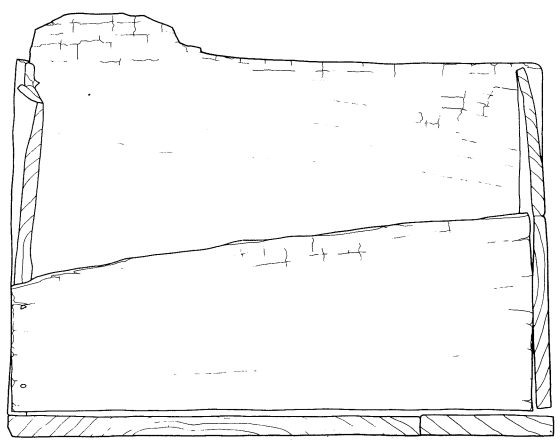
木棺の製作について

木棺は11基検出されているが残存状況が悪く、３号墓・６号墓・７号墓・８号墓の４つの木棺を図示した。これらの木棺の素材はマツ及びスギの板目材である。棺の底板は板材１枚のものと２枚のものがある。側板は木口面の一端を外面に出し、もう一端は隣り合う側板の板目面

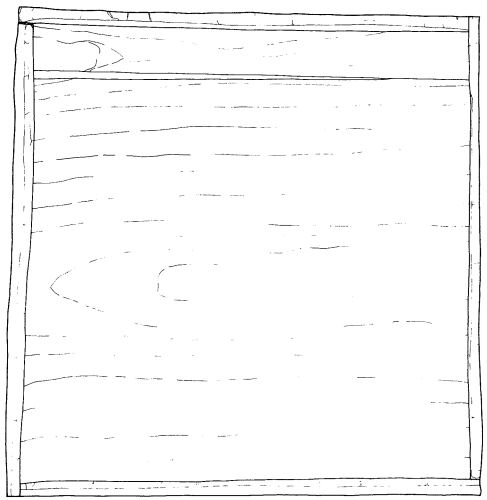


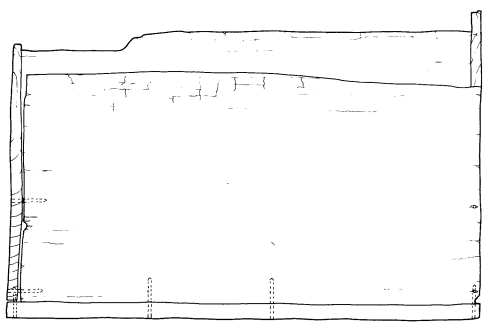
第72図　Ⅲ区3号墓・6号墓棺桶実測図





1（7号墓）





2（8号墓）

0　20cm

第73図　Ⅲ区7号墓・8号墓棺桶実測図

と接するように組み合わせてあり、側面図では３・６・７号墓は側板の木口面が必ず右側にくるようになっている。これに対し10号墓では木口面が左側にくるように組み合わされている。他の木棺は全て木口面が右側にくるようになっている。これらの板材は角釘によって固定されている。

墓壙群について

各墓壙の出土遺物をみると、木棺内に副葬品を伴う墓壙７基（１・３・４・８・９・10・11）と伴わない墓壙４基（２・５・６・７）に分けられる。副葬品を伴う墓壙からは、寛永通宝が出土している点で共通性が認められる。しかし他の副葬品についてはそれぞれの墓壙によって異なっている。

次に木棺については、その大きさは２～11号墓では側板の長さは42～58cm であり、50cm 前後のものが多く、規画性が認められ、１号墓だけがやや小さく33cm 程である。しかし前述のように製作法には共通性が認められ、１号墓の性格が他の墓壙と異なることも考えられる。

最後に、各墓壙は少なくとも３期の時期差をもつが、この時期差がどのくらいであるのか副葬品からでは明確にしがたい。また、木棺の製作法についてもどれだけの期間用いられていたのか不明である。しかしながら、２～11号墓の木棺の大きさ、１号墓を含めた製作法の共通性はそれほどの時期差を感じさせないがいかがなものであろうか。さて、墓壙群の時期は副葬品から幕末以降とされるが、その時期の確定とともに墓壙群の性格が単なる集団の墓地であるのか否か今後の課題とされる。

６．遺構外出土遺物

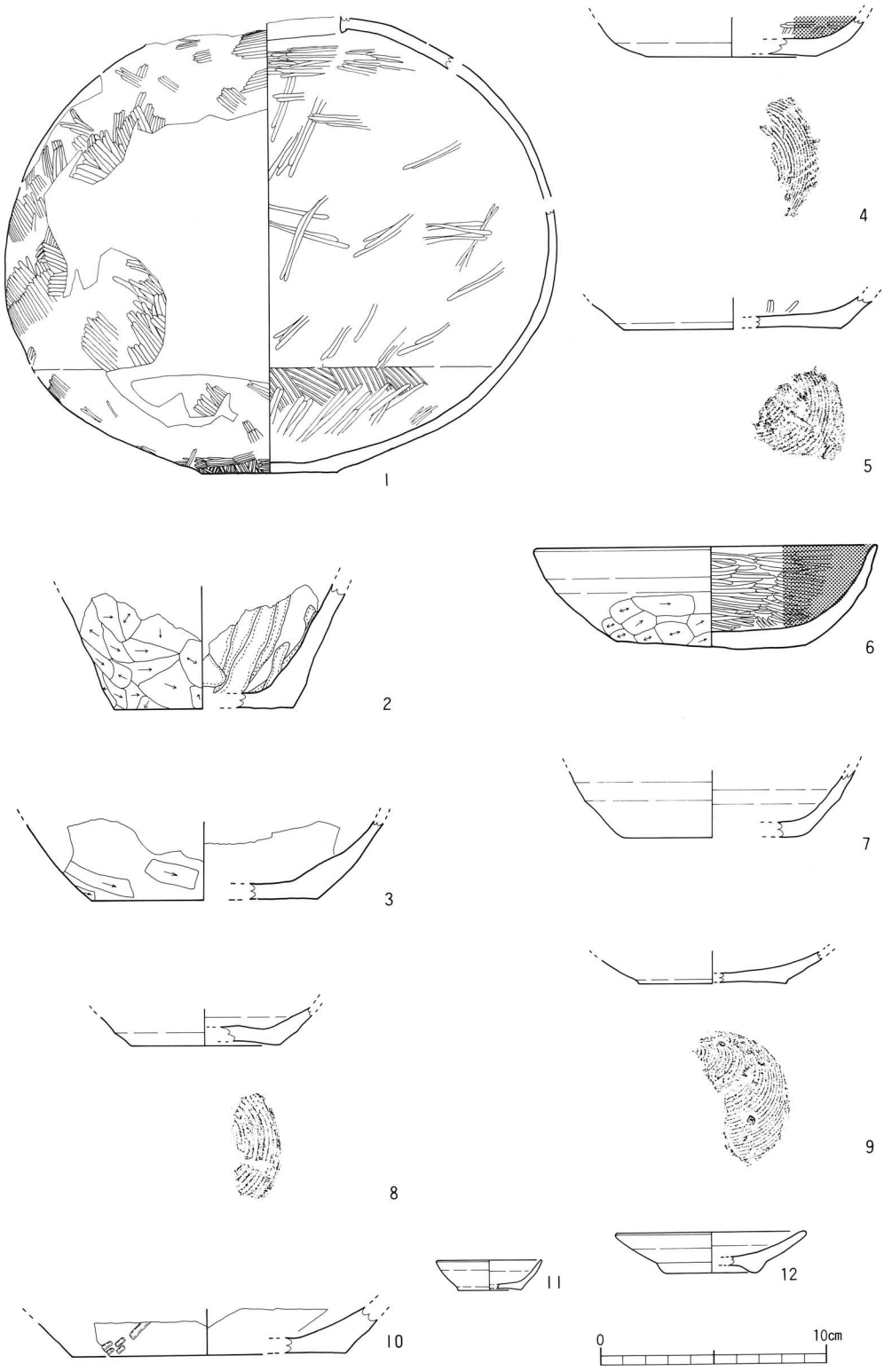
第74図１（写真353－１）：Ｄ－32グリッド４層上面より一括して出土した土師器壺である。頸部から口縁部にかけて欠損しており、体部の約1/2が残存している。体部はやや扁平気味の球形であり、最大径は体下半部にある。また体下半部には製作に際しての粘土紐の積み上げ痕が認められ、内面には刷毛目が施されている。調整は内外面共にヘラミガキであるが、外面底部付近では刷毛目のちヘラミガキがなされている。外面には部分的に丹塗りの痕跡が認められる。残存高20.4cm、底径5.95cm、体部最大径24.5cm である。

第74図２・３は土師器甕、４・５は土師器坏である。

第74図６（写真353－17）：Ｃ－34グリッド３層中より出土した土師器坏である。全体の約3/4が残存している。製作にロクロを使用しており、切り離し後底部と体部下半にヘラケズリがなされている。器高は4.6cm、口径15.2cm、底径8.2cm である。

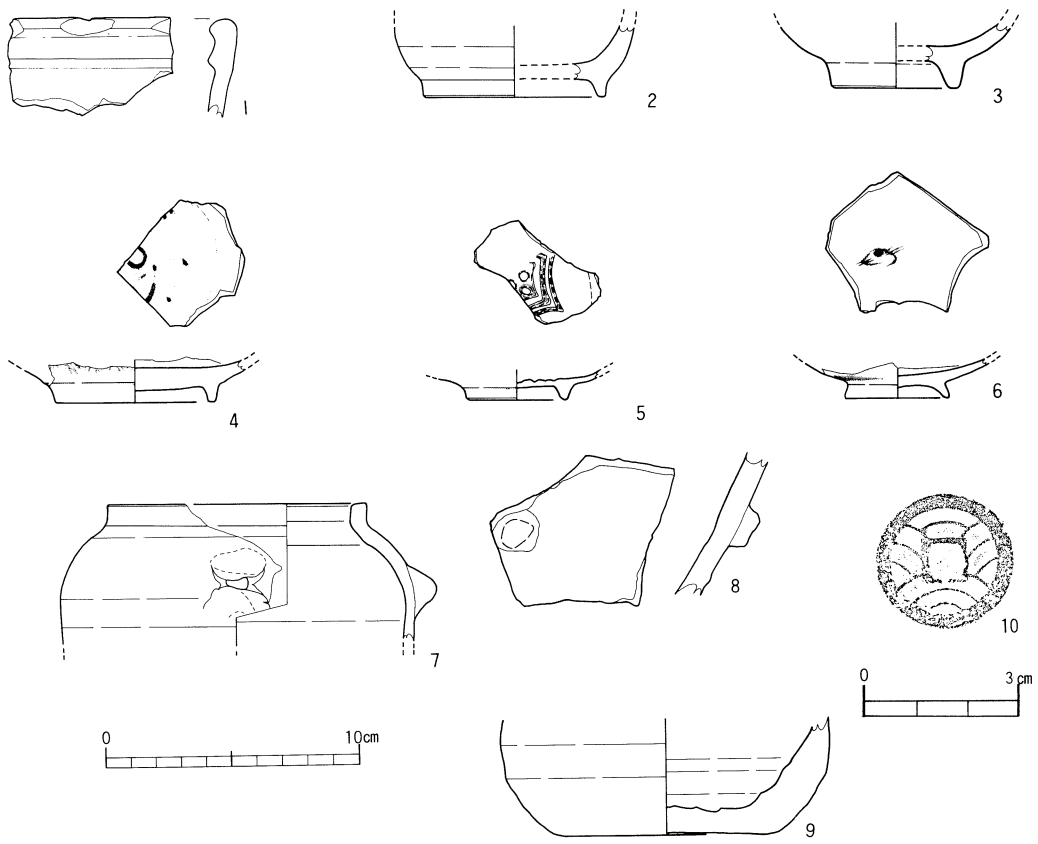
第74図７・８・９は須恵器坏、10は須恵器甕、11・12は赤焼土器である。

第76図１～９は陶器及び磁器である。産地は１は堤、３は相馬である。２は唐津、４・６は肥前であろうか。第76図10は寛永通宝と考えられる。



第74図　Ⅲ区出土遺物実測図（1）

第75図　Ⅲ区出土遺物実測図（２）



第76図　Ⅲ区出土遺物実測図（３）

第4節　IV～VII区の調査

1．32a層の調査

(1)　調査の概要

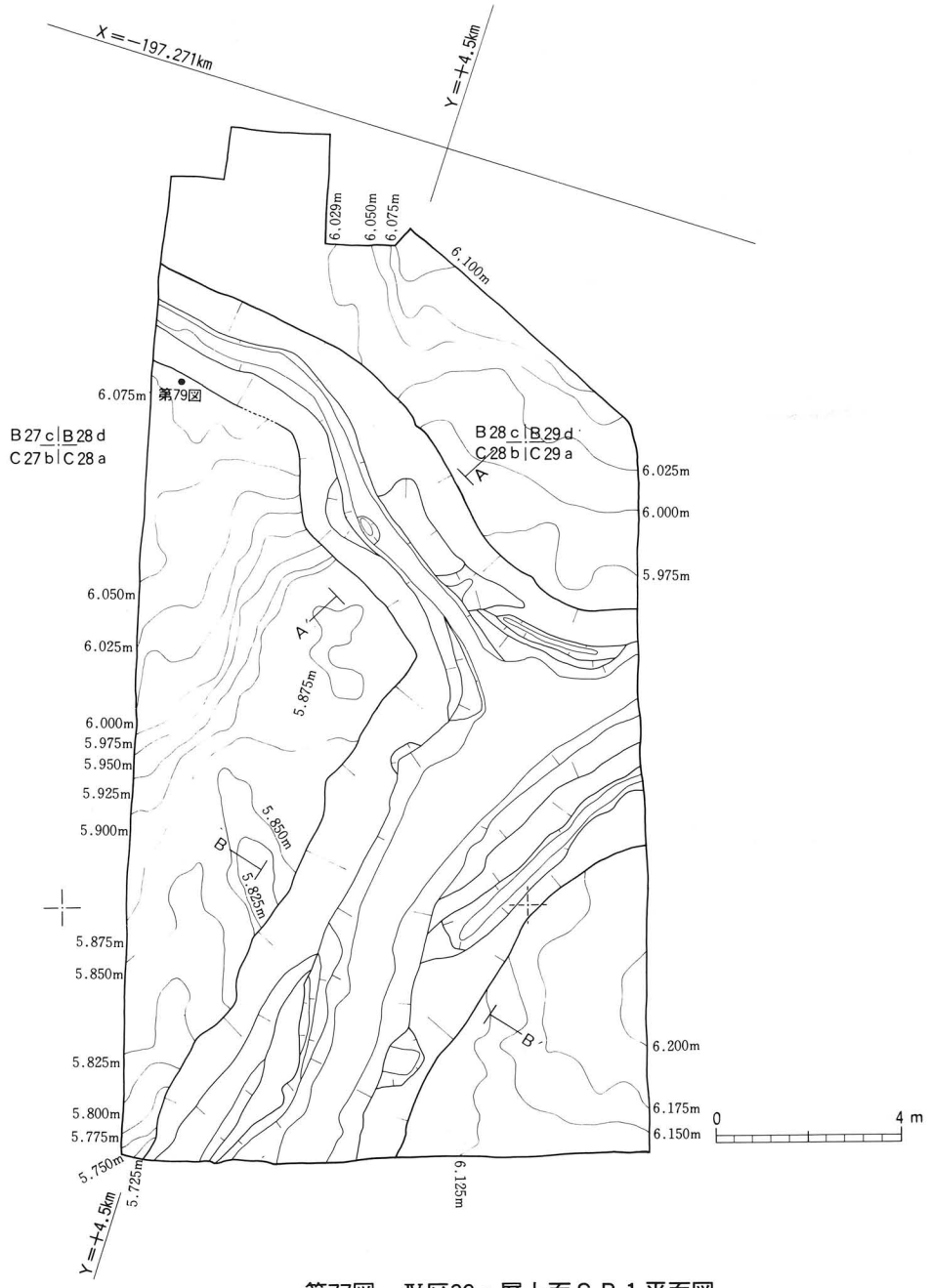
①　**32a層の分布・土性**：32a層はIV区からVII区にかけて分布する。層厚はV区D－21グリッドで約10cm、VF区で20～30cm、VE区で5～20cm、VII区で10～20cmである。土性は10YR3/1黒褐色粘土である。この層は、層中に植物遺体を含むが、それらは泥炭起源とは考えにくいこと、径2～5 cmの礫を含むことから泥炭質粘土層とは区別される。

②　**32a層上面の標高・地形**：32a上面の標高はIV区南東部D－29グリッドで6.00～6.13m、V区D－18～20グリッドで6.35～6.40m、VF区で6.20m、VE区で6.10～6.15m、VII区で6.20～6.30mと、V区東半部においてやや高い傾向がある。全体としては、やや起伏はあるものの調査区においては標高6.00～6.40mのほぼ平坦な地形面が考えられる。

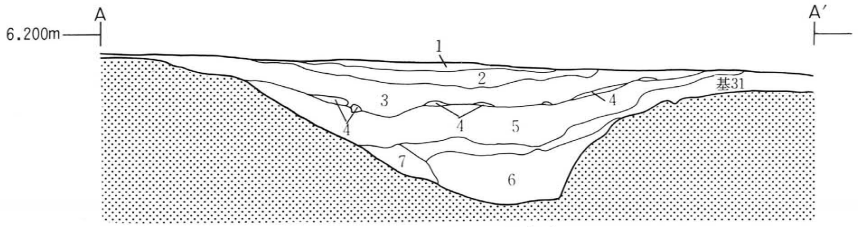
③　**検出遺構と出土遺物**：32a層の調査はIV・V・VI・VII区で行なわれており、32a層上面においてIV区では河川跡2条（SR1a、SR1b）、石器1点を検出、V区で河川跡1条（SR2）を検出している。VE区・VII区では32a層中より縄文土器片及び石器が出土しており、その数量はVE区では縄文土器片5点、石器840点、VII区では石器2点である。

(2)　IV区の調査

①　**SR1a**:SR1aはIV区中央部やや東よりのC・D－28・29グリッドの32a層上面で確認した河川跡である。SR1b河川跡との重複関係は認められず、SR1aとSR1bは同時期に存在したと考えられる。SR1aはゆるく弧を描きながら南から北東へ延びており、更に調査区外へ続いていると考えられる。方向は真北に対してN－20°－Eで、調査区内での検出長は約16mである。断面形はやや扁平な逆台形を呈し、壁面の立ち上がりはそれほど急激ではなく上端から3分の1程の深さで、あまり明瞭ではないが傾斜変換点が認められる。上端幅は4.4～5.95m、下端幅は0.81～1.61mである。下端は調査区南壁際では両上端の中心から若干東にかたよった位置にあるのに対して、調査区東壁際では逆に西にかたよっている。深さは南壁際で120cm、東壁際で90cm、で底面の標高は南壁際4.95m、東壁際5.10mと北側が高く南側が低くなっている。しかし、一様に北から南へ低くなっているのではなく中央部北よりで一旦高まってから徐々に低下している。底面にはあまり凹凸はない。堆積土は15層に細分されるが、ほとんどが粘土層で全般的に未分解の植物遺体を含んでいる。堆積土の中位には灰白色のシルト質の火山灰が認められ、この火山灰の降下した時期にはまだ完全には埋まりきっていなかったと判断できる。また、堆積状況の観察から自然堆積によって埋まったものと考えられる。SR1aからは遺物は出土していない。



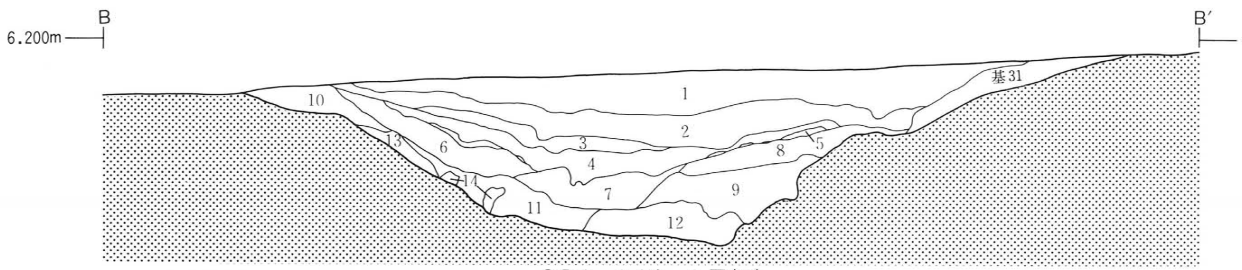
第77図　Ⅳ区32ａ層上面ＳＲ１平面図



ＳＲ１ｂセクション図(１)

土層註記

1　7.5ＹＲ疔黒色粘土　少量の未分解の植物遺体を含む。
2　2.5Ｙ疔黒褐色粘土　少量の未分解の植物遺体を含む。
3　５ＹＲ疔黒色粘土　未分解の植物遺体を含む。
4　10ＹＲ疔黒色粘土　全体に10ＹＲ疔灰白色シルトの火山灰を含む。
5　５Ｙ疔黒色粘土　全体に未分解の植物遺体を含み7.5Ｙ疔黒色粘土との互層になっている。
6　7.5疔黒色粘土　全体に少量の未分解の植物遺体を含み層底部に砂が混じっている。
7　2.5Ｙ疔黒褐色粘土　全体に未分解の植物遺体を含む。



ＳＲ１ａセクション図(２)

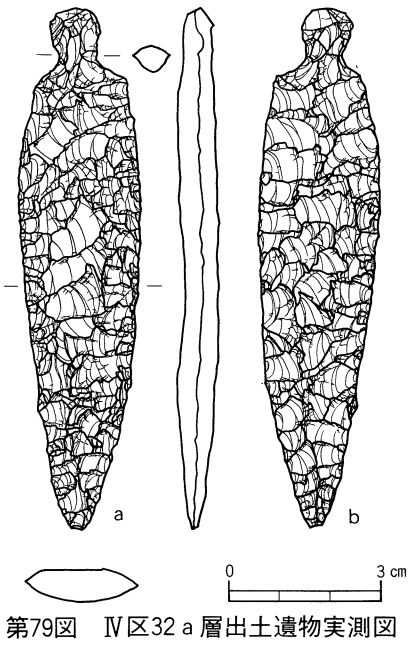
土層註記

1　10ＹＲ疔黒褐色粘土　未分解の植物遺体を多量に含み、2.5ＹＲ疔黒褐色粘土を層の中間に帯状に含む。
2　10ＹＲ疔褐灰色粘土　未分解の植物遺体を含み、炭化物の互層になっている。
3　10ＹＲ疔褐灰色粘土　未分解の植物遺体を含む。
4　５ＹＲ疔黒色粘土　少量の未分解の植物遺体を含む。
5　10ＹＲ疔黒色粘土　全体に10ＹＲ疔灰白色シルトの火山灰を含む。Ａ－Ａ′の４層と対応。
6　2.5Ｙ疔黒色粘土　少量の未分解の植物遺体を含み層下部が炭化物の互層になっている。
7　2.5Ｙ疔黒褐色粘土　未分解の植物遺体を少量含み全体に砂を若干含む。
8　５ＹＲ疔黒色粘土　全体に未分解の植物遺体を含む。
9　５ＹＲ疔黒色粘土　全体に少量の未分解の植物遺体を含む。
10　2.5Ｙ疔黒色粘土　全体に少量の未分解の植物遺体を含む。
11　2.5ＹＲ疔黒色粘土　未分解の植物遺体を少量含み、層下部に若干の砂を含む。
12　7.5ＹＲ疔黒色粘土　少量の未分解の植物遺体を含み層全体に砂を含む。
13　2.5Ｙ疔黒褐色粘土　少量の未分解の植物遺体を含む。
14　10ＧＹ疔緑灰色粘土全体に少量の微砂を含む。

第78図　Ⅳ区32ａ層上面ＳＲ１セクション図

② SR1b:SR1b はⅣ区中央部やや東よりの B・C－28・29 グリッドの32a 層上面で確認した河川跡で、SR1a 河川跡に合流している。SR1b は北西から南東へ延びており、更に調査区外の西側へ続いていると考えられる。方向は真北に対して N－62°－Wで、調査区内での検出長は8.52 m である。断面形は不整な逆台形を呈し、壁面の立ち上がりは東壁が外反しながらやや急激に立ち上がるのに対して、西壁はゆるく直線的に立ち上がり上端から 4 分の 1 程の深さで傾斜変換点が認められる。上端幅は1.97～3.19m、下端幅は0.22～0.54m である。深さは調査区西壁際で60cm、SR1a と合流する南東端部で80cmで、底面の標高は西壁際5.45m、南東端部5.10m と西側が高く東側へ向かって徐々に低くなっている。底面には部分的に凹凸が認められる。堆積土は 8 層に細分されるが、ほとんどが粘土層で全般的に未分解の植物遺体を含んでいる。堆積土の中位には SR1a にもみられた灰白色のシルト質の火山灰が認められ、この火山灰の降下した時期にはまだ完全には埋まりきっていなかったものと判断できる。このようにともに堆積土の中位に同様の火山灰が認められることからも SR1a と SR1b は同時期のものと考えられる。SR1b からは遺物は出土していない。

③ **出土遺物**：Ⅳ区の32a 層上面からは、B－28 グリッドより石匙が 1 点出土している。石匙は縦形の石匙で、先端部をわずかに欠損している。現存長102.8mm、最大幅23.9 mm、つまみ部長14.1mm、重さ19.2g の暗灰色を呈する珪質頁岩製のものである。先端部は尖頭状をなしており、両側縁は共に外弯しているが a 面の右側縁の方が左側縁より強く弯曲する。最大幅は先端部から 3 分の 2 程の身部にある。身部は両面ともていねいな押圧剝離が施され、素材の剝離面は残されていない。つまみ部は最終的には a 面からの剝離によって作り出されており、断面形は不整なヒシ形を呈する。

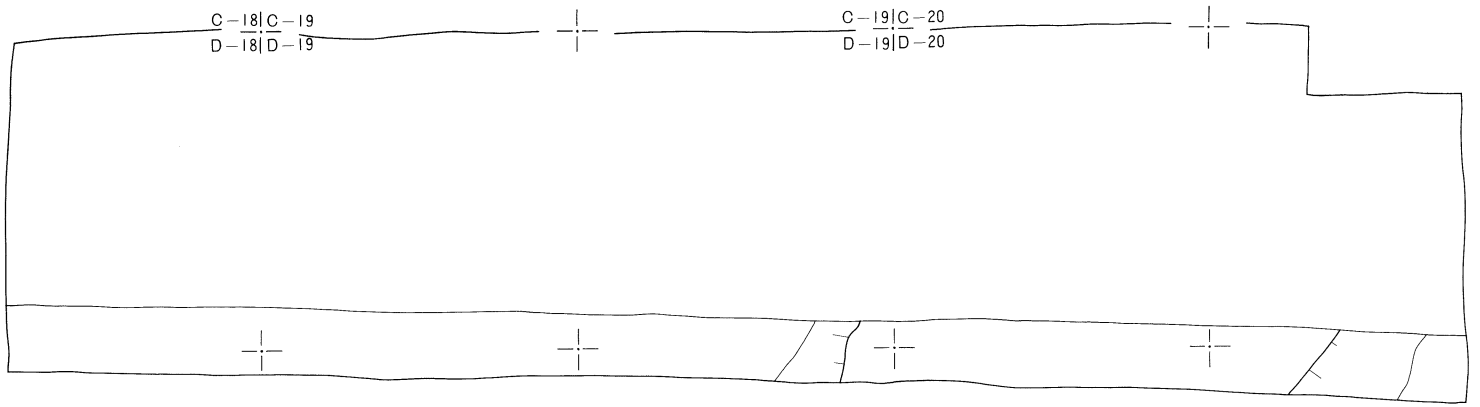


現在長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重　量 (g)	先端角 (角度)	石　質	つ　ま　み　部			
						長(mm)	最大幅(mm)	最小幅(mm)	厚(mm)
102.8	23.9	7.4	19.2	28°	硬質頁岩	14.1	9.6	7.2	5.4

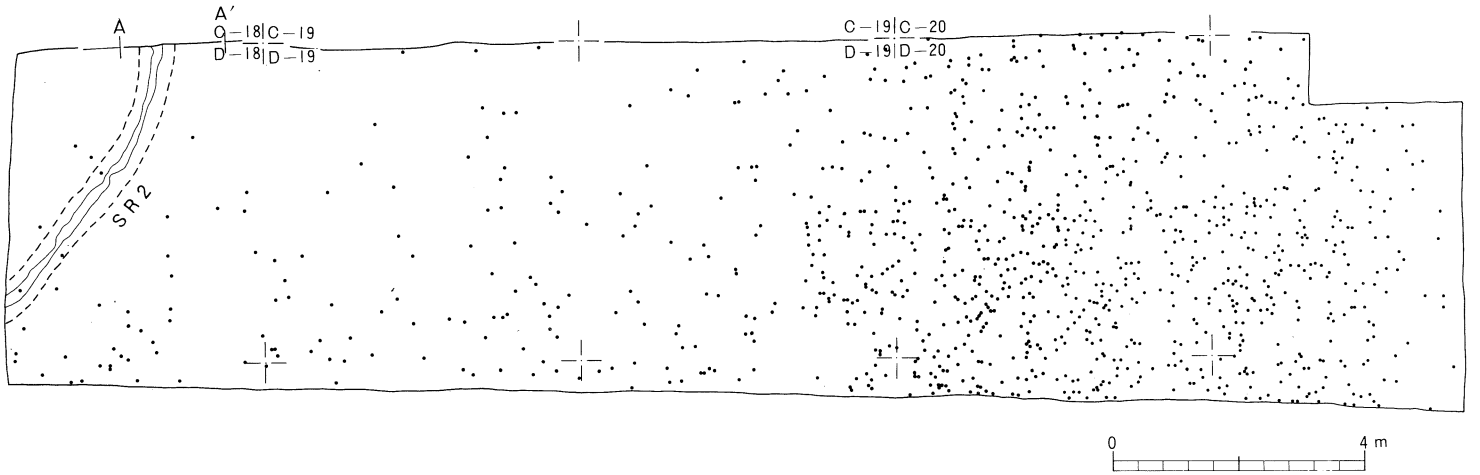
第79図　Ⅳ区32 a 層出土遺物実測図

(3) Ⅴ区の調査

① SR 2 ：SR2 は D－18 グリッドに位置しており、方向性はほぼ直線的であり、真北に対しては N－15°－E の方向を示す。検出された SR2 の長さは5.2m である。上端幅は約50cm、下端幅は10～20cm、深さ18～20cm を測る。埋土は基本層31層であり、その中位には灰白色の火山灰の堆積が認められる。自然堆積により埋まったものと考えられる。

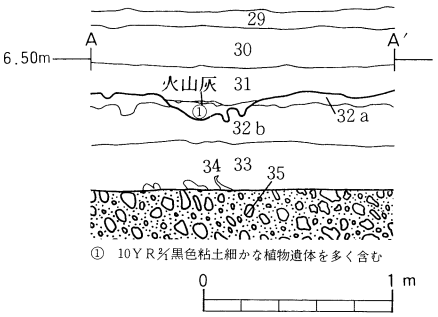


第80図　Ⅴ区35層上面平面図



第81図　Ⅴ区32 a 層平面図（黒点は礫）

② **32a層中で検出された礫**：Ⅴ区の32a層中の多量の礫が含まれており、その分布を第81図に示した。これらの礫はD－20aグリッドにおいて集中する傾向が認められたが、これに伴う遺構・遺物は検出されなかった。また35層（砂礫層）上面の調査ではD－20aグリッドにおいて東西長約10mの高まりが認められることから、32a層の礫の集中はこの影響によるものと考えられる。



第82図　Ⅴ区ＳＲ２セクション図

③ **35層上面の地形について**：Ⅴ区東半部では35層上面の標高は5.50～6.00mである。西半部ではボーリング調査によりその標高は3.90～5.60mであり、北東方向に高く、南西方向に低い傾向が認められ、C・D－14グリッド付近にはN－10°～20°－E方向の各状の地形の存在が推定される。Ⅴ区ではこのような35層上面の地形はその後の各層の堆積に少なからぬ影響を与えているものと考えられる。

⑷　Ⅵ区の調査

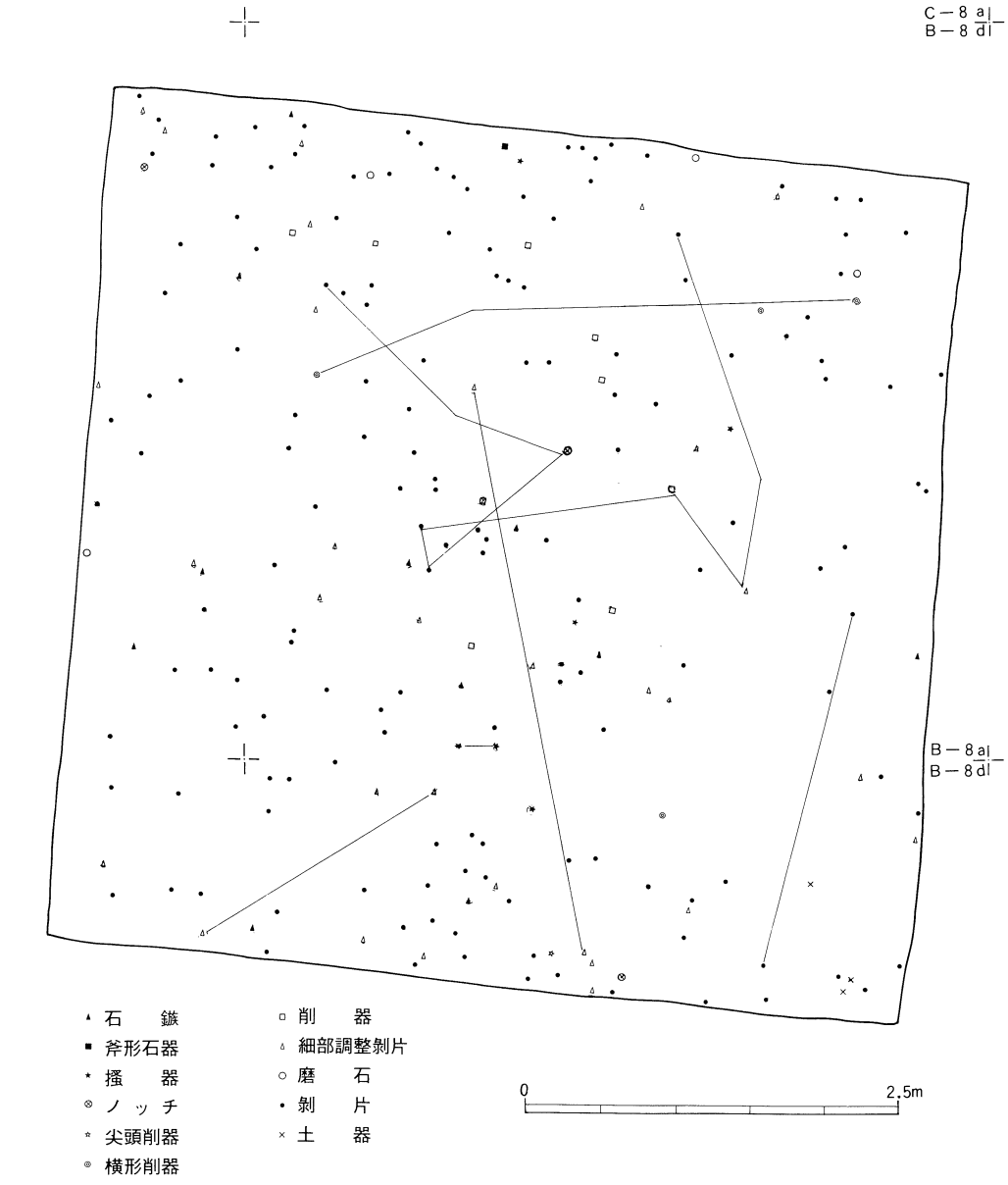
① **土器**：32a層中より5点の縄文土器片が出土している。全て体部破片であり、5点とも胎土に繊維を含む。外面に文様の施文されているものは3点（第84図1～3）であり、他の2点は無文である。第84図1は外面に単節LR縄文（0段多条）が施文されたのち、半截竹管状の施文具により数条の平行沈線文が施文されている。平行沈線の心心距離は1.5mm、沈線の幅は1mmである。器厚は5.5mmを測る。第84図2・3は外面に半截竹管状の施文具により平行沈線文が施文されている。第84図2の平行沈線の心心距離は4 mm、沈線の幅は2 mm、器厚6 mmで、第84図3の平行沈線の心心距離は2.5mm、沈線の幅は1～1.5mm、器厚7 mmである。共に内面は無文である。土器の出土点数が少ないため時期を特定し難いが、胎土に繊維を含むこと、地文に0段多条。LR縄文の施文されているものがあること、半截竹管状の施文具により平行沈線文が施文されていることなどから縄文時代早期末葉～前期初頭に位置付けられよう。

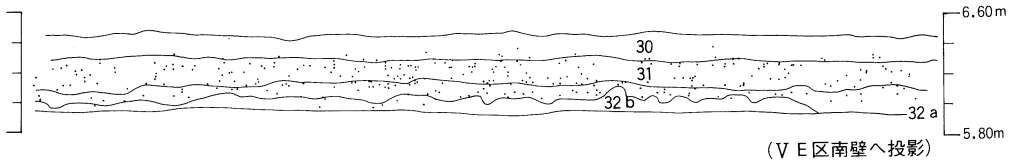
② **石器**：32a層中より840点の石器が出土している。その内容については第10章第1節において分析を加えている。

尚、第83図におけるⅥ区南壁へ投影した遺物の垂直分布図では、31層から32a層にかけて遺物が分布しているが、出土層位は全て32a層であるため、層の傾斜によって見かけ上両層にまたがる分布となっているものである。

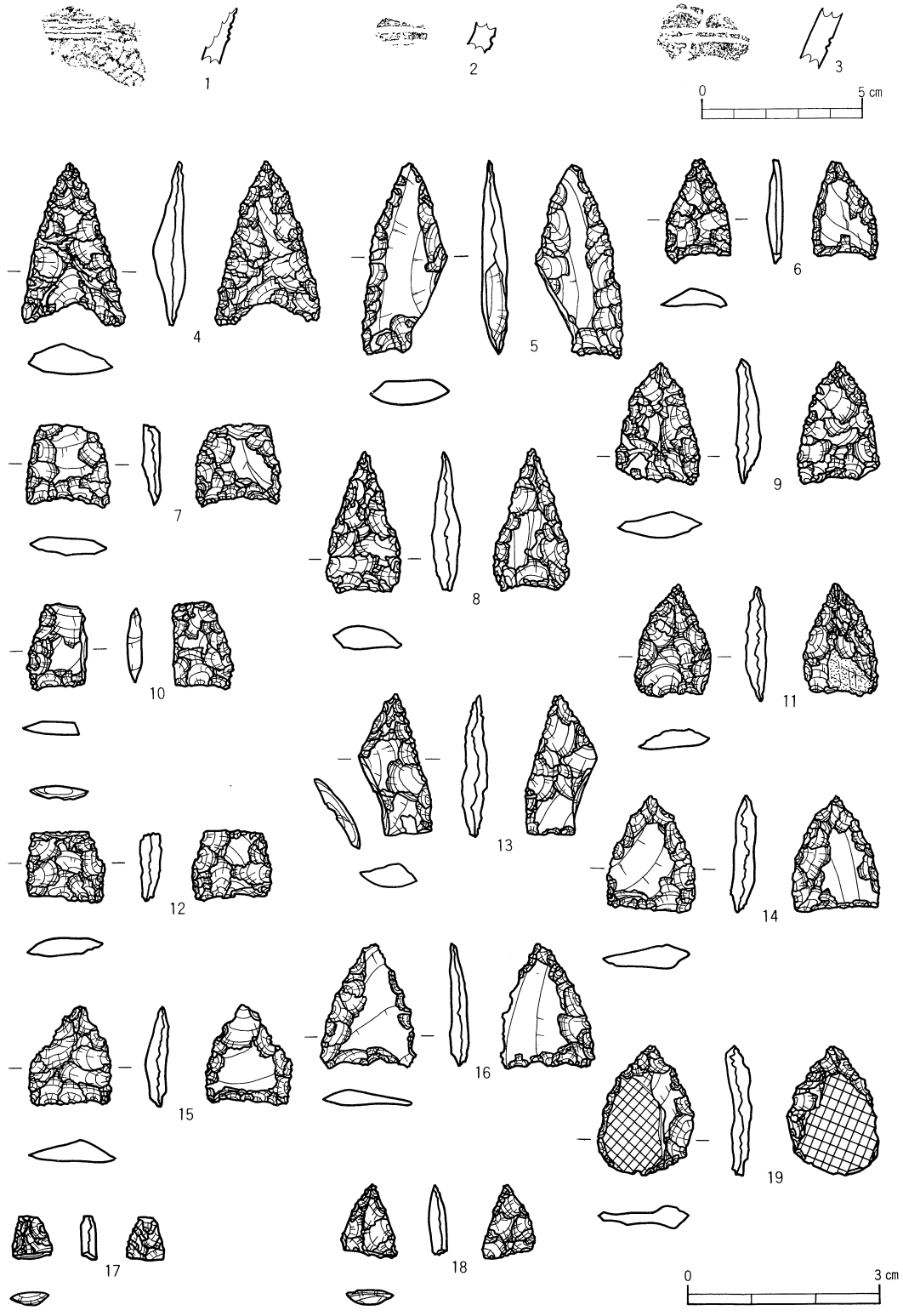
⑸　Ⅶ区の調査

Ⅶ区においては、32a層は調査区全域で確認されている。32a層上面の標高は6.12mから6.38mであり、上面には若干の凹凸が認められる。層厚は最も薄い箇所で12cm、最も厚い箇所で36

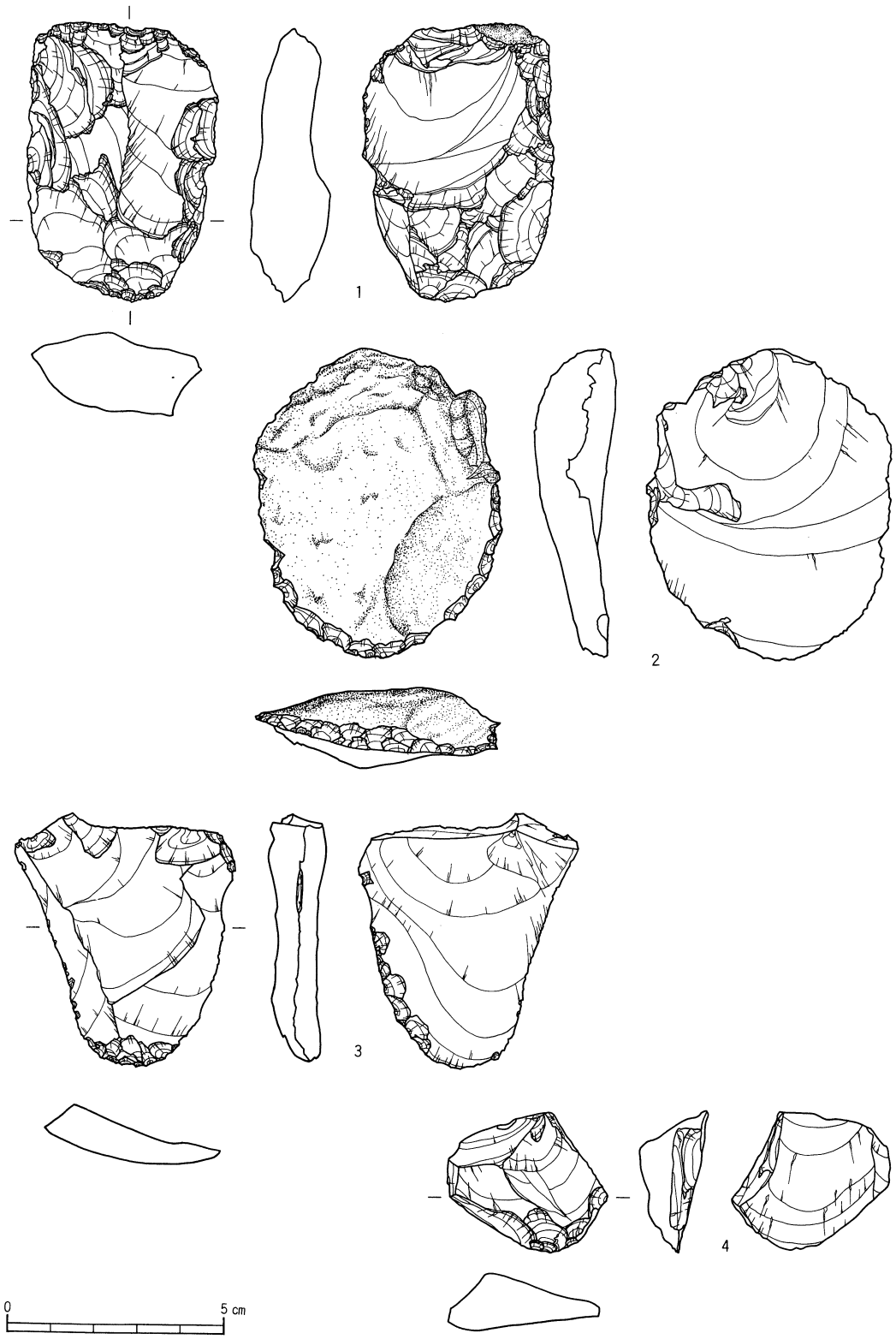




第83図　Ⅴ E 区32 a 層出土遺物分布図

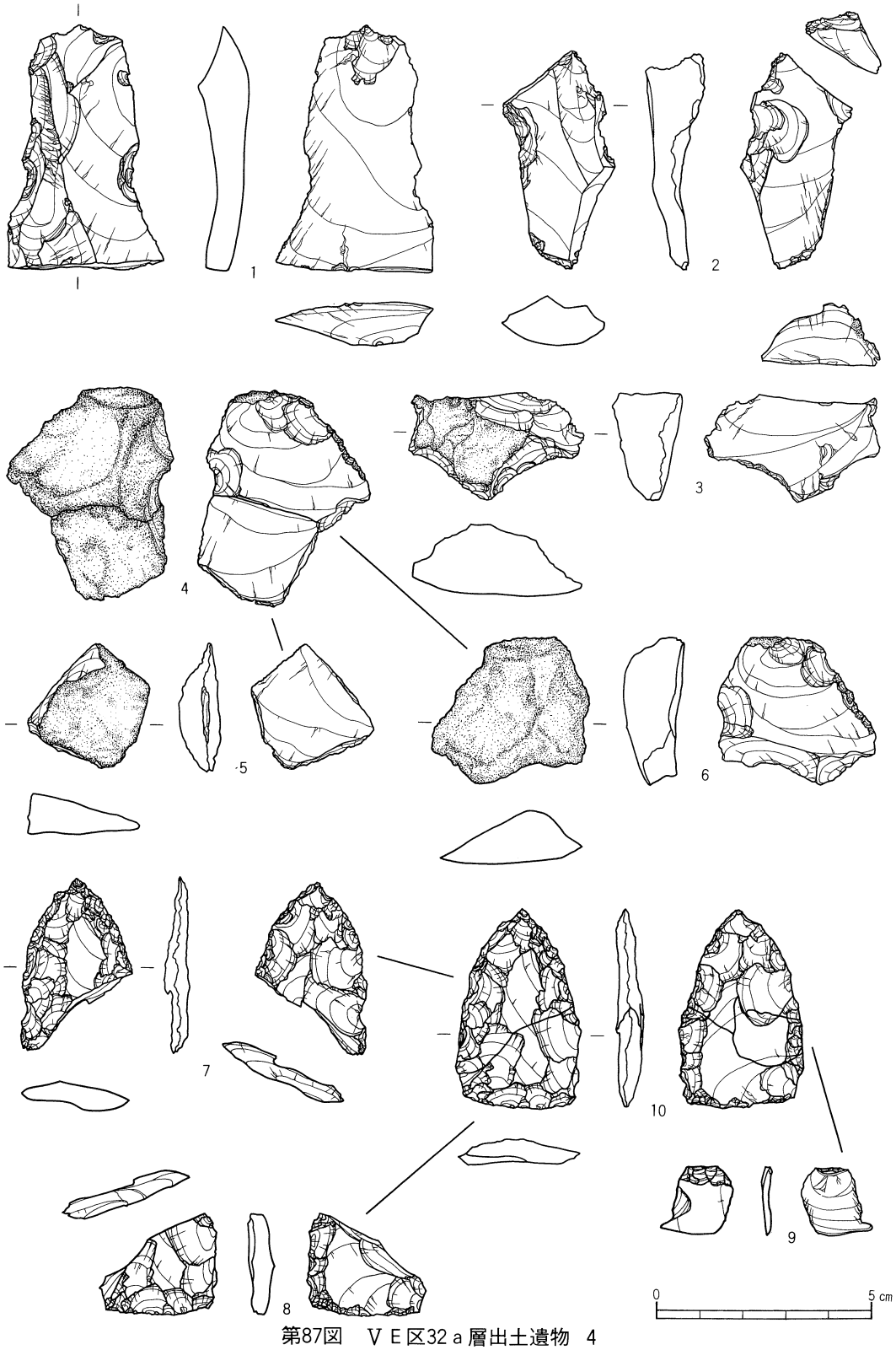


第84図　ＶＥ区32ａ層出土遺物　1

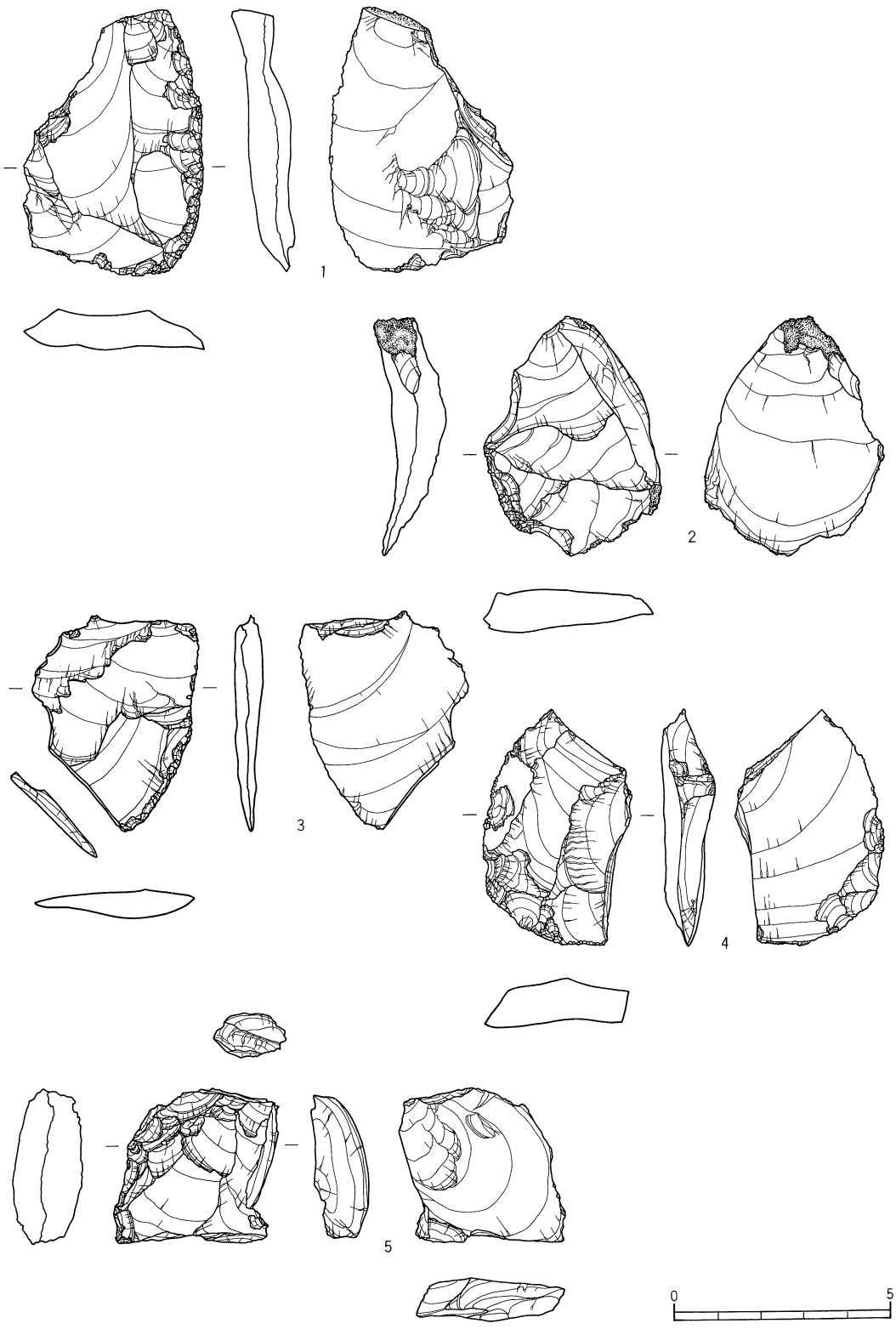


第85図　ＶＥ区32ａ層出土遺物　2

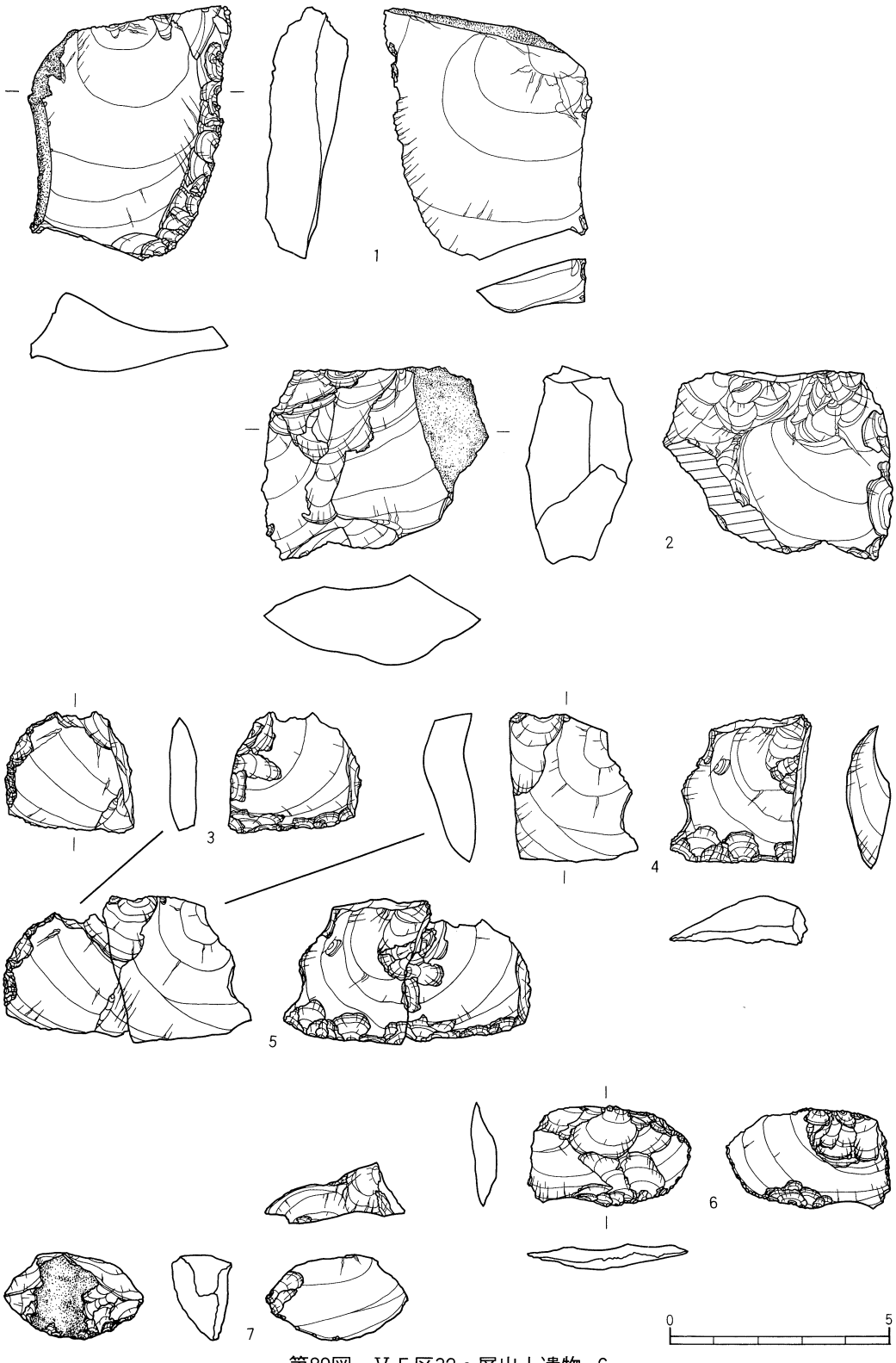
第86図　ＶＥ区32ａ層出土遺物　3



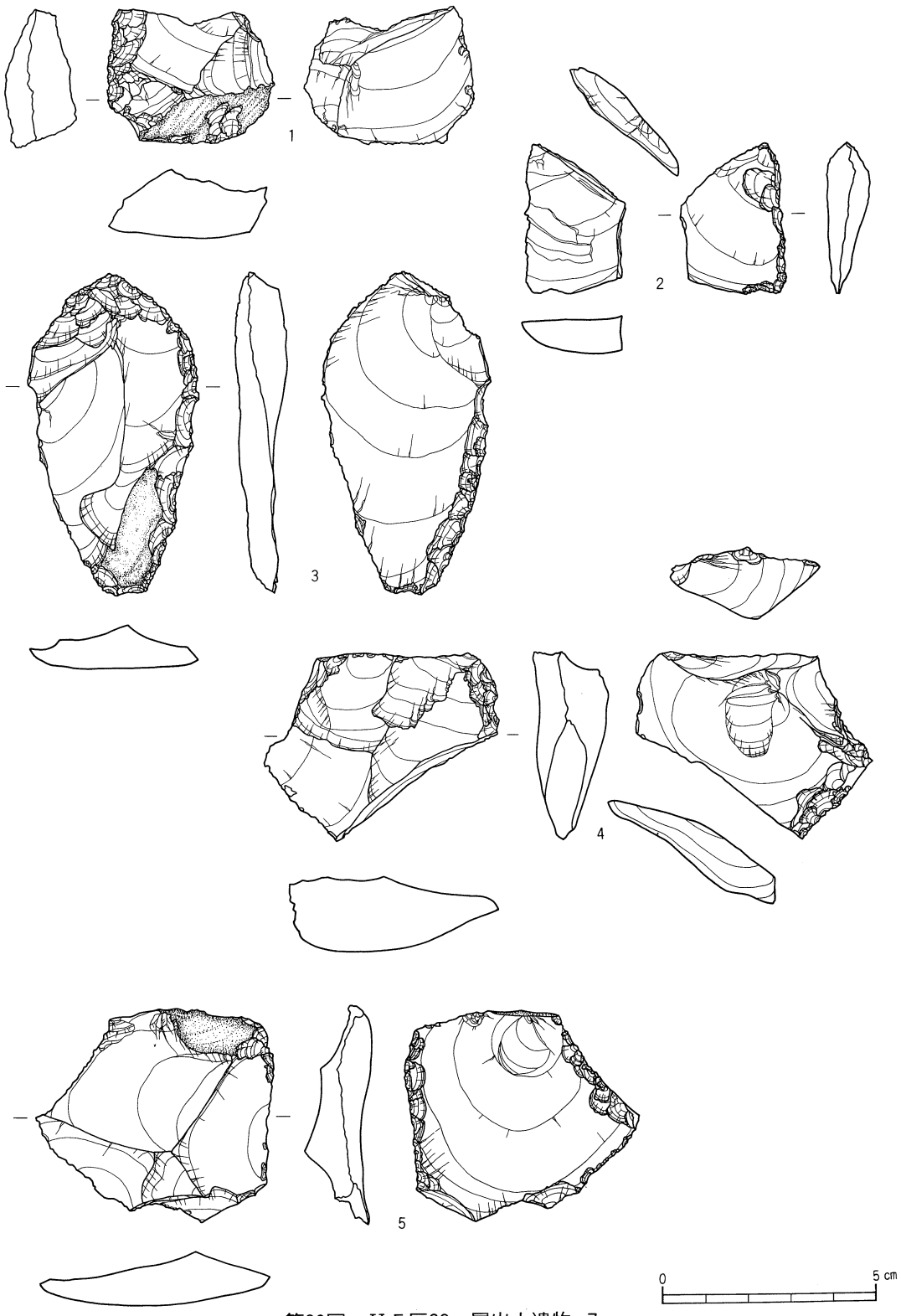
第87図　ＶＥ区32ａ層出土遺物　4



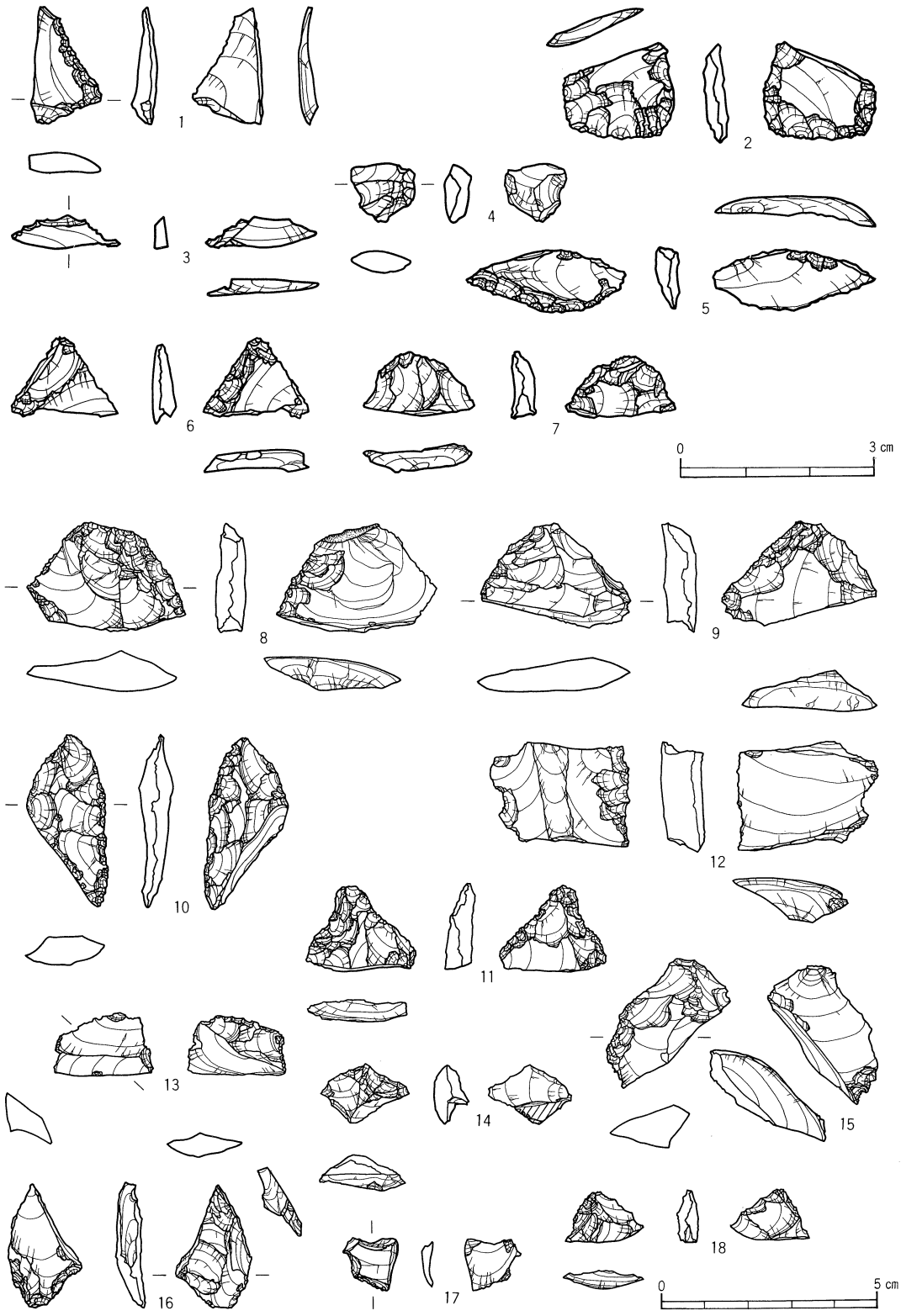
第88図　Ⅴ E区32 a 層出土遺物　5



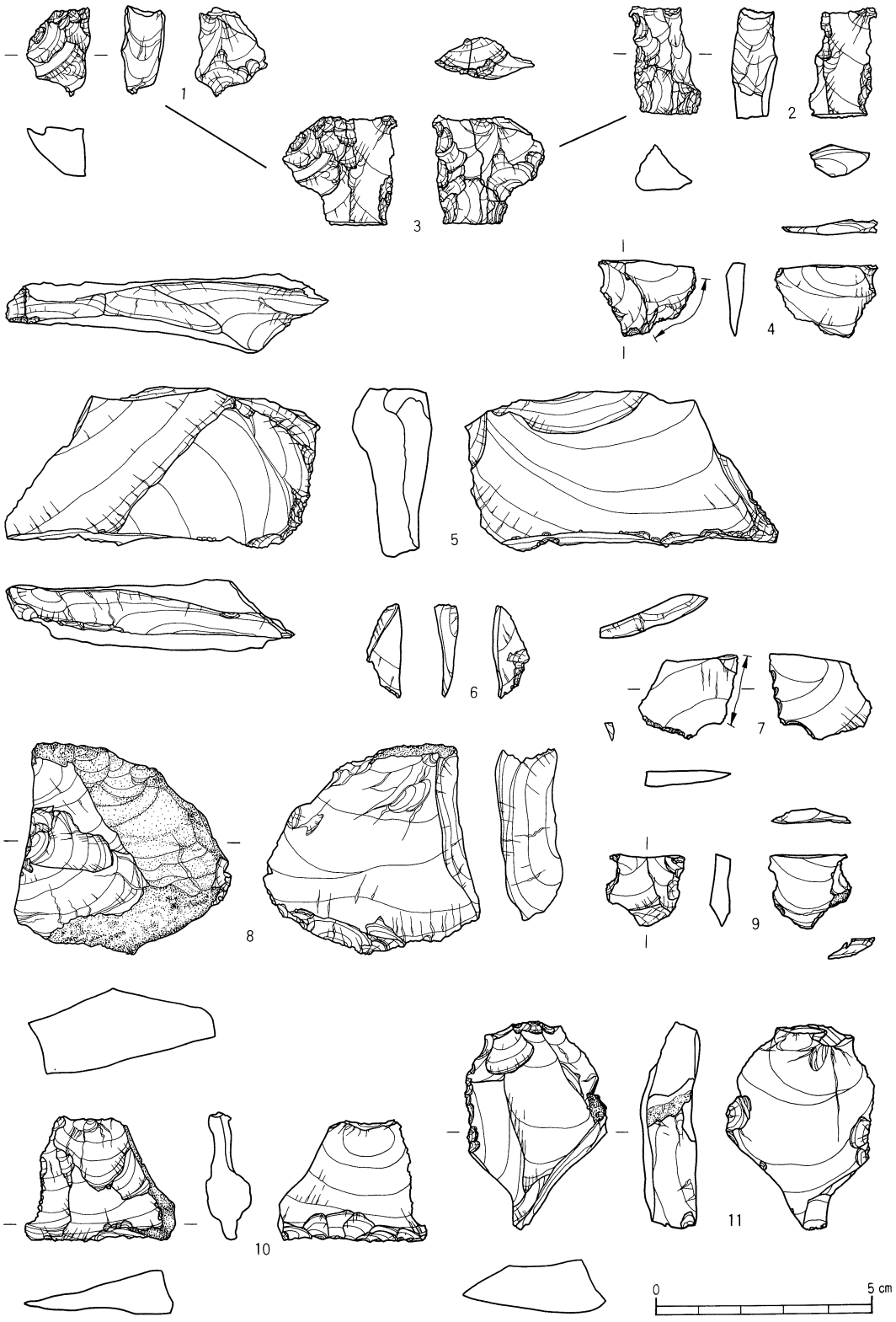
第89図　ＶＥ区32ａ層出土遺物　6



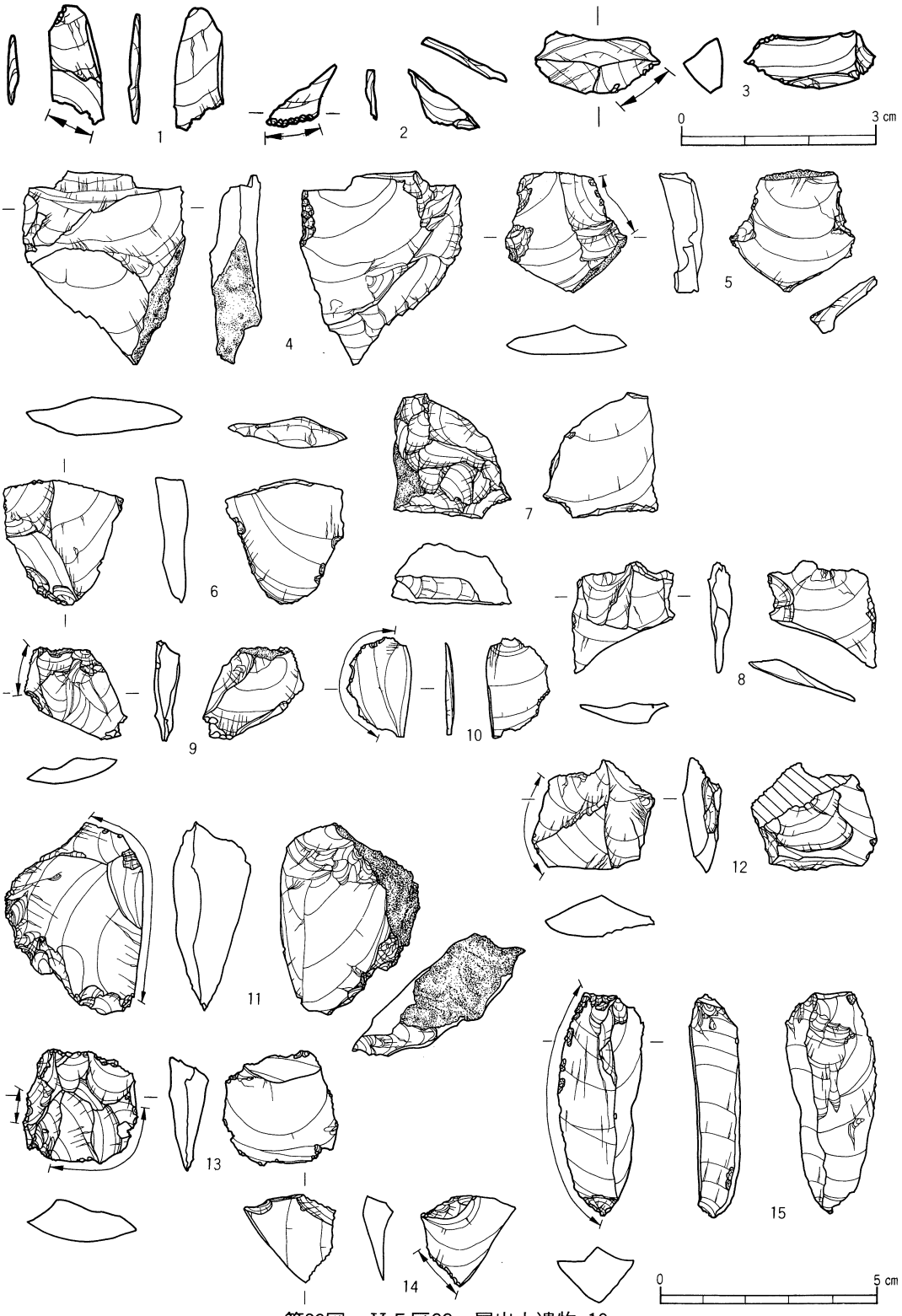
第90図　ＶＥ区32ａ層出土遺物　7



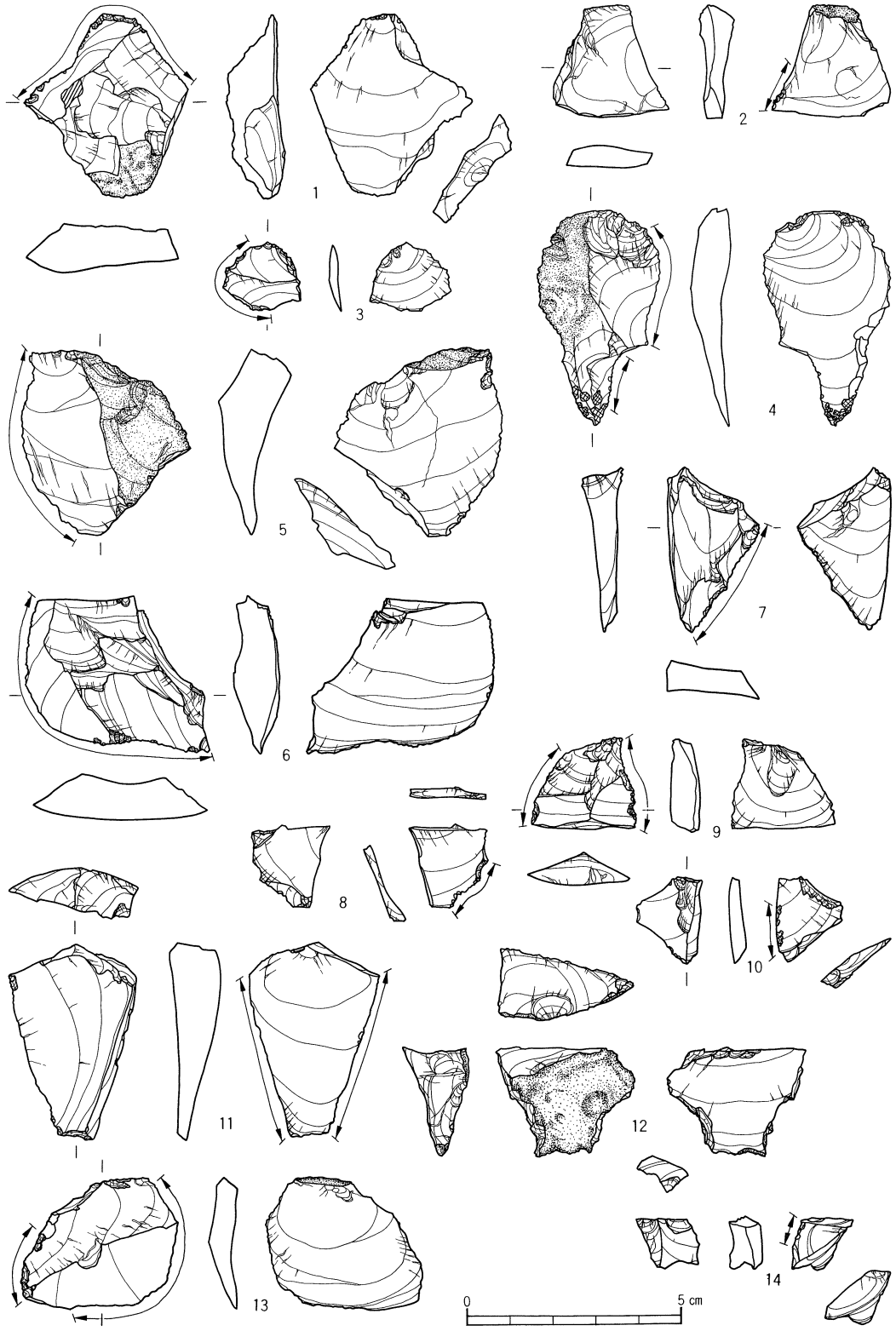
第91図　ＶＥ区32ａ層出土遺物　8



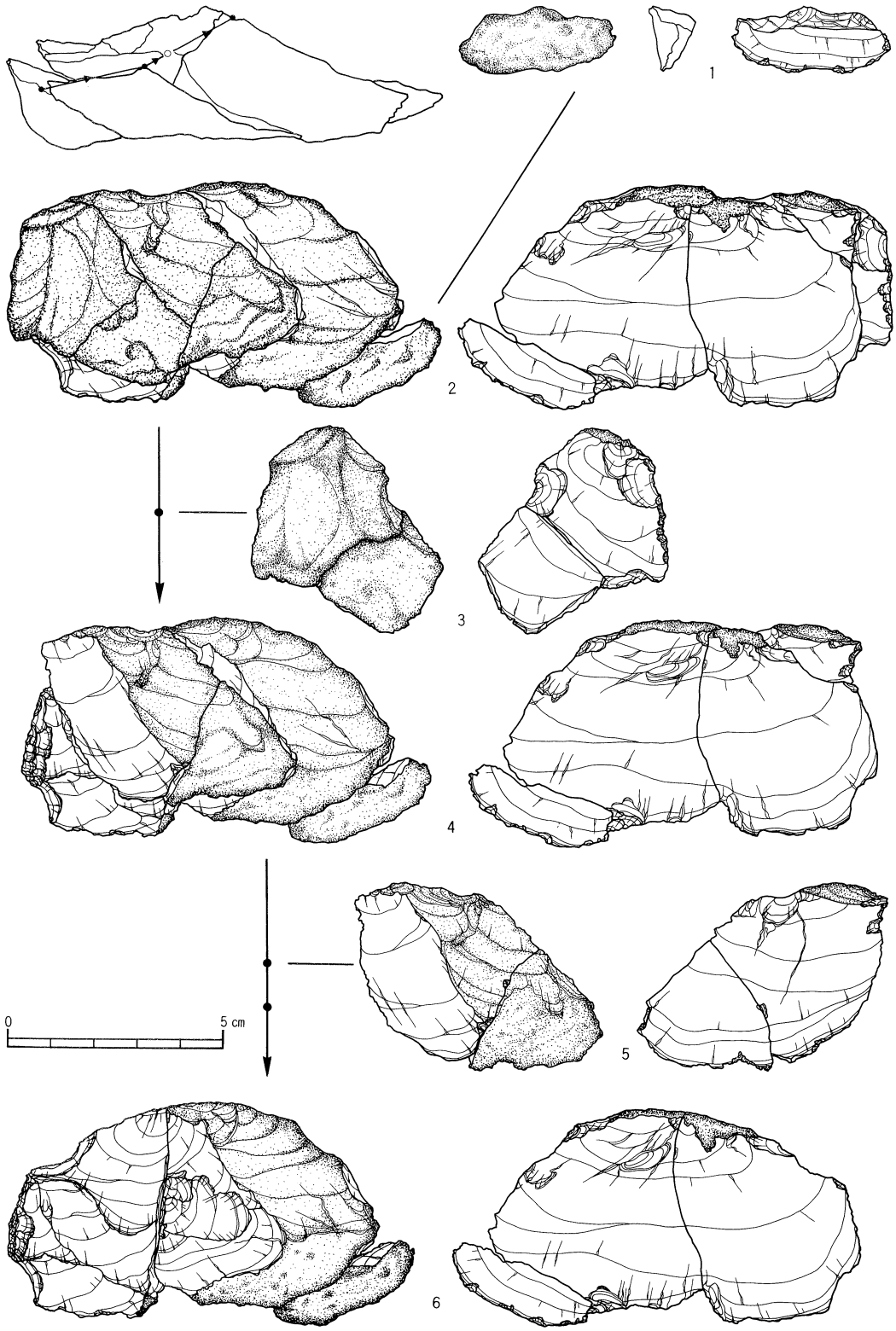
第92図　ＶＥ区32ａ層出土遺物　9



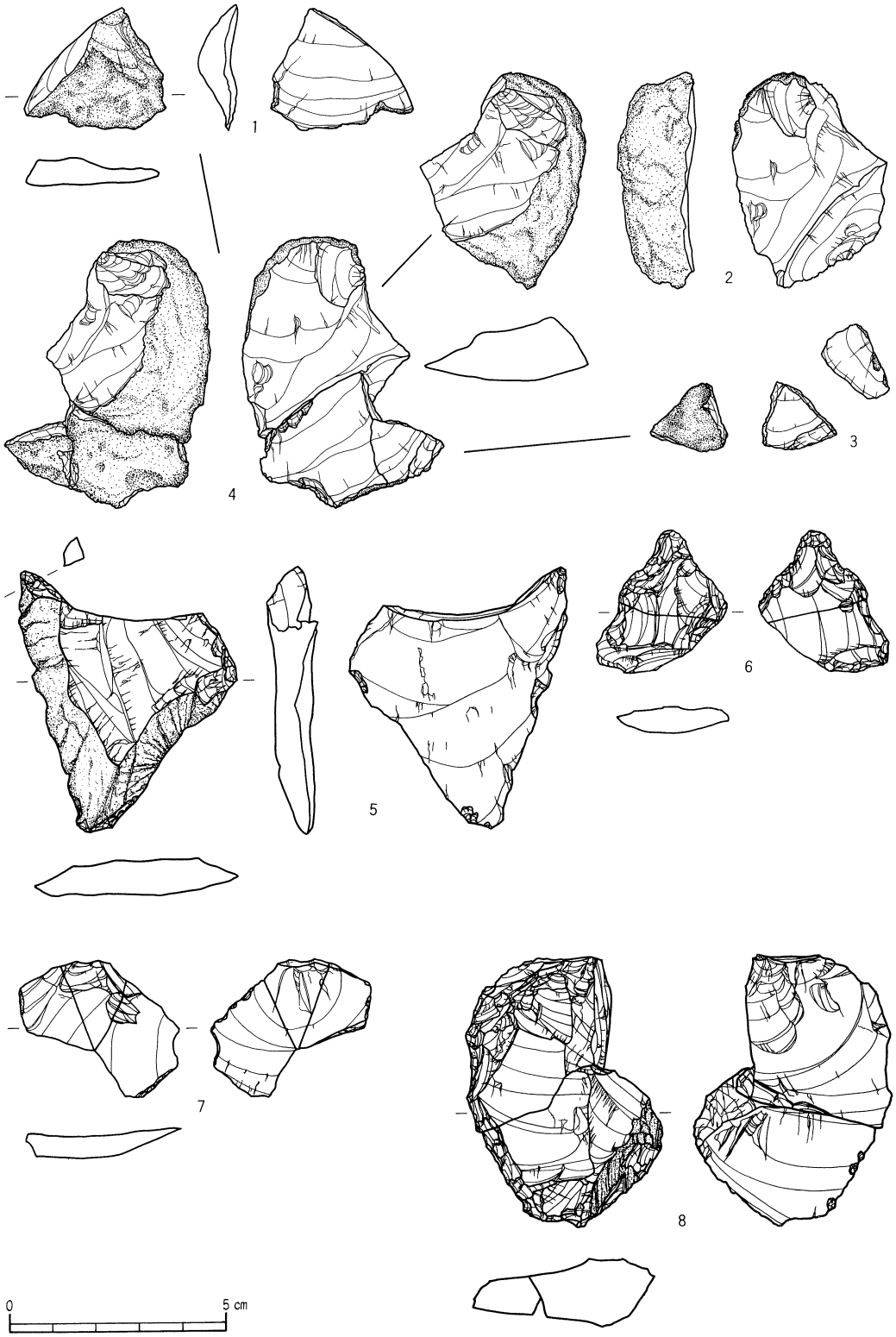
第93図　Ⅴ E区32 a 層出土遺物 10



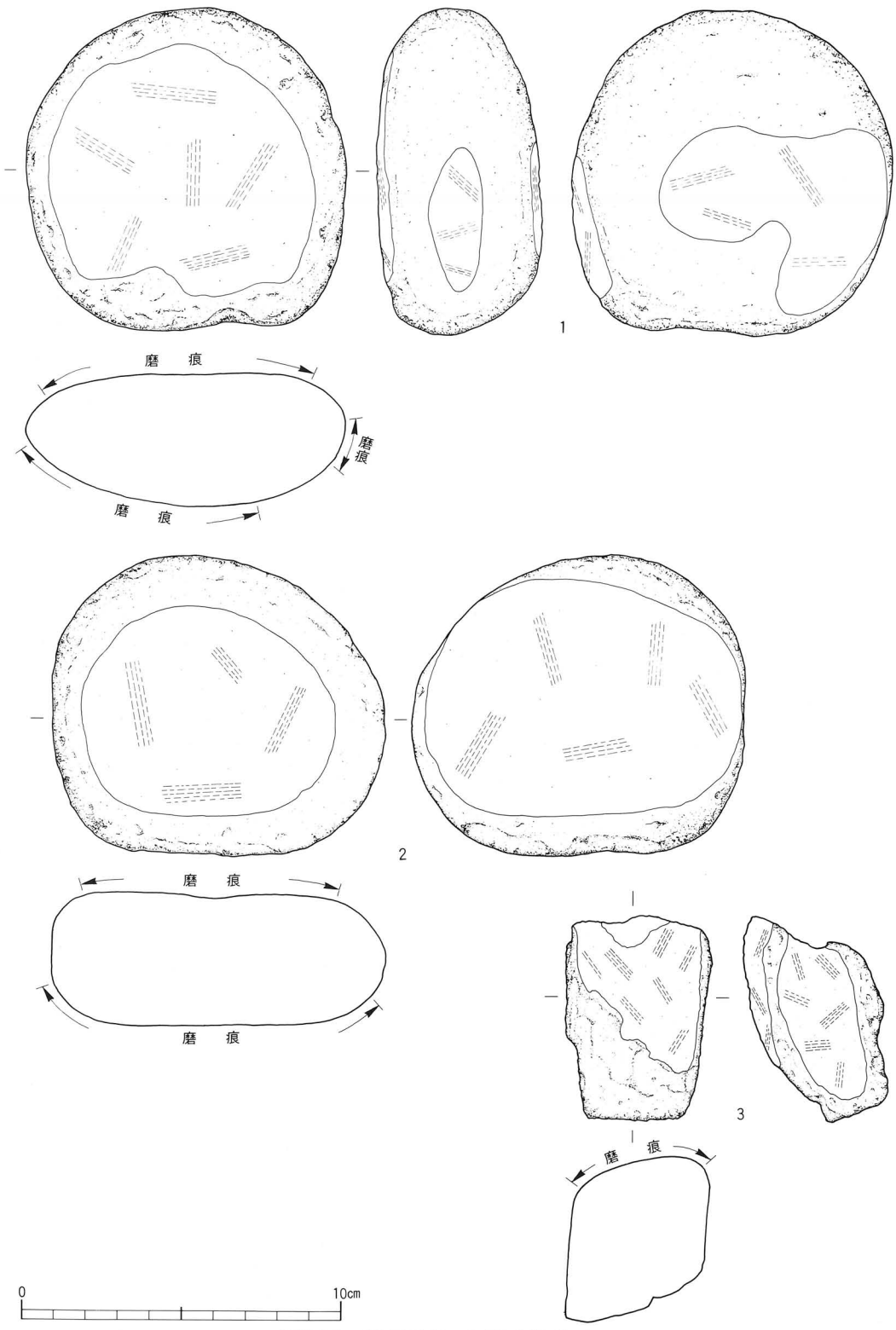
第94図　ＶＥ区32ａ層出土遺物 11



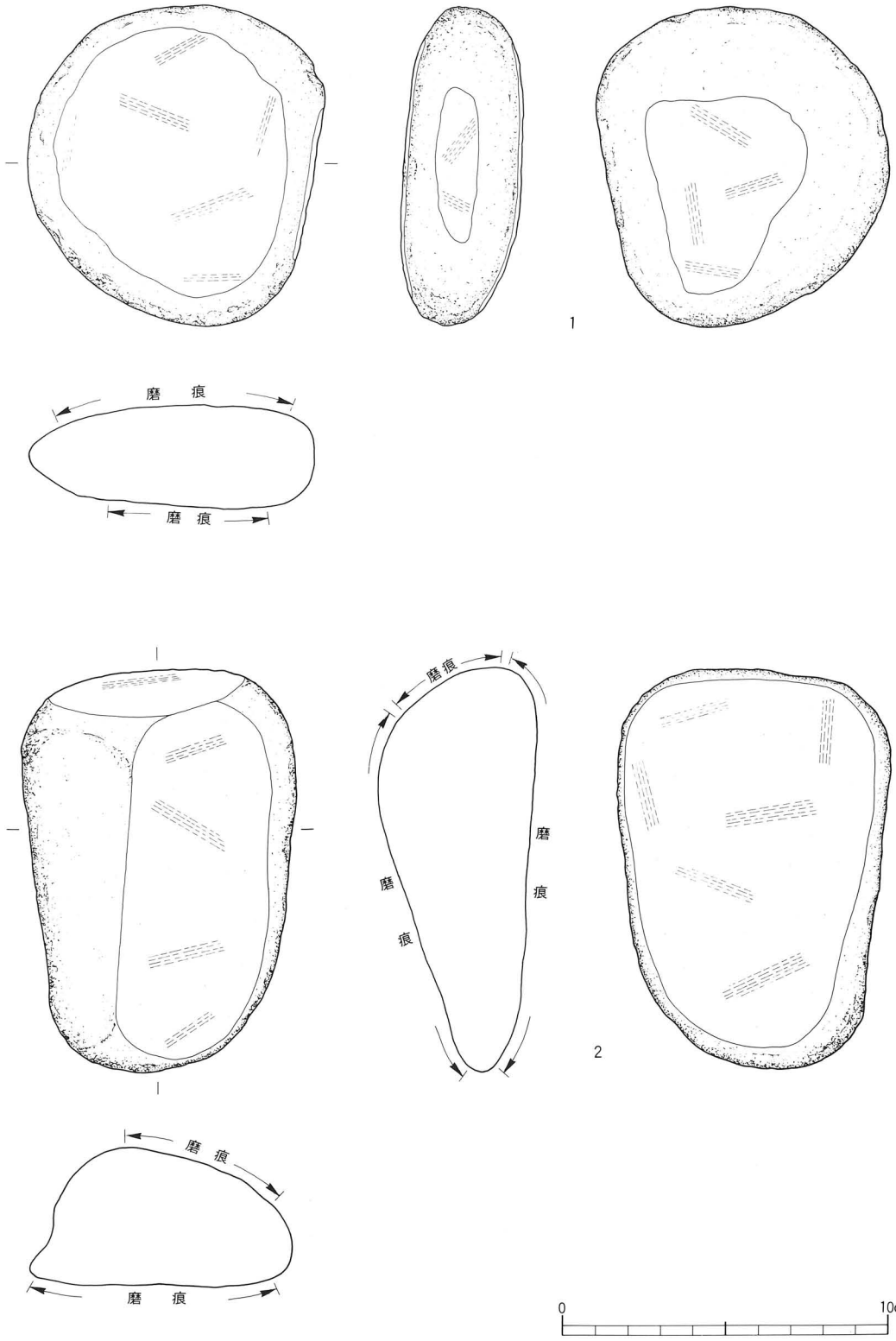
第95図　ＶＥ区32ａ層出土遺物 12（接合資料）



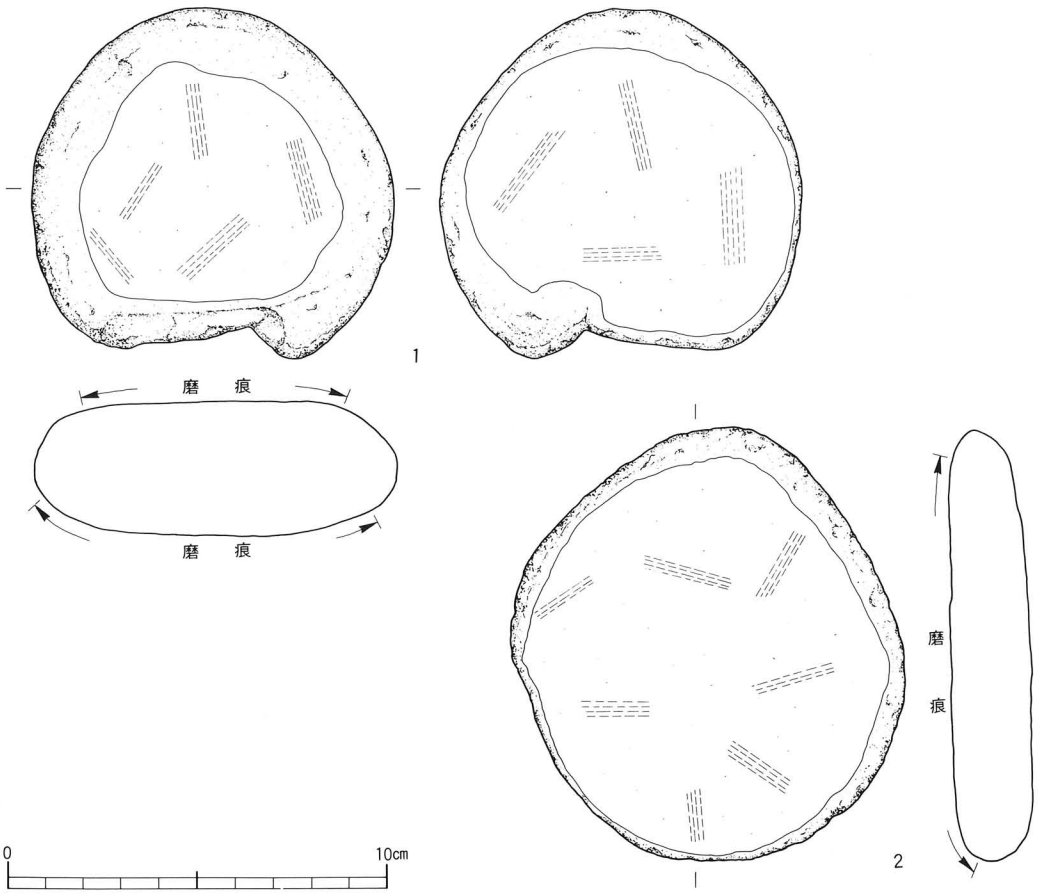
第96図　Ⅴ E区32 a 層出土遺物 13



第97図　ＶＥ区32ａ層出土遺物 14



第98図　ＶＥ区32ａ層出土遺物 15

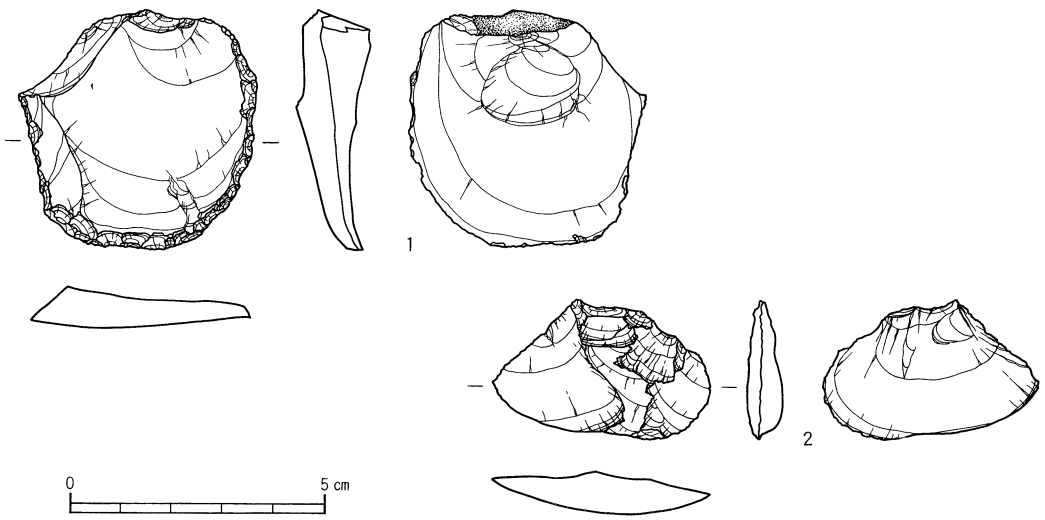


第99図　ＶＥ区32ａ層出土遺物実測図 16

cm であるが、平均して20cm 前後の厚さである。

Ⅶ区の32a 層からは 2 点の石器が出土している。第101図 1 は長さ52.2mm、幅45.8mm、厚さ9.9mm の薄形掻器である。調査区南側の中央部やや東よりの32a 層下部より出土している。剝片を素材としており、打面及びバルブの高まりは除去されずに残存している。打面は原面打面である。細部調整はすべて裏面より施されており、先端部から両縁部に及んでいる。刃部の角度は65°である。第101図 2 は長さ26.0mm、幅42.5mm、厚さ7.3mm の横形剝片である。調査区北側の西壁よりの32a 層下面より出土している。打面部は剝片剝離の打撃によってハジケている。

第100図　Ⅶ区32a層遺物出土分布図



第101図　Ⅶ区32ａ層出土遺物

	石質	標高 (m)	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	打面の状態	打面幅 (mm)	打面厚 (mm)	打角 (角度)	刃角 (角度)
1	細粒珪質凝灰岩	6.06	52.2	45.8	9.9	20.6	原面	28.0	10.4	120°	65°
2	細粒珪質凝灰岩	6.01	26.0	42.5	7.3	7.5	粉砕状	——	——	——	——

第　表　Ⅶ区32ａ層出土遺物観察表

2．16層の調査

(1) 調査概要

①16層の分布・土性：16層はIV区からVI区にかけて分布する。層厚はV区では10～13cm、VI区では3～5 cmである。16層は平面分布において16a層と16b層に細分される。16a層は10YR4/1褐灰色粘土、16b層は2.5Y3/1黒褐色粘土で黒色粘土と5Y7/2灰白色粘土と互層になっている。16a層は泥炭質粘土層Aで、16b層は泥炭質粘土層Bである。

②16層上面の標高・地形：16層上面の標高はV区D-20グリッドで8.06～8.16m、VI区で8.08～8.14mと平坦であり、起伏は少ない。

③検出遺構と出土遺物：IV区では16層上面において杭が1本検出されている。遺物は出土していない。V区・VI区では遺構・遺物は検出されておらず、V区において16層上面における16a層と16b層の分布状況の調査が行なわれた。

(2) IV区の調査

①杭5（第102～104図、写真108）：杭5はD-28aグリッド14層上面まで伸びていたことが確認されている。丸太材を素材としており、先端には加工痕が認められる。

(3) V区の調査（第105図、写真109）

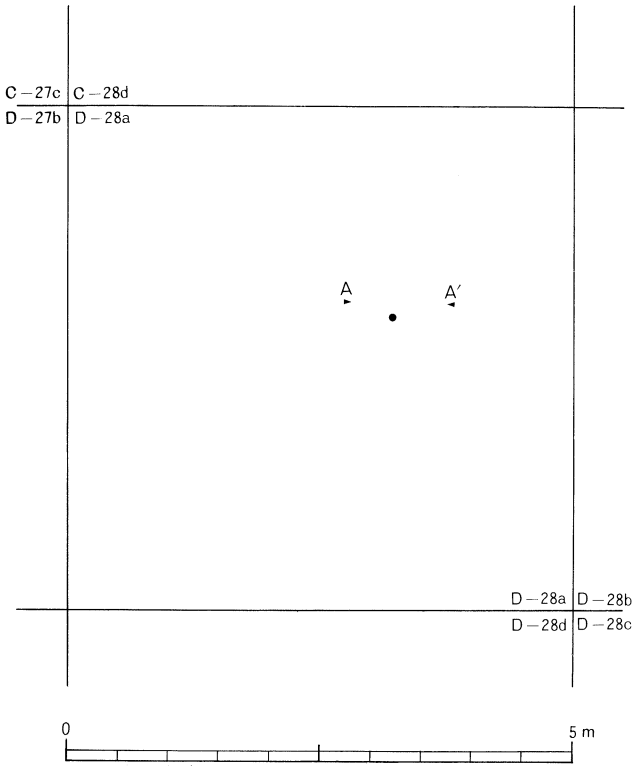
D-19・20グリッドにおいて16層上面における16a層と16b層の分布状況を調査した。16a層の平面プランは不定形であり、それぞれの面積は0.01～0.56m²、平均で0.09m²である。16a層の分布面積は調査面積61.4m²に対して12.9m²で、16a層と16b層の平面プランの面積比は21：79である。また壁面観察からは、16b層が自然堆積層であるのに対し、16a層は16b層が何らかの要因によって分解したものと考えられ、その分層は明確なものではない。さらに縞状に見える16b層は、16a層と分層される付近においてのみそのまま上方へ引き上げられているような状況のあることが確認されている。16a層の断面形は上端が広く下端が狭いもの、上端が狭く下端が広がるものがある。検出状況からは16a層は人為的な攪乱等によって形成されたものとは考え難い。尚16層上面において足跡は検出されていない。

3．13b層の調査

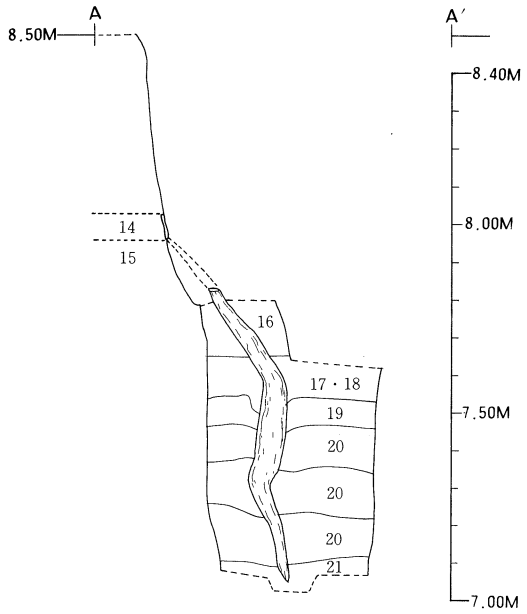
(1) 調査概要

①13b層の土性・分布：13b層は黄褐色を呈するシルト質粘土で、13c層をブロック状に含むことを特徴とする層である（写真120参照）。IV区西半部から中央部にかけて（B－24グリッドからB・C－29グリッドまで）分布しており、その分布域は水田跡の範囲内に限られる。以上のことから13b層は13c層及び14層の一部を起源とし、それらを耕作することによって形成された水田土壌であるといえる。層厚はB－28グリッド付近では4～10cmである。

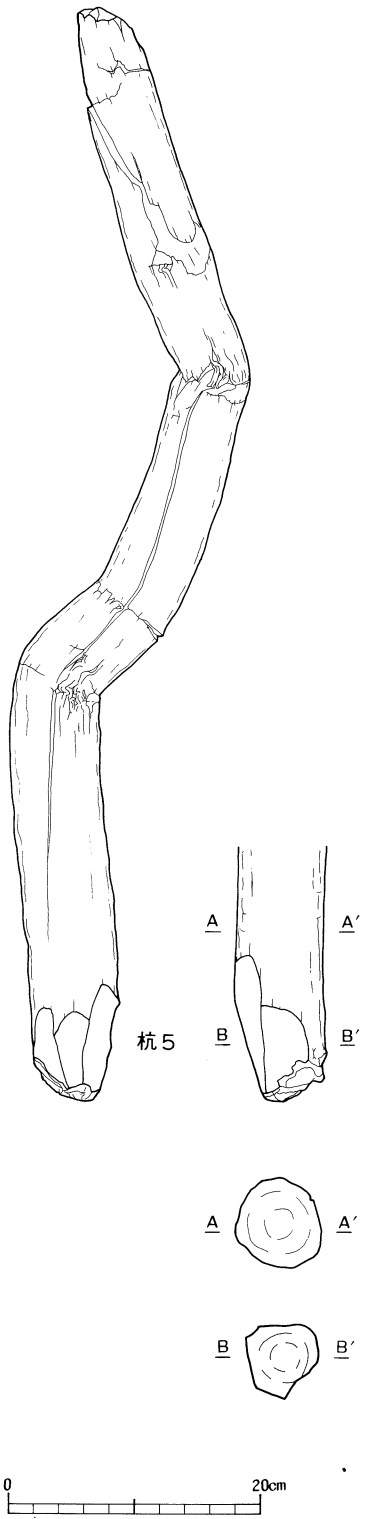
②13b層上面の標高と地形：13b層上面の標高は最も高い所で8.71m（B－27グリッド）、最も



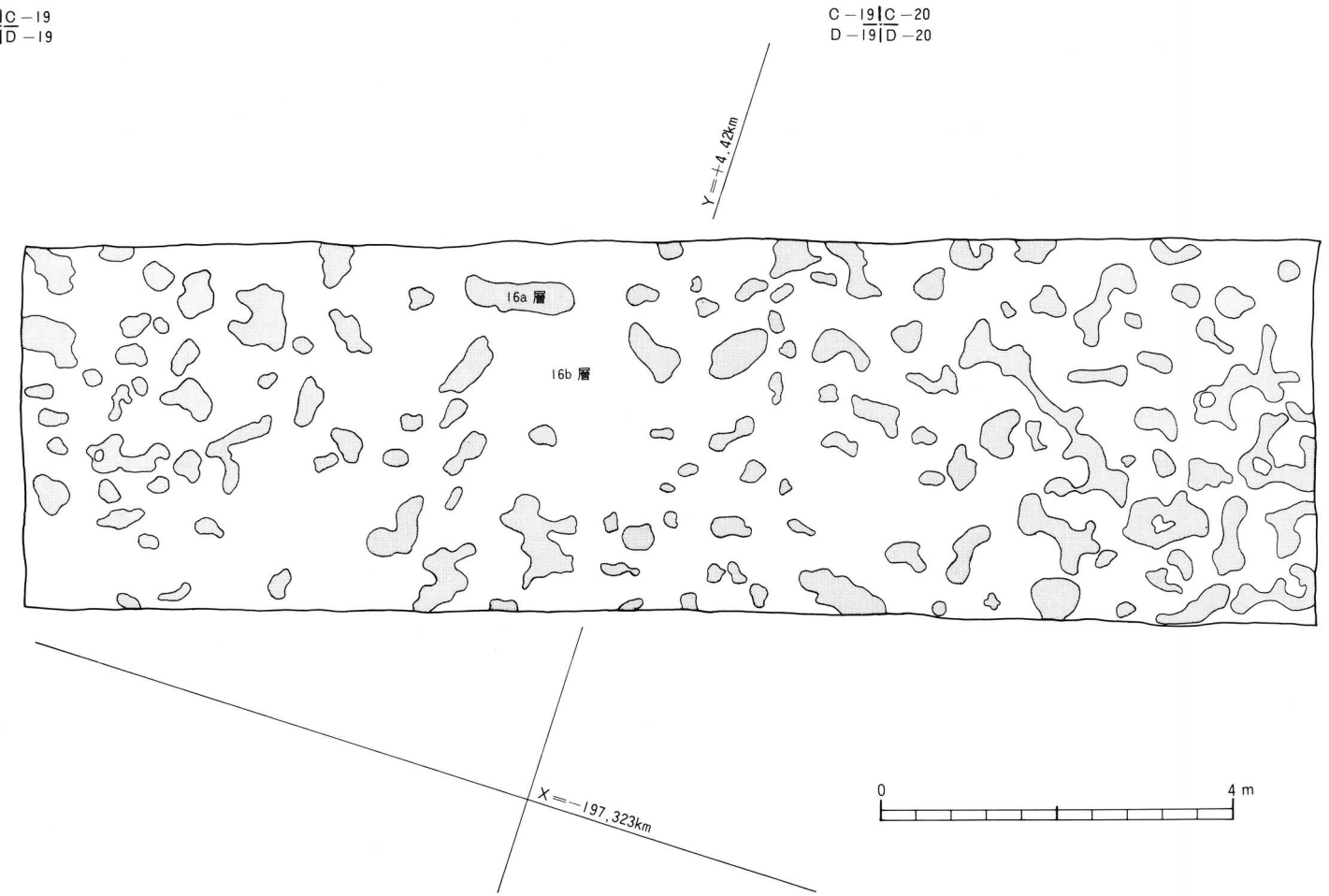
第102図　Ⅳ区16層上面検出杭位置図



第103図　Ⅳ区16層上面検出杭セクション図



第104図　Ⅳ区16層上面検出杭実測図



第105図　Ⅴ区16a層・16b層平面分布図

低い所で8.50m（D－28、B・C－25グリッド）で、地形は13b層の分布する範囲内のほぼ中央部及び北東隅が高く、全体的には北北東から南南西への傾斜となっている。水田面の標高は8.50～8.71mで、勾配はA－A間で10cm/13.9m、これと直交する方向の勾配は10cm/125mである。

③検出遺構と出土遺物：13b層においては水田域の北－東－南の三方が明らかな水田跡が検出されており、13b層及び13c層中から各1点の石器が、また13c層上面からは木製品1点が出土している。

⑵ **13b層水田跡**（第106図、写真110～123）

①検出状況：13b層の水田跡は直上の層で13a層を数mmあるいは1～2 cmずつ面的に掘り下げることによって畦畔のプランを確認し（写真110、111、116参照）その後、水田面及び非耕作部分（13c層）の上に残る13a層を除去することによって検出した。水田跡はB－24グリッド以東、B・C－29グリッド以西の範囲で検出されており、水田域は南北辺を短辺とする短辺14.1m、長辺37.8m以上の長方形を呈するものと考えられ、今回の調査区内で検出された水田跡はその東端部分にあたる。検出された水田域の面積は599.3m²である。

②水田の構成：13b層水田跡は、水田域と非耕作部分とを区画する畦畔、水田域内を南北に通る畦畔、及びその間を互に東西方向に延びて水田1枚1枚を区画する畦畔と、それらによって区画された水田とによって構成されている。水田は12枚検出されている。各水田には①～⑫の番号を付した。水田域は南北辺を短辺とする長方形を呈すると考えられ、今回の調査区内では北・東・南の三方が明らかになっている。水田域は更に西側へ広がるものと考えられる。なお、この水田跡では水路は検出されておらず、水田面にも足跡と思われる痕跡は確認されなかった。

ⅰ）水田域と非耕作部分とを区画する畦畔（以下畦畔A^Gとよぶ）：畦畔A－1は水田域の北縁を区画する畦畔で方向はN－72°－Wである。検出長は14.5mであるが更に調査区外の西側へ延びるものと考えられる。上端幅は13～40cm、下端幅は20～50cmであり、この畦畔の南側の水田面との比高差は2.0～7.5cmである。畦畔A－2は水田域の東縁を区画する畦畔で方向はN－19°－Eである。検出長は21.4mであるが調査区外の南側に若干延びるものと考えられる（推定長23m）。上端幅は5～31cm、下端幅は35～82cmであり、この畦畔の西側の水田面との比高差は0.7～6.5cmである。畦畔A－3は水田域の南縁を区画する畦畔で方向はN－74°－Wである。検出長は33.0mであるが更に調査区外の西側及び東側に延びるものと考えられる。上端幅は4～43cm、下端幅は31～63cmであり、この畦畔の北側の水田面との比高差は1.1～7.5cmである。尚、畦畔Aの直下には擬似畦畔Bが認められる。（写真121）

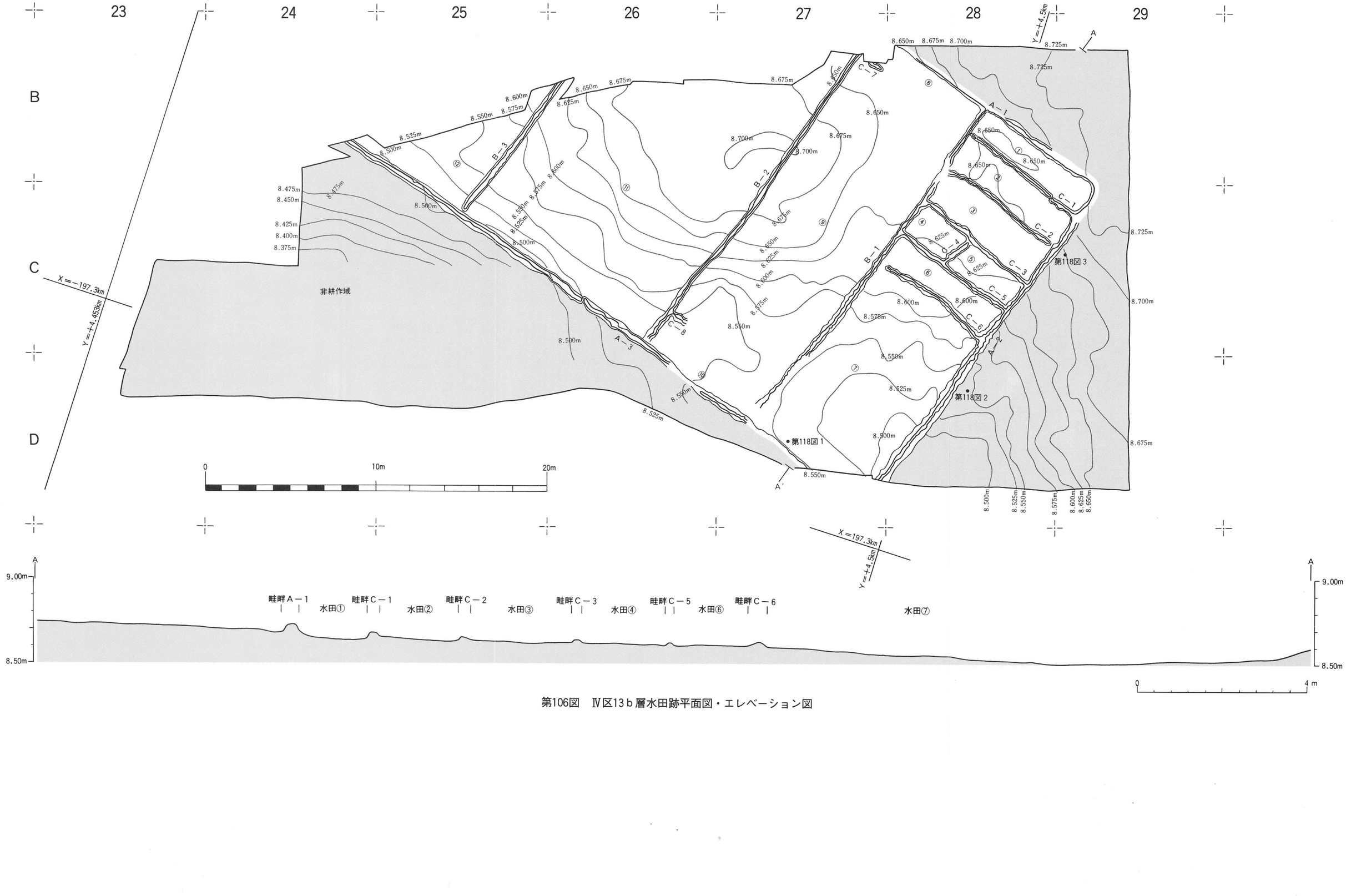
ⅱ）水田域面を南北に通る畦畔（以下畦畔B^Gとよぶ）：畦畔Bは水田域の東縁を区画する畦畔A－2に平行し、水田域の北縁及び南縁を区画する畦畔A－1、A－3に直角にとりつく畦畔

である。調査区内では3条検出されているが、全長を確認できたのはそのうちの1条だけである。畦畔B－1は畦畔A－2から西へ7.8～8.2mの距離をもち、方向はN－18°－Eである。長さは22.0mで、上端幅は6～22cm、下端幅は21～39cmであり、この畦畔と水田面との比高差は東側で0.2～4.2cm、西側で0.3～4.2cmである。畦畔B－2は畦畔A－2から西へ15.7～16.2m、畦畔B－1から西へ8mの距離をもち、方向はN－19°－Eである。検出長は21.0mであるが、更に調査区外の北側へ延びるものと考えられ、畦畔B－1と同様の長さをもつものと思われる。上端幅は4～26cm、下端幅は20～39cmであり、この畦畔と水田面との比高差は東側で0.2～5.4cm、西側で0.4～4.9cmである。畦畔B－3は畦畔A－2から西へ29.1m、畦畔B－2から西へ13.0～13.5mの距離を持ち、方向はN－19°－Eである。検出長は9.75mであるが、更に調査区外の北側へ延びるものと考えられる。上端幅は9～30cm、下端幅は28～48cmであり、この畦畔と水田面との比高差は東側で1.0～3.7cm、西側で1.6～3.3cmである。

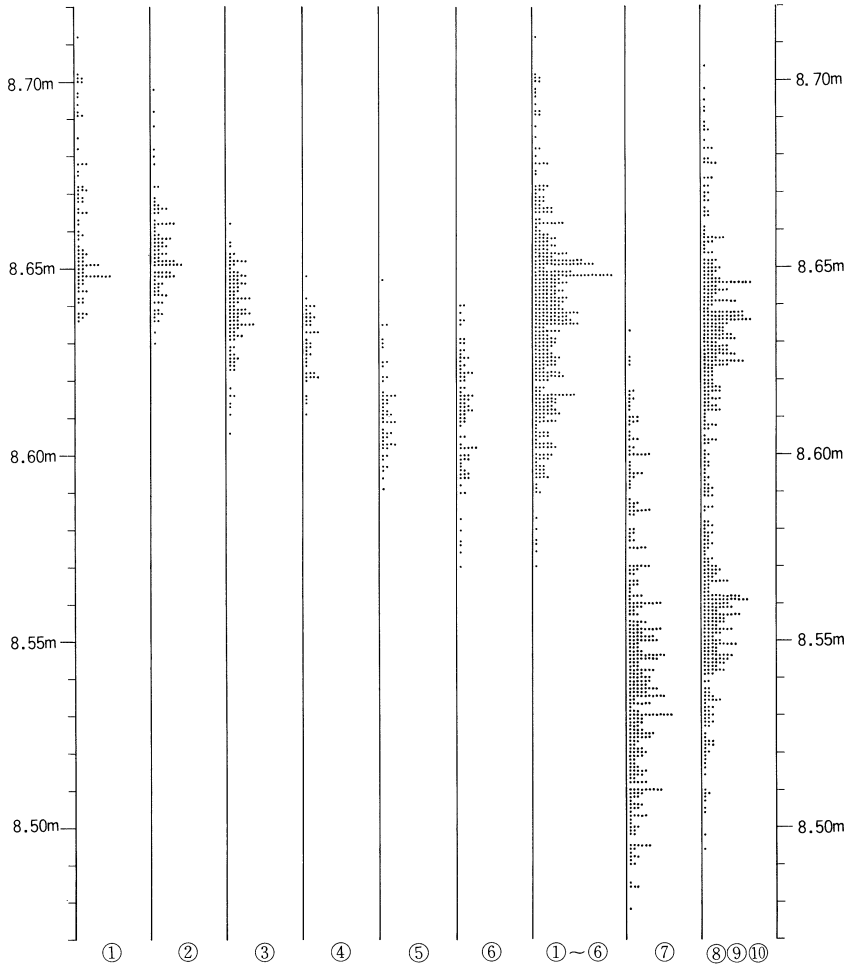
iii）**水田を区画する畦畔（以下畦畔C^Gとよぶ）**：畦畔Cには、畦畔A－2と畦畔B－1との間の北半にみられる東西方向の畦畔（畦畔C－1～3・5・6）と、畦畔B－2に直角にとりつきわずかに1～1.5m程東に延びそこで途切れる畦畔（畦畔C－7・8）、及び水田を南北方向に区切る畦畔（畦畔C－4）とがある。上端幅5～20cm、下端幅20～38cmのものが多く、上端幅は最大29cm、最小3cmで、下端幅は最大46cm、最小15cmである。水田面との比高差は2～3cmの所が大半で、最も大きい値は4.9cmである。尚、畦畔C－7・8は他の畦畔とは異なっており、たとえばつくりかけもしくはなかば取りはずされたような状態である点が特徴的である。

iv）**区画**：水田1枚毎の区画は主に畦畔Cによってなされており、畦畔C－7・8が延長するものと仮定すると12枚の水田が検出されたことになる。水田は、水田①～③・⑥・⑧・⑩のようにやや細長い長方形を呈するものと、更にそれを2分した水田④・⑤、及び水田⑦・⑨・⑪・⑫のようにやや大きい区画のものとからなる。しかし何らかの理由で途中で切れているものの、区画を意図していると思われる畦畔C－7・8の存在を考えれば、水田①～③・⑥のような水田を基本としているといえよう。水田1枚の面積は、最小の水田⑤が6.1m²、最大の水田⑪が184.2m²以上であるが、基本となると考えられる水田①～③及び⑥の面積は11.5～16.7m²であり、その平均値は14.2m²である。

v）**水口**：水口は畦畔C－1で2ケ所、畦畔A－3、B－3、C－2・6・7で各1ケ所の合計7ケ所でしか検出されておらず、すべての畦畔に設けられているわけではない。大部分の水口は畦畔と畦畔の交差部分に設けられており、畦畔B－3の水口以外はすべて東西方向の畦畔に設けられている。水口には杭列などの施設は認められず、すべて畦畔を切るような形でつく



第106図　Ⅳ区13ｂ層水田跡平面図・エレベーション図

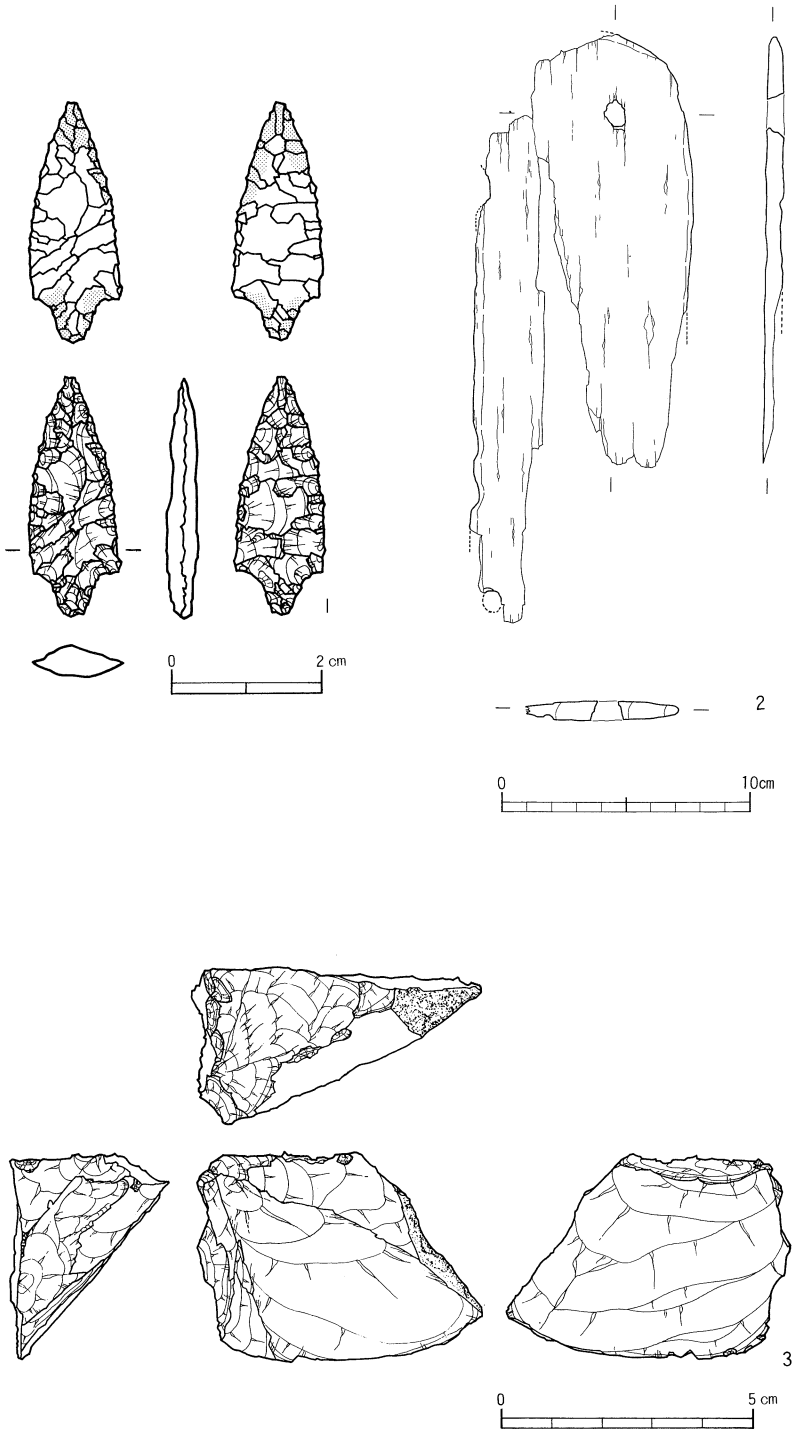


第107図　Ⅳ区13ｂ層水田跡水田面標高測点値分布図（測点は50cmメッシュ）

られているが、その幅は一定ではない。

vi）**各水田面の標高と区画**：第107図にように水田区画のほぼ明らかな水田①～⑩の水田面の標高は8.712～8.478mである。水田面の高低差は水田①～⑥では４～６cm、水田⑦で約12cm、水田⑧・⑨・⑩では約20cmである。この13b層水田跡では水田面の勾配が小さく水田①～⑥では高低差４～６cmの水田区画がなされているが南北に隣接する水田間に微妙な高低差が存在していることも知られる。畦畔Ｃ－１・２に設けられた水口からも用水の流れは北から南へ勾配に沿ったものと考えられる。しかし、水田①～⑥の標高測点値の分布は隣接する水田間では重なる部分が多く、用水の流れは緩慢なものであり、停滞的な状況も考えられることから、これら①～⑥の水田区画は地形に規則された面は少ないと判断される。

③出土遺物：遺物は13a層中から石器１点（第108図１）、13c層上面から木製品１点（第108図



第108図　Ⅳ区Ⅰ3層出土遺物実測図

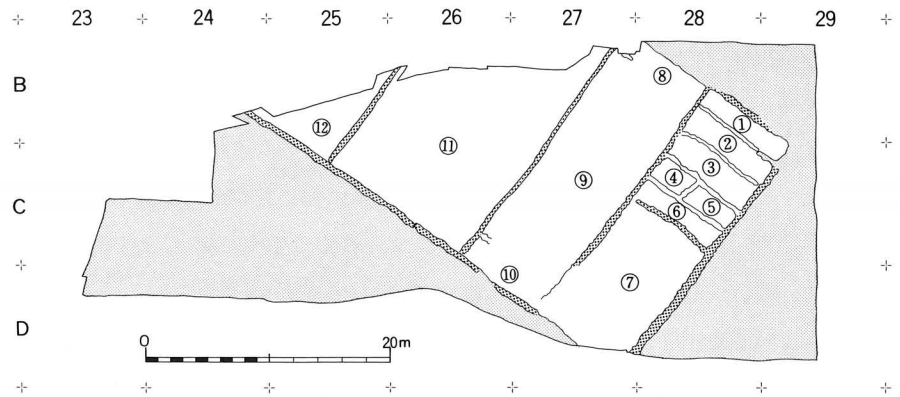
2）13c 層中から石器１点（第108図３）が出土している。

第108図１（写真348－１）：D－27グリッドから出土した有茎の石鏃である。先端部両側縁と基部両側縁のパティナが異なる（スクリーントーンの部分）。石質は硬質頁岩である。

第108図２（写真363－１）：D－28aグリッドから出土した２孔を有する板状の木製品である。この木製品の出土位置は13b 層水田跡の畦畔A－２の東側の非耕作部分にあたる。表面は平滑であるが裏面には凹凸がみられる。側縁には何ケ所か緊縛痕と考えられる凹みがみられる。上部の完存する孔は表面の径が８～12mm であるのに対して、裏面の径は13～18mm と広い。残存長は23.7cm、幅8.7cm、厚さ８ mm で、樹種はクヌキ節の一種であり、木取りは柾目である。この木製品の用途については、全体の形状が板状を呈すること、孔を有すること、緊縛痕と考えられる凹みが側縁に認められることから、田下駄と判断される。

第108図３（写真348－２）：C－29グリッドから出土した二次加工のある剝片である。打点は頭部の剝離により失われている。頭部の剝離面縁辺に二次加工痕が、末端部に微細剝離痕が認められる。また表面右側縁付近に自然面を残している。石質は流紋岩である。

④13b層水田跡について：13b層水田跡は畦畔A・B・Cと畦畔により区画された水田により構成されている。畦畔A・B・Cの間に規模の差はさほど認められないが、畦畔Aについては水田域と非耕作域を画する畦畔であること、等高線に直交あるいは平行する傾向がみられ、企画性のある長方形の水田域を形成していることから、水田を作るに際して基軸となる機能が考えられる。畦畔Bについては、水田⑧・⑨・⑩と水田⑪の存在により、基本となる水田区画①～⑥とは異なり、水田域をいくつかに区割する機能が考えられる。また畦畔Cについては基本となる水田区画をなす機能が考えられる。しかし、第107図によれば⑧・⑨・⑩には測点値の集中が北半部において標高8.66～8.62m 付近と、南半部において8.57～8.53m 付近の２箇所認められ、標高の低い方の測点値の集中は水田⑦の測点値の集中と同様の傾向を示す。このことは畦



第109図　Ⅳ区13ｂ層水田跡平面図

畔A－1・2・3と畦畔B－1による区画と、水田⑧・⑨・⑩においては共に標高測点値の集中が北半部と南半部にあり、前者においては畦畔C－6の存在によって、より高低差の少ない2つの区画がなされ北半部だけが基本となる水田区画がなされた状況を示しており、後者においても畦畔C－6と同様の機能をもつ畦畔の存在が予想され、畦畔C－6については区割の機能と考えることができる。つまり、13b層水田跡では水田域における区割が基軸となる畦畔A'に直交あるいは平行する畦畔によって行なわれ、その単位は水田⑦に認められるといえる。

4．12層の調査

(1) 調査概要

①12層の分布・土性：12層はIV区及びVI区の調査区のほぼ全域に分布する層で、IV区では褐灰色を呈するシルト質粘土、VI区では黒色の粘土と層相が若干異なっているが、層序関係から同一の層と考えられる。層厚はIV区D－29・30グリッド付近で5～10cm、VI区で3～7 cmである。しかしVI区の調査区東端部では5 cm以下と非常に薄くなっており、部分的に12層が認められないところもある。

②12層上面の標高と地形：12層上面の標高は、IV区では8.78～8.92cmで、調査区南壁によれば東側がやや高く西側へむかって徐々に低下している。VI区では8.34～8.92mであり、全体的には調査区の南西部から北東部へむかって傾斜しているが、標高が最も低いのは調査区中央部である。

③検出遺構と出土遺物：12層上面においてIV区・VI区ともに1条ずつの大畦が検出されている。また、VI区では12層上面で人間のものと考えられる無数の足跡が確認されている。遺物はIV区から石器が5点、VI区から樹木片38点とクルミ3点が出土している。

(2) IV区の調査

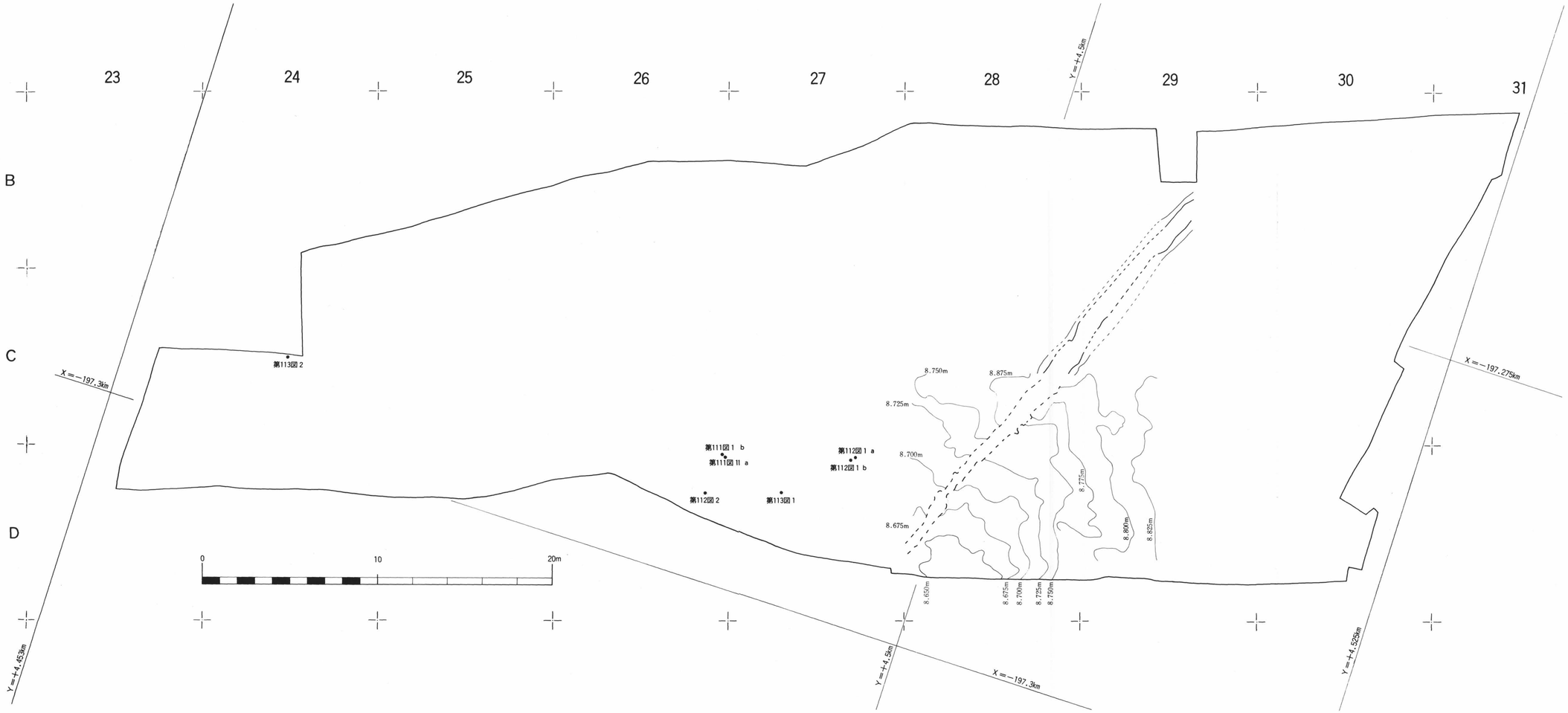
①12層水田跡（第110図）

ⅰ）**水田の構成**：12層水田跡は、幅1～2 mの大畦と水田面によって構成されている。この大畦によってのみ水田1枚1枚が区画されていたとは考えにくいが、それ以外の畦畔は確認されなかった。尚、この水田跡に伴う水路・水口・足跡等は検出されていない。

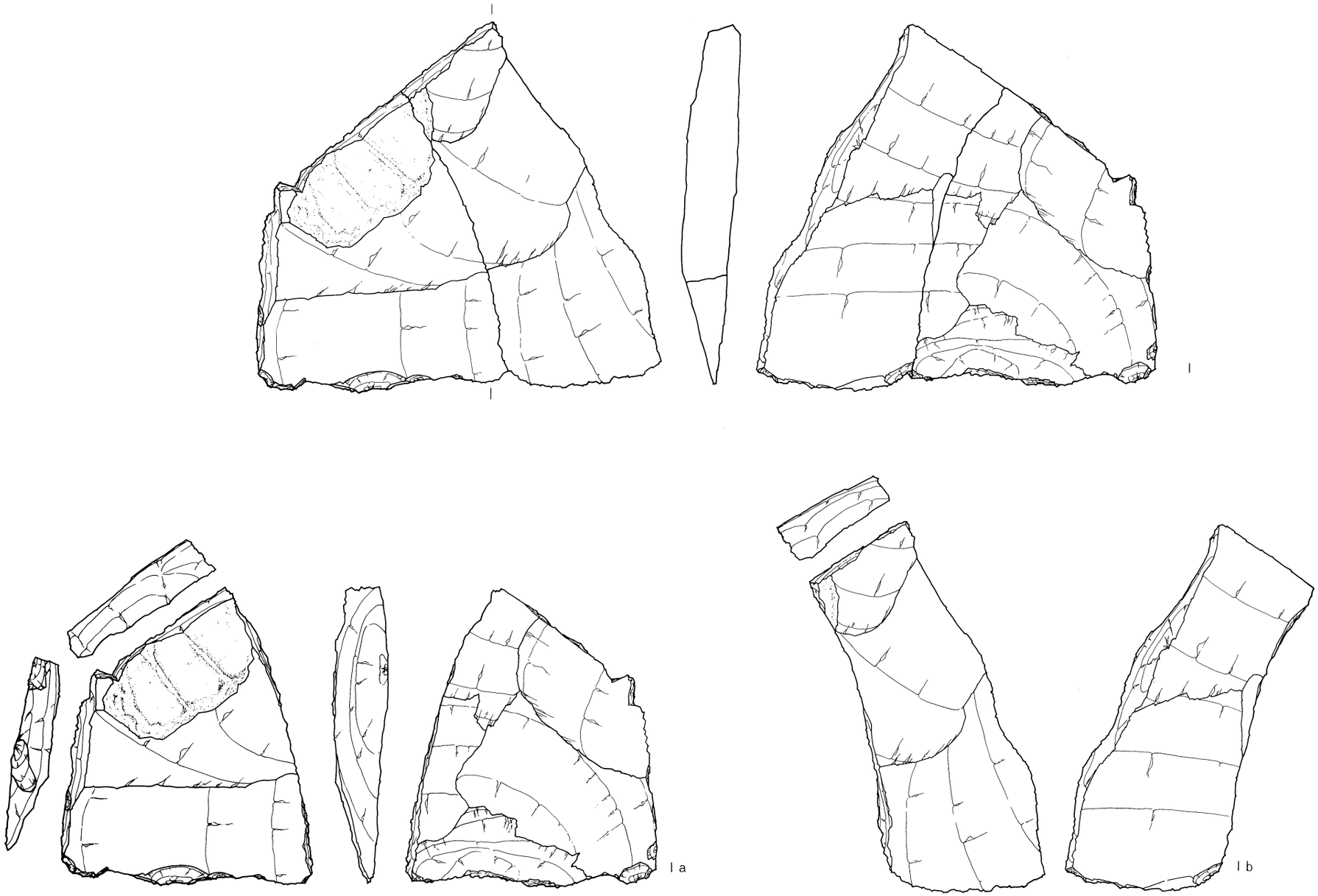
ａ）**大畦**：大畦は周囲の土を盛って作られた土盛り畦畔である。方向はN－24°－Eであり、検出長は25.55mである。上端幅は0.29～0.83m、下端幅は0.94～1.64mで、断面形は扁平な台形状を呈する。水田面との比高差は東側で2.4～3.3cm、西側で2～7.1cmである。

ⅱ）**出土遺物**：遺物は石器5点（第111図～第113図）が出土している。

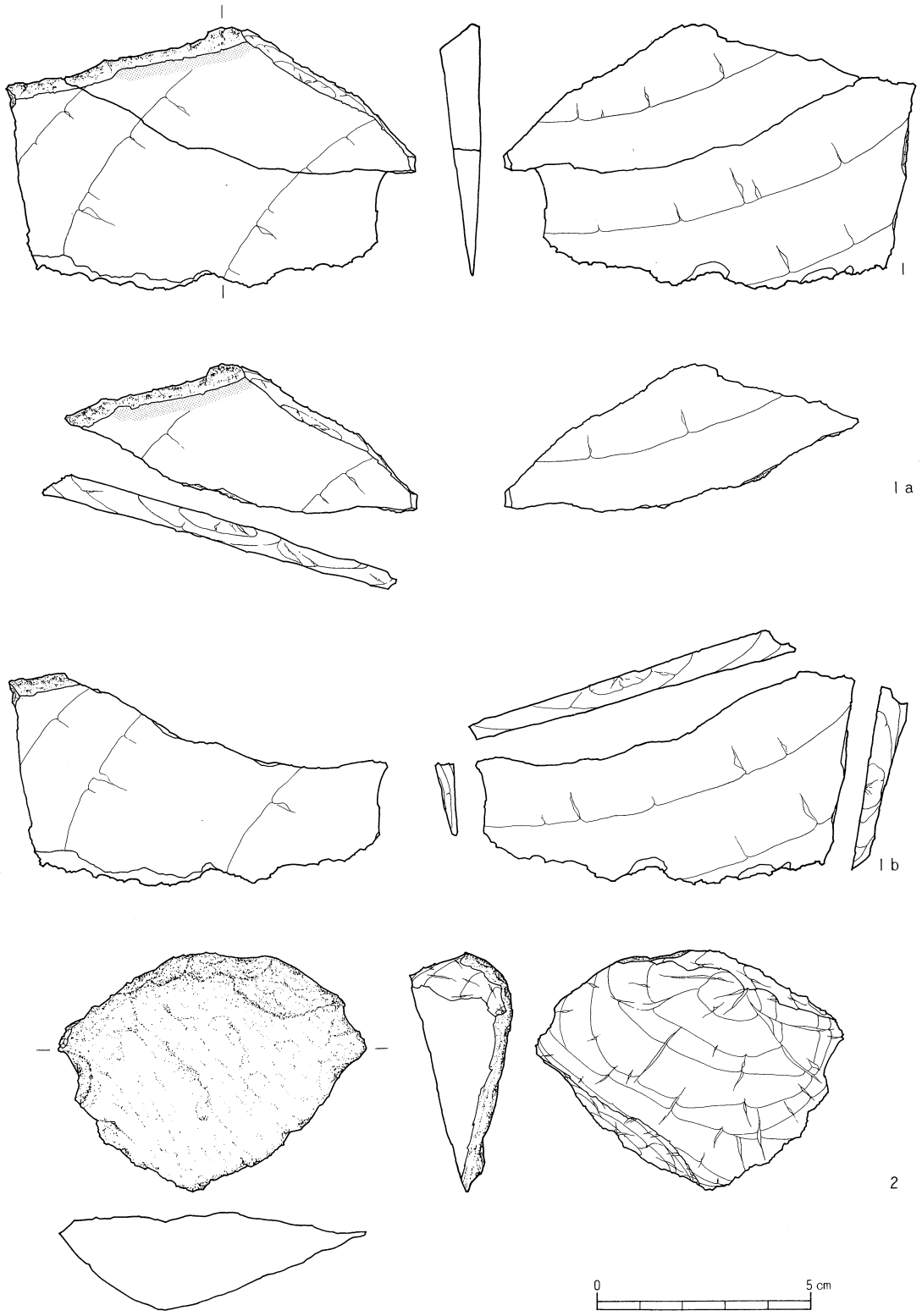
第111図1（写真348-3）：2次加工のある剝片である。D－26bグリッドのほぼ同一地点において12層上面から出土した石器1点（第348図1a）と、11a層最下部から出土した石器1点（第348図1b）が接合したものである。両者の出土レベルの差はほとんどなく、重なり合った状態で出土し



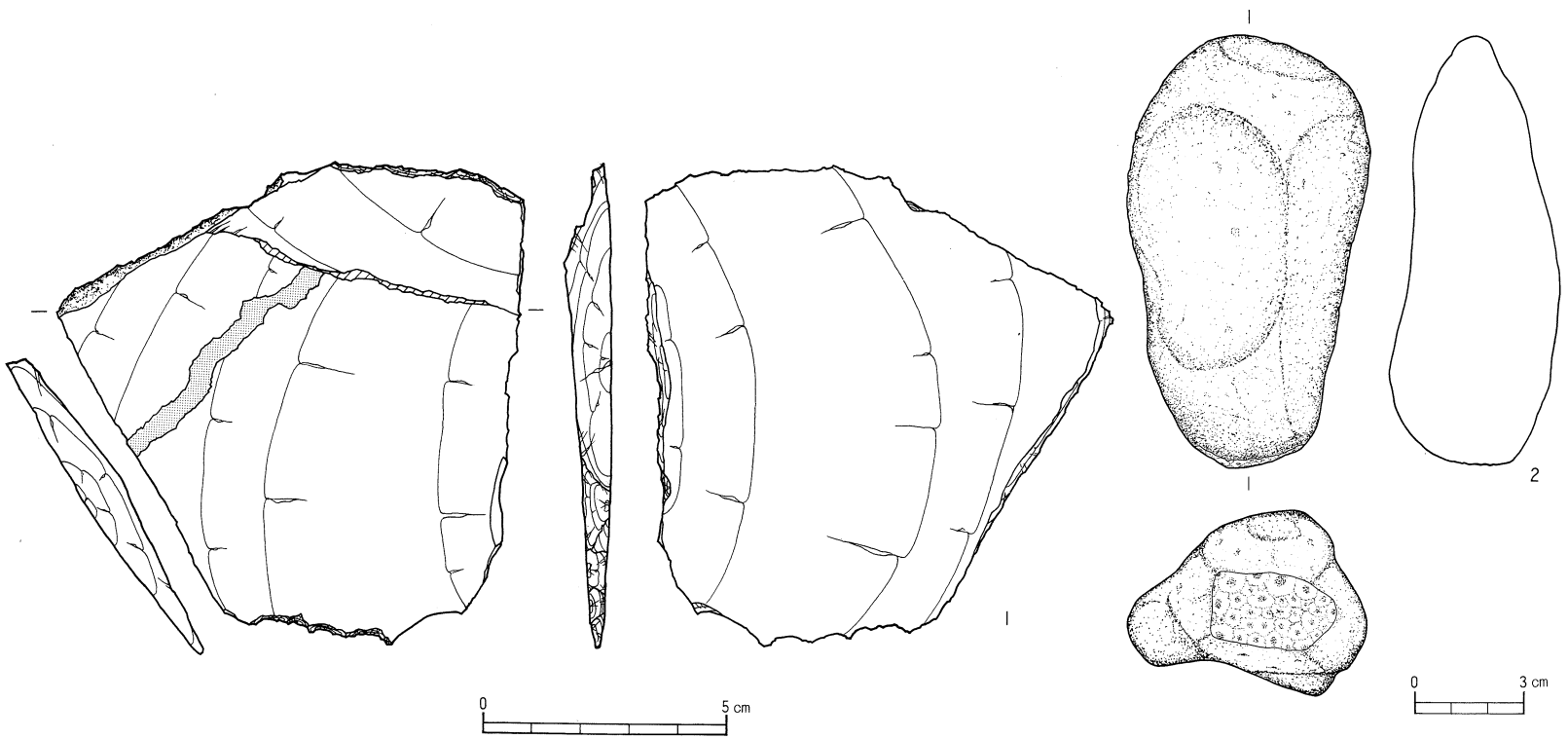
第110図　Ⅳ区12層水田跡平面図



第111図　Ⅳ区12層出土遺物実測図（1）



第112図　Ⅳ区12層出土遺物実測図（2）



第113図　Ⅳ区12層出土遺物実測図（3）

ている。鋭い1側縁に微細剝離痕が認められる。また他の3側縁は全て折れ面である。石質は安山岩である。

第112図1（写真348-4）：微細剝離痕のある剝片である。D－27bグリッド近接した地点において11a層中から出土した石器1点（第348図1a）と、12層中から出土した石器1点（第348図1b）が接合したものである。両者の出土地点間の距離は約40cmである。鋭い1側縁に微細剝離痕が認められる。また他の側縁については、3側縁が折れ面であり、1側縁は自然面である。表面ではこの自然面の側縁に沿って擦面（スクリーントーン部分）が認められる。石質は安山岩である。

第112図2（写真348-5）：D－26bグリッド12層中より出土した剝片である。表面は自然面であり、末端部には折れ面が認められる。石質は珪質凝灰岩である。

第113図1（写真349-1）：D－27aグリッド12層中より出土した微細剝離痕のある剝片である。鋭い1側縁に微細剝離痕が認められ、これを反対側の側縁には裏面から二次加工が施されている。他の側縁については、2側縁が折れ面であり、1側縁は自然面である。表面には擦面があり、稜が失われている（スクリーントーン部）。また表面の一部には節理面が認められる。石質は安山岩である。

第113図2（写真349-2）：C－24dグリッド12層中より出土した敲打痕のある石器である。末端部に敲打痕が認められる。石質は珪質凝灰岩である。

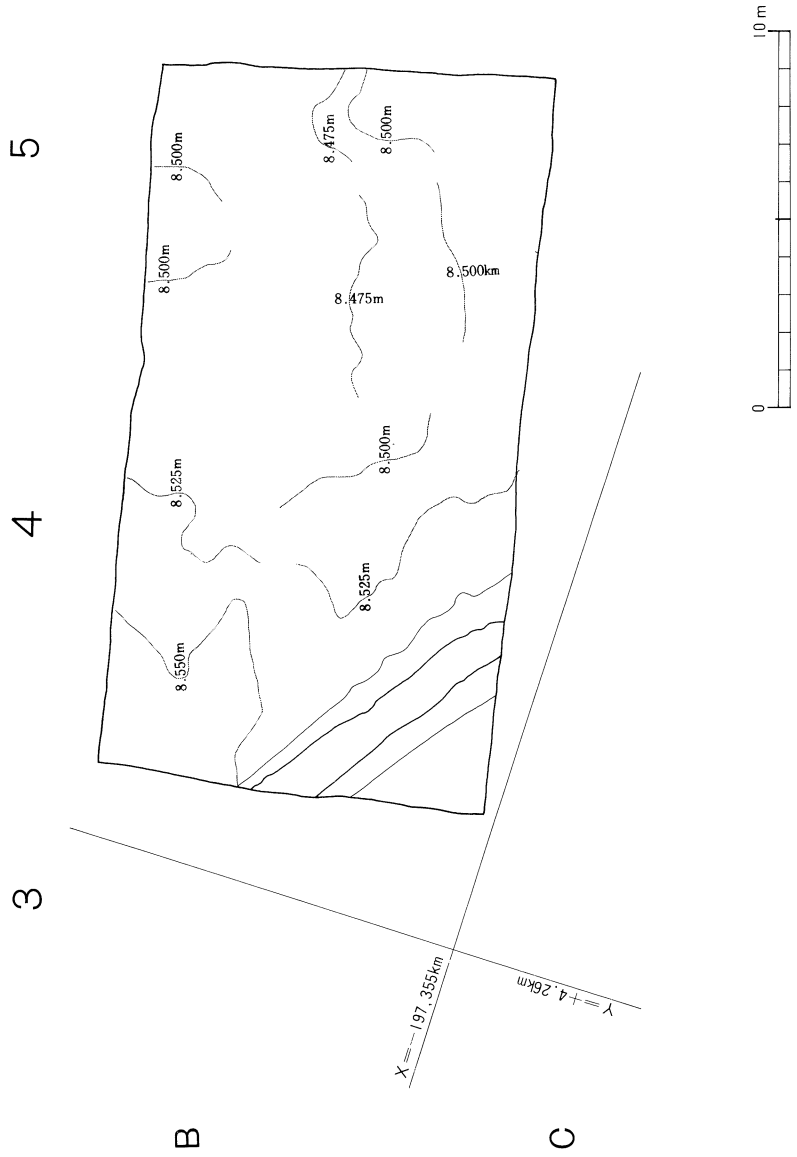
(3) VI区の調査

①12層水田跡（第114図、写真124・125）

ⅰ）**水田の構成**：12層水田跡では大畦1条のみが検出され、水田を区画する小畦や水田耕作にともなうその他の遺構は検出されなかった。この水田跡にともなう酸化鉄の集積層は認められなかった。

ａ）**大畦**：大畦は周囲の土を盛って作られた土盛り畦畔である。方向性はN－54°－Wである。8.64mにわたって検出されている。断面形は非常に扁平な台形状を呈する。上端幅0.79～1.52m、下端幅1.84～2.18mを測る。水田面との比高差は東側では0.4～2.2cm、西側では0.9～4.2cmである。

ⅱ）**足跡**：12層水田跡を検出した段階で無数の足跡を検出している。これらの足跡は大畦上には認められないが、その他水田面全体に広がる。形が崩れているものや重なりあったと考えられる不明瞭なプランも多いが、明確なものについては長さは25cmを中心に14～35cm、幅7～18cmの人足形又は細長い楕円形である。深さは1.0～8.1cmである。その形状・規模から見て、人間の足跡ではないかと想定される。足跡の分布に規則性は認められない。足跡の中には足の向きがわかるものがあるが、歩行経路を把握することはできなかった。足跡の分布密度はＢ－4グリッドにおいては1 m^2 あたり約6.6個検出されている。



第114図　Ⅵ区12層水田跡平面図

iii）**出土遺物**：BC－5グリッド、調査区南東端を中心に木片38点、クルミ3点が出土した。樹木片には人為的な加工痕は認められない。木片38点中2点を樹種同定した結果、オニグルミとエゴノキ属の一種であった。

(4) 12層水田跡について

12層水田跡は、第15次調査Ⅳ区とⅥ区において検出されている。この水田跡は、13b層水田跡との間には13a層、11a層水田跡との間には11b層が介在している。一部では11a層の耕作により、11b層の存在しないところもある。第15次調査ではⅤ区においては12層の水田土壌はなく、本来

12層水田跡がⅤ区にも存在し、11a層の耕作によりなくなったとは考え難い。12層水田跡はその水田域がⅣ区とⅥ区に分かれていたと考えられるが、今後の調査により解明されるべき課題である。

5．11a 層の調査

(1) 調査概要

①11a 層の分布・土性：11a 層はⅣ区からⅦ区にかけて分布する。層厚はⅣ区D－30グリッドで10～15cm、Ⅴ区D－21グリッドで15～20cm、D－13グリッドで25～30cm、ⅤE区で6～10cm、Ⅵ区で15～20cm、Ⅶ区で3～6 cmである。Ⅴ区西南部・ⅤG区において層厚が厚い。この層は泥炭粘土層Aであり、弥生時代桝形囲式期の水田土壌である。11a 層の上面はほぼ平坦であるが、下面には細かな凹凸がみられる。層相はⅣ区D－29グリッドでは2.5Y6/1 黄灰色粘土、Ⅴ区D－13グリッドで5 Y5/1 灰色粘土、Ⅶ区で10YR4/1 褐灰色粘土である。層相変化としては、Ⅳ区において粘性が強く、西方へいくにつれて弱くなり層中に植物遺体を比較的含むようになる。また層全体の色調は東方へいくにつれて明るくなる。またⅤ区西南部では11a′層の存在が確認されている。

②11a 層上面の標高・地形：11a 層上面の標高はⅣ区南東部D－29・30グリッドで9.01～8.91m、Ⅴ区D－20・21グリッドで8.86～8.77m、D－13・14グリッドで8.67～8.50m、ⅤE区で8.70～8.59m、Ⅵ区で8.80～8.70m、Ⅶ区で8.30～8.19mと、Ⅴ区西半部でやや低くなっているが、全体としては東方に高く西方に低い傾向がある。

③検出遺構と出土遺物：11a 層上面においてⅣ区・Ⅴ区・Ⅵ区・Ⅶ区で水田跡を検出している。Ⅳ区では大畦2条と、12層上面において溝状遺構1基（ＳＸ1）を検出、遺物は弥生土器1点、石器5点が出土している。Ⅴ区では大畦6条・杭列2列・杭2本と溝跡1条（ＳＤ1）を検出、遺物は弥生土器1点、弥生土器片2点、石器1点が出土している。ＳＤ1は11a 層水田跡と重複関係があり、ＳＤ1が11a 層水田跡より新しい。Ⅵ区では大畦1条を検出、Ⅶ区では大畦1条と小畦により区画された水田10枚が検出されている。

(2) Ⅳ区の調査

①11a 層水田跡（第115図、写真126～141）

ⅰ）**水田の構成**：Ⅳ区においては、2条の大畦と、水田耕作に関わるものと考えられる痕跡（ＳＸ1）が検出されている。ここでは2条の大畦のうちB・C・D－28・29グリッドで検出されたものを大畦1・C－25・26グリッドで検出されたものを大畦2とする。なお、水田面は面積の広さ及び11a 層上面の高低差等から大畦のみによって区画されていたものとは考えにくいが、1枚1枚の水田を区画する畦畔を確認することはできなかった。

ａ．大畦：大畦は周囲の土を盛って作られた土盛り畦畔である。大畦1は方向性Ｎ－21°－Ｅで

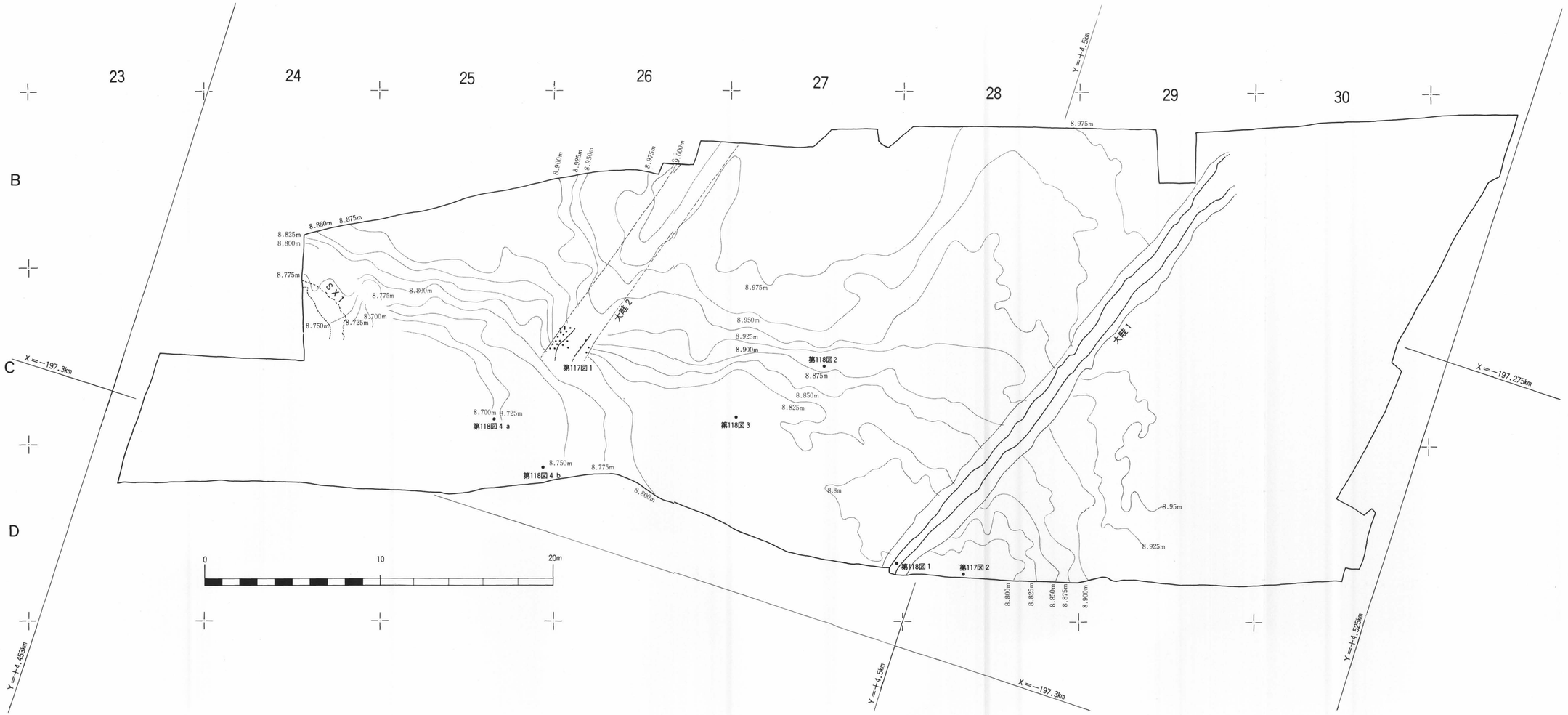
南北30.42mにわたって検出されている。上端幅は0.41～0.92m、下端幅は1.45～2.18mである。断面形は扁平な台形状を呈し、水田面との比高差は東側で0.4～5.6cm、西側で2.5～7.1cmである。大畦2は方向性N－21°－Eで大畦1に平行する畦畔である。実際に検出できた長さは南北2.02mであるが、その延長上の調査区北壁においても盛り上がりが確認されたので北壁まで延びているものと考えられ、北壁までの長さは14.65mである。上端幅は0.80～1.01m、下端幅は1.95～2.11mである。断面形は扁平な台形状を呈しており、検出された部分での水田面との比高差は東側で3.5～4.1cm、西側で2.6～4.2cmである。

b．ＳＸ１（第116図、写真132）：ＳＸ１はIV区西部、C－24bグリッドに位置する。12層上面で検出された。ＳＸ１の方向性は東北方に張り出す弧状を呈しており、検出された長さは約４mである。上端幅は27～130cm、下端幅16～115cmである。深さは８～14cm、底面の標高は8.50～8.39mである。底面には凹凸がみられる。ＳＸ１の溝状になっている所に入っている土壌は11a層である。11a層は自然堆積層ではなく水田土壌であるため、ＳＸ１の形成は11a層の形成以降であり、その性格は11a層の水田耕作に関わる何らかの痕跡があることが想定される。またＳＸ１の底面には長さ10～22.5cm、深さ２～3.5cmの三ケ月形あるいは細長い楕円形の落ち込みが５基（Ｐ１～５）認められた。これらの落ち込みに入っている土壌は11a層であり、中でもＰ１は残存状況が良好で11a層を掘り上げて石膏で型取りをしたところ、厚さ２cm、先端がU字型を呈し、断面形が扁平な三ケ月形の鋤先の痕跡であることが考えられた。（写真133・136・139）このことは他のＰ２～５についても同様のことが考えられ、ＳＸ１の形成と密接な関連をもつものと判断される。（写真134・135・137・138・140・141）。

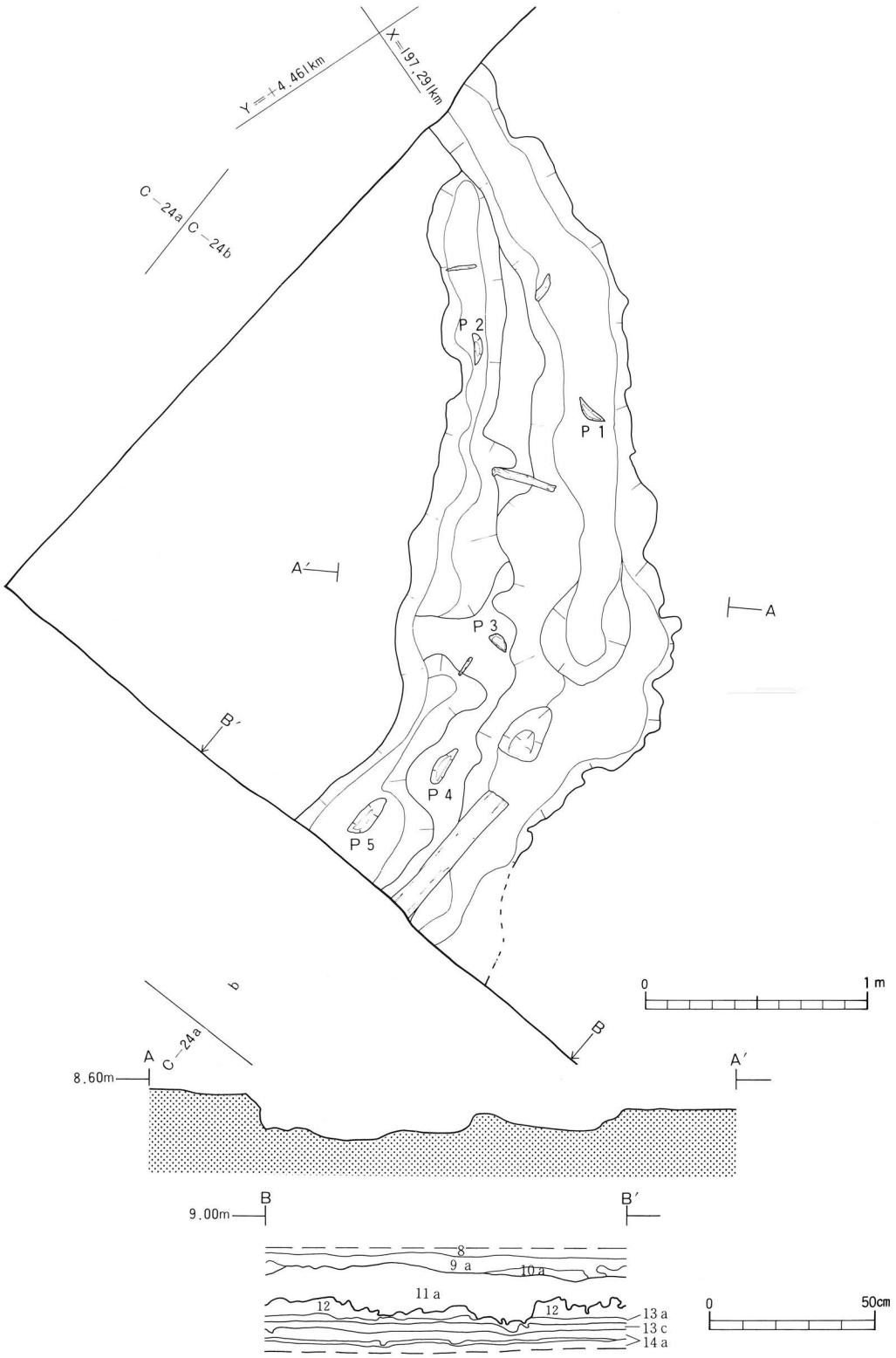
ii）足跡：IV区の11a層水田跡では、水田面でもまた畦畔上においても足跡は検出されなかった。

iii）出土遺物：遺物は11a層から弥生土器１点（第117図１）、石器５点（第117図２・第118図）が出土している。

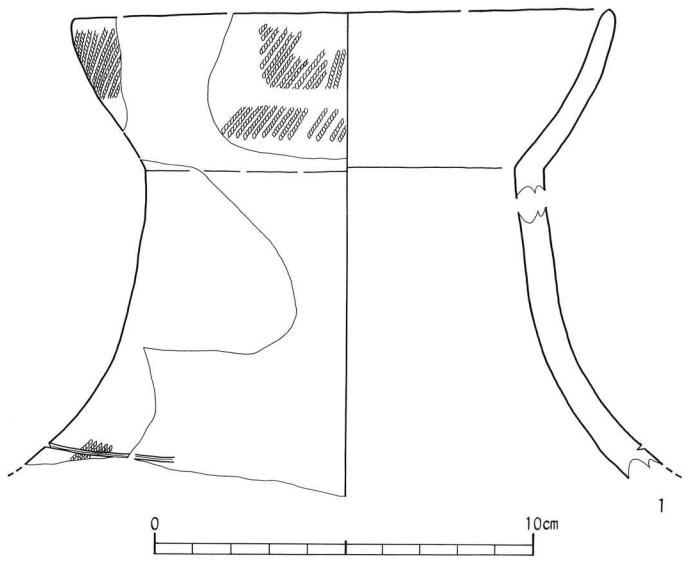
第117図１（写真130・131・345-1）C－26aグリッド11a層上面から24片に割れて一括出土している。第115図に示すように出土位置は大畦２の上面及びその周辺であり、分布域は東西1.9m、南北1.7mの範囲である。器形は頸部下半はゆるやかに立ち上がり、頸部上半では垂直気味となり、口縁部は内弯しながら外傾する壺である。口縁部と頸部の境は屈曲しており、内面には稜が形成されている。体部上端から口縁部にかけて約1/2が残存しており、他に体部及び底部の破片は出土していない。地文は単節LR縄文が口縁部と体部上端に施文されている。口縁部中位には幅４～５mmのナデが横方向になされ、体部上端には幅２mmの沈線が１条横方向に施文されている。推定口径は14.3cmである。器厚は口縁部で４～６mm、頸部で７～８mmである。**第117図２**（写真349-5）：D－28dグリッド11a層中から出土した石核である。素材は剝片であ

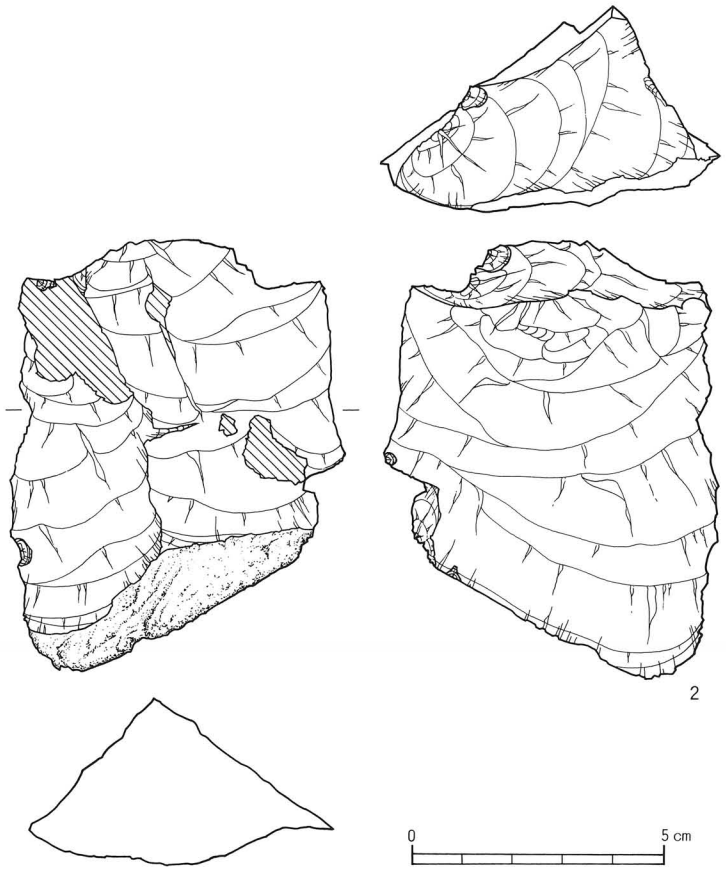


第115図　Ⅳ区11ａ層水田跡平面図

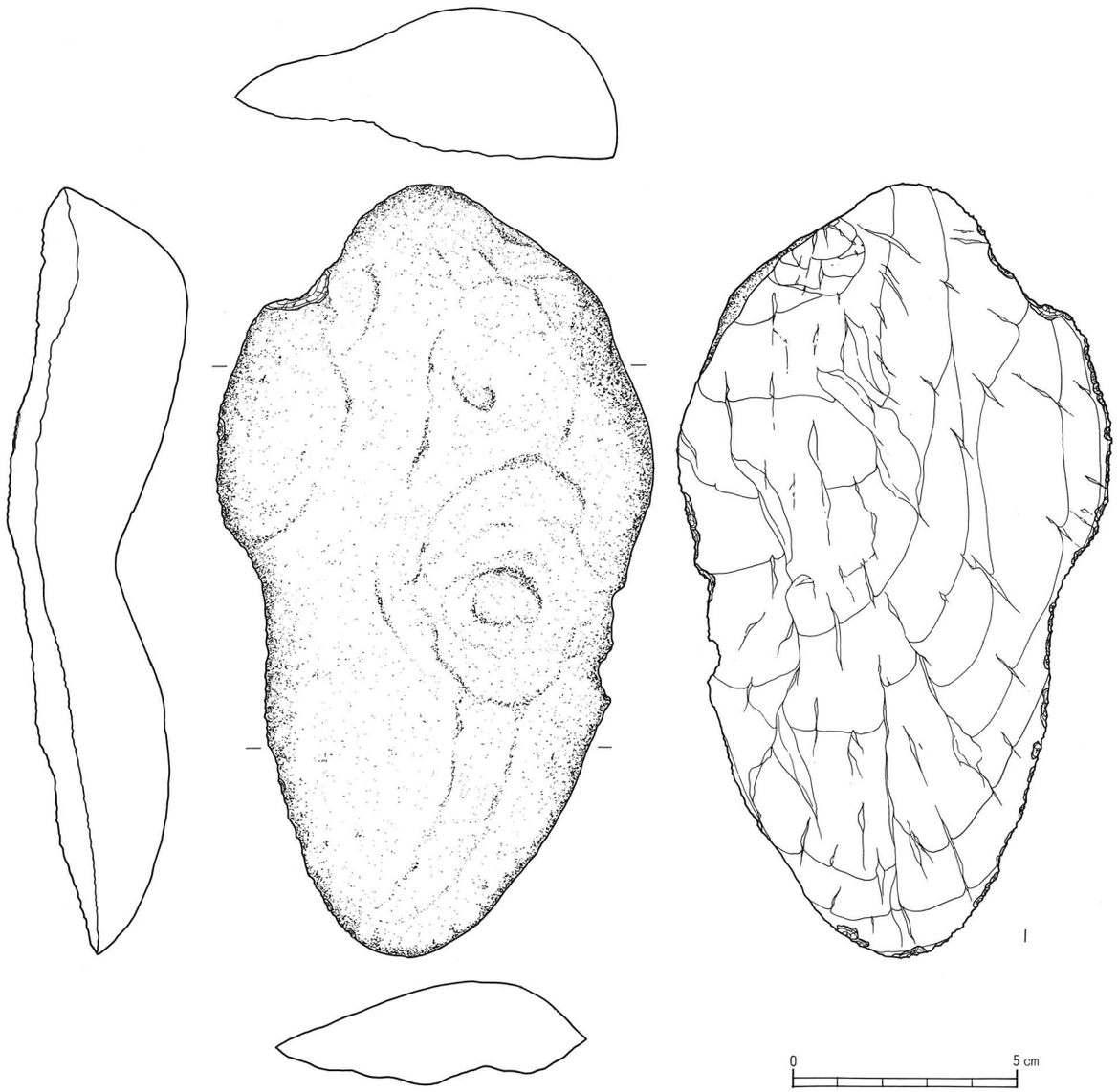


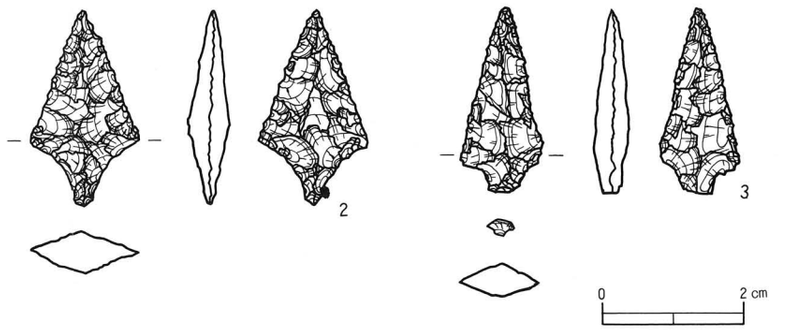
第116図　Ⅳ区12層上面ＳＸ１平面図・エレベーション図

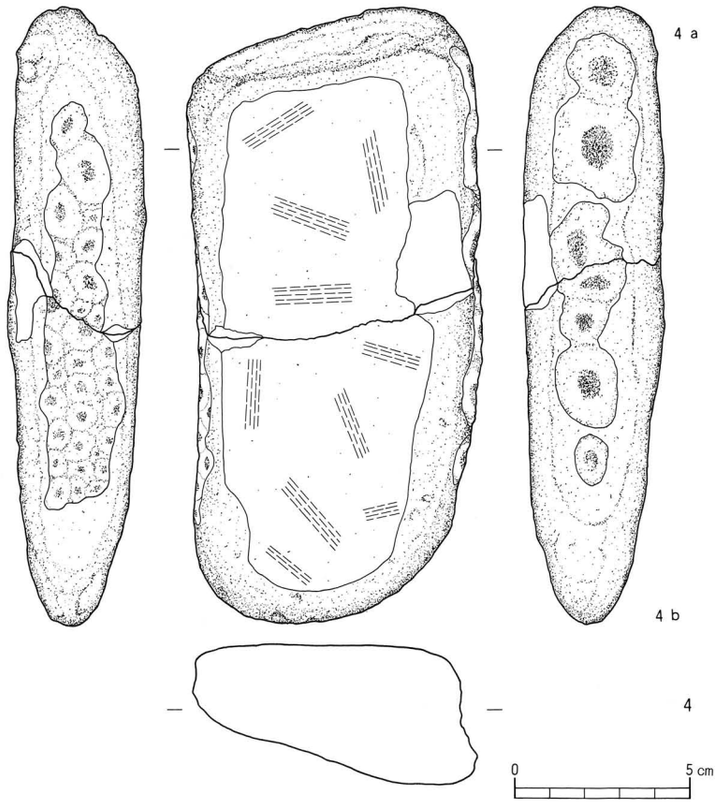




第117図　Ⅳ区Ⅱa層出土遺物実測図（1）







第118図　Ⅳ区Ⅱa層出土遺物実測図（2）

る。表面には節理面がみられる。また表面末端部は自然面である。石質は流紋岩である。

第118図1（写真350-1）：D－27cグリッド11a層中から出土した微細剝離痕のある石器である。素材は剝片である。裏面の右側縁と末端、左側縁の一部に微細剝離痕が認められる。表面は自然面である。石質は珪質凝灰岩である。

第118図2（写真349-3）：C－27cグリッド11a層中から出土した有茎の石鏃である。石質は硬質頁岩である。

第118図3（写真349-4）：C－26cグリッド11a層中から出土した有茎の石鏃である。末端には折れ面が認められる。石質は玉髄である。

第118図4（写真350-2）：擦面と敲打痕のある石器である。C－25cグリッド11a層中から出土した石器1点（第118図4 a）と、D－26aグリッド10a層最下部中から出土した石器1点（第118図）4 b）とが接合したものである。両者の出土地点間の距離は4.4mである。素材は礫である。表面には擦面が認められる。また両側面には敲打痕がある。10a層最下部から出土した第118図4 bは全面にススが付着しているが、第118図4 aにはそれがみられない。これは第118図4が2つに割れた後に第118図4 bだけが火熱を受けたことを示している。

⑶　V区の調査

①11a層水田跡（第119図、写真142～166）

ⅰ）水田の構成：11a層水田跡では大畦6条（大畦3～8）と杭列を2列（杭列1・2）を検出している。

a．大畦：大畦は6条検出されており、方向性は直線的である。そのうち大畦5～8の4条の方向はN－18°～38°－Eでありほぼ平行している。大畦間の距離は下端間の距離で大畦5と6で10.2～12.5m、大畦6と7で8.9～12.1m、大畦7と8で13.5m程である。また大畦4は大畦5に取り付いており、方向はN－58°－Wである。大畦3はN－29°－Wの方向を示す。規模については、大畦3は上端幅25～88cm、下端幅140～212cm、大畦4は上端幅194～208cm、下端幅360～364cm、大畦5は上端幅118～255cm、下端幅281～414cm、大畦6は上端幅107～165cm、下端幅263～335cm、大畦7は上端幅10～87cm、下端幅93～279cm、大畦8は上端幅61～100cm、下端幅141～200cmである。各大畦の断面形は扁平な台形状を呈する。水田面との比高差は1～12cmである。

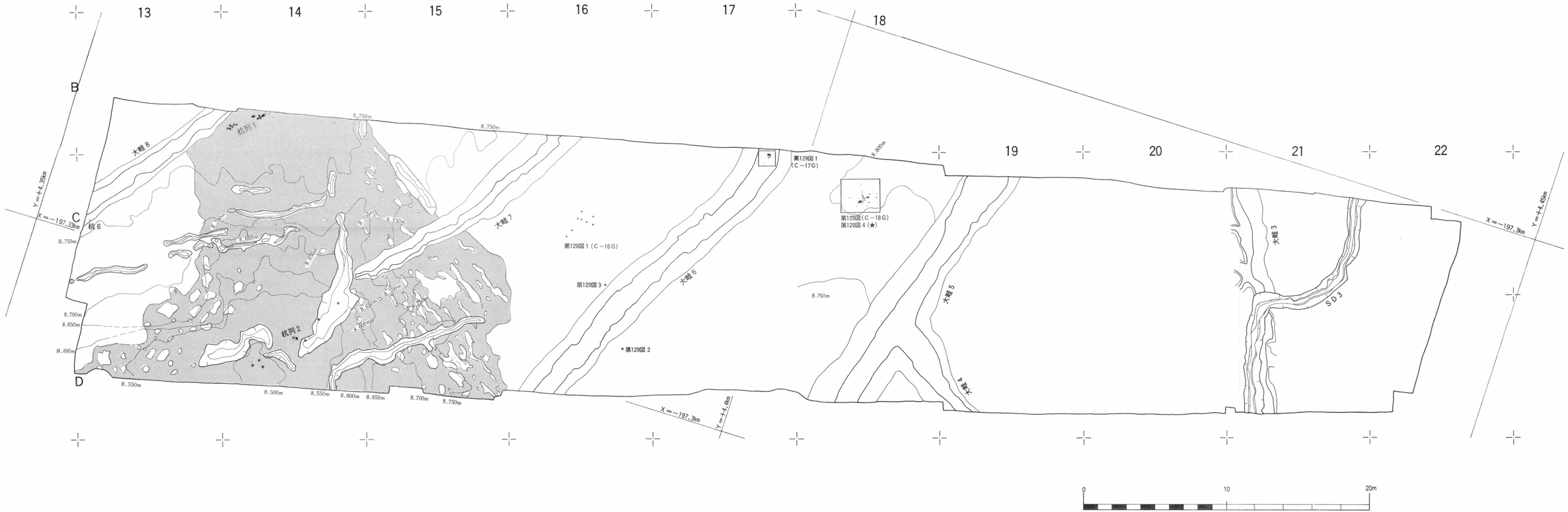
b．杭列・杭

杭列1（第120図～第126図、写真151・152）：杭列1はV区北西部、B－14dグリッドに位置する。11a層上面で検出された。杭列1の方向性はほぼ直線的であり、大畦8に沿うように伸びているが、方向はN－50°－Eと大畦8とやや異なる。検出された杭列1の長さは3.30mである。北東方向にはまだ伸びる可能性はあるが、調査区内では23本の杭が杭列を構成している。杭列は大

きくA群（杭７～12）とB群（杭13～29）の２群に分かれており、その間隔は1.28mである。杭列周辺から樹木片が出土しており同定のなされた３点は全てクリ材であった。各杭は全て打ち込み杭であり、両群においてその間隔は４～30cmで規則性はみられないが、大半は密接に打ち込まれている。杭の配置については２本１単位と考えられるものが両群に認められる。（杭７と杭８、杭９と杭10、杭11と杭12、杭13と杭14、杭15と杭16）各杭の先端の標高は8.34～8.58mである。各杭の形態については先端の加工がなされていない点で共通性が認められ、素材については杭11を除き他の全ては樹皮面を残した分割材を用いている。各杭の長さは25.6～54.1cm、杭11を除く各素材の推定半径は3.1～11.2cmである。各杭の樹種は全てクリ材である。また杭列１では各杭の間に接合関係が２つ認められる。接合関係１はA群の杭９の頭部と杭10の頭部が接合するものである。接合部付近には両者に焦痕がある。接合関係２はB群において杭24と杭27が分割面同志で接合し、さらに杭24の頭部と杭26の頭部、杭24と杭27の先端と杭17の先端が接合するものである。尚、杭26については図示されていないが、杭27に近接した位置で検出されている。このことは頭部と頭部の接合する杭９・杭10・杭24・杭26については打ち込みあるいは差し込まれた時の形態のまま遺存していることが明らかとなったことになる。また検出時ではこれら４本の杭の頭部は11a層上面より４～10cm上に出ているが、これは11a層やその上下の各層が泥炭質粘土層であることから脱水・収縮作用及び圧密の影響による可能性があり、本来杭の頭部は地表面にはさほど出ていなかったものと考えられ、他の杭についても同様のことが想定される。杭列の性格については大畦８との関連が考えられる。

杭６（第120図・第122図、写真150）：杭６はV区西端部C－13aグリッドに位置する。この位置は大畦８の下端と上端の中間である。11a層上面で検出された。杭６は打ち込み杭である。素材は丸太で、先端の加工はなされていない。残存長は37.4cmで、樹種はスギである。

杭列２（第121図・第127・128図、写真153～159）：杭列２はV区南西部D－14グリッドに位置する。11a層上面で検出された。杭列２の方向性はほぼ直線的であり、大畦７の延長線上に伸びており、方向もN－40°－Eと大畦７の方向と近似している。検出された杭列２の長さは7.45mである。南西方向にはまだ伸びる可能性はあるが、調査区内では10本の杭が杭列を構成している（杭30～杭39）。杭30～33・杭34～37にまとまりがみられる。杭列周辺からは樹木片が出土しており同定のなされた６点については１点がクリ、他の５点はケンポナシであった。各杭は全て打ち込み杭であり、その間隔に規則性はみられないが、中には杭31と杭32、杭34と杭35、杭36と杭37のように２本１単位と考えられるような配置をなすものもある。各杭の形態については樹皮面を残した分割材を素材としているものが２本、丸太材を素材としているものが８本であり、先端の加工は杭36を除き全てなされていない。各杭の残存長は6.6～138.4cm、各素材の半径及び推定半径は1.3～9.0cmである。樹種は杭30・杭32・杭38がケンポナシ、杭39がカエデ



第119図　Ⅴ区11ａ層水田跡平面図

属の一種・杭31・杭33～35・杭37がクリであり、同定のなされていない杭36を除き全て落葉広葉樹が用いられている。杭列の性格については大畦7との関連が考えられる。

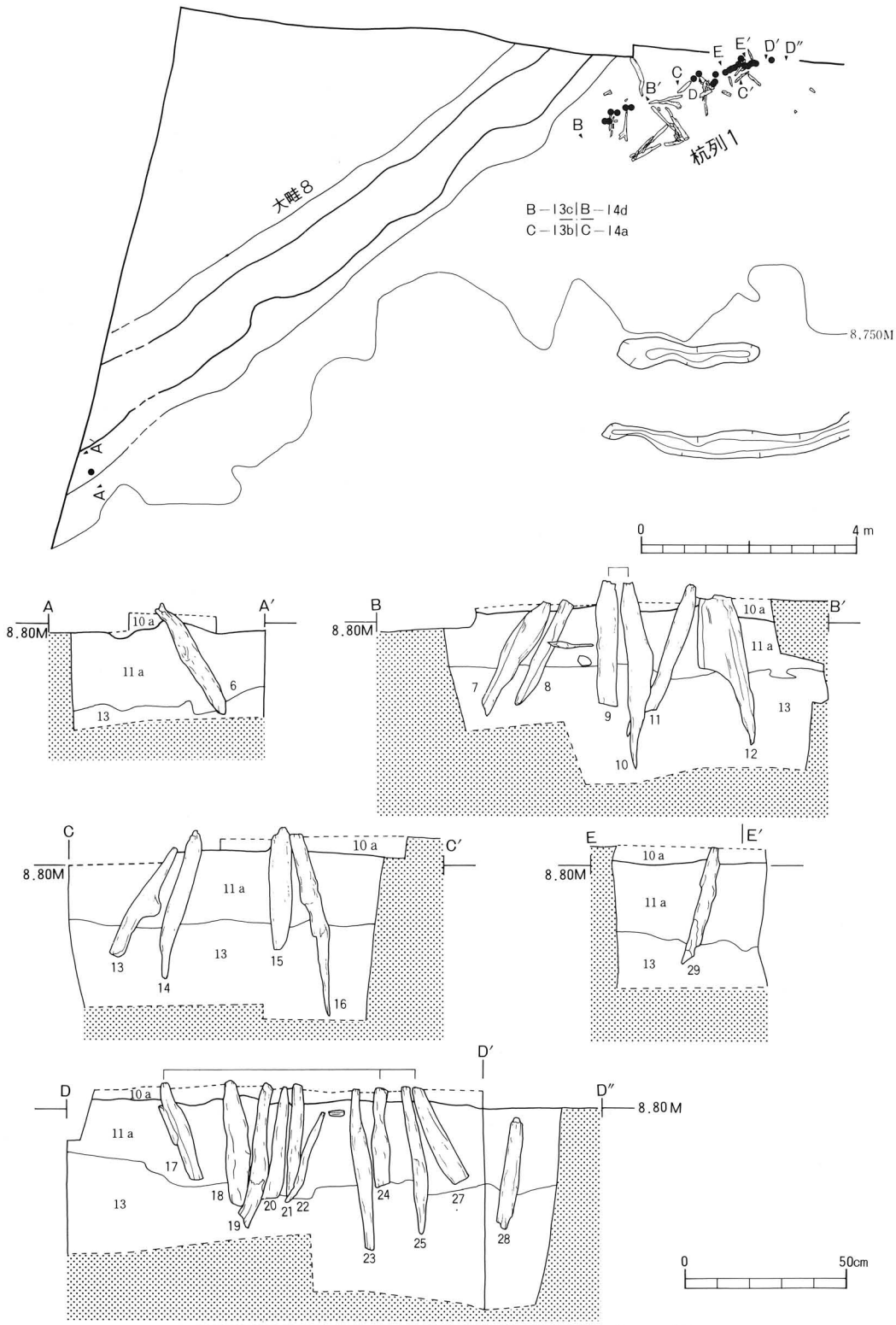
杭40（第128図）：杭40はV区中央部B－16グリッドに位置する。11a層上面で検出された。杭40は打ち込み杭である。素材は分割材で、先端の加工はなされていない。残存長は4.8cmで、樹種はクリである。

c．水田面の標高・地形：水田面の標高は8.5～8.86mで、北東方向に高くD－14グリッド付近が最も低い。等高線をみるとD－14bグリッドからB－15dグリッドにかけて大畦7の西側に沿って谷状の地形がみられる。V区西半部の20地点によるボーリング調査の結果では、北北東方向に伸びるこの谷状の地形はほぼ同じ位置で砂礫層上面においてもみられる。(また前述のようにV区東半部の深掘りにおいては同様の方向を示す砂礫層上面の高まりが確認されている。)このことは砂礫層上面の起伏が11a層上面においても認められることを意味する。

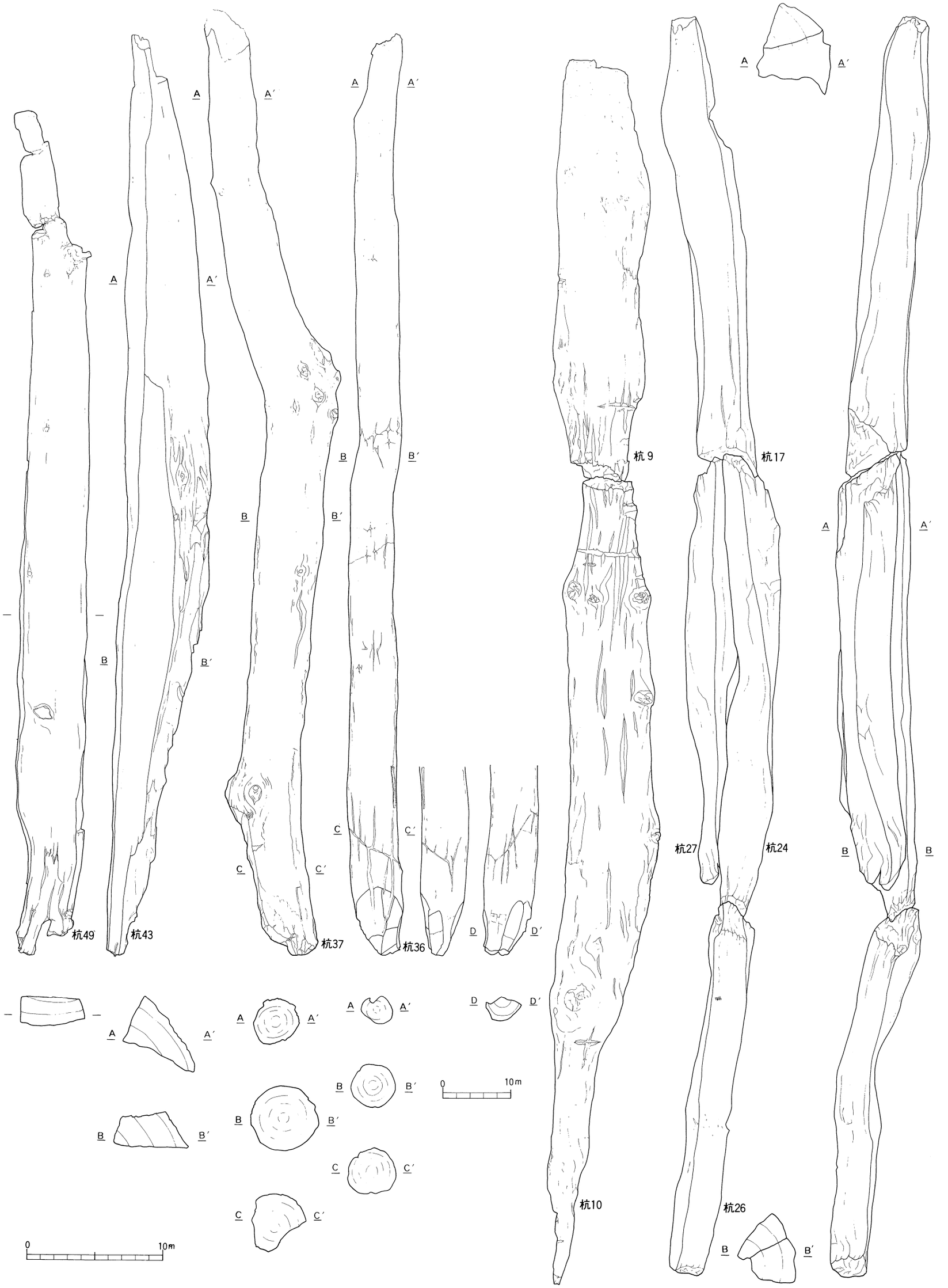
d．出土遺物：遺物は弥生土器1点（第129図1）、弥生土器片2点（第129図2・3）、石器1点（第129図4）が出土している。

第129図1（写真160・162・163・345-4）：第129図1はC-16グリッド中央部・C-17bグリッド、C18a・bグリッドの中央部の3地点から出土した弥生土器片407点が接合したものである。出土層位は3地点とも11a層中である。C－16グリッドからは8点の破片が出土、東西1.7m、南北2.8mの範囲に分布、C－17グリッドでは大畦6の中から243点の破片が出土、東西1.7m、南北1.0mの範囲に分布し、大半は東西・南北30cmの範囲の中に集中して出土している。またC－18グリッドからは156点が出土、東西2.0m、南北2.2mの範囲に分布している。残存状況は全体の約2/3である。器形は体部上半に最大径をもち、肩部が張り、頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部がやや外傾する壺である。器高36.0m、口径10.7cm、底径10.8cm、体部の最大径は33.8cmを測る。器厚は口縁部から頸部にかけては5 mm、体部は5～6 mm、底部は6～7 mmである。容積9.12lである。地文は体部に単節LR縄文が施文されているが下端部は無文である。口唇部には単節LR縄文が施文されており、口唇直下に幅1.5mm程の浅い沈線文が横方向に施文されている。器面の調整は、口縁部から頸部にかけての内外面、体下端部にはミガキがなされている。底部には木葉痕がみられる。また底部は焼成後、外面から穿孔されている。3地点から出土した破片と部位の関係については、C－16グリッドからは口縁部の一部と底部から体下端部の一部の破片が出土、C－17グリッド・C－18グリッドからは他の部分が出土している。

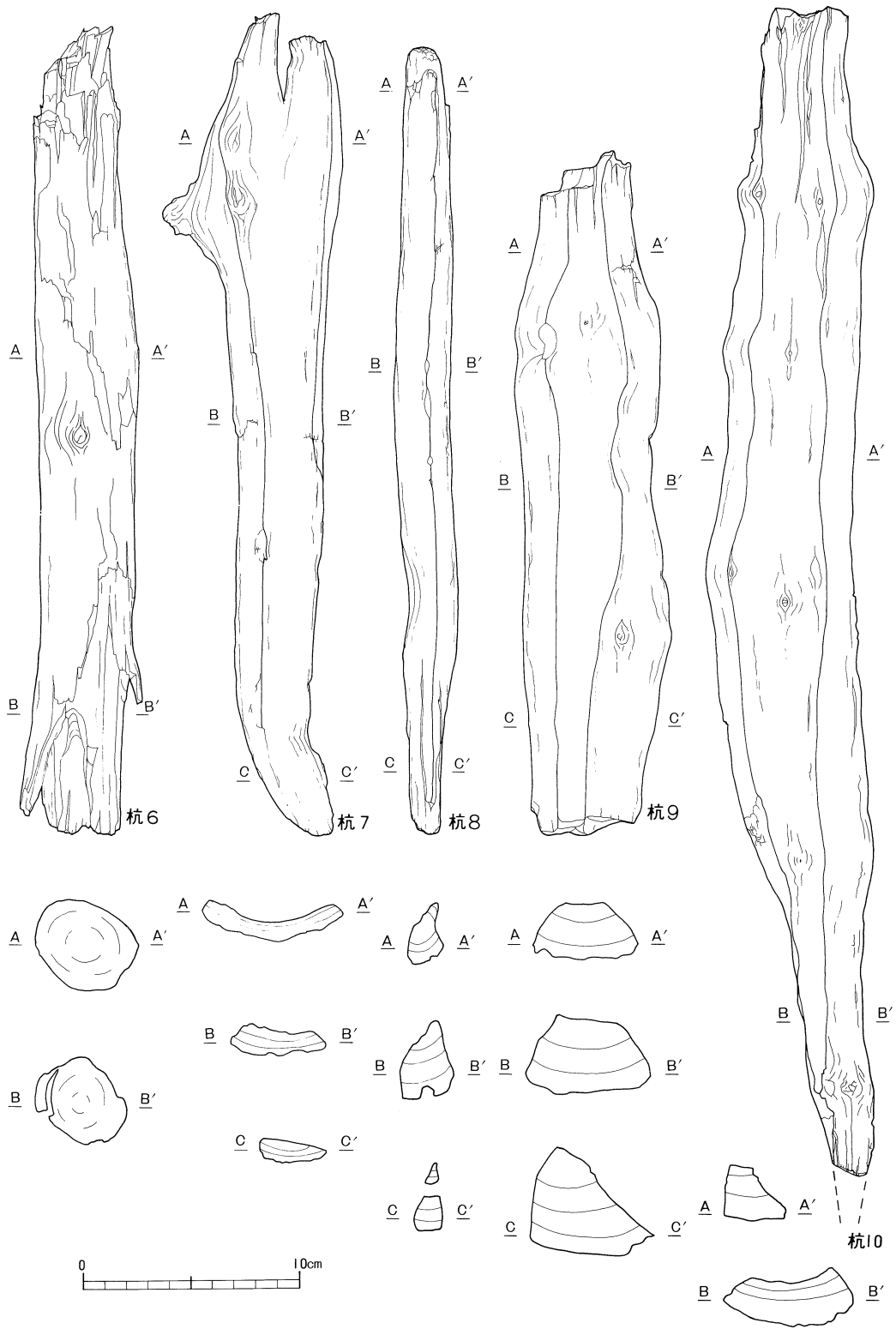
第129図3（写真161・345-3）：C－16cグリッド11a層上面から出土した弥生土器の破片である。出土位置は大畦6の下端付近である。器形は鉢であろうか。地文は単節LR縄文であり、幅1～1.5mmの沈線により変形工字文が施文された後、部分的に地文が擦り消されている。器厚5 mmを測る。



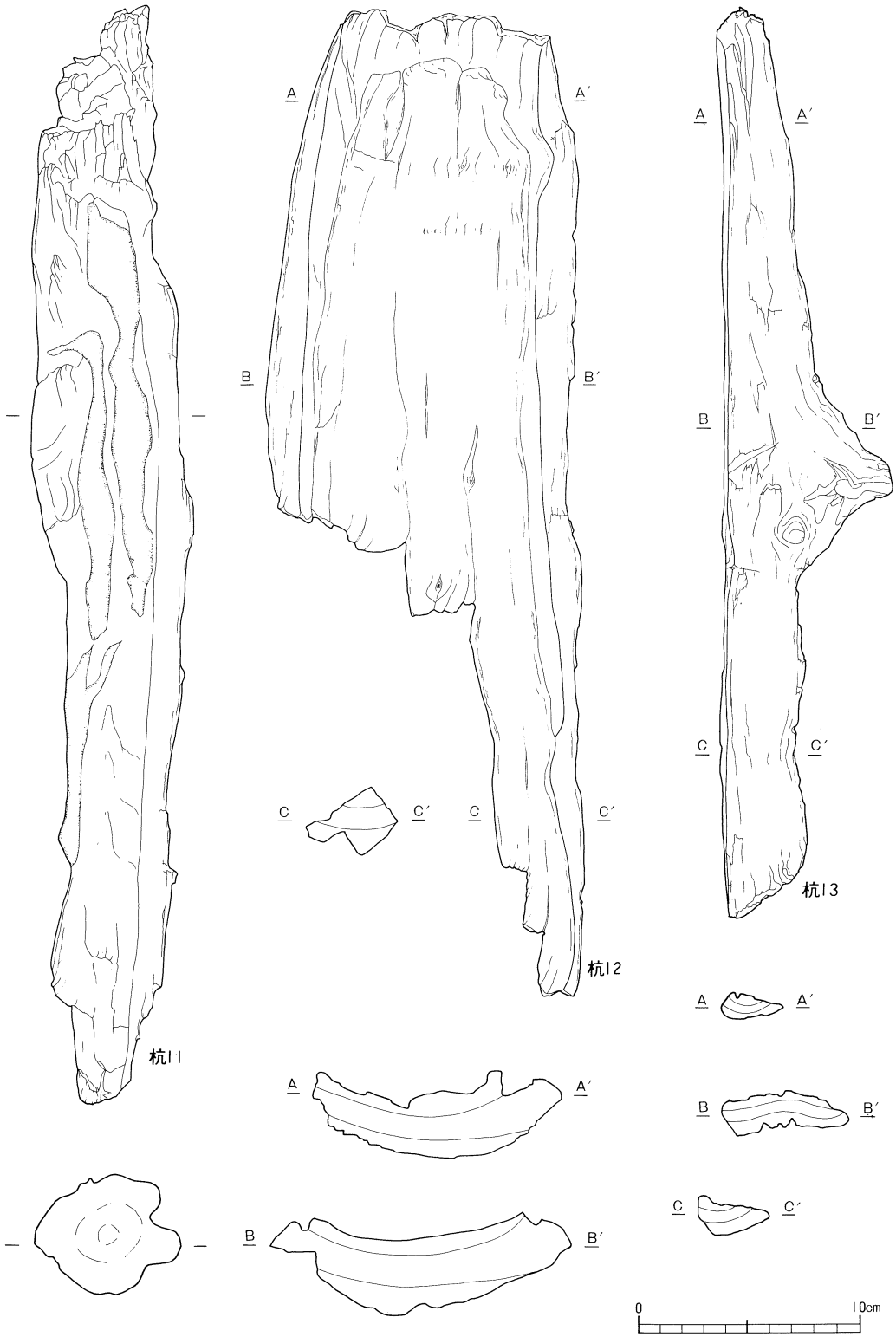
第120図　Ⅴ区Ⅱa層上面杭列1平面図・セクション図



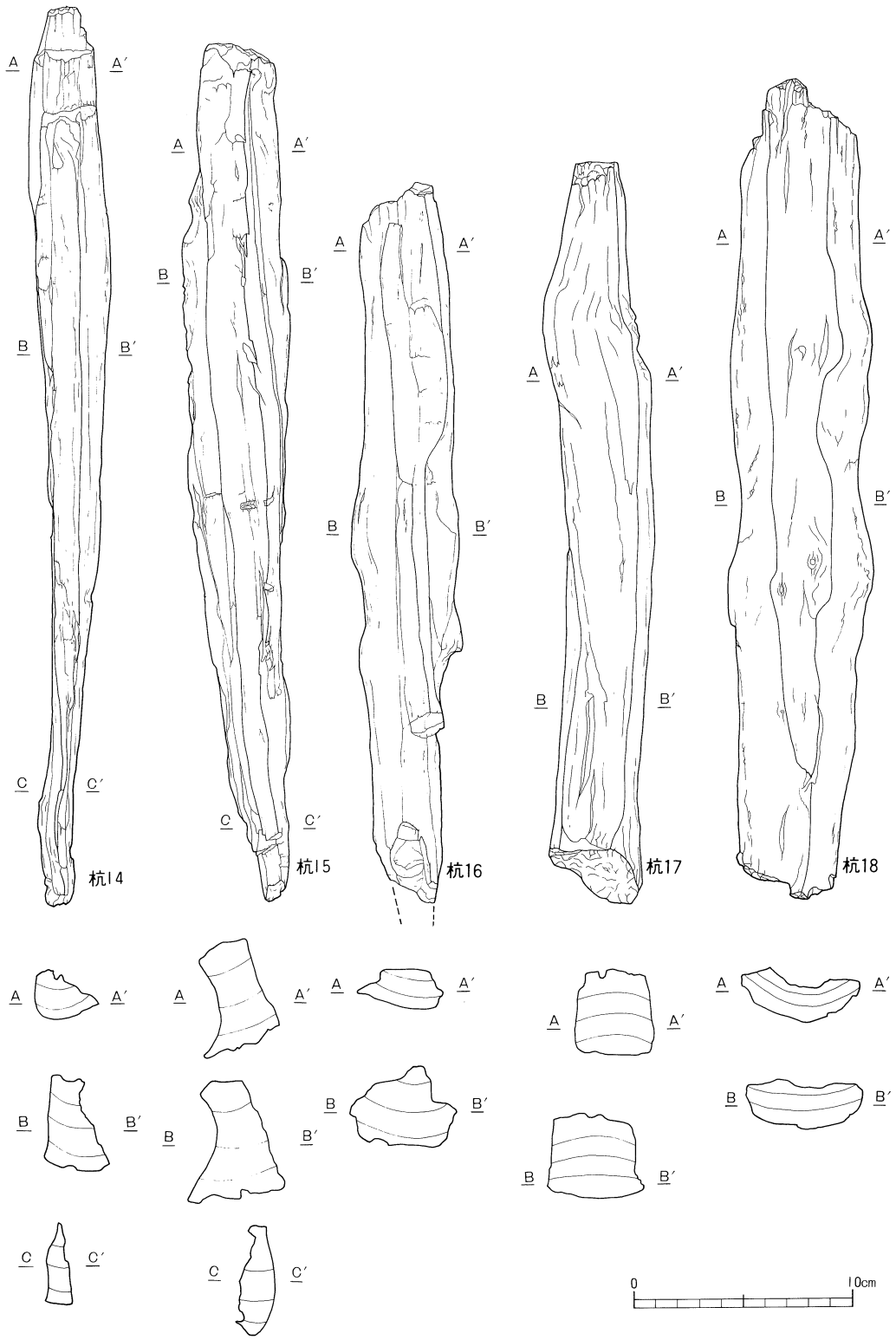
第121図　Ⅴ区杭列１・杭列２、Ⅶ区杭列３杭実測図



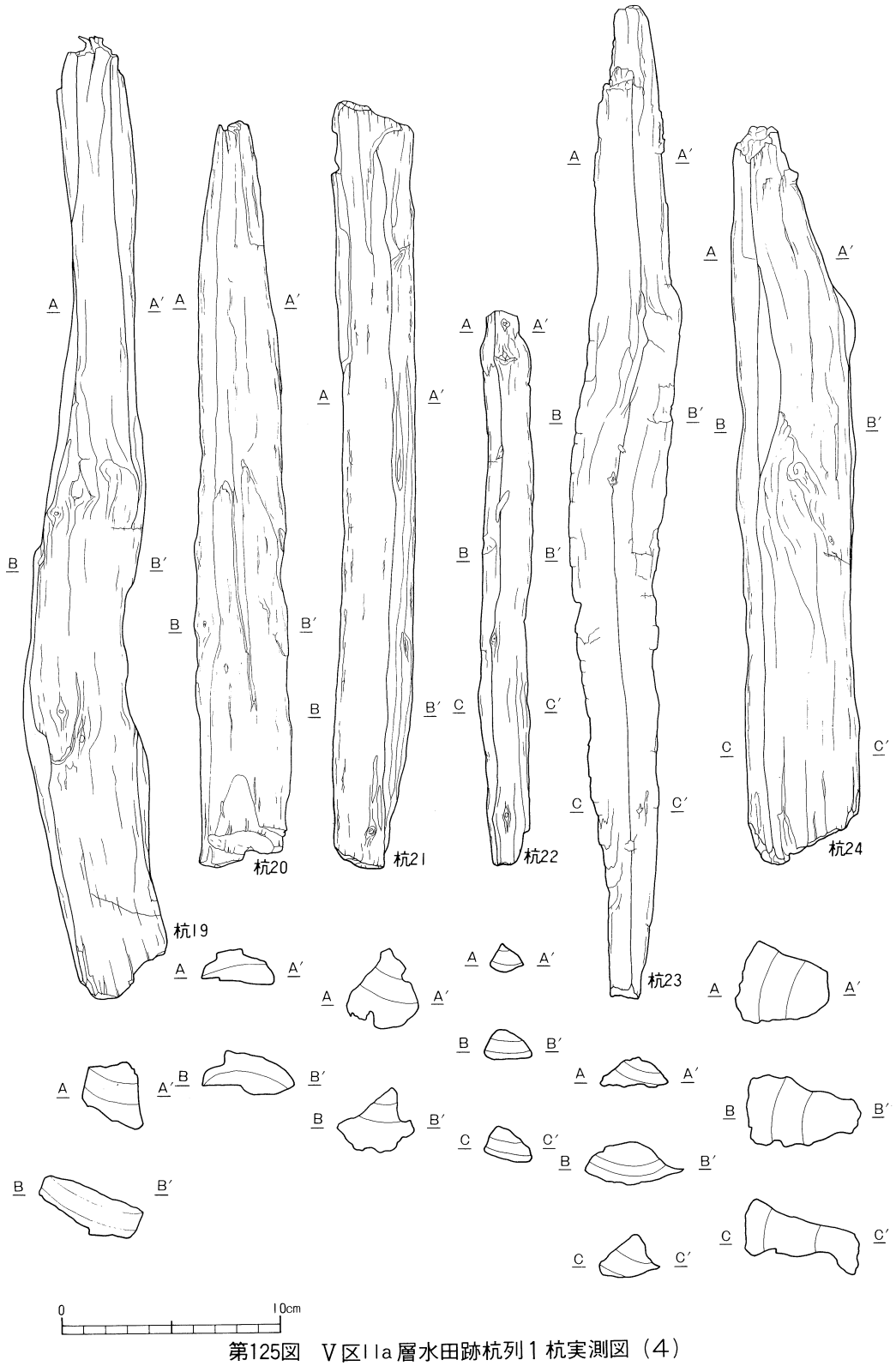
第122図　Ⅴ区Ⅱa層水田跡杭列1 杭実測図（1）



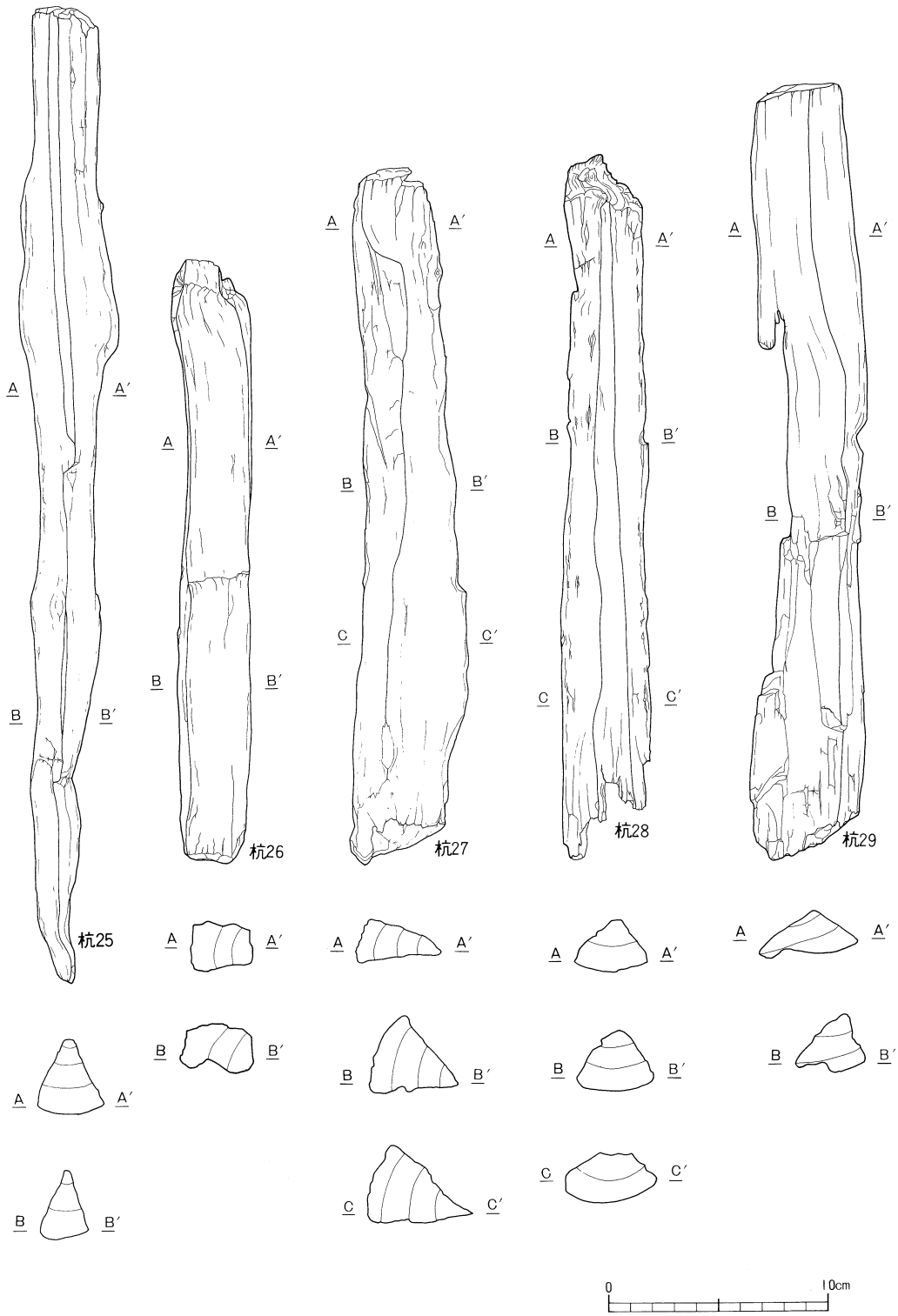
第123図　Ⅴ区11a層水田跡杭列1杭実測図（2）



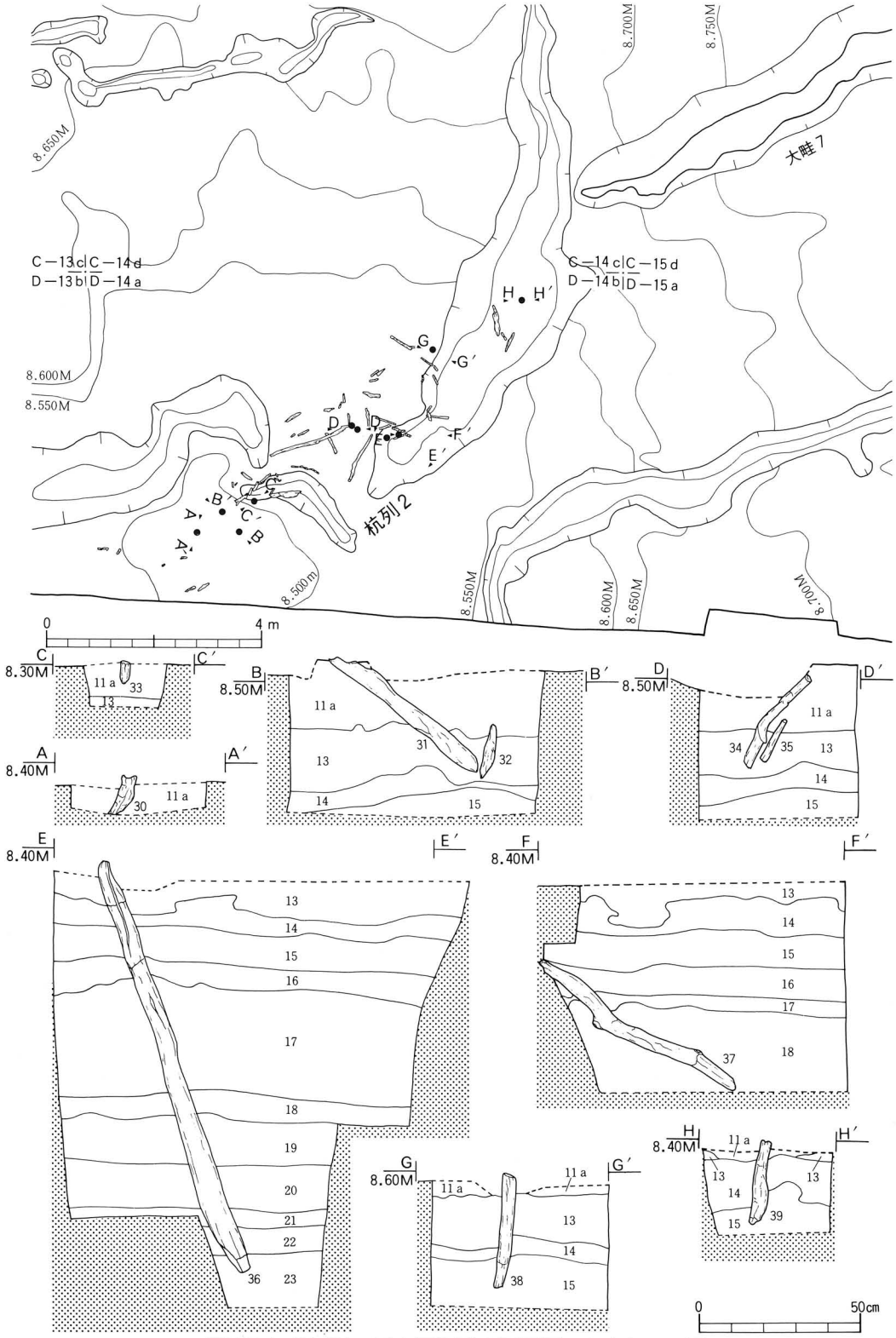
第124図　Ⅴ区Ⅱa層水田跡杭列1 杭実測図（3）



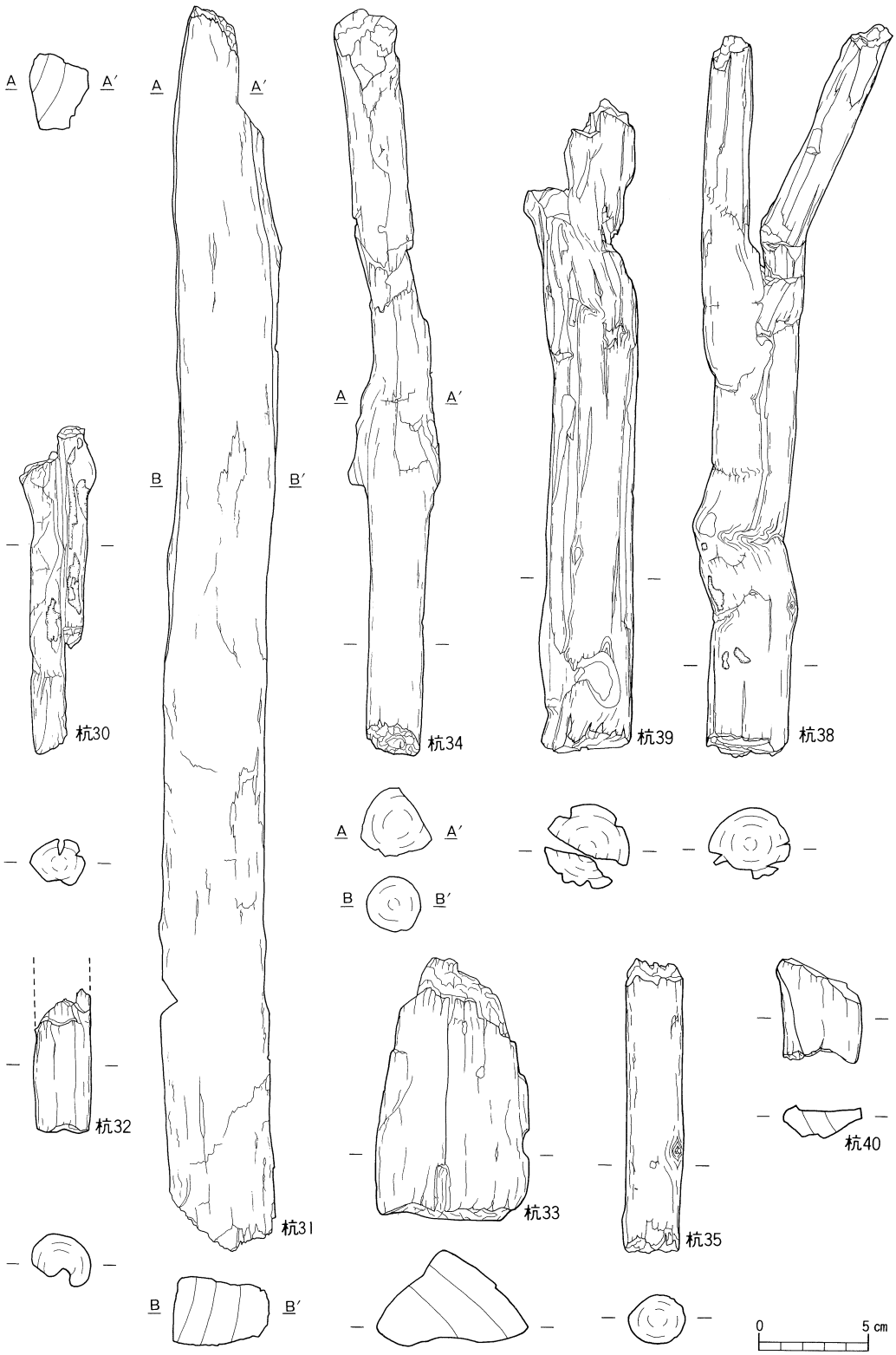
第125図　Ⅴ区Ⅱa層水田跡杭列1 杭実測図（4）



第126図　Ⅴ区11ａ層水田跡杭列１杭実測図（５）



第127図　Ⅴ区11ａ層上面杭列２平面図・セクション図



第128図　Ⅴ区11ａ層水田跡杭列２　杭実測図（１）

第129図２（写真345-2）：Ｄ－16bグリッド11a層中から出土した弥生土器の破片である。出土位置は大畦６の下端付近である。地文は単節LR縄文であり、器厚４mmを測る。

第129図４（写真351-1）：Ｄ－18a・bグリッド中央部11a層中から出土した微細剥離痕のある石器である。出土位置は第129図１のＣ－18a・bグリッドの分布範囲の中にあり、第129図１の破片とともに出土している。素材は剥片である。表面右側縁と末端部に微細剥離痕が、また表面右側縁と裏面左側縁に部分的に光沢痕が認められる。石質は流紋岩である。

ｅ．水田面の状態：Ｂ・Ｃ・Ｄ－13～15グリッドでは、11a層の最上部に植物遺体を多く含む部分が第119図にスクリーントーンで示した範囲で確認されている。この範囲内においては11a層は等高線に沿った長軸をもつ楕円形及び長楕円形の範囲で残存している。これはこの範囲がＶ区でも最も標高の低い部分であることから、ある種の植物によって11a層が変化した可能性を考えることもできる。またこの範囲には小さな溝状の落ち込みもみられており、これは谷状の地形に起因するものかもしれない。

ＳＤ１（第130図、写真164・165・166）：ＳＤ１はＣ・Ｄ－21グリッドに位置する。11a層水田跡大畦３と重複関係があり、ＳＤ１は大畦３より新しい。検出長は19mである。方向性は北半部では弧状を呈するが南半部は直線的である。断面形はゆるやかな弧状をなしている。上端幅68～135cm、下端幅15～35cm、深さ12～20cmで、南半部の方が深い。底面の標高は、北端部で8.70m、中央部で8.65m、南端部で8.63mで、北方に高く南方に低い。埋土は基本層10a層を主体としており、自然堆積により埋まったものと考えられる。遺物は出土していない。

⑷　Ⅵ区の調査

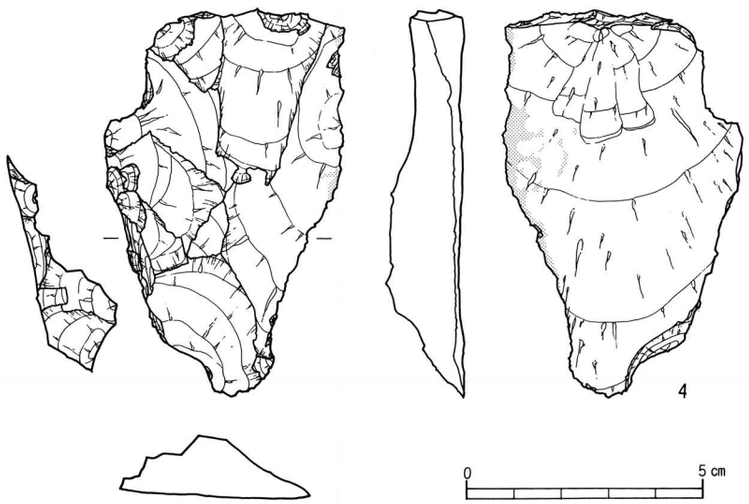
①11a層水田跡（第131図、写真167・168）

ｉ）水田の構成：11a層水田跡では大畦１条（大畦９）が検出され、その他には水田耕作に関わる遺構は検出されていない。

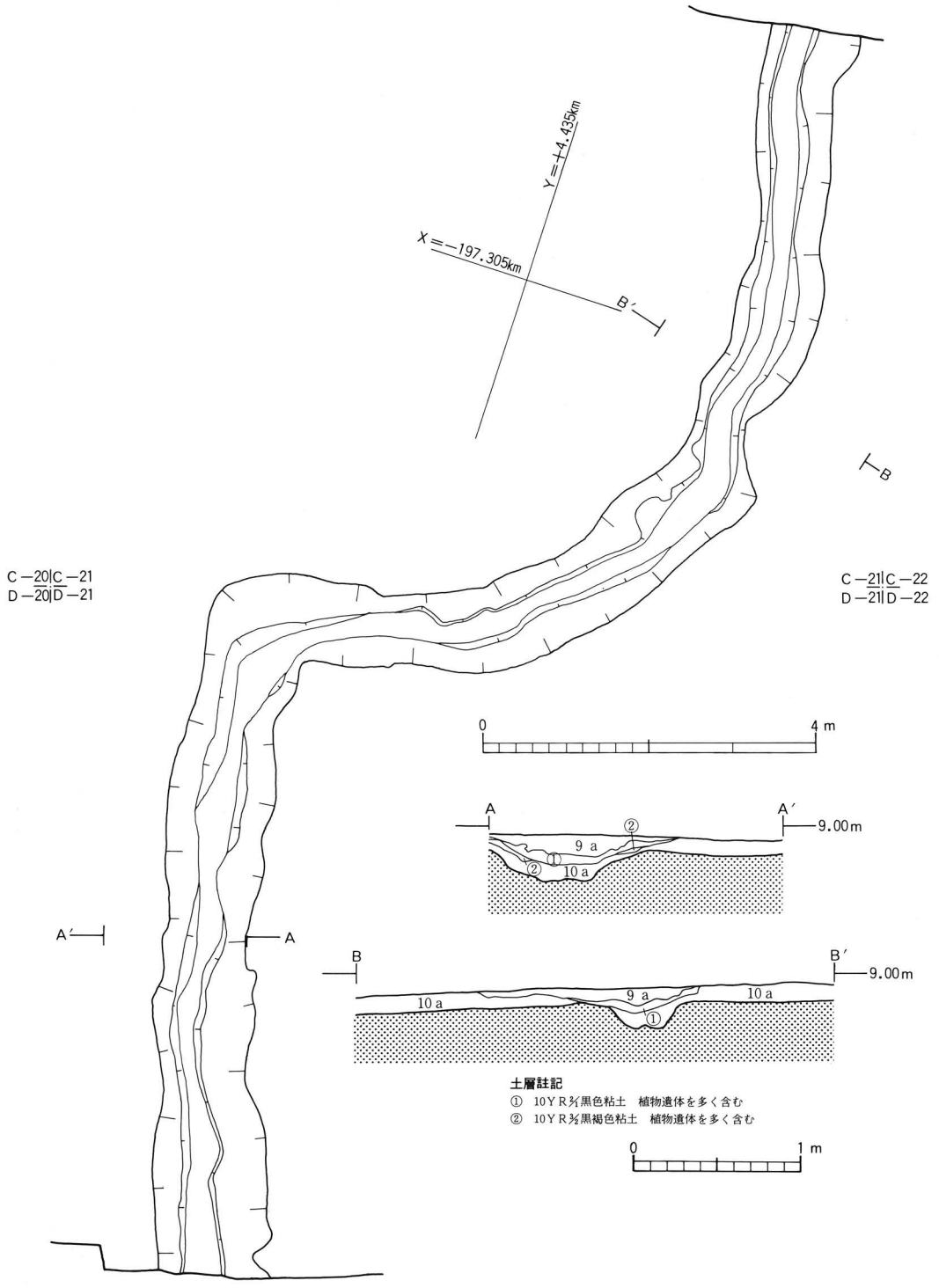
ａ．大畦９：大畦９は周囲の土を盛って作られている土盛り畦畔である。12層水田跡の大畦のほぼ直上の位置に作られている。方向性はＮ－56°－Ｗで、調査区の南から西北に8.70mにわたって検出されている。断面形は扁平な台形状を呈する。水田面との比高差は、東側で3.2～10.9cm、西側で5.5～9.0cmである。上端幅99～152cm、下端幅は154～181cmを測る。

ｂ．水田の標高・地形：11a層上面の標高は最も高い所で8.66m、最も低い所で8.50mである。水田面の標高は最も高い所で8.60m、最も低い所で8.50mであり、地形は調査区の中央が最も低く、調査区全体としては北東方向に向かって傾斜している。

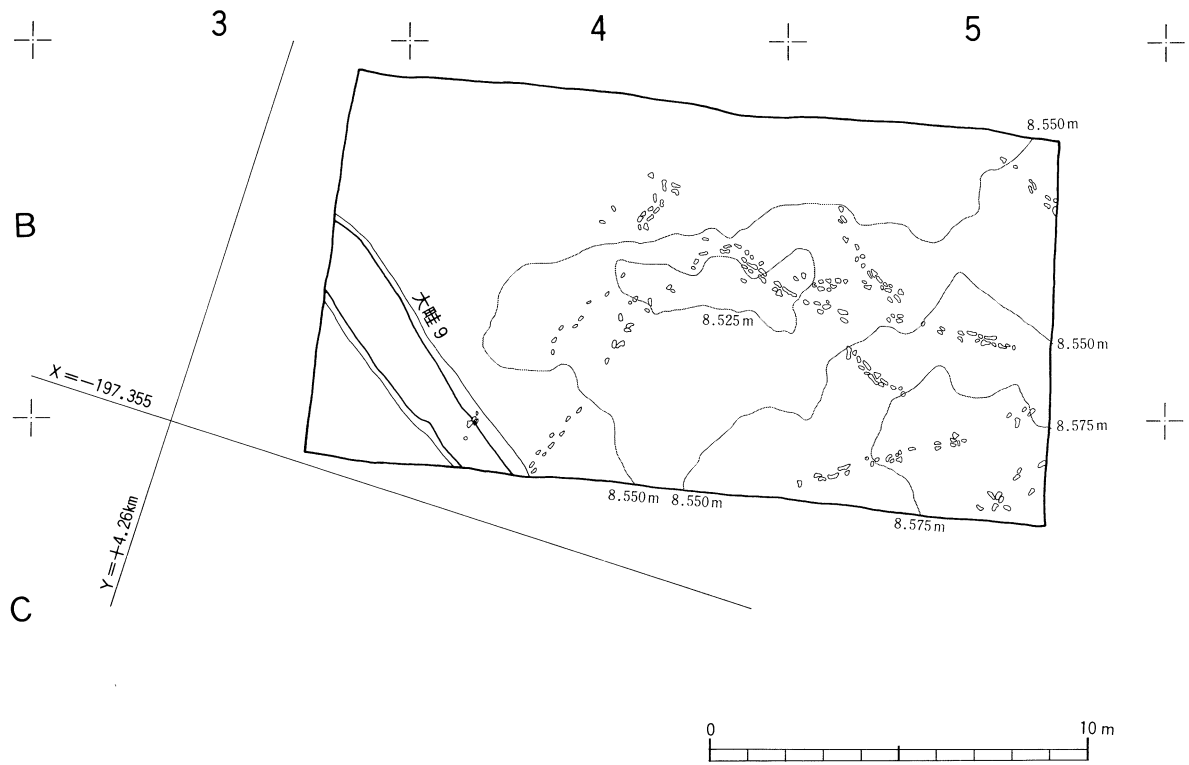
ⅱ）水田面に残された足跡：10b層を除去し、11a層上面を検出した段階で、調査中の中央部から南にかけて足跡を検出している。足跡は約210個検出されており、その規模・形状は長さ15～30cm、幅５～14cm、深さ１～６cmの人足形又は細長い楕円形のものが大多数であり、直径５



第129図　Ⅴ区11ａ層出土遺物実測図



第130図　Ⅴ区11ａ層上面ＳＤ１平面図・セクション図



第131図　Ⅵ区11ａ層水田跡平面図

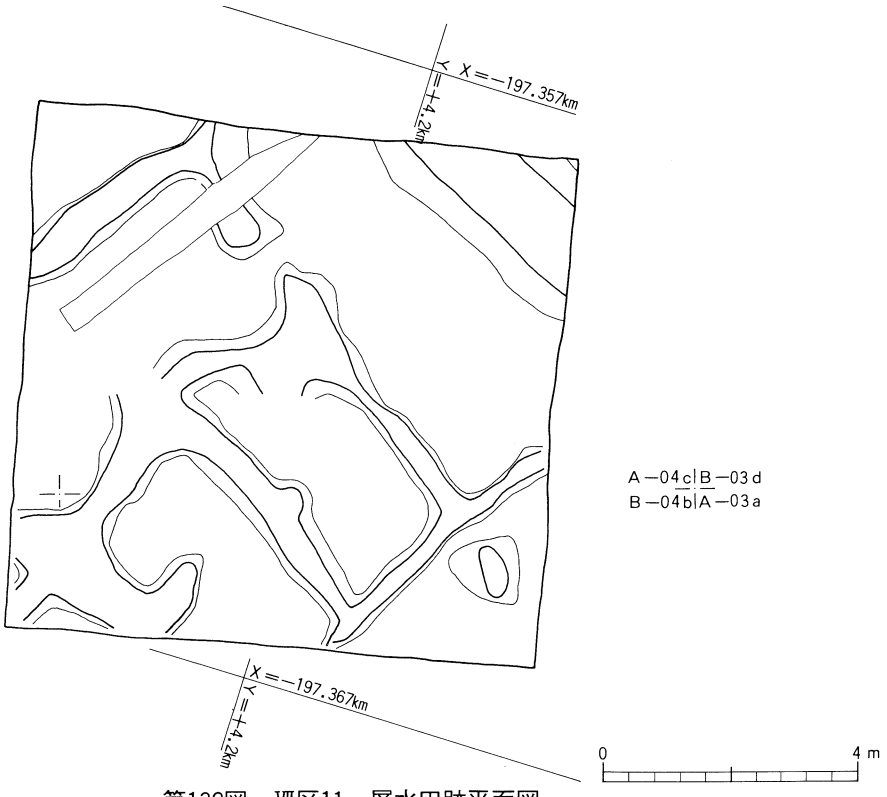
～17cmの円形プランとなって確認されたものもある。人足形のものは、その形状・規模から見て人間の足跡ではないかと想定される。足跡は全て11a層水田面を覆った10a層により埋まっており、人足形のものは10a層を掘り上げると親指と他の指とを区別することができるものもある。円形状のものは大きさはまちまちであり、掘り上げた後の形状からは動物を想定することはできない。足跡は大畦上でも検出されているが、そのほとんどは、水田面である。足跡の分布は方向性を持ち、幾つかが連続しているものが数列ある。足跡の中で連続しているものは、足の向きが判るものが多く、歩行方向を特定することができる。この内大畦の付近から始まる足跡は、北進し調査区の中央で東に折れB－5グリッドに至る。この北側を逆進するものもあるが、途中で切れるために歩行経路を完全に把握することはできない。

⑸ **Ⅶ区の調査**

①11a層水田跡（第132図、写真169～172）

ⅰ）**水田の構成**：11a層水田跡では大畦1条（大畦10）と小畦により区画された水田10枚を検出している。各水田は①～⑩の番号によって示した。

a．大畦10：大畦10は調査区の北東隅で1条検出されている。方向はN－66°－Wで、検出長は4.17mである。その上端幅は1.11～1.17m、下端幅は約2mを測り、断面形は扁平な台形状



第132図　Ⅶ区11a層水田跡平面図

を呈する。水田面との比高差は西側で3.9～8.9mである。

b．小畦：小畦の方向は大畦に直交あるいは平行である。上端幅は20～100cm、下端幅は40～120cmを測る。水田面との比高差は1～2cmが大半であり、比高差が大きい部分でも4～7cmである。

c．区画：水田は10枚確認されているが、面積と平面形が確定できるものは水田④のみで、その面積は約5.4m²である。

d．水田面の標高：水田面の標高はほぼ8.4mであるが、水田①がやや高く、水田⑤、⑥がやや低くなる傾向にある。

⑹　11a層水田跡について

11a層水田跡はIV～VII区において検出された。この水田跡は大畦・小畦・それにより区画された水田、杭列・杭などにより構成されており、各大畦には等高線と直交あるいは平行する傾向がみられるが、VII区を除き水田一区画については明らかではない。水田跡の所属時期については、IV区大畦2上面出土の第117図1、V区大畦6及びその東西2地点から出土している第129図1、V区大畦6西側出土の第129図3が桝形囲式土器の範疇に入ることから、この時期に所属するものと考えられる。

6．10b層の調査

⑴　10b層の分布・土性

10b層はVI区においてのみ確認されている。この層は、層厚が5～10cmの泥炭質粘土層Aで、弥生時代の水田土壌である。上面はほぼ平坦である。層相は5Y3/1オリーブ黒色粘土である。

⑵　10b層上面の標高と地形

10b層上面の標高は8.52～8.56mである。

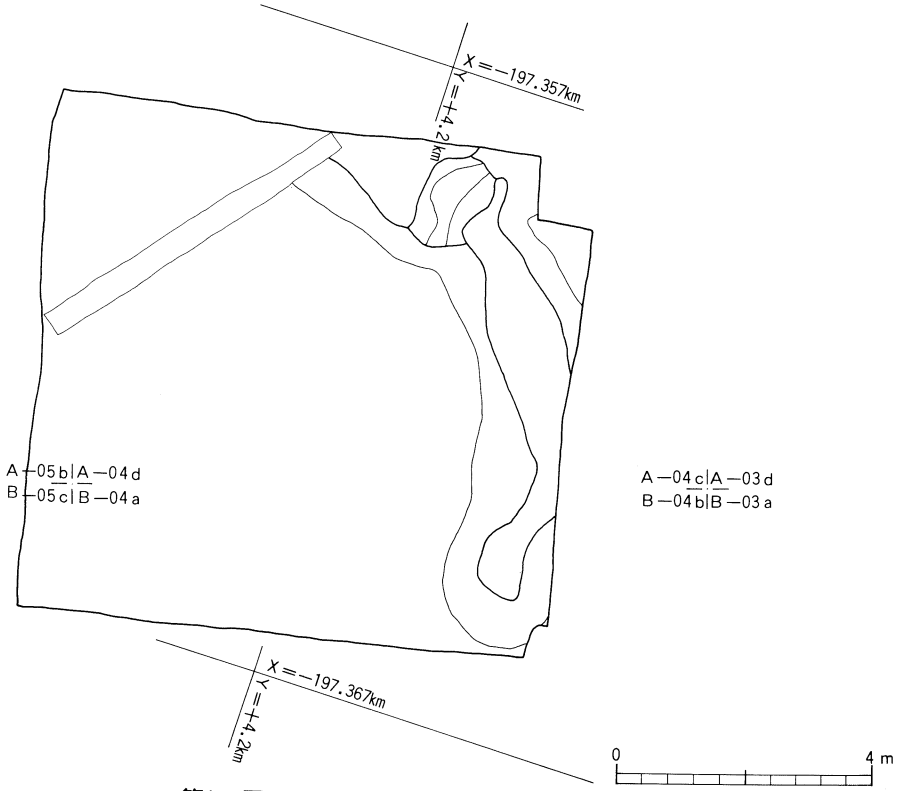
⑶　検出遺構と出土遺物

10a層上面で水田跡が検出されたほか、石器1点が出土している。

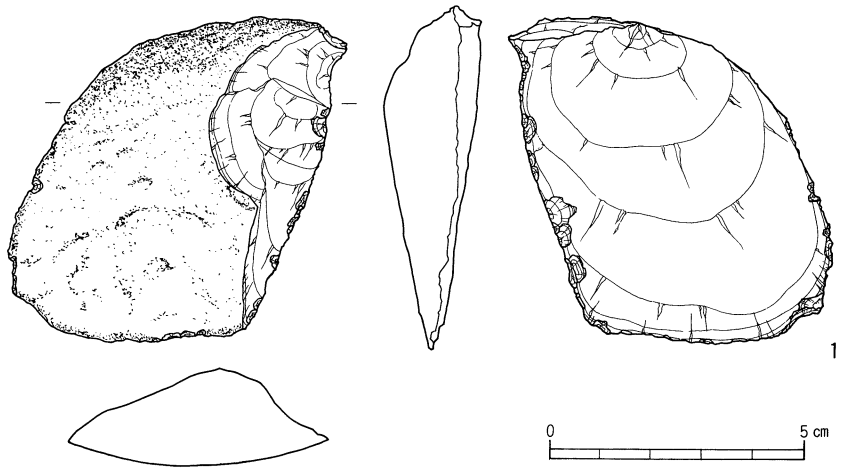
①10b層水田跡（第133図・写真173・174・176）：10a層を薄くけずっていく過程で10b層が調査区の東側に帯状に走るプランを確認し、10a層を除去することにより畦畔を1条検出した。畦畔の方向性はN－37°－Wで、8.82mにわたり検出されており、上端幅42～113cm、下端幅164～182cmを測る。水田面との比高差は西側で5.6～2.2cm、東側で3.3～2.5cmである。畦畔の北端部に水口状の凹部が確認されたが水口かどうかは不明である。

②出土遺物：VII区南壁際ほぼ中央の10b層中から石器1点（第134図1）が出土している。

第134図1（写真176・351-2）：微細剝離痕のある石器である。素材は剝片である。表面左右両側縁、末端に微細剝離痕が認められる。また表面には自然面を残している。石質は流紋岩である。



第133図　Ⅶ区10ｂ層水田跡平面図



第134図　Ⅶ区10ｂ層出土遺物実測図

7．10a 層の調査

(1)　調査概要

①10a 層の分布・土性：10a 層はⅣ区以西Ⅶ区まで調査区全域に分布する。層厚はⅣ区からⅥ区にかけてのＤ−29グリッドからＤ−21グリッドでは 8 〜15cm で、Ⅴ区Ｄ−13グリッドからⅥ

区にかけては15～20cm Ⅶ区では10～15cm である。この層は泥炭質粘土層Bであり、V区では10YR7/2 にぶい黄燈色粘土・10YR3/1 黒褐色粘土・黒色粘土が互層になっており、Ⅵ区では2.5Y5/2暗灰黄色粘土・10YR1.7/1 黒色粘土が互層になっている。層相変化としては、Ⅳ区において粘性が強く、西方へいくにつれて弱くなる傾向がある。また層全体の色調は東方へいくにつれて明るくなる。

②10a 層上面の標高・地形：10a 層上面の標高はⅣ区東南部D－29・30グリッドで9.13～8.98m、V区D－20・21グリッドで8.98～8.85m、D－13・14グリッドで8.85～8.68m、VE区で8.92～8.81m、Ⅵ区で8.80～8.70m、Ⅶ区で8.59～8.45m と、V区において若干の起伏は認められるが、全体としては東方に高く西方に低い傾向がある。

③検出遺構と出土遺物：遺構は10a 層上面においてⅣ区で溝跡１条（ＳＤ２）が検出されている。遺物はＳＤ２の埋土中から弥生土器１点、石器１点が出土している。

⑵　Ⅳ区の調査

①ＳＤ２（第135～138図・写真175・177～180）：ＳＤ２はⅣ区東部、Ｂ・Ｃ・Ｄ－30グリッドに位置する。10a 層上面で確認された。ＳＤ２はＳＤ４及びＳＤ５により北部・中央部から南半部にかけて削平を受けている。ＳＤ２の方向性は東方へ張り出す弧状を呈しており、検出長は約28m である。断面形は極めて緩やかな弧状をなしている。上端幅は2.90～3.80m、下端幅は1.62～2.34m である。深さは30cm 程であり、底面の標高は北部で8.79m、中央部で8.74m と北方に高く南方に低い。底面はほぼ平坦である。埋土は７層認められ、その状況から自然堆積により埋まったものと考えられる。

またＳＤ２の底面のプラン内からは杭が２本（第137図、写真365-1・2）検出されている。共に検出された地点ではＳＤ４の削平によりＳＤ２の底面は残存しておらず、ＳＤ２に伴うか否かは不明である。

出土遺物は、埋土中から弥生土器片１点（第138図１）、石器１点（第138図２）が出土している。

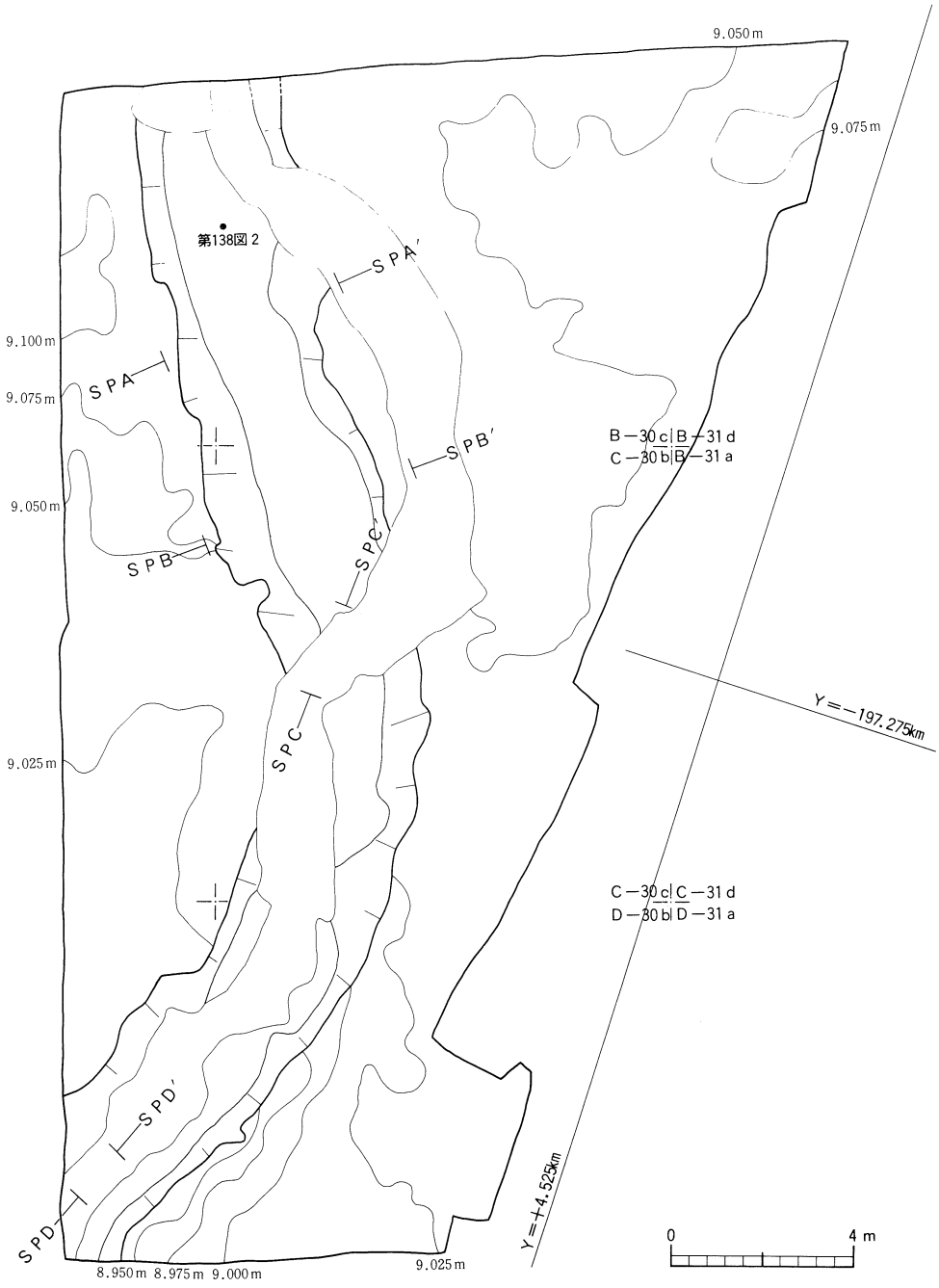
第138図１（写真346-3）：体部破片である。地文は単節LR 縄文で、器厚４ mm を測る。

第138図２（写真351-3）：微細剥離痕のある石器である。素材は剥片である。１側縁に微細剥離痕が、２側縁に折れが認められる。石質は安山岩である。

８．９ａ層の調査

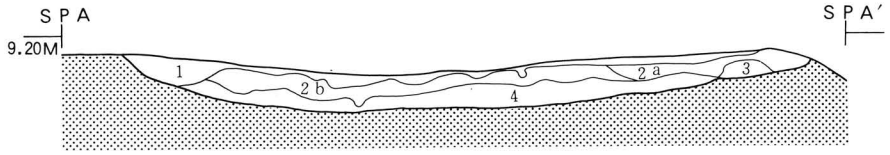
⑴　調査概要

①９ａ層の分布・土性：９ａ層はⅣ区以西Ⅴ区以東とⅦ区に分布する。Ⅵ区には認められない。層厚はⅣ区D－30グリッドで５～10cm、V区D－21グリッドで３～８ cm、D－13グリッドで10～15cm、VE区で５～10cm、Ⅶ区で５～15cm である。この層は泥炭質粘土層Aであり、弥生時代十三塚式期の水田土壌である。９ａ層の上面はほぼ平坦であるが、下面には細かな凹凸



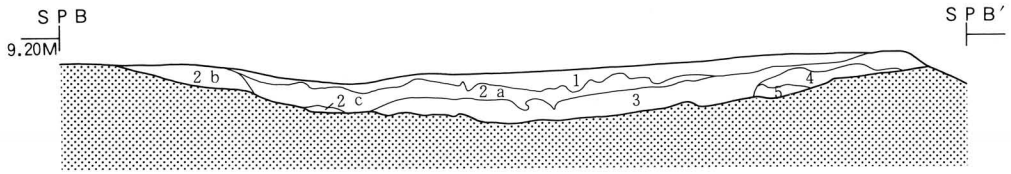
第135図　Ⅳ区10ａ層上面ＳＤ２平面図

がみられる。層相はⅣ区Ｄ－29グリッドでは2.5Ｙ6/2灰黄色粘土、Ⅴ区Ｄ－20グリッドでは10YR6/2 灰黄褐色粘土である。Ⅳ区においてはやや粘性が強いが、あまり層相変化のみられない均質化した層である。



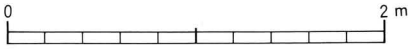
土層註記

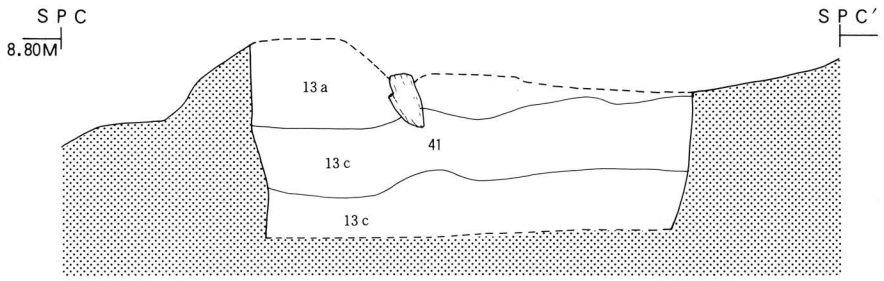
1　10YR⅗灰黄褐色粘土　全体に炭化物を含み、下部は炭化物が互層になっている。
2a　2.5Y⅗暗灰黄色粘土　全体に多量の炭化物を含む。
2b　10YR⅗黒褐色粘土　全体に炭化物を含む、未分解の植物繊維を多く含む、やや泥炭質である。B－B′の2a層と対応。
3　2.5Y⅗灰黄色粘土　少量の炭化物を含む。B－B′の4層と対応。
4　2.5Y⅘黄灰色粘土　全体にまだらに黄灰色土が入り組んでおり炭化物も含む。B－B′の3層と対応。

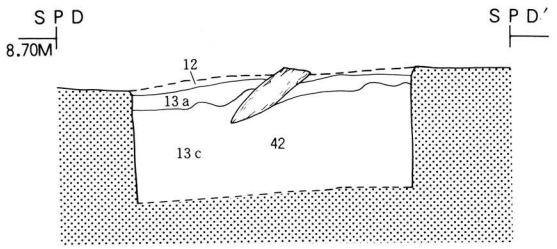


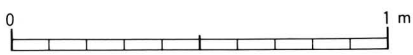
土層註記

1　A－A′の1層と対応。
2a　A－A′の2b層と対応。
2b　5Y⅘灰色粘土　全体に少量の炭化物を含み2cm前後の灰白色土のブロックを含む。
2c　2.5Y⅗暗灰黄色粘土　全体に少量の炭化物を含む。
3　A－A′の4層と対応。
4　A－A′の3層と対応。
5　5Y⅘灰色粘土　全体に多量の炭化物を含む。

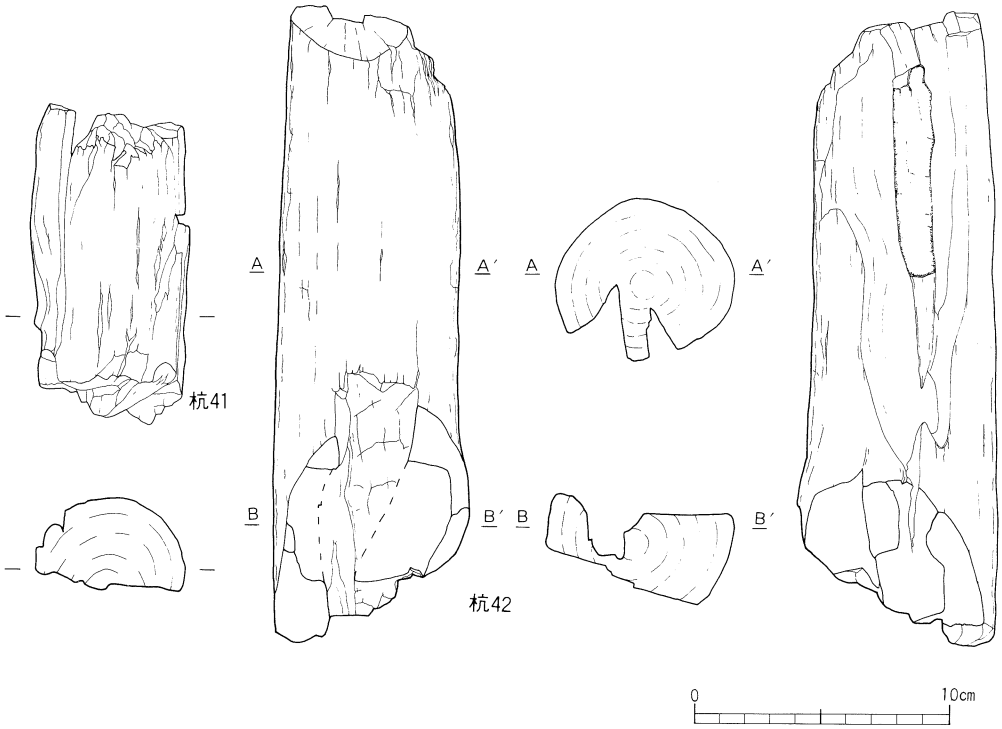




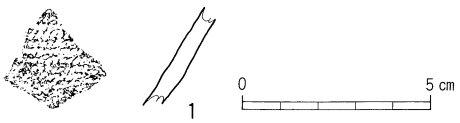


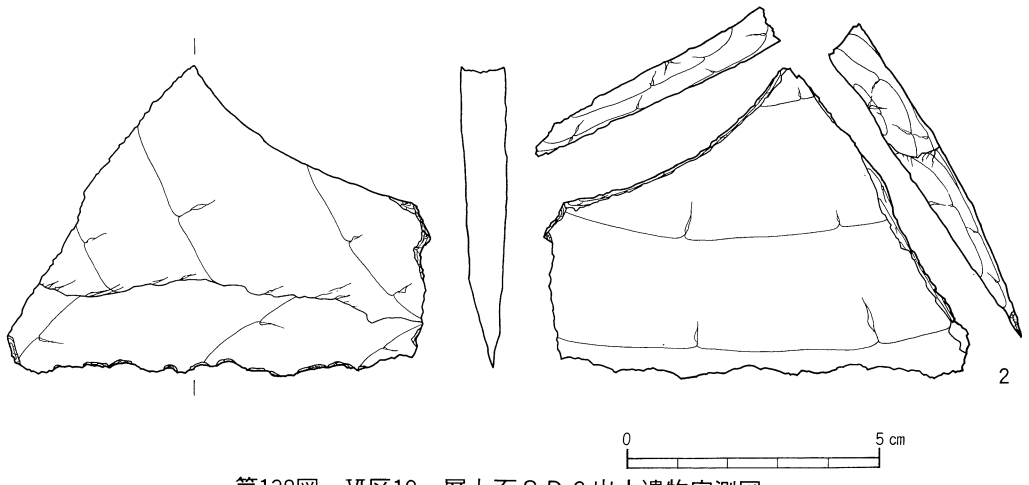


第136図　Ⅳ区10a層上面ＳＤ２セクション図・底面検出杭セクション図



第137図　Ⅳ区10ａ層上面ＳＤ２底面検出杭実測図





第138図　Ⅵ区10ａ層上面ＳＤ２出土遺物実測図

②９ａ層上面の標高：９ａ層上面の標高はⅣ区Ｄ－29･30グリッドで9.10～9.18m、Ｖ区Ｄ20･21グリッドで8.93～9.04m、Ｄ－13･14グリッドで8.85～8.96m、ＶＥ区で8.88～8.96m、Ⅶ区で8.47～8.63mであり、東方へ高く西方に低い。

③検出遺構と出土遺物：Ⅳ区では畦畔は検出されなかったが、10a層上面において溝状遺構（ＳＸ２）が検出されたほか、弥生土器の破片が１点出土している。Ｖ区では水田跡を検出しており、９ａ層中より弥生土器２点、石器２点が出土している。ＶＥ区でも水田跡を検出している。Ⅶ区では10a層上面において溝状遺構（ＳＸ３）を検出しており、ＳＸ３に関連する多量の樹木片が出土している。

⑵　Ⅳ区の調査（第139・140図、写真181・182）

①ＳＸ２：ＳＸ２はⅣ区西部、Ｂ・Ｃ－24･25グリッドに位置する。10a層上面で検出されている。ＳＸ２の方向性はほぼ直線的であり、真北に対しては Ｎ－38°－Ｗ の方向を示す。検出されたＳＸ２の長さは9.2mである。断面形はレンズ状を呈し、壁面の立ち上がりには乱れがみられる。上端幅は1.88～3.30m、下端部0.78～2.24mである。深さは２～10cmであり、底面の標高は北端部で8.58m、中央部で8.51m、南端部で8.71mと底面の標高は一定していない。底面はほぼ平坦であるが、凹凸のみられるところもある。ＳＸ２の溝状になっている所に入っている土壌は９ａ層である。９ａ層は自然堆積層ではなく水田土壌であるため、ＳＸ２の形成は９ａ層の形成以降であり、その性格は９ａ層の水田耕作に関わる何らかの痕跡であることが想定される。

②出土遺物：弥生土器の破片１点（第140図１）が出土している。

第140図１（写真346-4）：Ｂ－29dグリッドにおいて９ａ層中から出土している。体部破片である。地文は単節ＬＲの綾絡縄文で、器厚5mmを測る。

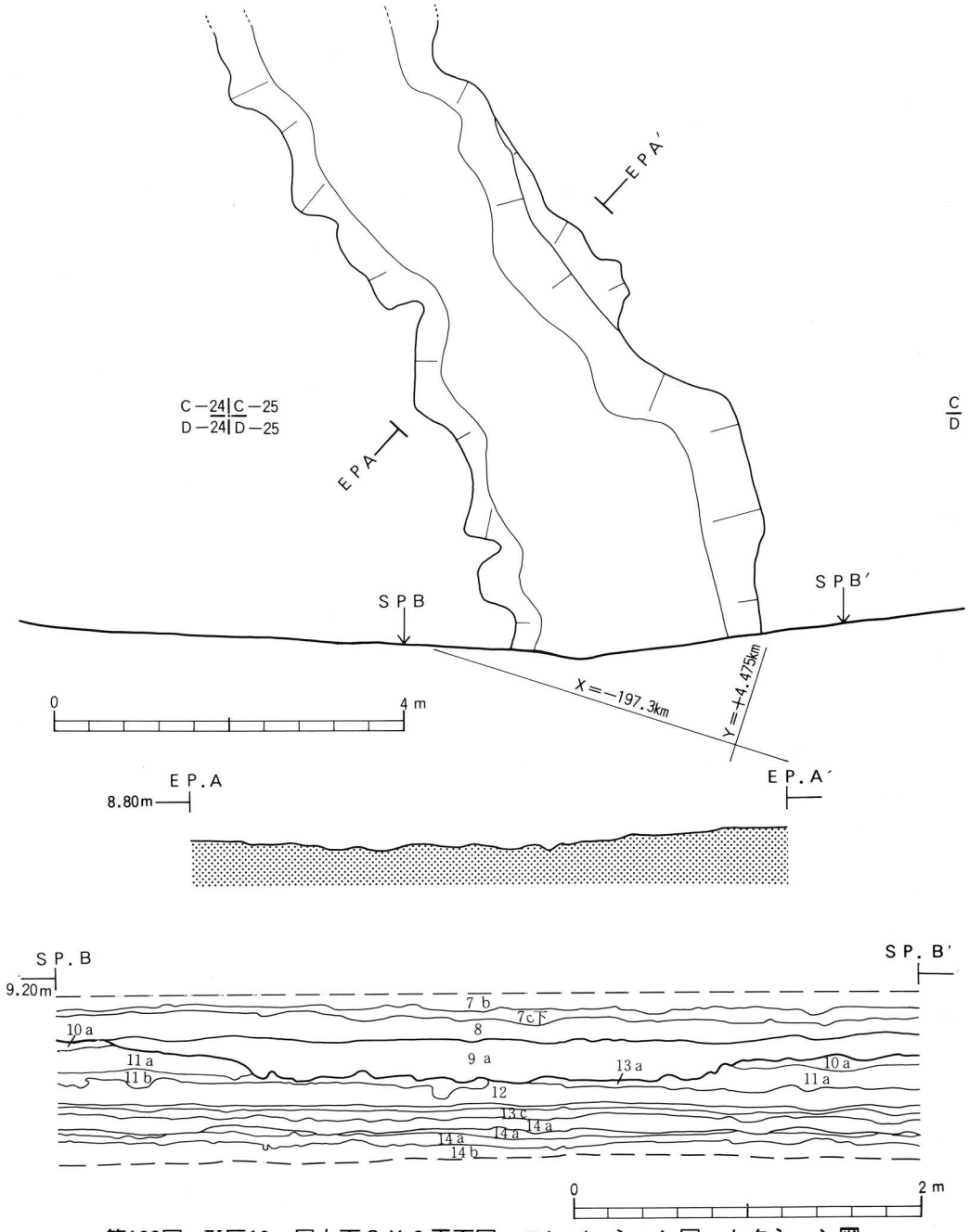
⑶　Ｖ区の調査（第141・142図、写真183～185）

①９ａ層水田跡

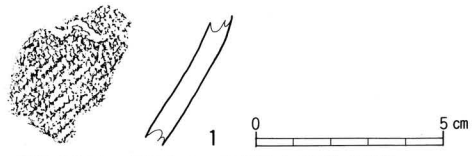
ⅰ）検出状況：９ａ層上面では畦畔は検出されなかったが、９ａ層を薄くけずっていく過程でＶ区東半部のＣ・Ｄ－20･21グリッドにおいて、下層の10a層が帯状に２条走りＴ字形に交わるプランを確認した。９ａ層を除去することによって畦畔状の遺構を検出した。これは10a層が自然堆積層であることが擬似畦畔Ｂであり、第142図のように名称を与えた。（擬似畦畔１・２）

ⅱ）９ａ層上面の標高と地形：９ａ層上面の標高は8.85～9.04mであり、東方に高く西方に低い。

ⅲ）水田の構成：２条の擬似畦畔はＣ－21グリッド南西端部でほぼ直角に交わっており、それぞれの直上に畦畔が存在したものと判断される。擬似畦畔１は、方向Ｎ－63°－Ｗで、11.5mにわたって検出されている。擬似畦畔２は、方向性Ｎ－26°－Ｅで、3.8mにわたって検出されている。



第139図　Ⅳ区10ａ層上面ＳＸ２平面図・エレベーション図・セクション図



第140図　Ⅳ区９ａ層出土遺物拓影

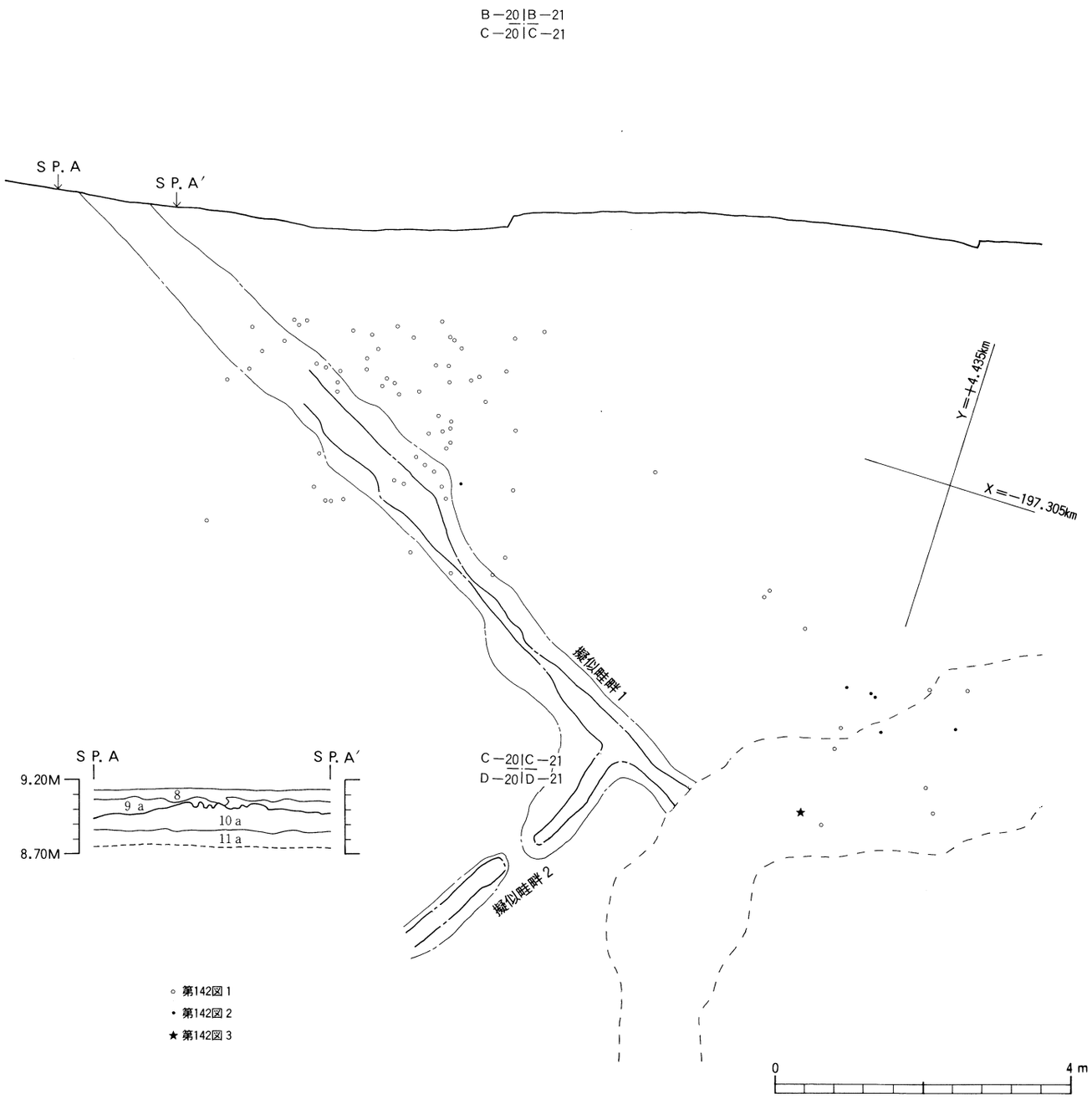
②出土遺物：９ａ層中より弥生土器２点第142図１・２、石器２点第142図３・４が出土している。中でも第142図１・２・３は擬似畦畔１の北半部を中心にやや東方へ分布しており、畦畔との有機的な関連が考えられる。

第142図１（写真185･346-1）：Ｃ－20･21グリッド周辺から76片に割れて一括出土している。第141図に示すように破片の分布域は擬似畦畔１の北半部を中心としている。残存状況は、口縁から体部にかけてやや欠損している部分があるが、ほぼ完形に復元し得た。器形は体部と頸部の境に明瞭な屈曲部をもち、口縁が短く強い外反する広口壺である。頸部は上半でわずかに膨らみをもつがほぼ直線的にやや外傾しており、体部は丸味をもって底部へ至る。器高24.2cm、口径18.5cm、底径７cm、体部の最大径は上半部にあり17.6cmを測る。器厚は口縁部付近で３mm、頸部から体部にかけては５～６mm、底部は６～８mmで中央部が厚い。容積3.09*l*である。地文は体部に無節*l*縄文が施文されているが下端部は無文である。地文施文後、頸部に文様帯が形成される。文様は２本１画の平行沈線で描かれており、沈線間の心心距離は約２mm、沈線の深さは約0.5mmである。文様は第142図1dの文様展開図のように２単位で構成されており、頸部をほぼ２分割する基点Ｘ・Ｙを中心としてそれぞれ左右に文様が展開している。土器の残存状況から頸部全面の文様の施文は把握されないが、基点Ｘから右方向、基点Ｙから左方向への文様施文の順序は第142図1a～1dによって示されるように基点Ｘ－Ｘ′・Ｙ－Ｙ′を基準とする重層山形文を施文、２)そこから左右に２～３条の斜めの平行沈線を施文、さらに重層山形文を施文、３)無文部分へ平行沈線により施文、４)上下に波状の平行沈線を横方向に施文して文様帯を区画している。また底部には７個のイネ籾の圧痕と織布の圧痕が確認された。織布の径糸と経緯の関係は1cm²において径糸12本、緯糸９本であり、径糸に対する緯糸の比率は４：３である。器面・調整は、口縁部外面と口縁～頸部上半の内面には横方向のナデ、頸部下半～体部には斜め方向のナデが施されている。また外面体部上半から口縁にかけて内面口縁～頸部上半にかけて黒斑がみられ、体部内面には炭化物が付着している。

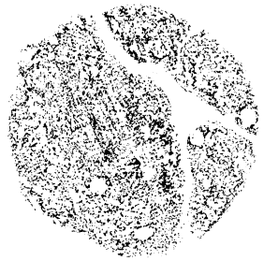
第142図２（写真346-2）：Ｃ－21c･ｄグリッドから６片に割れて一括出土している。第141図に示すように破片の分布域は擬似畦畔１南半部の東側である。器形は頸部がゆるやかに外反する壺である。頸部から口縁部にかけての約1/3が残存している。頸部には*l*の撚糸文が施文されており、口唇には幅１mm程のスリット状の刺突が１～２mm間隔で連続してなされている。推定口径は10.7cmである。器厚は口唇部付近で３mm程、頸部は４～６mmである。調整は内外面に横方向のナデが施されている。外面と内面の口唇部付近に黒斑が認められる。

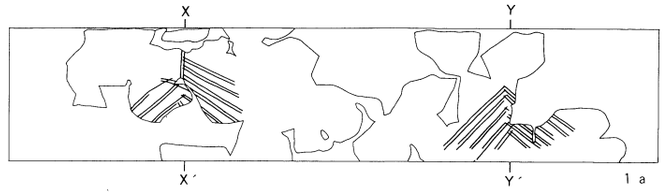
第142図３（写真351-4）：Ｄ－21aグリッド、９層中より出土した剝片である。出土地点は第141図のように擬似畦畔１南半部の東側である。石質は粘板岩である。

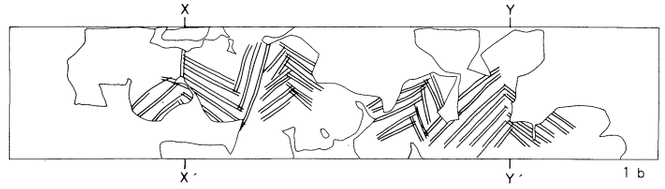
第142図４（写真351-5）：Ｄ－17グリッド、９層中より出土した微細剝離痕のある石器である。

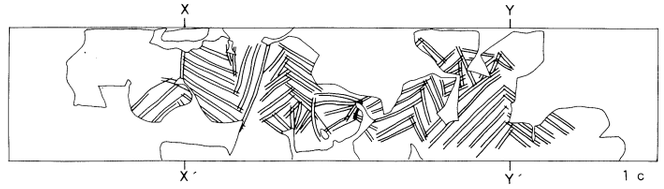


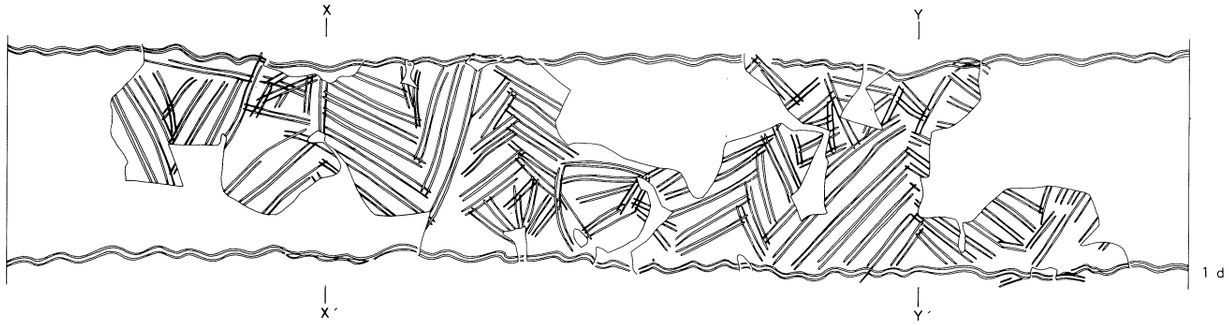
第141図　Ⅴ区９ａ層水田跡平面図・セクション図

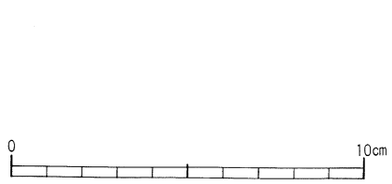


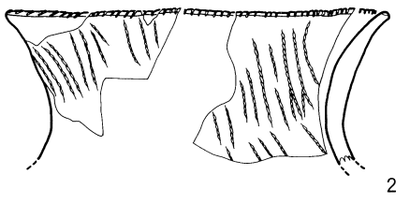


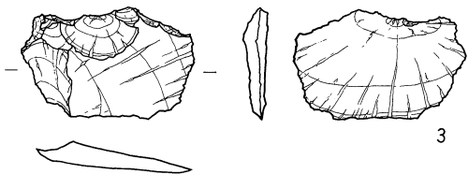


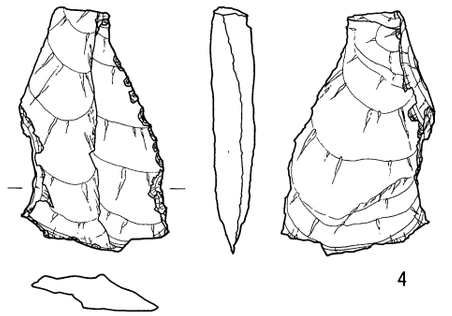


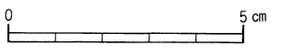












第142図　Ⅴ区９ａ層出土遺物実測図

表面右側縁に微細剝離痕が認められる。石質は流紋岩である。

⑷　ＶＥ区の調査（第143図、写真186）

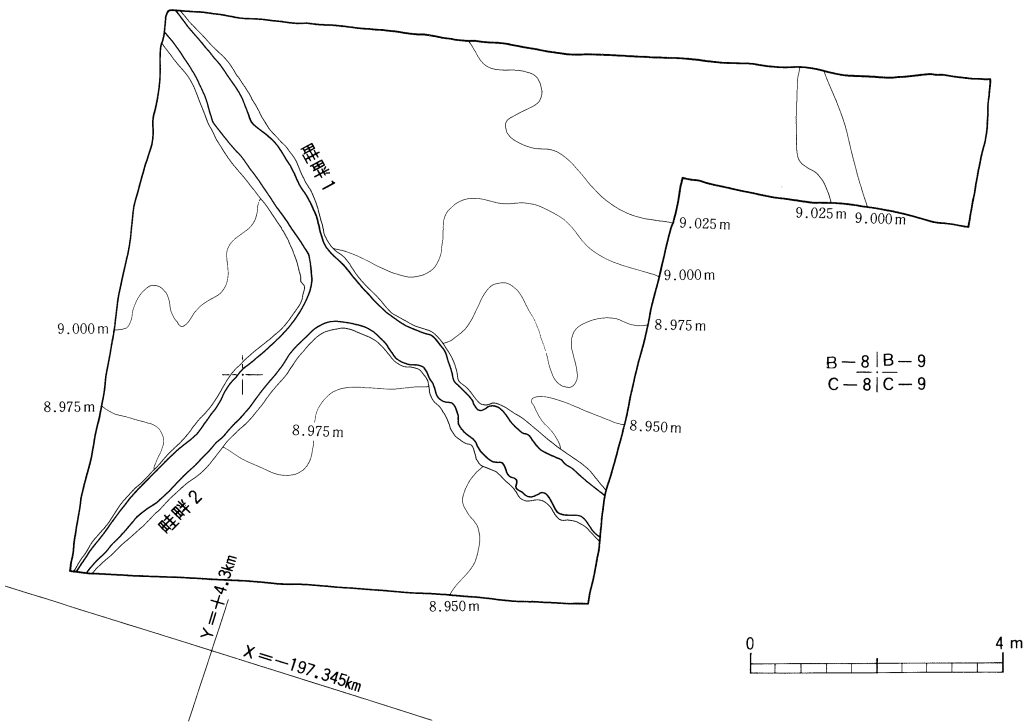
①９ａ層水田跡

ａ）**水田面の標高・地形**：調査区が狭いため全体の地形の傾斜はわからないが、水田面の標高は9.88～9.94m である。

ｂ）**水田の構成**：9a層上面で畦畔を２条検出しており、第143図に示すように畦畔１・２と名称を付した。２条の畦畔は調査区中央部でほぼ直角に交わっている。畦畔１は方向性Ｎ－57°－Ｗで10.5m にわたって検出されており、上端幅27～76cm、下端幅50～100cm を測る。水田面との比高差は東側で0.7～3.4cm、西側は畦畔２の南側で２～３ cm、北側で１～３ cm である。畦畔２は方向性Ｎ－23°－Ｅで、5.7m にわたって検出されており、上端幅17～45cm、下端幅27～65 cm を測る。畦畔１・２の断面形は極めて扁平な台形状を呈す。また畦畔１・２には共に畦畔下に擬似畦畔は認められない。

⑸　VI区の調査

VI区では水田土壌である９ａ層は認められなかった。基本層位９ｂ層は泥炭質粘土層Ｂの自然堆積層であり、VI区では10a 層・９ｂ層・８層と連続して自然堆積層が見られる。９ａ層は９ｂ層及び10a 層上部を耕作することによって形成された層であり、VI区において９ａ層水田跡



第143図　ＶＥ区９ａ層水田跡平面図

の非耕作域が存在していたものと考えられる。９ｂ層上面の標高は8.78～8.82m である。

⑹ **Ⅶ区の調査**（第144図、写真187）

①ＳＸ３：ＳＸ３はⅦ区北西部、Ａ－04･05グリッドに位置する。10a 層上面で検出された。ＳＸ３の方向性はほぼ直線的であり、真北に対してはＮ－35°－Ｅの方向を示す。検出されたＳＸ３の長さは5.1m である。断面形は逆台形を呈する。上端幅は47～85cm、下端幅は13～35cm である。深さは北端部で10cm、南端部で３ cm、底面の標高は北端部で8.62m、南端部で8.65m とわずかに北方が高く南方が低い。底面はほぼ平坦であるが、部分的に深い所がある。ＳＸ３の溝状になっている所に入っている土壌は９ａ層である。９ａ層は自然堆積層ではなく水田土壌であるため、ＳＸ３の形成は９ａ層の形成以降であり、その性格は９ａ層の水田耕作に関わる何らかの痕跡であることが想定される。またＳＸ３から出土した多量の樹木片についても、９ａ層の上面まで達しているものがあることや平面的にＳＸ３の中におさまらないものもあることから、９ａ層とＳＸ３の関連性の中で理解していくべきものと考えられる。

⑺ **９ａ層の調査のまとめ**

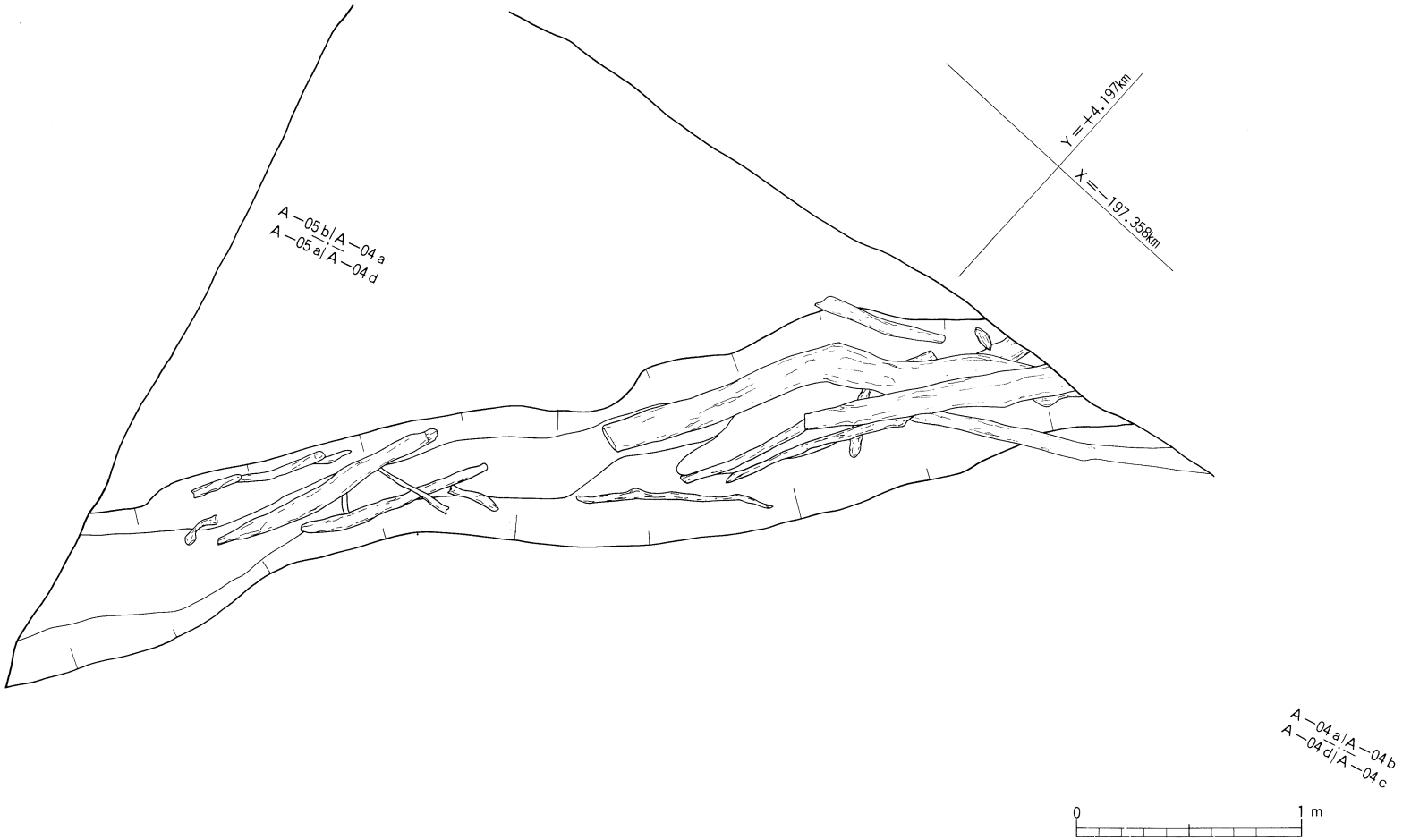
Ⅳ～Ⅶ区の調査により、Ⅴ区とＶＥ区で９ａ層水田跡が検出されている。Ⅳ区・Ⅶ区においても9a層の存在が確認されており、SX3が10a層上面で検出された。Ⅴ区で検出された擬似畦畔とＶＥ区で検出された畦畔の方向性は真北に対して約30度東偏あるいは約60度西偏している。Ⅶ区で検出されたＳＸ３の方向性は真北に対して35度東偏しており畦畔との関連も考えられる。水田の形態については、擬似畦畔をもつ畦畔ともたない畦畔のあることが明らかとなったが、区画など不明な部分が多い。９ａ層水田跡の水田域はⅣ区からⅦ区まで及ぶものと考えられるが、Ⅵ区に非耕作域の存在が確認されている。

この水田跡の所属時期についてはⅤ区から出土した弥生土器第142図１が十三塚式土器の範疇に入ることから、この時期に所属するものと考えられる。

９．８層の調査

⑴ **調査概要**

①８層の分布・土性：８層はⅣ区からⅦ区にかけての全ての調査区に分布する。層厚はⅣ区Ｄ－29グリッドで８～10cm、Ⅴ区Ｄ－20グリッドで15～20cm、Ｄ－13グリッドで20～23cm、ＶＥ区で25～30cm、Ⅵ区で35～40cm、Ⅶ区で15～20cm である。この層は泥炭質粘土層Ｂであり、Ⅳ区南東部Ｄ－30グリッドでは10YR7/1 灰白色粘土・10YR7/2 にぶい黄橙色粘土・10YR1.7/1 黒色粘土が互層になっており、Ⅴ区Ｄ－13グリッドでは10YR5/1褐灰色粘土・10YR6/2灰黄褐色粘土・10YR1.7/1 黒色粘土が互層になっている。層相変化としてはⅣ区において粘性が極めて強く、西方へいくにつれて弱くなる傾向がある。また層全体の色調は東方へいくにつれて明るくなる。



第144図　Ⅶ区10 a 層上面ＳＸ３平面図

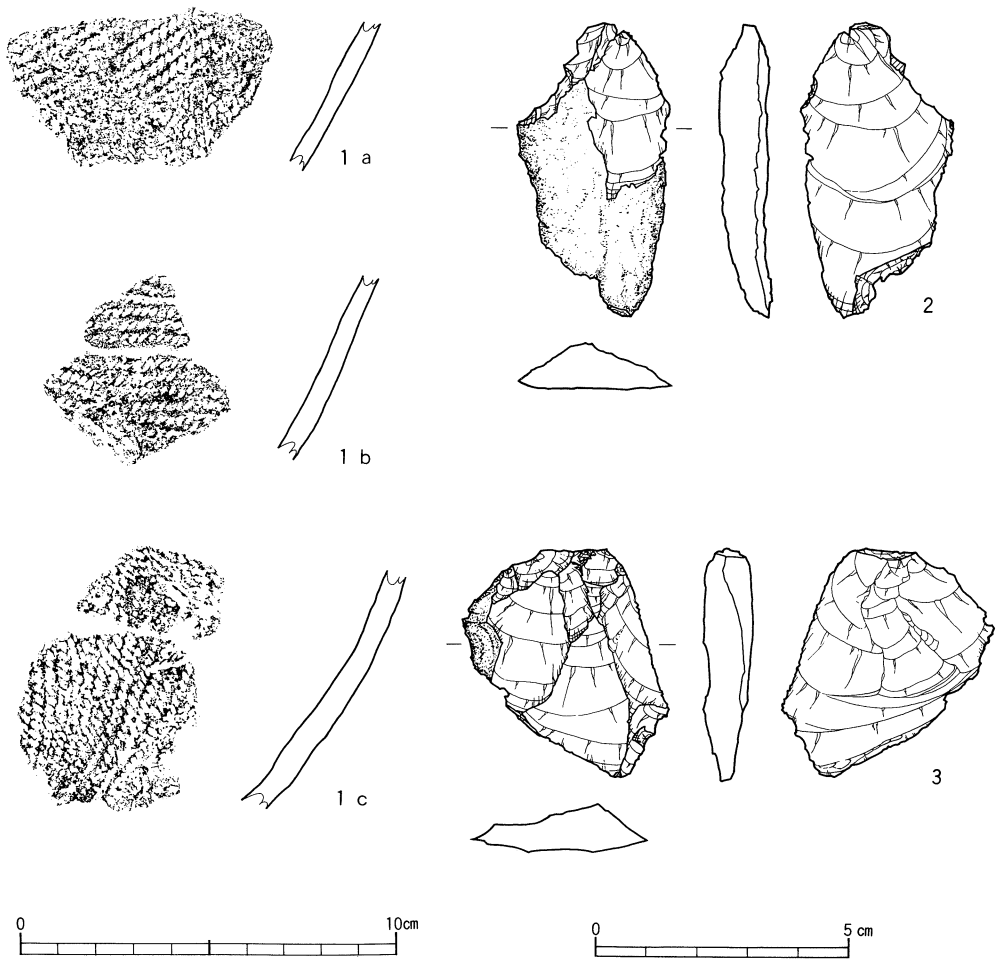
②８層上面の標高・地形： ８層上面の標高はⅣ区南東部Ｄ－29・30グリッドでは9.04～9.29m、Ｖ区Ｄ－20・21グリッドで9.03～9.24m、Ｄ－13・14グリッドで9.06～9.20m、ＶＥ区で9.10～9.23m、Ⅵ区で9.09～9.25m、Ⅶ区で8.69～8.84mと東方に高く、西方に低い傾向がある。

③検出遺構と出土遺物： ８層上面での遺構はⅦ区において杭列が１条検出されている。遺物はⅣ区において８層中から弥生土器１点・石器１点、８層上面から石器１点が出土しており、Ｖ区では８層中から弥生土器１点・石器１点が出土している。

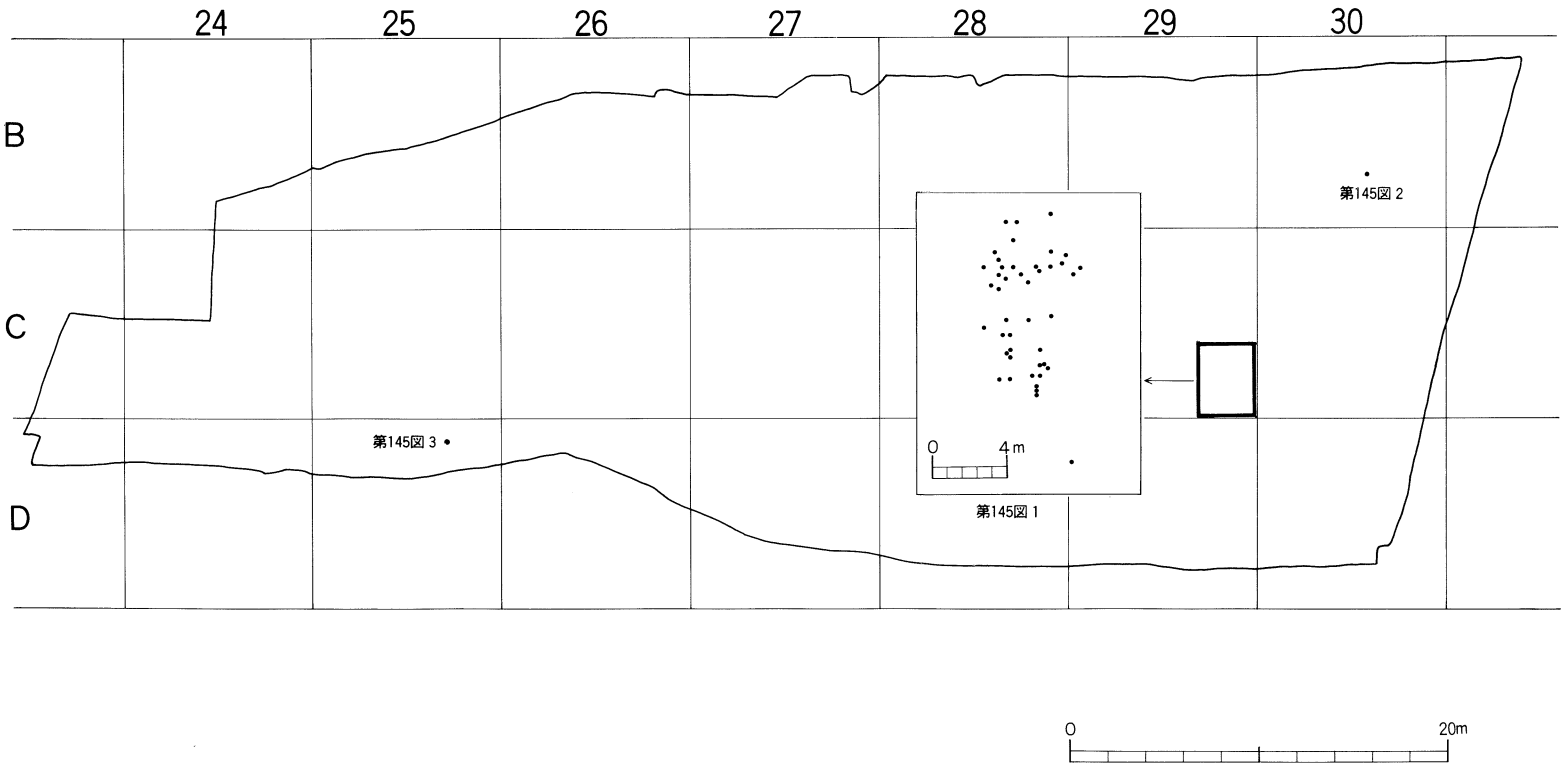
⑵　Ⅳ区の調査（第146図）

①出土遺物： ８層中より弥生土器１点（第145図１）、石器１点（第145図２）、８層上面より石器１点（第145図３）が出土している。

第145図１（写真195・346-5～7）：Ｂ－29グリッドから44点の弥生土器の破片が出土しており、その分布域は南北3.3m、東西1.3mの範囲である。これらは出土状況、胎土・色調・地文の同一



第145図　Ⅳ区８層出土遺物実測図・拓影



第146図　Ⅳ区８層遺物出土分布図

性から同一個体と考えられる。文様のあるものはないが単節LR縄文を地文としており、無文のものもある。器厚5～7 mmを測る。

第145図2（写真352-1）：B－30cグリッド8層中より出土した微細剥離痕のある石器である。表面右側に微細剥離痕が認められる。また表面には自然面を残している。石質は流紋岩である。

第145図3（写真352-2）：D－25bグリッド8層上面より出土した微細剥離痕のある石器である。表面右側縁に微細剥離痕が認められる。石質は流紋岩である。

⑶　V区の調査（第147図、写真194）

①出土遺物：D－17・18グリッドにおいて8層中から弥生土器1点（第148図1）と石器1点（第148図2）が出土している。

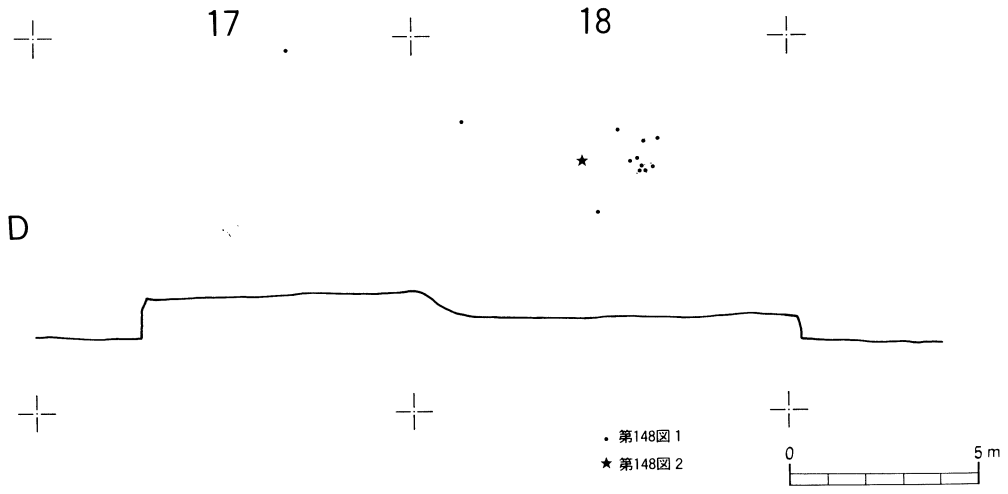
第148図1（写真194）：第147図に示すように12点の弥生土器の破片が出土しており、その分布域の中心はD－18グリッド中央や北東寄りの所である。これらは出土状況、胎土・色調の同一性から同一個体と考えられる。全て無文であり、器厚4～5 mmを測る。

第148図2（写真352-3）：D－18aグリッド8層中から出土した微細剥離痕のある石器である。表面右側縁に微細剥離痕が認められる。また表面には自然面を残している。石質は珪質凝灰岩である。

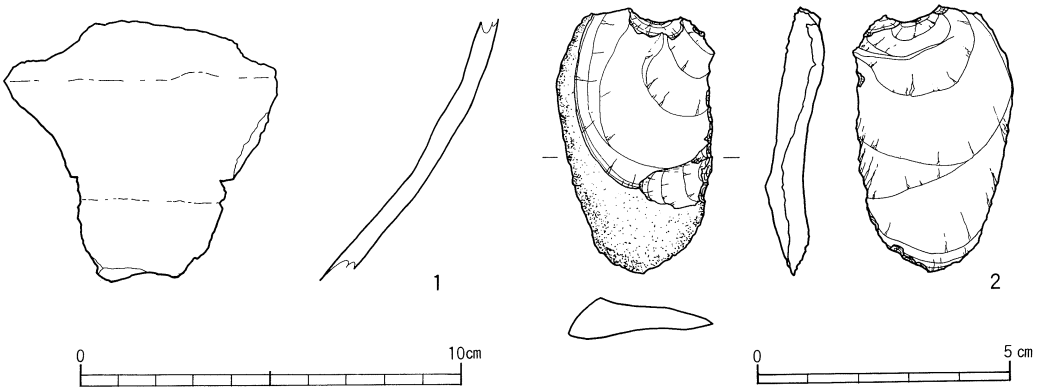
第148図1と2については、出土位置が近接していること、共に数層に細分できる8層の自然堆積層の中でもその最上部の同一面からの出土であることから共伴する可能性が考えられる。

⑷　Ⅶ区の調査（第149図、写真187～193）

①杭列3：杭列3はⅦ区北西部、A－05・04グリッドに位置する。8層上面で検出された。杭列の方向性はほぼ直線的であり、真北に対してはN－38°－Eの方向を示す。検出された杭列の長さは3.55mである。北東方向にはまだ伸びる可能性はあるが、調査区内では11本の杭が杭列



第147図　V区8層遺物出土分布図

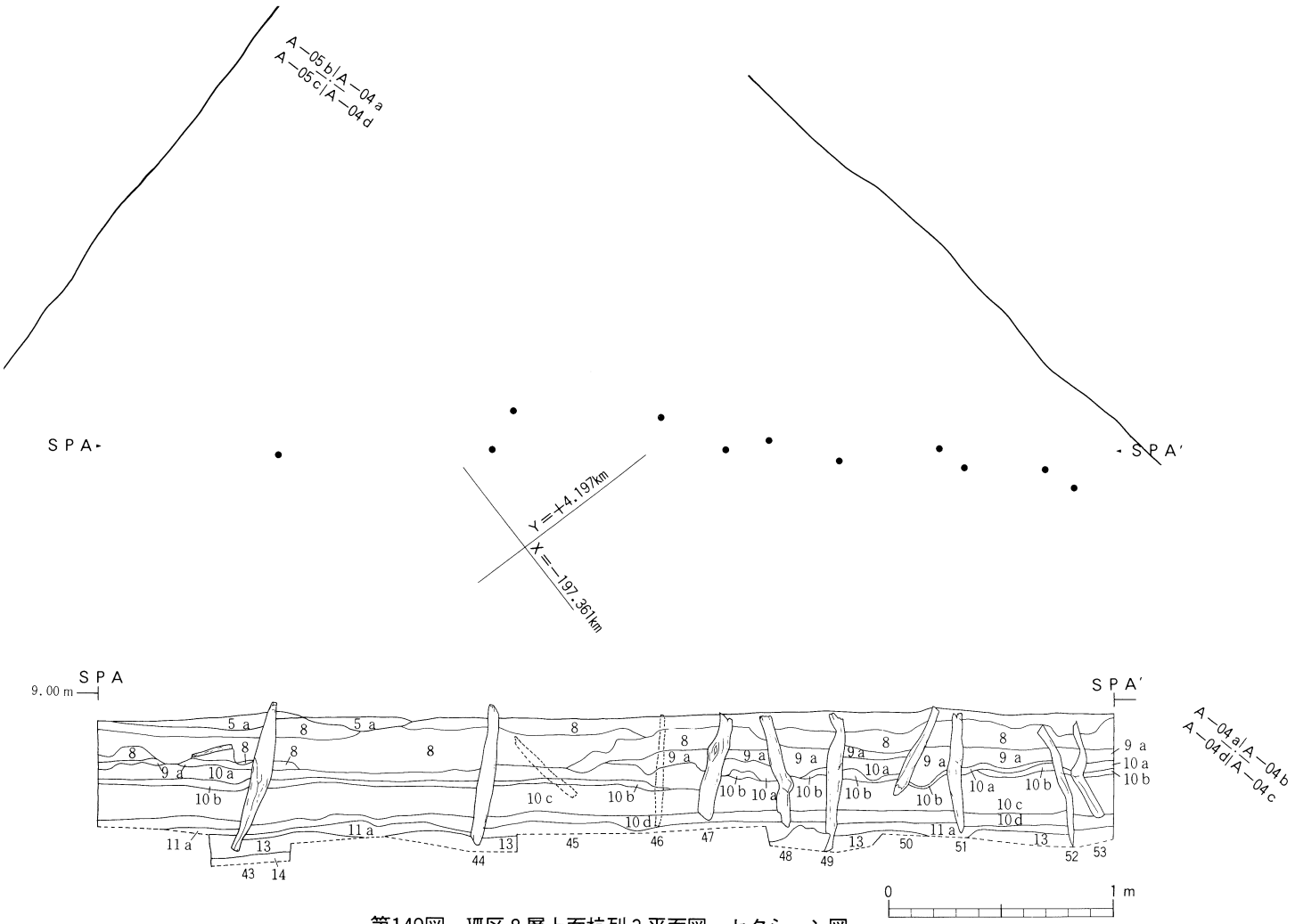


第148図　Ⅴ区８層出土遺物実測図

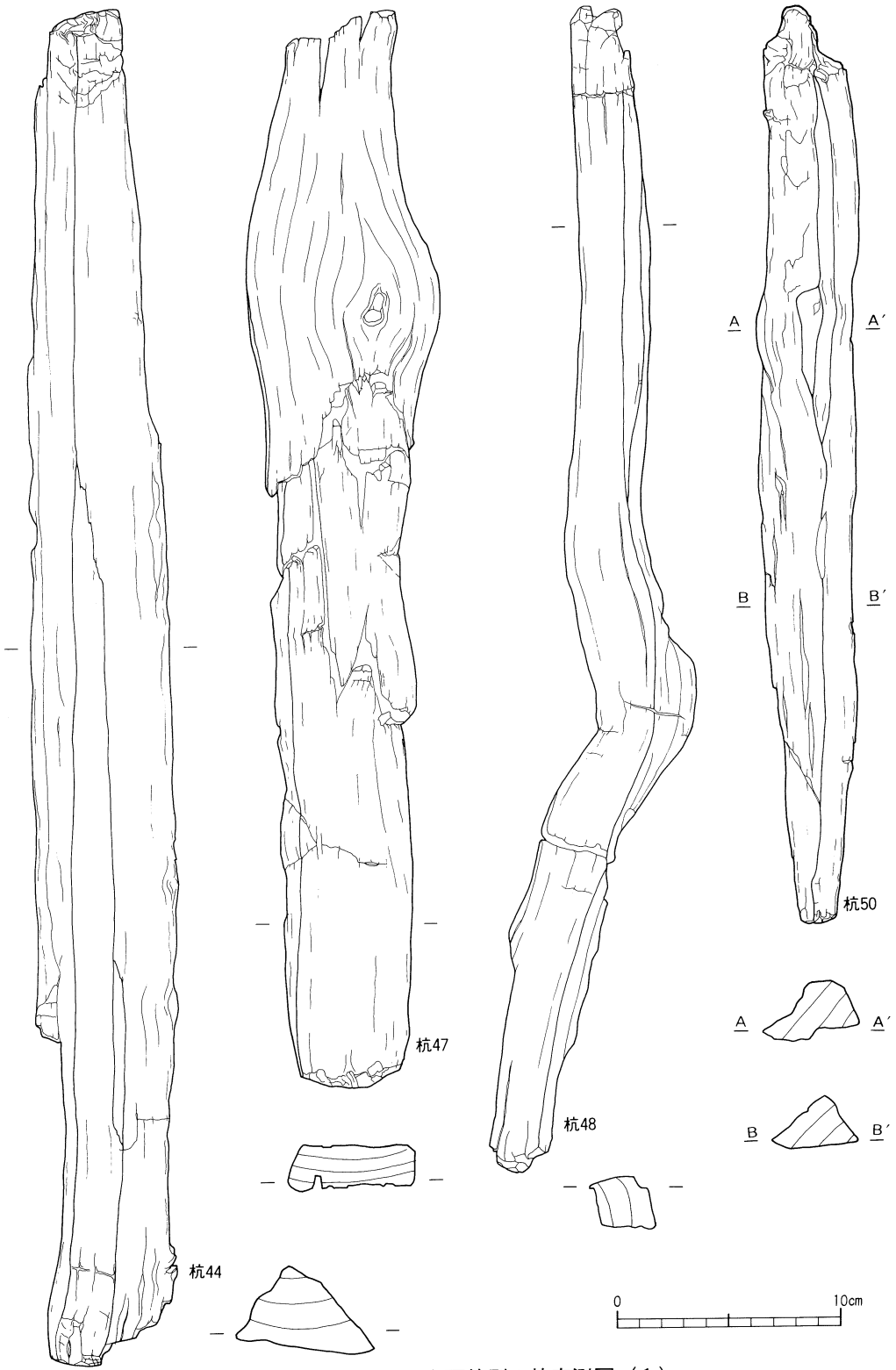
を構成している。(杭43～53) 杭列に伴う横木等は検出されていない。各杭は全て打ち込み杭であり、その間隔に規則性はみられないが、中には杭44と杭45、杭50と杭51、杭52と杭53のように２本１単位と考えられるような配置をなすものもある。各杭の先端の標高は、斜めに打ち込まれている杭50・杭45を除くと8.32～8.49m である。各杭の形態については樹皮面の残存長は38分割材を素材とし、先端の加工がなされていない点で共通性が認められる。各杭の残した38.9～67.7cm、各素材の推定半径は2.35～9.7cm 程である。樹種は杭列北東端部の杭51・杭52コナラ節の一種で、杭53がクヌギ節の一種であり、他の８本はクリ材であり、全て落葉広葉樹が用いられている。杭列の性格については不明といわざるを得ないが、各杭については形態・樹種において共通性が認められた。(尚、杭43と杭49の実測図は201、202ページ第121図に掲載している。)

⑸　８層上面の時期について

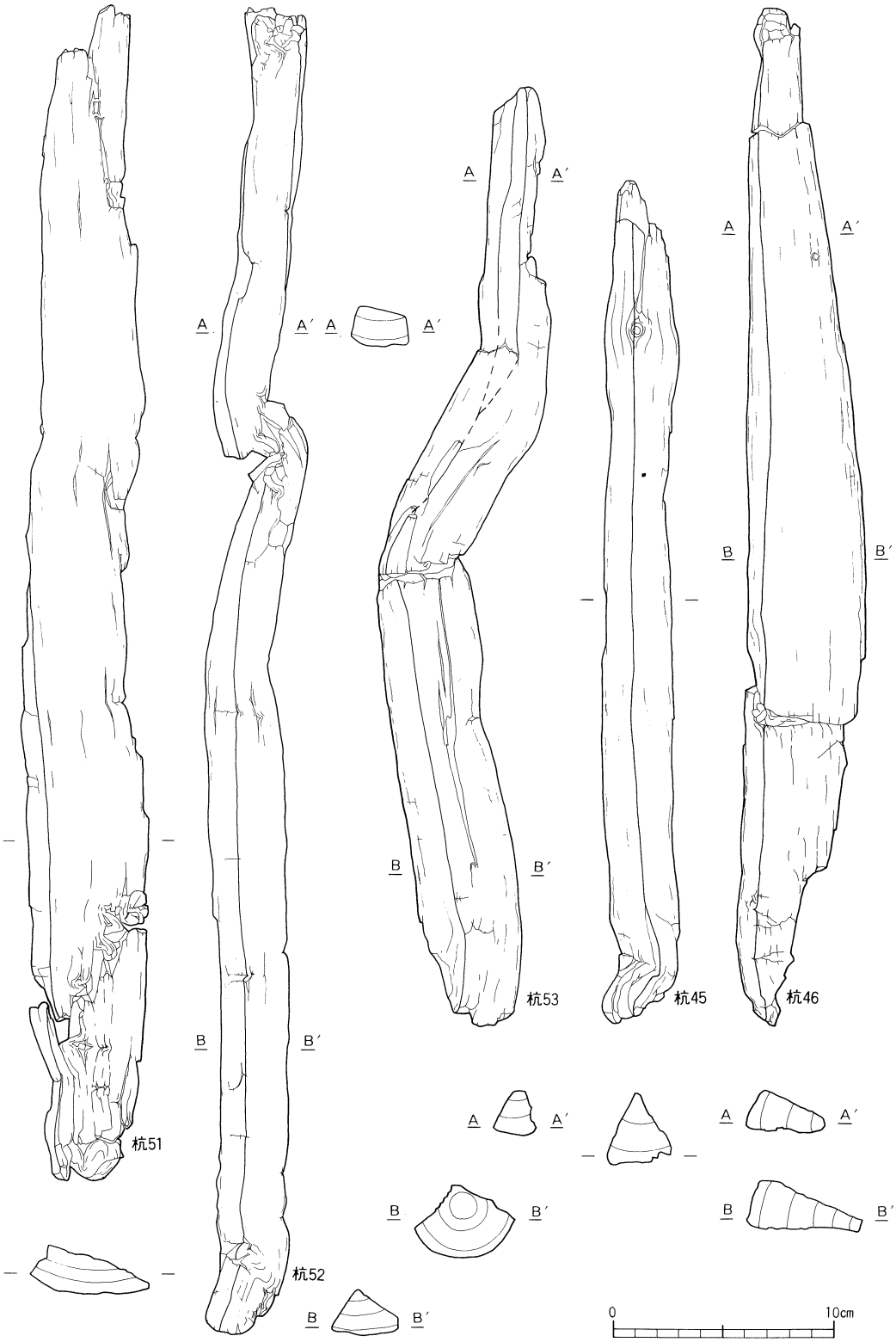
８層上面の時期については、Ⅳ区からⅦ区にかけての層序の相違にみられるように各区において異なることも考えられる。これは８層の直上層がⅣ区からⅤ区東半部では７ｃ層及び７ｂ層、Ⅴ区西半部では７ａ層、ⅤＥ区・Ⅵ区では５ａ層・Ⅶ区では４ａ層であること、８層上面自体が上層の耕作により存在しない場合もあることによる。また８層は泥炭質粘土層Ｂであり、断面の層相は黒色・黒褐色・灰黄褐色等の粘土の各層が重層的に互層になる横縞状を呈しており、これらの各層は層厚数 mm から数 cm で、それぞれを調査区全域にわたって平面的に検出することは極めて困難であり、断面における追求も所々途切れる層が多く難しく、現段階ではⅣ区・Ⅴ区東半部の８層は出土遺物、上下の層序関係から弥生時代に所属するが、Ⅶ区においては平安時代以前の時期に所属することになる。



第149図　Ⅶ区８層上面杭列３平面図・セクション図



第150図　Ⅶ区８層上面杭列３杭実測図（１）



第151図　Ⅶ区８層上面杭列３杭実測図（２）

10. 7 c層の調査

(1) 調査概要

①7 c層の分布・土性：7 c層はIV区の全域とV区東部C・D－14グリッド以東に分布する。層厚はIV区においては15cm程であり上層と下層に分層されるが、V区では10cm以下で全面的な分布を示さない。土性はIV区南東部D－29グリッドでは上層が2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト、下層が10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土であるが、西方へむかうにつれて粘性が強くなり、V区においては層厚も減少し上層・下層の分層もできなくなる。V区D－20グリッドでの土性は10YR4/1褐灰色粘土である。

②7 c層上面の標高・地形：7 c層上面の標高はIV区で9.17～9.44m、V区東半部で9.15～9.33mで、やや東方が高い。

③検出遺構と出土遺物：7 c層上面での遺構は検出されていない。遺物はIV区において7 c層下層中より弥生土器1点（第153図2）、弥生土器片2点（第153図3・4）、7 c層上層中より弥生土器1点（第153図1）、石器1点（第153図5）が出土している。

(2) IV区の調査（第152図）

①出土遺物

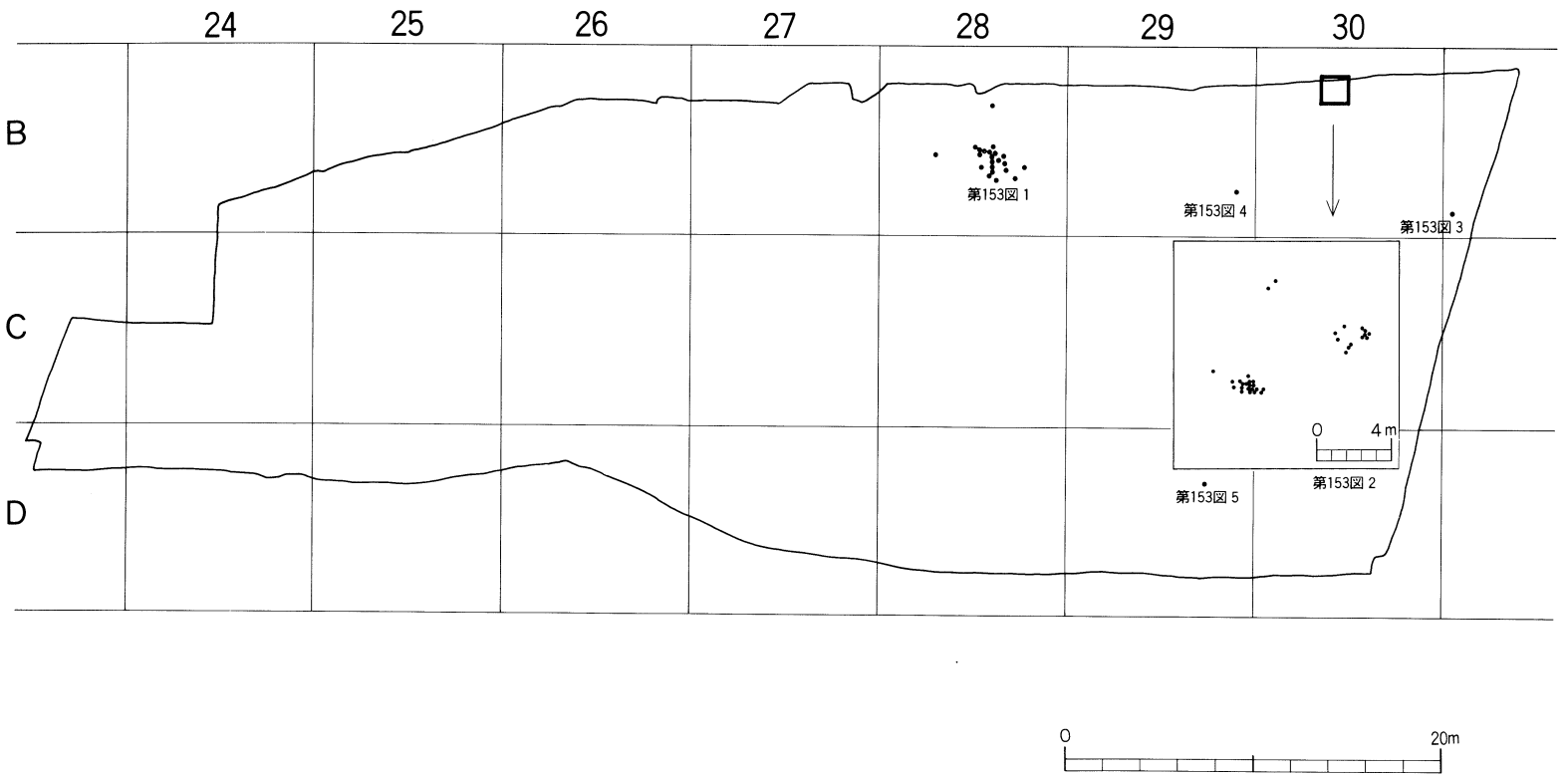
第153図1（写真196・346-8～10）：B－28グリッドから22点の破片が出土しており、その分布域は南北3.8m、東西4.65mの範囲で、分布の中心はB－28cグリッド北西部にある。これらは出土状況・胎土・色調の同一性から同一個体と考えられる。器形は口縁部と体部の境が屈曲する甕と判断される。体部外面には刷毛目調整が行なわれており、口縁部は無文である。

第153図2（写真346－13）：B－30グリッドから33点の破片が出土しており、その分布域は東西・南北1mの範囲で、3地点に分かれている。これらは出土状況、胎土・色調の同一性から同一個体と考えられる。器形は甕と判断される。外面には主に縦方向に刷毛目調整が施され、部分的にミガキが行なわれている。また刷毛目は底部に近い部分には施されていない。内面はナデ調整が行なわれている。器厚は6mm程である。

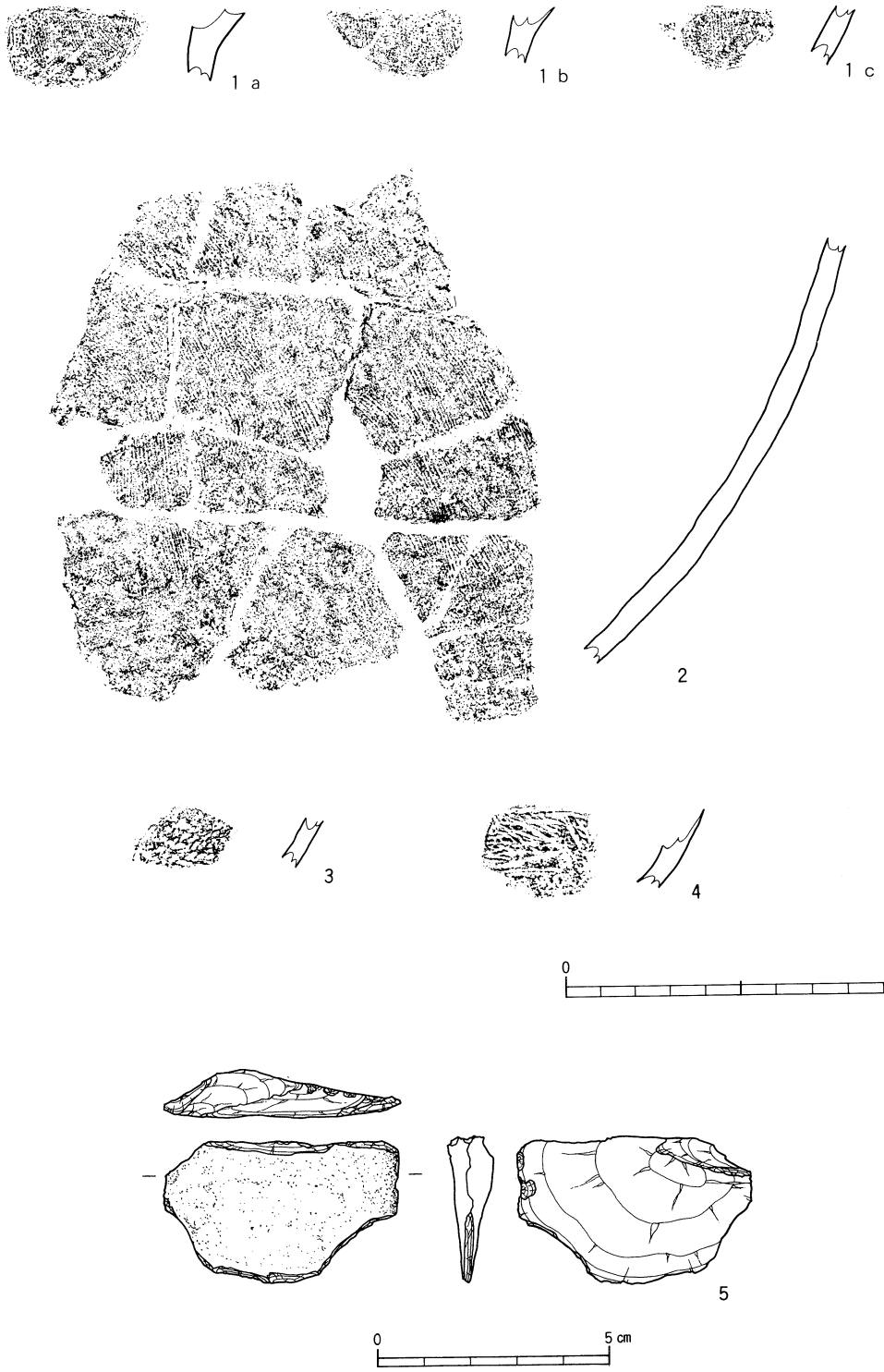
第153図3（写真346－11）：B－31dグリッドから出土している。地文が単節LR縄文の破片である。

第153図4（写真346－12）：B－29cグリッドから出土している。地文がlの撚糸文の破片である。

第153図5（写真352－4）：D－29bグリッドから出土した2次加工のある剥片である。裏面左側縁と頭部の折れ面に2次加工痕が施されており、左側縁と末端に微細剥離痕が認められる。また表面はほとんど自然面である。石質は流紋岩である。



第152図　Ⅳ区７ｃ層遺物出土分布図



第153図　Ⅳ区７ｃ層出土遺物実測図・拓影

11. 7 b 層の調査

(1) 調査概要

①7 b 層の分布・土性：7 b 層はIV区の全域とV区東半部C・D－17グリッド以東に分布する。層厚はIV区D－29グリッドで20～25cm、V区D－20グリッドで15～20cm である。土性はIV区D－29グリッドでは10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルトであるが、西方へ向かうにつれて土性は粘性を帯び、植物遺体をやや含み、色調も暗くなり、V区D－20グリッドでは2.5Y5/1黄灰色粘土という層相変化を示す。

②7 b 層上面の標高・地形：7 b 層上面の標高はIV区南東部D－29・30グリッドで9.36～9.47 m、V区D－20・21グリッドで9.26～9.42m と東方が高く西方が低い。

③検出遺構と出土遺物：7 b 層上面では遺構は検出されていない。遺物はIV区において7 b 層中から土師器1点、7 b 層上面から土師器3点、鉄鎌1点が出土、V区では7 b 層中から弥生土器2点が出土している。

(2) IV区の調査（第154図）

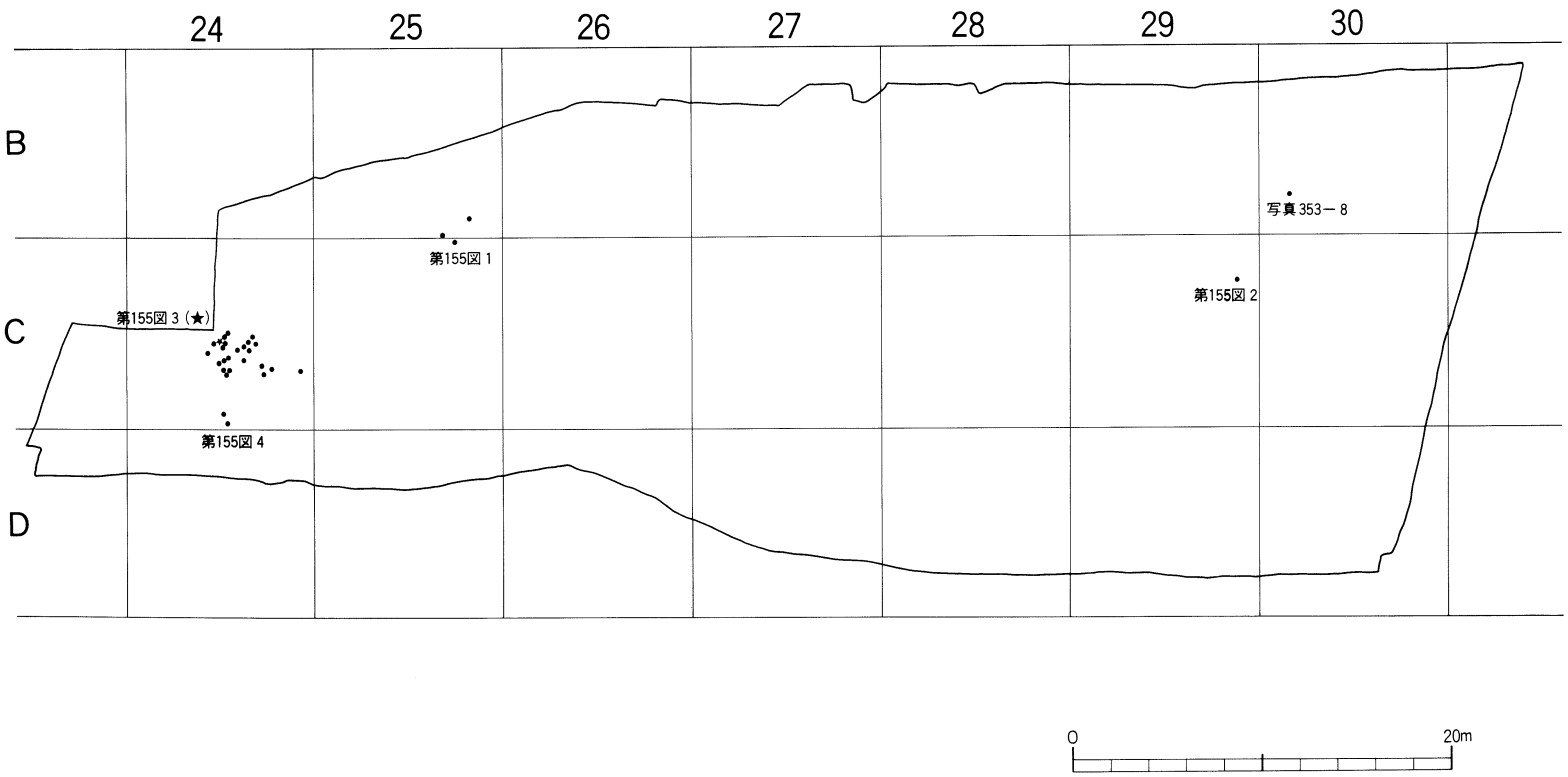
①出土遺物（第155図）

第155図1（写真353-2）：C－25グリッドから2点、B－25グリッドから1点出土した土師器破片が接合したものである。全て7 b 層中から出土している。残存状況は全体の約1/9である。器形は、体部の最大径が上半部にある坏と考えられる。内面には体部と口縁部の境に稜を形成している。体部の最大径は推定で12cm である。器厚は4～5 mm で下端でやや厚くなる。調整は外面が刷毛目のちヘラミガキで、体部と口縁部の境に刷毛目を残している。内面の調整は不明である。

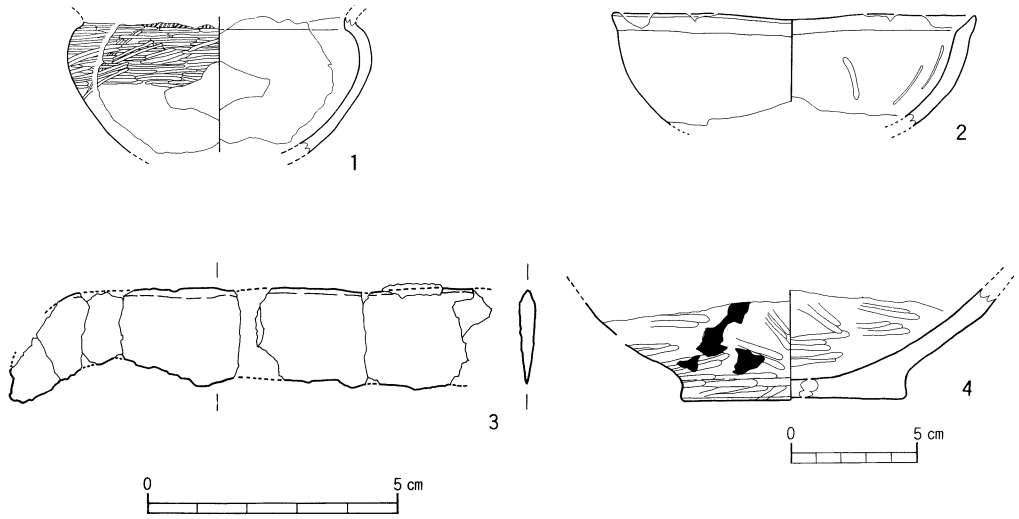
第155図2（写真353-3）：C－29bグリッド7 b層上面から出土している。残存状況は全体の約1/6である。器形は体部が内弯気味に外傾し、口縁部が外傾する坏である。体部から口縁部にかけては、外面では弱く屈曲し、内面には稜を形成する。器厚は体部で5～6 mm であり、推定口径14.3cm である。調整は外面は不明であるが、体部内面には放射状のヘラミガキが部分的に認められる。

第155図4（写真353-4）：C－24グリッド7 b層上面から25点の土師器の破片が出土しており、その分布域は東西5 m、南北3.8m の範囲である。これらは出土状況、胎土、色調の同一性、接合関係から同一個体と考えられる。残存状況は全体の約1/2であり、下半部が残存している。各破片は摩耗が激しく接合は底部付近で可能であったが、器形は壺と考えられる。外面が丹塗が施されている。底部外面には体部との境に段を形成し、張り出し気味の底部となっている。内面の底面はすりばち状を呈している。器厚は7～8 mm で、底径は推定で8.8cm である。

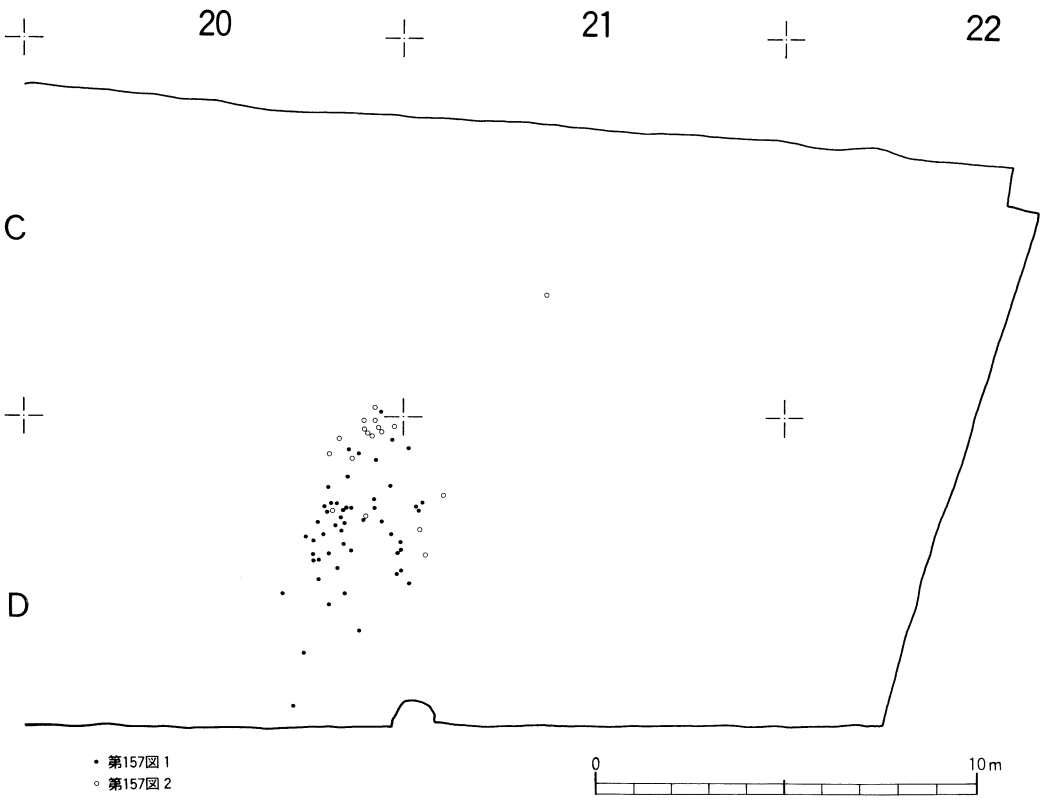
写真353-8：B－30dグリッド7 b層上面から出土している。土師器壺あるいは甕の体部破片であ



第154図　Ⅳ区７ｂ層遺物出土分布図



第155図　Ⅳ区７ｂ層出土遺物実測図



第156図　Ⅴ区７ｂ層出土遺物分布図

る。器厚は6 mm、調整は外面はヘラミガキ、内面はヘラナデがなされている。後述するように、この破片はＳＤ－９出土の土師器破片と接合する。

第155図３（写真356－11）：Ｃ－24グリッド７ｂ層上面から５片に割れて出土している。出土位置は第155図４の土師器壺の出土分布域の中にある。基端部はないが、全体の形状から鉄鎌と判断される。残存状況は、錆のため身全てが残っているわけではないが、原形を復原し得る状況である。形態は直線を基調としており、先端部で身幅がやや小さくなる。刃部は先端に近いところでやや弯曲している。全長9.1cm以上、最大身幅2.0cm、背面の厚さ３ mmを測る。

これらの出土遺物の中で、第156図１は塩釜式、第156図２は南小泉式、第156図４は塩釜式の後半～南小泉式に所属するものと考えられる。

⑶　Ｖ区の調査（第156図）

①出土遺物（第157図）

第157図１（写真347-1）：Ｄ－20bグリッド付近から52片に割れて弥生土器が出土している。出土層位は７ｂ層中である。破片の分布域は南北方向に長く、南北約８ m、東西約３ mの範囲である。分布の中心はなく破片は散在している。残存状況は全体の約1/2であり、口縁部を欠損している。器形は体部の最大径が上半部にある壺であり、底径推定9.2cm、体部最大径推定18.1cmを測る。地文は体部上半部に単節RL縄文を施文し、のちに下半部に *l* の撚糸文を施文している。また外面底部付近には横方向に撚糸を回転させて施文している。文様帯は頸部直下から体部上半部までに形成され、幅1.5～２ mmの沈線で文様が施文されている。器厚は体部で４～６ mmである。調整は、内面に横方向のナデがなされている。

第157図２（写真347-2～7）：Ｄ－20bグリッド東半部付近から18点の弥生土器の破片が出土している。出土層位は７ｂ層中である。Ｃ－21dグリッドから１点出土しているが、他の破片の分布は南北約４ m、東西約３ mの範囲である。これらは出土状況、胎土・色調・地文の同一性から同一個体と考えられる。地文は単節LR縄文である。第157図2a～2eは体部上半から口縁部にかけての破片である。無文帯を形成したのち、その上下にLRの原体押捺を３～４段行っている。器厚は6 mmである。調整は、内面に横方向のナデが施されている。また第157図2fは底部であり約1/2が残存している。推定底径8.3cm、底部の器厚は８ mmを測る。調整は内面にナデが施されている。

12.　７ａ層の調査

⑴　調査概要

①７ａ層の土性・分布：７ａ層はＶ区とⅣ区西半部に分布する。層厚はＤ－12グリッドでは20～30cmであるがＤ－22グリッドでは６～10cmである。この層は古墳時代南小泉式期の水田土壌である。層相は10YR4/1褐灰色粘土である。７ａ層の下面には凸凹がみられる。

第157図　Ⅴ区７ｂ層出土遺物実測図・拓影

②7 a層上面の標高と地形：7 a層上面の標高は最も高い所で9.58m（D－20グリッド）、最も低い所で9.32m（D－13グリッド）で、地形は東北東方向に高く、西南西方向へ低い。

③検出遺構と出土遺物：V区では7 a層上面において水田跡を検出しており、水路底面から土師器1点、7 a層中から土師器破片3点、樹木片4点が出土している。また7 a層中位において平面的に分布する帯状の酸化鉄の集積が検出されている。IV区では遺構・遺物は検出されていない。

(2) **V区の調査**（第158図、写真197～227）

①7 a層水田跡

ⅰ）**検出状況**：水田跡はV区のC・D－18・19グリッド以西全域とVF区の東西約75m、南北約26mの範囲において検出された。検出された水田跡の面積は1,087m² である。

ⅱ）**水田の構成**：7 a層水田跡は、幅1～1.5mの大畦、幅約30cmの小畦と、これらの畦によって区画された水田と、大畦に付設されたSD3（水路）から構成される。大畦は2条検出されており、B・C・D－13グリッドで検出されたものを大畦1、B・C・D－17・18グリッドで検出されたものを大畦2とした。水田は106枚検出されており、各水田は①～⑯の番号によって示した。また7 a層の水田域は、西方はVE区まで広がらないが、北方・南方へは広がっており、東方については不明である。

a．大畦：大畦は周囲の土を盛って作られている土盛り畦畔である。大畦1は方向性N－17°－Wで、南北19.5mにわたって検出されており、上端幅1.15～1.94m、下端幅1.62～2.30mを測る。断面形は扁平な台形状を呈する。水田面との比高差は、東側で1.7～8.5cm、西側で3.0～7.7cmである。大畦2は、方向性N－31°－Wで、南北19.2mにわたって検出されており、上端幅0.74～2.64mを測る。断面形は扁平な台形状を呈する。水田面との比高差は東側で1.5～9.3mである。この大畦2の西側にはSD3（水路）が付設されている。

b．小畦：小畦は大畦同様周囲の土を盛って作られている土盛り畦畔である。方向性は大畦に直交あるいは平行する傾向が見られるが、そうでない方向性を示すものもある。また小畦は直線を基調とするが曲線的なものも見られる。小畦は水田跡のほぼ全面にわたって検出されているが、C－17グリッド付近など部分的に検出されていないところもある。上端幅は20～30cm、下端幅は40～50cmのものが多く、上端幅は最大で88cm、最小で5 cm、下端幅は最大で125cm、最小で20cmである。断面形は扁平な台形状あるいは扁平な半円形状を呈する。水田面との比高差は0.1～3.5cmの所が大半であり、最も大きい所でも9.1cmである。

c．区画：水田1枚毎の区画は、大畦と大畦の間を小畦によってなされており、106枚の水田が検出された。水田1枚の面積は平均5.26m²、最小2.26m² で、3～7 m² のものが85％を占める。水田の残存状況は四辺の畦畔が完存しているものが40枚、部分的に畦畔が残存していなくとも

平面形が、復元できるものが20枚であり、他のものは水田の区画の復元が不可能なものであった。水田面の残存状況はB・C・D－13・14グリッド付近で良好である。この部分では水田面に若干の凸凹が見られる。畦畔率はC・D－グリッド（中区画C）において約34％である。

d．勾配：水田面の標高は9.32～9.47mで、勾配はA－A′間で10cm/42.9m、B－B′間で10cm/41.3m、C－C′間で10cm/92.6mである。

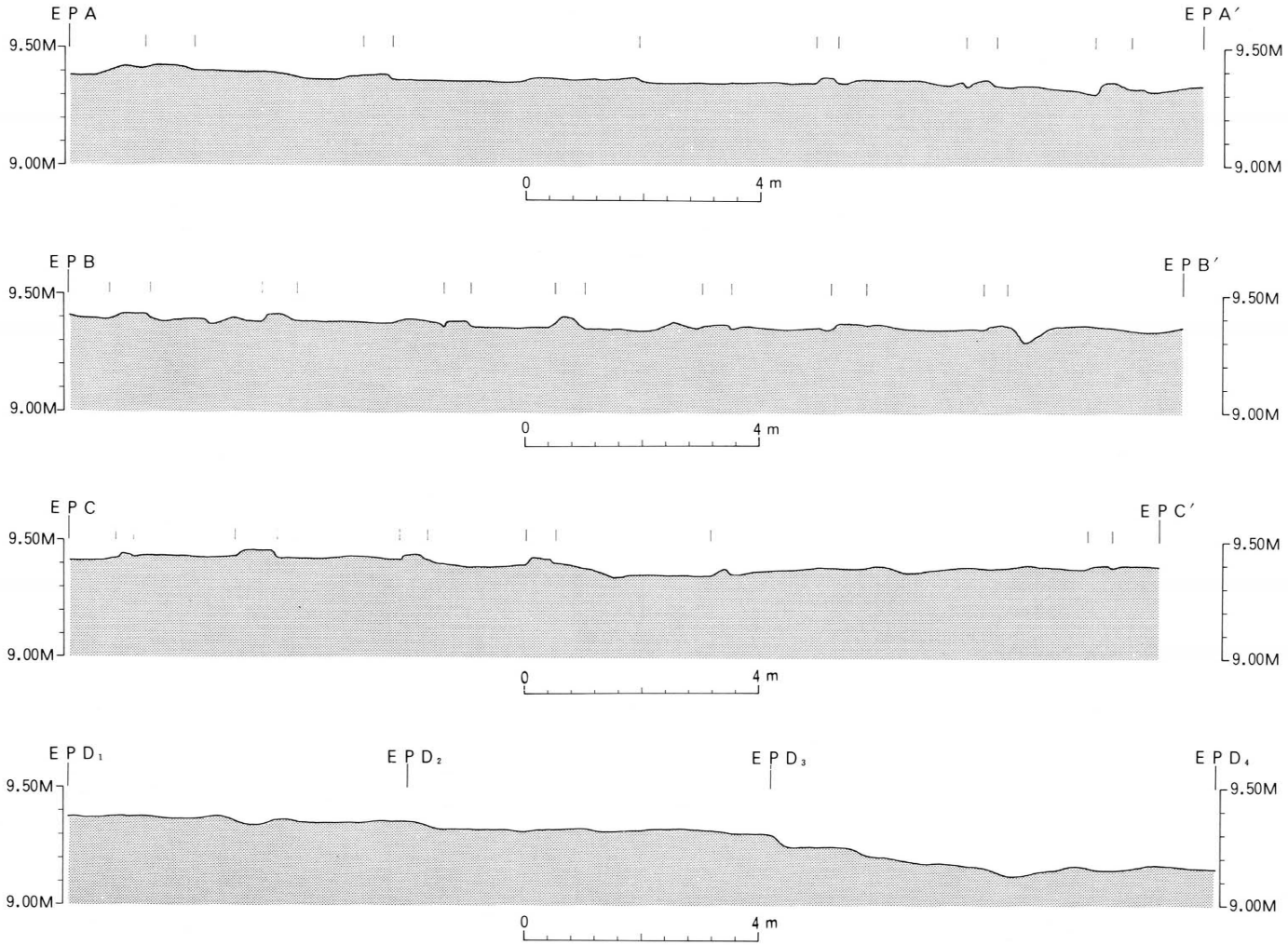
e．各水田面の標高と区画：各水田面の標高は第159図のように水田①～㊼の標高は9.468～9.280mである。各水田面の高低差はそのほとんどが3～6 cmである。この7 a層水田跡では水田面の斜面勾配が小さく、高低差3～6 cmの水田が作られているわけであるが、隣接する水田間に微妙な高低差が存在していることも第159図から知られる。この高低差が用水の流れを左右するものとすると、第158図において、隣接する水田間において①標高差測点値の分布域がほぼ重なり、測点値の集中が同様の標高を示す場合、②標高測点値の分布域が異なる場合、または標高測点値の分布域がほぼ重なっていても、測点値の集中が異なる標高を示す場合の2通りの状況がある。①の場合、隣接する水田間には用水の流れは停滞的な状況が考えられ、これを「←→」で示した。②の場合、標高の高い水田から「⟶」標高の低い水田への用水の流れが考えられ、これを「⟶」で示した。第158図のように、用水の流れは大旨北高南低の地形に沿って北から南への方向を示している。しかし、南北方向の畦畔のほぼ中央にある水口の存在と東西に隣接する水田間の標高差から東西方向の用水の流れも考えられる。また隣接する水田間の標高差がある場合もさほどの数値を示さず、標高測点値の分布域も重なる部分が多いことから、用水の流れは緩慢なものであり、停滞的な状況を考えられる部分もあることや、南北に隣接する水田間で南高北低の関係があることから、この水田区画は勾配の大きな地形に規制された面は少なく、主なる要因は他に考える必要がある。

f．水路と水口：ＳＤ３（水路）は大畦2の西側に付設されており、方向性は大畦2とほぼ同様であり、南北21cmにわたって検出された。埋土は基本層位6層であり、自然堆積により短期間に埋まったものと考えられる。ＳＤ３（水路）の規模は、北端部で上端部1.9m、下端部1.6m、深さ3.2mであるが、南端部では上端幅3.75m、下端幅3.2m、深さ22.6cmと規模が大きくなる。ＳＤ３（水路）壁面の立ち上がりは緩やかな弧状をなす。底面はほぼ平坦であるが、底面の標高は北端部で9.37m、南端部で9.16mと北が高く南が低い。またＳＤ３（水路）中央やや南寄りのところでは底面に5.6～9.3cmの段差が認められる。この段差のある部分では大畦2の西端がＳＤ３（水路）の方に張り出しており、ＳＤ３（水路）の幅が狭くなっている。ＳＤ３（水路）に関わる何らかの施設を想定することも可能であるが、段差の周辺に杭列その他水利施設と考えられるものは検出されなかった。

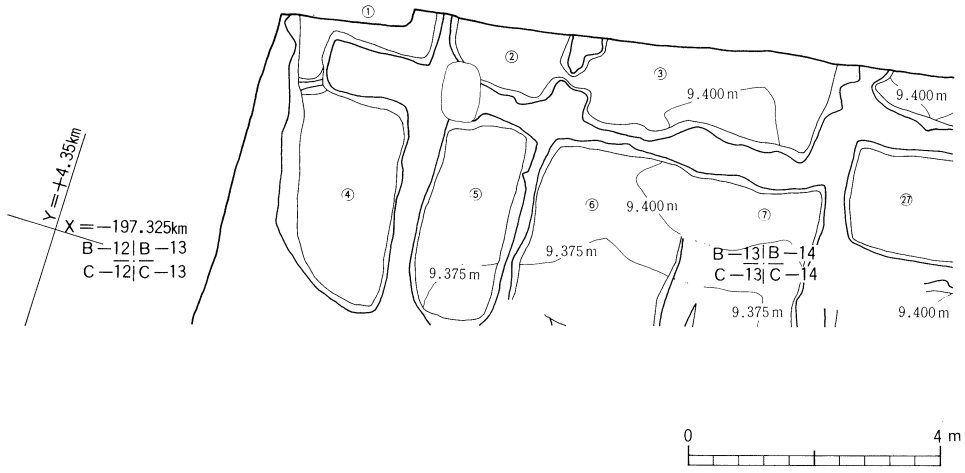
水口は部分的に8ケ所検出された。全ての水田に水口があったか否かは不明である。水口は

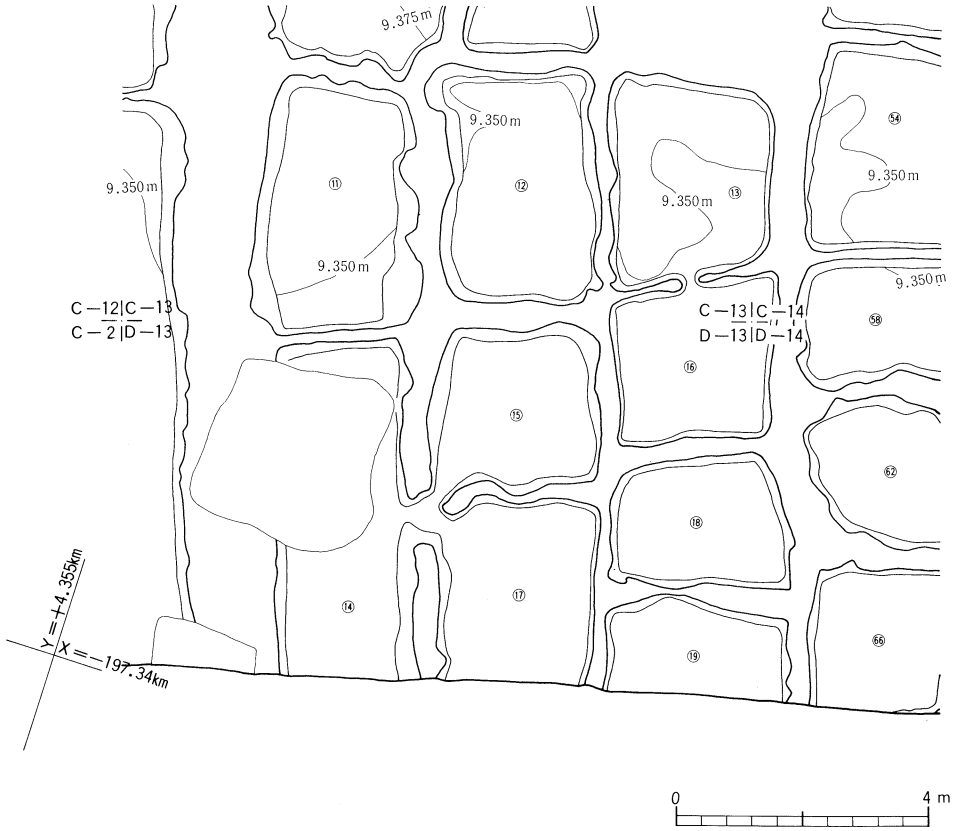
第158図　Ⅴ区７ａ層水田跡平面図

第159図　V区7a層水田跡水田面標高測点分布図（測点は50cmメッシュ）



第160図　Ⅴ区７ａ層水田跡エレベーション図





第161図　Ⅴ区７ａ層水田跡部分平面図

第162図　Ⅴ区７ａ層水田跡足跡平面図

(1)南北方向の畦畔の中央につくもの、(2)東西方向の畦畔の中央につくもの、(3)畦畔の交差部分につくものに分けられる。(1)・(2)については、水田１枚毎の標高差との関係があるものと考えられる。

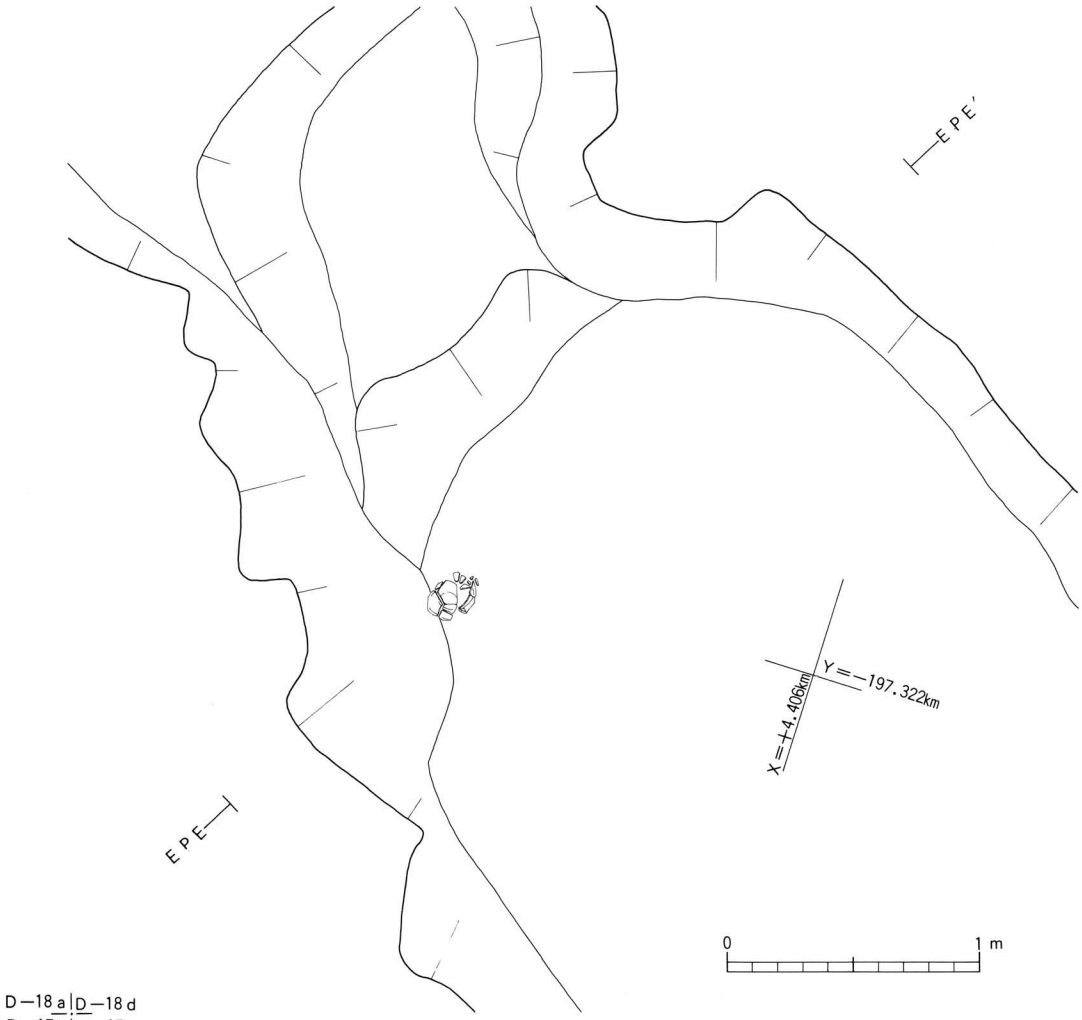
iii）**水田に残された足跡**：水田面を検出した段階で無数の足跡を検出している。これらの足跡の中で残存状況のよいものは、径10～15cmの円形あるいは略円形のプランと、長さ10～14cm、幅３～４cmの細長い楕円形が２ケ１対のプランとなって確認されたものが大多数であり、人間の足跡と想定されるものはほとんどなかった。足跡は全て７ａ層水田跡を覆った基本層位６層により埋まっており、円形のものは基本層位６層を掘り上げると爪先が二又に分かれた足跡が検出された。これらの足跡は偶蹄目のものであり、その形態・規模から牛の足跡と考えられる。足跡の分布は12ライン以東・20ライン以西のほぼ全面にわたる。足跡は大畦・小畦・水田面についており、ＳＤ３（水路）底面でも検出されている。足跡の中には足の向きがわかるものがあるが、歩行方向・経路を把握することはできなかった。足跡の深さは１～４cm程である。

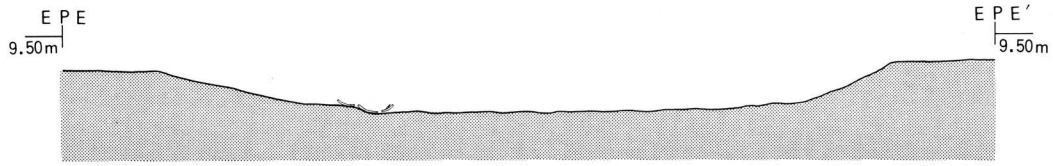
さて、これらの足跡は、足跡が水田面につけられた段階では畦畔の上やＳＤ３（水路）底面についていることや、人間の足跡がほとんどなく、牛の足跡も比較的浅いことから、水田面が比較的乾いていた状況があったことが考えられる。水田耕作と牛の関係については、直接二者を結びつける資料は得られず、足跡のつき方は収穫後であることも想定され、牛耕については不明である。

iv）**出土遺物**：７ａ層に関係する遺物は、ＳＤ３（水路）出土の土師器坏１点（第164図１）と、７ａ層中より出土した土師器破片３点（第164図２他２点）樹木片４点である。

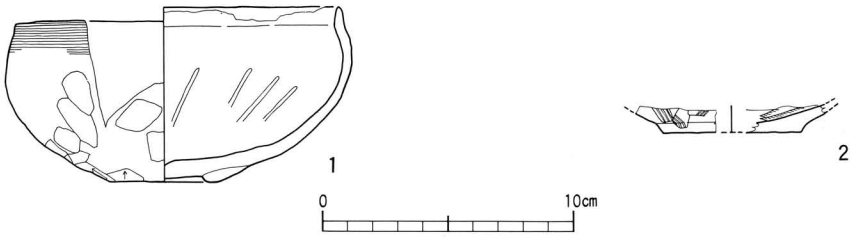
第164図１（写真223・353-5）：ＳＤ３（水路）底面から一括出土している。出土地点は、底面の段差のあるところのやや南寄りの西壁際である。20片程に割れて出土したが、復原するとほぼ完形となる。その出土状況は、底部がＳＤ３（水路）底面にほぼ密着し、口縁部及び体部破片が主に内面を上にして底面・ＳＤ３（水路）壁面からやや浮いた状態であり、出土地点においてやや斜め上方から力が加わって割れたことを想定させる。この土師器坏は、体部がやや丸味をもって立ち上がり、口縁部はほぼ直立する器形で、口縁部と体部の境には内面に弱い稜が形成されている。底部は、縁辺に粘土を貼りつけて上げ底気味にしている。器厚は体部で４mm、口縁部で２～３mmである。口径13.2～12.6cm、底径４cm、器高6.7cm、最大径は体部中位にあり、13.8cmを測る。器形は全体としてやや歪んでいる。調整は、外面が体部下半ヘラケズリ、口縁部～体部上半ヨコナデ、内面は体部にヘラミガキがなされている。体部下半のヘラケズリでは、底部に貼りつけられた粘土を一部削っている。製作にロクロは使用されていない。

第164図２：土師器壺あるいは甕の底部破片である。Ｄ－14bグリッド、水田㊹において７ａ層

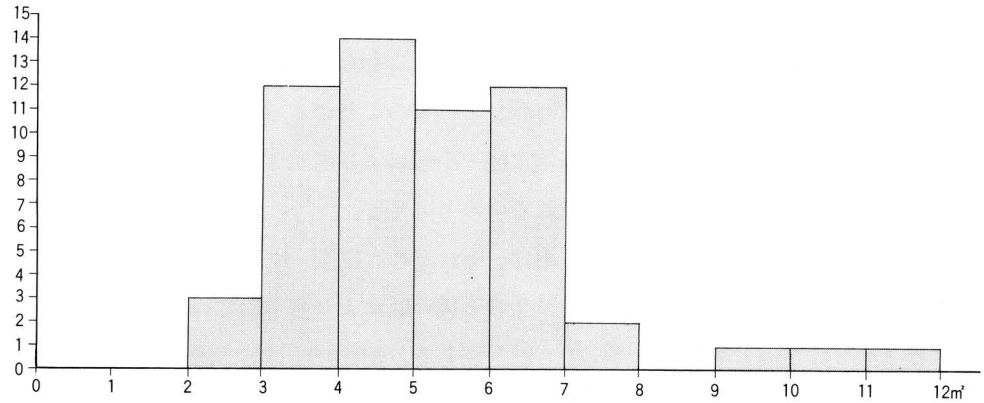




第163図　Ⅴ区７ａ層水田跡ＳＤ３（水路）遺物出土状況平面図



第164図　Ⅴ区７ａ層出土遺物実測図



第165図　Ⅴ区７ａ層水田跡・水田面積

中より出土している。調整は外面刷毛目、内面はヘラナデがなされている。製作にロクロは使用されていない。

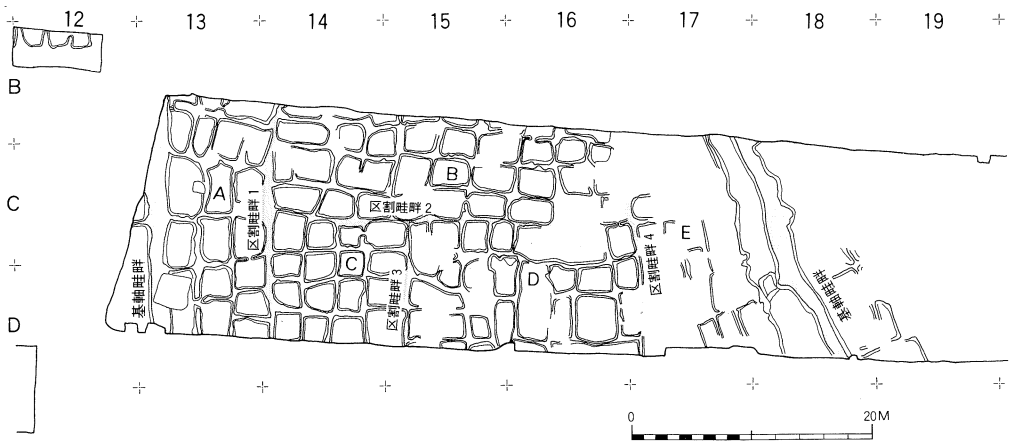
また他２点の土師器破片は甕口縁部破片と甕体部破片であり、共に製作にロクロは使用されていない。

ｖ）**７ａ層水田跡について**：７ａ層水田跡は大畦・小畦・水路・畦畔により区画された水田により構成されており、水田一区画の面積は平均5.26m² である。この水田跡では、水田を区画する畦畔は十字形あるいはＴ字形に交わるが、小畦の中には大畦に平行あるいは直交し、直線的に10m あるいはそれ以上伸びるものが数条見られる。これらの小畦については、水田を作る際に大畦と大畦の間をいくつかに分けるために設けられた畦畔の可能性がある。それは、これらの畦畔によって分けられた区画の中では、水田の形態が各区画間でやや異なることによる。ここでは、これらの小畦に対して「区画畦畔」とし、区割された区画を「中区画」と称することにする。第166図のように７a層水田跡では区割畦畔は４条認められ、それらによって５つの中区画の存在を看取できる（区割畦畔１～４、中区画Ａ～Ｅ）。各中区画内における水田の形態については、①中区画Ａでは大畦１と区割畦畔１の方向性に各水田の東西辺がほぼ一致しており、水田の形態は南北方向に長い傾向がある。②中区画Ｂ・Ｃ・Ｄでの水田の形態は方形を基調としているが、中区画Ｂでは東西方向に長いものが部分的に見られること、中区画Ｃでは正方形を基調としていること、中区画Ｄでは不整形のものが多く見られるなどの差異がある。③中区画Ｅでは大畦２・水路と区割畦畔４の方向性に各水田の東西辺がほぼ一致しており、水田形態は南北方向に長い傾向があるという特徴がみられる。水田の規模については、中区画Ａ・Ｄにおいて大小の差が大きいが、中区画間での差はさほどない。

さて、７ａ層水田跡では畦畔の機能という点において小畦に区割畦畔の存在が明らかとなったが、他の小畦については水田を区画するという機能において「区画畦畔」と称するべきもの

である。また大畦については、区割畦畔１・４の方向性が大畦とほぼ一致すること、水路を付設しているものがあること、規模が小畦に比べて大きいことなどから、水田を作るに際して基軸となる機能が考えられることから「基軸畦畔」と称することにする。以上のように７ａ層水田跡の水田区画は、畦畔の形態・規模からは大畦・小畦により構成されており、機能的には基軸畦畔・区割畦畔・区画畦畔により構成されているといえる。

これらの機能の異なる畦畔による水田区画は、それぞれ大区画・中区画・小区画とそれる。７ａ層水田跡で検出された大区画は東西を２条の基軸畦畔により画されている。この基軸畦畔である大畦１・２の方向は等高線に直交する傾向がある。基軸畦畔はその直下に擬似畦畔Ｂを伴うことから「動かない畦畔」として水田を作るに際して、立地・地形を考慮し、水田域全体において基本的な水田区画を構成するものと考えられる。７ａ層水田跡では、おそらく調査区の北方・南方に等高線と平行する基軸畦畔の存在が想定される。次に中区画は、大区画をいくつかに区割するため設けられている。７ａ層水田跡では調査区内に方形を基調とする５区画が認められるが、４辺が全て検出されたものはなく中区画の面積は不明である。中区画は前述のようにその区画内における小区画がそれぞれ異なっていることや、区画畦畔の方向が、区割畦畔、基軸畦畔と同様の方向を示す部分があることから区画畦畔に先行して設けられたものであることを示している。各中区画における水田面の高低差は第159図のように９～12cm 未満であり、全体の形状が把握されたとしてもそれほどの勾配をもたないものと推測される。中でも中区画Ｃにおいては高低差９ cm、各小区画の標高測点値の集中する分布域では高低差５ cm 程である。中区画内における水田面の勾配が極めて緩やかなものであることが知られる。これらのことから大区画内における区割区画の存在理由は、①小区画をなす単位であること、②小区画で行なうには非効率的な作業等を行なう単位でもあることが考えられ、中区画にはその単位の設定という機能が考えられる。最後に小区画は、中区画内に区画畦畔によって作られる。前



第166図　Ⅴ区７ａ層水田跡区割図

述のように、この小区画は地形に規制された中での用水の流れや水田面の高低差に起因する面は少ないと考えられる。小区画の平均面積5.26m² は水田に関わる全ての作業を行なうには非効率的なものといえる。小区画の存在理由は①水田面より低平化、②畦畔に吸収された地温により、水温の上昇・保温を計ること、③用水の流れを複雑、かつ緩慢な停滞的状況を作り、水温の上昇・保温、及び保水を計ることが考えられる。これらは全て作物の生育条件を向上させる点に意義があるもので、小区画の機能とされる。

また水田土壌である７ａ層は粘土層であり、下層の７ｂ層、７ｃ層あるいは８層は泥炭質粘土層である。７ａ層・７ｂ層・７ｃ層・８層の各層中には７ａ層水田跡に伴う酸化鉄の集積層は認められない。また７ａ層の下面は極めて乱れており、これは７ａ層水田の耕作によるものと考えられる。７ａ層水田は床土を形成しておらず、湿田あるいはそれに近いものと判断される。しかし水田面に残された牛の足跡の状況から、７ａ層水田跡は比較的乾いた状態になること、大畦２に付設された水路の存在から、ある程度の給配水機能を備えた水田形態を示している。水田跡の時期については水路出土の土師器坏（第164図１）から古墳時代南小泉式期に所属するものと考えられる。

②７層中で検出された帯状の酸化鉄の集積（第167図、写真227）：ＶＡ区の７層中位において、帯状に走る酸化鉄の集積を検出した。この酸化鉄の集積は方向性が真北を基準とする傾向がみられ、幅は40～65cm である。酸化鉄の幅は水田の畦畔の幅を直接示すとは考えられないため、ここでは確認された水田の区画を示すにとどめる。確認された水田は４枚である。水田１枚の面積のわかるものはないが、37m² 以上、72m²以上、121m² 以上、127m² 以上と57m² 以上のものであり、東西方向に細長い傾向が水田①・②に認められる。

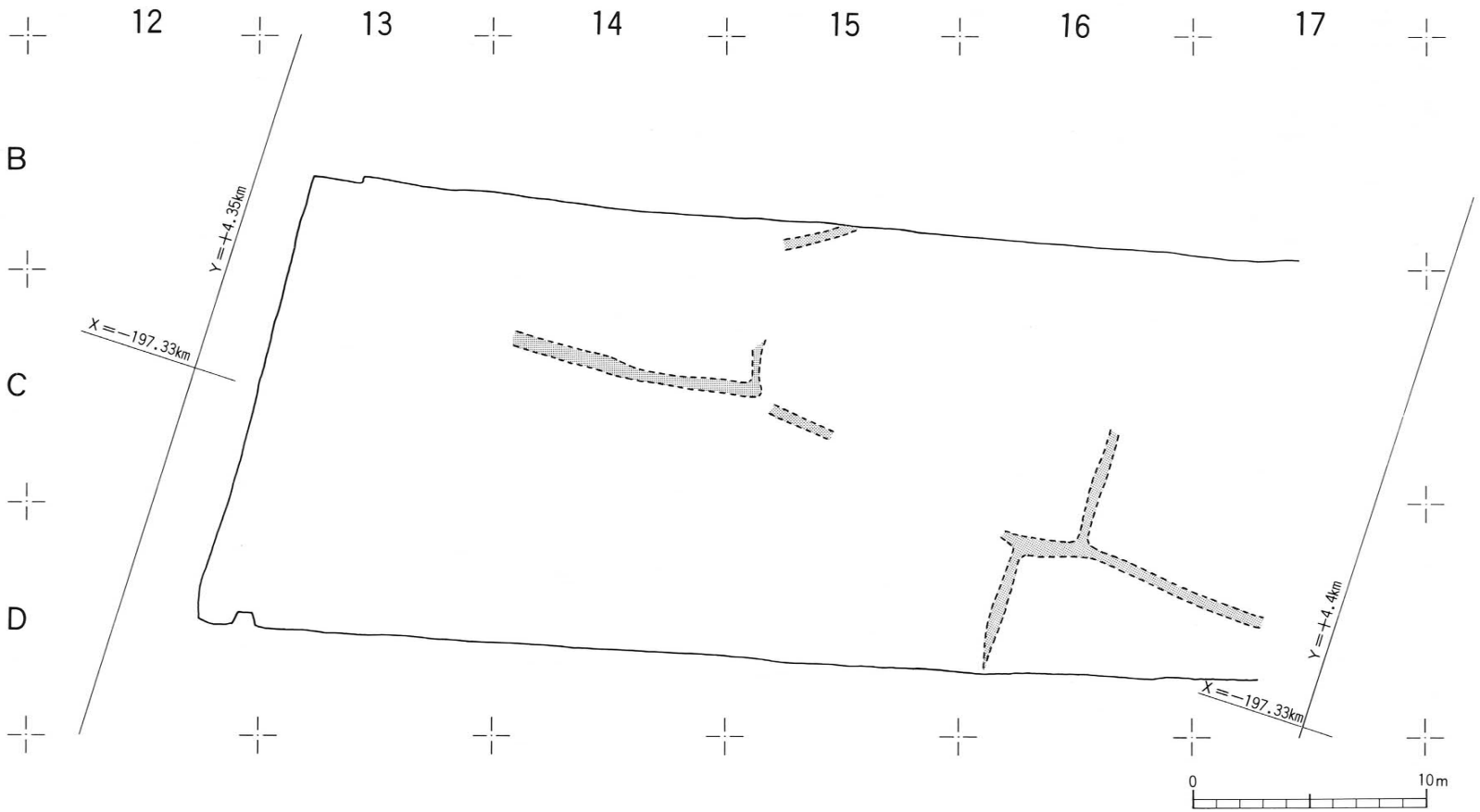
この酸化鉄の帯については、ある時期の畦畔の位置を示していると考えられるが、７a層中での酸化鉄の存在から、酸化鉄の形成は７ａ層より上位の層においてと推定される。Ｖ区西半部では、３ｂ・４ｂ・５ａ・６層の各時期の水田跡の畦畔の位置はいずれも酸化鉄の帯のプランとは異なり、どの層を耕作土とした水田跡かについては不明である。

13. ６層の調査

(1) 調査概要

①６層の分布・土性：６層はⅣ区とＶ区に分布する。層厚はⅣ区Ｄ－29グリッドで５～10cm、Ｖ区Ｄ－20グリッドで15～20cm、Ｄ－13グリッドで約10cm である。層相はⅣ区Ｄ－29グリッドにおいては2.5Ｙ5/3黄褐色シルトであるが、Ｖ区Ｄ－20グリッドでは10YR6/1 褐灰色粘土である。

②６層上面の標高・地形：６層上面の標高はⅣ区南東部Ｄ－29・30グリッドで9.58～9.36m、Ｖ区Ｄ－20・21グリッドで9.63～9.38m、Ｄ－13・14グリッドで9.53～9.40m である。



第167図　Ⅴ区７ａ層中酸化鉄分布範囲平面図

③検出遺構と出土遺物：Ⅳ区では6層上面において溝跡2条（ＳＤ4・ＳＤ5）が検出されている。ＳＤ4とＳＤ5には新旧関係があり、ＳＤ5がＳＤ4より新しい。遺物はＳＤ4の堆積土中からは土師器5点、ＳＤ5の堆積土中からは土師器片1点が出土しており、基本層6層中からは石器1点、土師器片14点が出土している。Ⅴ区では6層上面において水田跡を検出している。また6層をやや削り込んだ段階で溝跡1条（ＳＤ6）を検出している。

⑵　Ⅳ区の調査（第168～171図、写真229～236）

①ＳＤ4：ＳＤ4はⅣ区調査東部、Ｂ・Ｃ・Ｄ－29・30グリッドに位置する。6層上面で確認された。ＳＤ4の方向性は東方へ張り出す弧状をなしており、検出長は約30mである。断面形は扁平な舟底形を呈しており、中央部が一段低くなっている。上端幅は3.32～5.08m、下端幅は20～55cmである。深さは65～95cmで、中央部がやや深い。底面の標高は北端部で8.80m、中央部で8.45～8.60mで、北方に高く南方に低い。底面にはやや凹凸がみられる。埋土は10層認められ、その状況から自然堆積により埋まったものと考えられる。

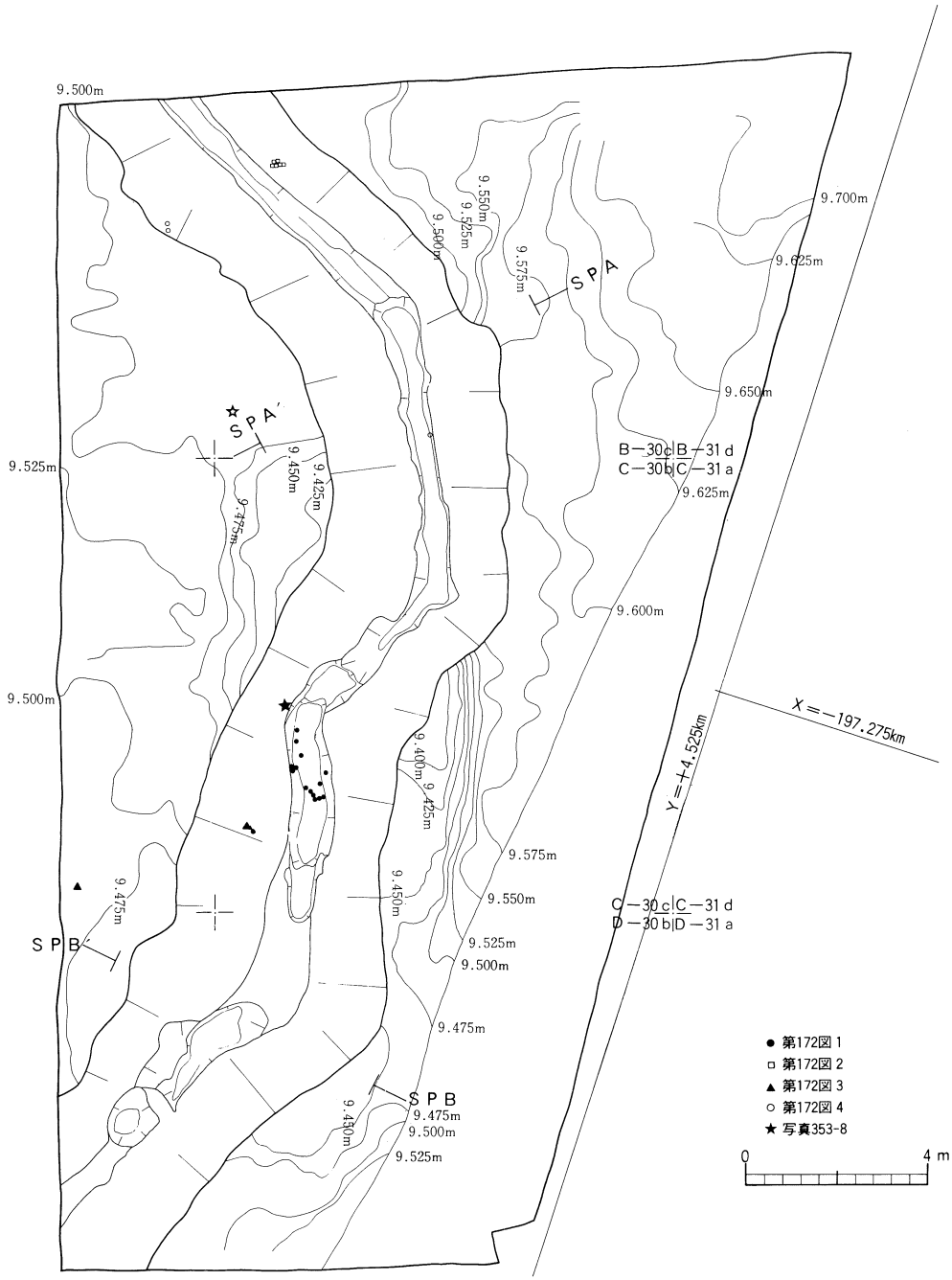
出土遺物は、埋土中から土師器5点（第172図1～5、写真353－6～10）が出土している。

第172図1（写真353-6）：ＳＤ4中央部の埋土中から出土した15点と基本層6層中より出土した1点が接合したものである。残存状況は全体の約4/5である。器形は体部が丸味をもって立ち上がり、口縁部が外傾する坏である。底部は上げ底気味である。口縁直下の内面には弱い稜が形成されている。器厚は底部で8 mm、体部から口縁にかけては5～6 mmである。推定で口径13.2cm、器高6.4cm、を測る。調整は、外面口縁部付近が横ナデ、内面は横ナデの後放射状のヘラミガキがなされている。

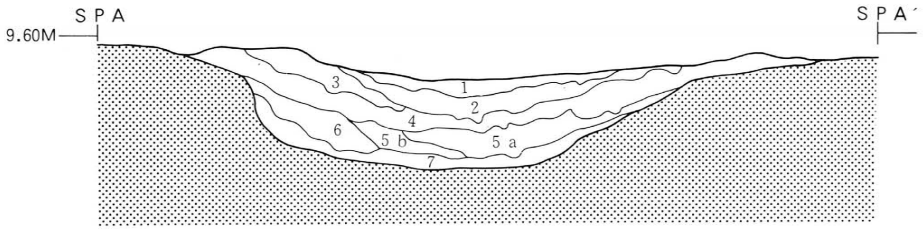
第172図2（写真353～7）：ＳＤ4の北端部の埋土中から出土した6点と基本層4層中より出土した1点が接合したものである。残存状況は全体の約1/5である。器形は体部下半が内弯気味に外傾し、体部中位で屈曲して口縁部から体部上半がほぼ垂直に立ち上がる坏である。屈曲部の外面には弱い稜を形成している。器厚は底部付近で8 mm、体部から口縁部にかけては4～7 mmであり、推定口径13.7cmである。調整は、外面の口縁部から体部上半にかけて横ナデ、体部下半はヘラナデ、内面は横ナデの後、放射状のヘラミガキがなされている。

第172図3（写真353-9）：ＳＤ4中央部の埋土中から出土した2点が接合したものである。壺の口縁部破片である。器形は頸部からの立ち上がりは外反気味であるが、口縁部上半はわずかに内弯する。器厚は5～7 mmであり、推定口径は10.6cmである。調整は外面に横ナデがなされている。

第172図4（写真353－10）：ＳＤ4北端部の埋土中から出土した2点が接合したものである。甕の口縁部破片である。器形は口縁部が外反しており、内面には口縁部と体部の境に弱い稜を形成している。器厚は3～10mmであり、推定口径18.1cmである。調整は、外面が刷毛目の後横ナデ、

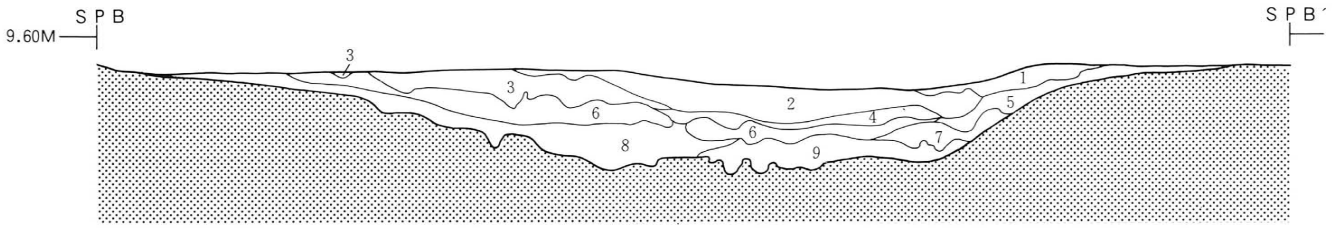


第168図　Ⅳ区６層上面ＳＤ４平面図



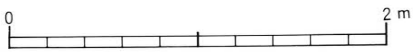
土層註記

1　2.5Y7/3浅黄色シルト　酸化鉄・マンガンを含む。
2　5Y5/1灰白色シルト　10YR5/1褐灰色の粘土との互層になっている。酸化鉄・マンガンを含む。
3　10YR5/1褐灰色粘土　全体に酸化鉄・マンガンを多量に含む、灰白色土の2㎝前後のブロックを含む。
4　10YR5/1褐灰色粘土　全体に酸化鉄・マンガン・炭化物を含み、特に下部に多量の炭化物を含む。
5a　2.5Y5/1黄灰色粘土　全体に炭化物と少量の酸化鉄を含む。
5b　5Y5/1灰色粘土　全体に少量の酸化鉄・マンガン・炭化物を含む。
6　2.5Y7/3黄色粘土　酸化鉄・マンガンを含む。
7　5Y5/1灰色　全体に多量の酸化鉄を含む。斑に炭化物を含む。

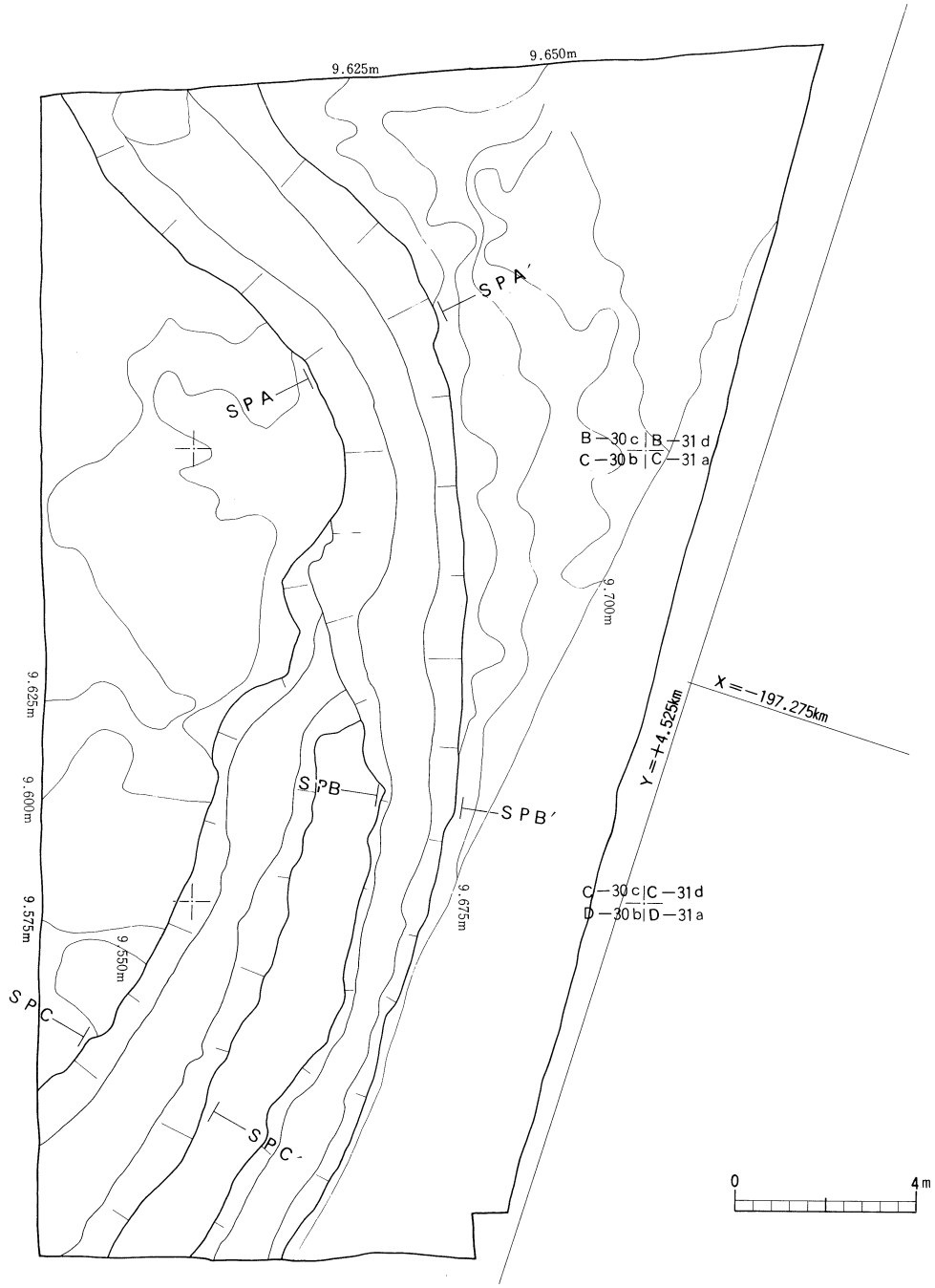


土層註記

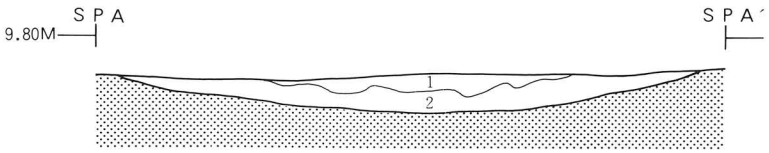
1　10YR5/1褐灰色　酸化鉄・マンガンを含む。
2　5Y5/1灰白色シルト　10YR5/1褐灰色の粘土との互層になっている。酸化鉄・マンガンを含む。
3　2.5Y5/1黄灰色粘土　酸化鉄・マンガンを含み、2㎝前後の灰白色のブロックを含む。
4　2.5Y5/1暗灰黄色粘土　少量の酸化鉄と炭化物を含み、マンガンを含む。
5　10YR5/1灰黄褐色粘土　炭化物を含み、帯状に灰白色土を含む。
6　10YR5/1褐灰色粘土　全体に酸化鉄・マンガン・炭化物を含み、特に下部に多量の炭化物を含む。
7　2.5Y5/1灰黄色粘土　下部に多量の炭化物を含み、全体に2㎝前後の灰白色土のブロックを含む。
8　2.5Y7/3黄色粘土　全体に少量の炭化物と酸化鉄を含む。
9　5Y5/1灰色粘土　全体に少量の酸化鉄を含む。



第169図　Ⅳ区6層上面ＳＤ4セクション図

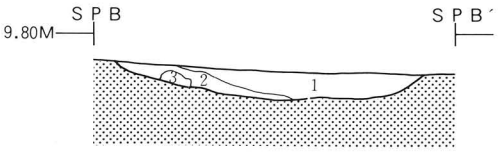


第170図　Ⅳ区６層上面ＳＤ５平面図



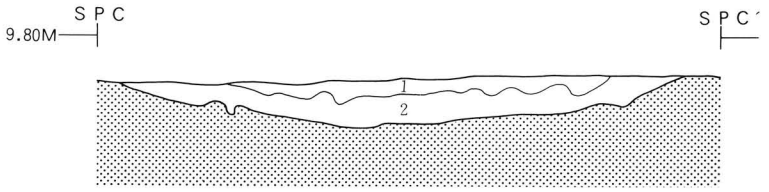
土層註記

1　10YR3/1黒褐色粘性シルト　マンガンがわずかながら見られる。浅黄色がほんのわずか斑点状に見られる。
2　10YR4/1褐灰色粘土　浅黄色が相互に入っている。マンガンと酸化鉄がところどころに見られる。



土層註記

1　2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土　浅黄色が少量まだらに入っている。酸化鉄とマンガンがところどころ薄く見られる。
2　5Y4/1灰色シルト質粘土　マンガンと酸化鉄が全体的に薄く含まれている。
3　2.5Y7/3浅黄色粘性シルト　酸化鉄が全体的に見られる灰色が部分的に見られる。



土層註記

1　10YR4/1褐灰色シルト質粘土　酸化鉄とマンガンが全体的に薄くみられる。
2　10YR3/1黒褐色粘性シルト　浅黄色シルトを全体的にまだらに含むが底面付近では少ない。また酸化鉄とマンガンを全体的にやや含む。

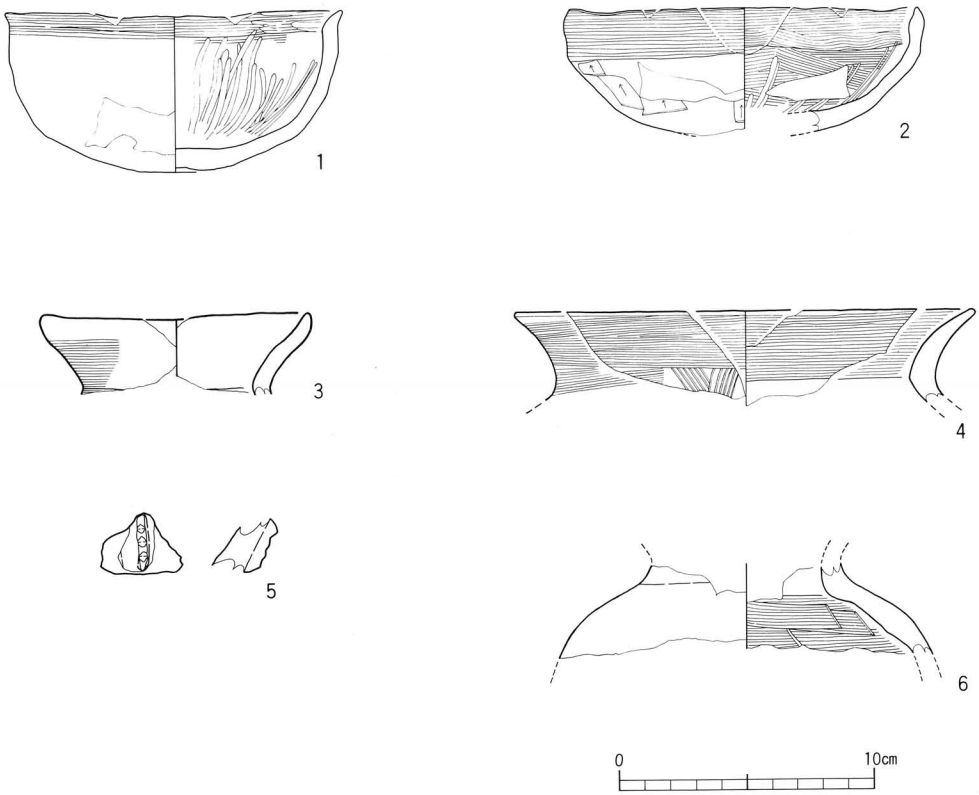
第171図　Ⅳ区6層上面SD5セクション図

内面には横ナデがなされている。

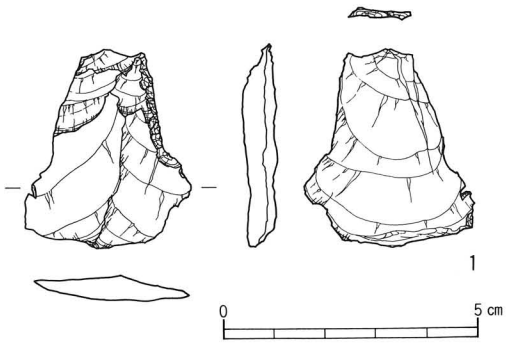
第172図５：ＳＤ４の埋土中より出土している。棒状浮文のある壺の口縁部破片である。棒状浮文には刺突が３ケ所みられる。

写真353-8：ＳＤ－４中央部の埋土中から出土した土師器甕あるいは壺の体部破片である。前述のようにＤ－30dグリッド基本層７ｂ層上面出土の破片（☆）と接合する。

これらの出土遺物の中で第172図1～4は南小泉式、第172図5は塩釜式に所属するものと考え



第172図　Ⅳ区６層上面ＳＤ４・ＳＤ５出土遺物実測図



第173図　Ⅳ区６層出土遺物実測図

られる。

②ＳＤ５：ＳＤ５はⅣ区東部、Ｂ・Ｃ・Ｄ－29・30グリッドに位置する。６層上面で確認された。ＳＤ５の方向性は東方へ張り出す弧状をなしており、南半部では２条に分かれている。検出長は約30m である。断面形は扁平なレンズ状を呈している。上端幅は北半部で2.44～3.86m、南半部で0.96～3.36m、下端幅は北半部で0.86～1.86m、南半部で0.60～1.90mである。深さは北端部で16cm、南半部では８～30cm である。底面の標高は北端部で9.46m、中央部で9.33m、南端部では東側の溝が9.53m、西側の溝が9.32m である。底面はほぼ平坦である。埋土は３層認められ、その状況から自然堆積により埋まったものと考えられる。

出土遺物は、埋土中から土師器１点（第172図６、写真353－11）が出土している。

第172図６（写真353－11）：ＳＤ５南半部の西側の溝の埋土中から出土した２点が接合したものである。壺の体上半部の破片である。器厚は７～10mm である。調整は内面に横ナデがなされている。南小泉式に所属するものと考えられる。

③出土遺物：基本層６層からは石器１点第173図１、土師器破片14点が出土している。土師器破片は細片のため図示できないが、製作にロクロを使用しており、内面に黒色処理がなされている坏の破片が主である。

第173図１（写真352-5）：Ｂ－30bグリッド、６層中より出土した２次加工のある剝片である。表面右側縁に２次加工痕が認められる。また上端には折れ面がみられる。石質は流紋岩である。

④ＳＤ４・ＳＤ５について：ＳＤ４及びＳＤ５からは塩釜式あるいは南小泉式に属する土師器が出土しているが、写真353-8にみるように、７ｂ層上面のものと接合する例があることから、これらの遺物は直接ＳＤ４とＳＤ５の時期を示すものと判断されない。

⑶　Ｖ区の調査（第174・175図、写真237～242）

①６層水田跡

ⅰ）**検出状況**：水田跡はＣ・Ｄ－19グリッド以西全域で検出された。

ⅱ）**水田の構成**：６層水田跡は、幅80～220cm の畦畔と、これらの畦畔によって区画された水田から構成される。また畦畔の方向は真北を基準としている傾向がみられ、畦畔はほぼ東西・南北方向を示す。水田は16枚検出されており、各水田は①～⑯の番号に示した。また畦畔についても畦畔１～12とした。６層水田跡の水田域はＶＥ区には伸びず、北方・南方へ広がっており、東方については不明がある。尚、水口・水路及び足跡は検出されていない。

ａ．畦畔：畦畔は周囲の土を盛って作られている土盛り畦畔である。畦畔の規模による大小の差は認められない。各畦畔の方向性は直線的であり、方向は真北を基準としている傾向がみられる。上端幅は40～80cm、下端幅は80～220cm を測る。水田面との比高差は２～５ cm である。

ｂ．区画：水田１枚毎に区画は畦畔によってなされており、16枚の水田が検出された。畦畔10

の西側では東西方向にはほぼ直線的に伸びる畦畔３・４と、それとＴ字形あるいは十字形に変わる畦畔７・８・９により水田③・④・⑥の区画が明らかとなっている。これら３枚の水田の平面形は東西方向に長い長方形を基調としており、水田面積は水田③が168.3m²、水田④が推定77.1m²、水田⑥が推定168.3m²を測る。また畦畔10と畦畔12の間では水田⑬（面積38.4m²）にみられるように、畦畔10の西方の水田よりはやや小さな区画がなされている。畦畔12の東方の区画は不明である。

iii）**出土遺物**：６層に関係する遺物は畦畔12の南半部とその付近から土師器破片４点、須恵器破片３点が出土している。土師器破片は全て坏の破片であり、製作にロクロを使用しており、内面は黒色処理がなされている。須恵器破片も全て坏の破片である。

iv）**６層水田跡について**：６層水田跡は畦畔と水田により構成されており、畦畔の方向性は真北を基準としている傾向がみられる。水田一区画の面積は、畦畔10の西方では推定77.1m²のものと168.3m²のものが認められ、畦畔10と畦畔12の間では38.4m²のものが認められた。水田土壌である６層はシルト質粘土であり、層中には砂粒を含み酸化鉄斑が見られる。下層の７ａ層中には６層水田跡に伴う酸化鉄の集積層は認められず、６層水田は湿田あるいはそれに近いものと判断される。水田跡の時期については畦畔12南半部出土の土師器坏の破片により平安時代表杉ノ入式期に所属するものと考えられ、後述する５ａ層水田跡が10世紀前半と考えられる灰白色火山灰降下前後の水田跡であることから、それ以前の時期と位置付けられる。また、水田区画は真北方向を基準とする傾向がみられ、条里型土地割との関連が考えられる。

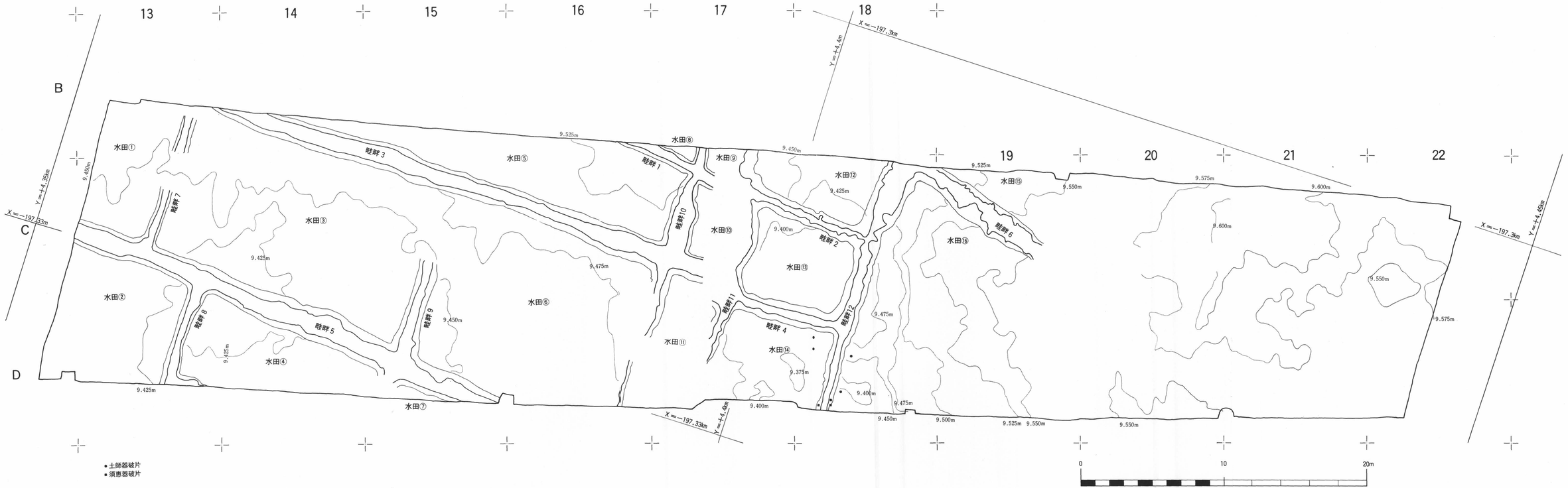
②**ＳＤ６**：ＳＤ６はＶ区中央やや東寄りの北半部、Ｃ－18・19・20グリッドに位置する。６層をやや削り込んだ段階で確認された。ＳＤ６はＣ－20dグリッドにおいて大きく曲がってはいるが、方向性はほぼ直線的でＮ－78°－WとＮ－5°－Wの２方向を示す。検出長は約28.5mである。断面形は「コ」の字形を呈している。上端幅は26～42cm、下端幅は14～38cmで、深さは9.3cmである。底面の標高はＣ－18グリッドで9.30m、Ｃ－19グリッドで9.25～9.40m、Ｃ－20グリッドで9.20～9.25mである。底面はほぼ平坦である。埋土は単層であり、基本層６層、７ａ層がブロック状に見られ、人為的に埋まったものと考えられる。

14. ５ａ層の調査

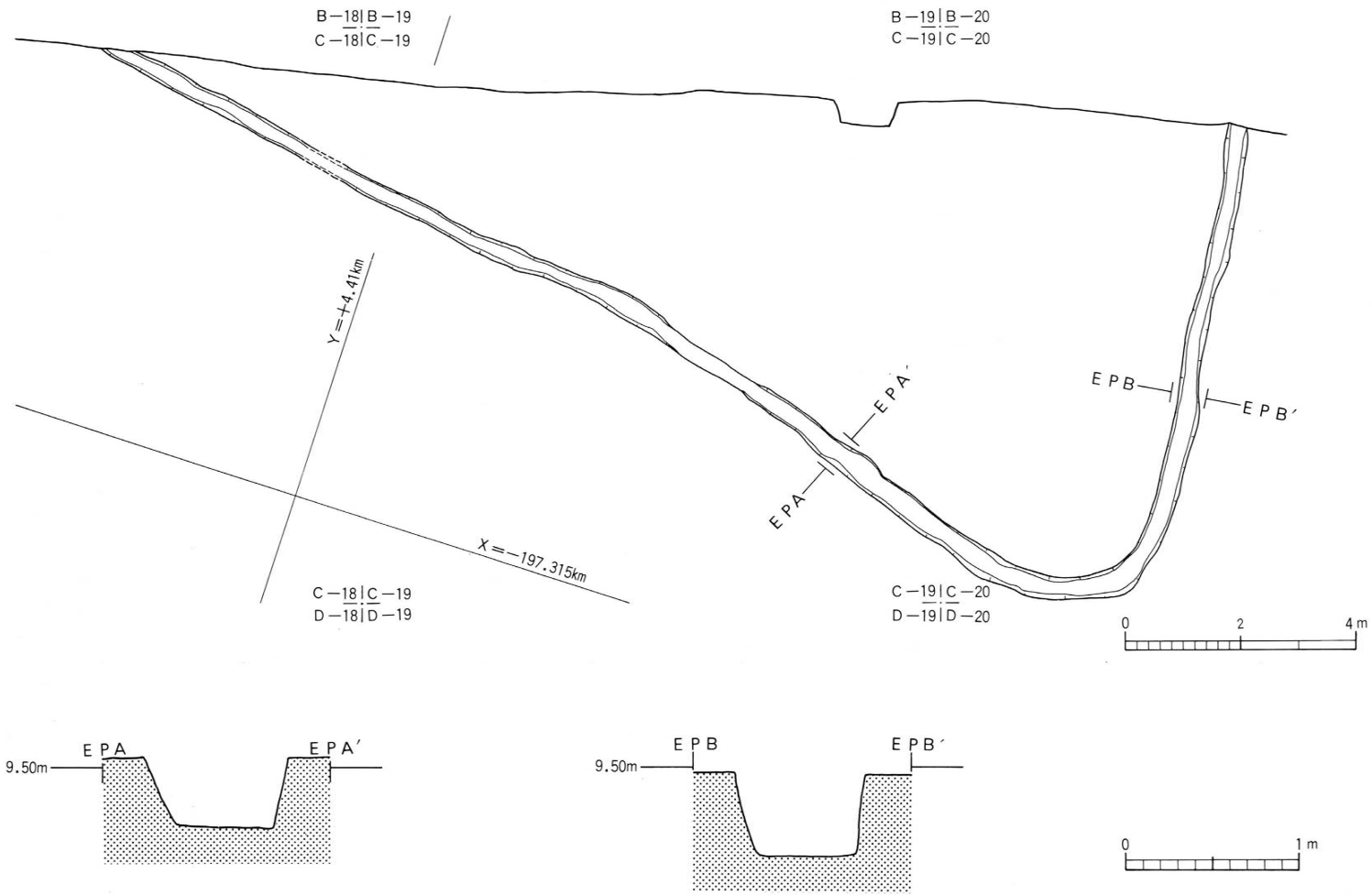
(1) 調査概要

①**５ａ層の分布・土性**：５ａ層はIV区とＶ区に分布する。層厚はIV区Ｄ－29グリッドで３～５cm、Ｖ区Ｄ－20グリッドで３～５cm、Ｄ－13グリッドで８～15cmである。層相はIV区Ｄ－29グリッドにおいては2.5Y5/2灰褐色粘土質シルトであるが、Ｄ－20グリッドでは2.5Y5/1黄灰色粘土である。

②**５ａ層上面の標高と地形**：５ａ層上面の標高はIV区南東部Ｄ－29・30グリッドで9.71～9.61



第174図　Ⅴ区６層水田跡平面図



第175図　Ⅴ区６層上面ＳＤ６平面図・エレベーション図

m、V区D－20・21グリッドで9.73～9.63m、D－13・14グリッドで9.63～9.49mである。

③検出遺構と出土遺物：5 a層上面においてIV区とV区で水田跡を検出している。遺物は5 a層上面及び5 a層中において須恵器4点、土師器破片80点、須恵器破片22点、赤焼土器破片2点、土師器か須恵器か赤焼土器のいずれの破片3点が出土しており、V区では土師器3点須恵器4点、土師器破片73点、須恵器破片5点が出土している。

(2) IV区の調査（第176図、写真243～245）

①5 a層水田跡

i）**検出状況**：5 a層水田跡はIV区北半部において検出されている。

ii）**水田の構成**：5 a層水田跡では畦畔2条（畦畔1・2）と、これにより区画された水田1枚（水田①）が検出されている。また水田跡に伴う足跡は検出されていない。

a．畦畔：畦畔は周囲の土を盛って作られている土盛り畦畔である。畦畔の方向性は真北を基準としている傾向がみられる。畦畔1は上端幅100～132cm、下端幅140～270cm、畦畔2は上端幅90～140cm、下端幅115～190cmであり、断面形は扁平な台形状をなす。水田面との比高差は畦畔1では北側で10～15cm、南側で10～20cm、畦畔2では東側で2～8 cm、西側2～6 cmである。畦畔1と畦畔2には規模の差が認められる。また2条の畦畔は共に所どころ途切れている。これは後世に畦畔に対して直交する方向から何らかの行為がなされた痕跡と考えられる。

b．区画：検出された水田①の面積は836m²以上であるが、この中に他の区画が存在している可能性がある。

iii）**出土遺物**：5 a層中及び5 a層上面からは土師器坏1点（第177図2）、土師器甕2点（第177図1・3）、須恵器坏4点（第177図5～8）、赤焼土器高台付坏1点（第177図4）の他、土師器・須恵器・赤焼土器の破片が出土している。

第177図1（写真353－18）：C－29cグリッド5 a層出土の4点と4 b層出土の1点の破片が接合した土師器甕である。分布の最大長60cm、分布の幅32cmである。

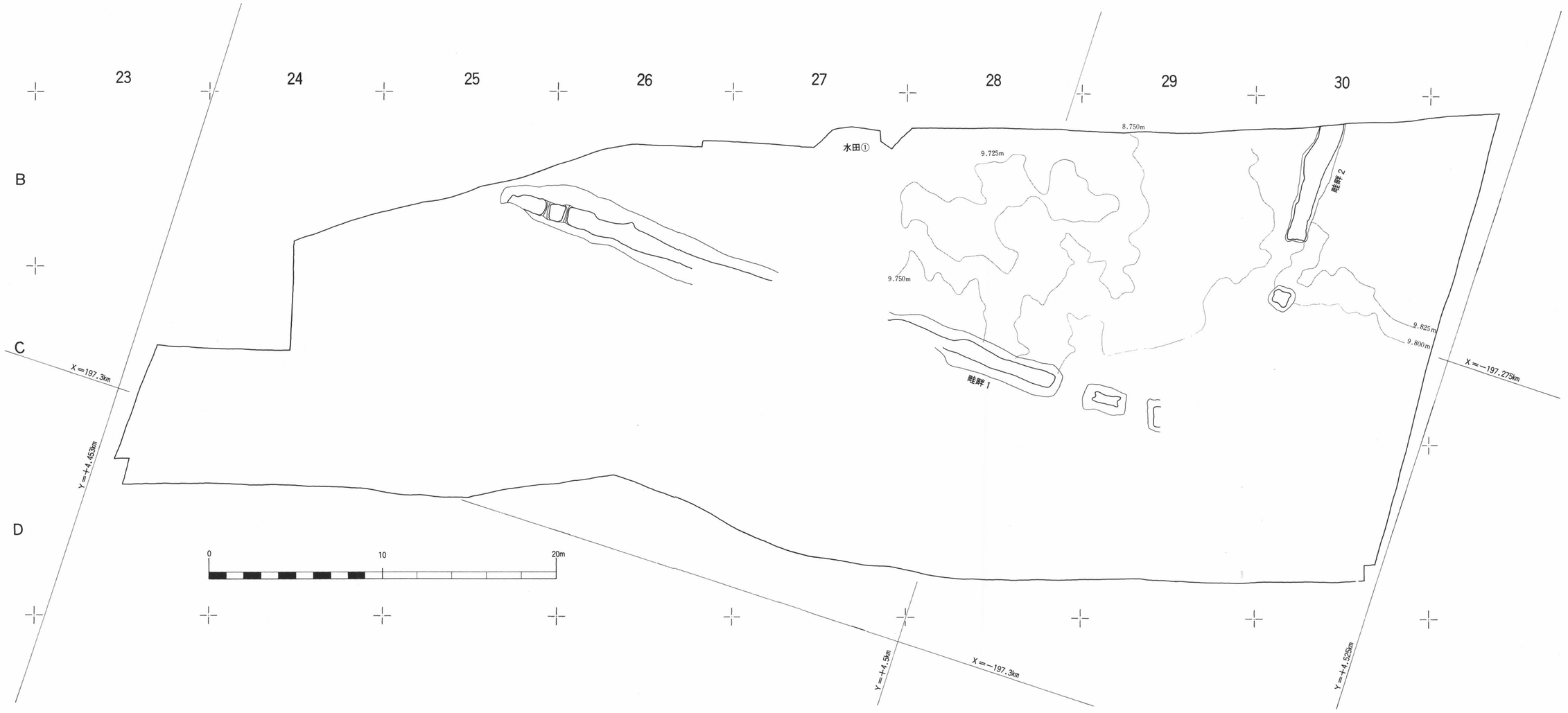
第177図2（写真353－19）：C－29cグリッド5 a層出土の3点と4 b層出土の1点の破片が接合した土師器坏である。分布の最大長50cm、分布の幅12cmである。

第177図3（写真353－20）：C－29・30グリッドにおいて5 a層出土の6点と4 b層出土の5点の破片が接合した土師器甕である。分布の最大長5.1m、分布の幅1.96mである。

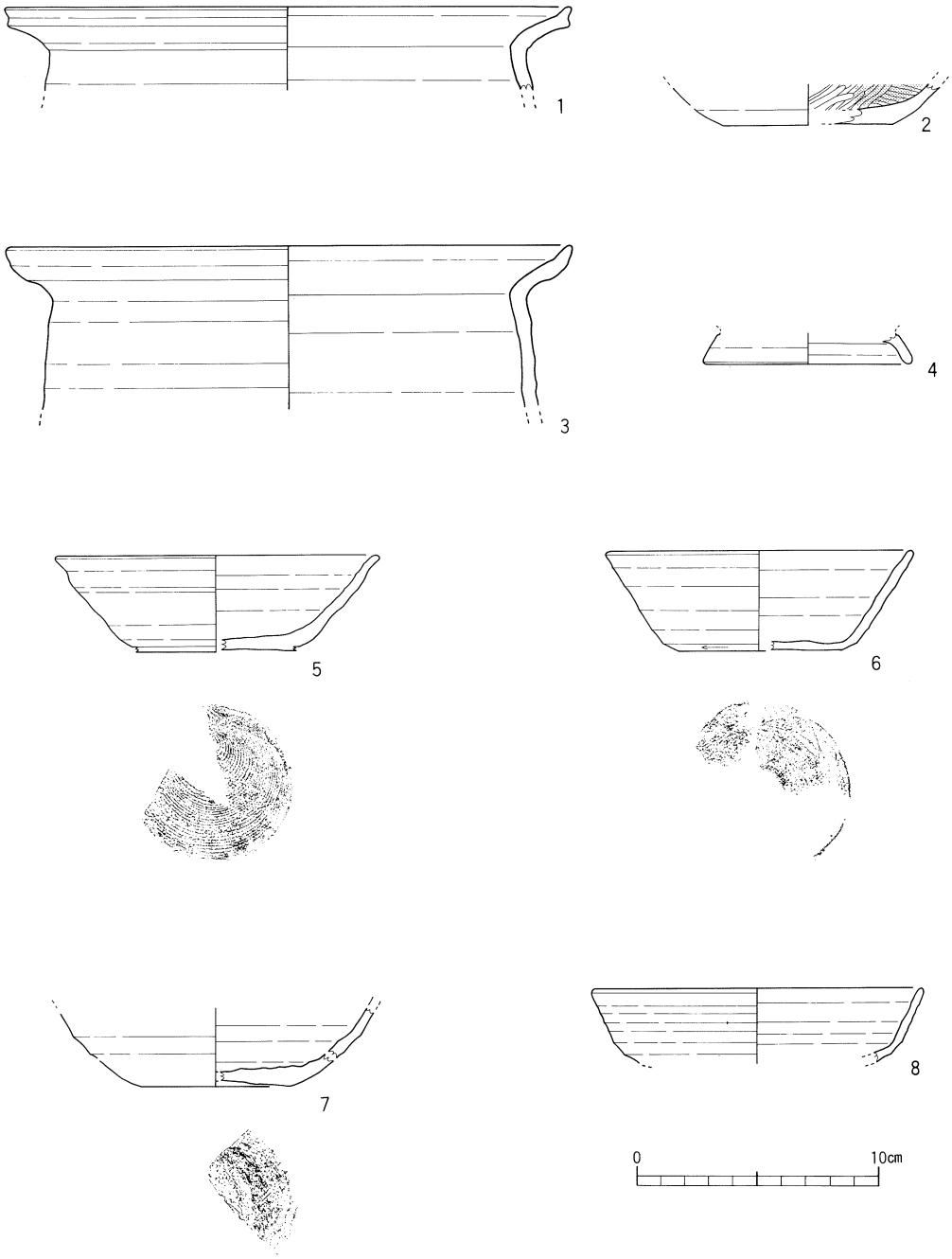
第177図7（写真355－16）：C－26cグリッドとC－26dグリッド5 a層出土の2点の破片が接合した須恵器坏である。2点間の距離は4.45mである。

第177図8（写真355－17）：D－29bグリッド5 a層出土の4点と4 b層出土の2点の破片が接合した須恵器　である。分布の最大長2.0m、分布の幅35cmである。

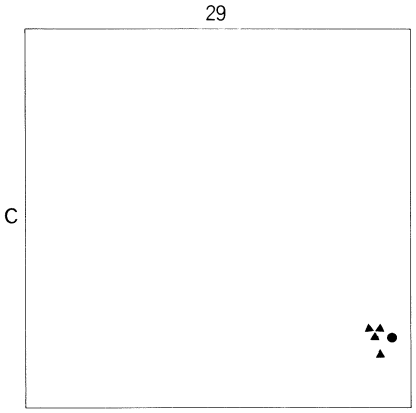
これらの遺物の中で第177図1・2・3・8の分布はD－29グリッド北東コーナ付近を中心に



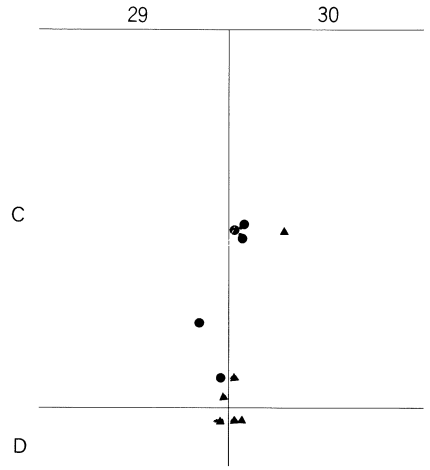
第176図　Ⅳ区５ａ層水田跡平面図



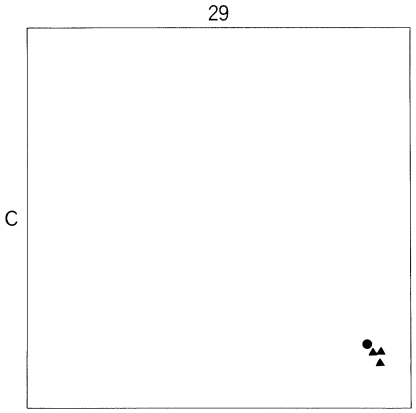
第177図　Ⅳ区５ａ層出土遺物実測図



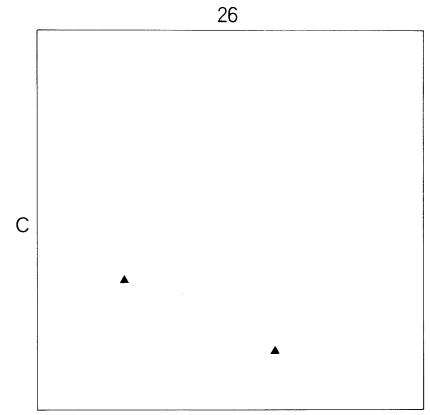
第177図 1



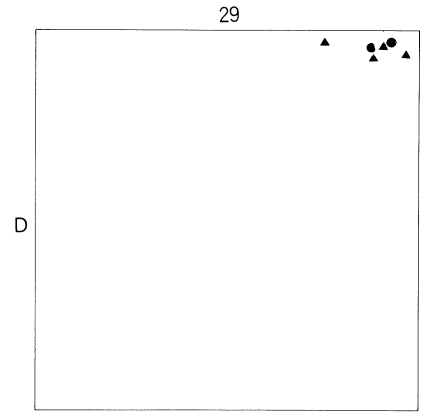
第177図 3



第177図 2



第177図 7



第177図 8

● 6層
▲ 5 a層

第178図　Ⅳ区５ａ層出土遺物接合分布図

第179図　Ⅴ区５ａ層水田跡平面図

分布している。この地点は畦畔１・２を延長するとその交差部分にあたるため、畦畔との関連も考えられる。

⑶　**Ｖ区の調査**（第179図、写真246～248）

①５ａ層水田跡

ｉ）**検出状況**：５ａ層水田跡はＶ区全域において検出されている。

ii）**水田の構成**：５a層水田跡は幅70－208cmの畦畔と、これらの畦畔によって区画された水田から構成される。また畦畔の方向は真北を基準としている傾向がみられ、畦畔はほぼ東西・南北方向を示す。水田は12枚検出されており、各水田は②～⑬の番号によって示した。また畦畔についても畦畔3～12とした。水路は検出されていないが水口が１ケ所検出されている。５ａ層水田跡の水田域は北方・南方へ広がっている。

ａ．畦畔：畦畔は周囲の土の盛って作られている土盛り畦畔である。畦畔の規模による大小の差は認められない。畦畔の方向性は直線的であり、方向は真北を基準としている傾向がみられ、畦畔８としては比較的規模が大きく上端幅40～131cm、下端幅122～208cmであり、他の畦畔は上端幅は23～130cm、下端幅は72～190cmを測る。水田面との比高差は畦畔では10cm前後であるが、他の畦畔では３～５cmである。また畦畔の直上には基本的に灰白色火山灰をのせている。

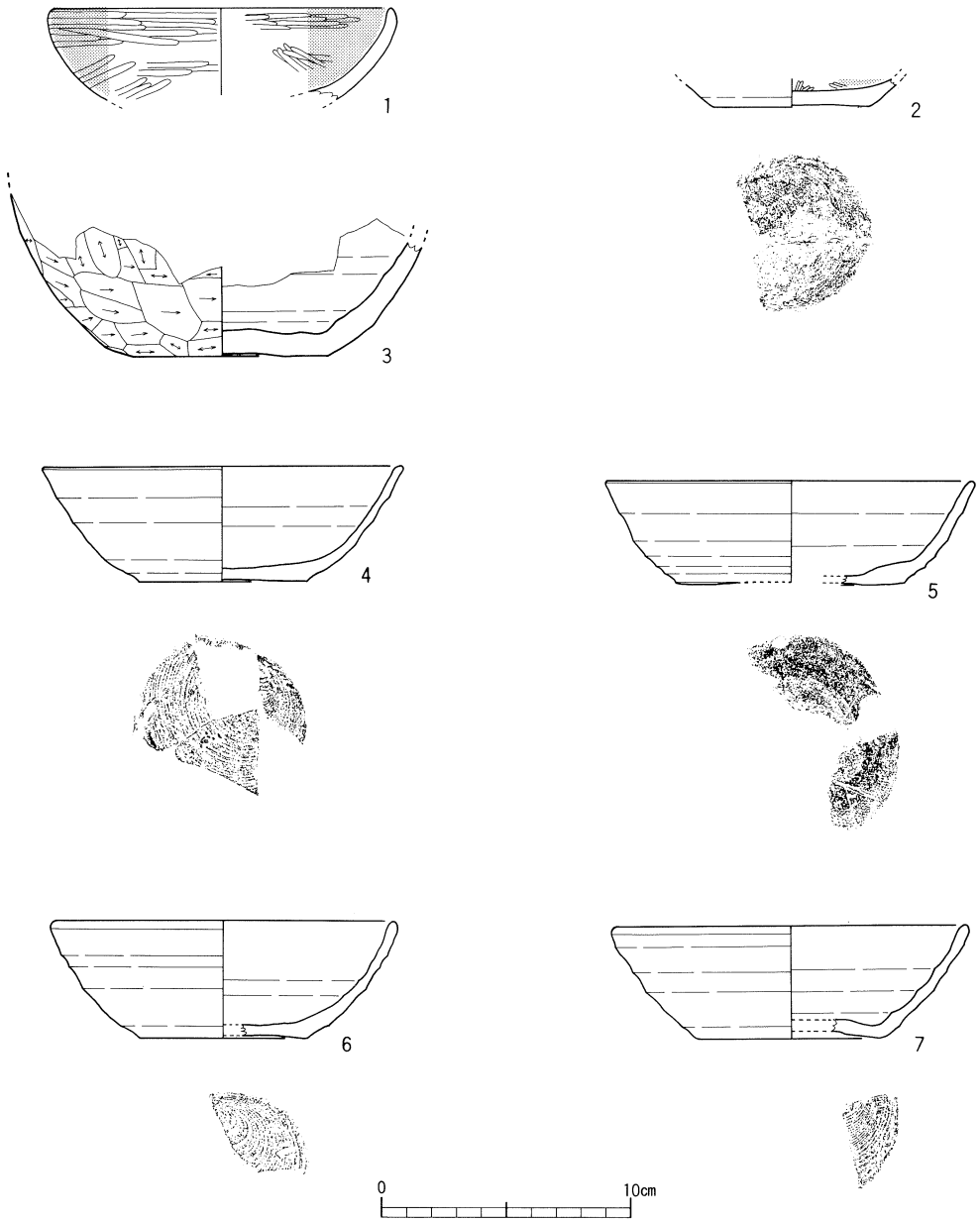
ｂ．区画：水田１枚毎の区画は畦畔によってなされており、12枚の水田が検出された。畦畔８の西側では東西方向にほぼ直線的に伸びる畦畔３・４・５と、それとＴ字形に交わる畦畔６・７により区画がなされている。水田の平面形は東西方向に長い長方形を基調としており、水田面積は水田⑦が85.4m²である。水田①（面積362.3m²以上）と水田②（面積577.3m²以上）が１枚の水田か否かについては、５ａ層水田跡の畦畔の残存状況が良好でない部分もあることから今後の課題とされる。また畦畔８の東側では南北方向にほぼ直線的に伸びる畦畔12と、それとＴ字形に交わる畦畔９・10・11により区画がなされている。水田の平面形は南北方向に長い長方形を基調としており、水田面積は水田⑨が160.8m²である。

iii）**水田面に残された足跡**：Ｄ－15グリッド北東コーナー付近で人間の足跡を１個検出している。この足跡には灰白色火山灰が入っており、長さは20.4cmである。

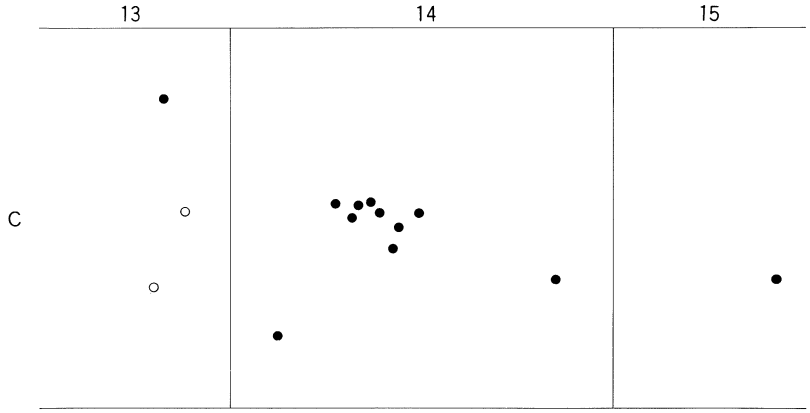
iv）**出土遺物**：５ａ層中及び５ａ層上面からは土師器坏２点（第180図１・２）、土師器甕１点（第180図３）、須恵器坏４点（第180図４～７）の他、土師器・須恵器の破片が出土している。

第180図１（写真353－21）：Ｃ－13cグリッド５ａ層中から出土した土師器坏である。この坏は製作にロクロが使用されてはおらず、内外面ともヘラミガキの後黒色処理がなされており、国分寺下層式の範疇に入るものと考えられる。

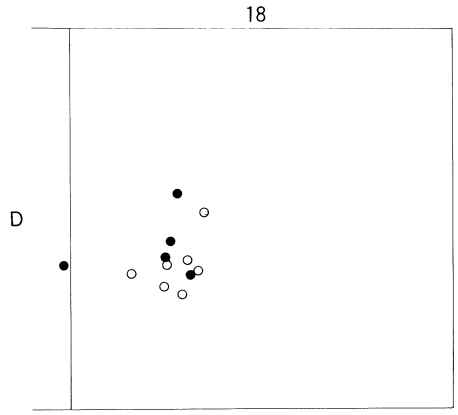
第180図２（写真353－22）：Ｃ－14bグリッドの畦畔４から出土した土師器坏である。底部が単独に出土している。



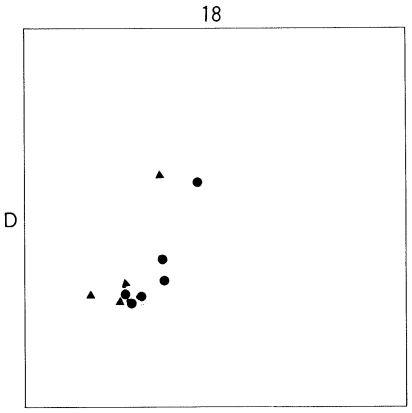
第180図　Ⅴ区５ａ層出土遺物実測図



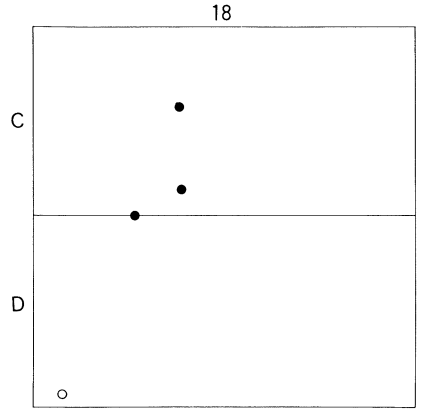
第180図 3



第180図 4



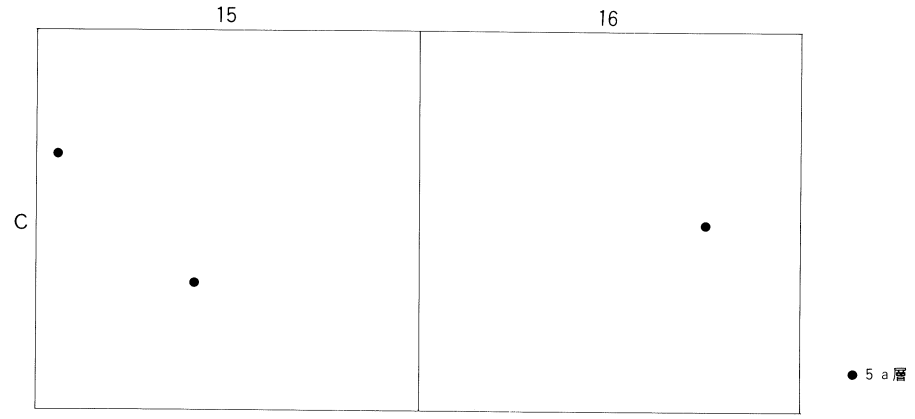
第180図 5



第180図 6

▲ 6層
● 5 a層
○ 4 b層

第181図　Ⅴ区５ａ層出土遺物接合分布図 (1)



第180図 7

第182図　Ⅴ区５ａ層出土遺物接合分布図 (2)

第180図３（写真353－23）：Ｃ－13～15グリッドにおいて５ａ層出土の12点と４ｂ層出土の２点の破片が接合した土師器甕である。分布の最大長16.55m、分布の幅5.15mである。全て水田区画内からの出土である。

第180図４（写真355－18）：Ｄ－18グリッド５ａ層出土の６点と６層中出土の４点の破片が接合した須恵器坏である。分布の最大長4.1m、分布の幅1.95mである。畦畔８の南端部西側に分布している。

第180図５（写真355－19）：Ｄ－17・18グリッドにおいて５ａ層出土の５点と４ｂ層出土の７点の12点が接合した須恵器坏である。4b層出土の７点のうち６点は4b層最下部出土であることから第180図５を５ａ層水田跡に伴う遺物とした。分布の最大長3.9m、分布の幅2.5mである。畦畔８の南端部西側に分布している。

第180図６（写真355－20）：Ｃ－18dグリッド５ａ層から出土した３点とＤ－18aグリッド４ｂ層中から出土した１点の４点の破片が接合した須恵器坏である。分布の最大長8.2m、分布の幅1.0mである。畦畔８のやや西側に分布している。

第180図７（写真355－21）：Ｃ－15・16グリッドにおいて５ａ層出土の３点の破片が接合した須恵器坏である。分布の最大長17.0m、分布の幅3.0mである。１点は畦畔４から出土であるが、他の２点は水田区画からの出土である。

(4)　５ａ層水田跡について

５ａ層水田跡はⅣ区・Ⅴ区において検出された。水田跡の時期については５ａ層出土の土師器により、平安時代表杉ノ入式期に所属するものと考えられる。この水田跡では畦畔上に10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰をのせ、水田土壌中に灰白色火山灰を含んでいることから平安時代の中でも灰白色火山灰降下前後の時期を位置付けられる。また、水田区画は真北方向を基準とする傾向がみられ、条里型土地割との関連が考えられる。

15. 4 b 層の調査

(1) 調査概要

①4 b 層の分布・土性： 4 b 層はIV区からVI区にかけて分布する。層厚はIV区D－29グリッドで10cm、V区D－20グリッドで5～10cm、D－13グリッドで8～15cm、VE区で8～13cm、VI区で8－12cm である。層相はIV区D－29グリッドで10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト、V区D－20グリッドで10YR6/1 褐灰色シルト質粘土である。

②4 b 層上面の標高と地形： 4 b 層上面の標高はIV区南東部D－29・30グリッドで9.82～9.70m、V区D－20・21グリッドで9.80～9.64m、D－13・14グリッドで9.76～9.62m、VE区で9.47～9.36m、VI区で 9.40～9.35m と東方が高く西方に低い傾向がある。

③検出遺構と出土遺物： IV区では 4 b 層上面において遺構は検出されていないが、4 b 層中及び 4 b 層上面から土師器10点、須恵器 6 点、赤焼土器 1 点の他、土師器・須恵器・赤焼土器・陶器の破片が出土している。V区では 4 b 層上面において水田跡と溝跡 1 条（SD 7）を検出している。4 b 水田跡とSD 7 には新旧関係があり、SD 7 が 4 b 層水田跡より新しい。また 4 b 層中及び 4 b 層上面からは土師器19点、須恵器 6 点、赤焼土器 3 点の他、土師器・須恵器・赤焼土器の破片が出土している。VE区・VI区では遺構・遺物は検出されていない。

(2) IV区の調査

①出土遺物： 4 b 層中及び 4 b 層上面からは土師器坏 8 点第183図 1 ～ 8 、土師器甕 2 点第183図 9 ・10、須恵器坏 5 点第184図 2 ～ 6 、須恵器甕 1 点第184図 7 、赤焼土器 1 点第184図 1 の他、土師器破片87点、赤焼土器破片 4 点、須恵器破片37点、土師器あるいは赤焼土器あるいは須恵器のいずれかの破片 3 点が出土している。土師器は製作にロクロを使用しており、表杉ノ入式の範疇に入るものと考えられる。

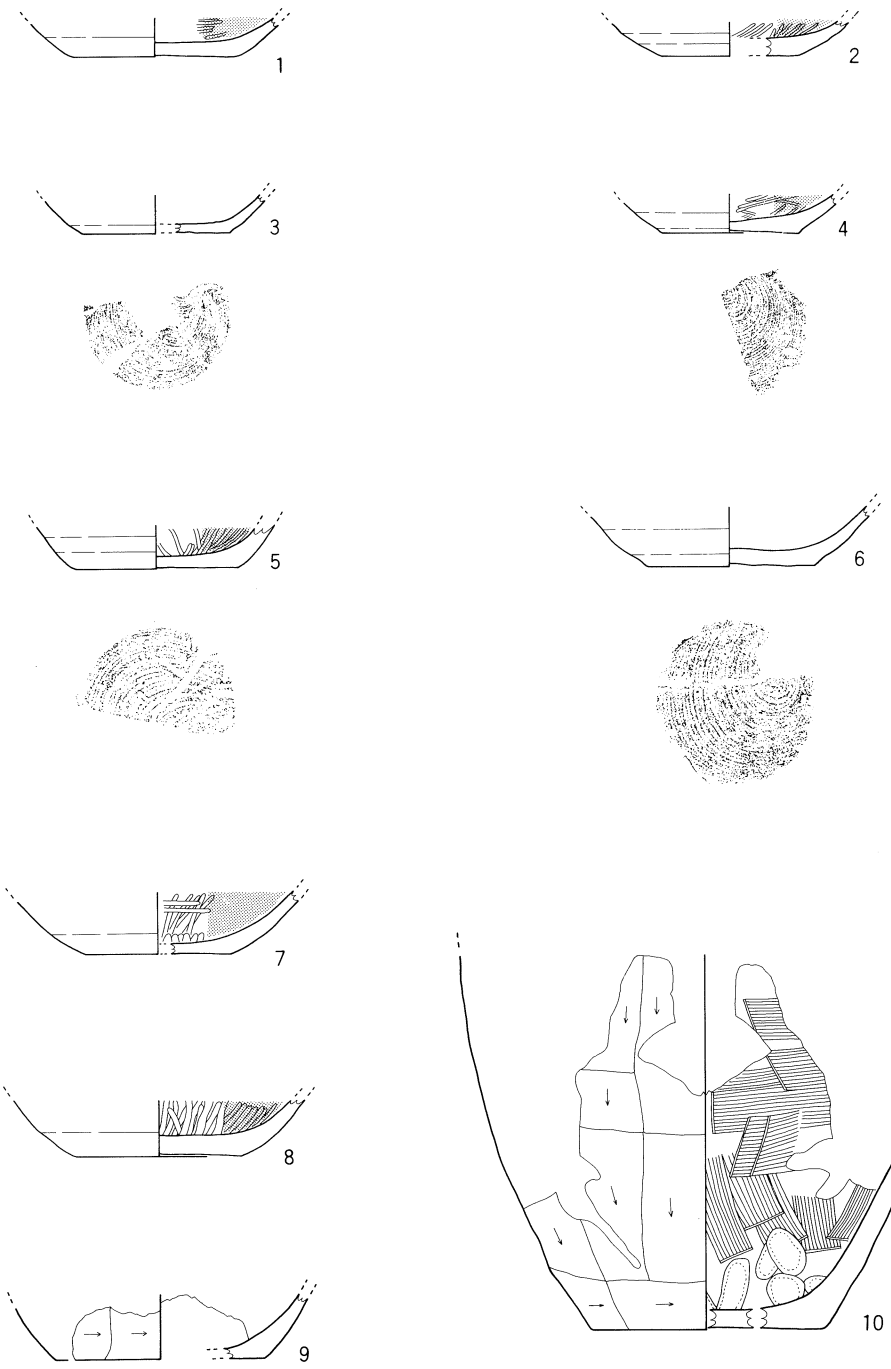
(3) V区の調査（第185図、写真253～256）

①4 b 層の水田跡

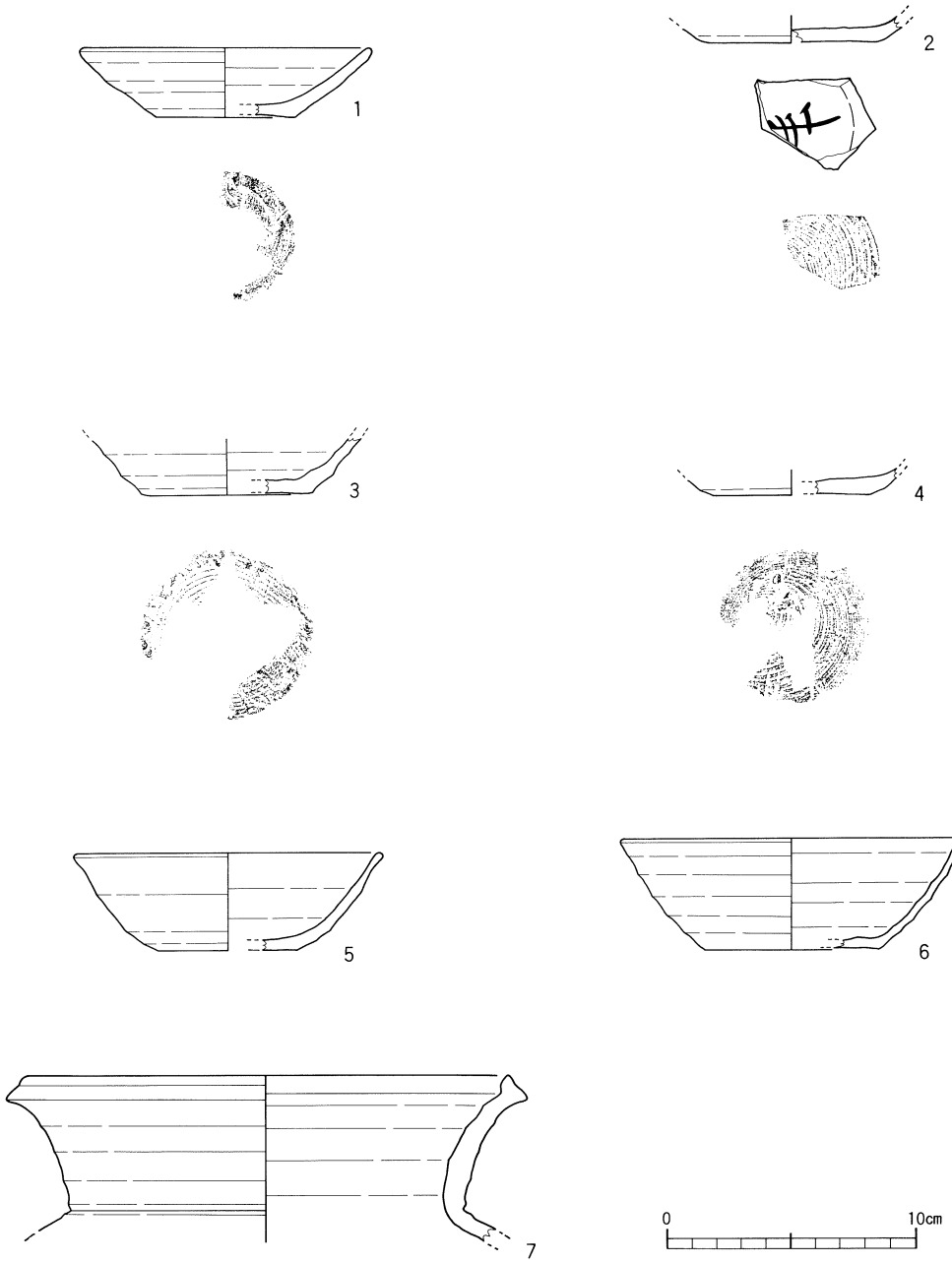
ⅰ）検出状況： 4 b 層水田跡はV区全域において検出されている。

ⅱ）水田の構成： 4 b層水田跡は幅38～242cmの畦畔と、これらの畦畔によって区画された水田から構成される。また畦畔の方向は真北を基準としている傾向がみられ、畦畔はほぼ東西・南北方向を示す。水田は17枚検出されており、各水田は①～⑰の番号によって示した。また畦畔についても畦畔 1 ～14とした。水路及び水口は検出されていない。4 b 層水田跡の水田域は北方・南方へ広がっている。

a．畦畔： 畦畔は周囲の土を盛って作られている土盛り畦畔である。畦畔の方向性は直線的であり、方向は真北を基準としている傾向がみられる。畦畔 8 は上端幅80～184cm、下端幅140～284cm と比較的規模が大きく、他の畦畔では上端幅 8 ～150cm、下端幅32～190cm であ



第183図　Ⅳ区４ｂ層出土遺物実測図（1）



第184図　Ⅳ区４ｂ層出土遺物実測図 (2)

る。水田面との比高差は1～4 cmである。

b．区画：水田1枚毎の区画は畦畔によってなされており、17枚の水田が検出された。畦畔8の西側では東西方向にほぼ直前的に伸びる畦畔1・2・3と、それとT字形に交わる畦畔4・5・6・7により区画がなされている。水田の平面形は東西方向に長い長方形を基調としており、水田面積は水田⑤が推定213.7m²である。また畦畔8の東側では南北方向にほぼ直線的に伸びる畦畔13・14と、それとT字形あるいは十字形に交わる畦畔9・10・11・12により区画がなされている。水田面積は水田⑪が推定187.8m²、水田⑭が推定21.2m²である。

iv）出土遺物：4b層中及び4b層上面からは土師器坏13点第186図・第187図1～4、土師器高台付坏4点第187図5～8、土師器甕2点第187図9・10、須恵器坏6点第188図3～8、赤焼土器坏2点第188図1・2、赤焼土器高台付坏1点第187図11の他、土師器破片181点、赤焼土器破片6点、須恵器破片16点、土師器あるいは赤焼土器あるいは須恵器のいずれかの破片11点が出土している。

第186図3（写真354-6）：C－18bグリッドとC－19dグリッド4b層出土の3点の破片が接合した土師器坏である。分布の最大長4.9m、分布の幅70cmである。近接した2点は畦畔8の北端部から、離れた1点は水田⑪の区画内から出土している。

第186図4（写真354-9）：D－18dグリッド4b層から出土の2点の破片が接合した土師器坏である。2点間の距離は1.4mである。出土地点は水田⑨の区画内であるが、畦畔2・8にそれぞれ近接している。

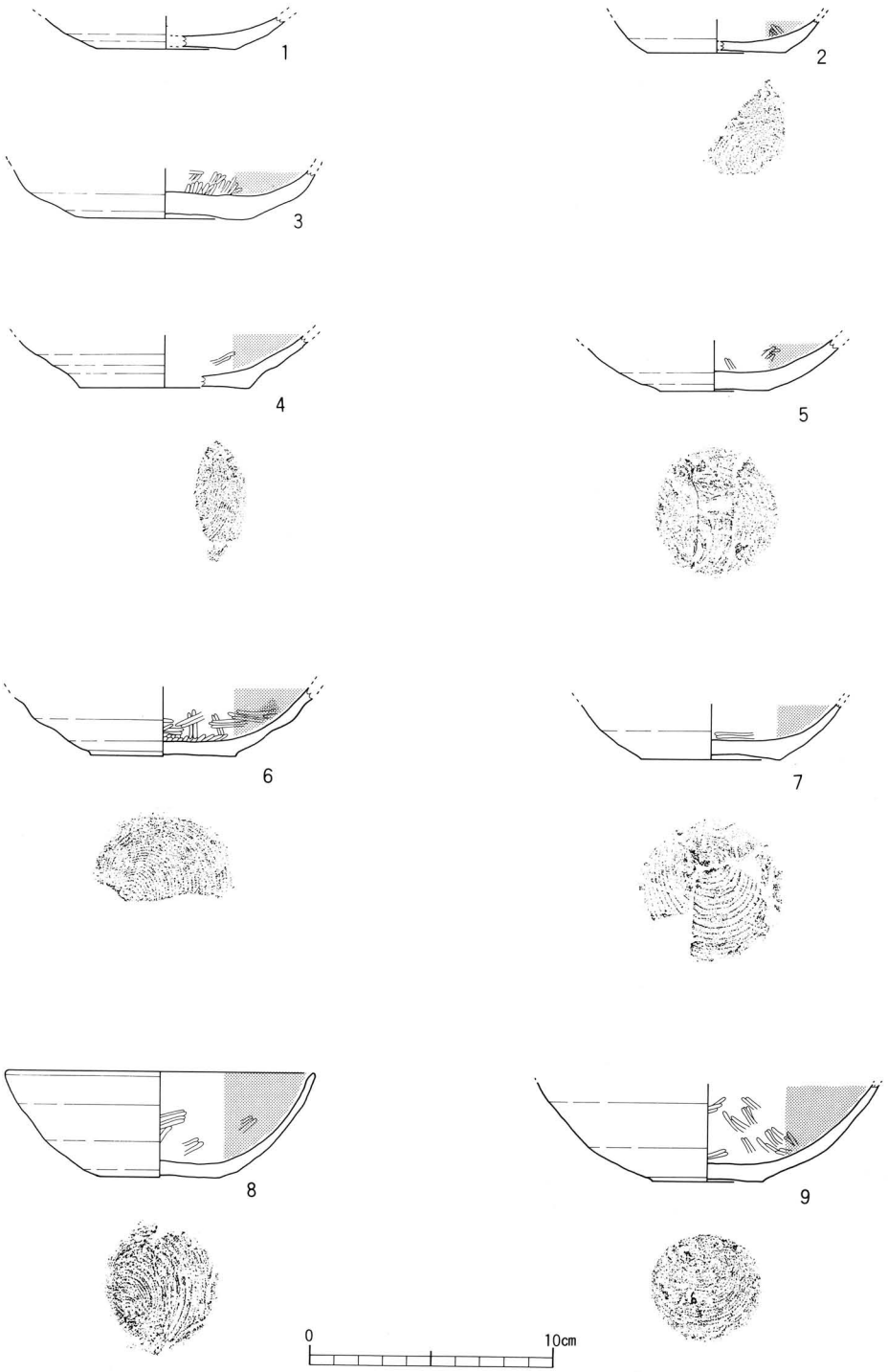
第186図7（写真354－12）：C・D－20グリッド4b層出土の6点とD－20bグリッド5a層出土の1点の破片が接合した土師器坏である。分布の最大長7.4m、分布の幅6.0mである。出土地点は畦畔11から2点、水田14の区画内から1点、畦畔12から1点、水田⑮の畦畔12に近接した区画内から3点出土している。

第186図8（写真354－13）：D－19cグリッド4b層出土の3点の破片が接合した土師器坏である。3点の破片は密接して出土しており、分布の最大長は35cmである。出土地点は畦畔13の南端分布東側である。

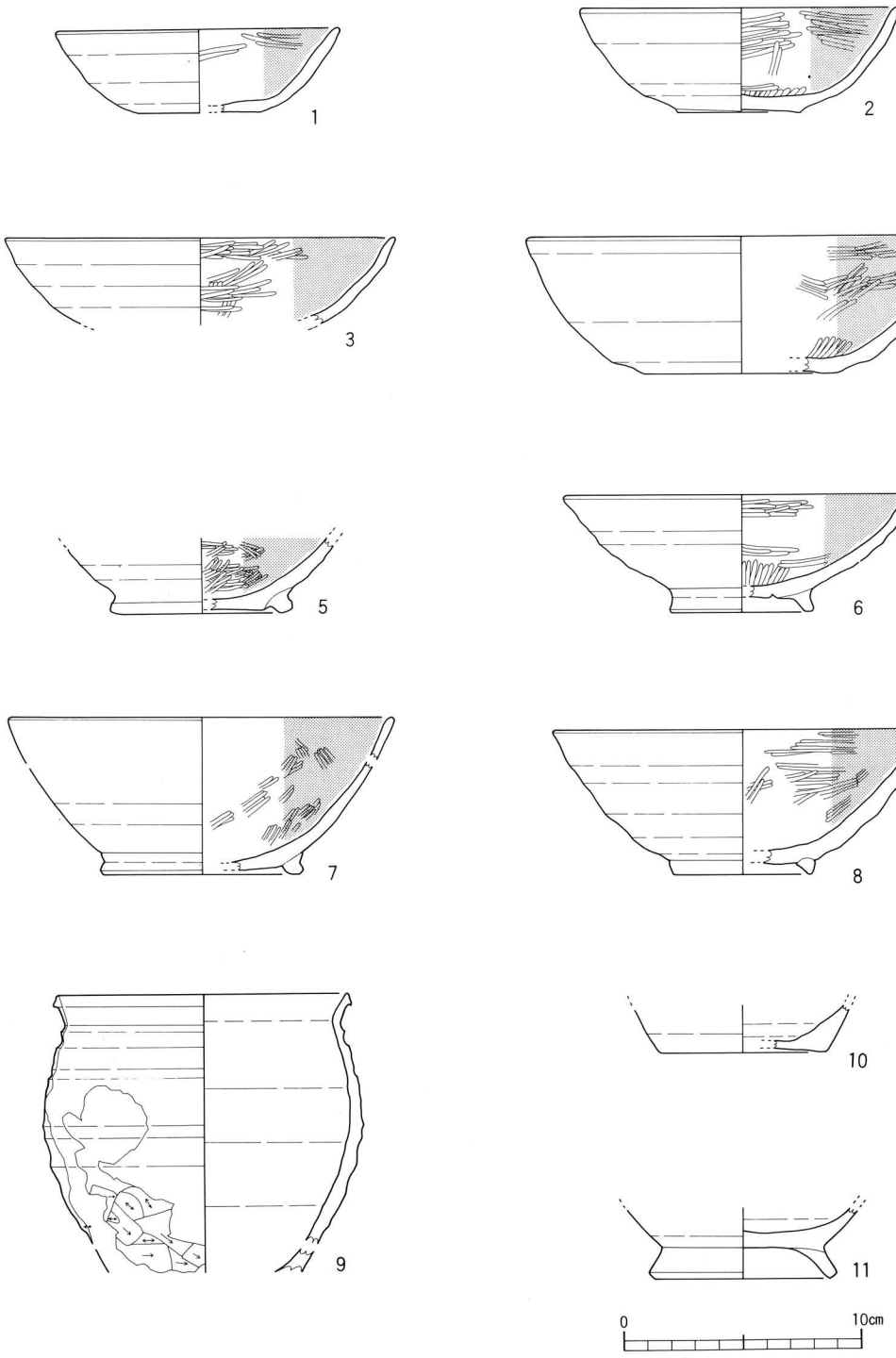
第187図2（写真354－18）：C－18グリッド4b層出土の3点、5a層出土の1点と、D－17bグリッド4b層出土の1点の破片が接合した土師器坏である。分布の最大長12.7m、分布の幅1.9mである。C－18グリッド出土の4点は畦畔8の北端部付近からの出土であり、D－17bグリッドに出土のものは畦畔2の北側から出土している。

第187図3（写真354－16）：C－18aグリッド4b層出土の3点が接合した土師器坏である。分布の最大長4.8m、分布の幅80cmである。出土地点は1点が畦畔1の北側、他の2点は水田⑦の区画内である。

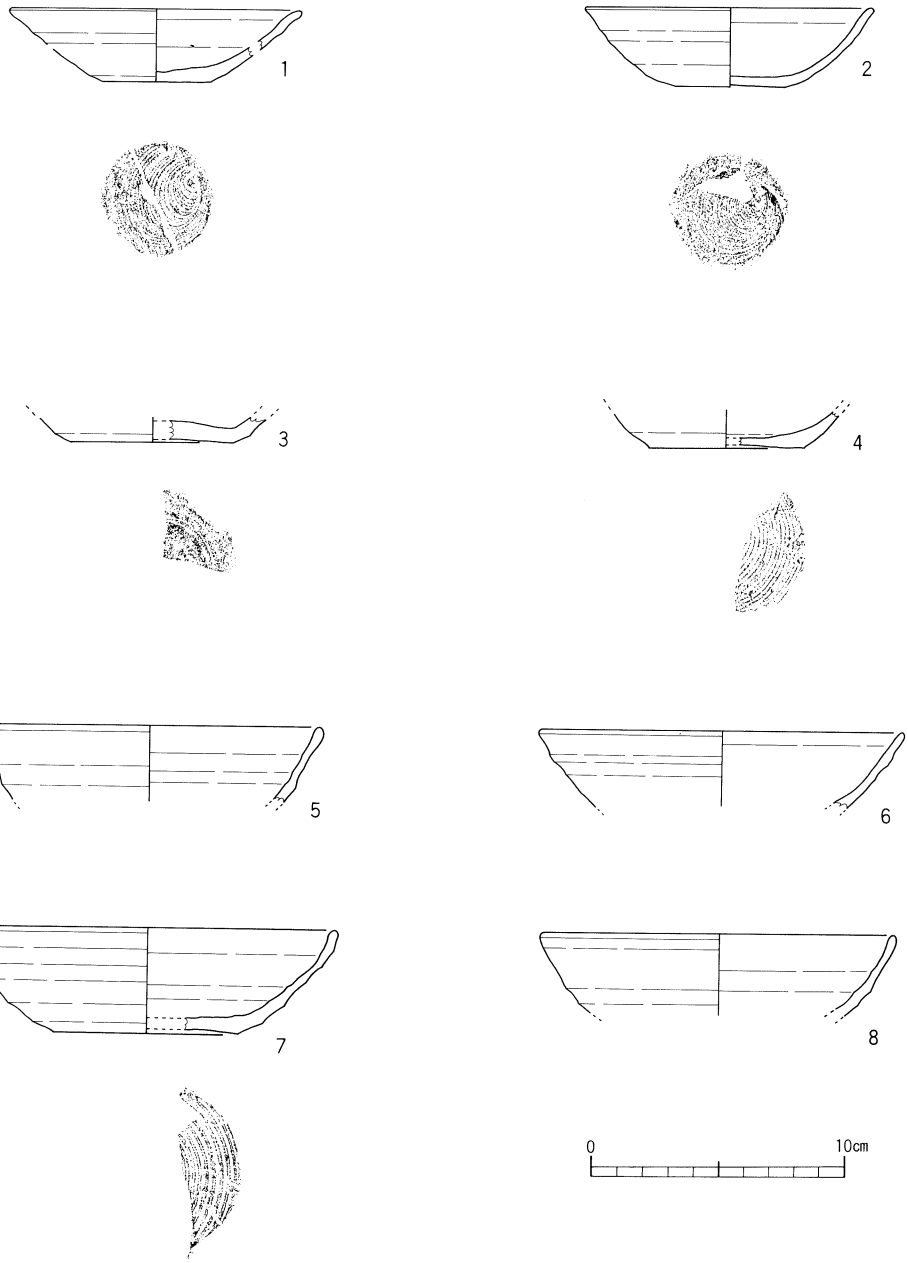
第185図　Ⅴ区４ｂ層水田跡平面図



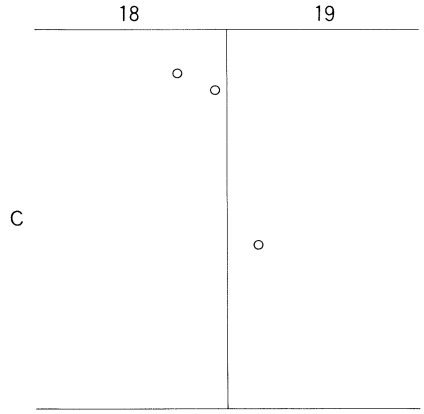
第186図　Ⅴ区４ｂ層出土遺物実測図（1）



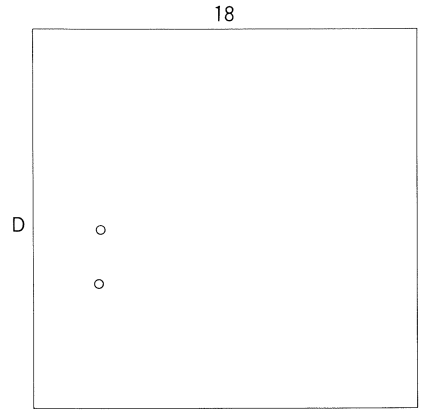
第187図　Ⅴ区４ｂ層出土遺物実測図 (2)



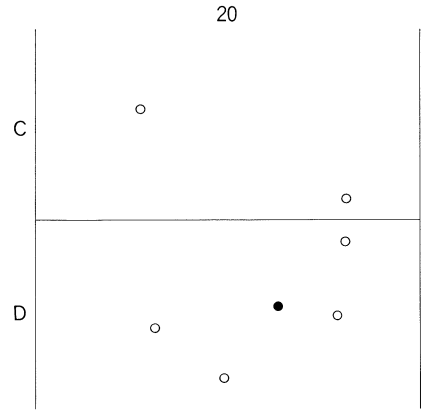
第188図　Ⅴ区４ｂ層出土遺物実測図 (3)



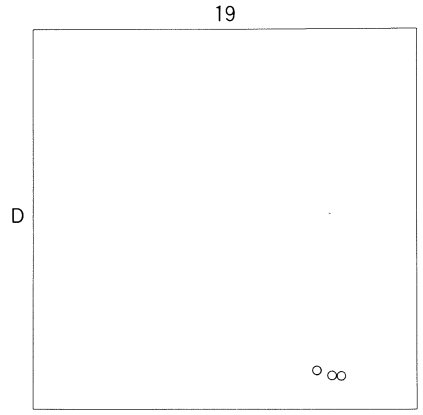
第186図 3



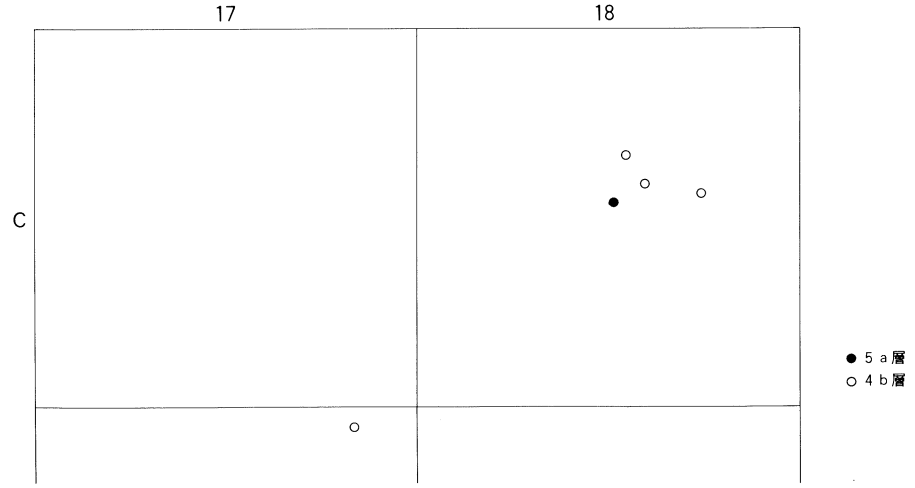
第186図 4



第186図 7

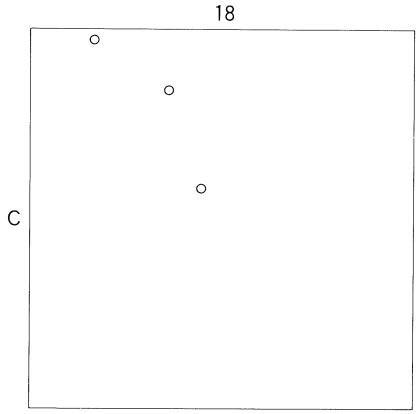


第186図 8

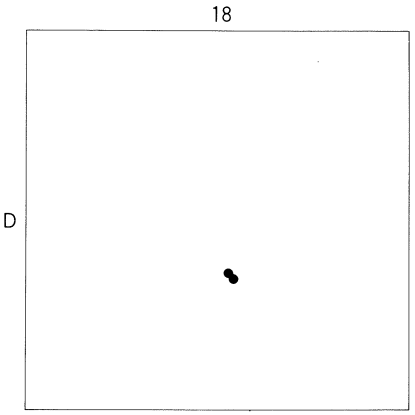


第187図 2

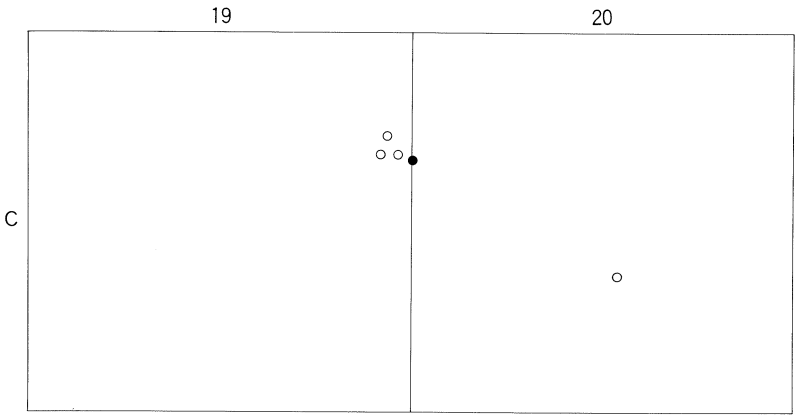
第189図　Ⅴ区４ｂ層出土遺物接合分布図 (1)



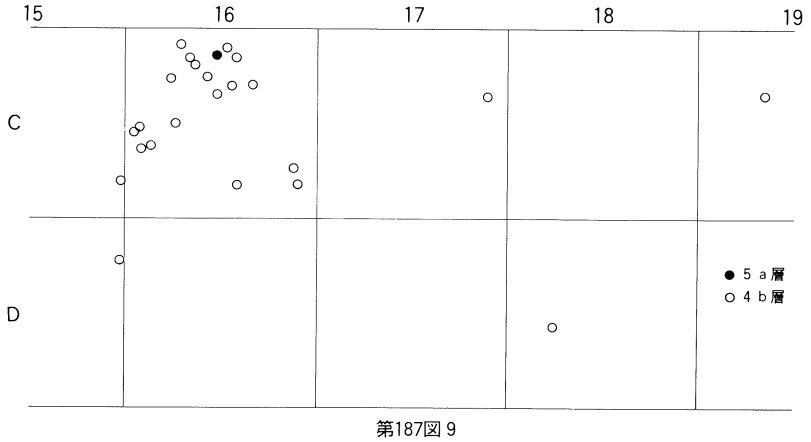
第187図 3



第187図 6

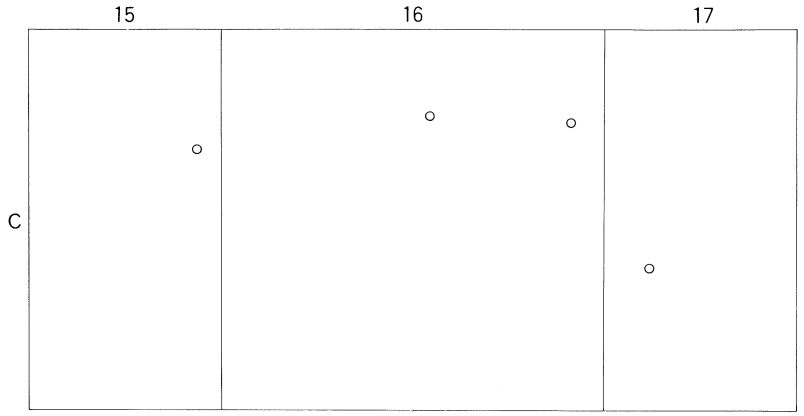


第187図 7

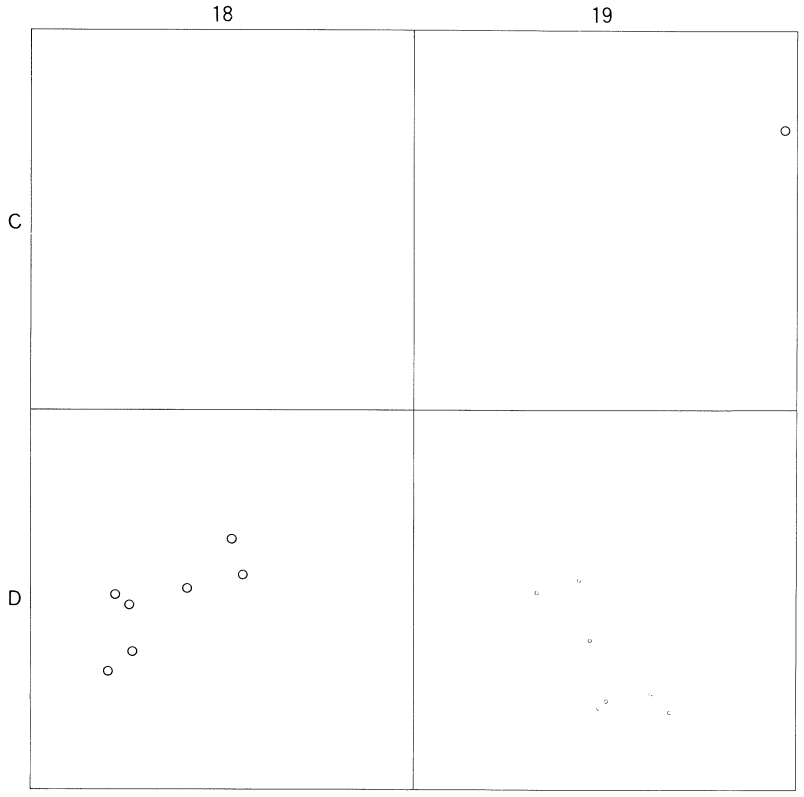


第187図 9

第190図　Ⅴ区 4 b 層出土遺物接合分布図 (2)



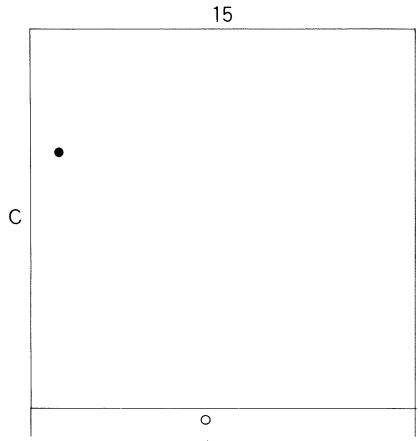
第187図10



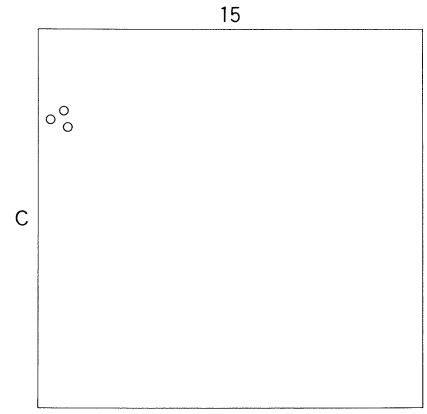
第188図 2

○ 4 b層

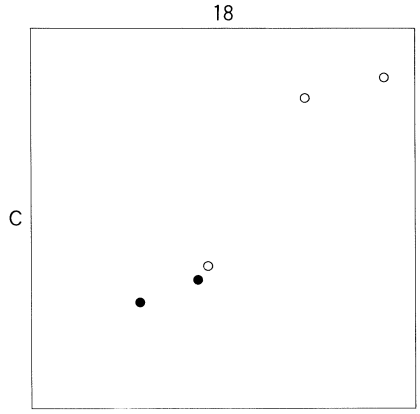
第191図　Ⅴ区 4 b層出土遺物接合分布図 (3)



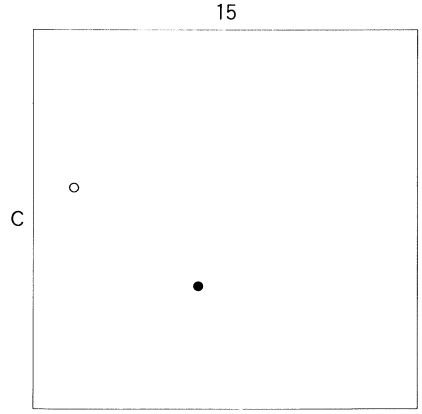
第188図 5



第188図 6



第188図 7



第188図 8

第192図　Ⅴ区４ｂ層出土遺物接合分布図 (4)　● 5 a層　○ 4 b層

第187図 6（写真354－19）：D－18cグリッド 4 b層出土の 1 点と 5 a層出土の 1 点の破片が接合した土師器高台付坏である。出土地点は畦畔 8 の南端部で、 2 点は重なり合うような状況で出土した。

第187図 7（写真354－22）：C－19bグリッド層出土の 3 点、5 a層出土の 1 点と、C－20cグリッド 4 b層出土の 1 点の破片が接合した土師器高台付坏である。分布の最大長7.1m、分布の幅50cm である。出土地点はC－19b グリッド 4 b層出土の 3 点は畦畔 9 から、5 a層出土の 1 点はそのすぐ南側からで、C－20c グリッド出土の 1 点は水田⑬の区画内、畦畔11の北側である。

第187図 9（写真354－21）：C－16･17･19グリッド、D－15･18グリッド 4 b層出土の23点をC－16グリッド 5 a層出土の 1 点が接合あるいは同一個体と判断された土師器甕である。分布の最大長35m、分布の幅16.7m である。C－16グリッドから出土した各破片は水田④の東半部に分布しており、D－15グリッドの 1 点は水田⑤の区画内、畦畔 6 の西側から、C－17グリッドの

1点は畦畔1から、D－18グリッドの1点は畦畔8から、D－19グリッドの1点は水田⑪の区画内、畦畔9の南側から出土している。この分布では水田⑤の区画内に分布の中心の存在を認めることができ、中心を離れたものは畦畔及びその付近から出土している傾向がある。

第187図10（写真355-1）：C－15～17グリッド4 b層出土の4点の破片が接合した土師器甕である。分布の最大長12.1m、分布の幅3.1mである。出土地点は全て水田④の区画内である。

第188図2（写真356-6）：C－19bグリッド4 b層出土の1点と、D－18グリッド出土の7点の破片が接合した赤焼土器坏である。分布の最大長22.5m、分布の幅1.9mである。D－18グリッドの7点は畦畔8の南端部及びその付近から、C－19bグリッド出土の1点は畦畔9から出土している。

第188図5（写真355－31）：C－15aグリッド5 a層出土の1点と、D－15aグリッド4 b層出土の1点の破片が接合した須恵器坏である。2点間の距離は8.1mである。C－15aグリッド出土の1点は畦畔2の直下からD－15aグリッド出土の1点は水田⑤の区画内から出土している。

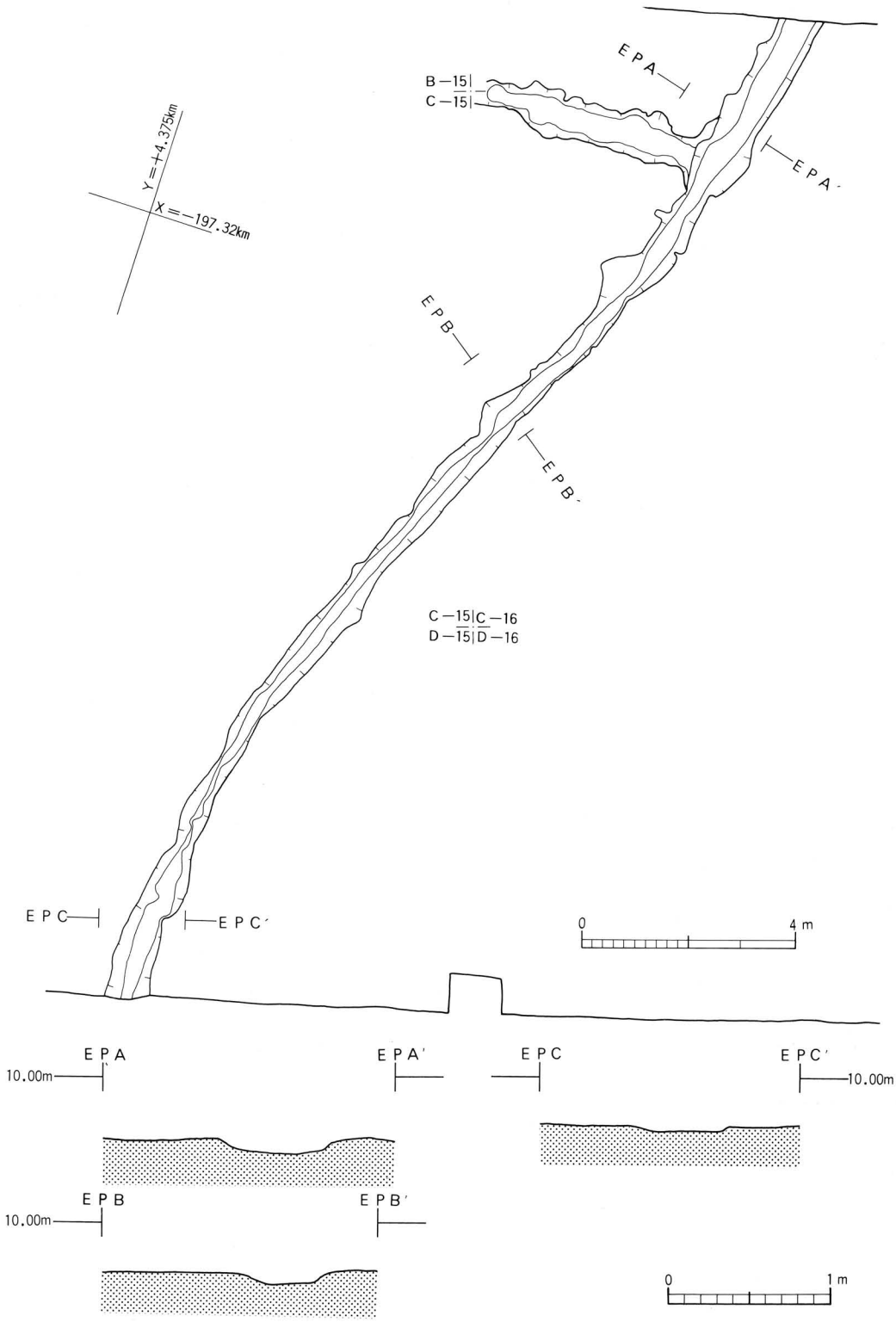
第188図6（写真355－30）：C－15aグリッド4 b層出土の3点の破片が接合した須恵器坏である。3点の破片は密接して出土しており、分布の最大長は60cmである。3点の出土地点は畦畔2及びその北側である。

第188図7（写真355－32）：C－18グリッド4 b層出土の3点と、5 a層出土の2点が接合した須恵器坏である。分布の最大長8.7m、分布の幅1.5mである。C－18bグリッド出土の2点は畦畔8北端部とその付近から、C－18dグリッド出土の3点は水田④の区画内、畦畔1・8の付近から出土している。

第188図8（写真355－34）：C－15グリッド4 b層出土の1点と、5 a層出土の1点が接合した須恵器坏である。2点間の距離は4.2mである。4 b層出土の1点は畦畔2から、5 a層出土の1点は水田⑤の区画内から出土している。

②ＳＤ7：ＳＤ7はＶ区西半部、B・C・D－15・16グリッドに位置する。4 b層上面で確認された。ＳＤ7の方向性はほぼ直線的であり、N－18°－EとN－89°－Wの方向を示す2条の溝より構成される。検出長は約22.5mであり、断面形は扁平な台形状を呈する。上端幅は33～92cm、下端幅は3～49cmである。深さは1.4～9.5cmである。底面の標高は北端部で9.71m、中央部で9.67～9.62m、南端部で9.66mで、北方に高く南方に低く、底面はほぼ平坦である。埋土は3 b層である。出土遺物はない。

ｖ）4b層水田跡について：4b層水田跡の時期については、4b層出土の土師器により、平安時代表杉ノ入式期に所属するものと考えられる。この水田跡は平安時代の中でも、前述した5 a層水田跡より一時期新しいもので、10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山降下の水田跡である。



第193図　Ⅴ区４層上面ＳＤ７平面図・エレベーション図

16. 4 a 層の調査

4 a 層はⅦ区においてのみ分布する。遺構・遺物は検出されていない。

17. 3 b 層の調査

(1) 調査概要

①3 b層の分布・土性： 3 b層はⅣ区とⅤ区に分布する。層厚はⅣ区D－29グリッドで10～15cm、Ⅴ区D－20グリッドで8～12cm、D－13グリッドで5～12cmである。層相はⅤ区D－20・21グリッドで10YR3/1黒褐色シルト質粘土である。

②3 b層上面の標高と地形： 3 b層上面の標高はⅣ区南東部D－29・30グリッドで9.94～9.09m、Ⅴ区D－20・21グリッドで9.88～9.73m、D－13・14グリッドで9.84～9.76mである。

③検出遺構と出土遺物： Ⅳ区では3 b層上面において、掘立柱建物跡6棟（ＳＢ1～6）、溝跡13条（ＳＤ8～11・14～16・18～23）、土坑12基（ＳＫ1・3～9・11～14）、ピット126基が検出されている。Ⅴ区では水田跡が検出されている。出土遺物はⅤ区3 b層中および3 b層上面から土師器破片3点、赤焼土器破片3点が出土している。Ⅳ区については3 a層および3 b層から土師器破片68点、須恵器破片19点、赤焼土器破片20点、陶器破片19点が出土している。

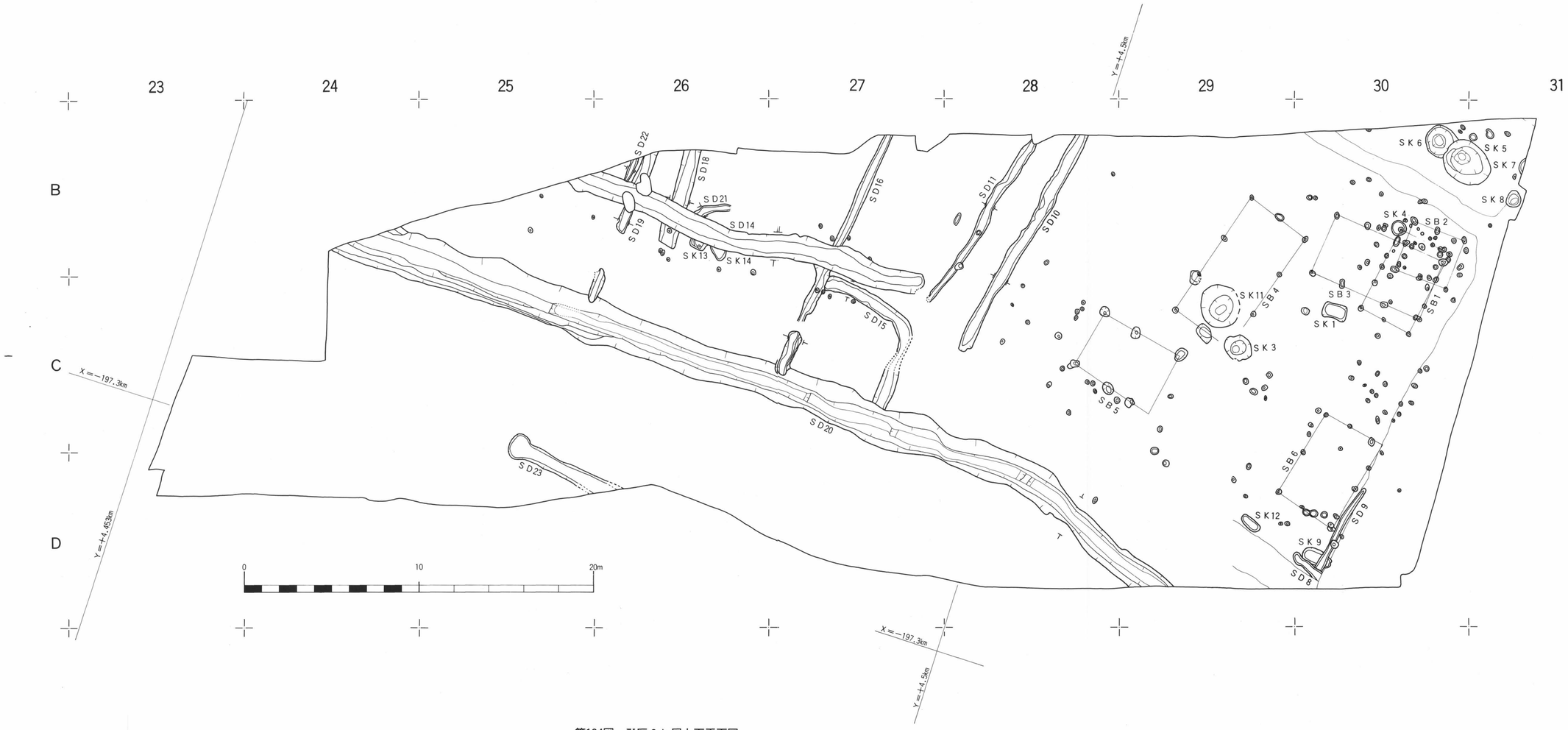
(2) Ⅳ区の調査（第194図）

①ＳＢ1： B・C－30グリッドに位置する。ＳＫ4、ＳＢ2・3と重複し、ＳＫ4より新しいがＳＢ2・3との新旧関係は不明である桁行3間（総長約520cm―東）、梁行2間（総長約315cm―南）の南北棟建物で、軸方向はN－8°－Eである。柱間は、柱痕跡不明のものを柱穴中央部に想定すると、桁行は西列で北から170、170、165cmで東列は北から170、166、186cmである。梁行は北側で310cm、南側で145、170cmである。柱穴は20～30cmの円形で、柱痕跡は7～12cmほどである。

②ＳＢ2： B－30グリッドの東南部に位置する。ＳＢ1・3と重複するが新旧関係は不明である。南北2間（総長約306cm）、東西2間（総長約320cm―南）の建物で、南北軸方向N－4°－Eである。柱間は、柱痕跡不明のものを柱穴中央部に想定すると、西列140、166cm、東列306cm、北列154、164cm、南列156、164cmである。柱穴は20～45cmの不整円・方形で、柱痕跡は8 cmである。

③ＳＢ3： B・C－30グリッドに位置する。ＳＢ1・2と重複するが新旧関係は不明である。桁行3間（総長約682cm―南）、梁行1間（総長約370cm―西）の東西棟建物で、軸方向はN－80°－Wである。柱間は、柱痕跡不明のものを柱穴中央部に想定すると、桁行は北列186、290、200cm、南列210、250、222cmである。梁行は西側370cm、東側366cmである。柱穴は25～40cmの円・不整円形で、柱痕跡は10cmである。

④ＳＢ4： B・C－29グリッドに位置する。ＳＫ3・11と重複し、ＳＫ11との新旧関係は不明



第194図　Ⅳ区３ｂ層上面平面図

だが、ＳＫ３により東南隅の柱穴が切られていることからＳＫ３よりは古い。桁行３間（総長約782cm ― 西）、梁行２間（総長約386cm ― 北）の南北棟建物で、軸方向はＮ－16°－Ｅである。柱間は、柱痕跡不明のものを柱穴中央部に想定すると、桁行は西列280、248、254cm、東列250、272cm、不明である。梁行は北側で193、193cm、南側220cm、不明である。柱穴は30～110cmの円形または方形で、柱痕跡は12～15cmである。

⑤ＳＢ５：Ｃ－28・29グリッドに位置する。桁行２間（総長約506cm ― 北）、梁行１間（総長約320cm ― 西）の東西棟建物で軸方向はＮ－76°－Ｗである。東南隅の柱穴は不明である。柱間は、柱痕跡不明のものを柱穴中央部に想定すると、桁行は北列216、290cm、南列230cm、不明である。梁行は西側320cmである。柱穴は50～70cmの方形・不整方形で、柱痕跡は18～20cmである。

⑥ＳＢ６：Ｃ・Ｄ－30、Ｄ－29グリッドに位置する。ＳＤ26と重複し、ＳＤ26より古い。桁行３間（総長約570cm ― 東）、梁行２間（総長約370cm ― 北）の南北棟建物で、軸方向はＮ－12°－Ｅである。柱間は、柱痕跡不明のものを柱穴中央部に想定すると桁行は西列250、270cm、東列150、140、280cmである。梁行は北側で160、210cm、南側で200、170cmである。柱穴は30～40cmの円形で、柱痕跡は13cmである。

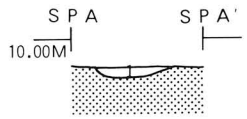
⑦ＳＤ８：Ｄ－30グリッドに位置する。ＳＤ９、ＳＫ９と重複し、両者より新しい。検出長は２ｍと短く、Ｎ－70°－Ｗの方向である。上端幅35～70cm、下端幅25～67cm、深さ５cmの浅い溝である。埋土は１層である。

⑧ＳＤ９：Ｄ－30グリッドに位置する。ＳＤ８・ＳＫ９と重複し、ＳＫ10より新しくＳＤ４より古い。検出長は６ｍ、直線的でＮ－12°－Ｅの方向である。上端幅30～60cm、下端幅18～44cm、深さ10～24cmで、Ｕ字形の断面を呈する。埋土は２層である。

⑨ＳＤ10：Ｂ・Ｃ－28グリッドに位置する。検出長は14m、直線的でＮ－12°－Ｅの方向である。上端幅50～88cm、下端幅25～65cm、深さは６～17cmである。断面形は逆台形を呈する。底面の標高は約9.8mでほぼ水平である。埋土は１層である。

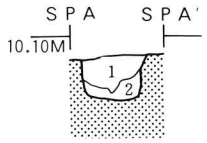
⑩ＳＤ11：Ｂ・Ｃ－28、Ｃ－27グリッドに位置する。ＳＤ10にほぼ平行する。検出長は11m、直線的でＮ－15°－Ｅの方向である。上端幅28～65cm、下端幅17～40cm、深さは９～14cmである。断面形は逆台形を呈する。底面の標高は約9.8mでほぼ水平である。

⑪ＳＤ14：Ｂ－25・26・27、Ｃ－27グリッドを横断している。ＳＤ16・18・19・21・22、ＳＫ13・14と重複し、そのすべてより新しい。Ｂ・Ｃ－27グリッドの東端部で消滅している。検出長は21mでほぼ直線的な溝である。方向はＮ－90°－Ｅでほぼ東西方向である。断面形は浅く開くＵ字形で、壁の立ち上がりはやや弧状を呈する。上端幅は115～153cm、下端幅36～95cm、深さ25～35cmである。底面の標高は9.6～9.7mでやや西へ傾斜している。埋土は２層である。埋土



土層註記

1　10YR3/4褐灰色シルト質粘土　ブロック状に黄褐色の土を含み全体に少量のマンガンを含む。

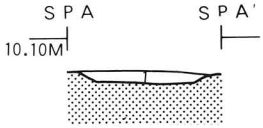


土層註記

1　10YR3/4にぶい黄褐シルト　マンガン粒酸化鉄を含む。上部は黄褐のシルト。下部は灰黄褐の粘土がまじる

2　10YR3/4褐色粘土質シルト　マンガン粒炭化物，多量の酸化鉄を含む。10YR3/4にぶい黄褐色の粘土を含む

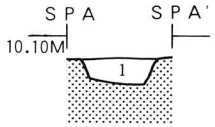
SD9



土層註記

1　10YR3/3黒褐色シルト質粘土　一部に灰色の粘土質がまじる。

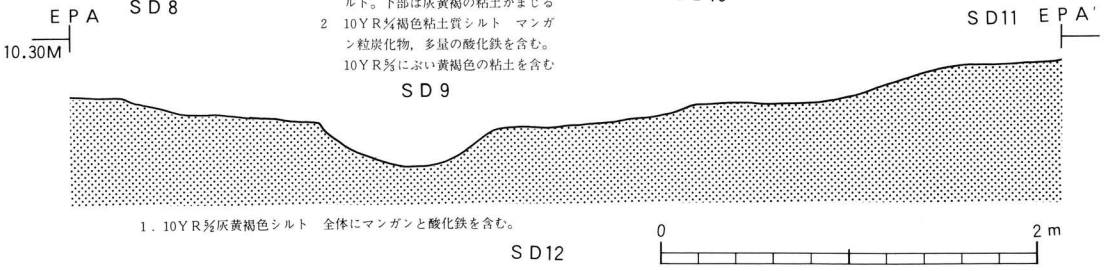
SD10



土層註記

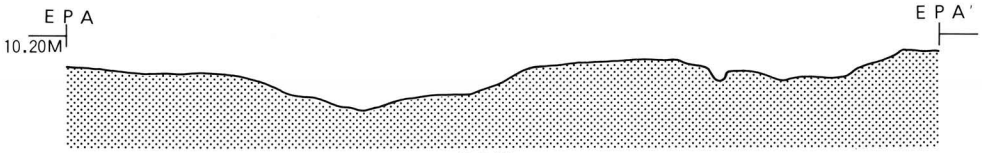
1　10YR3/3黒褐色シルト質粘土　一部に灰色の粘土質のものがまじる。ところどころに黄色がまじる。

SD11

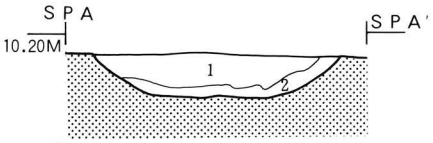


1．10YR5/1灰黄褐色シルト　全体にマンガンと酸化鉄を含む。

SD12



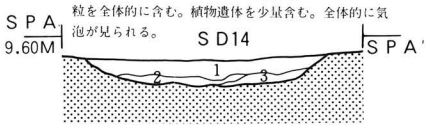
SD13



土層註記

1．10YR3/3暗褐粘土質シルト　酸化物及び植物遺体を少量含む，全体的に気泡が見られる。

2．10YR4/4褐色粘土質シルト　酸化物及びマンガン粒を全体的に含む。植物遺体を少量含む。全体的に気泡が見られる。



SD14

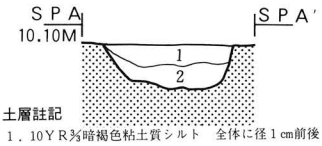
土層註記

1．2.3Y4/3黄灰色シルト質粘　酸化鉄を多く含む。

2．10YR4/4褐色粘土

3．10YR5/4褐灰色粘土　4a層の黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む。

SD17

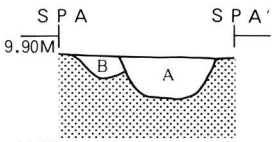


土層註記

1．10YR5/3暗褐色粘土質シルト　全体に径1cm前後の灰白色シルトのブロックを含み，マンガン粒を含む。

2．10YR5/4褐色粘土質シルト　10YR7/1灰白色粘土を5cm前後のブロックで全体的に含み，酸化鉄と少量のマンガン粒を含む。

SD15

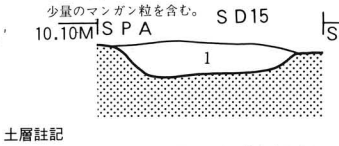


土層註記

A　10YR5/4褐灰色シルト質粘土　10YR5/3の鈍い黄橙色の粘土を壁面近くにブロック状含む酸化鉄マンガン斑を多量に含む。

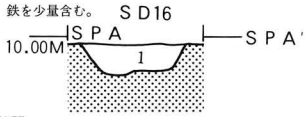
B　2.5Y5/3黄灰色粘土　10YR5/6明黄褐色の粘土を全体的にブロック状に含む，マンガン斑と多量酸化鉄を少量含む。

SD16



土層註記

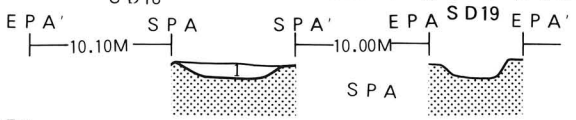
1．10YR5/4灰褐色シルト質粘土　酸化鉄を多く含む。SD−21，SK−15の堆積土より粘性強い。



土層註記

1．10YR5/4灰褐色シルト質粘土　酸化鉄多く含む。黒褐色粘土（3b層）をブロック状に含む。

SD18

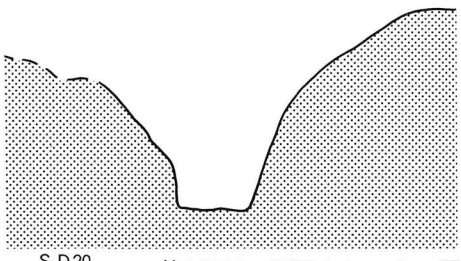


土層註記

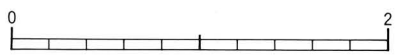
1．2.5Y5/3黄灰色シルト質粘土　酸化鉄を多量に含む。

SD21

SD22



SD20



第195図　Ⅳ区3b・3a層セクション図・エレベーション図

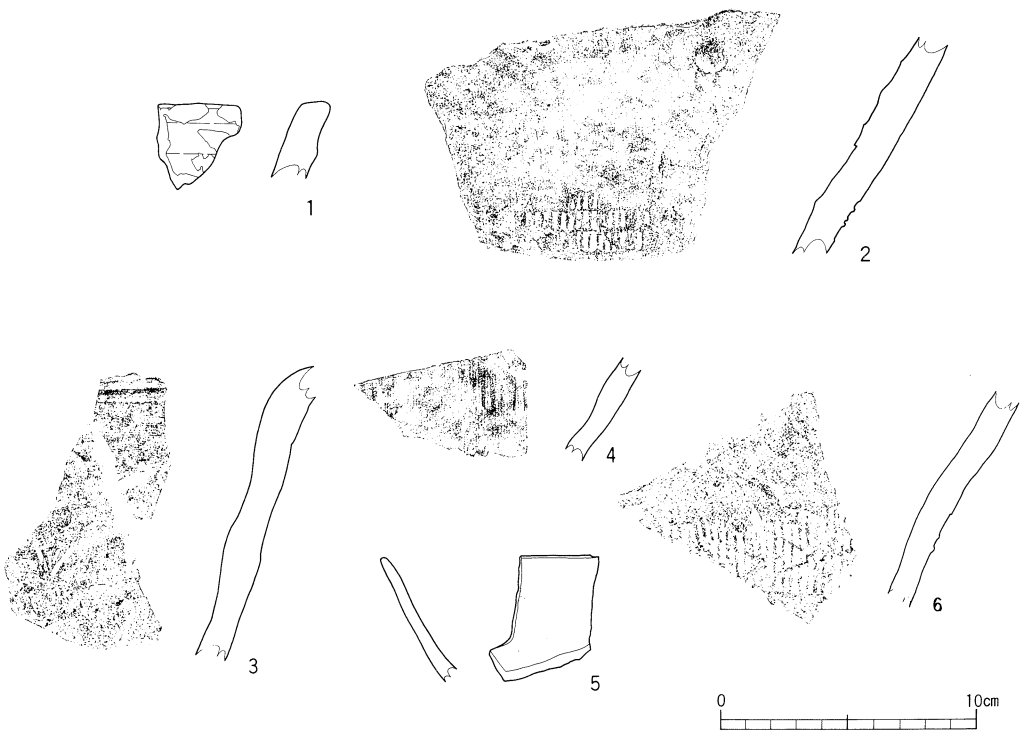
中から県内産で鎌倉期後半から南北朝期にかけての所産と考えられる陶器破片が出土している。

⑫ＳＤ15：Ｃ－27グリッドに位置する。ＳＤ16・20と重複するが新旧関係は不明である。ＳＤ20との重複部分から北へ伸びるが途中で大きく西へ屈曲しＳＤ16と重複する。その方向はＮ－80°－ＷとＮ－８°－Ｅである。検出長は９ｍである。断面形は逆台形を呈する。上端幅65～115cm、下端幅37～84cmで深さは24cmである。底面の標高は9.7～9.8mである。埋土は２層である。

⑬ＳＤ16：Ｃ－27グリッドに位置する。ＳＤ14・15・20と重複する。ＳＤ14より古いが、ＳＤ15・20との新旧関係は不明である。検出長は15m、ほぼ直線的でＮ－７°－Ｗの方向である。断面形は逆台形を呈する。上端幅50～70cm、下端幅20～40cmで、深さは15～35cmである。底面の標高は9.5～9.7mであるが傾斜は一定ではない。埋土は１層である。

⑭ＳＤ18：Ｂ－26グリッドに位置する。ＳＤ14と重複しＳＤ14より古い。検出長は６ｍほどでＢ－26グリッドの南端部で消滅している。方向性は直線的でＮ－２°－Ｗの方向である。断面形は舟底形である。上端幅100～110cm、下端幅40～60cm、深さは20cmである。底面の標高は9.7～9.8mで北へやや傾斜する。埋土は１層である。

⑮ＳＤ19：Ｂ－26グリッドに位置する。ＳＤ14・20と重複し、ＳＤ14より古いがＳＤ20との新



第196図　Ⅳ区３ｂ・３ａ層遺構出土遺物実測図・拓影

旧関係は不明である。ＳＤ18の西側に平行して走る溝である。検出長は９ｍでＮ－４°－Ｅの方向である。断面形は逆台形で、上端幅52～70cm、下端幅30～40cm、深さ20cmである。底面の標高は9.75～9.82mで北へ傾斜している。埋土は１層である。

⑯ＳＤ20：Ｂ－24・25、Ｃ－24～28、Ｄ－28・29グリッドを横断する溝である。ＳＤ15・16・19と重複するが新旧関係は不明である。検出長は53mでほぼ直線的であるが、Ｄ－28グリッドでやや南へ屈曲する。方向は屈曲部以西がＮ－88°－Ｗ、以東がＮ－64°－Ｗである。断面形は逆台形で、壁の立ち上がりは直線的であるが南側の立ち上がり部に幅約20cmの平坦部がみられる。上端幅は200～270cm、下端幅は30～94cmで、深さは65～118cmである。底面はほぼ平坦であるが、溝の西端から約11.5m東に約30cm下がる段状の部分、東端から約17m西に長さ５ｍにわたり約20～25cm高まる部分、東端から約９ｍ西に幅50cmで約15cm高まる部分が検出されている。高まる部分の標高は8.9～９ｍで、他の底面の標高は8.7～8.8mである。底面はやや東へ傾斜している。埋土は７層である。出土遺物は中世陶器破片２点、青磁破片１点がある。中世陶器のうち１点は常滑焼の甕で鎌倉期のものと考えられる青磁は花紋のある中国龍泉系のものと考えられる。

⑰ＳＤ21：Ｂ－26グリッドに位置する。ＳＤ14と重複しＳＤ14より古い。検出長は２ｍ、やや弧状を呈し、Ｎ－77°－Ｅの方向を示す。上端幅56～35cm、下端幅30～20cm、深さ８cmの浅い溝で、埋土は１層である。

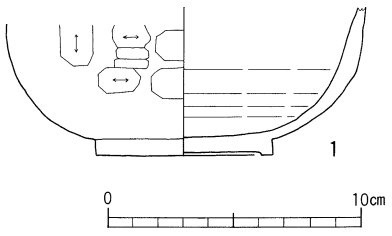
⑱ＳＤ22：Ｂ－26グリッドに位置する。ＳＤ14と重複しＳＤ14より古い。検出長は1.4m、Ｎ－４°－Ｅの方向でＳＤ19と平行している。上端幅約30cm、下端幅20cm、深さ10cmの浅い溝で、埋土は１層である。

⑲ＳＫ１：Ｃ－30グリッドの北西部に位置する。平面形は不整方形で、長軸123cm、短軸91cm、深さ８cmである。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は１層である。

⑳ＳＫ３：Ｃ－29グリッドのほぼ中央に位置する。平面形は不整円形で、長軸170cm、短軸135cm、深さ78cmである。底面の平面形は径約20cmのほぼ円形である。断面形は逆台形を呈する。埋土は８層であるがベルト崩落のため最下層の第８層しか注記されなかった。

㉑ＳＫ４：Ｂ－30グリッドのやや東南よりに位置する。ＳＢ１の北西隅の柱穴と重複し、ＳＢ１より古い。平面形は円形で、径は92cm、深さは26cmである。断面形は方形で底面は平坦である。埋土は３層である。

㉒ＳＫ５：Ｂ－30・31グリッドにまたがって位置する。ＳＫ６と重複しＳＫ６より新しい。平面形は楕円形で、長軸277cm、短軸228cm、深さ158cmを測る。平面形は



第197図　Ⅳ区ＳＫ５出土遺物実測図

やや大きいが、上端部分から約１ｍほど下がったところで径約80cmにすぼまり底面へと続く。埋土は12層である。第１層から古銭、第８層から木製の椀が出土している。井戸としての機能が考えられる。

㉓ＳＫ６：Ｂ－30グリッドの北東部に位置する。ＳＫ５と重複しＳＫ５より古い。平面形は楕円形で、長軸164cm、短軸146cm、深さ143cmを測る。上端部分より約70cm下がったところで径60cmの円筒状にすぼまる。埋土は７層である。ＳＫ５と同様に井戸としての機能が考えられる。

㉔ＳＫ７：Ｂ－31グリッド、Ⅳ区の北東隅に位置する。土坑の西端が検出されたのみで平面形などは不明である。確認された規模は上端95cm、深さ42cmである。埋土は２層である。

㉕ＳＫ８：Ｂ－31グリッド、Ⅳ区の北東隅に位置する。ＳＤ26に切られているので正確な平面形は不明であるが、検出された平面形は不整楕円形である。残存良好な部分での長軸は100cm、深さ96cmを測る。底面は楕円形を呈する。埋土は４層である。

㉖ＳＫ９：Ｄ－30グリッドに位置する。ＳＤ８・９と重複し、両者より古い。平面形は不整楕円形で長軸177cm、短軸94cm、深さ15cmである。埋土は３層である。

㉗ＳＫ11：Ｂ－29グリッドの北よりに位置する。平面形はほぼ円形で径240cmである。断面形は逆台形で底面付近でややすぼまり、深さは95cmである。埋土は10層である。

㉘ＳＫ12：Ｄ－29グリッドのやや東よりに位置する。平面形は楕円形で長軸119cm、短軸59cm、深さ３cmの浅い土坑である。埋土は１層である。

㉙ＳＫ13：Ｂ－26グリッドの南よりに位置する。ＳＤ14と重複し、ＳＤ14より古い。平面形全体は不明だが、残存部の長軸は94cm、深さは13cmで底面にピットが検出されている。

㉚ＳＫ14：Ｂ－26グリッドの南よりに位置する。ＳＤ14と重複し、ＳＤ14より古い。平面形全体は不明だが、残存部は長軸98cm、深さ６cmの浅いものである。

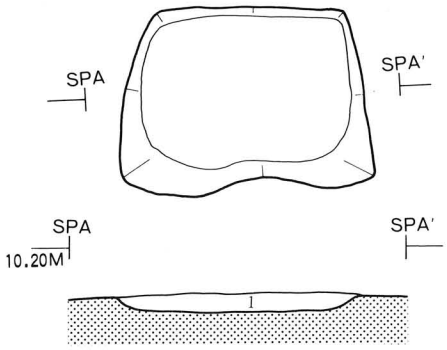
(3)　**Ⅴ区の調査**（第205図）

①３ｂ層水田跡

ａ）　**検出状況**：水田跡はⅤ区東端部の水路跡の東側を除きⅤ区のほぼ全域で検出された。

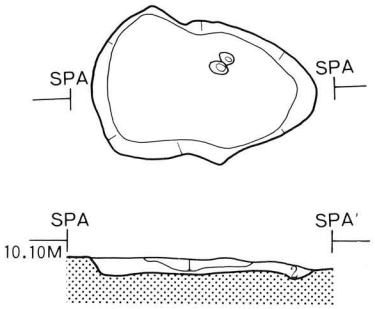
ｂ）**標高と地形**：３ｂ層上面の標高は、最も高いところで9.87m（Ｃ－26グリッド）、最も低いところで9.69m（Ｃ・Ｄ－13グリッド）で地形は東方へ高く、西方へ低い。東西方向での傾斜度は24.0cm/100mである。

ｃ）**水田の構成**：３ｂ層水田跡は畦畔と畦畔によって区画された水田と水路跡、水路跡の西側に平行して走るＳＤ24・ＳＤ25から構成される。水田跡は７枚検出されており、各水田は①～⑦の番号によって示した。３ｂ層の水田域は東方は水路跡までは確認されており、北方南方へは広がるが、西方はＶＥ区までは広がらない。また水田跡に伴う足跡は検出されていない。



土層註記　　SK1

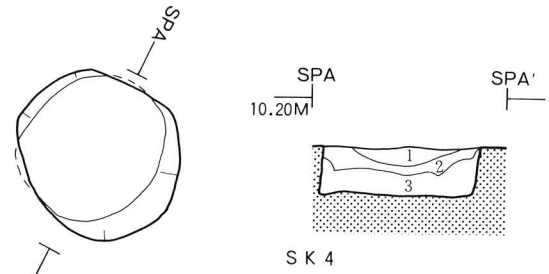
1　10YR⅔黒褐色シルト　炭化物，マンガン粒，酸化鉄を含む，焼土を少し含む。10YR⅓の粘土がまじる。



土層註記

1．10YR⅔黒褐色シルト　全体的に炭化物の層・ブロック状に焼土を含む。
2　10YR⅔黒褐色シルト　全体にまだらに少量の酸化鉄を含み，またごく少量の炭化物を含む。

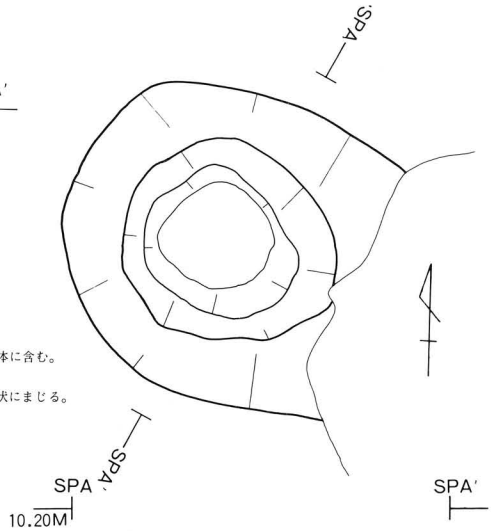
SK2

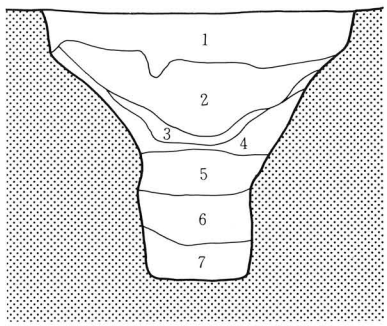


SK4

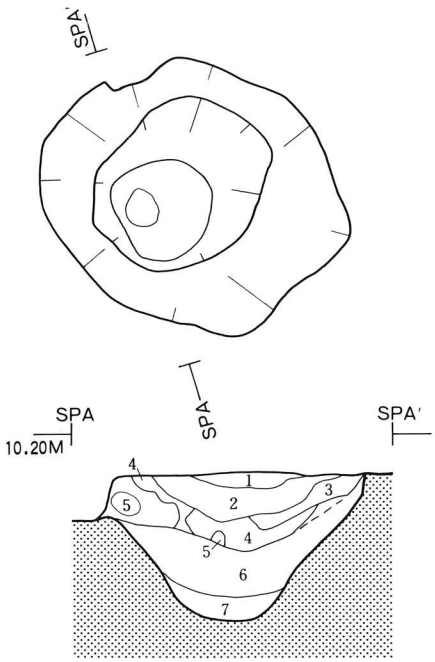
土層註記

1　10YR⅔　灰黄褐色シルト質粘土
2　10YR⅔　灰黄褐色シルト質粘土　直径0.1～1.0cmの黄褐色のブロックを全体に含む。これにより上層と区別される。
3　10YR⅔　褐色シルト質粘土　粘性あり，しまりなし，2層の土がしもふり状にまじる。





SK6



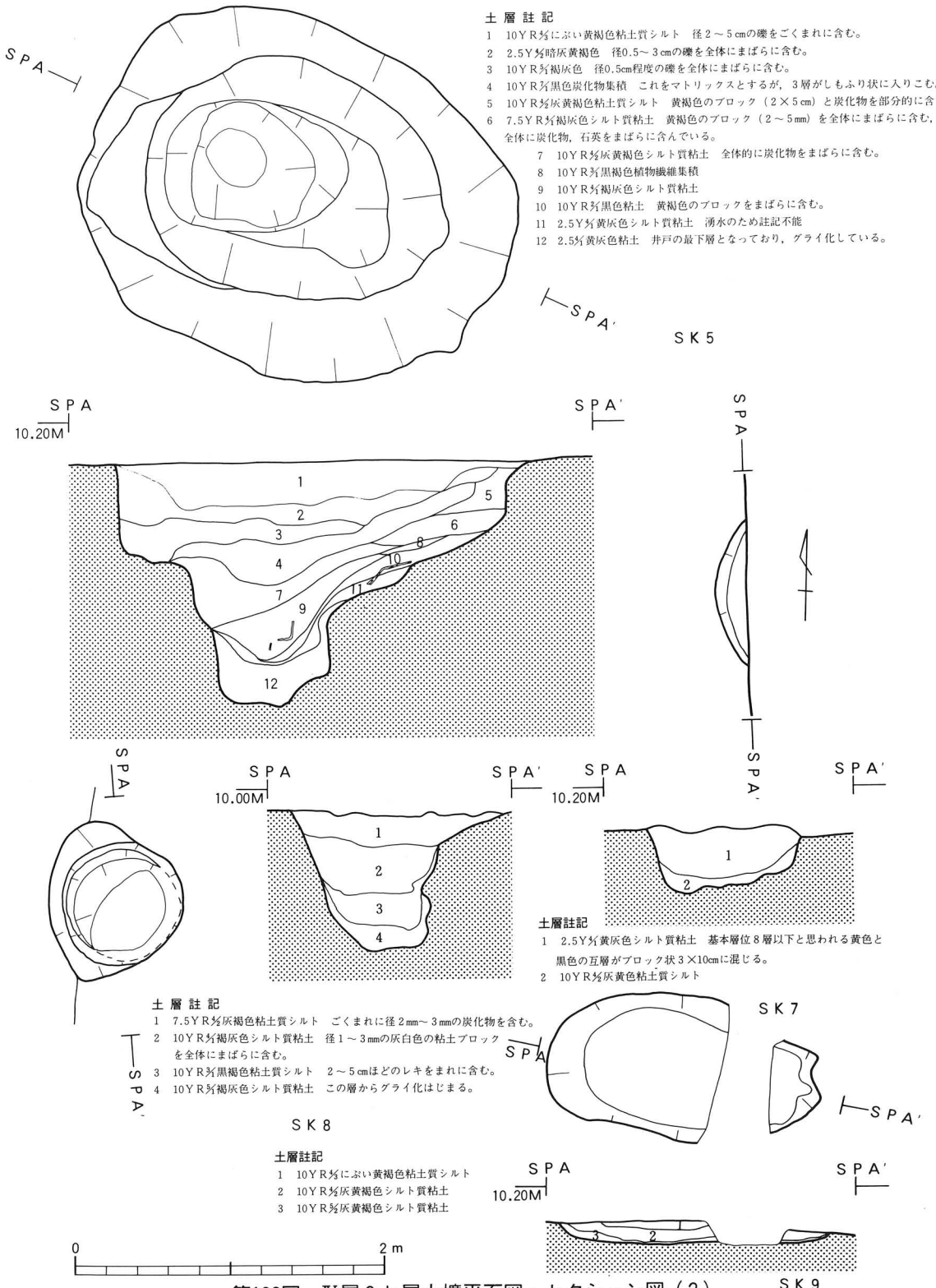
SK3

土層註記

1　10YR⅔にぶい黄褐色シルト　基本層の3層
2　5YR⅔褐灰色シルト質粘土　この層の中央部に黄褐色を多く含む部分があるが分層不可能。
3　10YR⅔褐灰色粘土質シルト
4　10YR⅔灰黄褐色シルト質粘土　全体に5層の土をしもふり状に含む。
5　7.5YR⅔褐灰色シルト質粘土　黄褐色のブロック5mm～3cmを含む。
6　7.5YR⅔褐灰色シルト質粘土　黄褐色のブロック5mm～2cmを含む。
7　10YR⅔褐灰色粘土　井戸の最下層グライ化している。

0　2 m

第198図　Ⅳ区3b層土壙平面図・セクション図（1）



土層註記

1　10YR⅔にぶい黄褐色粘土質シルト　径2～5cmの礫をごくまれに含む。
2　2.5Y⅔暗灰黄褐色　径0.5～3cmの礫を全体にまばらに含む。
3　10YR⅔褐灰色　径0.5cm程度の礫を全体にまばらに含む。
4　10YR⅔黒色炭化物集積　これをマトリックスとするが，3層がしもふり状に入りこむ。
5　10YR⅔灰黄褐色粘土質シルト　黄褐色のブロック（2×5cm）と炭化物を部分的に含む。
6　7.5YR⅔褐灰色シルト質粘土　黄褐色のブロック（2～5mm）を全体にまばらに含む，全体に炭化物，石英をまばらに含んでいる。
7　10YR⅔灰黄褐色シルト質粘土　全体的に炭化物をまばらに含む。
8　10YR⅔黒褐色植物繊維集積
9　10YR⅔褐灰色シルト質粘土
10　10YR⅔黒色粘土　黄褐色のブロックをまばらに含む。
11　2.5Y⅔黄灰色シルト質粘土　湧水のため註記不能
12　2.5Y⅔黄灰色粘土　井戸の最下層となっており，グライ化している。

土層註記

1　2.5Y⅔黄灰色シルト質粘土　基本層位8層以下と思われる黄色と黒色の互層がブロック状3×10cmに混じる。
2　10YR⅔灰黄色粘土質シルト

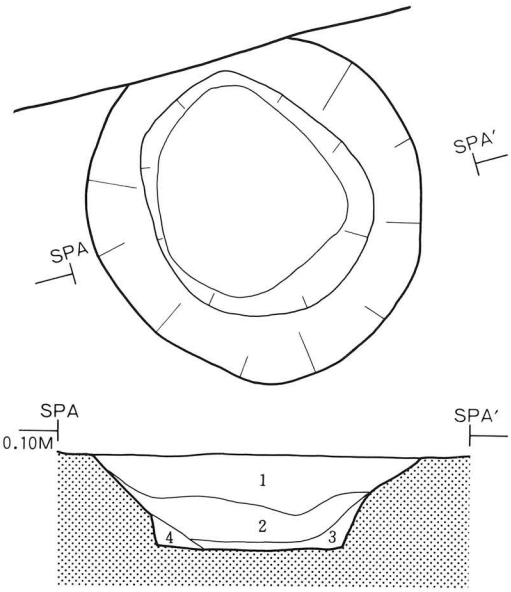
土層註記

1　7.5YR⅔灰褐色粘土質シルト　ごくまれに径2mm～3mmの炭化物を含む。
2　10YR⅔褐灰色シルト質粘土　径1～3mmの灰白色の粘土ブロックを全体にまばらに含む。
3　10YR⅔黒褐色粘土質シルト　2～5cmほどのレキをまれに含む。
4　10YR⅔褐灰色シルト質粘土　この層からグライ化はじまる。

土層註記

1　10YR⅔にぶい黄褐色粘土質シルト
2　10YR⅔灰黄褐色シルト質粘土
3　10YR⅔灰黄褐色シルト質粘土

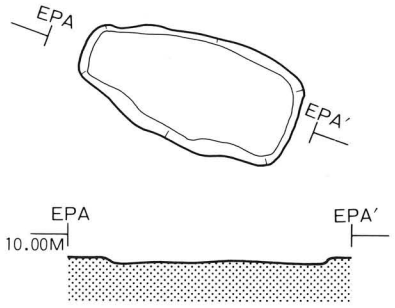
第199図　Ⅳ層3b層土壙平面図・セクション図（2）



土層註記

1　2.5Y5/6黄灰色シルト質粘土　マンガン粒全体均一に含む
2　2.5Y5/6暗灰黄色粘土　マンガン粒酸化鉄を含む
3　2.5Y5/4黄灰色シルト質粘土　酸化鉄を含む
4　2.5Y5/4黄灰色シルト質粘土　3層土に灰白色粘土ブロックを含む。

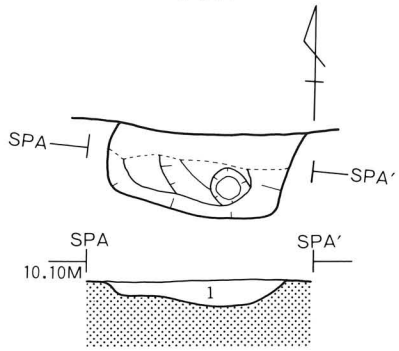
S K10



土層註記

7.5YR5/4暗褐色シルト質粘土　基本層4層のブロック3㎜～1㎝を全体的に含んでいる。

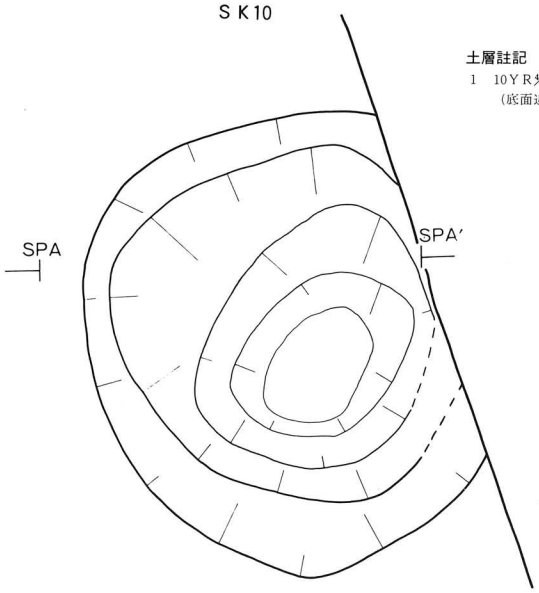
S K12



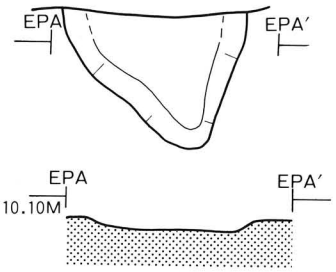
S K13

土層註記

1　10YR5/6にぶい黄褐色シルト質粘土　灰黄褐色粘土をブロック状に含む。（底面近く）酸化鉄を多くふくむ。



S K11

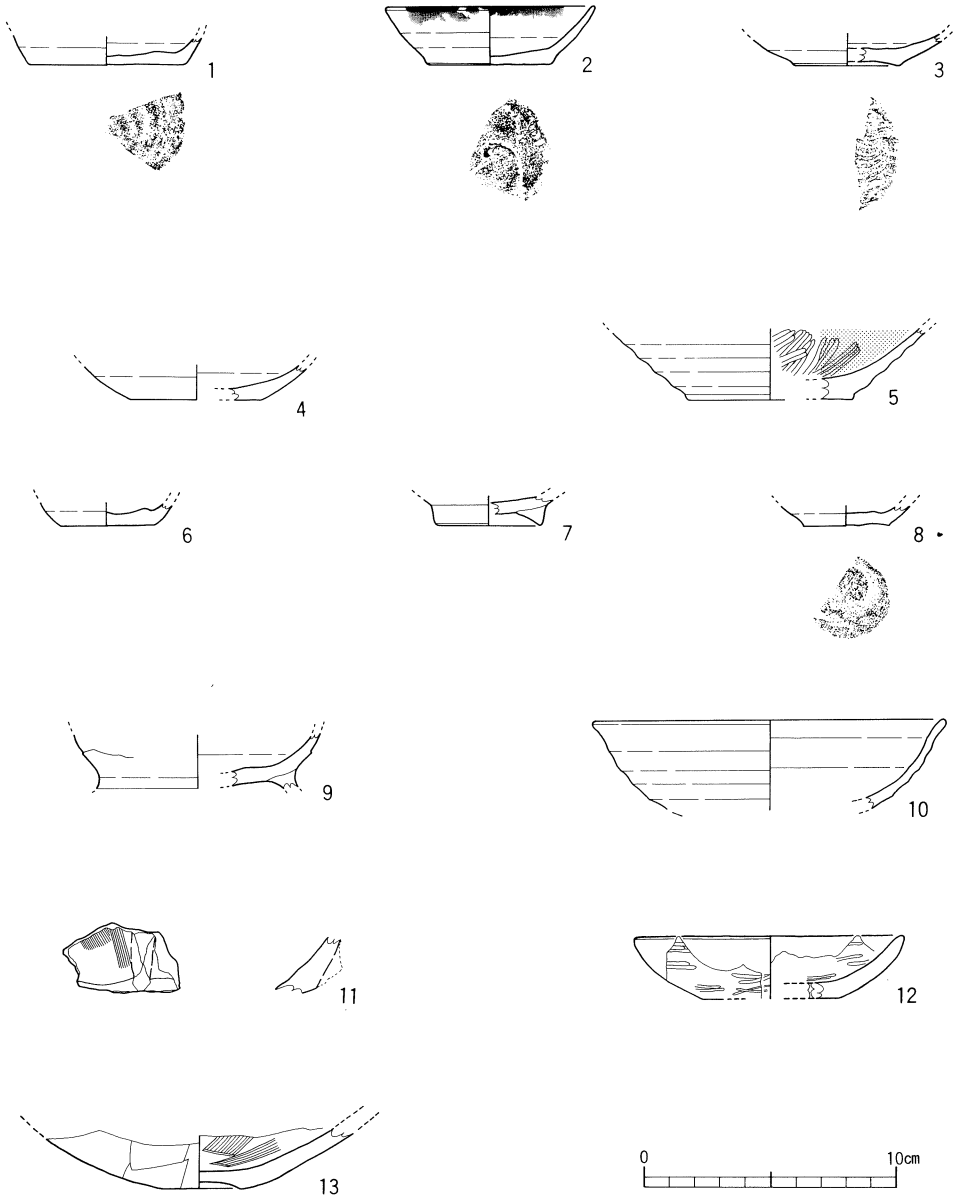


S K14

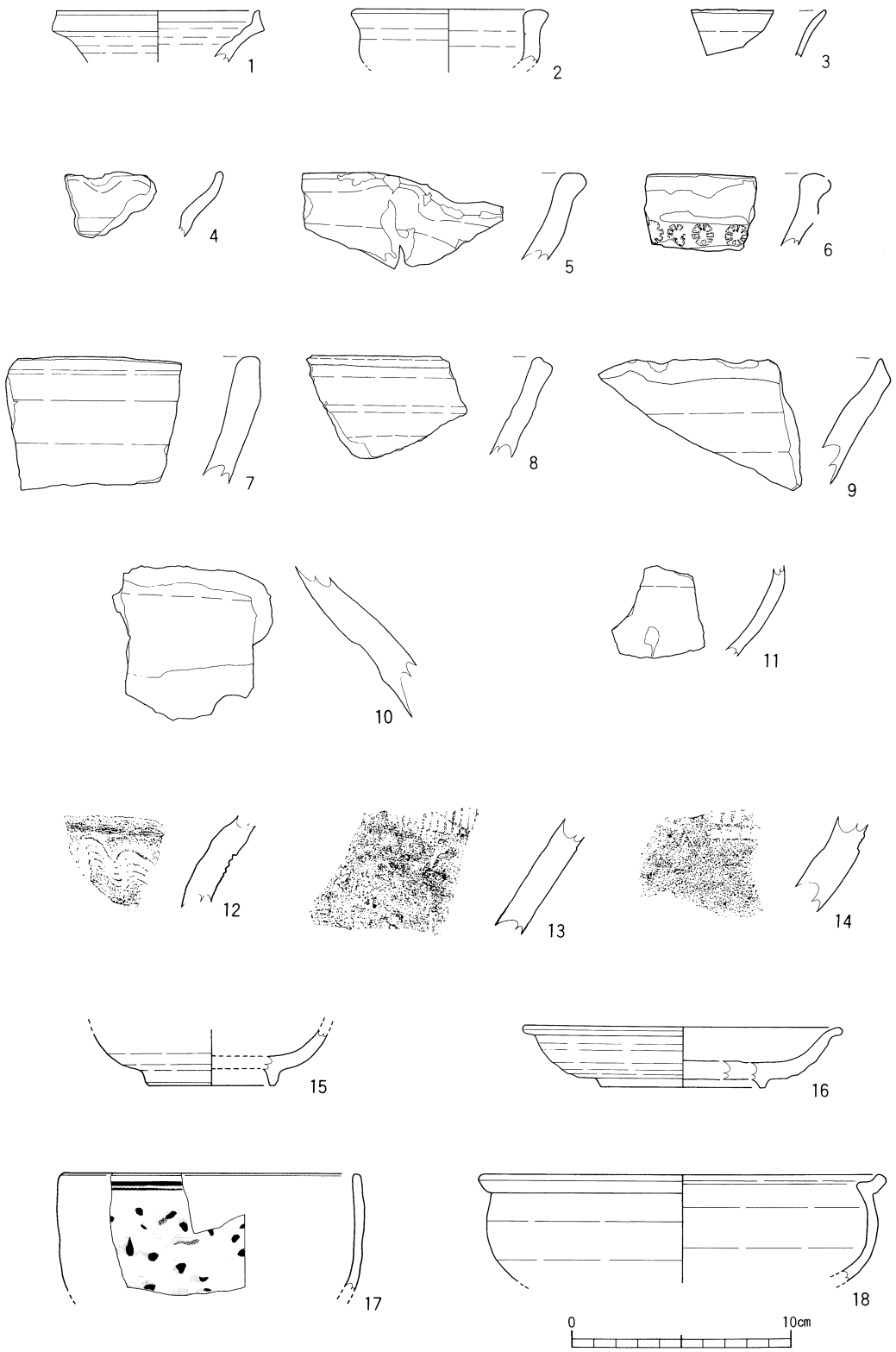
土層註記

1　10YR5/3黒褐色シルト　全体に灰白色シルトの1㎝前後のブロックを含み，酸化鉄・マンガンを含む。
2　10YR5/6黄褐色シルト　全体に5㎝前後の褐灰色粘土のブロックを含み，酸化鉄・マンガンを含む。
3　10YR5/3黒褐色粘土質シルト　全体に酸化鉄と少量のマンガンを含み，1㎝弱の灰白色粘土のブロックを含む。
4　10YR5/3黒褐色シルト　全体に酸化鉄と少量のマンガンを含む。
5　10YR5/4褐灰色粘土質シルト　全体に酸化鉄とマンガンを含む。
6　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　全体に少量の酸化鉄とマンガンを含む。
7　10YR5/3黒褐色シルト　全体に1㎝弱の浅黄色粘土のブロックを含む。
8　2.5YR5/4浅黄色粘土　全体に酸化鉄・マンガンを含む。
9　10YR5/4褐灰色粘土　全体に酸化鉄・マンガンを含み，1㎝前後の灰白色粘土のブロックを含む。
10　10YR7/1灰白色粘土　全体に酸化鉄・マンガンを含み，ごく少量の炭化物をふくむ。

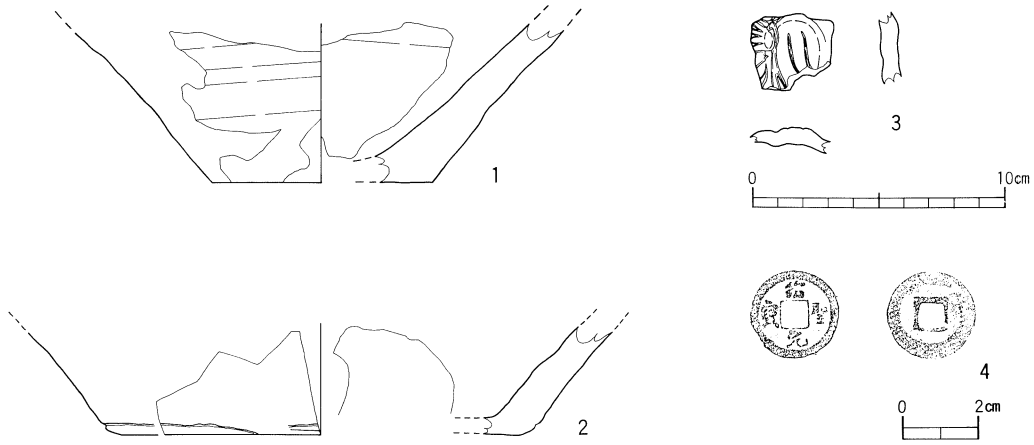
第200図　Ⅳ区3b・3a層土壙平面図・セクション図(3)



第201図　Ⅳ区１～３層出土遺物実測図（１）



第202図　Ⅳ区１～３層出土遺物実測図（２）



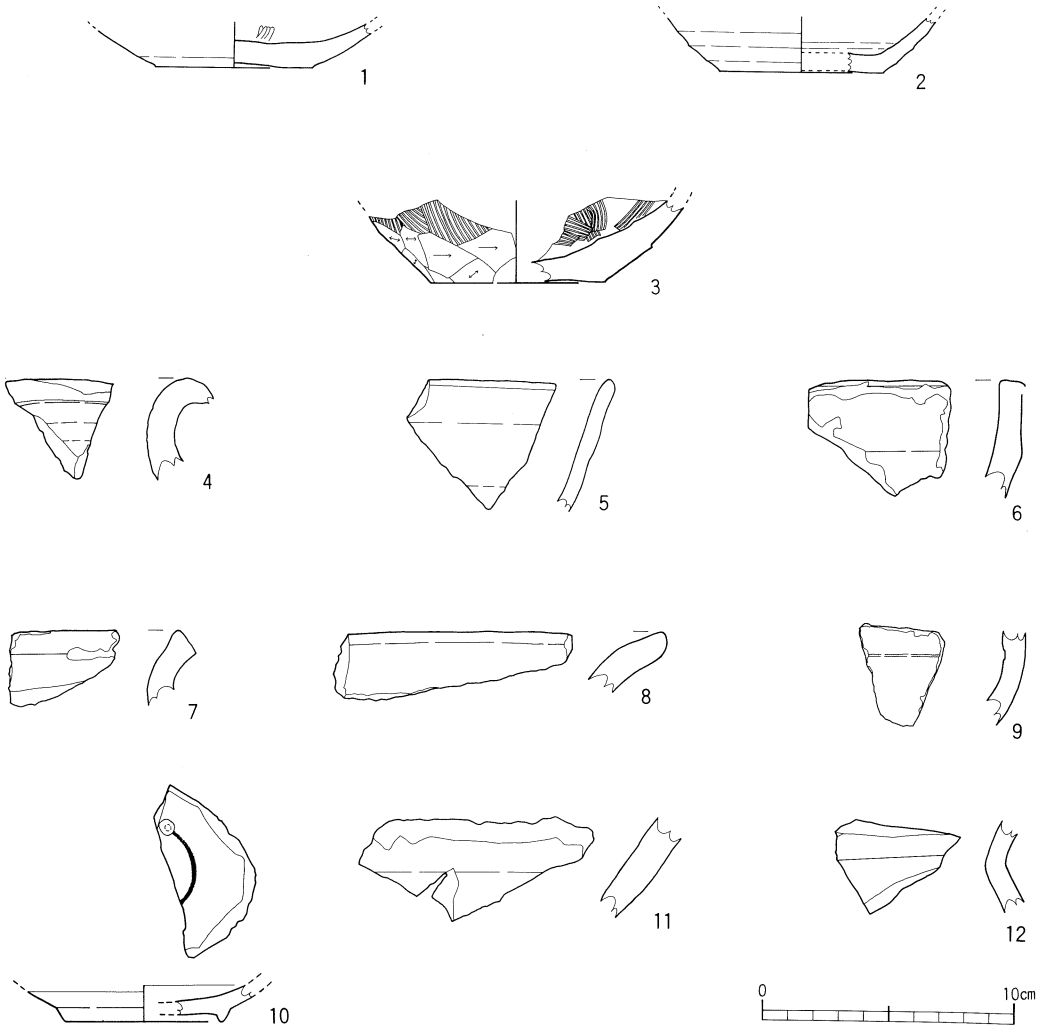
第203図　Ⅳ区１～３層出土遺物実測図（３）

ⅰ）**畦畔**：畦畔は周囲の土を盛って作られている土盛り畦畔である。畦畔の方向性は真北方向を基準としている傾向が看取される。畦畔の規模は上端幅30～60cm、下端幅60～120cmのものが多く、上端幅は最大で90cm、最小で15cm、下端幅は最大で140cm、最小で50cmであり、各畦畔に明瞭な規模の差は認められない。断面形は極めて扁平な台形状をなす。水田面との比高差は1.0～3.0cmのところが大半である。

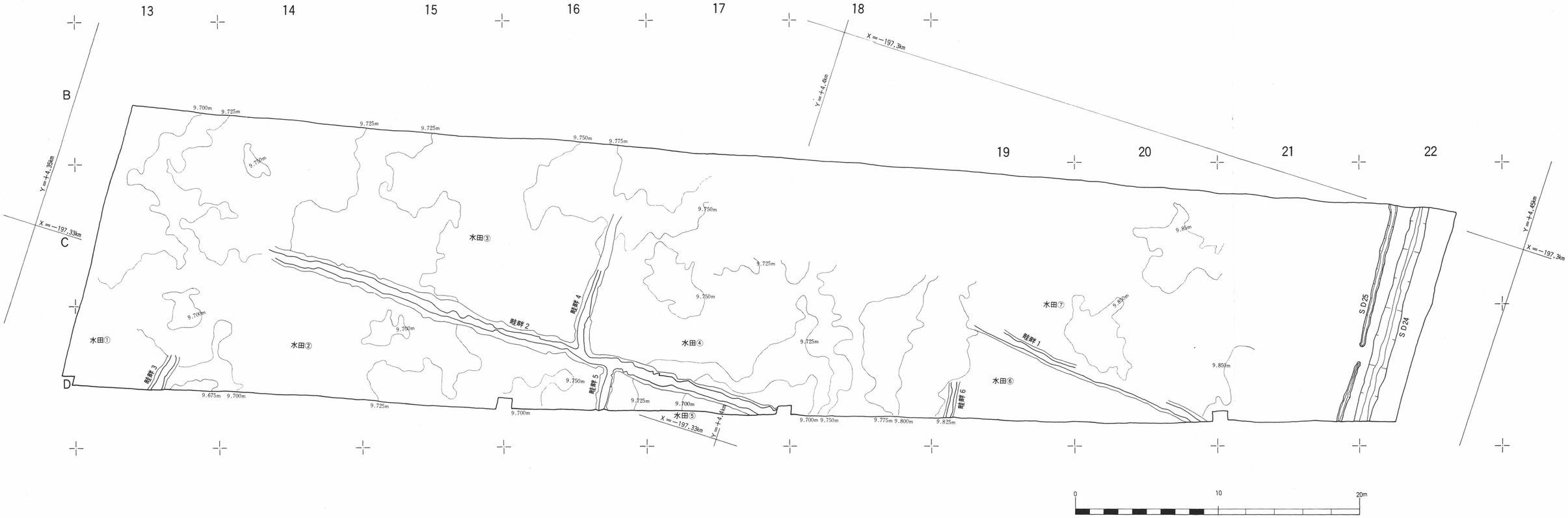
ⅱ）**区画**：水田は７枚検出している。水田の平面形は方形を基調としている。各水田において四辺の畦畔が全て検出されたものがないことや畦畔の残存状況が良好でないため、水田１枚の面積を確認することはできないが、300m²以上の水田区画を有することが想定される。

ⅲ）**水路と溝跡**：ＳＤ24（水路）はＶ区東端部Ｃ・Ｄ－21・22グリッドに位置する。方向性はＮ－2°－Ｗでほぼ真北方向を示す。直線的に伸びており、15.76mにわたって検出された。埋土は５層であり、自然堆積により埋まったものと考えられる。水路の規模は上端幅100～136cm、下端幅18～38cm、深さ47.3～63.9cmであり、全体として規模の変化は少ない。断面形はやや縦長の逆台形を呈し、壁面の立ち上がりは直線状をなす。底面はほぼ平坦であり、底面のレベルは北端部で標高9.30m、中央部で9.16m、南端部で9.38mと中央部が深くなっている。このＳＤ24（水路）と平行して西側約88cmのところにはＳＤ25が検出されている。ＳＤ25は中央やや南寄りのところが途切れているため、北側をＳＤ25a、南側をＳＤ25bとした。ＳＤ25はＳＤ24（水路）と同様の方向を示し、直線的に伸びている。ＳＤ25aは10.2m、ＳＤ25bは4.5mの検出長を測る。堆積土は基本層位2b層であり自然堆積により埋まったものと考えられる。溝の規模は上端幅20～53cm、下端幅６～34cm、深さ0.6～9.8cmである。ＳＤ25bの方がやや溝幅が小さい。また底面には凹凸の見られるところがある。断面形は縦長の舟底状を呈し、壁面の立ち上がりは弧状をなす。底面のレベルはＳＤ25aでは北端部で標高9.68m、南端部で9.71m、

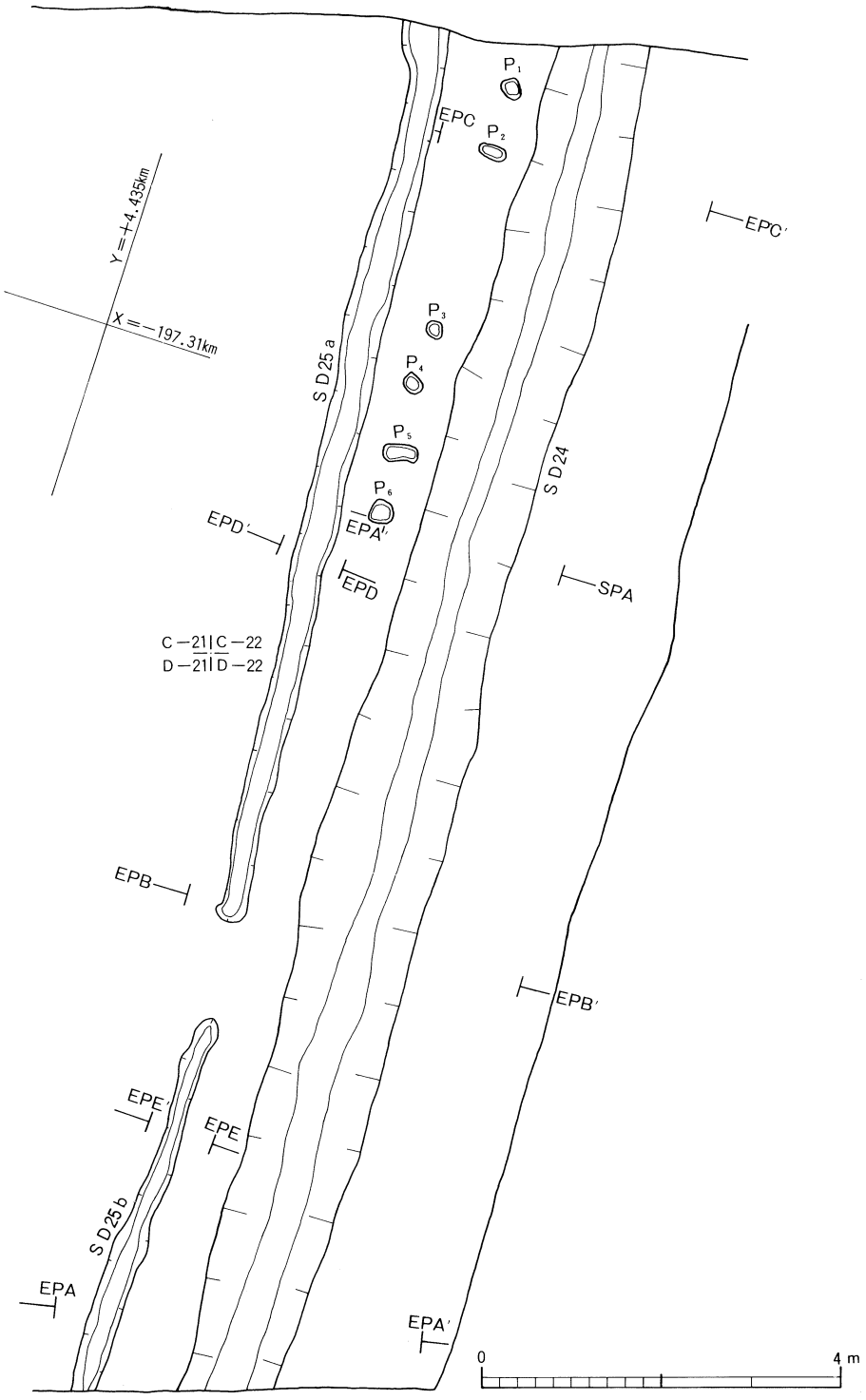
ＳＤ25bでは北端部で標高9.69m、南端部で9.73mである。またＳＤ24（水路）とＳＤ25aの間の３ｂ層上面からはその北半部においてピットが６基検出されている。（Ｐ１～６）６基とピットの規模は上端の径20～40cm、下端の径11～32cm、深さ3.2～8.1cmとほぼ同規模である。Ｐ２とＰ３の間隔が1.9m離れているがほぼ直線に列をなしている。遺物は埋土３層から須恵器系陶器の口縁部付近の破片が１点（第204図４）出土している。



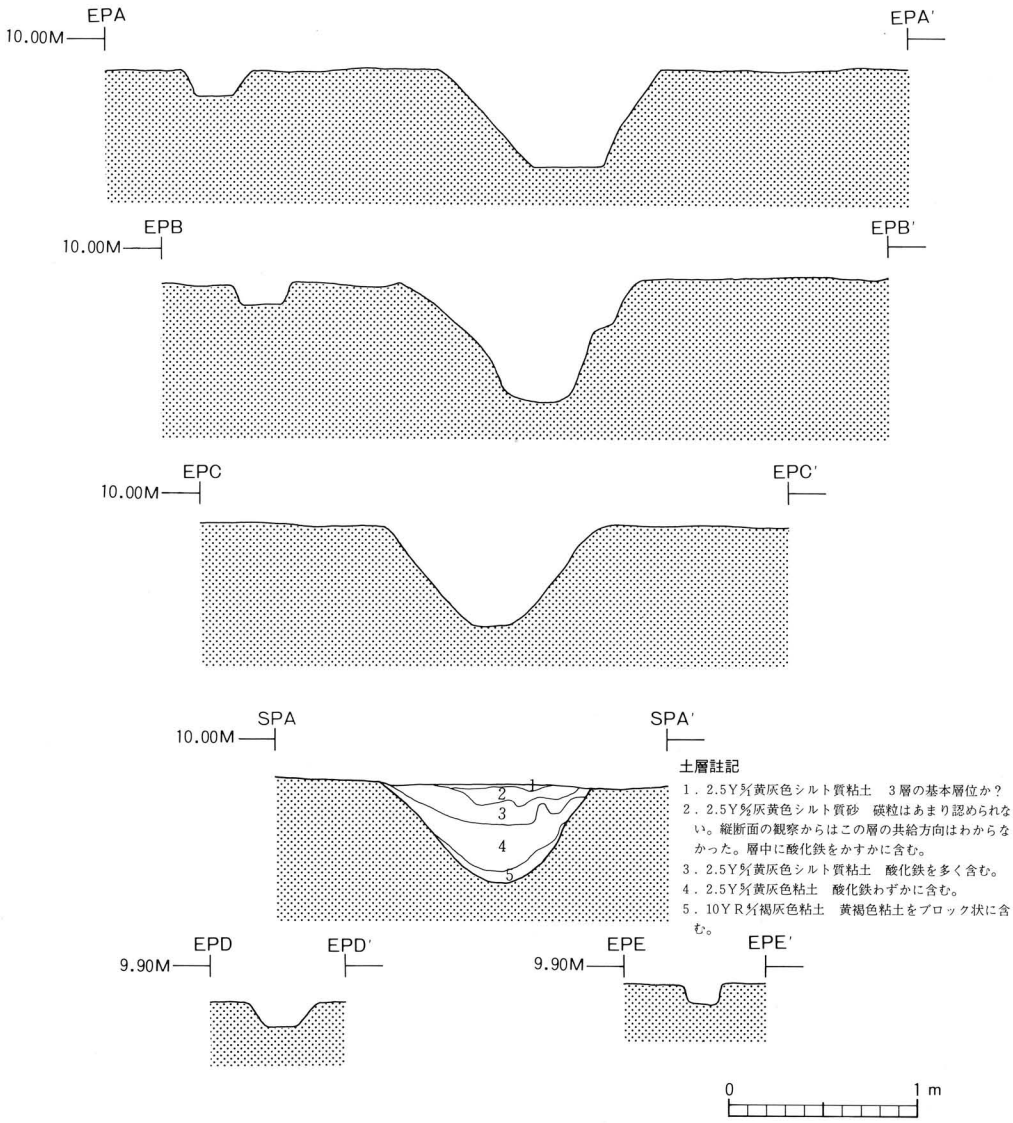
第204図　Ⅴ区３ｂ層上面ＳＤ25及び基本層１～３層出土遺物実測図



第205図　Ⅴ区３ｂ層水田跡平面図



第206図　Ⅴ区３ｂ層上面ＳＤ24・ＳＤ25平面図



第207図　Ⅴ区３ｂ層上面ＳＤ24・ＳＤ25エレベーション図・セクション図

18. 3 a層の調査

(1)調査の概要

①3a層の分布・土性：3a層はIV区北半部を中心に分布する。層厚はB－29グリッド8～15cmである。層相は⑩YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルトである。

②3a層上面の標高と地形：3a層上面の標高は、IV区B－29グリッドで10.20mである。

③検出遺構と出土遺物：3a層上面において溝跡5条（SD12・13・17・26・27）、土壙2基（SK2・10）が検出されている。出土遺物は3b層および3a層中から土師器破片68点、須恵器破片19点、赤焼土器破片20点、陶器破片19点が出土している。

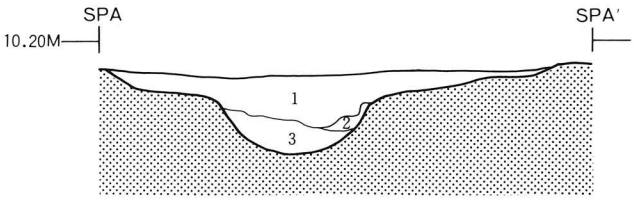
(2)IV区の調査（第210図）

①SD27：SD27はB－30・31グリッド、IV区の北東隅に位置する。3層上面で検出されている。SD26と重複関係があるが新旧は不明でむしろSD26に合流する可能性がある。検出長は11.5mで、西端は調査区外へ伸びる。方向性は直線的でN－78°－Wの方向を示す。断面形は中央部がU字形を呈し、上端へ向かい、ごく緩く立ち上がる。上端幅は3.7～1.3m、下端幅は0.5～0.1m、深さは3.3～4cmである。底面の標高は9.6～9.76mでSD26に向かい傾斜している。埋土は3層認められる。

②SD26：SD26は、B・C・D－30グリッドIV区の東壁沿いに位置する。3層上面で検出されている。SD26・12と重複し、SD12より新しいが、SD26との新旧は不明である。検出長は26mで、南端、北端は調査外へ伸びる。方向性は直線的でN－7°－Eの方向を示す。断面形は扁平な逆台形を呈する。西側の上端ラインは検出されたが東側の上端ラインは検出されていないため上端は5m以上である。南端から5m北へ行った部分で底面に段差があり、北側1m低くなる。高い部分の下端幅は95～150cmで北へ傾斜し、低い部分は下端幅35～90cmでやはり北へ傾斜する。埋土は17層認められる。県内産と思われる中世陶器の破片1点、蓋と考えられる木製品1点（第212図2）、石臼の破片1点（第211図）が出土している。

③SD12：SD12は、B－25、B・C－26、C－27、C・D－28、D－29グリッドを横断している3層上面で検出されている。SD26、SK10と重複し、両者よりも古い。検出長は50.6mで、両端は調査区外へ伸びる。方向性は直線的でN－88°－Wである。断面形は中央部がU字形を呈し、上端部分へ向かって緩く立ち上がる。上端幅は200～300cm、下端幅は20～60cm、深さは25～42cmである。底面は平坦で、その標高は9.5～9.7m、C－26グリッド部分がやや低くなっている。埋土は2層である。埋土中から常滑焼の甕の破片が出土している。

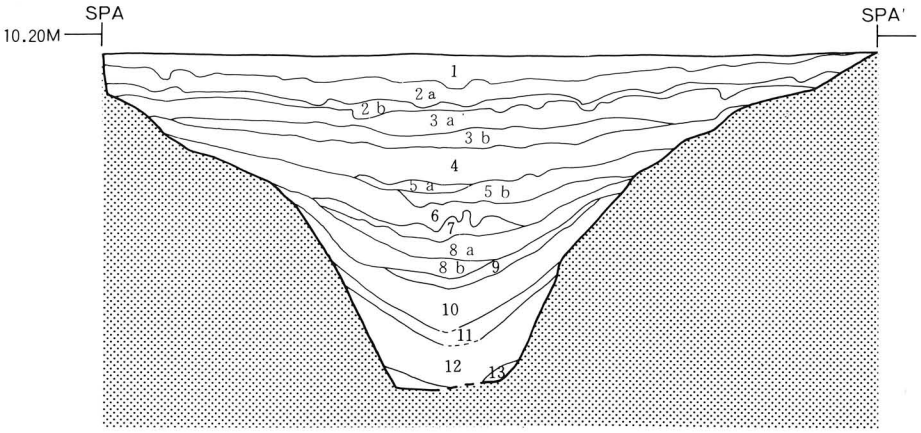
④SD13：SD13は、C－24・25・26・27、D－28グリッドを横断している。3層上面で検出されるSD17を重複するが新旧は不明である。SD12に平行してはしる。検出長は49mで、西端と東端は調査区外へ伸びる。方向性は直線的でN－91°－Wの方向を示す。断面形は中央部が



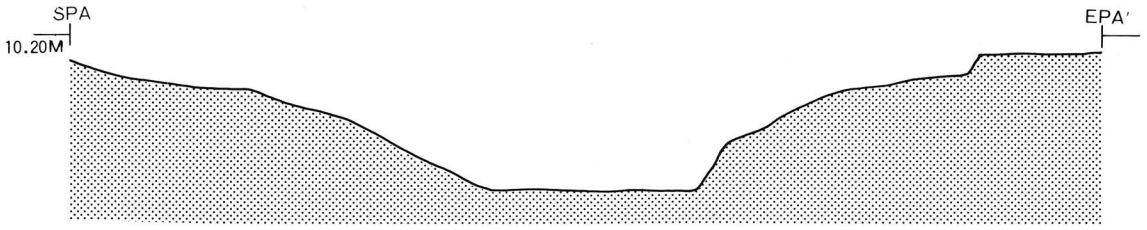
土層註記

1　7.5YR3/4褐灰色シルト質粘土
2　7.5YR3/4褐灰色シルト質粘土　黄色状のまじりがわずかながら見られる。
3　10YR3/4黒褐色シルト質粘土

SD27

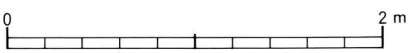


SD26

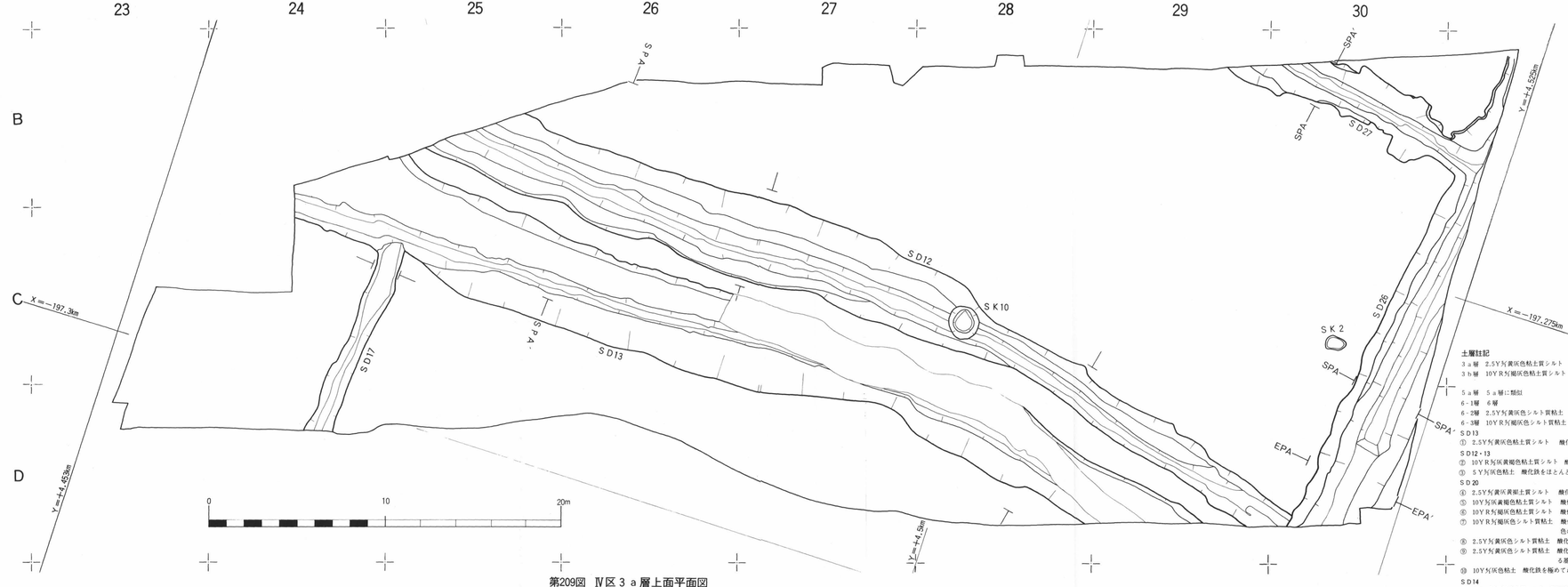


土層註記

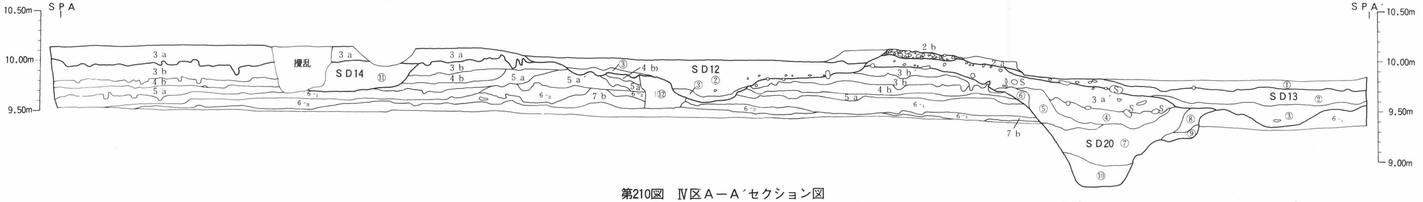
1　10YR3/4灰黄褐色シルト質粘土　淡黄色の砂がところどころブロック状に入る。
2a　10YR3/4褐灰色シルト質粘土　礫を極まれに含む，粗砂をところどころ含んでいる。
2b　10YR3/4褐灰色シルト質粘土　粗砂なし
3a　7.5YR3/4褐灰色シルト質粘土　タテに酸化鉄
3b　7.5YR3/4褐灰色シルト質粘土　タテに酸化鉄
4　7.5YR3/4褐灰色シルト質粘土　淡黄色のシルト質粘土がところどころに見られる。
5a　2.5Y3/4黄灰色シルト質粘土　淡黄色の粘土のブロックが入るが5b層よりもブロックは細い。
5b　2.5Y3/4黄灰色シルト質粘土　淡黄色の粘土質がブロック状に入る。
6　10YR3/4褐灰色シルト質粘土　淡黄色の粘土質がブロック状に入るが5b層よりもその割合は少ない。
7　10YR3/3黒褐色粘土　極まれに木片を含む。
8a　5Y3/4灰色粘土　小枝を非常に多く含む。
8b　2.5Y3/4黒褐色粘土　この層から9層上かけて削りくずのような木片が見られる。8a層よりも小枝が少ない。
9　5Y3/4オリーブ黒色粘土　植物遺体集積，削りくずのような木片が非常に多い。
10　7.5Y3/4灰色粘土　この層よりグライ化がすすむ。層の堆積にそって、2黒色のすじがはしっている。
11　7.5GY3/4暗緑灰色粘土
12　5G3/4緑灰色粘土　うすい青黒色のまじりあり。
13　10GY3/4暗緑灰色粘土



第208図　Ⅳ区3a層SD26・SD27セクション図・エレベーション図



第209図　Ⅳ区３ａ層上面平面図



第210図　Ⅳ区Ａ－Ａ′セクション図

土層註記

3ａ層　2.5Y与黄灰色粘土質シルト　酸化鉄をやや多く含む。径２～10cmの円礫をやや多く含む。この層は基本的には、ⅣＥ区３ａ層であるが、色調と円礫を含む点で異なる。一部ＳＤ20の堆積土となっている。

3ｂ層　10YR与褐灰色粘土質シルト　10YR与黒褐色粘土質シルトをブロック状に多く含む。酸化鉄をやや多く含む。この層は、この部分においてのみ見られる層である。基本的には、ⅣＥ区３ｂ層であった層が何らかの作用によって変化した層と考えられる。これには、この層の上面がＳＤ11とＳＤ12の間にはさまれた同一面の畦畔状のもりあがりの上面に相当することが関係しているのであろうか。

5ａ層　５ａ層に類似

6－1層　６層

6－2層　2.5Y与黄灰色シルト質粘土　酸化鉄をやや多く含む。この層は部分的な分布を示す。

6－3層　10YR与褐灰色シルト質粘土　酸化鉄をやや含む。この層は、ⅣＡ区土層註記では、６ａ層最下部に部分的に見られる粘土層に対応する。Ⅴ区７ａ層に対応するか？

ＳＤ13

①　2.5Y与黄灰色粘土質シルト　酸化鉄を多く含む。砂粒をわずかに含む。ＳＤ12の２層上面においても、ＳＤ11の１層同様足跡が検出されている。

ＳＤ12・13

⑦　10YR与灰黄褐色粘土質シルト　酸化鉄を含む。砂粒を少量含む。円礫（径２～３cm）をわずかに含む。この層の上面には砂により埋まっていた足跡が検出されている。ＳＤ12の２層と同一層。

⑬　５Y与灰色粘土　酸化鉄をほとんど含まない。ＳＤ12の３層と同一層。

ＳＤ20

④　2.5Y与黄灰黄褐土質シルト　酸化鉄を含む。砂粒をわずかに含む。円礫をわずかに含むが、これは３ａ′層中に本来は含まれていたものか？

⑤　10Y与灰黄褐色粘土質シルト　酸化鉄を含む。砂粒をブロック状にわずかに含む。

⑥　10YR与褐灰色粘土質シルト　酸化鉄を含む。10Y与灰褐色粘土質シルトをブロック状に含む。

⑦　10YR与褐灰色シルト質粘土　酸化鉄を帯しま状に含む。またこの層中には細砂が北から流入してきた状況を看取できる。この層自体の堆積はそれほど長い時間がかかったとは思われないが、レンズ状に堆積する砂、鴻色の粘土の互層が上半部で認められ、この層の形成がそれほど単純ではないことを示している。青磁片がこの層中より出土している。

⑧　2.5Y与黄灰色シルト質粘土　酸化鉄を多量に含む。砂粒をわずかに含む。

⑨　2.5Y与黄灰色シルト質粘土　酸化鉄を含む。10Y R与褐灰白粘土、2.5Y与灰黄色粘土をブロック状に多く含む。この層はＳＤ20南壁平端の上の堆積土としてのみ認められ、他の堆積土層とは異なりブロック状に混入する基本層４ａ・４ｂ層ではないかと考えられ、自然堆積層の可能性を有す。

⑩　10Y与灰色粘土　酸化鉄を極めてわずかに含む。黒色・黒褐色・褐灰色の粘土をブロック状に含むが、下半部において多い。底面及び壁面の基本層を巻きこんだものと考えられ、その原因は未成によるものか？

ＳＤ14

⑪　7.5Y与灰色粘土質シルト　酸化鉄を多く含む。下半部底面付近では基本層がいくらかブロック状に見られる。

その他の層

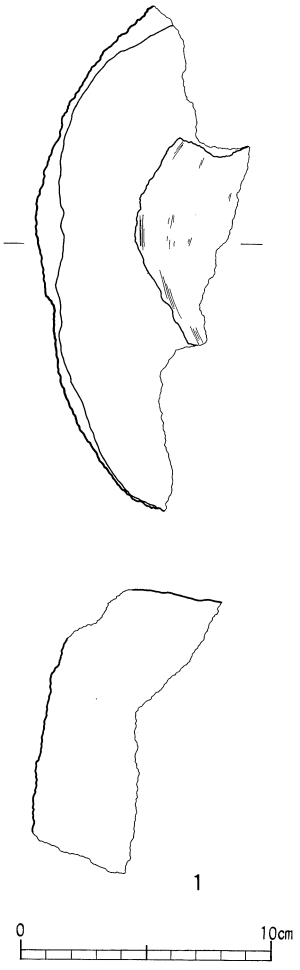
⑫　５Y与灰色粘土質シルト　酸化鉄を多く含む。2.5Y与灰黄色粘土質シルトをブロック状に多く含む。

U字形で上端部へ向かって緩く立ち上がる。上端幅は300～500cmで下端幅は20～60cmで、深さは18～40cmである。底面はほぼ平坦で標高は9.3～9.4m、傾斜はみられない。埋土は2層である。

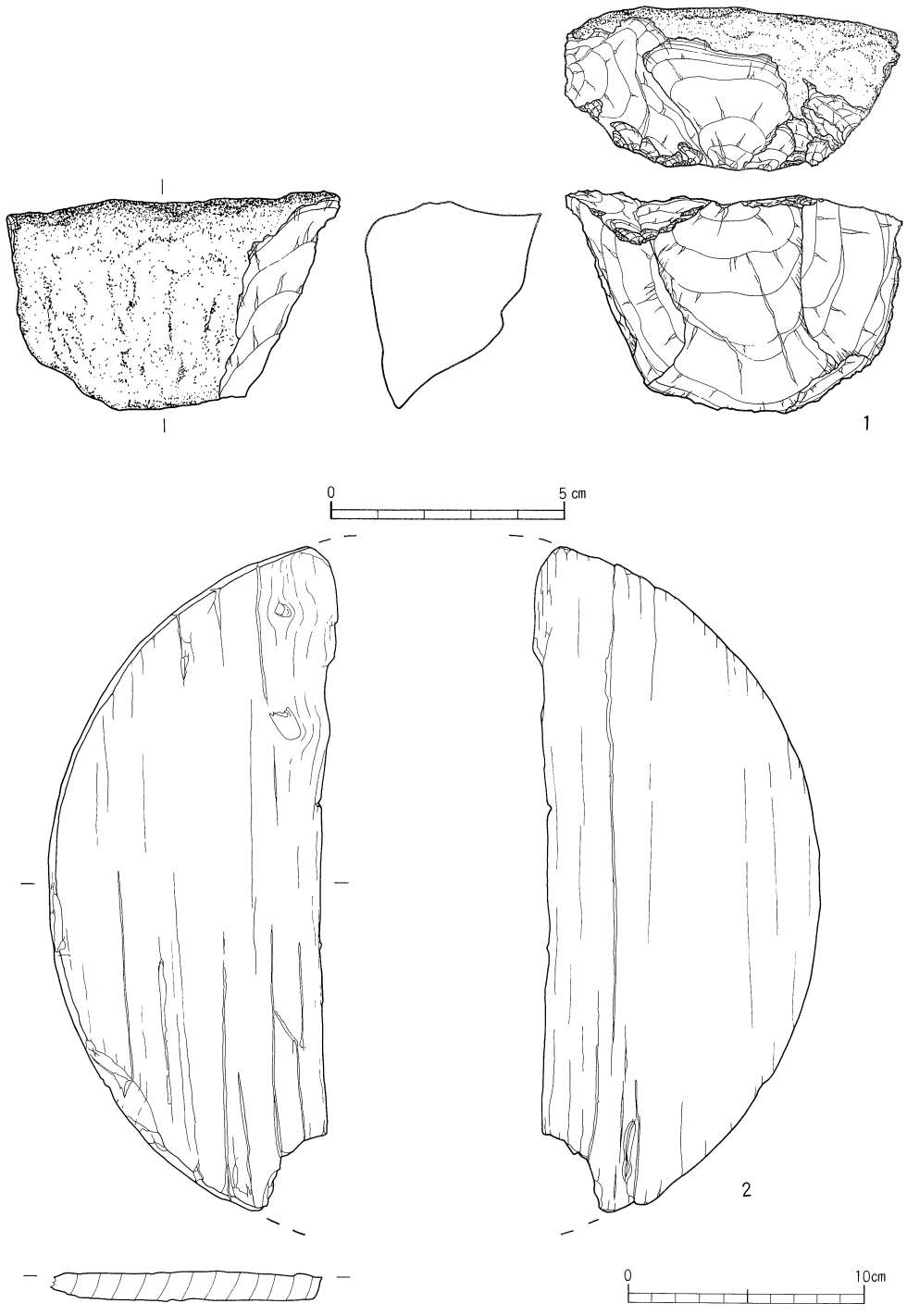
⑤ＳＤ17：ＳＤ17はＣ・Ｄ－24、Ｃ－25グリッドに位置する。ＳＤ12と重複するが新旧は不明である。検出長は11mで南端は調査区外へ伸びるが、ＳＤ13より北へは伸びない。方向性は直線的で、Ｎ－5°－Ｅの方向を示す。上端幅は130～160cm、下端幅は65～120cm、深さは15cmである。断面形は浅く緩く立ち上がる。底面の標高は9.3mである。埋土は3層である。

⑥ＳＫ10：ＳＫ10はＣ－28グリッドの中央よりやや西側に位置する2層で検出される。平面形は円形で径は約180cmである。断面形は逆台形で深さは50cmである。底面は平坦である。埋土は4層認められる。

⑦ＳＫ２：Ｃ－30グリッドの南西部に位置する。平面形は不整楕円形で、長軸130cm、短軸69cm、深さ11cmである。断面形は皿状を呈し、底面は平坦であるがピットを2基検出している。埋土は2層で、第1層は炭化物と焼土が多く含まれている。



第211図　Ⅳ区３ａ層ＳＤ26出土遺物実測図（１）



第212図　Ⅳ区３ａ層ＳＤ26出土遺物実測図（２）

19. 2 b層の調査

⑴**調査概要**（第214図）

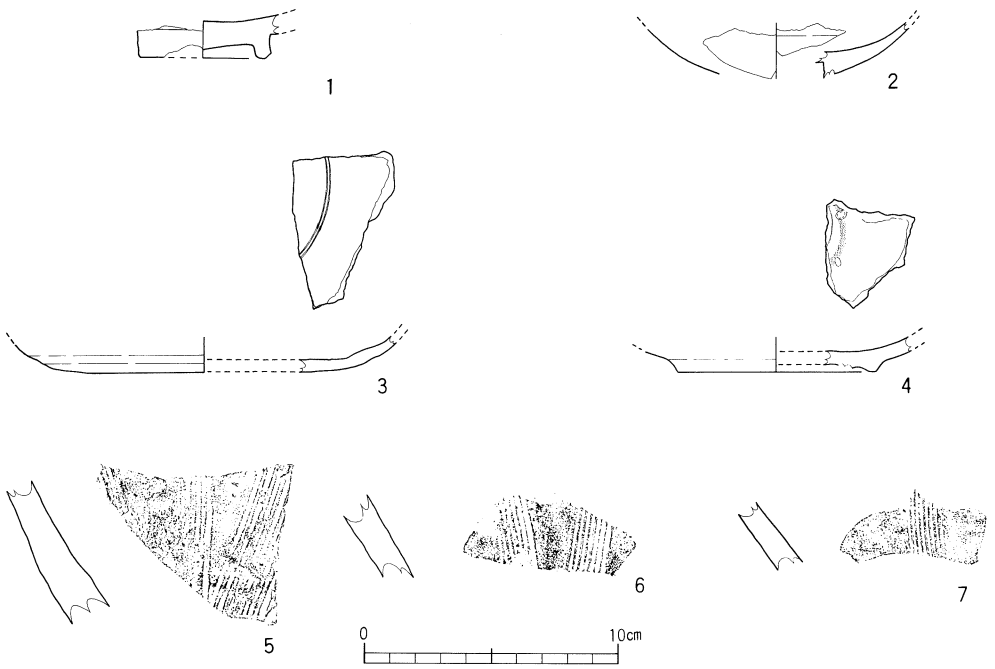
①2 b層の分布・土性：2 b層はIV区・V区に分布する。層厚は4～10cmである。層相は2.5Y5/1黄灰色粘土である。

②2 b層上面の標高と地形：2 b上面の標高は、IV区D－29グリッドで10.1～10.15m、V区D－19グリッドで9.85～9.90mで東方に高く西方に低い。

③検出遺構：IV区において2 b層上面で畦畔の遺構が検出されている。

⑵**IV区の調査**

①畦畔状の遺構：石積みの畦畔状遺構である。B・C－25、C－26・27グリッドを横断して、長さ22mにわたり検出された。さらに24m東のD－29グリッドの中央付近で長さ2 mにわたりその延長を検出している。この遺構の上端幅は30～100cm、下端幅は80～150cmを測る。周辺との比高差は北側で2～12cm、南側で15～20cmである。石は径2～3 cmの礫から拳大の礫が積まれている。



第213図　IV区2 b層出土遺物実測図・拓影